
線を越えて—魔法使いvs科学の力—

21番目の観測者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

線を越えて―魔法使いVS科学の力―

【Nコード】

N2349R

【作者名】

21番目の観測者

【あらすじ】

無限に広がる世界。

その世界を越える存在―彼らは科学により武装し、行く先々の世界を削除し続けた。

そこに意思はなかった。

そして彼らは新たな世界へ旅立った。

その世界には、”魔法使い”が存在していた。

其処で、科学と魔法が対峙した。

其れは、意味を失った彼らが再び意味を見出だそうとする――物語――。

第1話「邂逅」

—量子状態からコヒーレント状態に移行、存在確定完了。指定座標との誤差3.27%。言語系に接続完了、最適化実行—

>i26103—3399<

合成音声が夜の森に響き、3つの人影が出現した。

「さてと、今度の世界線は楽しめっかな？」

「楽しむのは結構だが目的を忘れないでくれよ」

体格の良い青年が陽気な声を出し、背の高い男が呆れたように言った。

「わかってるさ。ただ、奴はそう簡単には見つからないだろうよ」

青年はそう言って男に笑い掛けた。

「そうだな…」

男は静かに肯定し遠い目をした。そしてしばらくの静寂が訪れた。夜の森は全てを包むように闇を纏っていた。「にしてもここは何処だ？指定座標から微妙にずれたみたいだな…どっかの森か？」

静寂を破るように青年は口を開いた。

「おかしいな…指定した近くに森はなかったはずなんだがな…」

男は疑問を浮かべた顔をした。

「おいおい勘弁してくれよ…転移失敗とかじゃないだろうな？イオ、どうなってるか分かるか？」

その声が向けられた先に今まで沈黙していたもう1人の人物がいた。

「転移は失敗していないが、周辺の空間に特殊な場が存在している。その場の影響で座標がずれた可能性がある」

イオと呼ばれた少年は機械的な返答をした。それを聞き、男は疲れたように言った。

「いきなり問題か…この世界線は荒れそうだな」

対照的に青年は嬉しさを抑えきれないといった様子だった。

「いいじゃねえか。その方がやりがいがある」

それを見た男は呆れ口調だった。

「お前は戦闘がしたいだけだろ…」

その時、会話の途中で突然合成音声が警告した。

”警告、9時の方向から熱源接近。個数2、武装を確認。90秒後に接触”

それを聞いた青年は待ちきれないように言った。

「先に行くぜ！」

次の瞬間、青年は警告された方向に走り出した。その速さは人の域を越えていた。

「おい！まてガニメデ！」

夜の森を疾走する青年には、男の制止も聞こえてはいないようだった。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは今日も憂鬱であった。バカ騒ぎする生徒たちや変わらない退屈な生活に嫌気が積もっていた。

今は自分の家であるログハウスの中で従者である茶々丸の淹れた紅茶に口をつけているところだった。

「しかし、こんな生活とも後少しでおさらばだ」

紅茶を飲み、口元を歪めた。茶々丸はそんな主人をどこか不安な様子で見ていた。

機械である彼女にそのような感情が存在するかはわからないが、主人を見つめるその目は何かを秘めているようであった。

「ネギ・スプリングフィールド…やつの息子か」

そんな視線に気づかずにエヴァは呟いた。茶々丸は主人のカップが空になっているのに気づいた。

「マスター、もう一杯お飲みになりますか？」

エヴァは視線を茶々丸に向けた。

「ああ…頼む」

そう頼まれた茶々丸はどこか嬉しそうに紅茶を注いだ。

そしてもう一杯を飲もうとした瞬間、エヴァはその動作を止めた。そんな主人を見て、茶々丸は不思議そうに尋ねた。

「マスター、どうかなされましたか？」

「結界の中に侵入者だ…しかも近いな」

そう言うとエヴァは立ち上がった。

「こんな近くに来るまで気付かないとは…まあいい。行くぞ茶々丸！」

茶々丸も急いで立ち上がった。

「了解しましたマスター」

そしてすぐに準備を済ませた2人は侵入者の方向へ向かっていた。エヴァは黒いマントに全身を包み、茶々丸もライフルで武装していた。茶々丸は背中のバーニアを噴かせてエヴァを抱えながら木々の

少し上を低空飛行していた。

しばらく飛行した時だった。突然、茶々丸が焦ったように言った。

「マスター、熱源が近づいてきます!」

それを聞いたエヴァは嘲笑うような笑みを浮かべた。

「この闇の福音に自ら近づいてくるか…いい度胸だ。少し遊んでやろう」

次の瞬間、地上から白いコートのような服を着た男が突っ込んできた。

「おらああああ!!」

「っ!!」

茶々丸は急速後退し、ライフルで迎撃した。

「はっ!銃なんざ効かねえよ!」

が、男はあろうことかその全てを拳で弾いて防ぎきった。

「おら!お返しだあ!!」

そして勢いをそのままに茶々丸に突っ込み、殴りかかろうとした。

「くっ!氷結・武装解除!」

しかし、エヴァが触媒の入った試験管を放ち、武装解除の魔法を男

に放った。

男は舌打ちをして体勢を変えてなんとか回避した。

「チッ！ZPE行使か！！」

しかし茶々丸はその隙を見逃さず、空いた方の手のロケットパンチを放った。

男は一瞬驚いたが、すぐに殴りかかろうとしていた腕を体の前で交差させて防御の姿勢をとった。

ードンッー

鈍い音がして、男はそのまま空中から地面へと吹き飛ばされていった。地面に衝突した瞬間、重低音が響き土煙が舞った。茶々丸はワイヤーで放った腕を引き戻した。

「照準確認、連続射撃開始」

そして止めとばかりにその衝撃の中心地にライフルを連射した。

ーバラララララッー

ひとしきり弾を放った後、茶々丸は射撃を止め、油断なく地面に着地してエヴァを降ろした。

「マスター、不覚をとり申し訳ありません」

「なに、気にするな…それよりまだ終わってないみたいだぞ」

エヴァは男が突っ込んだ場所に鋭い視線を送っていた。その視線の

先には無傷の男が拳を構えて立っていた。

>i33140—4205<

よく見ればその男はまだ若く青年と言っているいい年齢であった。黒髪で、長い後ろ髪を紐で一本に結わいており、その黒い瞳には獰猛さがあった。その体格の良さからも獅子を想起させた。

エヴァはそんな青年に向かって言い放った。

「おい侵入者、お前の目的はなんだ？ 結界の中に現れるとはなかなか面白いことをしてくれるじゃないか」

人形のような少女のエヴァと緑色の長髪の茶々丸を見て青年は露骨に眉をひそめた。

「なんだ？ 久々の戦闘かと思ったら女子供かよ…」

それを聞いたエヴァは目付きをさらに鋭くさせた。

「相手を見た目で判断するとは随分と軽率だな。若造が」

挑発を聞いた青年は再び獰猛な笑みを浮かべた。

「確かにそうかもな」

対するエヴァも相手を見下したように笑った。

「今さら気付いても遅い。私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。闇の福音と恐れられた真祖の吸血鬼、私と対峙してしまった貴様の不運を呪うのだな！」

エヴァは尊大に自己の名前を知らしめたが、対する青年は怪訝な表情をした。

「吸血鬼？…ああそうか、さっきの攻撃といいこの世界線はだいぶファンシーのようだな」

驚くどころか訳のわからないことを呟き始めた青年を見て今度はエヴァが怪訝な表情になった。

「貴様、闇の福音と聞いても随分な態度だな」

それに対して青年は平然としていた。

「闇の福音ってのはお前の忌み名かなんか？悪いが俺は聞いたこともない…それよりもここが何処だかわかるか？」

エヴァは眉をひそめた。

「貴様、惚けるつもりか。結界の中に現れ襲い掛かってきた時点で侵入者であることはわかっているんだ」

それを聞いた青年は怪訝な表情に顔を歪ませた。

「結界だど？悪いが別に侵入したつもりはない」

エヴァは鼻を鳴らして青年を睨んだ。

「ふん…あくまでも惚けるつもりか。だが、そうしたところで無駄だぞ、口を割らないなら力づくで教えてもらおうか！」

そう叫び、試験管を投げて詠唱を始めた。それを合図とばかりに茶々丸もライフルを棄て、青年に突っ込んで行った。それを見た青年は一瞬驚いたが、すぐに獰猛な笑みを浮かべ、拳を構え直した。

「いいねえ、そういうのは好きだぜ！」

次の瞬間、青年と茶々丸の拳がぶつかり合った。ただ、先程と違い青年の拳は緑色の光を発していた。それを見た茶々丸は警戒しながらも拳を繰り出した。

「はっ！遅いぜねえちゃん！」

が、青年は先程よりも全ての動作が爆発的に早くなっていた。茶々丸の拳は全て紙一重で回避され、逆に青年の拳を受けて吹き飛ばされてしまった。

「っ！！」

「おらっ！」

そして青年は茶々丸に追撃しようとした。

「チッ！」

が、それを中止しすぐに後ろへ飛んだ。

―バキンッ―

その瞬間、青年が先程いた場所にエヴァの放った武装解除が直撃し

た。しかし青年はそれには目もくれずにエヴァに向かって跳躍した。が、途中で復帰した茶々丸がロケットパンチを放ってきた。青年はそれを受け止めて苦々しい顔になった。

「つまたこれか！」

茶々丸は発射された腕をワイヤーで引き戻し、さらに追撃しようと急速接近した。

「!？」

しかしその場から青年が突然消え、茶々丸の拳は宙を切った。それを見たエヴァは驚いたように叫んだ。

「瞬動かつ！」

—ドンツ—

次の瞬間、茶々丸はいきなり後ろから吹き飛ばされた。

「茶々丸っ!!」

そして立て続けにエヴァの背後から声がした。

「いや、なかなか楽しめたぜ」

それを聞いたエヴァが背後に振り返った時、今にも殴り掛かろうとしている青年がいた。その表情は勝ち誇っていた。エヴァは氷楯を唱えようとしたが間に合いそうにはなかった。

瞬きする間もなく青年の拳がエヴァに迫った。

―バシンッ―

「…あ？」

が、青年の拳は突然現れた第三者によって止められた。

エヴァの目の前に突然現れた少年は青年の拳を片手で受け止め、感情のこもっていない声を発した。

「ガニメデ、必要以上の戦闘は禁じられている」

ガニメデと呼ばれた青年は拳を解き、わざとらしく肩をすくませた。

「はいはい…悪かったって」

そこにもう一人の男がゆっくりと歩いてきた。

「お前って奴は本当に…」

ガニメデに対して呆れたように言った背の高い男は、エヴァを見て表情を真面目なものに変えた。

「仲間が無礼を働いた。申し訳ない」

そう言われたエヴァはなんとも微妙な表情をしていた。状況の理解が追い付いていなかった。

そこに吹き飛ばされていた茶々丸が歩いて来た。

「あの…この方は一体？」

茶々丸にそう問われたエヴァ自身、その質問をしたいところだった。エヴァたちが怪訝な表情をしていると、背の高い男が口を開いた。

「私達は気付いたらこの場所にいたんだが…ここが何処かわからないかい？」

エヴァは探るように男を見た。

「ここは学園都市の麻帆良だ。貴様らは本当にわかってないのか？」

「すまないが本当にわからない。君は生徒か？出来ればこの責任者と話しがしたいんだが…」

しばらくの間、エヴァは品定めをするように男を睨み付けていた。

「仕方ないな…とりあえずジジイのどこまで案内してやる」

そう言うとエヴァは男から視線をそらし携帯を取り出して電話を掛けた。しばらく話した後、男に向かって言った。

「上のやつに話は通しておいた。とりあえずそいつのどこまで案内してやる」

そう言って有無を言わずエヴァは歩き出した。

「あ、おい君！ちょっと！」

そうして3人はエヴァの後を追った。

目的地に着くまでの間、森の中を歩きながら男はエヴァと茶々丸に言った。

「本当にすまなかった。こいつは気が短いバカなもんでね」

そう言われたガニメデは不貞腐れたようにしていた。

「それはもういいが、いきなり殴りかかってきた理由は何だ？」

エヴァはそんなガニメデを横目で見た。

「武装した者が接近してきけると知って迎撃しようとしたんだが…こいつがやり過ぎたんだ」

ガニメデの代わりに男が答えた。

そんな様子を見ながらエヴァは言った。

「私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル：貴様らは知らないみたいだが闇の福音とも呼ばれている。そして従者の茶々丸だ」

紹介された茶々丸は立ち止まってお辞儀をした。それを見た男も立ち止まった。

「私の名前はカリストだ。無礼を働いた方がガニメデで、ムスツとしてる方がイオだ。よろしく」

そう言われたエヴァは改めて男を見た。

背が高く、流れるような橙色の髪、橙色の瞳で、長い前髪が片方の

目を完全に隠していた。整った顔立ちで穏やかな表情をしていた。この男もガニメデと同じく所々が青い幾何学的な装飾のされた白いコートのような服を着ていた。年はガニメデよりも少し上位に見えた。

次にイオと呼ばれた少年を見た。

この少年も同じく白いコートを着ていた。特にその灰色の髪と深く蒼い瞳が印象的で、端正な顔立ちだが目付きが何処か冷たかった。さらに表情が全く変わらず、全体的に機械のようで茶々丸と似た印象を受けた。年は16、7といった所で、ガニメデとそれほど年が離れているようには見えなかった。

「やれやれ…面倒な奴らが増えたな」

エヴァは小さく呟いた。

第2話「策略」

エヴァはカリストに尋ねた。

「貴様らは何かの組織の人間なのか？」

問われたカリストは微妙な表情をした。

「まあそんなところだ。とある実験の最中にここに飛ばされてしまった」

「とある実験？」

「空間転移に関する実験だ」

そんな会話をしている間に森から抜け、西洋風の街並みが現れた。エヴァと茶々丸を先頭に進み、校舎のような建物の中に入った。その一角に学園長室と書かれた扉があった。その前まで行くとエヴァが立ち止まった。

「ここがこの学園の責任者のいる場所だ」

カリストはそれに頷き、ノックをした。すると中から老年と思われる声がした。

「空いとるぞ」

学園長室と書かれた扉をゆっくりと開け、全員が中に入って行った。部屋の中には机があり、その奥に不思議な頭をした白髪の老人と眼

鏡を掛けた中年の男がいた。

全員が入り終わると、老人は威厳を湛えて言った。

「お主達が先程連絡のあった突然現れたという者達かの？」

老人は眉で隠れた目から、3人に鋭い視線を向けた。

「はい、私達がそうです」

カリストの返答にも、老人は表情を変えなかった。

「わしは近衛近右衛門。この学園の長じゃ。そしてそこにいるのは
タカミチ君じゃ」

紹介された男は真剣な顔で口を開いた。

「高畑・T・タカミチです。よろしく」

カリストはタカミチに軽く会釈をした。

「私の名前はカリスト、右にいる者がガニメデ、左にいる者がイオ
です」

「どもども」

「……」

紹介されたガニメデは重みの全く感じられない口調で応え、イオは
無表情のまま相手を見ているだけであった。

それを特に気にした様子もなく近右衛門は言った。

「して、カリスト君。どのような経緯でこの地に来てしまったか話してくれんかの？」

カリストは少し間を置いてから答えた。

「私達は科学者で、先程まで研究所で空間転移に関する実験をしていました。その実験の最中に気付けばここにいました。恐らくその実験が失敗したためだと思います」

近右衛門は何か考えるように沈黙していたが、やがて口を開いた。

「成る程のうゝでは早急にお主達の研究所とやらの所在地を調べるところかのゝその場所や名称等を教えてくれるかの？」

カリストは適当な場所と名前を答えた。それを聞いた近右衛門は何処かへ電話をしていたが、やがて困ったように言った。

「すまんが、場所と名前は本当にそれで合っているかの？」

確認をされたカリストは平然と答えた。

「間違いありません」

しかしその返答を聞いた近右衛門は更に困ったような顔になった。

「残念ながら、お主の言う研究所とやは何処を調べても存在しないみたいじゃ」

それを聞いたカリストも困惑したようだった。

「そんなはずは…」

近右衛門は表情をさらに真剣なものにした。

「他に何か連絡を取れる場所はないかの？」

問われたカリストはゆっくりと首を振った。

「身寄りもなく研究所で生活していたので…」

呟くように言うカリストを見て、近右衛門は表情を和らげて言った。

「一つ提案なんじやが、とりあえず帰る場所が見つかるまで、ここにいる気はないかの？住む場所などはこちらが提供しよう」

その発言にはタカミチと呼ばれた男は驚いたような表情をした。エヴァは予想していたのか平然としていた。カリストも驚いたようだったが、すぐに真剣な表情になった。

「いいのですか？…自分で言うのもおかしいですが、私達のような怪しい者を…」

そんなカリストを見て近右衛門は言った。

「では他に行くあてはあるのかの？」

尋ねられたカリストは首を振った。

「…いえ」

「ならばそんなお主達を放ってはおけんじやろ」

「しかし…」

尚も洩るカリストを見て近右衛門は続けた。

「正直な話をするとの、お主達を監視するという意味合いもあるのじゃよ…まあ何も常に見張るという訳ではないがの」

そう言われたカリストは納得したようだった。

「わかりました。ではよろしくお願いします」

了承を聞いた近右衛門は初めて笑顔を見せ、ガニメデとイオにも尋ねた。

「お主達もそれでよいかの？」

「ああ世話になるな」

「…それで構わない」

ガニメデとイオからも肯定の意思を聞き、近右衛門はさらに笑みを深めた。

その後、カリストは近右衛門から住居の地図を渡された。

「とりあえず今日からここに泊まってくれるかの。ああそうじゃ、こちらから連絡したら明日もまたここに来てるれるかの。また細かい話をしたいからのう」

そうしてカリスト達が部屋から出て行き、部屋には近右衛門とタカミチとエヴァと茶々丸が残った。

タカミチは困惑したように言った。

「学園長。本当にいいのですか？危険ではないと断言できませんよ」

そう言われた学園長は表情を変えずに言った。

「ほう、では他に良い方法があるのかね？タカミチ君」

逆に問われたタカミチが沈黙してしまった。それを見た学園長はフオッフオッフオツと独特な笑いをした。

「タカミチ君、お主には彼らは危険に見えたのかの？」

タカミチは静かに答えた。

「分かりません…もう少し様子を見てみないことには…」

それを聞いた学園長はタカミチを安心させるように言った。

「大丈夫じゃよ。彼らは問題を起こすような者ではないじやろう」

タカミチは少し元気を取り戻したように視線を学園長の瞳に向けた。

「なぜそう思われるんですか？」

問われた学園長は答えた。

「なに、年寄りの勘じゃよ」

そう言ってまた独特な笑い声を上げた。それにはタカミチも苦笑いをするしかなかった。

しばらく笑った後、近右衛門はエヴァに尋ねた。

「ところで、彼らは魔法を使ったところを見たのかの？」

エヴァはニヤリと笑った。

「ああ、その上茶々丸がロボットとわかって私も私が吸血鬼と知っても疑問には思っていないようだな。間違いなく”こっち”の関係者だろ」

それを聞いた学園長は考えるように唸りながらしばらく沈黙した。

「うーむ、彼らは科学者と名乗っておるが…その辺りについても明日聞かねばならぬのう」

そんな様子を見てエヴァが鼻を鳴らした。

「ふん…全く呑気だな。せいぜい問題を起こさないでくれよ。帰るぞ茶々丸」

そう言い放つと扉を乱暴に開けて出ていった。最後に茶々丸がペコリとお辞儀をして扉を閉めた。

指定された建物は麻帆良の少しはずれにあるアパートだった。見た目は古く、住民は見当たらなかった。しかし建物の内部は広さや清潔さに問題はなく、カリスト達には充分なものだった。

中に入り、しばらく内部を回った後、3人は広い居間にある机を中心にして座った。

ガニメデとイオが隣に座り、向かいにカリストが座った。そしておもむろにガニメデが口を開いた。

「どうやら中までは本当に監視するつもりはないようだな」

カリストはそれに同意したように頷いた。

「そうだな、ここまで来る間は監視されていたようだし、今も外に何名か見張りがいるようだが、内部に盗聴器などは見当たらない」
ガニメデは面倒くさそうに鼻を鳴らした。

「はっ、こそこそ嗅ぎ回られんのは好きじゃねえが…まあそうは言
ってらんねえな」

「しかし…あの学園長というのは簡単にはいきそうにないな」

難しい顔をするカリストに対してガニメデは陽気に言った。

「にしても、お前はよくもまああんな出任せをペラペラと言えたも
んだ。演技も中々様になってたぜ」

ガニメデはからかうように笑った。それに対してカリストは自嘲気
味に笑った。

「そうだな…正直その場しのぎの嘘だったんだが、流れで彼らと干

渉することになってしまった：まあ科学者云々は強ち嘘という訳でもないだろう？」

そう聞かれたガニメデはさらに笑いを強めた。

「ああ、確かに完全に嘘ってわけじゃねえな。それより、奴らと関わってよかったのか？俺達の正体がバレることあねえだろうが、仲良くする意味あんのか？まあ俺としてはそっちの方が楽しめそうだから文句はねえが」

カリストは呆れたような笑みを浮かべていたが、真顔に戻して言った。

「そのことなんだが、ここにはかなり不可思議な要素が存在している。まずエヴァンジェリンについてだが、彼女は確か自身を吸血鬼と称したらしいな？」

確認されたガニメデは肯定を示した。

「ああ間違いない。原理不明の攻撃を仕掛けてきた上、連れてた茶々丸とやらはこの世界線標準の科学レベルを遥かに越えたロボットだろうな」

カリストは考えるような仕草をした後、口を開いた。

「それが第一の懸念要素だ。次に、イオ：説明を頼む」

カリストに指示されたイオは服に隠れている右腕を前に出して言った。

「ジュピター、起動しろ」

イオがそう言うとそれに呼応するようにイオの右腕に埋め込まれた端末から合成音声が鳴った。

” バイオコード承認。命令了承、ジュピター起動 ”

次の瞬間、イオの右腕をとりまく様に無数の立体ホログラムが表示された。それを見たイオはさらに命令を続けた。

「ジュピター、スキャンした周辺の立体図を表示しろ」

命令された端末は一度全てのホログラムを消し、次に指示された立体図を空中に立体投影した。それを見たイオはカリストとガニメデに機械的な口調で言った。

「これが周辺の立体図だ。この周辺には、この学園都市を覆うように指定座標がずれた原因の未知の場が存在している」

イオがそう言うと、それに応えるように立体図の麻帆良の部分を覆うようにドーム状の光の壁が表示された。それを見てイオはさらに続けた。

「その影響でZPFの接続が妨害されている。通常の47.9%の出力だ」

それを聞いたガニメデは驚きの声をあげた。

「なに！？ZPFの接続が妨害されてるだど？」

事前に聞いていたカリストはそれに頷いた。

「そうだ。それが第二の懸念要素だ。これら二つを解消しなければ我々にとって危険となりうる」

ガニメデは腕を組んで納得したように言った。

「なるほどな。だからそいつを探るためにも奴らと関わる必要があるってわけか」

カリストは肯定するように再び頷いた。

「それに：奴の情報を知っている可能性もある。とりあえずは彼らに従うでしょう」

カリストが言い終わり少しした後、ガニメデは何かに気づいたように言った。

「そういや、あの自称吸血鬼のガキが結界がどうのって言ってたな」

それを聞いたカリストは怪訝な表情をした。

「結界？イオの言っている未知の場のことか？」

ガニメデは肩をすくめた。

「さあな。ただ、あのガキは何か知ってそうだな」

カリストは再び考えるような仕草をした。

「直に聞くしか手はないな：イオ、お前にはエヴァンジェリンから話を聞き出すこと、並びに結界とやらの正体の解明とその対策を頼めるか」

言われたイオは相変わらず無表情で応えた。

「了解した」

カリストは次にガニメデに向き直って言った。

「お前は未知の攻撃を受けたらしいな」

ガニメデは軽く答えた。

「ああ。得体の知れないエネルギー——まあ多分ZPEだろうが——とか、何かが付加されたライフフル弾をわんさかぶちこまれたぜ。お陰様で初期段階まで解放しちまった」

ガニメデの発言にカリストはため息をついた。

「まあとにかくお前はそのエネルギーの正体を突き止めてくれ。私も個別に調べるとしよう」

ガニメデは面倒くさそうな様子を隠すこともなく言った。

「はいはい分かりましたよ」

そんな様子を気にせずカリストはさらに続けた。

「とりあえず我々の正体がバレるのだけは回避したい。明日、何か

聞かれるかもしれないが全て私が答えるから口裏をあわせてくれ。
特にガニメデ、頼むからボロを出すような真似はするなよ」

そう言われたガニメデはさらに面倒くさそうに手をひらひらさせて
答えた。

「はいはい…もおいしいだろ。俺はねみいよ…悪いが先に寝かせても
らうぜ」

そう言うと引き締まった体を伸ばして寝室へと入っていった。それ
を見たカリストは苦笑いを浮かべた。

「全く…本当にあいつは変わらないやつだ」

その口調はどこか親しみを込めているようだった。そしてカリスト
はイオに向かって言った。

「お前ももう寝ていいぞ。明日は長くなりそうだからな」

「了解した」

短く応えたイオは、自室へと向かって行った。その後ろ姿を見てカ
リストは呟いた。

「お前も変わらないな」

カリストの表情はとても穏やかなものだった。

第3話「虚構」

翌朝、3人は訪ねてきたタカミチに案内されて学園長室へと向かっていた。その道中、カリストとガニメデは居心地の悪そうな表情をしていた。

「なあタカミチさんよ。一つ聞いてもいいか？」

そう言われたタカミチは笑顔で応えた。

「なんだい？」

対するガニメデは若干周囲を気にしながら言った。

「さっきから女しかいねえし全員が変な視線を送ってきてるんだが…どういうことだ？」

その問いにはカリストも同意しているようだった。そんな2人にタカミチは苦笑いした。

「ここは女子校エリアなんだよ」

それを聞いたカリストとガニメデは露骨に困惑した表情になった。

「おいおい…なんでわざわざそんなところ通ってるんだよ？」

問われたタカミチは更に苦笑いをして答えた。

「学園長室は女子中学校の中にあるんだ」

カリストとガニメデは不審なものを見るような目でタカミチを見た。その視線に耐えられなくなったようにタカミチは頭を掻いた。

「色々事情があるんだ」

そんな会話をしているうちに目的の女子中学校の前まで来ていた。特徴的な容姿に目立つ白い服装をしている3人に視線が集まった。カリストとガニメデは居心地が悪そうにしていたが、イオは表情一つ変えずにいた。

そんな3人に苦笑いしながらタカミチは学園長室まで案内した。タカミチが定位置である学園長の隣に行くと、近右衛門は静かに声を発した。

「わざわざ呼びつけてしまってますまんの。昨晚はよく眠れたかの？」

学園長に向かい合うようにして中央にカリスト、右にガニメデ、左にイオが立っていた。カリストは若干苦笑いして答えた。

「ええ。お陰様でありがとうございます」

近右衛門は笑顔を見せて続けた。

「そうか。それはなによりじゃった。さて、いきなり本題なのじゃが」

そう前置きした目は真剣なものになっていた。そして場の空気が一瞬で変わった。

「お主達の戸籍を調べたのじゃが、やはり何処にも存在せんかった。

そこで質問なんじゃが、お主達は”魔法”というものを知っておるかの？」

その真剣な態度と質問の内容に一瞬驚いたものの、カリストは平然と答えた。

「箒で空を飛んだり、杖で火を起こしたり：ということでしょうか？」

その返答に近右衛門は表情を崩さずに言った。

「そうじゃ。そして、その魔法が実在すると言ったら信じるかの？」

肌を切り裂くような空気が部屋に満ちた。近右衛門の表情はどこまでも真剣で、老年の者しか出せない威厳を醸し出していた。カリストはその全てを見透かすような視線に耐えながら言葉を選んだ。

「その存在を否定はできません」

それを聞いた近右衛門はさらに続けた。

「魔法は実在するのじゃよ。この麻帆良は表向きはただの学園都市じゃが、その実、魔法使いの集う場所でもある。何を隠そうこのわしもタカミチ君も魔法使いじゃ。信じられんかの？」

その発言にカリストだけでなくガニメデも若干驚いたようだったが、カリストはすぐに平然とした態度に戻った。

「疑うように申し訳ありませんが証拠を示すことはできますか？」

問われた近右衛門はわざとらしく驚いたような表情になった。

「はて、お主達はすでにその証拠を見ていると思ったのじゃが」

そう言うのと近右衛門はガニメデに視線を送った。

「昨夜、エヴァがお主に魔法を見せたと言っておっての」

カリストは話の流れから嫌な予感を感じていた。近右衛門は質問の相手をガニメデに変え、ガニメデは眉をひそめて答えた。

「ああその通りだ」

それを聞いた近右衛門は目付きを鋭くした。

「お主達は科学者と名乗っておったが、合っておるかの？」

ガニメデは怪訝な表情になった。

「…ああ」

すると近右衛門はわざとらしく首を傾げ、ガニメデから視線を反らさずに惚けたように言った。

「はて、するとおかしいことになるのう」

「…何がだ？」

対するガニメデの声は若干低くなっていた。が、近右衛門は気にしていないように続けた。

「いやのう、エヴァからは魔法を見ても驚いておらず、常人では考えられんような身のこなしであったと聞いている、わしはてっきりお主達は魔法関係者とかばかり思っておったんじゃが…お主達は科学者と言っておるしのう。はて…」

わざとらしく言う近右衛門を見てカリストは内心焦っていた。完全に相手のペースに乗せられていることに気付き、近右衛門に対する警戒をさらに強めた。そして最終手段に出るか考え始めた時、思わぬ声が発せられた。

「ならば真実を話す」

その声の主は今まで沈黙していたイオだった。全員の視線がイオに集まる中、イオはゆっくりと話し始めた。

「我々も魔法関係者だ。ただ、我々の所属している組織は異端とされている。その理由は徹底した情報遮断にある。身寄りのない子供を引き取り、社会に触れさせることなく徹底した隔離環境の中で魔法を教えていく。だからこそ魔法関係者の中でも我々の存在を知っている者は非常に少数だ。ただ、その行き過ぎた情報遮断から異端扱いを受け、幾つかの組織から襲撃を受けた。我々は先日、転移魔法を使って逃走を計ったが何かが原因でこの地に転移してしまった。そこで我々は身の安全のために身分を科学者と偽っていた」

それを聞いた近右衛門は射抜くような視線でイオを見たが、イオは表情一つ変えなかった。

「成る程のう。疑うわけではないのじゃが、その証拠と言うのもなんじゃが…何か証明できるものはあるかの？」

問われたイオは相変わらず感情の込もっていない口調で言った。

「了解した。我々独自の魔法を見せる」

そう言うといオは右手を前に押し出すように伸ばした。

「ジュピター起動」

イオがそう言うのとそれに呼応するよう合成音声が鳴った。

” バイオコード承認。命令了承、ジュピター起動”

イオの右腕をとりまく様に無数の立体ホログラムが表示された。

近右衛門とタカミチは驚きの声を上げたが、イオはそれを無視してさらに続けた。

「同一時空間座標転移。指定座標、想念同期」

イオが指令を出すと合成音声はそれに応えた。

” 指令確認、量子化デコヒーレンス開始”

次の瞬間、イオは全員の視界から消えた。そして近右衛門の背後から声がした。

「これが我々の魔法だ」

近右衛門とタカミチは慌てて振り返った。するとそこには無表情のイオが立っていた。近右衛門は焦ったように言った。

「タカミチ君！」

言われたタカミチはハツとしたように近右衛門に視線を送った。

「瞬動ではありません！」

その口調はいつになく慌てていた。更に次の瞬間にはイオは元の場所に戻っていた。それを見た近右衛門とタカミチは驚いていた。自身の力にそれなりの自負がある近右衛門やタカミチとしては相手に不意を突かれて背後を取られたことに衝撃を覚えるばかりだった。しばらく間を置いてから冷静さを取り戻した近右衛門は静かに言った。

「お主達の言っていることは本当のようじゃの：今日はもう帰ってよいぞ、わざわざすまんかったの」

そう言われたイオ達は校舎から出ていった。その姿を窓から見送った学園長にタカミチは言った。

「学園長！どうなさるおつもりですか？彼らの力は危険です」

学園長は窓から外を眺めながら言った。

「ますます彼らをここから出す訳には行かなくなった訳じゃな…しかしタカミチ君、彼らを放っておくことなどできんじやろう」

タカミチも外に目を向けた。3人の後ろ姿は既に視界から消えていた。

「はい：彼らの話が本当なら、追い出す訳にもいきません：」

2人はしばらく外を眺めた。

「彼らはなるべくわしらの目の届く場所に置く必要があるじゃろう：少なくとも敵意は無いことは確認できたしの。あの力を使えばわしらの不意を突くこともできたはずじゃ。そうしなかったのは彼らに敵意がないということじゃろう」

それに対してタカミチも頷いた。それを見た近右衛門は続けた。

「仮に他意があるとすれば、目的は木乃香かの：しかしそれもあの力を使えばすぐにでも出来そうじゃがの：タカミチ君、彼らには教えてあのクラスと接触してもらおうかと考えておる」

それを聞いたタカミチは慌てた口調になった。

「何故ですか学園長！？」

対する学園長は真剣な表情になった。

「もしあのクラスが目的ならば、彼らを目の届かないところに置いておく方が危険じゃろう。かえって接触すればすぐに尻尾を出すじやろうて。それならばわしらの手のうちに居てもらった方がよいじやろう？」

それを聞いたタカミチは難しい顔で再び外を見た。
そこには変わらない日常の風景が広がっていた。

カリスト達は住居に戻ってきていた。

「にしても突然何を言い出すかと思えば、お前の嘘には感服したぜ」
ガニメデは上機嫌にイオに肩を組んだ。カリストも苦笑いを浮かべていた。

「確かにあれならば嘘はバレないだろうし、学園側も我々を追放したりは出来なくなっただろう。もっとも、彼らが魔法使いなどと宣言するとは思ってもみなかったが…」

組んだ腕を解くとガニメデは陽気に言った。

「にしても魔法とはな。奴らの魔法とは何だ？」

その問いかけにイオが答えた。

「ZPEの低層次元のエネルギーを発声による振動で共振させ、物理次元に影響を発生させているものと思われる。先天的にZPFに接続できる固有振動数を持つ者がそれを行うことができ、魔法使いと呼ばれているのだろう」

その説明を聞いたカリストは納得したように何度か頷いた。

「なるほどな。私達が行っていることを振動コア無しで出来る者が魔法使いということか…凄まじい世界線だな」

それを聞いたイオは反論するように言った。

「正確には違う。我々は振動コアを身体に内臓して固有振動数を強制的にZPFに合わせているが、この世界線の魔法使いは産まれながらに自然とZPFの振動数に一致している」

それを聞いたカリストは溜め息をついた。

「余計に凄いな、この世界線は。一体どんな分岐をしたらこんな世界線に行き着くんだ？」

それを聞いたガニメデは対照的に笑みを浮かべた。

「まあいいじゃねえか。相手には苦勞しなさそうだぜ」

「はあ…お前は全く…」

カリストはこの世界線に来てから何回目かわからない溜め息をした。

翌日、再び訪れたタカミチによって3人は学園長室まで来ていた。

「先日は疑うような真似をしてすまんかったの」

学園長は申し訳なさそうに言った。カリストはそれに応えた。

「いえ、お気になさらず。こちら素性を隠していたのですから」

それを聞いた学園長は独特な笑い声をあげた後、表情を直して言った

た。

「それで、お主達の処遇についてじゃがの。お主達には仕事を与えたいと思うのじゃがよいかの？」

カリストは真剣な表情で答えた。

「はい。むしろ有難いことです。感謝します」

それを聞いた学園長は満足したように言った。

「うむ。ではまずカリスト君には教師をしてもらおうかの」

途端にカリストとガニメデは驚きの表情になった。それを見た学園長は笑みを含めて続けた。

「なに、教師といっても正確には新任の補佐がメインじゃよ。授業も基本的にその先生がやるから安心せい。できれば国語なぞやってもらえると助かるのじゃが：ところでカリスト君、外国語は話せるかの？」

そう問われたカリストは困惑した表情だった。

「まあほとんど全ての言語は理解できます」

その返答を聞いた学園長は更に笑みを深めた。

「そうかの。それはちょうどよかったわい。ではもう決まりじやのう」

困惑するカリストを無視して学園長は次にガニメデとイオを見て言った。

「ガニメデ君とイオ君には、広域指導員の仕事をしてもらおうかの」
ガニメデが怪訝そうな表情をすると、学園長は説明を始めた。

「広域指導員というのはタカミチ君もやっていたの。よからぬ輩を多少の力に物申して指導するという、要は治安維持みたいなものじゃよ。お主達は腕に自信はあるかの？」

それを聞いたガニメデは途端に笑みを浮かべた。

「当然だ。その仕事、引き受けるぜ」

対してイオは例のごとく無表情で応えた。

「それで構わない」

結局、相手の申し出に断る訳にもいかず、3人は学園長の提案を受け入れた。その翌日からカリストの住居だけが学園の教師専用の宿舎に移った。

第4話「慣性」

イオとガニメデは居間で話し合っていた。2人とも学園から支給された服に着替えていた。

「カリストだけ別にするとはな：お陰様で上手い飯が食えなくなっただぜ」

ガニメデ不満そうだった。それに対してイオは機械的に言った。

「戦力と情報のやり取りを分断し監視することで、安全化をはかったのだろう」

ガニメデは不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「全くいけすかないぜ。まあ文句言える立場じゃねえがな」

そう言ってガニメデはテーブルの上にあった煎餅をかじった。そしてここ数日に渡っての広域指導員の仕事を思い出していた。

幾つか揉め事に遭遇したが、騒いでいた連中は一緒にいたタカミチを見た途端、一目散に逃げてしまったのでガニメデとしては不満だった。

しかし今日からはタカミチとは別行動となっており、密かに楽しみにしていた。そんな様子を察したのかイオは言った。

「必要以上の戦闘は禁じられているぞ」

「わかってるさ。だが必要ならしょうがないよな」

ガニメデはイオの忠告を無視して獰猛な笑みを浮かべた。そして煎餅を食べ終わると笑いながら言った。

「にしてもあいつが教師ねえ。似合うような似合わないような…そういうやお前は結界について何かわかったのか？」

「まだだ。監視がある以上、迂闊には行動できない。マクダウエルにもまだ接触できていない」

ガニメデはさして気にした風もなく、そうかと呟いた。

その後、ガニメデは意気揚々と1人で広域指導員の仕事にくりだした。始めは大学生達の喧嘩を両者とも戦闘不能にすることで止め、その後も次々と騒ぎを見つけては突っ込んでいった。

「久しぶりに暴れたが、こんなんじゃ物足りねえな」

そう呟くとガニメデは次の標的を見つめるべく歩を進めた。そうしているとき道の真ん中に人だかりが出来ているのを発見した。見れば誰かを体格の良い男達に取り囲んでいた。ガニメデは獲物を見つけたような笑みを浮かべてその集団に近づいていった。そしてニヤニヤ笑いながら声を投げ掛けた。

「よお。またバカみたいに騒いでんなあ」

それに気づいた1人の男が怪訝な表情でガニメデを見た。

「んあ？何だおま…」

―バシッ―

言い終わる前に男は宙を舞っていた。

「おい！！あいつ誰だ！？」

「やりやがったな！！」

それに気づいた者達が一斉にガニメデに殴りかかってきた。

「な、何！？」

「消えた…？」

が、すでにその場にガニメデはいなかった。

―ドンッ―

「うっ！」

―バキッ―

「ぐああ…」

気づいたら1人、また1人と背後から吹き飛ばされていった。最後には全員残らず戦闘不能にしていた。

「あーつまらね」

ガニメデは心底うんざりしたようにしながらその場を離れようとした。

「ちょっと待つヨ！」

そこに似非中国人風の声が掛けられた。ガニメデが面倒くさそうに振り返ると、そこには健康そうな褐色の肌をした少女がいた。

少女は驚いたような顔でガニメデを見ていた。対するガニメデは露骨に面倒くさそうな様子で言った。

「何か用か？なんちゃってチャイナガール」

「な、なんちゃて！？」

あんまりな物言いのガニメデに少女は更に驚いたようだったがすぐに表情を変えた。

「お兄さん、強いアルね。戦て欲しいアル」

ガニメデは溜め息をついた。

「俺は女子供をいたぶる趣味はない。悪いが他を当たってくれ」

そう言って少女に背を向けたガニメデは、先程の男達の対戦相手が目の前の少女とは気づいていなかった。

「っ！？」

一歩歩いた時、ガニメデはとっさにその場から後ろへ跳躍した。

—シュツ—

ガニメデが居なくなった場所には少女の蹴りで空いたクレーターがあった。

「アイヤーさすがアル」

これにはガニメデも驚きの表情を隠せなかった。

「お前何者だ！？ 目的は何だ！？」

問われた少女は満面の笑みで言った。

「名前は古菲アル。目的はただ強者との戦いアル！」

ガニメデはしばらく相手を品定めするように見ていたが、突然笑い声をあげた。

「フハハハハハ！！」

それには今度は古菲が驚いたようだった。

「いや…全く持ってこの世界線は最高だ。いいぜ古菲とかいうの、かかってこいよ。相手してやる」

古菲は花咲くような笑顔になった。

「全力でいくアルよ！」

次の瞬間にはガニメデの懐に入っていた。

「ほお…」

ガニメデは古菲が繰り出す拳の威力に驚きながらもその全てを受け止め、反らしていた。拳を受け止める度に腕に馬鹿げた衝撃がかかり、はりつめた音が響いた。

「そらよっ！」

「甘いアル！」

ガニメデも拳を繰り出したが、全てかわされていた。しかし両者ともこれ以上ないほどの笑みを浮かべていた。そうして数分間拳を交えた時、ガニメデは突然構えを解いた。

「…?」

古菲は怪訝に思いながらも容赦なくガニメデの腹部を殴りつけようとした。その時、突然ガニメデが視界から消えた。

「っ!?!」

そして古菲は背後から吹き飛ばされたが、空中で体勢を整えて着地した。さしてダメージのなさそうな古菲は子供が喜ぶように言った。

「すごいアル!全然気づかなかたアル！」

そう言われたガニメデは苦笑いした。

「の割には全然効いてねえみたいだな：手加減したとはいえ一体どんな体してんだよ：」

それを聞いた古菲は更に笑顔になった。

「さきので手加減したアルか！？ますますすごいアル！お兄さんの名前教えて欲しいアル！」

そんな古菲にガニメデも悪い気はしないのか上機嫌で答えた。

「ガニメデだ。俺も正直驚いたぜ。所詮はガキかと思ってたが中々面白い。ただ残念だが時間だ。一応広域指導員やってるんでね、仲間に迷惑はかけられない。続きはまた今度だ」

そう言うときガニメデは先程のように古菲の視界から消えた。

イオとタカミチは集合場所で遅刻しているガニメデを待っていた。

「そういえば…」

タカミチがイオに話しかけようとした時だった。割り込むようにガニメデの声が聞こえてきた。

「悪い悪い。ちと手こずる相手がいたもんでね」

内容と裏腹にその表情は全く反省しておらず、むしろ上機嫌だった。そんな様子にはタカミチは苦笑いした。

「ガニメデ君でも手こずる相手がいるのか。くれぐれも気をつけてね」

タカミチもここ数日でガニメデやイオの性格は大まかには理解できていた。

特にガニメデの性格は分かりやすいので関係もだいぶ砕けてきていた。そんな彼らに対してのタカミチの疑惑は大方晴れていた。

「ああわかってるよタカミチ」

その後住居に帰っても上機嫌なガニメデにイオが話しかけた。

「何かいいことでもあったのか？」

ガニメデはニヤリと笑みを浮かべた。

「この世界線は最高だってことがわかったんだよ」

相変わらず上機嫌のガニメデを見て、イオは何も言わずに会話を終わらせた。

翌日。もう少しで午後という時間、イオはガニメデに向かって言った。

「昨日から監視がなくなったようだ。今日からは結界について探りを入れることができそうだ」

先程起きたばかりのガニメデはまだ眠いのか大きな欠伸をした。

「そうか。まあ頑張れよ」

イオはそんなやる気の無い口調に気にした様子もなかった。

ーピンポーンー

その時、チャイムの呼び出し音が鳴った。玄関の扉を開けるとそこにはタカミチがいた。

「こんにちは、イオ君。毎回呼び出して悪いね」

イオも軽く挨拶をすると、タカミチは本題を話し始めた。

「実は学園長が2人を呼んでいてね。今から準備してついて来てもらえるかな？」

それを聞いたイオはいつも通りに答えた。

「了解した。準備の為、しばらくの待機を要求する」

イオはガニメデに事情を話し、2人は支度をしてタカミチと共に住居から出発した。道中の視線を（イオ以外が）気にしつつ、麻帆良学園本校女子中等部に向かった。学園長の許可証を提示して校舎の中に入り、学園長室へと入った。

そこには久しぶりを見るカリストと見知らぬ幼い少年がいた。

利口そうな顔立ちに小さな眼鏡かけていて、赤毛でガニメデと同じように後ろ髪を一本に束ねていた。

ガニメデ達が入ってくると学園長はおもむろに話し出した。

「よく来てくれたの。今日は紹介したい者がおっつの」

そういうと学園長は赤毛の少年に視線を送った。少年は慌ててガニメデとイオに向かって言った。

「あ！僕はネギ・スプリングフィールドと言います。確かカリストさんの友人の方ですよね？」

ネギと名乗った少年は見た目の年齢と不釣り合いに丁寧な挨拶をした。

「ああ。俺はガニメデだ。よろしくな」

そう言うときガニメデはネギと握手した。次にイオがネギを見て言った。

「イオだ」

イオの素っ気ない自己紹介を気にせず、ネギは笑顔でイオとも握手をした。

お互いに自己紹介が終わると学園長がわざとらしく咳払いをして注意を集めた。

「お互い自己紹介ができたみたいじゃが、改めて紹介しようかの。ネギ君、彼らがカリスト先生の友人であるガニメデ君とイオ君じゃ。彼らは広域指導員をやっておる。因みに2人とも魔法関係者でもあるぞい」

それを聞いたネギは驚いたようだった。

「タカミチと同じ：凄く強い方なんですネ！」

イオは無表情だったが、そう言われてガニメデはどこか照れくさそうにしていた。学園長はそんな様子を見て笑顔で紹介を続けた。

「そして、ガニメデ君とイオ君。彼はネギ・スプリングフィールド君じゃ。彼も魔法関係者での、カリスト先生と共にここの先生をしている」

それを聞いたガニメデは哑然とした表情になった。

「：じいさん、今この坊主が先生と言ったか？」

ガニメデに問われても学園長はさも当然のようにしていた。

「そう言ったつもりじゃが：何かの？」

ガニメデはスーツを着たカリストに視線を送った。カリストは肩をすくめた。

「学園長の言う通りだ」

カリストに肯定され、ガニメデは本格的に困惑した表情になった。が、文字通り世界が違うから良いか、とよくわからない結論に達した。

「まあ先生頑張れよ坊主」

そう言ってガニメデはネギの頭に手をポンポンとのせた。ネギは嬉しそうに満面の笑顔で応えた。

「はい！頑張ります！」

ネギの頭から手を離すとガニメデはカリストに視線を送った。

「お前が本当に教師になってるとはな、しかも子供先生と一緒にとは…」

カリストは苦笑いをした。

「そう言うな。ここ数日でだいぶ先生も様になってきたぞ」

その返答にガニメデは呆れた顔になった。その後、カリストとネギは部屋から出て行き、ガニメデとイオが残された。2人が退室したのを見て学園長は口を開いた。

「実は呼び出した理由は他にもあったの」

ガニメデとイオの視線が再び学園長に向かった。

「お主達も知っているじゃろうがここ麻帆良は魔法使いが多く居る。そして貴重な資料や魔法書物やマジックアイテムなどを数多く保管しておる。さらにわしは関東魔法協会の理事長も勤めておる。それ故、麻帆良に侵入しようという輩は後を絶たんのじゃ。そこでそれを魔法先生や魔法生徒が撃退しているのじゃが、いかんせん人数が少なくての。人員が不足してしまうような時にはお主達にも協力を頼みたいのじゃが…よいかの？」

ガニメデは不敵に笑った。

「全然構わねえよ。むしろこっちから頼みたいくらいだぜ」

イオも肯定の返事をした。

「了解した」

それを確認した学園長は重々しく頷いた。

「うむ。では2人とも頼むぞい。必要な時はこちらから連絡を入れるから渡した携帯は常に持ち歩いとくれい」

その後、学園長室から出たガニメデは何処かへ行き、イオは廊下で再び出会ったネギに話しかけた。

「ネギ・スプリングフィールド、質問がある」

ネギは元気良く応えた。

「あ！イオさんでしたよね？どうかしましたか？」

イオは変わらない口調で言った。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルという生徒がこの学園のどこかにいるはずなんだが知っているか？」

それを聞いたネギは露骨に顔を青くした。

「えっと…エヴァンジェリンさんは僕のクラスの生徒ですけど…」

イオは僅かに驚いたような表情をしたがすぐに無表情に戻った。

「そうか、感謝する」

そう言うといオは歩き出した。ネギは慌ててイオに尋ねた。

「あの！エヴァンジェリンさんと知り合いなんですか！？」

イオは立ち止まって答えた。

「ちょっとした知り合いだ」

そう言うといオは今度こそイオは何処かへ行ってしまった。

イオはそのまま数々の視線を無視して3-Aと書かれたクラスの前まで来ていた。

第5話「接触」

3-Aは今日も騒がしさであふれていた。今は昼休みであり、それぞれの生徒が思うがままに行動していた。古菲はとても中学生には見えない容姿の同級生、長瀬楓と会話を弾ませていた。

「あのお兄さんはホントに強かたアル。手加減したと言てたのに一撃受けてしまったアルよ」

隣り合わせの席に座り、熱く語る古菲に楓も興味津々といった様子だった。

「古に手負わせるとは中々やるでござるな。拙者も是非手合わせ願いたい。それで結果はどうなったでござるか？」

独特な話し方をする楓の質問に古菲は続けた。

「それが時間だと言てどこかへ行てしまったアル…ただ次の再戦予定はちゃんとつけたアル」

ふと古菲が視線をクラスの入口に向けると、そこには見慣れない灰色の髪の毛の、自分たちより少し年上の少年がいた。

そしてその少年とクラスメイトの1人が何やら会話していた。古菲が興味を持って見ていると、先程話していた楓もその視線の先に気づいたようだった。

「おや、見慣れぬ顔でござるな。それに話しているあれは…夕映殿でござるか？」

古菲はじつと少年を見た。

「中々強そうなやつアル」

それを聞いた楓は頷いた。

「確かに…今も周囲を警戒しているようでごさるな」

そう言っているうちに少年はどこかへ行ってしまった。

古菲と楓は頷き合うと、すぐに夕映と呼ばれた生徒のところへ行った。

イオは教室の入口にいた生徒に話しかけた。

「質問がある。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルという生徒はいるか？」

話しかけられた生徒は驚いたようだったが、すぐに冷静になって言った。

「確かにいますですが、ここは女子校ですよ。殿方が何のようですかです」

広いで見せるような髪型の、わりと背の小さな少女はじっとイオを見た。イオは気にした素振りも見せずに答えた。

「事情があつて学園長に呼び出された。ネギ・スプリングフィールドとも知り合いだ」

イオがそう言うのと少女は一応納得したようだった。

「ネギ先生と…そうだったですか」

イオは教室を軽く見渡した。

「マクダウエルはここにはいないみたいだが、何処にいるか知っているか？」

尋ねられた少女は落ち着いて答えた。

「屋上にいると思うです」

「わかった。感謝する」

そう言うといオは何処かに行ってしまった。少女は何事も無かったかのように席に戻ろうとした。

「っ!？」

が、突然目の前に現れたクラスメイトに驚いた。

「な、なんですか？」

目の前のクラスメイトはどこか不気味な笑みを浮かべていた。

「バカリリーダー、先程の殿方は知り合いでござるか？」

「紹介して欲しいアル！」

そんなことを言いながら迫ってくる2人に少したじろぎながら少女は言った。

「し、知り合いではありませんです。先程エヴァンジェリンさんのいる場所について尋ねられただけです」

そんな3人の様子に気が付いたクラスメイト達が騒ぎ始めたことで3-Aは大混乱に陥った。

イオは屋上の扉を開いた。そこには探していたエヴァと茶々丸がいた。エヴァはお弁当を食べているようだったが、イオを見るなりいきなり弁当箱を隠し顔を若干赤らめて叫んだ。

「な、なんだいきなり！」

そんな様子を疑問に思ったイオが言った。

「それはこちらの台詞だ。何を慌てている？」

すると茶々丸が答えた。

「マスターはクラスに馴染めずに1人で寂しくお弁当を食べているのを隠したいのです」

「な！？茶々丸！！」

そのやり取りを見たイオは若干いたわるような目線でエヴァを見た。その目線に気づいたエヴァはさらに顔を赤くして怒鳴った。

「貴様も何をそんな可哀想なものを見るような目をしている！！私は別に寂しくなんかないぞ！！」

エヴァがそう叫ぶのを聞いたイオは無表情で尋ねた。

「クラスに馴染めないのは否定しないのか？」

それを聞いたエヴァはこれでもかという位に顔を赤くしてイオに殴りかかろうとした。

「く…貴様いきなり現れて随分なっ…茶々丸！？」

が、茶々丸によって背後から羽交い締めにされた。エヴァは手足をバタバタさせるだけだった。

「ええい！離せ茶々丸！！この無礼な若造に礼儀を教えてくれる！！」

茶々丸は暴れるエヴァを何処か温かい表情で見た。

「ああマスターが嬉しそうに」

「黙れ茶々丸!!」

エヴァが落ち着き、一段落付いたところでエヴァはわざとらしく咳払いをした。

「こ、こほんっ!」

その顔はまだ若干赤かった。

「で、私に聞きたいことは何だ?」

イオは抑揚のない声で言った。

「この学園の結界について聞きたい」

その質問を聞いた瞬間、エヴァは不敵な笑みを見せた。

「ほお…なぜ私に聞く?」

「結界という単語を使ったのはマクダウェルだけだ。だから結界について知っているであろうと予測した」

エヴァは鼻を鳴らした。

「ふん…貴様らは”こっち”の人間だったな。まあ教えてやってもいい。ただし」

エヴァはさらに不敵な笑みを浮かべた。

「私は闇の福音と恐れられた悪い魔法使いだ。教えてほしくばそれ相応の対価を払ってもらおうか」

が、イオは表情を変えずに即答した。

「了解した。対価は何だ？」

そんなあつけらかんとした返答にエヴァは間の抜けたような表情になった。

「おい貴様、もうちょっと悩むとかしたらどうなんだ？」

対してイオは無表情のままだった。

「情報を提供してくれるのなら構わない。可能な対価ならば払う」

エヴァは再び口元を釣り上げた。

「言ったな若造。いいだろう。ならば教えてやる。今夜1人で私の家に来い。場所は茶々丸に聞け」

エヴァがそう言うのと茶々丸はイオに尋ねた。

「携帯電話はお持ちですか？」

問われたイオは学園から支給された黒い携帯電話を取り出した。茶々丸も自身の携帯を取りだし、赤外線通信で地図をイオの携帯に送った。それを確認したエヴァは言った。

「今夜そこに来い。いいか？ 貴様1人で来るんだぞ」

イオは了承の意を示した後に間を置いて言った。

「吸血鬼というのは事実なのか？」

それを聞いたエヴァはフェンスにもたれ掛かって外を眺め、自嘲気味に笑った。

「そうだ。今はとある事情で力を抑えられているがな…牙すら引込んで血も吸えない」

そんなエヴァを見てイオは感情の無い口調で尋ねた。

「とある事情？」

エヴァは顔だけ振り返って外を眺めていた視線をイオに向けた。

「ああ…私を苦しめると同時に、繋がりでもある」

そう静かに語るエヴァの人形のように整った顔は無表情だったが、イオには何処か寂しそうに見えた。長い細やかな金髪が風に揺れて、よりいっそう儚く見えた。その姿を見つめているイオの表情はほんの僅かに苦痛に歪んだようになった。

「話は以上だ。邪魔をした」

イオは何かを切り捨てるように言って屋上から去った。

茶々丸と2人きりになったエヴァは再び自嘲の笑みを浮かべた。

「全く：私は何を言っているのだろうか」

そんなエヴァを茶々丸はただ見つめることしかできなかった。

ガニメデはカリストに連れられて校舎の人通りが少ない場所に来ていた。周囲を若干見回した後、カリストは口を開いた。

「何かわかったか？」

ガニメデは軽い口調で答えた。

「いいや。残念ながら収穫はゼロだ」

それを聞いたカリストは落胆したようだったが表情を直した。

「そうか。こちらでも下手に動けないからな：情報を集められていない」

対してガニメデは声を低くした。

「まあしょうがねえだろ。焦ってミスる方が問題だ。ここは慎重にいくべきだ：てかイオはいいのか？」

するとカリストは表情を無表情にした。

「結界について調査する。要件はガニメデから報告してもらおう、だ

そうだ」

そんなイオの物真似にガニメデは短く笑った。カリストは口調を戻して言った。

「そろそろ戻らないと怪しまれる。お前も直ぐに校舎から出た方がいい」

ガニメデは面倒くさそうな顔をした。

「こんな風にこそそしなくてもジュピターで通信すりゃいいじゃないか」

それを聞いたカリストは慌てたように否定した。

「駄目だ。ジュピターのZPF通信は結界に妨害されている。仮に出来たとしてもZPFを扱う魔法使い達はすぐに気づくだろう。他の通信機器も傍受される危険性がある」

ガニメデはさらに面倒くさそうな表情になった。

「はいはい。すいませんでしたね。じゃあ大人しく帰りますよ」

ガニメデは来た道を引き返していった。

ガニメデはそのまま校舎を出て、行きの道を辿ってしばらく歩いていた。そして広場のような場所の手前を歩いている時、突然量子端

末が警告した。

”警告。前方に未知のエネルギー場を観測。ZPF錯乱により詳細不明”

ガニメデはポケットに入っている銀色の端末を取り出し、ホログラム表示を確認すると不敵に笑った。

「面白そうじゃねえか」

そう言うところどころか警告された前方の広場に突き進んでいった。広場には人が1人もいなかった。

そしてガニメデは広場の中央まで来て立ち止まった。

「出てこいよ」

ガニメデの声の向けられた前方から1人の人物が警戒したように歩いてきた。

「……」

そしてガニメデから少し離れた場所に対峙するように立ち止まった。

桜咲刹那は危機感を感じていた。彼女にはかけがえのない幼なじみである近衛木乃香という少女が同じクラスにいた。

そのクラスの担任が変わり、ネギという子供とっていい年齢の少年がやってきた。そこまでは問題無かった。ネギに対する情報はあらかじめ受け取っていたからだ。

しかし、彼の補佐として来たカリストという男の情報はとってつけたように最近になって教えられた上、その情報は疑問な点が多かった。魔法先生の中でも疑問を持つ者は少なくはないようだった。そのため何度か彼と個別に接触しようとしたが、彼には監視がついておりそれもかなわなかった。

極めつけは今日になってカリストの友人として2人の男が校舎にやって来たことだった。一目見ただけでただ者でないことはわかった。そのことを学園長に掛け合ってみたものの適当にはぐらかされてしまった。学園長を信頼しているとは言え、自分自身で彼らが敵でないことを確認するまではどうしても気が済まなかった。

故に刹那は覚悟を決め、男が1人で校舎を出ていったのを追ったのだった。

先回りして人払いの御札を広場に貼り、物陰に隠れて相手が来るのをじっと待っていた。

そして男が結界に入ってきた。

（来たか…）

「出てこいよ」

（っ！！気づいている！？）

男は気配を消していた刹那に気づいていた。刹那は驚きながらも物陰から身を出し、警戒して男に近き対峙した。そしてなるべく冷静な声を発した。

「初めまして。私は麻帆良学園本校女子中等部三年の桜咲刹那と言います」

相手の男も警戒している様子だった。漆黒の瞳が刹那を捉えた。男

は静かに、それでいて寧猛に佇んでいた。その大きな身体からは身を裂くような寒気が感じられた。刹那は男の発する雰囲気気圧に氣圧された。

（この威圧感…やはりただ者ではない！）

「俺はガニメデ。広域指導員をやっている者だ」

刹那はガニメデと名乗った男が言った広域指導員という単語に反応したが、すぐに鋭い視線に戻した。

「あなたに聞きたいことがあります」

ガニメデの視線は鋭く刹那を射抜いた。

「何だ？」

刹那も負けじと鋭い視線を送った。

「お嬢様…いえ、近衛木乃香という方をご存知ですか？」

そう問われたガニメデは怪訝そうに眉をひそめた。

「いや。聞いた覚えはない」

対する刹那は相手を観察するように見た。隙のない動作や発する雰囲気からやはり相当な手練れであると確信した。

「このかお嬢様は私の守るべき方、私はあなた方がお嬢様に危害を加える存在か否かを知りたい」

ガニメデはいつになく真剣な表情になった。

「そのお嬢様というのはお前にとって大切な存在なのか？」

逆に問われた刹那は迷わずに答えた。

「はい」

その返事を聞いたガニメデは途端に警戒を解き、いつものやる気の無い表情になった。

刹那が怪訝に思っているとガニメデは少し真剣な表情に戻った。

「安心しろ。俺達はお前らに危害を加えるつもりはない」

ガニメデは真っ直ぐに刹那を見た。

刹那はその態度の中に敵意が無いことを悟った。そして刹那も若干警戒を解き、相手を見つめ返した。

「その言葉、信じます」

それを聞いたガニメデは苦笑いした。

「そりゃどうも」

刹那の話は終わりとばかりにガニメデに背を向け去っていった。そうしてしばらくすると広場に人々が戻ってきた。未だに広場の中央に立っていたガニメデは、既に見えなくなった刹那の背中を見つめながら呟いた。

「随分張りつめてるみたいだが…そんなんじゃ本当に守るべきものを
守れなくなるぜ」

第6話「教師」

時を遡って数日前、カリストは学園長室にて新任の教師を待っていた。

「しかし、私に教師が勤まるかどうか…」

カリストは自信無さげに学園長に言った。それを聞いた学園長はお馴染みの笑い方をした。

「フオッフオッフオッフ。心配なのかな？」

「はい…」

弱々しいカリストに学園長は励ますように言った。

「安心せい。3－Aのクラスはみな明るく元気な生徒たちばかりじゃ。すぐに打ち解けられるじやろうて」

カリストは苦笑いした。

「すみません。せっかく頂いた役職なのにこの様な弱気で」

学園長は再び独特な笑い声をあげた。

「気にせんでよいぞ。誰しも初めて教師となる時は緊張するものじゃ」

「はい。ありがとうございます」

会話が一区切りついたところで学園長は真面目な口調で言った。

「ところでカリスト君。どうかねうちの木乃香とお見合いなどは…」
それを聞いたカリストは疲れたように言った。

「またですか学園長…何度も言いますが私のような者にそのようなことを言わないで頂きたい」

対する学園長はごまかすように独特な笑いをした。

その時、ノックが鳴り、英語科の教員のしずな先生と生徒2人、そして見慣れない赤毛の少年が入ってきた。生徒の一人は鈴の髪飾りでオレンジの長い髪をツインテールにしており、水色と紺色のオッドアイが特徴的な活発そうな少女だった。

もう一方は対照的に長い黒髪やおっとりした雰囲気から大和撫子をイメージさせる少女だった。後者は近衛木乃香という名前で、学園長の孫とのことだったが、カリストは外見の差から未だに信じられない気持ちだった。

そんなことを考えているとツインテールの少女の方が部屋に入ってくるなり学園長の前の机に駆け寄って、両手を叩きつけて怒鳴った。

「学園長先生！！高畑先生が辞めるってどういうことですか！！それにこのガキが先生って本当なんですか！？」

そう言って学園長の机の前までやってきておろおろしている赤毛の少年を指差した。

対して学園長は落ち着いた口調で応えた。

「少し落ち着きたまえアスナちゃん」

明日菜と呼ばれた少女はそれを聞いても勢いは止まらなかった。

「学園長先生！！答えてください！！」

そんな明日菜に学園長はどこか笑みを含めて言った。

「そうじゃ。彼がタカミチ君に変わって3－Aを担当するネギ・スプリングフィールド君じゃ」

それを聞いた明日菜は愕然とした表情になった。そんな様子を見ていたカリストは起伏の激しい少女だなと思った。しかしカリスト自身、新任の先生が子供と教えられたときには驚いたものだった。勿論彼らの考えに口出しできる立場ではなかったために黙って了解するしかなかった。そんな中、ネギと言われた少年は居心地が悪そうに学園長に尋ねた。

「あの…あなたが学園長先生ですか？」

学園長は笑顔を見せて答えた。

「いかにも。わしがこの学園の長、近衛近右衛門じゃ」

そう自己紹介をした学園長は急に真剣な表情になった。それを見たネギも畏まった。

「してネギ君。先生というのは大変なものじゃ。様々な苦労があるじやろう。それでもこれから先生をやっていく自信はあるかの？」

ネギは一瞬戸惑ったようだが、すぐに年不釣り合いに真剣な表情になり、大きな声で言った。

「はい！頑張ります！！やらせてください！！」

そんなネギを見て学園長は真顔から笑顔に変わった。

「よろしい！ネギ・スプリングフィールド先生。これからよろしく頼むぞい」

「はい！こちらこそよろしくお願いします！」

満足そうにひとしきり頷いた学園長は突然思い出したように言った。

「そういえばネギ君、住む場所は決まっておるかの？」

突然問われたネギは困った顔になった。

「そういえば決まってるんです…」

学園長はわざとらしくふと気づいたように言った。

「そういえばアスナちゃんは木乃香と同室じゃったのう」

今まで蚊帳の外だった明日菜は嫌な予感に顔を歪ませた。

「どうかの、ネギ先生を住まわせてやってはくれんかの？」

その発言に明日菜とネギはそろって驚愕の声をあげた。

「「えー！？」」

そんな様子を見て、カリストは実は相性が良いのではないか、と思った。

「嫌です学園長！！だいたいなんであたしがこんなガキンチョと一緒に住まなきゃなんないのよ！！」

「うちは別にええよ〜ネギ君かわええし〜」

「ちよつとこのか！？」

そこに同じく蚊帳の外だった木乃香が口を挟んだ。親友の思わぬ裏切りに明日菜は絶叫に近い叫び声をあげた。そんな中、カリストはますます自分に教師ができるのか不安になったのだった。

（確かに元気な生徒達だな…）

結局ネギは明日菜達の部屋に住まうことになり、明日菜達は教室へしぶしぶ戻って行った。学園長室には学園長とネギとカリストだけになった。学園長は若干声色を変えて言った。

「それではネギ先生に紹介しよう。彼はネギ先生の補佐をする副担任のカリスト先生じゃ。授業は国語を担当する。何か困ったことがあったら相談するとよいぞ。因みに彼も魔法関係者じゃよ」

それを聞いたネギはとたんに嬉しそうになってカリストを見た。

「はい！よろしくお願いします！」

魔法についても頼れる人が出来て純粹に喜んでいようだった。そんな様子を見てカリストも笑顔で応えた。

「こちらこそよろしく、ネギ先生」

そんなネギは今、3－Aの扉の前にいた。後ろにはカリストがいて、緊張でガチガチになっているネギを心配そうに見つめていた。

カリストは黒板消しなどの生徒が仕掛けたであろういたずらに気づいていたが、これもネギ君には勉強になるかなと考えて特に何も言わなかった。

「よし!!」

覚悟を決めたネギは勢い良く扉を開け、降ってきた黒板消しを魔法の障壁で空中に止めてしまった。魔法の隠匿を思い出したネギは慌ててその障壁を解除して黒板消しを頭に受けた。

「いやあゝ引っ掛かっちゃったなあ…アハハハ」

そうわざとらしく言って再び歩き出した。

―ガシャン―

「あうっ!!」

―バシ―

「うぎゃっ!!」

が、さらにバケツや玩具の矢などのトラップをことごとく受けて最終的に教卓に突っ込んだ。

それを見た教室中は笑いに包まれたが、しばらくすると引っ掛かったのが子供だと気づいたようだった。

「あれ？子供！？」

「ゴメンね…ボク大丈夫？」

「迷子なのかな？」

「キーンカワイイ〜！！」

その後ネギは愛玩動物のようにもみくちゃにされていたが、他のクラスメイトを押し退けて明日菜がネギの胸ぐらを掴んで言った。

「あんたさっき黒板消しになんかしたでしょ！なんかちょっとおかしくない？」

早くも魔法の漏洩という禁忌を犯しそうになっているネギを見てカリストはとりあえず助け船を出した。

「神楽坂、その辺にしておけ。皆もとりあえず席についてくれ」

いきなり言われた明日菜はカリストを訝しげに睨み付けた。

「そういえばさっきもいたわね。あんた誰よ？」

問われたカリストは軽く答えた。

「私は君たちの副担任だ。紹介は後ですからとにかく席についてくれ」

それを聞いた生徒たちはしぶしぶと言った感じで全員がとりあえず席に戻った。それを確認してカリストはネギに言った。

「ネギ先生、自己紹介を」

ネギは思い出したように言った。

「あ！はい！僕はネギ・スプリングフィールド、皆さんの担任になりました。教科は英語を教えます。日本には来たばかりですが頑張って魔ほ…じゃなくて勉強を教えていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします」

ネギが言い終わるとクラスは静かになった。ネギは内心失敗しちゃったかなと焦っていた。

が、次の瞬間、クラス中が悲鳴ともとれるほどの歓声をあげた。

「キヤーかわいいー！」

「先生なの！？」

「担任でこの子が！？」

カリストは思わずたじろいだ。

―バシンッ！―

その時、突然教室の扉が乱暴に開けられた。何かと思った時には先

程の歓声にも負けない程の怒鳴り声が響いた。

「やかましいいいいい!!」

扉の前では別のクラスの担任である新田先生が顔を真っ赤にしていた。高齢なのに元気そうだなとカリストは場違いなことを思った。その後新田先生にこっぴどくしぼられた3-Aはひとまず大人しくなった。

そして一番前に座っていた1人の生徒がおもむろに手を挙げた。それを見たネギは出席簿を見て言った。

「えーっと出席番号3番、朝倉和美さん」

当てられた生徒は後ろ髪がパイナップルのような髪型をしていた。

「はい。えーとネギ先生?みんな先生に色々と質問があると思いますが、新聞部であるこの私が代表して質問してもいいでしょうか?」

その発言に野次が飛んだがネギは名案とばかりに頷いた。

「そうですね。じゃあ朝倉さんをお願いします」

それを聞いた朝倉という生徒はいたずらが成功したような悪い笑みを浮かべていた。それを見逃さなかったカリストは密かに朝倉を頭の中のブラックリストに入れた。

「じゃあまずは…」

それからは質問の嵐だった。かなり際どい質問もありネギは精神的

に疲れ果てていた。

それを間近で見っていたカリストは、朝倉の質問から逃れる術を必死に考えていた。そんな中、ネギは弱ったように言った。

「ええと…とりあえず質問はもう終わりにしてください…次はカリスト先生、お願いします…」

爆弾を渡された気分のしたカリストだったが、ネギと入れ替わるようにして教卓に立った。

「私は君たちの副担任となったカリストだ。教科は国語を担当する。一応ネギ先生の英語の授業にも参加する。何かあれば気楽に話しかけてくれ」

ネギの場合とは異なり今度は、お〜という詠嘆の声が響いた。中には美形だ何だのと騒いでる生徒もいたがカリストは無視することにした。そして朝倉の質問が始まった。

「先生はやっぱり外国人？」

「まあそんなところだ」

「日本上手いですね」

「言語系は得意だからね」

「へえ〜他に何語話せるの？」

「一応ほぼ全ての言語は理解できる」

「すごっ!！」

「…そうでもないさ」

「いや凄いでしょ…まあそれは置いといて、質問続けていい？」

「どうぞ」

「好きな食べ物は？」

「蜜柑…かな」

「嫌いな食べ物は？」

「固形栄養食」

「…まあいいや、じゃあ今まで何人の女性と付き合いましたか？」

「…突然質問のレベル変わったな」

「まあまあ気にせず。で、何人なんですか？」

「そんな暇はなかったな」

「え!?!? じゃあ今までずっとフリーだったってことですか!?!」

「何を驚いているかわからないけど忙しくてね、本当に時間がなかったんだ」

「へえゝ意外」

「ありがとう」

「うっ…」

「どうした？」

「いや、その笑顔に自覚ないなら罪だね」

「褒められてるのか？」

「そう思っていていいですよ…じゃあ次は、好きな女性のタイプを教えてください」

「なんでそういう方面ばかりの質問なんだ…」

「いいから答えてください」

「自分の意思をしっかりと持った人だ」

「そうきたか…じゃあこのクラスの中で1人選ぶ…」

「その質問には答えられないな」

「チッ…じゃあ出身はどこですか？」

「君たちが知らないような遠いところだ」

「なんですかそのファンタジーみたいな…まあいいや。じゃあ特技や趣味はなんですか？」

「特技は射撃かな：趣味は料理だな」

「なんか意外な組み合わせですね」

「まあ質問はこんなところでいいかな？」

「少し物足りないけど」色々” わかったしいいですよ」

朝倉は”色々”という部分を強調したがカリストは特に気にしなかった。そうして質問は終わり、ネギが英語の授業を始めた。

が、その授業を一言で表すなら”混沌”だった。

明日菜と委員長である雪広あやかという金髪の少女が騒いでいるうちにチャイムが鳴ってしまった。

無念そうにしくしく泣くネギを慰めながら、カリストは深いため息をついたのだった。

（私はこのクラスの教師をやっていけるのだろうか…？）

第7話「交差」

イオは夜の森の中を歩いていった。木々の間に存在する闇が抱くように全てを溶かし込んでいた。

しばらく歩いていくと目的地の建物が見えてきた。それは森の中にひっそりと建っているログハウスだった。

イオは扉の前で止まると軽くノックをした。すると少ししてメイド服を身に纏った茶々丸が扉を開けた。

「お待ちしておりました。マスターがお待ちです。どうぞこちらへ」

そう言って中へ入って行く茶々丸に、イオは黙ってついていった。

建物の中はすっきりとしていたが、様々な種類の人形がどこか不気味に並んでいた。そうして居間に着くと茶々丸はソファアを示して言った。

「どうぞお座りください」

イオはそれに従って腰掛けた。向かいのソファアには可愛い服を着たエヴァがニヤケながらイオの動作を一部始終見ていた。

「お茶をお持ちします」

そう言うってお辞儀をした茶々丸は下がっていった。イオを見続けたエヴァはどこか上機嫌に口を開いた。

「よくきたな。まあ多少のもてなしくらいはしてやる…ククク」

イオは無表情でエヴァを見つめた。そんなイオにエヴァは不敵に笑

いかけた。

「さて、結界についてだったな。何処から話そうか…」

そう前置きしたエヴァはゆっくり話し始めた。

「まず結界の範囲だが、この学園をすっぽり覆う大きさだ。最近知ったが大量の電力を消費して張り巡らせているようだ。結界の中では高位の魔物などは動けないらしい。私も魔力を限界まで抑えつけられている。もっとも私の場合は登校地獄とかいうふざけた呪いを重ね掛けされてるがな」

イオは表情を変えずにエヴァに確認した。

「結界に使われている電力はこの学園からまかなわれているんだな？」

「そうだ。茶々丸に探らせてみたが電力が供給されなければ結界は維持できないらしい。特に年2回あるメンテナンスに伴う停電の間ならハッキングとかで結界を完全に消すことができるようだ…私が知っているのはこんなところだ。他に何か疑問はあるか？」

「いや、問題ない」

それを聞いたエヴァは興奮気味に身を乗り出した。

「そうか！では貴様の要件は終わりだな…次は私の要求に応えてもらおう」

顔を近づけてきたエヴァに対してイオは平淡な口調で応えた。

「了解した」

肯定を聞いたエヴァは再び尊大にソファーにもたれかかった。

「ではまず昔話でもしょうか。しばらく前のことだが、かつて闇の福音と恐れられていた私は、魔法世界の英雄である千の魔法を使う――まあとんだ大嘘だが――サウザントマスターという男と一騎討ちをした。結果、負けた私はやつに登校地獄などというふざけた呪いを掛けられた。この呪いは延々と学校に通わなければならなくなるというものでな、私はこの麻帆良から離れられなくなった。やつは卒業までには迎えに来て解呪すると約束した……」

そこでエヴァは言葉を区切った。重々しい沈黙の中、エヴァは続けた。

「だがやつは結局現れなかった。しばらくしてやつが死んだと聞かされた。お陰様で今に至るわけだ……だが、そんな生活もう終わりで。やつには息子がいてな、名前をネギ・スプリングフィールドという」

その名前を聞いてイオは僅かに表情を変えた。

「まだガキだが、やつ……ネギ・スプリングフィールドの息子だ。そしてネギ・スプリングフィールドの血縁者の血があれば登校地獄は解呪できる……もう言いたいことはわかるな？」

問われたイオは僅かながら眉をひそめた。

「ネギ・スプリングフィールドを襲う、ということか？」

対するエヴァは尊大な笑みで肯定した。

「そこでまず1つ目の要求だ。私の計画の邪魔をするな。貴様だけでなく貴様の仲間達もだ」

「了解した」

イオは抵抗なく答えた。もとより介入する気はなかったからだ。そしてそれを確認するとエヴァは続けた。

「そして貴様には魔力が戻るまでの間、私と茶々丸の護衛をしてもらう：なに、協力しろとまでは言わない、あんなガキに私が遅れをとるわけがないからな。ただ魔力が戻るまでは私はただの子供と変わらない：まあそれでも自分の身位は守れるが、もしもの時のためだ、いいな？」

イオは今度は少しばかり間をおいて言った。

「わかった」

さらにエヴァは続けた。

「では2つ目の要求だ。貴様達の正体を私に教えろ：ジジイにはごまかしているようだが私は騙せないぞ。嘘についても無駄だ：僅かばかり貴様の記憶を見せてもらおうか」

この要求にはさすがのイオも睨むような表情になった。その刺すような視線を受けてもエヴァは不敵に笑うだけだった。

「言ったろう？ 私は悪い魔法使いだ。それなりの対価は覚悟するのだな」

イオは睨むような視線を変えずに言った。

「なぜ知る必要がある？」

エヴァも変わらずに笑みを见せていた。

「私のように長い間生きているとな、退屈というのは大敵なんだよ。貴様達の存在に私は興味を持った、知りたいと思うのは当然のことだろう？」

しばらくエヴァとイオは見つめ合っていたが、イオはエヴァから視線を反らして無表情に戻った。

「やめた方がいい」

呟くように言ったイオにエヴァは怪訝な表情になった。

「貴様…要求をのめないというのか？」

対するイオは突然視線をエヴァに戻した。今までとは一変した何かを秘めた視線にエヴァは思わず息を飲んだ。イオはとても静かに語り始めた。

「我々の見たものは絶望だ。伸ばした手は決して受け入れられず、その手は何も救えない…我々のやったことはただ分岐の数を増やしたに過ぎない…そして今までやってきたことは無意味だったと知り絶望する。しかし我々にはそうするより手はない、いや、そうしな

ければならない：故にさらなる悲劇を呼び、その悲劇が悲劇を呼ぶ。我々にはもうこの循環から逃れる術はない：そんなものを貴女は見たいのか？」

語り終わった部屋の中に、声を発する者は1人もいなかった。

深い沈黙が続いた。イオは無表情で静かにエヴァを見つめ、エヴァはそんなイオを困惑した表情で見ることしかできなかった。

どれだけそうして時間が流れたか、突然第三者の声が響いた。

「ケケケ：オ前モ中々歪ンデンジャネエカ」

2人の視線が向かった先には不気味な西洋人形が置かれていた。

「黙っていると言っただろうチャチャゼロ」

エヴァは不満気にその茶々丸に似た人形に言った。するとその小さな人形が声を発した。

「イイジャネエカ御主人。コンナ面白ソウナ奴ハ早々居ルモンジャネエゾ」

イオは僅かに怪訝な表情でそのチャチャゼロという西洋人形を見た。そんな視線を察したエヴァはイオに言った。

「こいつはチャチャゼロ。私の初代従者だ」

「ケケケ：ヨロシクナ」

イオはエヴァを見た後、再びチャチャゼロを見て言った。

「イオだ」

「覚エトクゼ…ケケケ」

チャチャゼロは不気味に笑って応えた。そんな時、気まずそうな声がかかった。

「あの…マスター、お茶をお持ちしました」

茶々丸はトレイに2つのティーカップをのせてやって来た。イオとエヴァの前の机にそれぞれカップを置くと、茶々丸は再び下がっていった。目の前の紅茶を一口飲むと、エヴァは仕切り直すように言った。

「それで、貴様は記憶は見せないと言うわけだな」

「…そうだ」

「まあいい。貴様がそこまで言うなら深くは追及しないさ…ただ、その代わりに可能な範囲で貴様達の異端とかいう魔法について教えてもらおうか…まずは実際に何かやってみせろ」

言われたイオは少しの間考えるような素振りを見せた後に言った。

「可能な範囲でなら了承する。ただし、口外は慎んでもらいたい」

「わかった、闇の福音の名の下に約束しよう」

エヴァの約束を聞くと、イオはおもむろに立ち上がって右腕を前に

伸ばした。

「ジュピター起動」

イオがそう言うのとそれに呼応するよう合成音声が鳴った。

” バイオコード承認。命令了承、ジュピター起動 ”

イオの右腕をとりまく様に無数の立体ホログラムが表示された。エヴァは驚いたようだったが、イオはさらに続けた。

「同一時空間座標転移。指定座標、想念同期」

イオが指令を出すと合成音声はそれに応えた。

” 指令確認、量子化デコヒーレンス開始 ”

次の瞬間、エヴァの目の前からイオが消えた。そしてエヴァの背後から声がした。

「ここだ」

振り向くとそこには無表情のイオが立っていた。それを見たエヴァは思いだしたように言った。

「そうか今のはガニメデとか言った若造が使ったものと同じだな…瞬動だとばかり思っていたが、どうやら違うようだな…移動の時間差が全く無かった」

それを肯定する様にイオは言った。

「そうだ。タイムラグは一切ない：正確には移動したのではなく位置しただけだ」

エヴァは訝しむ表情になった。

「位置した：だと？」

「そうだ。移動というのはA地点に位置していた状態から、位置する空間を連続的に移していき、最終的にB地点に位置する状態になることをいう。だが、我々はA地点に位置している状態をB地点に位置している状態に書き換えることでA地点からB地点に移る。故に空間を経由していないためタイムラグは存在しない。つまり正確には移動したのではなく位置しただけだ。あらゆるものには存在確率があり、我々はB地点に自らの存在確率を収束させることでB地点に位置することができる」

それを聞いたエヴァは驚愕の表情になった。

「貴様達はそんなことが可能なのか!？」

「今見せた通りだ：逆に1つ頼みたい。魔法を実際にやってみせてほしい」

エヴァは信じられない心境だったが、イオの頼みを聞いて頷いた。

「いいだろう。ただ、今の私では満足にできない。ついて来い」

そう言うときエヴァは地下室へと向かって行った。イオも後に続いた。少し歩いた後、エヴァはビンが置いてあるテーブルの前で止まった。

よく見るとビンの中にはミニチュアの建物が入っていた。

「では行くぞ」

エヴァがそう言った瞬間、イオの視界が真っ白になった。

気づくと見知らぬ場所にいた。

「ここは私の別荘だ。さっきのビンの中の世界だ」

エヴァは自慢気に言い放った。見回すと、広場のような場所だったが、その高さが尋常ではなかった。見下ろせば海が広がっており、雲が近く感じるほどの高さの場所に広場が存在していた。前を見ると白い神殿のような大きな建物がそびえ建っており、広場から橋のように通路が繋がっていた。その通路には柵などではなく、一歩踏み外せば海へ落ちて行き、命の保証はできない状態だった。そんな場所をエヴァは平然と歩いていった。イオもそれに従って歩いていった。

神殿のような建物の回りは砂浜になっており、海に囲まれていた。さながら南国の楽園といったイメージだった。

「この辺でいいだろう」

建物の外縁部にある広いテラスのような場所に来た時、突然エヴァはそう言ってイオに振り向いた。その顔は獰猛な笑みになっていた。次の瞬間、エヴァはいきなり空中に浮遊した。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、氷の精霊17頭、集い来たりて敵を切り裂け！『魔法の射手・連弾・氷の17矢』！！」

詠唱によってエヴァを取り囲む様に現れた17の鋭い氷塊がイオに向かつて放たれた。驚いたイオはとっさに右腕を前に伸ばした。

「情報障壁展開！！」

あと僅かで直撃というところで、イオの前に青白く輝く幾何学模様を刻んだガラスのような半透明の壁が現れた。

次の瞬間、魔力の矢はその壁に次々に直撃して爆発した。全てを防いだところでイオは空中のエヴァに向かつて鋭い視線を送った。

「何のつもりだ？」

第8話「空間」

「何のつもりだ？」

鋭い視線で言うイオに対してエヴァは不敵に笑った。

「この別荘には魔力が満ちていてな。ここならば私も魔力不足になることはない。魔法を見たいと言ったのは貴様だろう？それに仮にも真祖の吸血鬼であるこの私の護衛をやるんだ、実力を確認するのは当然だろう：だいたいその魔法障壁は何だ？見たこともないぞ。それも貴様達の魔法か？」

イオは視線を反らさずに答えた。

「この世界という魔法障壁というものではない。これは万物が持つ情報場という情報を自動記録する高次元の場の一部を、振動数を減衰させることで物理次元に現出させたものだ。つまり情報場の障壁、情報障壁だ」

その説明を聞いたエヴァは興味深そうにイオの展開している障壁を観察した。

「ほう：情報障壁か。私にも使えるのか？」

問われたイオは考えるような仕草をした。

「おそらく無理だろう。これは高度演算素子と振動コアを身体に組み込んだからこそできるものだ。生身の人間：例えば吸血鬼でも無理だろう」

それを聞いたエヴァは怪訝な表情になり、低い声で言った。

「お前：そんなものを体の中に入れたのか？」

イオはエヴァから視線を反らした。

「自分の意思ではない」

平然と答えるイオを見てエヴァは怒鳴るように言った。

「それでいいのか！？お前は憎しみを抱かないのか！？」

対してイオは態度を変えずに答えた。

「必要なことだった。もとより俺はそのための存在だ」

それを聞いたエヴァは怒りを爆発させた。

「ふざけるな！！自分の人生を奪われたんだぞ！！何でそんなに平然と答えられる！？つらくはないのか！？苦しくはないのか！？悔しくはないのか！？」

イオは視線をエヴァに戻して言った。

「何故それほどに激情する？これは俺の問題だ。貴女には関係ない」

エヴァは怒鳴ろうとしていたのを抑えて唇を噛んだ。

「確かにそうだな…これはお前の問題であって、私がどうこう言え

るものではなかったな…許せ」

イオは僅かに表情を和らげた。

「貴女もつらい目にあつたのだな…」

それを聞いたエヴァはビクツと震えた。

「吸血鬼であるということ様々な扱いを受けたのだろう…」

エヴァは再び激情した。

「お前に何がわかる！？わかったように言うな！！」

しかしそれは肯定しているも同じ態度だった。イオは続けた。

「何もわからない。誰しも他人の心を完全に理解することなどできない…ただ、理解しようとすることには意味がある。俺は貴女が悲しむのを見たくない。だから理解しようとした、それだけだ」

エヴァは胸のうちから込み上げてくるよくわからない感情を抑えて言った。

「勝手にしろっ！！」

イオはさらに続けた。

「貴女は優しい人だ」

そう言われたエヴァは怒っているのか泣いているのかわからない表

情になった。

「な、何を言う！？私は悪い魔法使いだ！！何人も手にかけてきた！そんな私が優しいわけがないだろ！！」

イオはエヴァをじっと見つめた。

「でも貴女は望んでそうしたわけではないだろう。それに悔やんでいる：俺は貴女よりも遥かに罪深い。数え切れない世界線を、そこに生きている存在ごと消滅させてきた：間違っていたとは思われないが悔やんではいる」

エヴァはイオから視線を離すことができなかった。

「それに：他人の不遇を必死に代弁した貴女の姿はとても美しく愛しいと感じましたよ」

イオはそう言って、初めて笑顔を見せた。その笑顔は柔らかく、とても儚いものだった。エヴァは顔が赤くなるのを隠すようにイオに背を向けた。

「ふんっ：勝手に言ってろ」

そう呟いたエヴァは、込み上げてくる感情に悪い気はしなかった。

（全く：なんでこんな若造ごときに私が狼狽えねばならんだ！！）

ガニメデは今日も広域指導員として夜の麻帆良を歩き回っていた。

「まったく：暴れんならもうちっと強くなってからにしろってんだ」

不満そうに言う彼の回りには先程まで暴れていた男達が倒れていた。その人の山に背を向けてさらに歩いて行った。そして次のターゲットを探そうと夜の街路を歩いていた時だった。

前から3人の人影が近づいてきた。お互いの姿が分かる程度に近づいたところで3人が道を塞ぐように立ち止まった。ガニメデも同じように立ち止まり対峙した。

「あんた、近頃デスメガネと同じくらい強くて暴れ回ってる広域指導員って噂されてるやつだよな？」

そう言ったのはリーゼントに学ランという個性的な見た目の青年だった。

ガニメデは面倒くさそうに答えた。

「ああ多分そうだな」

肯定すると今度は隣にいた中華風の服装の青年が口を開いた。

「そうか、実はお前に用があったな。俺達の仲間の大豪院ってのがあんたの世話になったみたいなんで、その礼をしにきた」

さらに残りの1人が口を開いた。

「あいつは頑丈だから怪我したわけじゃないんだがな、武道家としては仲間が倒されたんだからやることはやらないとな」

そう言った肩を露出した服を着た金髪の青年が一步前に出た。それを合図とばかりに残りの2人も拳を構えた。そんな様子を見て、ガニメデは笑みを浮かべた。

「いいぜ、かかってきな」

挑発された3人は一斉にガニメデに向かってきた。

まず金髪の青年が殴りかかってくるかと思ったら、流れるように腕を絡ませてきた。

「くっ！」

その独特な動きによってガニメデは体勢を崩されそうになったが、絡ませて来た腕を逆に自分の方へ引き寄せ、空いている反対の腕で青年を殴りつけようとした。

「おらっ！」

金髪の青年は驚いた顔をしたが、とっさに自分も空いている方の手でガニメデの拳を受け止めた。

「うっ…」

が、力を受け止めきれずによろめいた。

「もらったあ!!」

そこへガニメデが追撃しようと踏み込んだ。

「烈空掌!!」

が、中華服の青年が掌から気の弾を放ってきた。

「チッ：」

ガニメデは横に回避したが、その隙に金髪の青年は体勢を整えていた。

「喰らえ!」

さらにリーゼントの青年がガニメデの後ろへ回り込み、背後から殴り飛ばそうとした。

―バシン―

「甘いな」

それを受け止めたガニメデは、相手の腕を掴み、反撃しようとしてきた金髪の青年に向かって、あろうことかリーゼントの青年を自分を中心にコマのように回転して投げつけた。

「おらぁあぁっ!!」

怒声をあげながら相手を投げ飛ばしたガニメデは投げた相手を確認もせずに、再び気弾を打とうとしていた青年に向かっていった。青年はすぐに迎撃しようとしたが、ガニメデの速さは異常で、気づけば街路樹に打ち付けられていた。

「ぐぁっ!!」

リーゼントと金髪の青年は互いに衝突して重なるように倒れていたが、仲間の苦悶の声が聞こえると立ち上がってガニメデに殴りかかった。

「中村!! くそっ…この野郎!!」

が、突然目の前でガニメデが消え、気づけば背後から金髪の青年が吹き飛ばされていた。

「うっ…」

「何!？」

最後の1人となったリーゼントの青年は唾然としていたが、ゆっくり歩いてくるガニメデを見ると闘志を燃やした。

「やってくれるぜ…喰らえ!! 極漢魂!!」

そう言って突き出した両手から太い気弾をガニメデに放った。

「んなもん効かねえよ」

が、ガニメデは回避すらせずに腕でその気弾を弾いた。

「なっ!?! バカなっ!!」

ガニメデはゆっくりと近づいてきた。

「お前はその力に頼りすぎだぜ。まあ中々良い筋してるよ。久々に

楽しめたぜ」

そう言うガニメデの表情は野性的な笑みを浮かべていた。そして次の瞬間にはリーゼントの青年も宙を舞っていた。

ネギ・スプリングフィールドは焦っていた。それはイオがエヴァの知り合いだったと知り、ネギの使い魔となったアルベール・カモミールがこう言ったからだった。

「兄貴、あのイオって野郎は絶対エヴァンジェリンの仲間ですぜ」

「そんな…でもカモ君、イオさんはカリスト先生の友人なんだよ？」

カモと呼ばれた白いオコジョ妖精であるカモミールはネギの肩の上でネギに囁いた。それを聞いたネギは慌てていた。

「俺っちはそのカリストの野郎も敵じゃないかと思ってますぜ」

ネギは顔面蒼白といった様子になった。

「そんなっ!？」

「だから兄貴、ここはアスナの姐さんに仮契約を頼むしかないっすよ!」

ネギは慌てて言った。

「ダメだよカモ君！アスナさんは巻き込めないよ！」

「何言ってるんすか兄貴！このままじゃエヴァンジェリンの奴にやられちまいますよ！ここは戦力を整えないとヤバいつすよ！」

「でも…」

「大丈夫すよ兄貴、アスナの姐さんも協力してくれますって」

「…うん」

「そうと決まれば早速姐さんのところに行きましょうや」

その後、明日菜に承諾を得て、カモはネギと明日菜を囲う様に地面に魔方陣を描いた。魔方陣から蠟燭ほどの明るさの不思議な光が発生した。

「な、何この光…なんか変な感じがする…」

明日菜は若干顔を赤らめて呟いた。その呟きにカモミールは機嫌よく答えた。

「この光は相手への好意を増幅させる効果があるんすよ。さあさあ兄貴と姐さん、軽くぶちゅーっと」

それを聞いた明日菜は驚きの表情になった。

「えー！？それってキスしろってこと！？」

カモミールはさも意外と言った表情になった。

「あれ？ 姐さんには言ってやせんしたっけ？」

「聞いてないわよ！ 別の方法にしないよ！！」

「いや…他ののはちょっとまだ早い気が…まあとにかくキスが一番手っ取り早いんすよ姐さん。ここは兄貴のためと思って！」

明日菜は視線をネギに送った。ネギも顔を赤くして明日菜を見つめていた。そんなネギと目が合った瞬間、明日菜はさらに顔を赤くした。

「アスナさん…」

「ええいもうわかったわよ！！」

そう言って明日菜はネギのおでこに唇をつけた。

「ちょ姐さん！？ おでこってそんな中途半端な！ まあいいか 『仮契^{バクテイ}約^オ』！！」

カモがそう言うときまぶしい光に溢れ、すぐに収束した。そして明日菜が描かれた1枚のカードが現れた。

「そのZPFというのは何なのだ？」

エヴァの別荘は1日しないと外に出られず、ここの1日は外の1時

間に相当すると聞いて外に出るのを諦めたイオはエヴァに誘われてダイナーの席についていた。

長い机の向かいに座ってエヴァはイオに質問を投げ掛けていた。

「Zero Point Field。世界に遍在する場、万物はこの場の中に存在する。今も貴女やこのテーブルや椅子や建物、宇宙の果てにまでZPFは存在している。空間そのものと言ってもいい。そしてZPFにおいて万物は常に影響し合っている」

それを聞いたエヴァは考えるように顎に手を添えた。

「つまりは私達の言うところの世界に存在する魔力のことか？」

イオも考える仕草をした。

「貴女方の魔法と魔力の定義を教えてほしい」

エヴァはおもむろに答えた。

「大気に満ちる自然エネルギーを精神の力と術法で人に伝える、それが魔法であり、その自然エネルギーが魔力だ」

それを聞いたイオは納得したようだった。

「なるほど、理解した。大気に満ちるといえるのは遍在するZPFを間接的に表したものだろう。ならば自然エネルギーである魔力というものはZPFではなく、ZPEのことを示していると思われる」

エヴァは難しい顔をした。

「ZPE? ZPFとは違うのか？」

「Zero Point Energy。ZPFが持つエネルギーのことだ。つまり空間に存在するエネルギーだ」

エヴァは納得できない表情になった。それを見たイオは言った。

「1つ質問だ。空間からそこに存在するあらゆるものを排除した場合、どうなると予想する？」

エヴァは腕組みをした。

「何も残らないのではないか？」

その答えを聞いたイオはすぐに言った。

「不正解だ。そこには沸き立つ場が存在する」

エヴァは眉をひそめた。

「沸き立つ場？」

「そうだ。量子揺らぎとも言う。仮想粒子が対生成しては対消滅している」

「何もないはずなのになぜ粒子が存在する？何もない場所から突然粒子が現れるなんてことはありえるのか？」

「可換でない演算子は両方の物理量を同時には測定できない為だ」

エヴァは眉をひそめた。

「意味がわからん……」

それを聞いたイオは少し考えるような仕草をしてから再び口を開いた。

「ミクロな領域において、エネルギーと時間には不確定性原理が働く。これはエネルギーと時間の一方を正確に計ろうとするともう片方の不確かさが増大するというものだ。つまり僅かな時間であれば空間におけるエネルギーの不確かが増大し、莫大なエネルギー値をとることができる。その空間エネルギーがZPEだ。そして何もないように見える空間自体が莫大なエネルギーを持ち、それが静止質量に変換されることで何もない空間に質量が発生する」

その説明を聞いたエヴァは首を傾げた。

「エネルギーが質量になるのか？」

イオは相変わらず平淡な口調だった。

「エネルギーと質量は本質的に等価だ。静止質量エネルギーは、その質量に光速の2乗を掛けたものだ。式で表すなら $E = m \times c^2$ だ。左辺のエネルギーと右辺の質量が光によって統一されている。つまりエネルギーと質量は等価だ。この式の本質はここにある」

エヴァはその説明に驚愕すると共に舌を卷いた。そして改めてイオとその知識に興味を持ったのだった。

第9話「理解」

「貴女方にとって詠唱や魔法を使う行程はいかなるものか教えてほしい」

イオに尋ねられたエヴァは自慢気に話し始めた。

「魔法を使う為には、魔法発動体―すなわち杖や指輪など―それが自己と世界を繋ぐ扉であり橋であると身体的感覚として理解することが重要だ。詠唱、つまり呪文は言葉そのものの力、言霊の意合いがある」

イオは無表情ながら納得したようだった。

「理解した。我々は量子端末と振動コアを用いて、ZPFに自己の振動数を同期させる。それによって自己をZPFに接続し、ZPEを使用する。対して貴女方は発動体と詠唱を用いて、世界：つまりZPFに自己を接続しZPEを魔法という形態で使用している、という予想ができる」

エヴァも納得した表情となった。

「成る程な：つまりお前達は魔法を使う時に詠唱をしないのか？何度かよくわからない言葉を発してしたと思ったのだが：情報障壁とやらを発動させる時も言葉を発していたよな？」

エヴァは興味深そうに尋ねた。

「我々は基本的にエネルギーである想念と量子端末を同期させた後、

振動コアを用いて増幅させている。そうして想念をZPEとして実体化させるのだが、音波というエネルギーである言葉を用いることで想念を強化し、より強力なZPEの行使が可能になる。つまり、情報障壁は想念により高次の場を現出させたものだが、発声を伴うことでより強力な障壁となる：貴女方の詠唱も想念を増幅させるものだろう」

イオは流れるように説明した。

「では、発声無しの情報障壁だと私の放った『魔法の射手』は防げないのか？」

「いや、本来ならば容易に防ぐことができる：が、現在は結界の影響でZPEへの接続が妨害されている。そのため出力が全体的に減少してしまっている」

「ほう：だから結界について聞いてきたのだな：因みに私の放った『魔法の射手』はどう説明される？」

「観測した結果では、まず詠唱と魔法発動体によって貴女の想念が増幅されZPEに繋がった。次に接続したことでZPEより想念によってZPEが使用可能になった。最後にZPEが静止質量に変換され氷塊となった。それをZPEにより加速させて放った、と予想される」

「：：そうか」

エヴァはそう考えるように呟いた。

「それにしてもお前達は本当に何者だ？いくら異端とは言え、あま

りにも厳格に体系化されていないか？」

イオは視線を机に落とした。

「…それについては発言できない」

エヴァはその返答を気にした様子はなかった。

「まあいいが、私にここまで教えてよかったのか？」

イオは視線をエヴァに向けた。

「それに関しては問題ない。既存の知識の枠から予想される範囲を逸脱しないレベルでしか話していない。万一広まった場合に関しても、我々の理論を真に理解することは不可能だ」

相変わらず無表情で話すイオにエヴァは鼻を鳴らした。

「ふん。まあいいさ。それより食事を楽しもうじゃないか」

そう言ってエヴァは目の前の食事を食べ始めた。イオはそんなエヴァをどこか別の何かを見るように見つめていた。

翌日、エヴァはイオを学校に呼び出していた。痛い視線を受けながらイオは校舎には入らずに校門の前でエヴァを待っていた。しばらく待っているとエヴァと茶々丸が校舎から歩いて来た。

「早いな」

会うなりエヴァは意外そうに言った。

「要件は何だ？」

対してイオは平淡な口調で言った。

「私はジジイに呼ばれていてな。その間、茶々丸を護衛していてほしい」

それを聞いたイオは茶々丸を一瞬見た。茶々丸は軽く頭を下げた。

「わかった」

短く承諾したイオを見てエヴァは満足そうだった。

「終わったら私から連絡する。それまで頼むぞ」

そう言い放ったエヴァは再び校舎に戻っていった。それを見送った2人はしばらく沈黙していたが、茶々丸が思い出したように言った。

「それではよろしくお願いします、イオ様」

イオは変わらず無表情だった。

「了解した」

「まずは食事の買い物に行ってもいいでしょうか？」

「問題ない」

ガイノイドの茶々丸と無表情を貫くイオの会話はどこか不思議なものだった。

その後、イオと茶々丸は買い物を終えた後、茶々丸が行きたい場所があると言うので2人で町を歩いていた。

その途中、茶々丸は木にかかった風船を見て泣いている子供に、その風船をブースターを使って取ってあげたり、階段を登っているお年寄りをおぶってあげたりと様々な人助けをしていた。

そんな様子をイオは相変わらず無表情で見ていた。そして目的地に着くと、茶々丸はイオが持っていたスーパールの袋から缶詰めを取り出し、集まってきた野良猫達に食べさせていた。

そんな光景をイオは遠い何かを見るように見つめ続けていた。

「…貴女も優しい方だ」

急に呟いたイオを茶々丸は驚いたように見た。それを見たイオは言った。

「…すまない。気にしないでくれ」

謝罪するイオに茶々丸は言った。

「いえ…ありがとうございます…」

そうしてまた静寂が訪れた。2人を中心に静かな時間が流れていた。しかし、その静寂は突然第三者の登場によって破られた。ネギと明日菜が建物の裏から現れたのだった。それを見た茶々丸は立ち上がり、ネギに向かって言った。異変を察したのか猫達は散って行った。

「ネギ先生、油断しました。神楽坂明日菜さん…良いパートナーを選びましたね。ですがお相手します」

そう言われたネギは何処か申し訳なさそうに言った。

「あの…茶々丸さん。僕を狙うのはやめてもらえませんか？」

対する茶々丸はすぐに答えた。

「マスターの命令は絶対ですので…すみません」

ネギは残念そうだった。

「うう…わかりました」

そう言うネギは1枚のカードを取り出して唱え始めた。

「『契約執行、60秒、ネギ・スプリングフィールドの従者、神楽坂明日菜』！」

「茶々丸さん…ごめん！」

そう言う明日菜は茶々丸に向かって突進してきた。その速さは常人の域を越えていた。そして茶々丸にあと少しというところで何かにぶつかったように弾かれた。

「いった〜！何？」

明日菜が前を見ると、明日菜と茶々丸を隔てるように蒼く光る幾何学模様の壁が現れていた。

それを見たイオを除いた全員が驚愕していた。

「魔法障壁！？兄貴！やっぱりあいつはエヴァンジェリンの仲間だぜ！」

ネギの肩に乗っているカモはイオを指して言った。対するイオは情報障壁を解除してゆっくりと茶々丸の前に歩み出た。そして振り返らずに言った。

「ここから離れてマクダウエルのところへ行け」

茶々丸は渋る仕草を見せたが、お辞儀をするとバーニアを噴かせて飛んでいった。それを確認しないうちにイオはネギを見てゆっくりと右腕を伸ばした。

「俺が相手をする…ジュピター起動」

イオがそう言うのとそれに呼応するよう合成音声が鳴った。

”バイオコード承認。命令了承、ジュピター起動”

イオの右腕をとりまく様に無数の立体ホログラムが表示された。

「ヤバイ！来るぜ兄貴！！」

カモが叫ぶとネギと明日菜は思い出したように動き出した。ネギは詠唱を始め、明日菜は目の前のイオに向かっていった。

「同一時空間座標転移。指定座標、想念同期」

明日菜の攻撃をかわしながらイオが指令を出すと合成音声はそれに応えた。

”指令確認、量子化デコヒーレンス開始”

「あ…」

次の瞬間、ネギの目の前には無表情に佇む灰色の髪の少年がいた。その手には蒼く輝く光刃の剣が握られていた。ネギは詠唱も忘れ、呆然と自身の首に突き付けられたレーザーブレードを見つめていた。漆黒に染まった長方形の柄から真っ直ぐに伸びたガラスのような青い刀身は、獲物を待ちわびているように静かに光を発していた。そしてイオはネギを見つめて言った。

「俺はエヴァンジェリンの仲間ではない…が、危害を加えるつもりならばそれなりの対処をする」

そう警告した後、レーザーブレードの刃はそこに何もなかったかのように消えた。そしてイオは黙ってネギ達に背を向けた。その後ろ姿を引き留める者はいなかった。

カリストはため息をついた。

「…だから君たちは生徒なんだから」

「ケチケチしないアルよ！」

「そうでござる。一戦交えるだけではないでござらぬか」

「いや…君たち人の話し聞いている？」

「聞いたら戦ってくれるアルか!？」

「おおさすが先生、太っ腹でござるな」

「……」

カリストは先程から対戦を執拗に申し込んでくる古菲と長瀬楓という忍者風の口調の少女になんとか諦めるように説得していたが、結果は報われなかった。

「…まあ今度な」

「ほんとアルか!？やったアル！」

「約束でござるよ」

嬉しそうにする2人を見てカリストは誰かさんに似てるなと思って微笑んだ。そこへ小学生かと思う程幼い外見の双子がやって来た。

「カリちゃんこんにちは」

「先生、こんにちは」

「ああこんにちは」

双子は見間違えるほどよく似ており、カリストはいつも名前を間違

えそうになっていた。そしてなぜか異常になつかれていた。
姉の風香はかなり活発で、カリストも何度かいたずらされていた。
それに比べて妹の史伽は大人しい性格だった。

「鳴滝風香、その名前で呼ばないでくれと言ってるだろう…」

「いいじゃん。先生と僕の深い仲じゃんか」

「…誤解を招く発言は慎んでくれ」

「じゃあ先生も僕のこと風香って呼んでよ」

「本来ならば名字で呼ぶのだが、それでは君たちを区別できないから鳴滝風香と呼んでいる…これでも譲歩しているんだ」

「まあそんなことよりちょっと来て！」

そう言うとき風香と史伽はカリストの手を引っ張って行った。
それを見送った楓と古菲は茶化すように言った。

「カリスト殿はモテモテでござるな」

「此方のは渋ってたのにずるいアル…ああいうタイプが好みアルか…？」

「…それで、私はなぜ君たちにパフェを奢っているのかな？」

ため息交じりに言ったカリストは、双子に連れられてカフェに来ていた。初めはさんぽ部の2人が麻帆良を案内してくれていて、麻帆良をよく知らないカリストには有難かったが途中から双子の目的が変わったようだった。

「案内料だよ案内料♪」

風香は満足気に食べていたが、史伽はどこか気まずそうに食べていた。そんな双子を見てカリストは言った。

「確かに色々教えてもらったからな。いいぞ、奢ってあげるから安心して食べる」

それを聞いた史伽はどこか安心したように笑顔になった。

「はい！ありがとうございます」

そう言うと史伽はバクバクと食べ始めた。そんな様子にカリストは微笑んだ。

「むー先生史伽にだけ優しくない？」

それを見た風香はむくれて言った。

「はいはい、風香も食べていいぞ」

そう言ってカリストは風香の頭を撫でた。それで風香は満足そうになった。その様子を見てカリストはさらに微笑んだ。

その夜、ガニメデとイオは学園長から呼び出されていた。2人とも初めてこの世界線に来た時の、青い幾何学模様のある白いコートを着ていた。

「夜分急に呼び出してすまなかったの」

「別にいいぜ、んで緊急の要請とは何事だ？」

ガニメデの問いに学園長は少し口調を変えた。

「実はの、西洋魔術を快く思わん輩が関西には数多くいての…その者達の中には魔法と同じ力をもつ者がいるんじゃ。そんな輩が魔法使いのいるこの麻帆良を襲撃することがあるのじゃが…」

「要は今そいつらが攻めてきていると」

「そうじゃ。既に魔法先生や魔法生徒が向かってくれてるがの、お主達にも手伝ってもらいたいんじゃ」

「いいぜ、楽しそうだ」

「了解した」

不敵に笑うガニメデと無表情で了解するイオを見て学園長は頷いた。

「うむ、頼むぞい」

そして簡単に状況の説得がされた。敵は善鬼などの異形を召喚し、

北と南の二方向から同時に攻めてきているとのことだった。ただ、いつもと異なり、数が多いために人員不足がひびいてきたようだった。そしてイオとガニメデはそれぞれ北と南に分散することになった。

学園長室から出たガニメデに向かってイオは諭すように言った。

「ガニメデ、第二段階以上は解放するな」

ガニメデは鼻を鳴らした。

「はっ、言われずともわかってら。第一段階とジュピターさえあれば充分だ」

「結界の範囲も忘れるなよ」

「はいよ。んじゃ先行くぜ！」

そう言うとガニメデは待ちきれなかったように去って行った。そしてイオも目的地へと向かった。

第10話「防衛」

失ったものは戻らない

そう

決して戻らない

守れなかった

救えなかった

そんな悔しさや悲しみはとうに越えてしまった

あるのは自分たちから全てを奪った《世界選択機関》に対する復讐
心のみ

奴らを破壊し尽くすまでこの憎悪は消えることはないだろう

いや…それでも足りない

奴らの全てを破壊しなければ駄目だ

いや…それでも足りない

奴らの分岐した世界線全てを消し去らなければ

いや…それでも足りない

結局、シアを失った時点で全て足りないのだ

世界から色が消えたんだ

全てに意味がなくなつた

そう、自分の存在ですら

ただ、奴らに復讐するまでは意味を与えられる

奴らは許せない

シアを救えなかった自分も許せない

本当はそんな自分が一番憎いのだろう

だが：まだ消えるわけにはいかない

奴らに同じ苦痛を与えるまでは

そして

イメリア：いや：イオ

奴—自分自身を

…消し去るまでは

[illegible]

「全く：撃っても撃ってもきりが無い。これは追加報酬を貰う必要があるね」

そう言いながら長い銃身のスナイパーライフルを撃っている、褐色の肌で長い黒髪が映える容姿の女性がいた。とても中学生には見えない彼女は龍宮真名といい、信じられないことに中学生だった。

「それにしても今回は数が多いな…」

そう言いながらも引き金を引く指は全く休むことはなかった。いつまでそうしていたか、急に射程範囲まで近いてくる異形の数がなくなった。

「おや？刹那がやったのか…それとも罠か？」

そして彼女は事態の確認をするために森の中を進んだ。適当な場所に伏してライフルのスコープを覗いた。

「っ！？何だあれは！？」

そして驚愕の声をあげた。

「一体誰が戦っているんだ？」

スコープ越しには、数え切れない程の異形達は何者かに一瞬で還されていく光景が映っていた。

ガニメデは現地の森に着くなり目の前に広がる光景に野蛮な笑みを見せた。

「こいつは楽しめそうだ」

そこには召喚された数々の鬼や鳥族などの異形が迫ってきていた。

「…なんや兄ちゃん、たった一人かいな？ わいらも舐められたもんやのう」

外見とは裏腹にフレンドリーな口調で、ある鬼が言った。周りの異形達もガニメデを見るなり笑い声をあげた。そんな異形達にガニメデも笑いを深めた。

「おいおい頼むから油断とかすんなよ？ 全力で来い」

そんなガニメデに異形たちはまだ笑っていた。

「なんやて？ 兄ちゃんこそ怪我する前に逃げたらどうや？」

ガニメデはこらえられなくなったのか、天を仰いで狂ったように笑い出した。

「ふはははははっ！！」

それには異形達も警戒を強めた。ガニメデはひとしきり笑うと、異形達に向かって冷たい笑みを浮かべた。その迫力には異形達も冷や汗を浮かべた。

「…油断すんなったよな？」

次の瞬間、その場からガニメデは消えた。それに異形達は驚愕したが、気づいた時にはいままでガニメデと会話していた鬼の上半身と下半身が別れていた。その背後に、ガニメデが腕をふりかぶっている体勢で佇んでいた。その腕は緑色の光を発していた。そのままその鬼は欠片さえ残さずに還された。

「お前ら、やられても還されるだけで死にはしないんだってな…だったら加減とかしねえから覚悟しな」

そして反応する暇もなく次々に異形達は還されていった。それはさながらガニメデの一人舞台のようだった。ガニメデは既に”第一段階”を解放しており、その動きは誰にも捉えられなかった。一切のタイムラグ無しで”位置して”いた。そう、ガニメデは一切動いてはいなかった。ただ別の場所に”位置して”いるだけだった。

その頃、イオも現地へ到着していた。

「目的地に到着、戦闘を開始する。ジュピター、これより言語指令から想念指令に同期しろ」

それに応えるように合成音声があった。

”指令確認。以下、指令を想念に同期”

端末が合成音声でそう報告する前に、前方から異形達が現れた。1体が現れると、ぞろぞろと見える範囲で数にして50ほどが現れた。

「おやおや。魔法使いと聞いて来てみれば、1人だけじゃないかい……少し遊んであげましょうか？」

先頭にいた女狐の姿の異形が妖艶な声でイオを挑発した。それには反応せずに、イオは漆黒の”柄だけ”の刀を取り出した。それを見た異形達は一斉に笑い出した。

「なんだそれはっ？」

「刃の無い刀で我らに齒向かうとは笑えるのう」

「坊や、それじゃあ私たちには勝てないわよ……フフ」

しかしイオは無表情で言った。

「……刃ならあるぞ」

そう言った瞬間、漆黒の柄から蒼い刃が生えた。それには異形達は揃って警戒した。

「そんなん見かけ倒しやっ!!」

そして何体かの鬼達がイオに襲いかかった。

始めの1体は棍棒を乱暴に振り下ろした。が、イオは潜るようにかわし、通りすぎ様にレーザーブレードで鬼の腕を切り落とした。

「ぐああ!!」

そして体勢を崩した鬼をさらに両断した。そうして1体目は跡形も

なく還された。

「そこや!!」

イオが止まった所を狙って別の鬼達が棍棒を振ってきた。

ーブー

が、そこには既にイオは居なかった。

そして気付けば突然視界の外に現れたイオに一刀両断されていた。イオはブレードを直前まで消しており、切断する瞬間だけブレードの刃を出現させていた。その独特の一閃には直前まで間合いを計らせないという意図があった。実際、直前まで見えない刃に加え、瞬間転移するイオの動きに異形達は完全に翻弄されていた。

夜の闇の中、イオの蒼い一閃が一定間隔で光る光景はいつそ幻想的とも言えた。そして僅かな時間で女狐が従えていた鬼達は全て還されていった。残った女狐は驚愕の表情でイオを見た。

「坊や…随分と強いよね」

イオはそれに応えず無言で構えた。

「強い子は好きよ…でも私にも矜持があるの」

そう言った女狐は御札を出した。その瞬間、女狐はイオの視界から消え、背後に現れた。

「くっ!!」

イオは咄嗟にその場から転移した。イオが居た場所には短剣を持っ

た女狐がいた。イオは対峙して言った。

「転移札か…」

「あら？仕留められると思ったのに残念ね」

女狐の口調は発言と裏腹に冷静だった。後何枚の転移札があるかわからないイオは警戒を強め、再び相手の視界の外に”位置”した。そしてブレードを一閃し、女狐を両断した。が、それは女狐の幻体であった。

「本体ではなかったか…」

気づいたイオはジュピターに周辺地図を立体投影させた。そして本体が近くにいないことを確認したイオは別の場所へと向かって行った。

「…だから油断すんなって教えてやったのによ」

そう言うガニメデは全ての異形達を還し、誰もいない森の中で呟いた。

「お兄さん、随分やるね」

いきなり背後から声を聞いたガニメデは振り返った。

「何者だ？」

そこにはスナイパーライフルを抱えた真名がいた。

「私は一応学生だか、今はこの学園に雇われてる者さ。お兄さんの味方だよ」

そう言って不敵に笑って軽く肩をすくめた。

「…そうか、なら他の場所へ行け。ここはもう全滅させた」

対するガニメデな警戒を解かずに言った。そんな様子を気にせず真名は続けた。

「私への依頼は、この付近の敵を学園内へ入れないこと、なんでね。それ以上は追加報酬がなければやらないさ…それより、私の方も貴方が何者か、知りたいんだけどね」

「…ガニメデだ。この学園の広域指導員をやっている」

「ああ、報告は受けていたよ。確か他にも2人居たと聞いているんだがな」

「カリストとイオだ。それぞれ教師と広域指導員をやっている」

「成る程ね、じゃあさつき連絡があった助っ人2人組ってのは貴方達のことだったわけだ」

「俺とイオが出ている。今頃奴も暴れている頃だろう…悪いが無駄話はここまでだ。次の場所に行く」

そう言ってガニメデは去って行き、その姿は夜の闇の中に溶けてい

った。

「さて、それじゃあ私は依頼を続行するかね」

その後ろ姿を見送った真名はそう言ってもと居た場所へと戻って行った。

「数が多い…」

刹那は苦々しく呟いた。先程からかなりの数を還しているが、途中から転移札を使う異形達が現れて苦戦を強いられていた。

「斬鉄閃っ!!」

近づいてきた異形を、気をのせた一閃で切りふせようとしたが、転移札によって攻撃をかわされた。

「つまるか!」

しかし刹那は背後に転移した異形を振り向き様に両断し、敵から距離を取った。

「そろそろ疲れたんじゃない? 動きが鈍くなってるわよ神鳴流のお嬢ちゃん」

そう言った女狐は余裕そうに笑った。この女狐が現れてから敵が統制された動きをするようになり、厄介なことに他の異形と共に転移

札まで使用してきていた。

「くっ…」

刹那が再び距離を詰めようとした瞬間、第三者の声が響いた。

「援護する」

刹那がその声の方に目をやると、そこには白い服に身を包んだ灰色の髪が印象的な少年がいた。年の頃は刹那より少し年上といったところに見えた。が、細部までは暗闇でよくわからなかった。

「何者だ!？」

刹那は警戒して尋ねた。少年は表情一つ変えずに答えた。

「報告があったはずの増援だ…話してる時間はない」

そう言うや否や少年は刹那の視界から消えた。次の瞬間には突然異形達が、断続的に光る蒼い一閃によって次々に還されていった。異形達も転移札などで対抗していたが、僅かな時間で女狐以外は全て還された。刹那は驚愕したが、相手の女狐は落ち着いた口調で少年に向かって言った。

「あら？また逢ったわね…そんなにお姉さんと遊びたいのかしら…
フフ」

少年はそんな発言を無視するように感情の無い口調で言った。

「先程の幻体は破壊した。お前が本体であるのは確認している」

その発言に女狐は笑った。

「あらあら、でも今度は私の勝ちね」

その発言に少年は僅かに怪訝な表情になった。

「…何をしてても無駄だ」

「あら？そうかしら…じゃあこれはどう？」

そう言うのと女狐はその場から消えた。それを見た少年は身構えた。

「っ！！」

が、攻撃を加えられた気配は無かった。代わりに刹那が驚愕の表情になった。

「フフ…動かないでね、お嬢ちゃん。そうすれば命までは取らないわ」

女狐は刹那の背後から刹那を抱くようにして、首筋に短剣を添えていた。刹那は少年にばかり警戒していた自らの失態を呪った。

「お嬢ちゃん、武器を捨てなさい」

そう言われた刹那は長刀の夕風を地面に放した。

「そこの坊やも武器を捨てなさい」

そう言って僅かに短剣に力を加えた。それを見た少年は手に持って

いたレーザーブレードを投げ捨てた。

「そうよい子ね：動いたらダメよ」

それを見た女狐は勝ち誇ったように笑った。が、少年は無表情のまま女狐の様子を見ていた。そして女狐が一瞬力を抜いたのを見ると何かを呟くように小さな声で言った。

「…ディヴァイン第一解放」

それを聞いた女狐と刹那が訝しむ表情をする前に”それ”は現れた。
”それ”は女狐の腕を切断し、刹那を短剣から解放した後、女狐を串刺しにして還した。”それ”は見た者に圧倒的な威圧感を与えた。
”それ”は人が理解できる範疇を越えた存在だった。

刹那が見たのは一瞬だった。

突然現れた純白の剣が女狐の腕を独りでに切断し、女狐自身をも一瞬で還した。その純白の剣は正解には剣とは言えないものだった。
なぜなら、それには人が持つのを前提としないように柄がなく、ただの刃だけだった。そして青の光を発しており、さながら光の線が空中に浮いているようだった。刹那には、青の光の線が突然現れ、勝手に空中を舞って女狐を還したように見えたのだった。そして気づけばその白い剣は音もなく消えていた。

第11話「干渉」

「無事か？」

啞然とする刹那に少年が抑揚のない声をかけた。

「…え？あ、はい！」

返事をした刹那はまだ何処か呆然としていた。

「そうか」

そう言う少年は刹那に背を向け何処かに行こうとした。

「あ！待ってください！」

刹那は慌てて少年を呼び止めた。

「何だ？」

少年は無表情で振り向いた。

「あの…さっきのは貴方が？」

「…そうだ」

「貴方は確か…」

「イオだ。広域指導員という立場だ」

「イオさんですか：学園長から報告があった方ですか？」

「そうだ。他にも1名、ガニメデという者が増援に来ている」

「あ！そういえばカリスト先生とガニメデさんの御友人の方ですよ
ね？」

「…ああ。どうやら知り合いのようだな」

「いえ：少しお話しした程度です」

そう言った刹那は気づいたように夕風とイオの投げ捨てたレーザー
ブレードを拾い、イオに渡した。

「忘れてますよ」

それを黙って見ていたイオは差し出された刃の無い刀を受け取って
言った。

「…感謝する」

刹那は観察するようにイオをじっと見ていた。それに気づいたイオ
は平淡な口調で言った。

「…何だ？」

そう言われた刹那はイオの顔を間の抜けた表情で見ると、状況を理
解し、顔を赤らめ慌てて言った。

「い、いえ！…！何でもありません…あ！その、先程はありがとうご

「ごさいました!」

「…気にするな」

「いえ! そういうわけには…あ、名乗り遅れました。私は桜咲刹那といいます」

刹那が名乗り終わった時、電子音が鳴った。刹那は慌てたように携帯を開いた。イオも無表情で自身の携帯を開いた。

「…どうやら終わったようですね」

「そのようだな。帰還命令が出た」

「あの…一緒に戻りませんか?聞きたいこともありますので…」

「…構わない」

「ありがとうございます!」

そんな経緯で、刹那とイオは指示のあった集合場所を目指して、夜の森を2人で歩いていた。が、会話が続かずに気まずい空気が流れていた。刹那はなんとか会話をしようと言葉を探していた。

「あ、あの…そういえば魔法使いの方ですか?先程の青い光のようなのは何かの魔法ですか?」

問われたイオは無表情で答えた。

「…詳しくは話せない」

「あ、そうですよね！いきなりすみません！」

「気にするな」

刹那はイオが無表情なのは不機嫌だからと思っていたが、先程からの様子でこれが素なのではないかと気づき始めた。

「貴方は魔法生徒なのか？」

「あ、はい。魔法使いではないですが、神鳴流という気を扱う流派の者です」

「理解した。気を使う剣士だな」

「はい。…そう言えばガニメデさん達と御友人というのは…？」

「同じ広域指導員で古くからの知り合いだ」

「そうだったんですか」

「貴方はどういう関係なんだ？」

「カリスト先生は私のクラスの担任で、ガニメデさんとは少し会話をしただけです」

「そうか」

「あの…いつから広域指導員をなさってたんですか？最近まで全く存じ上げてなかったもので…」

「つい最近だ。この学園にもカリストとガニメデと共に最近来た。理由は匿ってもらったためだが、それ以上は学園長に聞いてもらいたい」

「わかりました。そのような理由があるとは知りませんでした」

会話がようやく弾んできたところで、2人は集合場所の広場に着いた。そこには学園長を中心として30人ほどの魔法先生や魔法生徒がいた。

刹那が手短に報告を済ませると、どうやら刹那達が最後だったらしく、学園長は咳払いをして注意を集めた。

「此度も無事に終わらせることができたようじゃ。負傷者も出ずに何よりじゃった。諸君らの働きに感謝する」

それを聞いた者達は安堵したようだった。

「それでの、もう1つ報告があるのじゃ：ガニメデ君にイオ君、こちらに来てもらえるかの」

そう言われたガニメデとイオは全員の視線を受けながら学園長の前に出た。

「紹介しよう。右手におるのがガニメデ君、左手におるのがイオ君じゃ。皆にも言っておった様にカリスト先生の友人じゃ。皆も直接向き合って会うのは初めてじゃろう。2人は広域指導員をしており、魔法関係者じゃ。以後よろしくたのむぞ」

ガニメデは軽くニヤケており、イオは無表情のままだった。そんな

2人に様々な視線が向けられた。或る者は怪訝な表情で、或る者は敵意すら持った視線で、或る者は友好的な視線で、また或る者は困惑した視線で2人を見ていた。

そして紹介も終わり、解散となった。大半はそのまま帰って行ったが、何名かはその場に留まった。そして先程より2人から一切視線を離さなかった褐色肌の男性が2人に歩み寄り、おもむろに言った。

「私の名前はガンドルフィーニ。この学園の魔法教師だ」

「どうも」

「…」

自己紹介したガンドルフィーニに対してガニメデは若干目を鋭くし、イオは変わらぬ表情で黙っていた。

「一応言わせておいてもらう」

そう言ったガンドルフィーニの雰囲気は更に険しいものになった。そして前置きした上で言った。

「君達は何者かは知らないが…もし、この学園に害を成す存在であれば黙ってはいないぞ」

ガニメデは不敵な笑みを見せたが、ガンドルフィーニは気にした素振りは見せなかった。

「では…失礼する」

そう言い、ガンドルフィーニは去って行った。それを見送ったガニ

メデはイオに言った。

「やれやれ…随分気に入ってもらえたようだな」

「…そのようだ」

そんな様子を遠巻きに見ていた集団の中の1人が意を決したように2人に声をかけた。

「あの…」

2人が視線を向けた先には橙系統の色の髪を短くツインテールにした少女がいた。まだだいぶ幼さを残した顔立ちだった。2人の視線を受けて整った顔を驚いたようにしていた。

「なんか用か？」

ガニメデはぶっきらぼうに言った。

「あ！いえ…その…」

少女は戸惑ったように独りで狼狽えていた。

「愛衣しっかりしなさい」

そこに別の人物が声を掛けてきた。見れば長い金髪を靡かせた白人系と思われる少女だった。その様子は大人びており、見た目の年齢も先程の少女よりひと回り以上上に見えた。

「お姉様！」

先程の少女は一瞬で顔を輝かせ、金髪の少女をお姉様と呼んだ。その変化の速さにガニメデは少し驚いた。金髪の少女は呼んだ方の少女を軽く見た後にガニメデとイオに向かって言った。

「ガニメデさんとイオさん…と仰いましたか？」

「ああ」

ガニメデが肯定するのを確認すると少女は続けた。

「私は高音・D・グッドマン、そしてこっちが佐倉愛衣。この魔法生徒ですわ」

紹介された愛衣という少女は慌てたように自己紹介した。

「あ！佐倉愛衣って言います！よろしくお願いします！」

「ああ、よろしく」

対するガニメデは面倒くさそうに言った。

「お互い、偉大な魔法使い『マジステル・マジ』を目指して精進いたしましょう」

「？…ああ」

ガニメデはマジステル・マジという単語が理解できなかったが適当に答えた。

「では、私達はおいとまさせて頂きますわ」

そう言って高音と愛衣は去って行った。それと交代するように刹那と真名がやって来た。

「やあガニメデさん。さっきぶりだね」

「そーだな」

やって来るなり真名はガニメデに言い、ガニメデは気のない返事をした。

「知り合いなのか？」

それを見た刹那は真名に尋ねた。

「まあね。それより刹那こそ、その人と2人きりで随分楽しそうだったじゃないか？」

真名はイオに視線を向け、からかうように言った。刹那は顔を赤くして慌てて言った。

「な！？何を言っている！？」

そんな刹那の反応を真名は胸中で意外に思い、さらに冷やかそうと思った。

「どうした刹那？珍しく慌ててるようじゃないか」

「っ！ー！慌ててなどいない！」

「そうか？耳まで真っ赤だが」

言われた刹那はバツと耳に手を触れた。それを見た真名は不敵に笑った。

「嘘だ」

「っ！！！」

そんなやり取りの後、落ち着いた2人はイオとガニメデに向き直った。そんな様子をガニメデは半ば呆れたように、イオは変わらず無表情で見ていた。

「私は龍宮真名、この学園の一応は学生だ。因みにカリスト先生のクラスだ。ガニメデさんにはさっき会ったと思うが改めてよろしく」

「私は桜咲刹那と言います。私もこの学園の生徒で龍宮と同じクラスです…よろしくお願いします」

自己紹介が終わった時、ガニメデは呆れた様子だった。

「よりにもよって2人ともカリストのクラスかよ…いや、待てよ。確かカリストが担当してんのは3-Aとかいう中学だよな…?」

その問いに刹那はさも当然という表情をした。

「はい…それがどうかしましたか?」

「いや…あんたはいいが…そっちの奴は…大学生じゃないのか？」

そう言っつて真名に目を向けた。長身に褐色の肌、長い黒髪、プロポーションは女性らしい曲線を表しているその姿はどう見ても中学生には見えなかった。

身長に至っては体格の良いガニメデと大差なく、イオよりも一回りほど高かった。ガニメデの視線に気づいた真名は鋭い視線をガニメデに向けた。

「…ガニメデさん、何か言いたいならはっきり言ってくれないかい？」

「いや…本当に中学生なのか？」

「…ほら学生証だ」

そう言っつて真名は顔写真の載った学生証をガニメデに見せた。

「…子供先生といい何でもありだなここは」

ガニメデは哑然としたように呟いた。

「3-Aを見ればもっと驚くと思いますよ…」

そんなガニメデに刹那は半ば同情するような声を掛けた。

「…これからはカリストと関わるの止めるか」

その後、ガニメデとイオに別れを告げた刹那と真名は帰り道を歩いていた。

「あの2人、本当は何者なんだ？」

その途中、急に尋ねてきた真名に刹那は意外そうな顔をした。

「ガニメデさんとイオさん…じゃないのか？」

「そういう意味じゃないさ。私はガニメデさんの動きを見ていたが、捉えられなかった…」

真名の発言に刹那は驚愕の表情になった。

「魔眼でもか!？」

「ああ」

「…どういことだ？」

「わからないが、少なくとも移動による時間差が全くなかった」

「…そんなことあり得るのか？」

「さあ。私も正直何がなんだかわからない。そういえば刹那はイオさんの戦いを見たのか？」

問われた刹那は思い出したように応えた。

「そう言えば…彼の動きも捉えられなかった…それに…」

「それに？」

「見たこともない魔法を使っていた」

「ほお。それでどんな魔法だったんだ？」

「初めは蒼く光る刀のような…恐らくマジックアイテムを使って敵を斬っていた。そして最後に、一瞬でよく見えなかったが突然光る剣が現れて、その剣が独りでに敵を切断していたようだった…あまりにも圧倒的だった」

「本当に何者なんだろうね…彼らは」

その後、ガニメデとイオはアパートに戻っていた。

「はぁ…今日は張り切りすぎたな」

ガニメデは身体を床に倒しながら言った。

「最初からディヴァインを解放するからだ…余り使いすぎるな」

それに対しイオはガニメデに背を向けて椅子に座り、テーブルの上で何やら作業をしていた。

「…わかってるさ。てかお前も珍しく使ったみたいだな？」

「緊急時だった」

「まあ別にいいがよ。お前の場合は特に気をつけろよ…心配になる」

「大丈夫だ…第一段階の上に一瞬しか解放していない」

「それならいいがよ…てかさっきから何やってんだ？」

そう言ってガニメデは寝転がった姿勢から頭だけイオの方へ振り向いた。

「先程の戦闘データをジュピターで解析している」

イオは姿勢を変えず背を向けたまま答えた。

「ご苦労様だな。ディヴァイン使ってた、今日は無理すんなよ」

ガニメデの気遣うような声を聞いて、イオは僅かに口調を柔らかくした。

「ああ。ありがとう」

それを聞いたガニメデは口元を緩めた。

「ハッ。んじゃ俺は先寝るぜ」

ガニメデはゆっくり起き上がり、自室へと戻って行った。

第12話「交錯」

少年が歩いていた

そこには何もなかった

ただ白い空間が無限に広がっていた

見渡す限り白、白、白…

ただ、少年だけがそこに在った

黒い髪に黒い服

それは白い空間に対抗するかのようだった

何もない場所を少年はただ歩いていた

上も下もない

何も変わらないこの世界に果たして歩く意味はあるのだろうか

だが少年は歩く

ただただ歩く

その先に何かがあるかのように

その先に何か大切なものがあるかのように

そして立ち止まった

その赤い瞳を何もない空へ向けた

その口はこう言っていた

—待っている—

イオは飛び起きた。

珍しく焦った表情をしており、汗までかいていた。

「夢か」

ガニメデはまだ起きてこないイオを、昨日のこともあり若干心配していた。普段ならばイオは既に起きている時間であった。

そして起こしに行こうと決めて椅子から立ち上がろうとした時、居間のドアが開いてイオが入ってきた。

「おお、今起そうかと思ってたところだったぜ。今日は随分遅いな。体調でも悪いのか？」

イオは黙ってガニメデの向かいの席に座って言った。

「大丈夫だ」

イオの見た目は何時も通りだったが、長い付き合いのガニメデには何処か違うところがあるように見えた。そんな様子を心配しながらガニメデは席を立った。

「まああれだ、無理はするな。今日は俺が昼飯作ってやるよ」

ガニメデはキッチンへと向かって行った。

「…どうだ？」

そう尋ねるガニメデの向かいには無言でスクランブルエッグをモグモグ食べているイオがいた。テーブルの上にはサラダやトーストがのっていた。

「…悪くない」

そして変わらない口調でガニメデに答えた。それを聞いたガニメデは安堵したように言った。

「そりゃよかったぜ。まあカリストほどじゃねえが食えないこたあねえだろ？」

対するイオはガニメデに視線を向けた。

「スクランブルエッグを食用不可能にする方が難しいと予想する」
そう言いながらも黙々と食べているイオを見て、ガニメデは苦笑い

した。

「…まあそう言うなよ」

イオは図書館島に来ていた。しばらく前に学園長から許可を取り、何回か通っていた。ここは麻帆良の保有する図書館で、曰く――

明治の中頃学園設立と同時に造られた世界最大規模の図書館

二度の対戦中、戦火を逃れるために世界中からこの図書館に貴重な書籍が集まってきた

蔵書の増加に伴い、地下へと増改築が繰り返され、現在ではその全貌を知る者はいない

貴重書狙いの盗掘者用の弓矢などのトラップが仕掛けられている

とのことだった。

実際、中には湖などがありとてもただの図書館とは言えなかった。イオは科学部門の本棚の本で”量子論”と書かれたものを手にとっていた。

「…科学水準も根本的な分岐はないようだな」

そう呟き本を戻した。そしてその場を離れようとした時、とある本に目が留まった。イオはその本を手にとって開いた。その本のタイトルは、”木星の全て”^{ジュピター}だった。

ページを進め、木星の衛星のページで手を止めた。

「…第1衛星イオ…第2衛星エウロパ…第3衛星ガニメデ…第4衛星カリスト…」

イオは無表情でそのページに書いてある衛星の名前を唱えた。

「こんなものまで同じなのか…」

そしてある文字を目にした時、表情が凍った。

「テーベ…リシテア…」

イオはしばらくその文字を見ていたが、しばらくして慌てたように本を閉じた。そして本棚に戻した。その表情は何かに恐れたようだった。

「あの…」

そこへ背後から気まずそうに声がかかった。イオはすぐに無表情に戻って振り向いた。

「…何だ？」

そこには前髪で顔を隠した大人しそうな少女がいた。

「っ!？」

イオが振り向いた瞬間に驚いたような表情をしたが、すぐに俯いて小さな声で言った。

「えっと…そこ…」

少女はそう言って両手で抱えていた本を少し前に出した。

「ああ…すまない」

少女はどうやらその本をイオの後ろの本棚に返したい様だった。それを察したイオはその場から離れた。

少女は本を戻すと、少し怯えたようにイオに言った。

「あ、あの…大丈夫ですか？」

問われたイオは理解できないように少女を見た。それを見た少女は続けた。

「つらそうだったので…」

それを聞いたイオは目を僅かに広げた。

「俺はつらいのか…？」

呆然とするイオを見て少女は慌てて言った。

「す、すみません！よ、余計なことですよね…」

そんな少女にイオは僅かに微笑んだ。

「いや、そうじゃないよ…」

少女はその笑顔を見て時を忘れた。

「ありがとう」

その笑顔は綺麗で、そしてとても儚く見えた。

「いえ…」

イオは表情を無表情に戻し、その場から去ろうとした。

「あの！」

が、少女の声に呼び止められた。

「木星が好きなんですか？」

イオの戻していた本を見た少女は問いかけた。その問いかけにイオは振り返った。

「ああ…好きだった…」

その表情からは何もわからなかった。しかし少女には今にも壊れてしまいそうに映った。

「そ、それならこっちの本も良いですよ…」

心優しいその少女は、そんな彼を何とかしてあげたいと思った。

「…そうか」

そう言ってイオは少女が近場の本棚から取り出した本を受け取った。

「あ、あの…み、宮崎のどかって言います…」

遠慮がちに自己紹介した少女を見てイオも言った。

「イオだ」

「あ、はい！イオさんですね…木星の衛星と同じ名前なんです」

「…そうだな」

「わ、私は図書館探検部なので本について何かあれば言ってください」

「ああ…その時は頼む」

「じ、じゃあ失礼します！」

のどかと名乗った少女はそう言って走り去った。のどかは終始怯えた様子だったが、時々見える瞳は強い意志を示していた。イオはその後ろ姿を見送ると再び歩き始めた。

宮崎のどかは自分の意外な行動に自分で驚いていた。そして先程の少年の儚い笑顔が深く印象に残っていた。

その日、のどかは図書委員の仕事で図書館島へ来ていた。指定された本を戻して行き、最後の本を返そうと科学関連の本棚に向かった。そしてその本を返す場所に一人の人物が背を向けて立っていた。灰色の髪が印象的な人物だった。のどかは初め、その後ろ姿から女の子だと思っていた。そして声を掛けた。が、その人物が振り向いた瞬間に驚いた。確かに顔立ちは中性的で整ってはいたが、女の子ではなく少年だった。

「…何だ？」

しかし一番驚いたのはその表情だった。一見無表情に見えたが、その裏に深くつらそうな表情が見えた。のどかが上手く言い出せないでいると、少年は察したようにその場から離れてくれ、のどかはすぐに本を本棚に戻した。

男性に苦手意識があるのどかだったがどうしても先程のつらそうな顔を忘れることはできなかった。そして勇気を出して言った。

「あ、あの…大丈夫ですか？」

少年は突然の問いかけに、意味を理解しかねている様子だった。それを見たのどかは理由を述べた。

「つらそうだったので…」

それを聞いた少年は目を僅かに広げた。

「俺はつらいのか…？」

少年は自分の感情が自分ではわからないといったように啞然と呟いた。その姿は泣けない人形が泣こうとしているようで、酷く痛ましかった。

相手の触れてはならない部分に触れてしまったと思ったのどかは言った。

「す、すみません！よ、余計なことですよね…」

しかし少年は多少表情を和らげて言った。

「いや、そうじゃないよ…」

少年はのどかを真っ直ぐに見つめた。その蒼い瞳の奥に、何か深いものが見えた気がした。

「ありがとう」

そして少年は僅かに微笑んだ。その微笑みを見たのどかは、時を忘れるほど衝撃を受けた。その僅かな笑みの中に様々なものが詰まっていると感じた。優しさ、つらさ、儚さ、切なさ、罪悪感…のどかには、どんな人生を歩んだらこれほど深い笑顔ができるのかわからなかった。

「いえ…」

のどかにはそれしか言えなかった。目の前の少年の笑顔は、あまりにも印象深かった。

そして少年は表情を無表情に戻し、その場から去ろうとした。その後ろ姿を見たのどかはハッとした。のどかには、その姿が全てを否

定され、自分自身の意味すら認められない悲痛な姿に見えた。放っておけば今にも壊れてしまうような錯覚を覚えた。

「あの！」

のどかは必死に少年を呼び止めた。そうしなければ彼が消えてしまうような気がした。

「木星が好きなんですか？」

のどかは少年の戻していた本を見て言った。問われた少年はゆっくり振り返った。

「ああ…好きだった…」

そう言った少年の表情はやはり儚く見えた。無表情の中に様々な感情が込められているようだった。

「そ、それならこっちの本も良いですよ…」

のどかは自分に出来る最大限のことをした。

「…そうか」

そう言って少年はのどかの差し出した本を受け取った。少年のその行動に、のどかは少し安堵した。

「あ、あの…み、宮崎のどかって言います…」

そして遠慮がちに自己紹介をした。

「イオだ」

返ってきたのは彼の名前だった。若干柔らかくなった少年の表情に、のどかも自然と嬉しくなった。

「あ、はい！イオさんですね…木星の衛星と同じ名前なんですね」
のどかは少し声を大きくして言った。

「…そうだな」

しかし、少年はまた無表情に戻ってしまった。

「わ、私は図書館探検部なので本について何かあれば言ってください」

のどかは自分にできることを言った。

「ああ…その時は頼む」

それでも少年の表情は無表情のままだった。のどかは最早その表情を見ていることはできなかった。

「じ、じゃあ失礼します！」

そして逃げるように少年から離れたのだった。

その夜、ガニメデは街路で困惑していた。

「…何で俺なんだよ？」

ガニメデは露骨に面倒くさそうにしていた。

「あんたは俺たちが戦った中で一番強かった！…それに、俺はあんたに言われた「力に頼りすぎだ」って言葉で気づいたんだ！その通りだったと！だからこそあんたに頼みたいんだ！！」

リーゼントに学ラン姿の豪徳寺薫という青年はガニメデに力説した。ガニメデは何時ものように広域指導員の仕事をしていたが、突然現れた4人組から弟子にしてくれと頼まれていたのだった。

「俺もあんたの強さに惚れたぜ！だから頼む！」

金髪の青年の山下慶一も豪徳寺につられたように言った。

「俺もだ！」

今度は拳法服を着た中村達也という青年が言った。

「頼む！」

最後に大豪院ポチという体の大きな青年が言った。

それを聞いたガニメデは深いため息をついた。そして諦めたように言った。

「…はあ、そんだけ言われたら断れねえだろ」

その発言に4人は顔を輝かせた。

「おお！じゃあ！」

そんな4人をガニメデは制すように言った。

「ああいいぜ、4人まとめて鍛えてやるよ。ただし、日時や場所は俺の都合に合わせてもらう…そして、俺の訓練は地獄だから覚悟しとくんだな」

それを聞いた4人はさらに顔を輝かせた。

「」「はい！」「」

あまりにも揃った返事にガニメデは苦笑いした。

「まったく…この俺が他人に戦闘を教えるとはな…おいお前ら、とりあえず明日、河川敷に来い」

それを聞いたリーゼントの豪徳寺は言った。

「早速鍛えてくれるんですね？ 兄貴！」

最後の単語にガニメデは眉をひそめた。

「おい何だその呼び名は？」

ガニメデに問われた豪徳寺は当然のように答えた。

「兄貴は兄貴です！」

ガニメデは呆れたような表情になった。そこに金髪の山下から声がかかった。

「それで、どんな訓練をしてしてくれるんですか？」

ガニメデは不敵に笑った。

「地獄の訓練だ。泣き叫ぶまで鍛えてやるよ」

第13話「蒼瞳」

今日は休日、週末の河原は様々な人々が行き交っていた。犬の散歩をする人、自転車漕ぐ人、楽しそうに騒ぐ子供たち。しかし、河川敷の一角だけは違った様相を見せていた。人々が雰囲気的にも物理的にも近づきずらい場所になっていた。そこには傷だらけの4人の青年―正確にはそのうち3人は地に臥していた―とそれを相手に無傷で佇む青年がいた。

「おいおいそんなにどうすんだよ？」

そう言ったガニメデはその場から消えた。

「ぐあっ!!」

そして唯一立っていた豪徳寺の目の前に突然現れ、容赦なく殴りつけた。それを豪徳寺はふらつきながらも退くだけで耐えた。

「おらおらどうした？」

が、ガニメデはさらに一撃殴った。

「殴られてるだけか？」

「ぐはっ！」

さらに一撃。

「肉切られたら骨を砕け！タダで渡すな！」

「うっ…」

さらに一撃。

「腕を落とされたら首を落とせ!!」

「ぐは…」

さらに一撃。豪徳寺は人形のように殴られ続けた。

「強い敵なんざ山ほどいるんだ! その時テメエは何もせず殺られんのか! あ! ?」

「ぐ…」

さらに一撃。そこで豪徳寺は地面に倒れた。

「烈空掌!!」

そこに先程まで倒れていた中村が立ち上がって、掌から気弾を放った。

しかし、ガニメデは見ることもなく片手でその気弾を弾いて反らした。そして眉にしわを寄せた。

次の瞬間には中村の目の前に現れ、先程の様に中村を殴りつけた。

「ぐ…」

中村は立ち上るだけで限界だったのか一撃で倒れた。ガニメデはそ

れを文字通り見下して言った。

「おい…そいつは最後の最後まで使うなど言ったよな？今はその時か？早々に手の内見せてどうする？近接戦闘だけで攻められたら優位に立てなくなるだろう…が！！」

最後の言葉と同時にガニメデは振り向き様に、背後から迫ってきていた大豪院と山下を殴り飛ばした。2人はそのまま地面に倒れた。

「…相手の隙を突こうってのは悪くねえ。が、突くなら一瞬でやれ！そんなチンタラしてたら相手に反撃を許すぞ！」

そのガニメデの発言に応える者はいなかった。ガニメデは地面に伸びている4人を見てため息をついた。

「だらしねえな…今日はここまでだ」

見渡した河川敷のあちこちにはクレーターがあり、地形が軽く変わっていた。

その夜、イオはエヴァに呼ばれてログハウスに来ていた。イオはソファアに座り、エヴァはその向かいに尊大に座っていた。

「要件は何だ？」

イオは抑揚のない口調で言った。

「お前には茶々丸が助けられたからな、その礼をしようと思っ
てな」
エヴァは紅茶に口をつけた。

「…護衛は結界の情報の対価のはずだ。その必要はない」
変わらないイオの物言いにエヴァは口の端をつり上げた。

「私じゃない。茶々丸が礼をしたいと言ってな…それとも何か？お
前は茶々丸の好意を無下にするのか？」

「…」

イオが言い淀んだのを見てエヴァはさらに笑みを深めた。エヴァは
イオの弱点を掴み始めていた。

「あの…イオ様」

そこにメイド服を着た茶々丸が話しかけてきた。イオが顔だけ向け
ると茶々丸は続けた。

「一昨日はありがとうございました」

そう言って茶々丸はペコリとお辞儀をした。

「…気にするな」

対してイオは視線をテーブルに落としていた。そんな様子にエヴァ
は上機嫌だった。

「お前も照れることがあるんだな」

その冷やかしにイオは視線を不敵に笑うエヴァに向けて抗議した。

「…照れてなどいない」

「ほおならばなぜ視線をそらした？」

「偶然だ」

「違うな。照れると視線をそらす、お前の癖だ」

「…」

イオを言い負かしたエヴァは満足そうだった。が、紅茶を飲もうとした瞬間にくしゃみをした。

「大丈夫ですかマスター？」

「ああ…薬が切れてきたみたいだ…つくし」

エヴァは吸血鬼でありながら花粉症であり、それに加えて今日は体調が悪いとのことだった。

「…ちょっと熱もあるかもしれん」

それを聞いた茶々丸はエヴァの額に手をつけ、センサーで熱を測った。

「37.8℃、微熱のようです」

「そうか：少し寝るとするか」

茶々丸はエヴァを抱えて二階に運んで行った。そして戻ってきた茶々丸は何処か申し訳なさそうにイオに言った。

「イオ様：お願いがあります。マスターの風邪薬を買ってきたいのですが、その間マスターを見ていて頂けないでしょうか？」

そんな頼みにイオは無表情で応えた。

「了解した」

それを聞いた茶々丸は礼を述べた後、お辞儀をして出かけて行った。イオは頼まれた通りに二階に向かった。ベッドに寝ているエヴァは、イオに気づくと毛布から顔だけ出した。

「ふん：わざわざ付き添ってもらわなくてもいいものを…」

拗ねたように言うエヴァを無視してイオはベッドの近くにある椅子に座った。そして無言でエヴァを見つめ続けた。

「な、なにをそんなにジロジロ見ている!？」

エヴァはそう怒鳴って口元まで毛布に潜った。

「：茶々丸に頼まれた。貴方の様子を見ている」

イオは相変わらず無表情で言った。

「べ、別にわたしは一人で大丈夫だ！」

エヴァは目だけイオに向けて言った。

「もしものためだ」

イオは先程から視線をずっとエヴァに向けていた。これにはエヴァも恥ずかしさを感じていた。

「大丈夫だと言っているだろう！なぜお前がそこまでする必要がある！？」

赤い顔を隠すように頭まで毛布に潜って言った。
対してイオはエヴァを見続けていた。

「心配だからだ」

余りにも平然と言ったイオの言葉に動揺したエヴァは、顔だけ毛布から出してイオを見た。その瞬間、目が合い、エヴァはさらに顔を赤くして再び頭まで毛布に潜った。

「もう勝手にしろっ！」

そしてしばらく時間が流れた。森の中のログハウスにはゆったりとした時間が流れていた。いつまでそうしていたか、エヴァは突然顔を毛布から出した。

「…なあイオ」

初めて名前を呼ばれたイオは若干驚いたようにエヴァを見た。

「…何だ？」

エヴァは熱を持った顔をイオに向けた。が、その目はどこか迷っているように動いていた。

「その…わ、わたしが怖いかな？」

呟くほど小さな声だったが、イオには届いていた。

「いや、その逆だ」

エヴァは思ってもなかった返答に戸惑った。

「ぎ、逆…って何だ？」

しかしイオは平然としていた。

「そのままの意味だ」

エヴァはそんなイオをどこか可笑しいと思い笑った。

「…冗談ではないぞ」

いきなり笑われたイオは少し不機嫌そうに言った。

「ククク…いやすまん。お前の様子が余りにも面白かったんでな」

そう言ったエヴァはイオを真っ直ぐに見た。

「お前は不思議なやつだ…」

そう言われたイオは視線を床に落とした。それを見たエヴァは不敵に笑った。

「なんだ？わたしに見つめられて照れたか？」

「…」

しかしイオは無視したように視線を変えずに黙っていた。それを見たエヴァはさらに口の端を上げた。

「フフフ…熱を出しているわたしに惚れでもしたのかイオ？」

が、イオは突然視線をエヴァに向けて言った。

「ああ。そのようだ」

それを聞いたエヴァは驚いたように目を見開いた。そして顔をさらに赤くして動揺したように言った。

「な！？何を馬鹿な…！？」

そして素早く毛布に潜った。そんなエヴァに向かってイオは平淡な口調で言った。

「冗談だ」

それを聞いたエヴァは毛布を吹き飛ばし、顔面を真っ赤にしてイオの胸ぐらを掴んだ。

「よ、よくもこのわたしをこけにしてくれたな!!」

そしてイオを激しく揺すった。イオは抵抗もせず、人形のように揺すられていた。そして冷静な口調で言った。

「あまり暴れるな。体調を悪化させるぞ」

それを聞いたエヴァはさらに揺する力を強めた。

「うるさい!このっ!!」

しかし直ぐに息を切らせてしまった。エヴァはイオの目の前でしりもちをついた。

「やはり安静にしている」

イオは目の前のエヴァを抱えてベッドに寝かせ、吹き飛ばされた毛布をかけてあげた。その間、エヴァは俯いて黙っていた。そして先程のように顔だけ毛布から出し、イオを見て言った。

「あ、ありがとう…」

イオは変わらない表情だった。

「気にするな」

そしてまた静かな時間が流れた。窓からは、木々の間から差す日光が美しい森を照らしているのが見えた。そんな中、エヴァはイオの瞳を真っ直ぐに見た。イオも感情の込もっていないその瞳をエヴァ

に向けた。エヴァにはその青い瞳の奥に様々な感情が在るように見えた。

そしてその根底にある闇が見えた気がした。余りにも深い闇…全てを呑み込むような闇だった。思わず魅せられるほど純粹で深い闇だった。

「お前は…どんな人生を歩んできたんだ？」

エヴァは突然呟くように言った。イオは黙っていた。

「お前のその目はとても深い瞳だ…それだけの体験をしなければそんな目にはならないだろう」

イオは黙っていた。

エヴァは語る様に続けた。

「わたしもそれなりの人生を歩んできた。だからその分の闇は大きい…」

イオは黙っていた。

「だが、お前の闇はわたしよりも大きく感じる…」

イオは黙っていた。

「とても大きな闇だ…わたしすらも吞まれてしまうほどに深い」

イオは黙っていた。

「なあ…教えてくれないか？お前のその闇の理由を…」

イオはしばらく目を閉じ、ゆっくり開いた。その間もエヴァはイオを真っ直ぐ見ていた。

「…すまないが話すことはできない」

エヴァはイオから視線を外さなかった。イオはゆっくり言った。

「だが…一つ言えることがある」

エヴァはイオの瞳を見つめて言った。

「何だ？」

イオは窓の外を見た。

「後悔はしていない…」

その横顔は無表情だったが、エヴァにははっきりと見えた。イオの苦悩が。

そして再び2人は無言になった。イオは外を見続け、エヴァはそんなイオの横顔を見続けた。外からは鳥の囀りが聞こえ、木漏れ日が地面を照らしていた。それは時間が止まったように感じる時間だった。

そして茶々丸が帰って来て、イオが自宅に帰ろうとした時だった。エヴァが突然言った。

「イオ、お前今日はここに泊まれ」

さすがのイオも少し眉をひそめた。

「…どういうつもりだ？」

エヴァは上機嫌に答えた。

「本来お前に礼をするために呼んだんだが、逆にわたしの方が世話になってしまったからな。今夜の夕食に誘ってやろう」

が、イオは平淡な口調で拒否した。

「それよりも風邪を治すことを優先しろ」

しかしエヴァも引かなかった。

「フン：夕食は茶々丸が作るのだからわたしは寝ていればいい。問題はないだろう？」

イオは諦めたように言った。

「…わかった」

そして携帯で何処かに連絡をとっていた。話が終わったイオにエヴァが若干不機嫌そうに言った。

「おい、誰に電話してたんだ？」

イオは無表情で答えた。

「ガニメデだ。帰宅出来ない旨を伝えた」

その返答を聞いたエヴァは鼻を鳴らした。

「何だ、お前達は2人で住んでいるのか」

「そうだ」

そんな会話をして時間を使っていると、一階にいた茶々丸が2人を呼びにきた。

「マスター、イオ様。夕食の準備が整いました」

それを聞いた2人は一階へと向かった。

イオは椅子に座り、対面するようにエヴァも座った。茶々丸はエヴァの後ろに控えていた。テーブルの上には風邪でも食べられるお粥などが置かれていた。

「さて、わたしと夕食を食べるのは二度目だな。光栄に思えよ。このわたしと夕食を共にできる者などそうそう居ないのだからな」

尊大に言うエヴァに対してイオは批判の視線を向けた。

「自分で作った夕食ではないのに尊大だな」

それを聞いたエヴァは顔を赤くした。

「な、何を言っている！わたしだって作ろうと思えば作れるのだぞ！ただ今日はちょっと体調が悪いからであって…」

そこに第三者の声がかかった。

「ケケケ…御主人ハ料理ナンデキネエダロウ」

見ればチャチャゼロが不気味に笑いながら言っていたのだった。

「うるさいぞチャチャゼロ！！わたしだってやろうと思えばできるんだ！！」

「ヨク言ウゼ。ソナニコイツ二見栄張りタイノカヨ御主人？」

「だ、黙れチャチャゼロ！」

そこにイオが声をかけた。

「料理が冷めてしまうぞ」

それを聞いたチャチャゼロはケケケと笑い、エヴァは慌てたようにイオに向かって言った。

「で、では頂くとしよう」

夕食の後、隣の部屋を使えと言ったエヴァを無視し、イオは茶々丸から毛布を借りて居間のソファで眠った。

第14話「追及」

夜の砂浜には波の音だけが響いていた

闇が優しさを与え、全てを包んでいる

息を潜めるように2つの人影が倒木に腰掛けて、沈黙を守っている

2人の着ている、限りなく白い服さえも黒く染まり静寂を示しているだけだ

少年は夜空を見上げた

闇の中に、星は何も言わずに輝いている

「この空の青さだけは、変わらない」

しばらくの間、再び静寂が訪れた

隣に座っている男は静けさを偲ぶように静かに口を開いた

「今は夜だぞ」

少年は空を見続けている

「どんなに暗くても空は青さを忘れたりはない。夜が来ても空は永遠に青いままだ」

男は少し笑いながら、瞳を上げた

「いつからお前は詩人になったんだ？」

少年は無表情で夜空を見続けていた

灰色の髪が月の光に照らされている

「この世界線も、もうすぐ消えるのかと思うと、ついそんなことを考えてしまう」

「確かに、そんなものかもしれないな」

少年は空を見つめるのを止め、少し寂しそうに浜辺に視点を下ろした

「この世界に住んでいる人々は何も知らずに消えて逝くんだな…」

再び静寂が訪れて、波の音だけが聞こえる

少年は地面を見つめたまま固まっている

男は横目で少年を見ると、思い出したように立ち上がった

夜空を見上げたその顔は何処か切なかった

「だからと言って、この世界線を残しても、行き着く先はもう目に見えている。お前もよく知ってるじゃないか…このまま残しておけば、ここに生きる人々はあの悲劇を体験することになる」

少年は、波が押しては引いていく様子を見ていた

静かに口を開いたが、その表情は暗かった

「わからない：存在して苦しむ方が幸せなのか、そもそも存在しない方が幸せなのか」

波の音が聞こえてくる

男はしばらく考えていたようだったが、海を見ながら話し始めた

「それは俺にもわからない。俺達は不運だ。この世界に生きる人々のように何も知らないのが一番幸せなのかもしれないな」

男は少しの間黙った後、再び話し始めた

「もう次の世界線へ行く。お前も早くここから移動した方がいい」

そう言々と男は消えた

波の音が、再び聞こえてきた

少年はしばらくそのまま倒木に座っていた

イオはハツとしたように目を覚ました。

「おい、大丈夫か？」

そんなイオを心配するようにエヴァがイオの顔を覗き込んでいた。

「ああ…」

イオは片手で顔を押さえながら答えたが、その表情は芳しくなかった。ゆっくりとソファから起き上がり、窓まで歩いて空を見て言った。

「空が綺麗だ」

エヴァはそんなイオの行動の一部始終を訝しむように見ていた。

「何か変な夢でも見たのか？」

エヴァは静かに問いかけた。

「いや、少し昔を思い出していた」

そう言ってイオは空を眺めていた。青い空のキャンバスに広がる白い雲が、ゆっくりと流れていく、ゆっくりと。

イオの横顔は無表情だったが、エヴァには泣いているように感じられてしまった。

「そうか」

エヴァにはそれしか言えなかった。俯いたエヴァはイオを直視できなかった。イオはそんなエヴァに向き直った。

「風邪は治ったのか？」

その表情は無表情に変わりはないかったが、幾分柔らかな表情に見える

た。エヴァは俯いたまま言った。

「まだ少し熱があるが…大丈夫だ」

「なら安静にしているべきだ」

「ああ…そうだな」

そう言うときエヴァは階段を登った。そして半ばまで登ったところでイオが声を掛けた。

「わざわざ起こしに来てくれたのか？」

エヴァは立ち止まって、振り返らずに言った。

「ま、まあな」

イオはエヴァの後ろ姿をじっと見つめた。

「感謝する」

エヴァは鼻を鳴らしてそのまま二階に登っていった。

茶々丸に誘われてイオが居間で紅茶を飲んでいる時にノックの音があった。茶々丸が玄関に向かい、戻ってくるとネギがいた。イオを見た瞬間、ネギは怯えたような顔をしたが、直ぐ真剣な表情に直ってイオを見た。

「あ、あの！」

イオも座ったまま、ネギを真っ直ぐに見た。

「一昨日はすみませんでした：先生のすることじゃなかったと思います：でも、先生としてエヴァンジェリンさんには悪いことをやめてもらいます！それに授業にもちゃんと出てもらいます！」

イオは無表情で言った。

「それは構わないが、なぜ俺に…」

「1人で来るとはいいい度胸だ！いいだろう！この闇の福音が貴様を捻り潰してやろうではないか！！」

イオが言い終わる前に、階段の手すりに座ったエヴァがネギに言った。

「エ、エヴァンジェリンさん！！」

ネギは驚きの表情になっていたが、イオはエヴァを見て僅かに眉をひそめた。茶々丸は声を大きくして言った。

「いけませんマスター！まだ風邪が治っていません！！」

それを聞いたネギはさらに驚いたように目を見開いた。

「え！？エヴァンジェリンさん吸血鬼なのに風邪引くんですか！？」

そんなネギの問いかけに茶々丸はさも当然のように答えた。

「はい。マスターは風邪も引きますし、花粉症にも悩まされています」

ネギは信じられないといった様子で茶々丸を見た。

「そんなっ！エヴァンジェリンさん！風邪なら休んでいてください
！」

エヴァは不敵に笑っていたが、無理をしたせいか顔は若干赤く息も上がっていた。そんなエヴァを見たイオは無言で立ち上がり、エヴァのもとへ向かった。

「む…何だイオ？」

エヴァは汗をかきながらイオに言った。

「安静にしていると云っただろ」

エヴァは苦しそうにしながらも口の端をつり上げた。

「フ…この程度ならばこんな坊主1人、簡単に倒してやる…さ」

が、エヴァはふらついて階段の手すりから落ちそうになった。それをイオが抱え込むようにして支えた。何時もは身長差があったイオとエヴァでは視線が同じになることはなかったが、今はエヴァが階段の手すりに座っているために顔と顔が目の前だった。

「っ！？ななな、何をしているイオ！！離せ！！」

エヴァが暴れ出したのでイオはまるで荷物を運ぶかのように強引に脇に抱えた。そしてそのまま二階に連れて行った。その間もエヴァはイオの腕の中で暴れていた。

「このっ！離せ！！おいイオ！！」

「いいから安静にしている。悪化している」

イオは無表情で二階のベッドに、暴れるエヴァを半ば強引に寝かせた。とりあえず大人しくなったエヴァは口元まで毛布に潜って言った。

「お、お前はもう少し…その…やり方を…こう優しく…だな…」

エヴァは風邪のせいか熱をもった赤い顔でイオをチラチラと見ながら言った。そんなエヴァを見たイオは相変わらず機械のような表情だった。

「暴れるからだ。体調が治るまでそこで寝ている」

そう言ってネギのところへ戻って行った。

二階から降りてきたイオにネギは遠慮がちに尋ねた。

「あの…エヴァンジェリンさんは大丈夫ですか？」

イオは先程座っていた椅子に腰掛けた。

「安静にしていれば問題はない。用事があるならば今度がいいだろう」

「はい：あの：じゃあこれを受け取って頂けませんか？」

そう言ってネギは”果たし状”と書かれた封筒をイオに差し出した。

「了解した。後でマクダウエルに渡しておこう」

イオはそれを受け取った。

「お願いします。じゃあ僕はこれで失礼します」

そう言ってネギは帰って行った。

カリストは放課後に超鈴音という自分のクラスの生徒に呼び出されていた。この生徒は麻帆良の最強頭脳と呼ばれ、常に学年1位の成績を修めていた。

中国人のような話し方をし、麻帆良では人気屋台の”超包子”のオーナーとしても有名であった。呼び出されたのはその超包子の路上屋台であり、路面電車を改造した屋台だった。

カリストは約束した時間通りにそのカウンターに座った。カウンターの奥には超鈴音がニコニコして待っていた。

「わざわざ来てもらって感謝してるネ」

そう言われたカリストも笑って言った。

「なに、副担任なんだから生徒の頼みを聞くのは当然さ。気にしな

くていいぞ」

「そう言ってもらえると助かるネ。これはお近づきの印ネ」

そう行つた超は軽い食事をカリストの前に出した。

「そうか、ありがとう…っ！！これは美味しいな！！」

カリストは料理に口を付けて言った。それを満足そうに見た超は言つた。

「それはよかたヨ」

そしてカリストが食べ終わった時に話を続けた。

「先生に聞きたいことがあるネ」

カリストはそれに答えたた。

「何でも言ってくれ」

それを聞いた超はカリストを真っ直ぐに見た。

「…先生は何者カ？」

問われたカリストは鋭い視線を超に向けた。超は変わらずニコニコ笑っていた。

「どういう意味だ？」

カリストは少し声を低くした。

「そのままの意味ネ：調べたが、先生は最近になって麻帆良に突然現れたネ。しかも、それ以前の記録が一切ない：先生の友人という二人も同じネ」

カリストは超を見ていたが、その表情は笑顔という仮面で覆われていた。

「：学園長には理由を話して了承されている。詳しくは学園長に聞いて欲しい」

カリストは話せる範囲がわからないので学園長に委ねることにした。

「それは話せない範囲のこと：と言うことネ」

が、超はそれを見透かしたように断言した。

「：」

カリストは沈黙した。否、沈黙するしかなかった。だがその沈黙は肯定を示してしまっていた。

「先生が魔法関係者、ということは知てるネ。異端の魔法使いと名乗てることも調査済みネ。そしてそれが嘘なのもわかってるネ」

それを聞いたカリストは驚きを隠せなかった。超から魔法という単語が出てきたのはカリストにとって意外だった。

さらに、ただ頭の良い学生だと思っていた超が自分達をそこまで調べ上げていることにも驚愕した。

カリストは超の思惑を探るようにじつと超を見つめた。それを受けた超は真顔になって言った。

「先生が何者なのか、教えてくれないか？」

カリストは超の瞳から視線を離すことができなかった。その瞳は何か決意を秘めており、何処か既視感を覚えた。そう、それはカリスト自身が良く知っている瞳だった。

「すまない」

カリストは超の瞳から目を背けて言った。カリストがそう言うのを見た超は一度目を閉じ、ゆっくりと開いてから静かに語り始めた。

「…先生は突然麻帆良に現れたネ。始め自分達を科学者と名乗ってた。そしてそれは異端の魔法使いであることを偽るためだと明かしたネ。敵から逃げるために転移して来たとも言ってたネ。私も初めはそう思ってたヨ。でも、先生の友人というイオさんとガニメデさんの戦いを観てから違うとわかったネ…」

カリストは超を自分たちにとって最も危険な人物だと断定した。その情報収集能力には純粹に称賛に値するとさえ思った。

自分たちの情報がここまで調べられているとは思ってもよらなかった。

「あの2人の動きは魔法や気なんてもものではなかつたネ。あれは…」

カリストは冷や汗を流した。それはあまりにも正しかったからだった。

「あれは科学ネ」

カリストは最早口を開くことはできなかった。超という人物を見くびっていた自分を心底恨んだ。

「特にあのイオさんだったか？彼が使った武器は決定的だったネ…あれはグルーオンレーザーかな？この”時代”には本来あり得ないものネ」

カリストは橙色の瞳を見開き、冷や汗は止まりそうもなかった。既に否定できる余裕はカリストにはなかった。

「私の予想だが…先生達は」

そこで超は言葉を区切った。カリストは息を呑んだ。

辺りは既に夕方から夜に向かい、うっすらと暗く染まってきていた。そして路上屋台を中心に2人だけの空間が整然と広がっていた。

しばらくの無言の後、超は決定的な言葉を紡いだ。

「この”時代”の人間ではないネ」

第15話「残影」

「…何の話しだ？」

カリストは無表情を必死に装い、僅かに眉をひそめた。

こんな時イオならば楽だろうな、等と場違いなことを考えた自分にカリストは胸中で自嘲した。

「私はごまかせないヨ、先生」

そう不敵に笑って言う超には確信があった。そう、彼女の”記録”

にはカリストやイオ、ガニメデという人物は存在しなかった。それに彼らが現れた状況、麻帆良に突然”転移”してきたということから超は彼らを些細なイレギュラーと考えていた。

だが、それはイオとガニメデの戦闘データを見た瞬間に否定された。彼らの動きは超自身も良く知っている”跳躍”に酷似していた。

超の”跳躍”は擬似的に時間を止めることで一切のタイムラグがない”移動”をするものだった。そして彼らの動きもタイムラグが一切ないものであった。

いくら魔法や気によって移動速度が上がろうと時間差は必ず生じ、時間差を生じない転移、しかもその連続行使というものは困難なものだ。それを超はよく知っていた。

「先生達がこの”時代”の人間でないのはわかってるネ。なぜなら」

そこで超は言葉を切った。カリストから視線を外して自嘲の笑みで視線を下におろした。

「私は未来人だからネ」

カリストは、俯き加減に自嘲する超を見てその発言が真実だと確信した。

なぜならその表情は自分たちがよく知っているものだったからだ。過去を変える責務を背負った自分たちが、自らの無力さを感じた時に見せた表情そのものだった。

「…何が知りたいんだ？」

カリストは決意を秘めた鋭い瞳で超を貫いた。超は真顔に戻り、カリストの視線に負けじと鋭い瞳を向けた。

「先生達は何者なのか、そして先生達の目的ネ」

「いいだろう…ただし、今から言うことは他言無用と誓ってもらう。そして君の素性も明かしてもらう」

超は口の端をつり上げた。

「わかつたヨ。誰にも言わないと誓うネ。それに今、ここを中心に半径200mは誰も近づけないネ。勿論録音機器なども持てないヨ」

それを聞いたカリストは頷いた。そしてゆっくりと口を開いた。

「私達は未来人ではなく…正確には他世界線存在だ」

超は眉をひそめた。

「他世界線存在とは何力？」

「賢い君なら知ってるだろうが、量子力学の観測問題というものがある」

「確率がどのように収束するか、というやつネ」

「その通りだ。その解釈には主に二通りあるのも知ってるだろう？」

「観測による収束と多世界解釈のことネ」

「ああ。この世界線ではどちらか一方のみが正しいということだ。争いになっているが、本当はそのどちらも正しい。観測によって状態が一つに決まるが、それは無限にある世界の確率の中から一つの世界に確定するということだ。だからこの世界の多世界解釈とは厳密には意味が異なる。つまり世界というものは無限に存在し、私達が認識する世界というものは私達とその無限にある世界から観測によって一つを選び収束させた世界だ。そうして干渉性を持った世界を私達は認識している。つまり世界というものは可能性の限り無限に存在する。私達はその無限に存在し、平行に進んでいくそれらの世界を世界線と呼んでいる。この世界線もそんな無限にある世界線の一つだ。そして私達は本来はこの世界線には存在しないはずなんだ……もう分かるな？」

「先生達は別の世界線から来た……ということカ」

「その通りだ。他世界線から来た……正確にはこの世界線と干渉性を持った他世界線の存在だ。勿論私達が来たことで、私達が来た世界線と私達が来なかった世界線に分岐し、そのどちらも存在している……そして私達は無限にある世界線の中の、”この私達が来た世界線”と干渉性を持っているということだ」

超は驚愕したようにカリストを見た。カリストは曇りのない真っ直ぐな瞳を超に向けていた。

「…とても信じられないヨ…だが信じるしかないネ」

「そして私達の目的は”ある者”を探し出すことだ。奴は無限にある世界線のどこかに居る。私達はそれを探している途中だ」

「成る程…わかたネ。どうやら本当のことみたいネ」

超は目線を暗くなった空に向けた。

「次は私の番みたいネ」

そう言って超はカリストに向き直った。その顔は揺らぎない決意に彩られていた。

カリストはそんな超に眩しいものを見るような視線を送った。

「私はこの世界の未来から来た未来人ネ。目的はただ一つ、歴史を変えて未来に起きる”悲劇”を防ぐことネ」

カリストは驚きの表情になった。それは内容が予期せぬものだったからではなく、余りにも自分たちに似通いすぎていたからだだった。そう、余りにも。

そしてカリストは目を瞑り、痛ましい表情になった。

「それは、不可能だ…」

その声はとても小さかった。そしてとてもつらそうな声だった。しかし超にははっきりと聞こえた。

「どういう意味…ネ…?」

カリストはさらに痛ましい声になった。

「君は先程私が言った大切なことを忘れている…それは、世界線は全ての可能性の分だけ無限に存在している、ということだ」

超は眉をひそめた。

「何が言いたいネ？」

カリストは今まで閉じていた目をゆっくり見開いた。そしてはつきりとした口調で言った。

「全ての可能性の世界線が存在するということは、”悲劇”を迎える世界線は必ず存在するということだ。つまり、君が何をしようが”悲劇”を迎えてしまう世界線は無くならない。この世界線の”悲劇”を仮に止めたとしても、それは”悲劇”を回避した世界線と”悲劇”を迎える世界線に分岐したにすぎない。そしてまたその分岐した”悲劇”を阻止しようとしても同じように二つの世界線に分岐するだけなんだ…だから、”悲劇”や”過去”を変えることはできない。君は未来から来たと言ったがそれは間違いだ。君は過去そっくりの世界線に來ただけだ。この世界線をいくら改変しようが、君自身の世界線は何も影響を受けない」

超は信じられないものを見るようにカリストを見た。カリストは一切の揺れのない強い目をしていた。

「そんな…なら私は…私のすることは無意味だと言うのか!!」

超は声を荒げてカウンター越しにカリストの胸ぐらを掴み上げた。カリストの橙色の長い髪が乱雑に揺れ、超とカリストの顔が目の前に来た。超は涙をこらえて激怒しているような顔だった。

カリストはそんな超から一切視線を外さなかった。そして冷静な口調で言った。

「無意味ではない：無意味なことなど無い」

しかし超はそんな様子にさらに激情した。

「気休めならいらないネ！！」

カリストはゆっくりと口を開いた。それは自身に言い聞かせるような口調だった。

「君が見ている、感じている、聞いている、触れている、存在しているこの世界線は、君が変えられる：救うことができる：他の干渉性を持たない世界線は無理でも”この世界”は救うことができるんだ」

超はカリストから手を離れた。そして呆然と立ち尽くした。

「私は：私はどうしたらいいネ：」

その姿は年相応の弱々しい少女だった。カリストはそんな超に言った。

「確かに君自身の世界の”過去”を変えることはできない。だが、

この世界の”未来”は変えることができる…いくら分岐して”悲劇”が無くならないとわかってても君がいる”この世界”は救うことができるんだ」

超は無言でカリストを見つめた。その姿は助けを求める弱々しい子供のようなだった。

「だから君のやることには意味がある。意味があるんだよ」

そう言ってカリストは超に微笑んだ。それを見た超はハツとしたようにカリストに背を向けた。

「そう…ネ。私のやることは無意味ではない、意味のあることネ」

そう呟くように言った超はカリストに振り返った。その顔は既に最初に見せた不敵な笑みに戻っていた。

「なら先生、私の計画に協力してほしいヨ」

そんな超の変化にカリストは苦笑いした。

「返答はその計画について教えてもらってからだな」

それを聞いた超はゆっくりと話し始めた。

「先程話した通り、私は”悲劇”を阻止するために未来から来た未来人…いや、先生達の言い方をすればこの世界線の未来の可能性の一つの世界線から、過去そっくりのこの世界線に干渉性を持った者、といったところか？」

そうやって超はカリストに軽くウインクした。カリストはそんな超の行動と理解の速さに苦笑いして頷いた。それを確認した超は続けた。

「それで、私は”悲劇”を阻止するために、魔法を全世界に公開する計画を進めているネ」

カリストは真顔に戻って超を見た。

「成る程。確認するが、その”悲劇”というのは魔法を公開すれば回避できるんだな？」

「必ずとは言えないが、そう解釈してもらって構わないネ」

カリストは思考を巡らせるようにしばらく沈黙した。辺りは既に闇に包まれていた。屋台の光だけが闇の中で2人を照らしていた。

「今直ぐには結論は出せない。できれば仲間と相談したいのだが構わないか？ 勿論仲間にも他言無用を誓わせる」

そう言われた超は僅かに肩をすくめた。

「構わないヨ。私は先生を信用してるネ」

そんな超にカリストは笑顔を見せた。

「ああ。ありがとうな」

イオは居間のソファ―に座り、風邪から回復したエヴァと向かい合っていた。

「話しとは何だ？」

そしてエヴァに尋ねた。

エヴァはお馴染みの不敵な笑みを見せた。

「明日のことを話そうと思ってな。さっきも話したと思うが明日は停電の日だ。そこで、私は茶々丸にハッキングさせて一時的に学園の結界を消滅させる。そして坊やから血を頂くというわけだ」

エヴァは無表情のイオに自慢話をするように言った。

「協力しろと？」

そう言ったイオをエヴァは鼻で笑った。

「ハッ：何を勘違いしているか知らないが、お前の助けなどいらん。この私があんな坊やに負けることなどあり得んからな」

そんなエヴァにイオは無表情で尋ねた。

「ならば何をしろと？」

「なに、お前に私の力を見せてやろうと思ったのだ。お前は私に付いて来て私が坊やを遊んでやっているとところを見ていればいい」

「実力を示したいのならば別荘の中で充分だと予想する」

「フン…それではお前に一撃も入れられなかったではないか。全く…よくわからん魔法ばかり使いおつて。まあとにかく、あんなので私の力を測ってもらっては困る。だからお前も来るんだ。わかったな？」

「…了解した」

イオの返事を聞いたエヴァは満足そうに笑った。そして尊大な態度で言った。

「それはいいとして、お前は今日もここに泊まっていけ」

イオは感情の無い目でそんなエヴァを見た。しかしエヴァにはその目に確かな感情があるように見えた。

「なぜだ？」

イオと視線が交わったエヴァは若干俯いた。

「明日の予定とか色々話さないといけないしな…それに…その…なんだ…そうだ！お前に助けられた茶々丸がどうしてもお前にいてほしいらしいんでな。私は全く本当にどうでもいいのだが、従者の気持치를無視するわけにもいかないしな…だ、だからだ」

「…そうか。ならば了解した」

そう言ってイオは携帯を取りだし、ガニメデに電話をかけた。そし

て今日は帰れないことを伝えた。

が、電話が終わるなりイオは何処か不機嫌そうだった。そしてエヴァに一度視線を送り、直ぐに反らした。そんなイオを怪訝に思いながらもエヴァは言った。

「では夕食にしよう。おい茶々丸」

呼ばれた茶々丸は直ぐにやって来た。

「はいマスター。何でしょうか？」

「夕食の準備をしてくれ。もう風邪は治ったからお粥などではなく、今日は豪華にしてくれ」

「了解しましたマスター」

そう言って茶々丸はキッチンへと向かって行った。それを見たエヴァは満足そうにイオを見た。

イオは無表情にエヴァを見つめ返した。

第16話「夜戦」

「果たしてこの世界線には奴はいるのか…」

荒れた大地に佇む黒髪の少年は呟いた。その服装は黒いコートのようなもので、髪の色や服装の色から、全体的に漆黒のイメージを受けた。そして、その異常に白い肌と赤い瞳がコントラストになっていた。

「にしてもうざい奴らだ…」

少年の周りにはローブ姿や甲冑姿の男達が倒れていた。

「雑魚ほどよく群れるというのは本当らしいな」

まだ残ってる男達は少年を囲い、睨んでいた。その手には杖や剣を持っていた。そして少年の挑発を合図に、剣を持った者達が一斉に少年に飛び掛かった。杖を持った者達は呪文を唱え始めた。

「ったく…」

しかし少年は面倒くさそうに呟くだけで一切構えなかった。

「っぐ!？」

気づけば残りの男達も地に臥していた。少年以外は何が起きたかすら理解できなかった。

「ば、化け物…」

倒れた男の1人が苦しそうに言った。

それを聞いた少年は真紅の瞳を男に向けた。その表情は無表情だった。

「ああ俺は化け物だ。そんなことは造られた時から……いや、そんなことはどうでもいい。ここから一番近い街は何処だ？ 答えろ」

しかし男は既に息絶えていた。それを見て少年は呟いた。

「使えねえな」

そしてため息をつく、真っ直ぐに前を見つめて不敵に笑った。

「仕方ない。この世界線のお偉いさん方でも引きずり出すか」

そう言って少年は歩を進めた。

ガニメデは弟子4人組との訓練を終え、全員でファミレスに来ていた。夜のファミレスは人気が少なかった。

「にしても兄貴は容赦ないっすよね…」

リーゼントの豪徳寺が苦笑いして言った。

「なんだ？この程度まだまだ序の口だぞ？」

さも当然と言うガニメデに4人は冷や汗をふくんだ苦笑いをするしかなかった。それを見たガニメデは意地の悪い笑みを浮かべた。

「だから言っただろ？俺の訓練は地獄だと。やめたきやいつでもいいぜ？」

その時、ガニメデの携帯から電子音がした。ガニメデは携帯を取り出し、発信者を確認して電話に出た。

「イオか、どうした？何か用か？」

”今日も別の場所に泊まることになった”

「そうかわかった。また女の子のところに泊まりか？」

”…発言の意図を理解しかねる”

「照れんなよ。俺も嬉しいぜ、お前もついにその気になったか…お前とは長い付き合いだが、いや…ようやく俺も安心できるな。だがエララは泣くだろうな」

”その発言の詳細な説明を要求する”

「まあそういうことで了解した。今日もゆっくり楽しんでこい」

”…一部発言を理解しかねるが、了解した”

そこでガニメデは電話を切った。4人はそんなガニメデを不思議そうに見ていた。

「兄貴、どなたですか？」

山下の問いかけにガニメデは不敵に笑った。

「イオだ。前に話したろ？」

「確か兄貴の友人の方でしたよね？」

「ああ。そいつから今日は帰れないと連絡がきた」

「兄貴とお2人で住んでるんですか？」

今度は中村が尋ねた。

「まあな。まあそれももう終わりかもな…最近あいつは女の家泊まってるみたいだからな」

その発言には4人が驚愕した。

「全く…あのムツツリめ」

ガニメデは心底可笑しそうに笑っていた。

翌日、イオはエヴァに付き添い、その行動を一部始終見ていた。
茶々丸のハッキングにより結界から解き放たれたエヴァは、まず以

前吸血した自身のクラスメイトの佐々木まき絵という少女に従え、まき絵を利用して他のクラスメイト達も従えた。

そしてネギを誘い出し、彼女達をけしかけた。武器を奪われながらもネギはその場から杖で空を飛んで逃げ出し、エヴァはそんなネギを追いかけて麻帆良の外縁部にある橋まで来ていた。

エヴァと空中戦をしながら逃げていたネギだったが、橋に落ちて追い詰められていた。

そんなネギにエヴァは着地してゆっくりと近づいていった。

が、途中で思い出したように足を止めて言った。

「おい茶々丸。イオはどうした？」

それを聞いた茶々丸は答えた。

「マスターが空を飛んだ時から置いてきてしまったようです」

それに対してエヴァは驚きの表情になった。

「なんだ？ あいつは空を飛べないのか？ 意外だな…まあいい」

そして不敵な笑みを見せてネギに視線を向けた。

「どうした坊や。結界の外に逃げれば安全だとも思ったのか？」

そう行ってエヴァがさらに歩みようとした時、イオがエヴァの進路を塞ぐように転移してきた。

突然現れたイオにエヴァは言った。

「おい遅いぞ」

「すまない」

「フツ…まあいい」

そう言ってエヴァはイオの横を通ってさらに歩みを進めようとした。しかしその時、イオがエヴァの進路を腕で塞いだ。

「何のつもりだ？」

エヴァは怪訝な表情でイオを見上げた。

身長の問題でエヴァが立ったイオを見るときは見上げる格好になってしまっていた。

「この先に異常なZPEを感知した。恐らく何らかの罠だろう」

「何？」

それを聞いた茶々丸はセンサーを起動させた。

「…イオ様の言う通り、束縛用の罠が仕掛けられているようです」

そのやり取りを見ていたネギは泣きそうな表情になった。

「そんなー！！卑怯ですよ！！折角頑張って仕掛けたのにっ！！」

そんなネギをエヴァは不敵に笑い飛ばした。

「坊やにしては考えたじゃないか。だが、残念だったな。こんなものでは私は止められないぞ」

「そんな、エヴァンジェリンさんは気づいてなかったじゃないですか！それにイオさんまで連れきて卑怯ですよ！！」

「ハッ！何が卑怯だ、私は悪い魔法使いだ！当然だろう！それにイオは一切手出ししないさ」

「えっ！？イオさんは戦わないんですか？」

「そうだ。坊やごときイオが出る必要もない」

「うっ…そ、そんなことやってみなきゃわからないですよっ！！」

そう叫んだネギは長い杖をエヴァに向けた。そして詠唱を始めた。

—ピシッ—

「うっ」

が、詠唱する前に接近してきた茶々丸のデコピンで詠唱を止められてしまった。

「うう…」

そんなネギを見下すようにエヴァが言った。

「ハハハ！どうした？前回みたいにお姉ちゃんがいないければ何も出ないのか？」

それに対して何か叫ぼうとしたネギだったが、茶々丸のデコピンで

それもかなわなかった。

そんな様子をエヴァは不機嫌そうに見ていた。

「もういい…とんだ茶番だった」

そう言ったエヴァは茶々丸に羽交い締めにされたネギに近づき、ネギの杖を橋の下の方へ投げ捨てた。そして胸ぐらを掴んだ。

「ひ、酷いです!!」

ネギは悲鳴に近い口調で言った。

「うるさい黙れ!!メソメソするな!!奴ならこの程度笑って撥ね飛ばしてみせたぞ!!…まあいい、悪いが死ぬまで血を吸わせてもらおう」

そう言ってエヴァはネギの首筋に口を近づけた。

「ごおおらあああ!!」

ーベシッー

「ぐほっ!!」

が、突然走り込んできた明日菜によってエヴァは蹴り飛ばされた。解放されたネギを守るように明日菜はエヴァ達を睨み付けた。

「か、神楽坂明日菜!!き、貴様!!真祖の魔法障壁をテキトーに無視するんじゃない!!」

顔を蹴られたエヴァは蹴られた場所を押さえながら怒鳴った。

「またあんた達ね！！うちの居候に何してくれてんのよ！！」

対して明日菜も負けじと声を荒くして怒鳴った。ネギはそんな明日菜の後ろでオロオロしていた。そんなネギを見てエヴァは苛立ちを覚えた。

「フン…またお姉ちゃんが助けに来てくれてよかったな坊や」

そう言われたネギは言葉に詰まっていたが、明日菜がそれを助けるように叫んだ。

「何よ！あんた達こそ3人でこんな子供をいじめてんじゃないのよ！！」

「調子に乗るなよ。イオは一切戦わん。私と茶々丸だけで充分だ…尤も、私の相手にはなりそうもないがな」

明日菜はイオを睨み付けた。

「イオ？あ！あんたはあの時の！！ネギにまた酷いことするならただじゃすまないわよ！！」

そんな明日菜にネギは視線を向けた。

「明日菜さん…」

今にも飛び掛かってきそうな明日菜に対してイオは無表情で明日菜を見た。

「今回は手を出さない」

「じゃあなんで一緒にいんのよ!?!」

その時、明日菜の肩に乗ったカモが口を開いた。

「姐さん!! そんなことより早く兄貴と仮契約を!」

それを聞いた明日菜はハッとしたようだった。

「そうだ! つでも今の状況じゃ…」

そう言いながら明日菜はエヴァを一瞬見た。それに対してエヴァは不敵に笑い返した。

「仮契約するなら早くしたらどうだ?」

そんなエヴァの発言に明日菜は意外そうに言った。

「え!?! いいの…?」

エヴァは鼻を鳴らした。

「思い上がるなよ神楽坂明日菜。貴様が坊やと仮契約したところで私には到底敵わん」

明日菜はムスツとした表情になったが、すぐにネギを連れて柱の後ろへ走って行った。それを確認した後、イオはエヴァに尋ねた。

「仮契約とは何だ？」

エヴァは柱へ視線を向けたまま答えた。

「私たち魔法使いが魔法を使うには詠唱が必要なのは知ってるな？その詠唱中、術者は基本的に無防備になる。その間、術者を守るのが従者だ。私にとっての茶々丸のようにな。その従者と魔法使いは契約を結ぶんだ。そうすることで様々な利点がある。例えば従者にアーティファクトという武器が用意されたり、従者へ魔力を送って身体能力を強化したりできる……まあ仮契約というのはその契約の劣化版といったところだ」

「理解した。しかし、ならば相手にそれを許可してよかったのか？」

「フン。所詮は小娘だ。あの坊やといい、大した戦力にはならんだろう」

「油断は危険だ」

「わかってるさ。お、どうやら終わったみたいだな。お手並み拝見というこう」

エヴァがそう言うのと柱の後ろからネギと明日菜が現れた。

「良かったな坊や。心強い仲間ができたみたいじゃないか」

そんなエヴァの皮肉に明日菜は怒ったように言い返した。

「何よ！あんた達は3人だったんだから！卑怯よ！」

「何度も言わせるな。貴様達は私と茶々丸が相手をする」

それに応えるように茶々丸は一步前へ出た。それを見た明日菜とネギも構えた。

「茶々丸！あの小娘と遊んでやれ！」

「了解ですマスター」

そう言った茶々丸は凄まじい速さで明日菜に駆けていった。

「さて、坊やの相手は私だ。せいぜい楽しませてくれよ」

「くっ：ラス・テル・マ・スキル・マギステル！光の精霊17柱、集い来たりて敵を射て！『魔法の射手・連弾・光の17矢』！！」

ネギは懷から取り出した小さな杖をエヴァに向けて詠唱を始めた。そしてネギの詠唱と同時に空中に飛んだエヴァも同種の詠唱を始めた。

「なんだそのお子様用の杖は！！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！氷の精霊34頭、集い来たりて敵を切り裂け！『魔法の射手・連弾・氷の34矢』！！」

ネギの方が先に詠唱していたにも関わらずエヴァとネギの詠唱完成は同時だった。さらにエヴァの方が2倍の数の弾を放った。二種類の魔法の射手は光を放ちながらお互いの相手へと迫った。

両者の中間地点で相反するベクトルが衝突し、衝撃波と暴音が響いた。そしてその粉塵の中からエヴァの放った残りの魔法の射手が突き抜けてきた。

「そんなものか？」

「くっ！！」

ネギは障壁を張ることなんか回避していた。そんなネギをエヴァは文字通り空中から見下していた。

「詠唱が遅いぞ！！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

「うっ：ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

「来たれ氷精、闇の精！闇を従え吹けよ常夜の氷雪！」

エヴァが今までとは異なる詠唱を始めたのに驚愕したネギだったが、負けじと同種の詠唱を始めた。

「来たれ雷精、風の精！雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！」

「『闇の吹雪』！！」

「『雷の暴風』！！」

両者の詠唱によって収束した莫大なエネルギーが相手に向かって解き放たれた。そして2つの閃光が衝突した。その瞬間、辺りは夜とは思えない光が溢れ、爆発音が響いた。2つのエネルギーは両者の間で拮抗していた。

「くっ、確かにこの馬鹿げた魔力量は奴の息子なだけはあるなっ！！」

「うっ!!」

「だがまだ私には敵わないぞ!!」

「ま、まだです!!」

じわじわとエネルギーの拮抗はネギの方へ近づいてきていた。

「は、はっくしっ!!」

が、ネギのくしゃみによってネギの魔力が一時的に爆発し、拮抗は一瞬でエヴァの方へ傾いた。

「な!?! くしゃみだと!!」

そしてエネルギーはエヴァを呑み込んだ。爆発音と粉塵が収束した後、そこには衣服を吹き飛ばされて下着姿ながら無傷のエヴァがいた。

「よ、よくもやってくれたな!!」

第17話「共立」

イオは橋のアーチの頂上から真下で繰り広げられている2人の戦いを見ていた。否、正確には観測していた。

「ジュピター、ZPEの変動は観測したか？」

イオの問いかけに、右腕に埋め込まれた量子端末が合成音声で答えた。

”ZPEの変動を感知、変動領域7. 25〜85. 13。通常変動領域を逸脱、ZPFへの接続と予測”

「やはり魔法とはZPEの行使のことのようなだ：結界の影響はどうなっている？」

”結界の消滅を確認、結界によるZPF接続の障害も消滅。ZPFへの接続、通常出力で可能”

「ならばZPFへの接続が阻害されていたのは結界が原因で間違いないか？」

”その推測を肯定”

「やはり結界の効果はZPFへの接続抑制によるZPE出力の減衰、この世界線で言うならば魔力の抑制ということだな：マクダウエルの言う通りだ」

その時、エヴァがエネルギーに吞まれたのを見たイオは量子端末に

尋ねた。

「マクダウエルは無事か？」

”肯定。生体ZPEを確認、外傷無し。直前にZPEの障壁を確認”

「了解した」

そうやってイオは再び観測を続けようとした。

が、その時、明日菜の相手をしていた茶々丸が空中のエヴァに向かって叫んだ。

「マスター！！停電の復旧が予定より早いです！！」

それを聞いたエヴァは露骨に苛立った。

「ええい！いい加減な仕事しおって！！」

次の瞬間、麻帆良の電力が回復し、結界が復活した。

ーバチンッー

「ひゃん！！」

その結界によってエヴァは電撃を浴びたように体をくねらせた。そして魔力を封じられ、空中から川へと落下していった。

「いけない！マスターは泳げません！！」

呆然としているネギにそう言いながら茶々丸はバーニアを使ってエ

ヴァのところへ向かった。ネギも慌てて杖を呼び寄せてエヴァへ向かって飛んだ。が、落下していたはずのエヴァが突然消えた。

落下していたエヴァは突然重力を感じなくなった。何者かに抱き止められたように体が空中で静止した。

見ればイオがエヴァを無表情で抱えていた。それは一瞬のことだった。

次に気づいたときは橋の上に”位置”していた。イオが連続転移してエヴァを回収したのだった。

「一体何が…」

橋の上でイオに抱えられているエヴァは呆然と呟いた。

「無事のような」

イオは無表情で腕の中にいるエヴァに言った。エヴァはイオと視線が合った瞬間、顔を赤くしてイオの腕を乱暴に振りほどいた。そしてイオと距離を空けて向かい合った。

「な、なぜお前が!？」

そこへ茶々丸達がやって来た。

「マスターご無事ですか？」

問われたエヴァは若干どもりながら答えた。

「あ、ああ…大丈夫だ。だが何が起きたかわからん…」

「イオ様が落下していたマスターを助けてくださいました」

「む…そ、そうだったのか？」

エヴァはチラチラと盗み見るようにイオを見た。そこへネギが声をかけた。

「エウアンジェリンさん大丈夫そうで良かったです…でもっ僕の勝ちですね！悪いことは止めてもらいますよ！それに授業もちゃんと受けてもらいます！」

それを聞いたエヴァはネギを睨んだ。

「まあいいさ。だが！あのまま続けていれば私が勝っていたのだからな！」

そしてエヴァとネギは文字通り子供の喧嘩にしか見えない言い合いを始めた。

明日菜は恐る恐るイオに声をかけた。

「あんた悪いやつだと思ってたけど、エヴァちゃん助けたし、本当にネギと戦わなかったから…違ったみたいね…ごめんなさい！」

「オレっちもあんたを見誤ってた…すまん！」

勢いよく頭を下げる明日菜とカモを見てイオは平淡な口調で言った。

「気にするな」

それを聞いた明日菜は頭を上げて片手を差し出した。

「私、神楽坂明日菜。よろしく!」

イオは無表情でその手を見つめて佇んでいたが、思い出したように言った。

「…イオだ」

そう言って手を差し出して握手をした。

「オレっちはアルベール・カモミールだ。よろしくなイオの兄さん」

そして明日菜がカモを連れネギとエヴァの仲裁に向かった後、入れ違いで茶々丸がイオに近づいて来た。

「あの…イオ様。マスターを助けて頂いてありがとうございました」

そう言って綺麗なお辞儀をする茶々丸から視線を反らしてイオは言った。

「…気にするな」

「終わったみたいだぜ。じいさん」

高台に立っているガニメデは携帯で会話していた。

” そうかそうか。ガニメデ君、ご苦労様じゃった ”

ガニメデは高台から橋で行われていたエヴァ達の戦いを一部始終見ていたのだった。

「よく言うぜ。俺以外にもそちらさんの部下がしっかりと監視してたみたいじゃねえか」

” ふむ、気づいておったか ”

「そりゃ分かるぜ。そんなに俺達が信用ならないか？」

” フォッフォッフォッフ。そんなことはないぞい。イオ君が関わっているようなので、ガニメデ君にも頼んだのじゃ。無断でイオ君を監視するわけにもいかぬじゃろ？ ”

「まあ言い訳として聞いというてやるよ。にしてもあのイオがな」

” 意外かの？ ”

「珍しいことではあるな。まあ戦い自体には参加しなかったみえてだが」

” そのようじゃのう ”

「それで良かったぜ。あいつが参加してたらあんたに頼まれた通り俺が止めなきゃならなくなってたからな」

”ネギ君の成長の為じゃよ。悪く思わんでくれ”

「ああ気にしてないぜ。俺だって進んで引き受けたんだからな。それじゃ俺はもう帰るぜ」

”今日は助かったわい。感謝しとるぞ”

「ハッ、じじいに感謝されても嬉しくねえよ」

”フォッフォッフォッ。これは厳しいのう”

「じゃあな」

”それではの”

それから数日後の夜、ガニメデとイオはカリストから呼び出されていた。

2人が指定された場所である超包子の路上屋台にやって来ると、そこには円卓に座るカリストと知らない少女がいた。ガニメデとイオに気づいたカリストは、2人にも円卓に座るように言い、4人全員が座った。イオとカリスト、ガニメデと少女がそれぞれ向かい合うような位置関係だった。

そしてカリストが口を開いた。

「久しぶりだなイオ、ガニメデ」

そんなカリストにガニメデは面倒くさそうに言った。

「ああ。最近会ってなかったからな…で、そのチャイナガールは誰だ？」

ガニメデに怪訝な表情で見られた超はニコニコして笑い返した。

「紹介する。彼女は超鈴音。この超包子のオーナーであり、私のクラスの生徒でもある」

「よろしくネ。イオさん、ガニメデさん」

カリストに紹介されて挨拶した超を見てガニメデは言った。

「ああよろしく…てか教え子を夜に連れ出すなよ」

「誤解を招く言い方はやめろよガニメデ」

ガニメデの発言にカリストは眉をひそめた。そしてわざとらしく咳払いした。

「さて、紹介が済んだところで話がある…」

ガニメデは急に改まったカリストを怪訝な表情で見た。そんなガニメデを見てカリストは続けた。

「これから言うことは他言無用だ、いいな？」

「何だよいきなり」

「いいから誓え」

「…はいはいわかりましたよ」

真剣に言うカリストに対して、ガニメデは真剣さのない口調だった。

カリストは次にイオに向かって確認した。

「イオもいいな？」

「了解した」

2人の同意を確認したカリストは一度超に視線を向けてから言った。

「では話そう。まず、彼女は我々と同じ他世界線の人間だ」

カリストがそう言った瞬間、ガニメデの表情は凍りつき、イオですら僅かに目を見開いた。

「…どういう…ことだ？」

ガニメデは信じられないという口調で尋ねた。

「彼女はこの世界線の未来に酷似した世界線から来たんだ。つまり、未来から来たというわけだ」

平然と答えるカリストにガニメデは疑るように言った。

「…証拠はあんのか？」

そんなガニメデにカリストは冷静に答えた。

「彼女のタイムマシンを見せてもらった。あれは間違いなく本物だ」
そのカリストの発言に今度はイオが疑問を投げ掛けた。

「タイムマシン？」

「ああ。まあ私達の認識で言うならば、世界線跳躍装置といったところだ。調べてみたが、私達のジュピターや振動コアとは異なる原理で世界線間の跳躍を可能にしている」

その発言にガニメデは驚愕の声を上げた。

「何！？異なる原理だと？」

「ああ。私達のように量子化は必要ない。生身の人間でも跳躍が可能な装置だ」

「そんなもの…あり得ないだろ…」

「最初は私も信じられなかったが本当だ。魔力というこの世界線独自の捉え方と科学が成せた業だな」

「なら俺達の量子化は無意味だったのかよ！！」

「落ち着けガニメデ。そうではない。彼女のタイムマシンはカシオペアと言うのだが、カシオペアは膨大な魔力、すなわちZPEが無ければ稼働しない。何でも地球規模での変動がもたらすレベルでな

いと駄目だそうだ」

「地球レベルでの変動？」

「ああ。この麻帆良にある世界樹というのを知ってるか？」

「あのなんか馬鹿デカイ木だろ？あれ造りものじゃねえのか？」

「いや、あれは本物の木だ」

「何！？300m近くあるぞ？」

「だからこそだ。あれは特殊な木なんだ。22年に1度大発光する。その時、世界樹広場と他の6カ所に莫大な魔力、すなわちZPEが収束する。それを利用しなければカシオペアは動かないらしい。だから私達の量子化とは異なるんだ」

「…へえそうかい。要するに制限付きってわけだ」

「ああ。本来は来年がその発光の年なんだが、それが今年に早まったらしい」

「成る程…それを逃したらまた22年しないと帰れなくなると」

「そういうことだ」

「にしても、それが俺達にどう関係するんだ？」

問われたカリストはしばらく沈黙してから再び口を開いた。前髪に隠れていない方の片目が鋭くなった。

「彼女はある目的があつてこの過去そっくりの世界線に来ている」

ガニメデは訝しむように眉をひそめた。

「ある目的だ？」

それにカリストが答えた。

「未来に起きる”悲劇”を回避するという目的だ」

その発言にガニメデとイオは沈黙し、鋭い視線をカリストと超に送った。そしてガニメデは声を低くして言った。

「それがどう俺達に関係するんだ…？」

カリストはそんなガニメデの視線を受けながらも冷静な口調で答えた。

「私は彼女の計画に協力しようと思っている。お前達にも協力してほしい」

ガニメデはさらに表情を冷たくした。

「お前…本気で言ってるのか？」

しかしカリストも真剣な表情を変えなかった。

「ああ。本気だ」

「…そんなことして何の意味がある？こんな世界線に来てまで機関の真似事をすんのか？」

「そうではない。私は自分の意志で彼女に協力することを選んだ」

ガニメデは表情を変えずに無言で席を立った。

「…そうか。なら1人で勝手にやるんだな。俺とイオは協力しない」

そして背を向けてこの場から去ろうとしたガニメデに声がかかった。

「待てほしいヨ！」

今まで沈黙を守っていた超が立ち上がって、強い口調でガニメデに言った。

ガニメデはそんな超を半身だけ振り向いて睨み付けた。

「何だ？」

しかし、超は臆することなく言った。

「私からもお願いするネ。協力してほしいヨ」

ガニメデは表情を全く変えなかった。

「悪いが断る。あんたに協力する意味がない」

それでも超はガニメデを真っ直ぐに見た。

「確かに意味は無いかもしれないネ…カリスト先生に聞いたヨ。こ

の過去を変えたところで私の未来は変わらないとネ」

ガニメデの黒い瞳は冷たく超を捉えていた。

「ならばなぜだ？」

超はそんなガニメデの視線に負けない程強い瞳だった。

「でも気づいたヨ。」私の世界の過去”は変えられなくても”この世界の未来”は変えられるとネ」

超の瞳は強い決心に彩られていた。そんな瞳をガニメデは僅かに自嘲して見つめていた。

「ああ、そうだな…」

ガニメデには超がかつての自分達と重なって見えた。余りにも似すぎている。ガニメデはそう思った。

そうしてガニメデは無言で超の瞳を見つめた。

夜の路上には4人以外の人影は見当たらず、静寂が辺りを包んでいた。

そして暫しの沈黙の後、ガニメデはゆっくりと口を開いた。

「わかった…あんたに協力しよう」

そんなやり取りを見ていたカリストはイオに尋ねた。

「イオ、お前はどうする？」

問われたイオはしばらく沈黙し、決心したように言った。

「：協力する」

その表情は無表情だったが、その青い瞳の奥底には言葉にならない感情が蠢いていた。

それを聞いたカリストはようやく笑顔を見せた。

「では2人とも、もう一度席についてくれ」

そう言われた超とガニメデは再び席に座った。それを確認したカリストはゆっくりと口を開いた。

「では今から彼女の計画について話そう」

第18話「追跡」

「最近、盗賊から騎士団までを片っ端から潰してるというのは君かい？」

黒髪の少年がその白髪の少年に思ったことはただ一つ” 気に入らない” だった。

フェイトと黒髪の少年は対峙し、フェイトの方は空中に静止していた。

同じ少年でも、黒髪の少年は青年に近い年頃で、幼さの残るフェイトとは差があった。

そしてフェイトは無表情なのに対して、黒髪の少年は両手をポケットに突っ込んでやる気の無さそうな表情をしていた。

「さあ？何か突っかかってくる奴らを蹴散らした記憶はあるが」

その誠意の全くない返答にフェイトは無表情で言った。

「ふん：そうかい。君の力に少し興味を持ってね。その力、本物かどうか試させてもらおうよ」

そう言い、フェイトは空中に浮遊した状態から黒髪の少年に向かって急降下し、その勢いのまま拳で殴りかかった。

「ディヴァイン、適当にあしらえ」

が、黒髪の少年は構えることも無く咄けただけだった。そしてその言葉が発せられた瞬間、黒髪の少年の目の前に漆黒の壁が現れ、フェイトの拳を止めた。

「∴魔法障壁か」

フェイトは直ぐに黒髪の少年から距離を離して再び対峙した。その時、今まで黒髪の少年の目の前に展開されていた黒い壁に変化が起きた。壁にひびが入ったと思った瞬間、壁は砕け散るように無数の”刃だけの剣”となった。

そしてその全てがまるで意志を持ったかのように高速でフェイトに飛来した。

「っ！！」

フェイトは全てを回避したが、1度かわしても空中を飛び交う漆黒の剣は再びフェイトに襲いかかった。フェイトは迫りくるそれらを空中を飛び回りながら必死に回避していた。

そんな様子を黒髪の少年は先程から一步も動かずに見ていた。

「随分頑張るな、感心感心」

フェイトはこれ以上の回避は不可能だと悟り、再び黒髪の少年に向かって急降下した。

その後ろには無数の黒い剣が獲物を追うように追尾していた。フェイトは黒髪の少年を通り越し、その背後に静止した。そして、黒い剣はフェイトに向かっていった。それはつまりフェイトと剣の間にいる黒髪の少年にも向かってきていることを意味した。

「ディヴァインを俺自身にけしかけるとはな」

が、剣が黒髪の少年を貫く瞬間、その場から黒髪の少年は消えた。

「っ!？」

そして剣はフェイトに襲いかかった。

少し離れた場所に転移した黒髪の少年は、無数の剣によって貫かれたフェイトを睨み付けた。

しかしフェイトは何事もなかったかのようにその剣を引き抜いた。傷口のあるはずの場所は液体のように剣を引き抜いた瞬間に元通りになっていた。

「やれやれ…分身でよかったよ」

そう言うフェイトを黒髪の少年は深紅の瞳で睨み続けていた。

「貴様、何者だ？」

そんな問いかけにフェイトは無表情で答えた。

「僕はフェイト・アーウェルンクス。君も名乗るのが礼儀じゃないかい？」

黒髪の少年はフェイトと名乗った白髪の少年を警戒したまま答えた。

「エゼだ…」

黒髪の少年、エゼをフェイトは相変わらず無表情で見ていた。エゼはそんなフェイトに苛立ちを覚えた。その無表情であるにも関わらず感情を秘めているような表情には見覚えがあったからだ。それも片時も頭から離れない程強烈に。

「君に話したいことがあるんだ。こんなところではなんだし、街にでも行かないかい？」

フェイトの誘いにエゼは睨み付けたまま答えた。

「ああ構わない。だが、変な真似してみろ、分身だろうが塵にしてやる」

そんなエゼにフェイトは無表情で言った。

「肝に命じておくよ」

エゼは驚愕していた。それは街が余りにも予想を越えたスケールだったからであった。流線型の巨大戦艦が空中に浮かび、その下には巨大な建造物が建ち並んでいた。街というより一つの世界のようにあった。さらに行き交う者の中には獣の尻尾や耳が生えている亜人までいた。

「いくら可能性が無限にあるからって…さすがにこんな世界線は初めてだ…」

そう呟くエゼを見てフェイトは尋ねた。

「君は旧世界の人間なのかい？」

「いや、他世界だ」

そんな返答をするエゼを疑問に思いながらもフェイトは無言で歩き続けた。

そして2人はオープンテラスのカフェに入り、テーブル越しに向かい合って座っていた。フェイトは注文した珈琲に優雅に口を付け、エゼは無言でその様子を睨むように見ていた。

「君は何か飲まないのかい？」

「生憎、俺には飲食は必要ないんでね」

「ふーん。やはり君は人間ではないみたいだね」

「ああ。だが、お前も人のこと言えないだろ」

「そうだね」

「そんなことより、話ってのは何だ？」

「君の目的を聞きたい。それだけの力、何に使うのか興味があつてね」

問われたエゼは苦々しい表情になった。

「俺の目的はただ一つ。復讐だ」

フェイトは無表情のままそんなエゼを見た。

「そうかい。ならば問題はないね」

エゼは怪訝な表情になった。

「何の話だ？」

しかしフェイトは平然と答えた。

「君の理想と僕らの理想がぶつかる問題はないということだよ」

「…どういう意味だ？」

「君には僕らと協力してもらいたい、という意味さ」

エゼは口の端をつり上げた。

「この俺に協力しろとはな。正体もわからない奴を誘うとは正気か？」

対するフェイトは相変わらず無機質な顔を貫いていた。

「正体なんてどうでもいいんだ。この世界では力が全てさ。力無き者には何も成せない。力が有れば全てを変えられる…君にはその力がある。だから誘っている。簡単な話さ」

エゼはさらに口の端を歪めた。

「ククク…いいねお前。あいつに似てると思ってたがだいぶ違うみたいだな」

そしてエゼはしばらくフェイトを見た後、再び口を開いた。

「いいぜ。協力してやるよ。ただし、俺の目的にも協力してもらう」とある奴”を探してもらいたい」

「可能な限りは協力しよう。その”とある人物”の所在を突き止めればいいんだね？」

「ああ。悪いが手がかりは名前と外見くらいだ」

「構わないよ。それじゃあその手がかりを教えてもらえるかな」

「わかった。だが、今から言うことの理由は探るな」

エゼの発言の意図が掴めないフェイトは無表情のまま言った。

「わかつたよ」

それを聞いたエゼは声を僅かに低くした。

「名前はイオ。そして奴は灰色の髪に青い目をしている…それ以外は」

エゼはそこで一度言葉を切り、そして苦々しい表情で言った。

「俺と全く同じ外見だ」

カリストは学園長に呼ばれ、学園長室に来ていた。

「何か御用でしょうか学園長？」

立ったままのカリストは椅子に座る学園長に尋ねた。それに対して学園長は笑顔を見せた。

「いや、わざわざ呼び出してすまぬの。実は修学旅行について話があるんじゃないよ」

それを聞いたカリストは思い出したように言った。

「そう言えば数日後に迫っていますね」

学園長は頷いた。

「うむ。それで行き先なんじゃがな、京都に決定となったんじゃない」

「京都ですか」

「話はまだあったの。カリスト君はわしが関東魔法協会の理事長を勤めとるのを知っておるな？」

「はい存じています」

「京都にはの、関西呪術協会の総本山があるのじゃが…どうにもわしら西洋魔法使いを敵視しておる輩が西にはいるんじゃない」

「ならば危険ではないのですか？」

「いや、露骨には手を出して来ないじゃろう。まあとにかく西と東はいがみあつとるわけじゃが、わしはそんな下らん争いは避けたいのじゃよ。じゃから西の長に親書を書いたのじゃ。今回はそれを届けるという意味合いもあるのじゃよ」

「なるほど：それならばあちらも手出しはできないでしょうね。それで、その親書はどなたが届けるのですか？この場合、立場が重要になってくると思うのですが」

「うむ。それについてはネギ君に任せるつもりなんじゃ」

学園長のその発言にカリストは驚愕の表情になった。

「学園長！流石にそれは危険なのは？確かに彼の立場ならば適任ですが、過激派が何か仕掛けてくる可能性もあります：彼には荷が重すぎるのでは？」

そんなカリストに学園長は落ち着いた口調で言った。

「その為にカリスト君を呼んだのじゃ。それにネギ君には良い経験になるじゃろう」

カリストは少しばかり眉をひそめた。

「つまり私に彼のサポートをしろと？」

しかし学園長は平然とした態度を崩さなかった。

「そうじゃ。戦闘になることなどよもや無いと思うが、快く思わん一部の連中は妨害をしてくるじゃろうからの。頼まれてくれぬかの

「？」

カリストは一度目を閉じて、ゆっくりと開いた。

（貴方は本当にとんでもない爺ですね…）

「…わかりました。要するに生徒達を護衛しつつ、ネギ先生の成長を阻害しない程度に安全を確保すればいいのですね？」

学園長は驚いたようにカリストを見た。

「ほう。理解が早くて助かるのう。頼むぞい」

カリストは真顔で応えた。

「了解しました」

イオはここ最近、毎回昼間から特に理由もなくエヴァに呼び出され、挙げ句にエヴァのログハウスに朝まで宿泊させられていた。今日も、すっかり定位置になった居間のソファ―に座り、向かいのエヴァと他愛ない会話をしていた。

尤も、イオ自ら話しかけることは余りなく、エヴァが適当な時に声をかけているだけであった。

「あゝそういえば近々修学旅行だな」

エヴァは椅子にだらしなくのけ反りながら天井を見て呟いた。その姿はとても真祖の吸血鬼には見えなかった。

「行き先は京都です」

そこに紅茶のおかわりをトレーにのせて持ってきた茶々丸が声をかけた。

「あゝ京都かゝまあここを出れない私には関係ないがな…何度も言うが、お前は行って来てもいいんだぞ？」

エヴァは顔だけ茶々丸に向けて言った。

「いえ。私はマスターのお側にいます」

そんな茶々丸の言葉に悪い気はしないのかエヴァは上機嫌に見えた。

「そうか」

それだけ言うとエヴァは再び天井にのけ反った。そんなエヴァを無表情に見ながらイオは言った。

「行きたいのか？」

エヴァは姿勢を変えずに答えた。

「ハッ。あんな騒がしいガキどもと行ったところで何も楽しくない」

イオは天井を見つめているエヴァを見たままさらに言った。

「ならば京都自体には興味があるのか？」

エヴァは顔だけイオに向けた。それにあわせて長い金髪が流れるように揺れた。

「まあな。私はこう見えても日本文化は好きな方だからな」

イオは姿勢をテーブルに落とした。

「そうか…」

エヴァは青い瞳でそんなイオを見つめた。

「お前はどんなんだ？ 京都とか好きなのか？」

問われたイオは視線をエヴァに戻した。

「京都というのはこの日本の有名な都市と聞いている。俺とガニメデの先祖は日本と関係があったようだから興味はある」

それを聞いたエヴァは意外に思った。それはイオが自らの情報を話したことと、興味があると明言したからであった。

「ほお。そうだったのか…お前に日本の血が流れてるとは到底思えんが…いや、それにしても日本語が異常に上手いな…というからお前の出身国はどこなんだ？」

イオは僅かに俯いた。灰色の前髪が静かに揺れた。

「…言っても理解できないほど遠い場所だ」

そう呟くように言う表情はエヴァからはよく見えなかった。

第19話「真意」

「…言っても理解できないほど遠い場所だ」

そんなイオの返事にエヴァは鼻を鳴らした。

「フン。答える気がないなら別にいいさ。まあ日本ではないということだな。それにしても日本語が上手いな…ひょっとして言語は得意なのか？」

イオは無表情で答えた。

「ほぼ全ての言語は理解可能だ」

エヴァは驚いたように目を見開いた。

「お前…何気にすごいな」

しかしイオは変わらず無表情だった。

「カリストとガニメデも同様だ」

エヴァは今度こそ驚きの表情になった。

「そうだったのか！？もしかしてそれはお前達の魔法によるものなのか？」

その問いに、イオは表情を変えずに答えた。

「そうだ。以前、情報場について話したのを覚えているか？」

エヴァは腕を組んで考える仕草をした。

「万物が持つ情報を自動記録する高次元の場とかだったか？」

イオは無表情で続けた。

「そうだ。そしてZPFの説明も覚えているか？」

「あゝ確か世界に偏在する場で：万物はそこにある：だったか？」

「そうだ。一度情報障壁を見せたが、あれは俺の固有生体ZPFだ。つまり情報場とZPFは同じものだ。世界そのものの情報場がZPFと言ってもいい」

「ほお。それで、それがどう関係するんだ？」

「我々はZPFにアクセスしてZPFの持つZPEというエネルギーを使用していると話したが、ZPFにアクセスするということは世界の情報場に接続していることと同じだ。そして世界の情報場には文字通り世界の全ての情報が記録されている：この世界線というアカシックレコードという概念に近いが：宇宙の始まりから現在、正確には未来までの情報は全て記録されている。そこには当然この惑星の言語情報も全て記録されている。我々はその情報を自己の情報場に書き加えることであらゆる言語を理解可能となる」

エヴァは言葉を失った。

「ま、まて！この世界の全ての情報が記録されているだと？」

対してイオは平然としていた。

「当然だ。世界の情報場なのだから世界の情報が記録されている。我々と同じだ」

エヴァは怪訝な表情になった。

「同じ？」

そんなエヴァを見てイオは言った。

「質問だ。我々の記憶というものは何処に存在していると予想する？」

エヴァは当然のように答えた。

「頭、脳だろ？」

が、イオは直ぐに言った。

「不正解だ。脳ではなく自己固有の情報場に存在している」

エヴァは驚きの表情になった。

「何!？」

対してイオは無表情で説明するように言った。

「脳とは高次元の情報場にこの物理次元から接続するための装置だ。」

脳には情報は記録されない」

「ならばなぜ脳にダメージを受けた人間は記憶が欠落したりするのだ？ 脳に記憶があるからではないのか？」

「情報場への接続をする脳にダメージを受けた場合、その接続が不完全になる。結果として情報場から記録を取り出すことができなくなり、記憶が欠落する」

エヴァはしばらく無言になって考える仕草をした後、再び口を開いた。

「成る程な。しかし…ということは、お前達は世界の全てを知ることができるのか？」

その質問にイオは無機質な表情で答えた。

「それは不可能だ」

「なぜだ？」

「情報に接続できたとしても理解できなければ意味はない」

「どういう意味だ？」

「例えばこの世界線というなら：インターネットの情報をパーソナルコンピュータやエクスポーラ無しで理解しようとしても我々には0と1の羅列にしか見えない。それを理解しようとしても不可能だ。そういう意味だ」

そんなイオの説明にエヴァは余計に混乱したような表情になった。
それを見たイオはエヴァに聞いた。

「例えが悪かったか？」

聞かれたエヴァは若干恥ずかしそうにした。

「い、いや…私は機械類がどうにも苦手だな…すまないが機械のこととはよくわからないんだ…」

しかしイオは無機質な表情のまま言った。

「それも一例だ」

言われたエヴァは首を傾げた。

「?？」

「つまり俺は情報を提示しているのにマクダウェルは理解できない、そういうことだ」

その説明にエヴァはわかったようなわからないような表情になった。
そんなエヴァを見てイオは続けた。

「それに我々は全ての情報に接続できるわけではない。我々の接続領域には限界がある。例えば言語情報には接続できても歴史情報には接続できない。かなり狭い領域にしか接続できない」

エヴァはいつの間にか乗り出すようになっていた姿勢を戻し、尊大に座り直した。

「まあ要はお前達にも限界があるということだな…私に話してよかったのか？」

それに対してイオは平然と答えた。

「何度も言うが、この世界線の科学水準から推測される範囲を逸脱する内容は話していない。仮にこの情報が第三者に渡ったとしても誰一人として真に受けないだろう。それに、マクダウェルが漏らすようなことはないと思っている」

そんな発言にエヴァは上機嫌になった。

「ま、まあな」

ガニメデは学園長室に来ていた。

「…何か用かじいさん？」

ぶっきらぼうなガニメデに学園長は気分を害した様子もなく笑顔を見せた。

「フオッフオッフオツ。実は折り入ってお願いがあるんじゃないよ」

そんな学園長にガニメデは苦笑いした。

「あんたには世話になってるからな、出来る限り協力するぜ」

学園長はさらに笑い声を上げた。

「フオッフオッフオッフ。そう言ってもらえると助かるのう」

ガニメデな真顔に戻って尋ねた。

「それで、お願いってのは何だ？」

学園長も真剣な表情になって答えた。

「近々、中学生三年生の修学旅行があつての。行き先は京都に決まったのじゃが、その京都がちと問題での：以前関西呪術協会とわしら関東魔法協会が揉めとるのは話したと思うのじゃが、その関西呪術協会の本山が京都にあつての。ネギ君に西の長へ親書を渡してもらうのじゃが、妨害は確実にあるじやろう。向こうも露骨には手出しせんじやろうが危険がないわけではないんじゃないじゃ：そこでガニメデ君には生徒達の護衛を頼みたいんじゃない」

ガニメデは軽く肩をすくませた。

「まあ大方理解したぜ。要は邪魔者を蹴散らせばいいんだな？」

その発言に学園長はまた笑い声を上げた。

「まあそうなのじゃがな。ガニメデ君には先生や生徒達には秘密で行動してほしいんじゃない」

それを聞いたガニメデは怪訝な表情になった。

「別に構わないが、なぜ秘密にする必要がある？」

「ネギ君にはなるべく自分の力で乗り切ってほしいんじゃよ」

学園長の返答にガニメデは鼻を鳴らした。

「部外者の俺にとにかく言う資格はないが：随分と過保護だな」

それに対して学園長はお馴染みの笑い声をあげた。

「まあそう言わんでくれ。協力してはくれんかの？」

「ああ勿論協力する。言っただろ？あんたには世話になってるってな」

ガニメデの返答に学園長は笑顔を見せた。

「感謝するぞい」

「ハッ、だからじいさんに感謝されても嬉しかねえよ。しかし、カリスト達にバレないように行動するのは骨が折れるな…：そういや護衛ってのはどのレベルまでやっちまっていいんだ？」

「そのさじ加減はガニメデ君に任せるぞい」

ガニメデは口の端をつりあげた。

「いいのか？京都のやつら全滅させちゃうかもしれないぜ？」
学園長は笑顔で言った。

「わしはガニメデ君を信じとるよ」

その言葉にガニメデは肩をすくませた。

「はあゝ。そんなこと言われたら真面目にやるしかなくなるじゃねえか…」

「フオッフオッフオッフ」

そんなガニメデを見て、学園長は満足そうに笑った。

「はあゝ俺は何やってんだかなあ」

ガニメデは新幹線のプラットホームで騒ぐ生徒達を離れた場所から見ながら呟いた。

「あゝあれはネギ・スプリングフィールドとかいう子供先生だな…あいつに親書任せて大丈夫なのか？」

ガニメデは生徒達と同じように騒ぐネギを見て呟いた。そこに橙色の髪の背の高い男がネギに近づき、何か話しかけた。

「げ…カリストか…量子センサーはZPFステルスで回避できるは

ずだが：何か緊張するな：」

しばらくそうしているとホームに新幹線が到着し、ネギやカリストに促されて生徒達は中へ入って言った。

「さて、俺も行くか」

それを確認して、ガニメデはその隣の車両に搭乗した。そして席に座った。

「まあ車内ならさすがに大丈夫だろう」

そう言ってガニメデは瞳を閉じて眠り始めた。

カリストはネギと共にホームに並んでいた。さすがに自分たちより早く集合していた生徒がいたことにはカリストも驚愕した。そして生徒達がぞろぞろと集まって来るのを見ていた。

「皆さん早いですね」

生徒と同じ位に嬉しそうなネギを見てカリストは苦笑いした。

「カリスト先生は京都は初めてなんですか？」

ネギの質問にカリストは微妙な表情をした。

「そうだね。正直あまり詳しくはないんだ」

「そうですか。僕もイギリス出身なんで京都という場所は知りませんでした。カリスト先生はどこの御出身ですか？」

「私は孤児なんで出身地はよくわからないんだ」

カリストは自嘲気味に笑った。

「あ！す、すいません！！変なこと聞いちゃって！！」

ネギはそんなカリストを見て慌てたように謝った。が、カリストはそんなネギを見て明るい表情になった。

「気にしないでいいよ。私は気にしてないからね。むしろ気を使われる方が嫌だな。これからは私に気を使ったりしないでくれ」

そう言ってネギの頭に手を乗せた。ネギはそんなカリストを呆然と見ていたが、気づいたようにパッと笑顔になった。

「はい！わかりました！」

そんなネギを見てカリストはさらに笑顔になった。

「フッフ：お前だけ仲間外れだな」

そんなからかうようなエヴァの発言にもイオは無表情だった。

「マクダウエルこそそうではないか」

その発言にエヴァは少し拗ねたようになった。

「フン。だからあんな小娘達と行きたくなどないと言っているだろう」

イオは何時ものようにエヴァのログハウスに来ていた。しばらく沈黙した後、イオは言った。

「カリストには理由があるが、なぜガニメデまで行く必要があるのか理解できない」

そんなイオの発言にエヴァは鼻を鳴らした。

「大方、関西呪術協会から生徒を守るとかそんなとこだろ：あそこは本山があるからな」

「理解した。完全には信用していない我々を分断して利用するつもりか」

「ガニメデとかいう奴はお前より利用しやすかったんだろ。戦闘狂みたいだしな。お前みたいに深く探ったりしないんだろ？」

「その通りだろう：」

「まあ今回でお前達への疑いは完全に晴れるんじゃないのか？ 今だって完全に疑ってたら同行させたりしないだろ」

「その推測は正しいと予想する」

再び沈黙が訪れた。静かな森の中に位置するログハウスの中にはゆったりとした時間が流れていた。エヴァは無表情のイオを見ながらぼうつとしていた。

「なあイオ…」

呼ばれたイオは深青色の瞳をエヴァに向けた。

「お前は…いつまでここにいるんだ？」

エヴァの薄く蒼い瞳は何かを秘めたようにイオの濃く青い瞳に向けられた。青い濃淡の視線が交錯した。イオは無機質な顔を僅かに変化させた。

「我々の目的が達成されるまでだ」

それを聞いたエヴァはイオから視線を外した。

「そうか」

そう呟いたエヴァの横顔は切なく見えた。

第20話「屈折」

「この男を知ってるか？」

黒いコートのような服に身を包んだエゼは、とあるバーのカウンターでマスターに写真を見せた。

「知ってるも何も、ジャック・ラカンじゃねえか。誰だって知ってるさ」

小太りのマスターは当然のように答えた。

「居場所を知りたい」

エゼはそんなマスターを無視してさらに尋ねた。

「そんなもん俺が知りたいよ。奴らがどうなったかなんて誰も知らないさ」

エゼはそれを聞くと店を後にした。

「つたく：フエイトのくそガキ：面倒なこと押し付けやがって。そんな有名ならなんで誰も居場所知らねえんだよ」

エゼは夜の道を歩きながら、不機嫌に呟いた。

「こんなことに使いたくねえが：ZPFに接続して探すか：」

そう言ってエゼは突然足をとめ、その場に立ち止まった。

「量子端末、起動しろ」

エゼの指令に合成音声が答えた。

” バイオコード認証：確認完了。端末起動”

エゼはそれを確認すると続けて言った。

「Z P Fに接続しろ。 個体情報検索、情報値入力は想念に同期」

” 了解。 振動コア、振動数上昇：Z P F接続：完了。 情報値入力：
照合……個体情報に接続完了”

それを聞いたエゼはゆっくりと歩き出した。

そこには熱帯雨林の森林の中に建つ別荘のような建物が広がっていた。

「あいつもこんだけ楽に見つかればいいんだがな……さて……」

エゼの視線の先には褐色肌の大男がいた。筋肉の鎧を全身に纏ったその体格の良さは、腕などエゼの三倍はあろうかというほどで、ガニメデよりもさらに屈強だった。

そして突然現れたエゼを警戒しながらも惚けた表情をしていた。

「お？客か？残念だが、男の客は遠慮してんだけどなあ」

エゼはそんな大男、ラカンを深紅の瞳で睨み付けた。

「俺は客じゃねえよ：アンタの力量を計りに来た」

そんな様子のエゼを見て、ラカンは視線を鋭くさせた。

「この俺の力量を計る？そりゃ無理だぜ坊主」

それを聞いたエゼは口の端をつり上げた。

「ディヴァイン第二解放」

そう呟くと、エゼの回りを囲むように、4本の漆黒の剣が現れた。

そしてエゼの身体の一部が闇に染まったように黒く変色した。それを見たラカンも不敵に笑った。

「洒落たアーティファクトだな。それにその体：闇の魔法『マギア・エレベア』か？」

対してエゼは見るものを凍えさせるほどに冷たい表情をしていた。

「アーティファクト？闇の魔法？そんなちんけなものと比較して欲しくないな。これはそんな玩具とは次元が違う…」

そして言葉を切った。次の瞬間にはラカンの背後に転移していた。エゼは右手に圧縮したZPEをラカンの背中で爆発させた。

ラカン回避しようとしたが間に合わず、そのまま吹き飛ばされた。建物に衝突し、粉塵が舞った。

エゼはラカンが吹き飛んだ場所を無表情で見ながら言った。

「ハッ！中々効いたぜ坊主！」

が、その粉塵の中から飛び出してきた無傷のラカンは、その勢いのままエゼに迫った。

しかし、エゼは構えることすらなかった。ラカンの拳がエゼを捉える寸前、その拳はエゼの周囲を舞っていた漆黒の剣に止められた。

「ほお」

ラカンは驚愕した。全力とまでは言わないが、それなりの力を出した拳がアーティファクトごときに簡単に止められたからだだった。

「ダイヴァイン、やれ」

エゼはそんなラカンに冷たい視線を送って言った。そう言った瞬間、空中を舞っていた4本の剣は意思があるかのようにラカンに飛来した。

「チッ！！おらおらおらあああ！！」

が、その全てはラカンの目では捉えきれない速度の拳によって弾かれた。

しかし、弾かれた漆黒の剣は独りでに体勢を整え、再びラカンに襲いかかった。そんな様子をエゼは先程から一步も歩かずに見ていた。

「へっ！ならこれでどうだ！！羅漢萬烈拳！！」

ラカンが神速の拳を振りかぶった。

—パキンッ—

その拳は漆黒の剣に命中し、その1本が砕け散った。それを見たエゼは目を見開いた。

「何！？ディヴァインを素手で破壊した！？」

そして一瞬のうちに4本全ての剣が砕かれた。ラカンは笑みを浮かべてエゼを見た。

「さあどうした坊主？アーティファクトはもう無くなっちゃったぜ？」

エゼは真顔になった。

「そうか…この世界線の英雄は伊達ではないということか。理解した…ディヴァイン第三解放」

そう言った瞬間、エゼを取り囲むように35本の剣が螺旋状に現れた。そして先程とは異なり、その全てが異様な黒いオーラを放ち、エゼの身体の半分ほどが闇に染まったように漆黒に変色した。エゼの着ている黒い服さえもより深い闇の色に染まっていた。そして闇に光るエゼの赤い瞳が冷たい視線を送っていた。

（また同じアーティファクトか…だがさっきと違って何か嫌な気配だぜ…こいつはやべえな…）

それを見たラカン は直感した。これは危険なものだ、存在してはならないものだ、と。

「さあいくぞ」

そんなラカンに冷たく言い放ったエゼは手近にあった2本の剣を両手に握った。その漆黒の剣は”刃だけの剣”であり、柄などないにも関わらず、エゼは一切の躊躇なく握りしめた。

さらにエゼは真上の空中に跳躍した。その瞬間、エゼの両足を支えるように1本の剣が足元に近づき、エゼはその剣にまるでスノーボードのように乗った。残りの剣はエゼの背後に整然と並んでいた。

そして、エゼはその剣に乗った状態で空中を飛び、ラカンに迫った。が、気づけばラカンの周囲にも様々な大剣が無数に現れた。

ラカンはその中から一本を乱暴に引ったくり、空中から斬りかかってくるエゼの剣を防いだ。

「足りないぜ」

「その減らず口、いつまで続くかな？」

エゼは空中を縦横無尽に飛び回りながら急降下してはラカンに斬りかかり、ラカンは駆け回りながらそんなエゼの攻撃を防いでいた。

どれくらいそうした攻防が続いたか、エゼは突然空中に静止した。

「どうした坊主！もう終わりか？」

ラカンはエゼの様子を探りながら叫んだ。

「いや。終わるのはアンタだ」

そう言ってエゼはラカンに向かって腕を伸ばした。

それに呼応するように、今までエゼの背後で整然と並んでいた剣が一斉に地上のラカンに向かって降り注いだ。ラカンはその剣の雨を目視不可能の速さで縫うように回避し、回避不能なものは大剣で防いだ。

全てをしのいだ後、大地には無数の漆黒の剣が突き刺さっていた。それを見たエゼは僅かに口の端をつり上げた。

「今のを全て回避したか。アンタ人間か？」

ラカンはそんなエゼを見上げた。

「俺様は最強だからな。こんなもんじゃやられねえ…なっ!!」

そして手に持っていた大剣をエゼに向かって槍のように投げた。高速で迫るそれをエゼは僅かに体勢を変えて回避した。

「遅いぜ坊主」

「!？」

が、次の瞬間には跳躍してきたラカンが目の前に迫ってきた。

そしてラカンはエゼの頭を鷲掴みにして空中から地面に投げ落とし

た。

「くっ!!」

地面に打ち付けられたエゼはクレーターの中心に仰向けに倒れ、初

めて焦ったような表情になった。激痛に歪む視界には空中から追撃しようとして落下してくるラカンが映っていた。

「螺旋掌！！」

そしてラカンは落下の速度を生かしてエゼに掌を打ち付けた。

爆音が響き、地面が割れて岩塊が吹き飛んだ。しばらくの静寂の後、手応えに違和感を持ったラカンはゆっくりと立ち上がった。

「今のは危なかった」

ラカンの背後から掌を受けたはずのエゼの声がした。ラカンが振り返えると無傷のエゼが無表情で佇んでいた。

「デメエ：何モンだ？」

ラカンはそんなエゼに警戒を緩めずに尋ねた。

「：エゼだ。アンタはジャック・ラカンだよな？ 赤い羽だっけか？ まあどうでもいいが」

対するエゼは全く緊張感ない口調だった。

「エゼ：聞かねえ名前だな：因みに言っとくが紅き翼だ坊主」

「坊主じゃねえよ脳筋オッサン」

そんなエゼの発言にラカンは大声で笑った。

「プツ。フハハハハハ！！ 脳筋オッサンって何だそりゃ？ ハハハハ

ハ！！！」

「笑いすぎだ」

エゼはそんなラカンを冷やかな口調で批判した。ひとしきり笑ったラカンは先程の真面目な雰囲気は何処かへ忘れたようにエゼを見て言った。

「いいな坊主！！そんだけのハイクオリティのジョークセンスとは中々いいじゃねえの！！まあ俺様には遠く及ばないがな！！あと惜しいことに…体が弱っちいなあ」

対するエゼは何処か不機嫌になった。

「アンタの体が化け物なんだよ…てかさっきのはジョークじゃないしハイクオリティでもない。アンタのセンス疑うぜ…」

それを聞いたラカンは対照的により上機嫌になった。

「ハッ！言うねえ坊主！で、俺様の力量はちゃんと計れたのか？最強ってな」

「アンタは規格外ってのはよくわかった。さすがに疲れた…失礼する」

「おいおい待てよ。つれねえなあ…って、あ？」

次の瞬間、その場からエゼは消えていた。

――――

「っ!？」

イオは突然目覚めた。荒い息づかいのままソファから起き上がり、ゆっくりと窓へ近づいてカーテンの隙間から夜空を眺めた。

「デーベ…なのか…？」

その瞳は揺れていた。

――――

夜の街の一角、路地裏の暗闇の中に1つの人影があった。壁に片手をつき、もう片方の手で顔を押さえていた。

「くそ…第三段階でこの様か…こんな短い時間ですら世界抵抗に侵食されるとは…」

その表情は苦痛に歪み、手は小刻みに震えていた。

「く…存在が確定しない」

ルーはその震える手で服の中から注射器のような試験管を取り出した。そしてその白い液体の入った試験管を眺めた。

「…こんなモノに頼らなければならないとはな」

一瞬の沈黙の後、その針の部分を自らの首筋に突き刺し、中の液体を流し込んだ。

「くっ…」

そしてその空になった試験管を乱暴に引き抜き、投げ捨てた。
闇の中に、ガラスの割れた音が響いた。

「あと…3本か…」

そして何事もなかったかのようにその場を後にした。

「おい…フェイトのくそガキは何処だ？」

エゼは無表情で目の前の5人の少女達に言った。

「何て下品な口調なんですか！！くそガキじゃなくてフェイト様です！！！」

そんなエゼに猫の耳を持つ暦という名の少女が怒鳴った。ショートカットの黒髪で三角形の猫の耳が特徴的な亜人であった。

「無礼者！！！」

続けて長い髪をツインテールにしている焰という名前の目付きの鋭い少女が語気を荒げた。

「口の聞き方を気をつけてください」

それに、木のような角を頭に生やした調という名前の長い髪で常に瞳を閉じている亜人の少女が続いて言った。

「信じられません！」

さらに続けて、尖った長い耳を持ち、僅かに波打つ髪を肩まで伸ばした栞という亜人の少女も同調して言った。

「……」

そして最後に環という褐色の肌で角を生やした無口な亜人の少女が声には出さず非難の視線をエゼに向けた。

「何でそこまで言われなきゃなんねえんだよ……」

フェイト達の拠点、墓守り人の宮殿に戻ったエゼは、フェイトが何処にもいないのを疑問に思い、彼の仲間である5人の少女に居場所を尋ねたのだった。

が、エゼは常に5人から敵視されており、日々居心地の悪さを感じていたのだった。

そんな5人の少女からの非難を一斉に受けたエゼは眉にしわを寄せた。

（全くウザイガキどもだ…）

「はいはい：悪かったな：アンタらの愛しのフェイト殿下はどこにいらっしやいますでしょうか？」

そんなエゼの発言に全員が一斉に顔を赤くした。その顔は怒りや羞恥心が混ざったような表情だった。

「き、貴様！何を言っている！！」

焰はエゼを睨みながら怒鳴った。

「だからアンタの大好きなフェイトくんは何処かって聞いてんだよ」
対してエゼは面倒くさそうな様子だった。

「あなたが任務についている間にフェイト様は旧世界に向かわれました」

そんなエゼに調が答えた。

「…チツ。約束通りラカンとか元老院の裏のごたごたまで調べてやったのによ…まあいい邪魔したな」

そう言ってエゼはその場を去った。

その場に残った少女達は啞然としたような微妙な表情になった。

「あいつ…今さらっとスゴいこと言わなかった？」

暦は他の4人に問いかけるように言った。

その問われた4人は同時に頷くだけだった。

第21話「信頼」

エヴァは二階から降りて来ると、イオが居ないことに気づいた。何時もであればソファで寝ているはずだったが、今日は何処にも見当たらなかった。

「おはようございますマスター」

そこに茶々丸がやってきてエヴァにお辞儀をした。

「ああ、おはよう茶々丸。イオがいないが、何処にいるか知ってるか？」

問われた茶々丸は機械的に返答した。

「今日の午前3時21分に外出なさいました」

エヴァは眉をひそめた。

「そんな時間にあいつは何しに行ったんだ？」

問われた茶々丸は少し間を置いて答えた。

「…大した要件ではない、とおっしゃっていました」

それを聞いたエヴァは無言で玄関まで向かい、ドアを開けた。

「マスター？その格好では風邪を引いてしまいます」

茶々丸はランジェリー姿のまま外へ出ようとするエヴァに戸惑いながら言った。が、エヴァはそれを無視して無言のまま外の森へ出た。

「マスター…」

茶々丸はそんなエヴァを戸惑うような表情で見て、後を追った。

イオは深夜にログハウスから抜け出し、近くの森の中の開けた場所で目を閉じて佇んでいた。

「……ジュピター、結果はどうだ？」

いつまでそうしていたか、イオは突然口を開いた。

” テーベ0014の固有ZPF、探知陰性。量子存在の探知は不可能”

イオの右腕に埋め込まれた量子端末が機械的に返答した。

「…やはり無理か」

イオは目を開いて呟いた。そして木々のそよぐ静かな音を聞いた。既に朝になり、日が木々の間から降り注いできていた。イオはそん

なゆつたりとした時間を感じていた。それ故、完全に警戒を緩めていた。

「おい…」

そして、その静寂は第三者の声で途切れた。

イオが少し驚きながら振り返ると、そこには長い金髪を風になびかせたランジェリー姿の小さな少女がいた。その目付きはどこか鋭かった。

その後ろには緑色の長髪でメイド服姿の従者が控えていて、イオと目が合うとお辞儀をした。

「イオ、何をしていた？」

エヴァは低い声で問い詰めるように言った。

「…大したことではない」

イオは機械のような表情を見せた。

「いいから答えろ…」

が、エヴァは眉間にしわを寄せてさらに声を低くした。

「その必要はない」

対するイオも無表情で言った。それを聞いた瞬間にエヴァはゆつくりとイオに向かって歩いた。茶々丸はそんなエヴァの行動を不思議そうに、イオは無表情で黙って見ていた。

そしてエヴァはイオの目の前まで来ると立ち止まり、突然両手から

黒いワイヤーを出し、一瞬の内に無防備だったイオの両足を縛った。

「っ!？」

「マスター何をっ!？」

突然の行動に困惑するイオと茶々丸を無視し、エヴァはさらにイオの両手を縛りあげた。体勢を崩したイオは棒のように後ろに倒れた。エヴァは仰向けに倒れたイオに馬乗りになり、胸ぐらを締め上げて叫んだ。

「私は言えと言っているんだ!！」

イオはエヴァの視線から目を背けることはできなかった。怒っているような泣いているような顔のエヴァを無表情のイオはじっと見つめた。

「…探索だ」

イオはポツリと言った。

「誰のだ？」

エヴァは若干の語気を弱めて尋ねた。

「…」

しかしイオは沈黙した。

「言え」

エヴァはイオの首を両手で締めた。

「…」

それでもイオは無表情で沈黙した。

「言え」

エヴァは締める力を強めた。

「…」

しかしイオは沈黙したままだった。

「言え」

それでも答えないイオに対して、エヴァは冷たい表情でさらに強く力を加えた。

「く…」

それによってイオの表情が僅かに苦痛に歪んだ。

「言え!!」

エヴァは、自らの顔をイオの目と鼻の先まで接近しさせて叫んだ。その顔には怒りと悲しみが混在していた。

「マスター! やめてください!!」

先程まで固まっていた茶々丸がエヴァを制止しようと腕を伸ばした。

「うるさい！！邪魔をするな茶々丸！！」

が、エヴァはその手を振り向き様に払いのけ、茶々丸を睨み付けた。

「マスター…」

茶々丸は呆然としたように払われた自分の手を見つめた。

エヴァはイオに向き直って言った。

「私に秘密をつくるな…私を騙すな…私を無視するな…」

俯きながら呟くように言うエヴァをイオはただ見つめた。

エヴァは顔を上げ、イオを真っ直ぐに見た。その瞳には涙が光っていた。

「私に黙っていなくなるなああ！！」

エヴァは半ば絶叫するようにイオに叫んだ。その顔はこれまでになり程怒りを表し、同時にこれまでにない程悲しみを表していた。

一滴の涙がイオの服にしみを作った。

茶々丸はそんな2人をただ見つめることしか出来なかった。

そして2人は見つめ合いながら沈黙した。朝の森に再び静寂が訪れた。

そんな時間を溶かすように、イオはゆっくりと自らの手をエヴァの頬に添えた。その行動にエヴァは少し動揺を見せた。

「…すまなかった」

イオは無表情の奥に感情を秘めた瞳でエヴァを見て言った。エヴァは無言でイオを見つめ返していた。

「どうしても話せない内容だ。だが…いずれ全てを話せる時が来たら、君には全てを話す。だから…君を騙すつもりも無視するつもりもない。そして、これからは黙っていなくなったりはしない…絶対に」

それを聞いたエヴァは無言のままイオを見続けた。そしてしばらくそうした後、イオの首から手を離し、馬乗りになっていた状態から降りた。それと同時にイオの拘束も解いた。

イオはゆっくりと立ち上がった。エヴァはそんなイオに背を向けていた。

「帰るぞ茶々丸」

そしてエヴァは振り向くことなく歩き出しながら茶々丸に言った。

「え…あ、あの…了解しましたマスター…」

茶々丸はイオとエヴァを交互に見て慌てていたが、イオにお辞儀をすると走ってエヴァを追った。

イオはエヴァの後ろ姿を無言で見つめていた。エヴァも無言で歩いていたが、突然歩を止めた。

そしてイオに振り返った。

「お前も早く来い。帰るぞ」

エヴァはそう言うのと再びイオに背を向けて歩き始めた。
少しの間を置き、イオは無表情でそんなエヴァの後を追った。

「んあ？」

新幹線の中で爆睡していたガニメデは、前の車両の騒がしさで目覚めた。

「なんだ？ 妙にうっさいな…」

前の車両には護衛対象の3-Aの生徒達が乗車していた。その前方からなにやら騒がしい騒音が聞こえてきていた。

「ちょっと見てくつか」

それを不審に思ったガニメデは席を立ち、自動扉が反応しないように気をつけながら、前の車両の扉の窓から中を見た。

「な！？」

そして絶句した。見れば大量のカエルが車内に溢れていた。

「これが西の妨害か？ ある意味悪質だな…」

ネギとカリストは逃げ回るカエルを片っ端からビニール袋に捕獲していた。

「まあ：俺の出る必要はねえだろ：頑張れよカリスト、ネギ坊主」
そう言ってガニメデは席に戻った。

カエル騒ぎで騒然となったが、カリスト達は無事に京都に到着した。
その後、清水寺に移動し、今は有名な清水の舞台上にいた。

「誰か飛び降りれ！」

「では拙者が」

「おやめなさい！！」

カリストは騒がしい生徒を苦笑い気味に見ていた。

ネギは生徒達と混ざって観光を楽しんでいるのに対して、カリストは生徒達から若干距離を置いて、全員に気を配っていた。そこに双子の鳴滝姉妹がひょっこりと現れた。

「あ、カリちゃん楽しんでないね」

姉の風香がカリストに話しかけた。

「そんなことはないさ。私は一応教師なんだから、君たちが楽しんでくれればそれでいいんだ」
カリストは笑顔で言った。

「むゝカリちゃんが楽しめないならダメじゃん」

風香はむくれて言った。

「充分楽しいよ。この国の者ではない私にとっては、見るもの全てが珍しくて興味深いんだ」

そう言ってカリストは風香の頭を撫でた。

「あの、カリスト先生は外国の方なんですよね…だったら、わ、私たちが案内しますよ！」

そこに妹の史伽が話しかけた。それに同調するように風香が言った。

「そゝだよ。生徒の申し出に応えるのも先生の仕事でしょ」

そんな双子にカリストは笑顔を見せた。

「そうだな。じゃあ2人に案内してもらおうかな」

それを聞いた双子はそれぞれカリストの手を引いて駆け出した。カリストは両手を引っ張られるようにして連れられて行った。その顔は苦笑いだったが、何処か楽しそうだった。

「これが清水寺か…歴史消失建築として資料だけは見たことあるが…本物は初めて見るな…」

ガニメデは感慨深そうに辺りを見回した。

古い木で作られた味わいのある日本独自の建物がそこにはあった。

「思えば世界線を越えても観光なんかしたことなかったよな…機関の任務しか頭になかったからな…：てかカリストもちやつかり楽しんでんじゃねえか」

ガニメデはカリスト達から離れ、通路から舞台上の生徒を見ていた。そこには苦笑いしながらも生徒の輪の中に引っ張られて行くカリストが見えた。そんなカリストをガニメデはニヤケながら見ていた。

「カリストといいイオといい、どいつもこいつもこの世界線満喫してんな」

その後、神社の滝に酒が混入されたり、それを飲んだ生徒が酔っぱらったりなどの妨害があったが、一行は何とか無事にホテル”嵐山”に到着した。

ガニメデにも同じホテルの別フロアに部屋が用意されていた。カリスト達と時間差を空けてホテルに入ったガニメデは、今は自分の部屋にいた。

「さて、一応量子センサーでも展開しときますか」

そう言ったガニメデは、銀色の量子端末を取り出して起動し、命令を出した。

「広域量子センサーを展開しろ。範囲はこの建物全体だ」

すると端末は人工音声で返答した。

”了解。広域量子センサー起動。範囲、現在地の施設全域”

それを聞いたガニメデは椅子に深く腰掛けた。

「さて、あとは魚が釣れるのを待つだけだ：」

教師の入浴時間になったネギはカリストを誘っていた。

「カリストさん！一緒にお風呂に行きませんか？」

そんなネギをカリストは申し訳なさそうに見た。

「すまないネギ先生：用事があるからまた今度でいいかな？」

するとネギは残念そうに言った。

「そうですか：じゃあまた今度よろしくお願いします。僕は今から入ってきちゃいます！」

ネギはそう言うのと走って行ってしまった。カリストはそんなネギを苦笑いして見送った。

自室に戻ったカリストは、部屋に備え付けの風呂の前で服を脱いでいた。鏡にはカリスト自身の上半身が映っていた。その身体には至るところに人工的な青い線が走っており、無数の傷痕や火傷のような痕があった。さらに所々が薄緑色に変色し、まるで無機物のようだった。

「こんなもの、見せる訳にはいかないよな…」

カリストは自らの姿を見て、自嘲気味に笑った。

”量子センサーにZPE反応、座標を立体表示”

机の上の量子端末が人工の音声を発し、ホテルの内部構造のホログラムを立体表示した。その浴場の部分が点滅していた。

「かかったか」

ガニメデは端末を回収し、急いで部屋を出た。エレベーターを待つ時間も惜しみ、ガニメデは階段を猛烈な勢いで駆けた。そして浴場に向かう途中の通路に差し掛かった時、目の前から向かってくる可愛い見えた目の猿の式神が何体か見えた。

「あ？なんだありや：まあいいか」

—ポムポムポムポム—

ガニメデはすれ違い様にそれらを一瞬で片付けた。ガニメデに殴り飛ばされた式神達は、煙を上げて元の紙に戻った。立ち止まったガニメデはそんな式神の紙を怪訝な表情で見た。

「これが学園長の資料に載ってた式神か？：って！な！？」

が、煙が晴れて次に目にしたものに絶句した。そこには何故か下着姿の木乃香が倒れていた。

「こいつは：確か学園長の孫の：」

「このー！！お嬢様を返せー！！」

ガニメデが呟く途中で、いきなり現れた少女が長刀でガニメデに斬りかかった。

「っ!?! いきなり何しやがんだ!!...ってお前は!」

ガニメデは刀を腕で反らして、ハッとしたように少女に向かって言った。

斬りかかった少女の方も一瞬固まった後、何かに気づいたように慌てた。

「え、あ...ガ、ガニメデさん!?!」

第22話「侵入」

たまたま浴場で一緒になったネギと刹那は、刹那を西の刺客と疑っていたネギによって一触即発の事態になっていた。

が、突然木乃香の悲鳴が聞こえ、2人は慌てて木乃香のもとへ向かった。駆けつけた時には、木乃香と明日菜が沢山の式神の猿によって下着を脱がされようとしていた。

予想外すぎる光景に唖然とした2人だったが、慌てて式神を引き剥がそうとした。しかし、ネギと刹那が式神の相手をしている間に、式神たちは木乃香を担ぎ上げ、さらって行ってしまった。それを見た刹那は慌ててその後を追った。

するとそこには1人の男と倒れている木乃香がいた。刹那は迷わず男に斬りかかった。

「お嬢様を返せええ!!」

「なっ!?!」

が、男は腕でその刀を反らし、驚いたように言った。

「いきなり何しやがんだ!!…ってお前は!」

その顔を見た刹那も驚愕の表情になった。

「え、あ…ガ、ガニメデさん!?!」

「お前は桜咲刹那…だったよな?」

「え、ええ…どうして貴方がここに…?」

「それよりまずはその刀しまってください：てかその格好なんとかしろ」
ガニメデに顔を反らして言われた刹那は慌てて夕凧をしまった。そしてバスタオル一枚という自分の姿に赤面した。

「あああっ！！し、失礼しましたっ！！」

「まあいいけどよ：この娘はお前の友達か？なんか式神に連行されてたようだぜ。式神は俺がやっといたから安心しろ」

「そ、そうだったのですか：本当に失礼しました」

「礼は後だ。まずはこの気絶してる娘を運んでくれ。そんでお前の格好もなんとかしろ：」

ガニメデは刹那から顔を背けたまま言った。それを聞いた刹那はお辞儀をして慌てて木乃香を連れて行った。

異変に気づいたカリストは、部屋から出たところで出くわしたネギに連れられて、ロビーに来ていた。

「よっカリスト。随分遅いな、油断しすぎじゃねえのか？」

カリストが連れられて来た瞬間に、椅子に座ったガニメデは片手を挙げて軽く言った。

「は！？なんでお前がここにいるんだ！？」

それを見たカリストは驚愕したようにガニメデに叫んだ。

「まあまあカリスト先生よ。それは今から話すぜ。まあ座れよ」

対するガニメデは半笑いしながら陽気な口調で言った。

カリストがロビーを見回すと、そこにはネギ、カモ、ガニメデに加えて刹那、明日菜がいた。全員が長椅子などに座っていた。カリストは言われた通りにガニメデの正面の椅子に座った。

「それで、何でお前がいるんだ？」

カリストは半眼でガニメデに尋ねた。

「実は学園長に頼まれてな、お前達に秘密で生徒を護衛しろって依頼を受けた。まあバレちゃったがな」

カリストは驚きながらも納得したようだった。

「そうだったのか：で、何かあったのか？」

そんなカリストの問いにガニメデは苦笑いした。

「おいおい：量子センサーくらい稼働させとけよ：お前がのんびりしてる間に教え子が誘拐されるとこだったんだぞ」

それを聞いたカリストは慌てた。

「何！？どういうことだ！？」

そんなカリストに、ガニメデの隣に座っている刹那が答えた。

「先程、西の陰陽術士のものと思われる式神がこのかお嬢様を拐おうとしました。それをガニメデさんが阻止してくださいました」

「そんなことがあったのか…不覚をとって申し訳ない…油断していた…」

「いえ！お嬢様は無事だったのですし、カリスト先生に非はありません」

自らの失態を悔やむカリストを刹那がフォローした。

「…ありがとう桜咲」

そんな刹那にカリストは弱く笑顔を見せた。

「まあそれより、これからのことを話そうぜ」

そんなカリストにガニメデは言った。

「ああ。そうだな。とりあえず今夜からは私が屋上から周辺を監視する…ガニメデは館内の監視を頼む」

カリストはガニメデに向かって言った。ガニメデは肩をすくめて了承した。

「じゃあ僕もホテルの外を警戒しますね」

カリストの隣に座っていたネギがそう言った。カリストは頷いた。

「では、私は式神返しの札を周りに貼ってきます」

続けて刹那が言った。

「えっと…私は…何すればいいの？」

刹那の隣に座っている明日菜は戸惑ったように言った。

「アスナさんはこのかさんの近くにいてください」

刹那はそんな明日菜に優しく言った。

「うん！わかった！」

明日菜は元気良く返事をした。

そんな2人にカリストが声をかけた。

「もしかして近衛は狙われているのか？」

その問いに刹那が答えた。

「はい。お嬢様のことはどこまでご存知ですか？」

今度は、逆に問われたカリストが答えた。

「学園長のお孫さんということしか知らないな…何か狙われる理由があるのか？」

「あ、それ私も疑問に思ってたの」

「僕もです」

明日菜とネギがそれに同調した。ガニメデは無言で刹那を見ていた。全員の視線を集めた刹那は考えるような仕草をした後、決心したように口を開いた。

「では、皆さんにはお話ししておきます。このかお嬢様の御父様は関西呪術協会の長でいらっしゃいます」

その発言にガニメデ以外の全員が驚愕した。それを確認して刹那は続けた。

「お嬢様ご自身も極東一の魔力を御持ちになっています。それ故、その力を利用しようという輩が少なからずいます。西の長はお嬢様に普通の生活を送らせたいとお考えになられ、麻帆良学園にお嬢様をご入学なさいました。私もそんなお嬢様の護衛として麻帆良学園に入学し、影ながらお嬢様をお守り申し上げてきました」

カリストは納得したように言った。

「なるほど…そういう経緯があったのか」

「僕も知りませんでした」

ネギもカリストと同じように納得したようだった。

そして明日菜はいきなり刹那の手を握った。

「うん！桜咲さんがこのこと嫌いじゃないってわかって良かった！友達の友達は友達よ！これからは私達も協力するね！！」

「え、あ、ありがとうございます…」

刹那はそんな明日菜を驚きながら見た。

「俺っちもあんたを疑っちまってたぜ…すまんかった！」

「あ、僕も疑ったりしてすみませんでした」

それを見ていたカモとネギも刹那に謝罪した。刹那はそんな1人と1匹に笑顔を向けて気にしないでくださいと言った。

「なるほどな…あの時の必死さはそういう理由があったんだな」

そこに先程から黙っていたガニメデが声を発した。刹那はそんなガニメデに向かって遠慮がちに視線を送った。

「はい…あの時は申し訳ありませんでした」

そこへ、2人のやり取りに疑問をもったカリストが口を挟んだ。

「ガニメデ、あの時とは何のことだ？」

ガニメデと刹那は一度目線をやり取りした。

「少し前に一度刹那から、このかお嬢様を知っているか、と聞かれ

てな。まあそんなことがあったのさ」

「そうだったのか」

「それよりも、明日以降のことを決めとこうぜ：確か明日は奈良見学で一応は固まってんだよな？」

その問いにはネギが答えた。

「はい。班別行動ですが問題は無いと思います」

ガニメデはネギの返答を聞いて続けた。

「そうか：ならまあ明日は適当にやるとして、明後日とその次の日は自由行動だったよな：どうする？」

その問いにカリストが答えた。

「相手の目的は近衛と親書だ。親書を渡す使者のネギ君、そして近衛が狙われるのは確実だ。2人の護衛は必要だ。ただ、他の生徒に危害を加える可能性も否定できない：私は長距離向きだ。基本的に広範囲をカバーできるが、その代わり今回のように近い場合には遅れを取りやすい。だから私は君たちが護衛しきれない生徒全員をいつでもカバーできるように行動する。近接向きのガニメデにはネギ君と明日菜が親書を渡すのを護衛してもらいたい。可能な範囲でネギ君も生徒達を護衛してくれ。桜咲は近衛の護衛をしてほしい。同じ班である刹那が適役だ。これでいいか？何か意見があれば聞くぞ」

全員は顔を見合せた。

「それでいいんじゃないの？」

「僕は賛成です」

「私も異論はありません」

「うーん。それが一番得策だな…俺っちもカリストの旦那に賛成だぜ」

「私もオッケーよ」

全員の賛成を聞いたカリストは一度頷いた。

「よし。では決まりだな」

一区切り着いたところで、明日菜が気合いを入れた口調で言った。

「よし！そうと決まれば3－Aガーディアンエンジェルス結成ね！」

それを聞いたガニメデは眉をひそめた。

「おいおいおい…なんだよその変な名前は…」

「いいでしょ別に！…というかアンタとはまだ自己紹介してなかったわよね？」

「今更かよ…」

「仕方ないでしょ！タイミング逃しちゃったんだから！私は神楽坂

明日菜、よろしく」

「俺はガニメデ…一応麻帆良の広域指導員だ。まあよろしくな」

「じゃあお互いの自己紹介も終わったところで！」

そう言って明日菜は皆の中心、机の上に向かって片手を伸ばした。それを見たネギが明日菜の手に自分の手を重ね、カリストも同じようにした。続いて意味を理解した刹那がカリストの手に自分の手を重ねた。

「…ああそういうことか」

最後に意味を理解したガニメデが面倒くさそうに手を重ねた。それを確認した明日菜は満足そうに言った。

「ガーディアンエンジェルス結成！！えいえいおー！！」

ガニメデは苦笑いした。

「…元氣だな」

そしてネギは張り切って立ち上がった。

「じゃあ僕は外の見回りに行ってきます！」

続いて刹那が立ち上がった。

「私は式神返しの札を貼ってきます」

そしてカリストとガニメデ、明日菜も立ち上がった。

「では私も屋上に行く」

「俺は館内を適当に回るぜ」

「私はこのかの部屋に戻るね！」

3人も各々の行動に移った。

だが、そんな彼らは知らなかった。

今さっき、従業員の格好をした1人の女性がホテルに入ってきたことを。

天ヶ崎千草は焦っていた。木乃香を拐おうとしたが、思わぬ伏兵によって失敗したからだった。

「やってくれるやないの…なんやあのゴツい兄さんは…こりや少くし手を加えんといかんようやな。ククク…見てろや。目え覚まさせたるわ」

そう言って暗闇の中から眼鏡を通して視線を送っていた。

酒で酔ったのが原因か、3-Aは何時もでは考えられない程静かだった。ガニメデなそんな館内を人目につかないように巡回していた。女子学生の泊まっているフロアをうろろしているガニメデは、第三者が見れば通報されてもおかしくはなかった。

「…本当に何やってんのかね…俺は」

いつまでそうして巡回していたか、ガニメデは哀愁漂う口調で呟いた。

その時、量子端末が合成音声を発した。

”ZPE変動確認、追加データ照合、式神と断定。座標を表示”

それを聞いたガニメデは驚愕した。

「何！？なぜセンサーに反応しなかった！？まさか…既に内部にいたのか！！」

ガニメデは端末に表示された場所に向かった。そこには先程木乃香を拐おうとした小猿の式神たちがいた。

「おらおらおらっ！！」

ガニメデは式神たちに殴りかかった。

「あり!？」

が、今回は式神たちはガニメデから一目散に逃げ始め、その方向もバラバラだった。

「まずい!!」

ガニメデは急いで目の前の式神を殴り飛ばすと、逃げた式神たちを追った。

そしてようやく全ての式神を紙に戻した時、端末が警告した。

”警告。センサー有効範囲外へ離脱する熱源を確認、個数5、ZP E反応陽性”

「チッ!! 凹か!!」

叫んだガニメデは出口へと急いだ。

「くそっ! ジュピター、目標へ座標転移できないのか!？」

ガニメデは館内を出口に向けて走りながら叫んだ。

”多数の熱源を確認、目標の特定不能。及び中距離転移による出現座標上の障害物特定不能。転移失敗の危険性有り”

端末は合成音声で答え、ガニメデは苛立ちを顔にした。

「囧を分散させたのか…チツ！走るしかねえのかっ！」

第23話「夜京」

式神返しの札を貼り終わった刹那は、このかと同じ班の部屋に戻ってきた。そこには明日菜と、何故か苦しそうにトイレをノックしている綾瀬夕映の姿があった。

「どうしたのですか？」

状況のわからない刹那は明日菜に尋ねた。

「いやゝそれがね、このかのやつがずっとトイレに入っちゃってるから困ってるのよ」

問われた明日菜は苦笑いして答えた。

その返答を聞いた刹那は慌ててトイレをノックしてみた。

「お嬢様!!」

―ドンドン―

「入っとるえゝ」

すると中から確かに木乃香の声が返ってきた。

「ね？ずっとこんな調子なのよ」

その様子を見ていた明日菜は刹那に言った。それを聞いた刹那はさらに慌て始めた。

「明日菜さん！何時からお嬢様はこの状態ですか？」

「え？うーんと、確か私が来る前からずっと」

刹那は真剣な表情になってトイレの扉を見つめた。

「お嬢様、失礼します！」

そうとうと刹那はトイレの扉を蹴破った。

「ちょっと桜咲さん！」

その行動に明日菜と夕映も驚きの声を上げた。
が、刹那はそれどころではなかった。

「明日菜さん、見てください！」

刹那に言われるままに明日菜はトイレの中を覗いた。

「え！？」

驚愕した明日菜の視線の先には木乃香の姿はなく、代わりに一枚の札が貼ってあった。

「入っとるえー」

そこから木乃香の声が発せられていた。

「お嬢様が拐われました！！」

刹那は急いで部屋を飛び出し、明日菜も遅れて後を追った。

カリストは屋上の屋根から周囲を見回していた。

”おい！カリスト！式神が現れた！お嬢様と親書は無事か！？”

その時、端末にガニメデからのZPF通信が入った。

「親書を持っているネギ君はこちらのセンサーが捉えている…が、近衛は不明だ。私の端末は長距離でないと手薄になるのは知っているだろうか？お前ので捉えてないのか？」

”それが、多数の熱源がいきなり現れてホテルを出た。おそらくお嬢ちゃんを拐った奴が罔を分散させやがった。お前の方で罔を破壊して目標を見つけてくれ”

「了解だ。っ待て！今ホテルから近衛を担いだ何者かが出てきた！ホテル正面から3時の方向に向かった！私が迎撃して足止めする間に近衛を奪還しろ！」

”はいよっ！”

通信を切ったカリストは服の中から白い長方形の金属質の何かを取り出した。

「Z－P E G 起動」

” バイオコード認証、起動。ロック解除”

合成音声の後、白い塊はいきなり変形し、一瞬で拳銃の形になった。

「中距離射撃に出力調整、非殺傷設定」

” 了解、中距離射撃用Z P F 展開、非殺傷設定”

カリストが拳銃を敵の方へ向けると、拳銃から様々なホログラムが立体投影された。

拳銃の少し上の空中に四角いスクリーンが投影され、そこにはズームされた像と照準が映っていた。

さらに銃口の前に一つの魔方陣のような円形の輪が現れ、橙色に光っていた。

そしてズームしたスクリーンに木乃香を担ぐ敵が見えた瞬間、カリストは引き金を引いた。

拳銃から射出されたのは短い橙色のビームだった。そのビームが前方の魔方陣のような光の輪を通過した瞬間、ビームはさらに高速に加速され、目視不可能な速さで目標に向かって迫った。

天ヶ崎千草は式神でできた猿の着ぐるみを着て猛烈な勢いで逃走していた。そして担いでいる木乃香を見て勝ち誇ったように笑った。

「待てー！！」

その時、背後から声がした。一瞬振り向くとそこには杖に乗ったネギが追ってきていた。

「待て言われて待つバカはいけませんわ！！」

千草は式神の札を後ろへ向けて適当に放った。するとそれらが猿の式神となってネギに襲いかかった。

「そうはいきませんよ！」

が、その全てをネギは『魔法の射手』で破壊した。

「チッ…やるやないの」

そうして橋に差し掛かったところで千草は危険を察知して止まった。次の瞬間、千草の目の前に橙色の閃光が降ってきた。

「な、なんや！！今のは！？」

千草は呆然と立ち尽くした。そこにネギが追い付いて来た。

「このかさんを返してください！！」

「へっ。誰が返すかいな」

必死に叫ぶネギを馬鹿にしたように千草は言った。

「やれやれ：ようやく見つけたぜ」

そこにガニメデが現れた。

「ガニメデさんっ！」

「チッ：ゴツい兄さんが来てはりましたか」

ネギは喜び、千草は苦々しい表情になった。

「お嬢様を返せ！」

「ハアハア：なんとか追い付いたみたいね」

そしてホテルの浴衣姿の刹那と明日菜もネギに合流した。

「諦めろ。テメエはもう逃げられねえ」

ガニメデは千草を睨み付けた。

「随分余裕かましますなあ：じゃあこれでどうやっ!!」

そう叫んだ千草は一枚の札を投げた。

「ザバーッ!」

すると札から大量の水が溢れ、洪水のようにガニメデたちを襲った。

「マジかよ…」

カリストはスクリーンに映るガニメデたち、そして彼らと対峙する千草を見ていた。

「チェックメイトか」

カリストはこれで詰んだと確信した。

「しまった!!」

が、次の瞬間、千草はいきなり札を投げた。その札から大量の水が洪水のように溢れてガニメデたちを襲った。

しかし、ガニメデは緑色の情報障壁を自らの前方の広域に展開し、ネギたちを守った。

ガニメデが耐えている間にネギたちは千草を追いかけた。

カリストは千草の進路を妨害しようと狙いを定めていた。

しかし、千草は先程の狙撃でこちらに気づいたのか、建物の後ろを縫うようにして逃走していた。カリストにとっては完全に死角だっ

た。

「くそっ、こちらに気づいたか…」

カリストは苦々しく呟いた。

「あれは…まずい！電車で逃走する気か！！」

ネギたちに追われている千草は電車に乗り込んだ。ネギたちも慌て続いた。

それをスクリーン越しに確認したカリストは端末を取り出した。

「ガニメデ、聞こえるか？」

端末に呼び掛けるとガニメデの声が返ってきた。

” ああ。今やっと洪水から抜け出した。悪りいが状況を教えてくれ”

「敵は嵯峨嵐山駅から電車を使って逃走を謀った。進路は京都駅方面だ。ネギ君たちが追っている。お前も急げ。障害物が多すぎて中距離座標転移は使えない。ディヴァインを解放して移動しろ。進路は私が指示する」

” 了解だ！”

「さて…結界の妨害もないことだ…派手にいきますかね！」

ガニメデは夜の街に1人佇み、顔を歓喜に歪ませた。

「ディヴァイン第二解放！！」

そう叫んだ瞬間、ガニメデの両手を包むように銀色の甲冑が現れた。その見た目は攻撃的で、腕を守るといふよりも相手を殴るといふ目的を重視しているようだった。そしてガニメデは信じられない速度で駆け出した。

ネギと明日菜と刹那は、電車の中で千草と対峙していた。

「しつこい奴らやな！」

そう言った千草は、大量の札を投げた。

すると式神が電車を埋めつくすほど現れた。さながら式神の洪水といったところだった。

ネギたちは抵抗するもそれに飲まれてしまった。

「くっ!!」

「こ、こんなに沢山!」

「く、苦しいですっ!!」

車両を移動した千草はドアの窓からそんなネギたちを嘲笑っていた。

「ハハハハ! なんや西洋魔法もなんてことないの」

電車から降りた千草は木乃香を担いだまま、京都駅の中に向かった。それを見た刹那は決心したように目を閉じた。そして開くと同時に愛刀”夕風”を振るった。

「百花繚乱!!」

刹那を中心に幾重にも剣の閃光が走り、次々に式神たちを紙に返していった。

それによって空間に余裕ができたネギも魔法の射手を使って式神を攻撃した。

そしてなんとか電車から脱出した3人は、急いで千草を追った。その後、京都ビルの大階段で3人は千草と対峙した。

「ほんまにしつこいやっちな!」

「バカ猿女ー! このかを返しなさい!!」

「お嬢様から離れろ!!」

「このかさんを離してください!!」

千草は、追いついてきた3人を階段の上段から苦々しく見下ろした。

「だー! やかしい!!」

そう叫んだ千草は札を放った。すると先程の猿とは違う鬼の式神が何体も現れた。

「善鬼・護鬼かつ!」

それを見た刹那が鬼たちに接近し、斬りかかった。

それを見た明日菜もカモに指示された通りにアーティファクトを出現させたが、そのアーティファクト『ハマノツルギ』は何故か巨大なハリセンだった。

「ちょっと! 何よこれ! ハリセン!？」

「ああ、もうなんでもいいからいっちゃまえ姐さん!」

「ええい! もうわかったわよ!!」

ハリセンに戸惑った明日菜だったが、カモに促されて半ばやけくそ気味に鬼に向かって行った。

—ポム—

すると、ハリセンに叩かれた鬼は一瞬で紙になった。

「あれ？なんかこれいけそうよ！！」

「ラッキーだぜ姐さん！その勢いでやっちゃまえ！」

勢いにのる明日菜に勇気づけられたようにネギも詠唱を始めた。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル…」

千草はそんな様子に、信じられないものを見るように呆然としていた。

「んなアホな…こんなガキどもに…」

そして全ての式神が紙に戻された。

「さあ！お嬢様を返せ！」

刹那は千草に向かって接近しようとした。
それを見た千草は札を放った。

「くっ…ならこれでどうや『三枚符術京都大文字焼き』！！」

その瞬間、千草を中心として大文字に炎の壁が天に向かって伸びた。

「っ！？」

刹那はその炎に吞まれる寸前に、明日菜によって引き止められ、なんとか無事だった。

「大丈夫！？桜咲さん！」

「あ、はい：ありがとうございます：明日菜さん」

炎の壁の向こうの千草は再び勝ち誇った。

「ハハハハ！これでしばらくは動けんやろ！ほな今度こそ、さいなら」

ネギたちが苦々しく睨む中、千草は背を向けて歩き去ろうとした。

「いくぜええええ！！！圧縮ZPE、右腕解放！！！」

が、次の瞬間、爆音と共に突然上の天井が崩れ落ち、大きな穴があった。そして何者かが天井を突き破って大文字の炎に直滑降した。それによって地面のコンクリートごと炎も吹き飛んだ。巨大なクレーターができ、その衝撃で全員が体勢を崩した。

その衝撃の中心地を見ると、歓喜に歪んだ表情のガニメデが立っていた。その両腕には銀色の甲冑が装備されていた。

「ガ、ガニメデさん！？」

「え！？あ、ガニメデさん！！！」

「ちょっとアンタ！何考えてんのよ！」

明日菜に怒鳴られたガニメデは千草を見たまま言った。

「見りゃわかんذار？助けてやったんだよ」

「何が、助けてやった、よ！！私達まで巻き込まれるとこだったの

よ！！！」

ガニメデはそんな明日菜を無視して千草に言い放った。

「おいテメエ、さっきはよくもやってくれたな」

千草はそんなガニメデを驚愕した表情で見た。

「あ、あんた何もんや！！」

「さあな。答える必要はねえ：おい！ネギ！刹那！ついでに明日菜とかいうの！こいつに止めさすぞ！」

ガニメデはネギ達に呼び掛けた。

「あ、はい！」

「勿論です！」

「ちよつとー！ついでって何よー！！」

文句を言う明日菜を除き、各自が構えた。

そして刹那が真っ先に斬りかかろうとした。

「ざーんがーんけーん」

「っ！！！」

が、突然の攻撃によってそれは失敗した。間の抜けた声と共に、気ののった斬撃が刹那を襲った。

それを回避した刹那が放たれた方向を見ると、そこには1人の少女がいた。戦闘には不釣り合いな可愛らしい服を着て眼鏡をかけた少女だった。手には容姿と不釣り合いな短剣と刀を構えていた。

「どーもー神鳴流の月詠どすー」

第24話「安穩」

「どーもー神鳴流の月詠どすー」

千草はそう言う月詠に視線を送った。

「遅いやないの」

すると月詠は千草に弁解した。

「ちょっと時間かかってしまいました」

それを聞いた千草は鼻を鳴らした。

「まあええ。さっさと仕事しい！」

そんな様子を見ていた刹那は顔をしかめた。

「神鳴流がついていたか：お前のような者が神鳴流を名乗るとは：時代は変わったな」

対して月詠は笑顔を見せた。

「刹那先輩どすね？ウチ、ずっと前からセンパイと勝負したかったんどすえ」

そう行って斬りかかってきた月詠の刀を刹那は夕凧で防いだ。

ーキンッー

(フフフ…センプイ♪)

(こいつ…見た目によらずできるっ！)

そして2人の攻防が始まった。

それを見てガニメデは呟いた。

「新手か…」

その間にネギは千草に向かって『魔法の射手』を放った。

それを受けそうになった千草は咄嗟に気絶している木乃香を盾にした。

「ひっお助けー！」

「あっ！！このかさんっ！！ま、曲がれーっ！！」

それを見たネギは慌てて『魔法の射手』の軌道をずらした。

「おろ？」

自分に命中しなかったのを確認して千草は意外そうな表情になった。

「このかさんを盾にするなんてずるいですよー！」

そんなネギの叫びを聞いた千草は不敵な笑みを見せた。

「はーくん、さてはアンタら甘ちゃんやな。人質ごと狙えばいいものを」

千草がそう言った瞬間、ガニメデが急に笑い声をあげた。

「フハハハハ！！」

千草はそんなガニメデに訝しむ視線を向けた。

「何や…？何がおかしいんや？」

その問いに、笑い止んだガニメデが答えた。

「いやなに、既に負けてんのに何を勝ち誇ってんだかなと思ってな」

千草はガニメデを睨んで言った。

「負けてる？何を言っ…」

しかし、その発言は途中で止まった。
なぜならいきなり目の前にガニメデが現れたからだった。

「なっ！？」

そしてガニメデは木乃香を奪い、空いた片手で千草を吹き飛ばした。

—ドンッ！—

吹き飛ばされた千草は建物の壁に激突した。

「うぐ…」

「まだやんのか？」

ガニメデはそんな千草に冷たく言い放った。

千草は哑然としていたが、すぐに苦々しい表情になり、空中を飛ぶ式神を出現させた。

「覚えてなはれ……」

そしてそれに飛び乗った。

刹那と戦っていた月詠も飛び乗り、2人は逃げていった。

それを確認したガニメデは木乃香を安全な場所に下ろした。そこにネギ達がやって来た。

「お嬢様……！」

刹那の呼び掛けで木乃香はゆっくり目を覚ました。

「なんや～なんか夢見てたみたいや～変なお嬢さんに捕まって～みんなが助けてくれたんや～」

それを見た刹那は安心したようだった。

「良かった……お嬢様、ご無事で……」

そんな刹那を木乃香は嬉しそうに見た。

「なんや～せつちゃんウチのこと嫌いやなかったんや～良かったわ～」

それを聞いた刹那は驚きの表情になった。

「ウチかてこのちゃんのこと…」

そこまで言った刹那は顔を真っ赤にして狼狽え始めた。そして再び木乃香と目が合った瞬間、

「っ御免!!」

と叫んで一気に階段を駆け降りて行った。
明日菜はそんな刹那に大声で呼び掛けた。

「桜咲さ〜ん!! 明日の奈良、一緒に回ろうねー!!」

刹那は明日菜の呼び掛けに一瞬振り返り、再び走り去って行った。
そんな刹那の後ろ姿を見て、ガニメデは呟いた。

「やれやれ…素直じゃねえ奴だな…」

カリストはガニメデに進路を指示し終わった後、屋上から夜景を眺めていた。

”おいカリスト”

その時、カリストの端末に通信が入った。

「ガニメデか、どうなった？」

カリストは端末に尋ねた。

” 全員無事だぜ。安心しろ ”

端末からは何時も通りのガニメデの声が聞こえた。それにカリストは安心した。

「そうか…良かった。今回は役に立てなくてすまなかった」

そのカリストの発言に対して、端末越しにガニメデの驚く雰囲気伝わってきた。

” なんだよ急に…まあ気にするな、お前がいなきゃ俺は合流できなかったんだからよ ”

カリストはそんなガニメデに笑った。

「ありがとう」

” ハッ。なんだよ気持ち悪いいな ”

口調とは裏腹にガニメデも上機嫌そうだった。

「まあそう言うな」

”はいよ。んじゃ今からそっちに帰るぜ”

ガニメデは何時もの軽い口調で言った。

「了解した」

カリストはそんなガニメデの口調に笑った。

”上手い飯用意しとけよ”

「ああ。わかった」

カリストは静かに夜の京都を見つめた。

千草は自らの拠点に帰還していた。その拠点には千草、月詠の他に無表情の白髪の少年と活発そうな黒髪の少年がいた。

「あのゴツいの！よくも！」

千草は帰ってくるなり苦々しく叫んだ。

「失敗したみたいだね」

白髪の少年、フェイトは無表情で言った。

「邪魔が入ったからや！あのゴツいのが邪魔せんかったら、あんなガキども簡単に潰してたはずや！！」

「その乱入者はそんなに強かったのかい？」

フェイトの問いかけに千草は真顔になった。

「いきなり目の前に現れたと思うたら一瞬で吹き飛ばされたんや…あいつは一筋縄じゃいかん」

それを聞いた黒髪の少年、小太郎は嬉しそうに言った。

「そりゃええな！そんな強い奴なら戦いがあるってもんや！！」

それを無視してフェイトは言った。

「それならば、少し計画を変更した方がいいんじゃないかな」

イオは定位置のソファアに座り、これまた定位置である向かいに座るエヴァを見つめていた。

「今朝のワイヤーは何だ？」

イオは何時もの無表情で言った。

「あれは操糸術だ。ドールマスターである私にとっては当然のスキ

ルだ。自慢じゃないが私は合気鉄扇術も使える。魔力がなくともこの学園の腑抜け魔法使いどもに遅れはとらん位の自信はあるぞ」

エヴァは胸を張ってイオに言った。

「ケケケ。思イツキリ自慢ジャネエカ御主人」

そんなエヴァを、イオの頭の上に乗っているチャチャゼロが冷やかしした。

それを聞いたとたんにエヴァの機嫌が悪くなった。

「うるさいぞチャチャゼロ！！そんなことよりイオの頭からさっさと降りろ！！」

が、チャチャゼロは全く反省の色を見せなかった。

「イイジャネエカ御主人。ココノ見晴ラシハ中々ダゼ。ソウイウ御主人モコイツニ乗ッテタジャネエカ。ゴ丁寧ニ拘束マデシテ、アナ格好デヨ」

チャチャゼロにそう言われたエヴァは顔を赤くした。

「な！？何故お前がそれを知っている！？」

「妹二聞イタンダヨ。ソノ反応ハ本当ダツタンダナ。朝ッパラカラ森ノ中デソナ大胆ナ事スルナンテ暑イネ御主人：ケケケ」

それを聞いたエヴァは顔を真っ赤にし、チャチャゼロをイオの頭から引き剥がして紐で拘束した後、地下に放り込んだ。

「フン！生意気な従者だ！！」

そう言ってエヴァは再び椅子に座った。が、イオと視線が重なった瞬間にまた顔を赤らめた。

「さ、さっき奴の言ったことは気にするなよ！別にそういうつもりでやったんじゃないからな！！」

対するイオは変わらず無表情だった。

「そういうつもりとは何だ？」

そんなイオの質問にエヴァはさらに赤面した。

「な、なんでもない！！とにかく気にするな！！いいな！？」

「…了解した」

イオはそんなエヴァを無機質な瞳で見つめた。

翌朝、カリスト達と生徒は食堂で朝食を食べていた。ちなみに部外者であるはずのガニメデは、ちゃんとカリストの正面に座って

いた。

カリストはふと食堂にある小さなテレビに目を向けた。
そして固まった。

「おいカリスト、どうかしたのか？」

ガニメデはそんなカリストを訝しむように言った。するとカリストは無言でテレビを顎で差した。ガニメデはそのテレビに視線を向けた。その画面にはテロップが出ていた。

” 京都ビルで謎の大崩落 ”

「あ：ハハハハ。まあちとやり過ぎたかな？」

ガニメデは乾いた笑いをした。カリストはそんなガニメデを無言で睨んだ。

「あ、あの：ガニメデさんを責めないでください。僕のせいでもあるので：ガニメデさんが来てくれなければこのかさんを助けられなかったですし：」

ネギはそんなガニメデを庇うように、カリストに言った。

「いや。ネギ先生のせいではない。このバカが加減を誤っただけだからね」

カリストはそう言ってネギの頭を撫でた。

ガニメデはそれを不貞腐れたように見ていた。

「ネギ先生！」

その時、生徒がネギを呼んだ。

「あ、はい！何ですかまき絵さん？」

ネギはまき絵という赤毛を両結びにした活発そうな少女に振り向いて応えた。

「今日は私たちの班と一緒に回ろうよ」

「えっと…」

誘われたネギは困ったような表情になった。

「ちょっと佐々木さん！抜け駆けですわよ！！ネギ先生！是非とも私たちの班と一緒に！！」

そこに長い金髪をなびかせた雪広あやかが割り込んできた。

「あ！いいんちよずるい！」

「あ…あの…」

「ネギせんせー私の班と一緒に行こうよー！！」

それを契機に生徒達が一斉にネギに詰め寄った。ネギはオロオロするばかりだった。

そんな様子を見ていたガニメデは笑いながらカリストに言った。

「坊主の将来が楽しみだな…ククク」

それを聞いたカリストは苦笑いした。

「あ、あの！！ネギ先生！！」

その時、1人の物静かそうな少女が大声を出した。他の生徒たちも彼女の意外な行動に驚いていた。

「今日は私たちの班と回ってください！！」

それを聞いたネギは考える素振りを見せた。

（確か宮崎さんの班には…）

「はい！じゃあ宮崎さんの班と一緒に回ります！」

そして宮崎のどかの誘いを承諾した。
それには周りの生徒達も驚いていた。

「本屋が勝った！！」

「宮崎さん…やりますわね…」

「えー！！」

そしてのどかは嬉しそうに笑った。そんな中、小さな双子がカリストに声をかけた。

「ねえねえカリちゃん！」

呼ばれたカリストは鳴滝姉妹に視線を向けた。

「どうした？」

すると風香が言った。

「カリちゃんは誰と回るの？」

「特に決めてないな」

その発言に今度は史伽が言った。

「だったら私達の班と一緒に回りませんか？」

それを聞いたカリストは苦笑いした。

「それは有難いのだが、教師と一緒にでは他のメンバーも気を使ってしまうだろう。折角の修学旅行だ、君たちだけで楽しんでくれ」

「むゝそんなの気にしなくていいのにゝ班のみんなもオツケーしてくれたよ」

「そうですよ！」

洩るカリストを双子は必死に説得した。カリストはそんな2人に微笑み、頭を撫でた。

「ありがとう。誘ってくれて嬉しいよ。ただ、私には仕事があつてね、一緒に回るのはちょっと無理なんだ」

尚も断るカリストを見たガニメデは、呆れた様に口を開いた。

「あー全く…おいカリスト。女の子達が誘ってくれてんだ、付き合
ってやれよな。お前の分の”仕事”は俺がやっというてやるよ」

それを聞いたカリストは困惑した様子でガニメデを見た。

「いやしかし…」

それでも渋るカリストにガニメデはため息をはいた。

「やれやれ…だからお前は石頭って言われるんだよ」

それを聞いたカリストは顔を赤くした。

「な！？それは今関係ないだろ！」

「思いつきり関係あるぜ。いいから行ってやれよ…」

「……」

そしてガニメデの説得によって、ついにカリストは双子の誘いを受
けた。

その後、ネギは5班、カリストは1班に混ざって奈良を観光していた。ガニメデは敵を警戒して、周囲を巡回していた。

「へーカリスト先生って日本初めてだったんですか」

1班の椎名桜子という赤毛で活発そうな少女がカリストに言った。

「そうだね。だからというか、日本の建築に少し興味があってね」

「カリちゃんはさりげなく楽しみなんだよね」

風香がカリストの腕に抱きつきながら言った。カリストはそんな風香に苦笑いした。
それを見ていた同じく1班の柿崎美砂という長髪の少女がにやけながら言った。

「な〜んかカリスト先生と鳴滝達って仲良いよね」

それに椎名桜子も同調した。

「たしかに〜これはもしや!!」

そんな2人を抑えるように同じ1班の釘宮円という黒髪の少女が言った。

「ちょっと2人とも…カリスト先生に失礼でしょ!」

が、そんな制止を無視して2人の発言はエスカレートした。それに

対して史伽は顔を赤くして慌て、風香はそれを助長するように、カリストにより密着した。

そんな中、カリストは疲れたような表情になった。

「∴教師って大変だな」

カリストのそんな呟きを聞いている者は1人もいなかった。

第25話「休息」

「お、旨そうだな」

奈良公園を巡回していたガニメデは、1つの茶屋を見つけた。

「まあ少し位休憩してもいいよな」

そして迷わずに中へ入った。

店先の長椅子に座り、店員に注文をした。

「みたらし団子10本、抹茶団子10本、ゴマ団子10本、それと、きな粉のやつも10本…あと緑茶頼むわ」

店員は若干驚きながらも注文を確認し、店の中へ戻って行った。注文を待っている間、ガニメデはぼーっと景色を眺めていた。

「隣、いいかな？」

そこに声が掛かった。

ガニメデが視線を向けると、そこには真名がいた。

「あゝ確かあんたは…えゝた、たつ…」

「龍宮真名だ」

ガニメデは肩をすくめた。

「悪い悪い」

対して真名は不敵に笑った。

「それで、隣に座ってもいいかな？」

「ああ」

ガニメデは短く了承し、それを聞いた真名は隣に腰掛けた。

「お待たせしました」

そこへ店員が注文の品を運んできた。

「それではごゆっくり」

ガニメデが料金を払うと、店員は再び店の中へ戻って行った。

「ガニメデさん…それ全部食べるのかい？」

真名は運ばれてきた団子の量を見て言った。

「そりゃ食べるに決まってんだろ。何だ？食いたいのか？」

ガニメデは既に団子を食べ始めていた。

「そうではないが…」

真名はそんなガニメデに微妙な視線を送った。

数分後、そこには夢中で団子を食べる真名の姿があった。

「おい、あんま食うなよ」

ガニメデはそんな真名に鋭い視線を送った。

「堅いこと言いつこ無しだよガニメデさん」

そう言って真名は残り僅かな団子に手をつけた。
そして僅かな時間の後、団子の皿は空になった。

「てめえ…食いたい放題食いやがって…」

ガニメデは不機嫌な口調だった。

「まあこれは依頼料としておくよ」

対して真名は反省の色すら見せずにニヒルに笑いかけた。
それを見たガニメデは一転して機嫌良く言った。

「ハッ！いい性格してる女だな」

ガニメデは視線を再び景色に向けた。真名も何処か遠くを見ている

様だった。

そうして2人が暫く黙っていると、真名が思い出した様に口を開いた。

「そういえばガニメデさんは昨日、随分と活躍してたみたいだね」

それを聞いたガニメデは鼻を鳴らした。

「ちゃっかり見てたのかよ」

「まあね。カリスト先生の射撃の腕も中々だったよ」

「あいつに言ってやれ。喜ぶぜ」

真名は不敵な笑みを見せた。

「商売敵に塩は送らないさ」

それを聞いたガニメデは口の端をつり上げた。

「ホント、いい性格してんな」

そこで会話は途切れ、静かな時が流れた。2人の視線の先には奈良を観光する人々がゆっくりと行き交っていた。

時折、摩帆良の制服も目に入った。

「超から聞いたよ。ガニメデさん」

真名は突然言った。

「んあ？何をだ？」

ガニメデは視線を真名に向けた。

「ガニメデさん達は別世界の人だってね」

それを聞いたガニメデは鼻を鳴らした。

「そーいやあんたも超に雇われてたな。…で、信じてんのか？」

真名は横目でガニメデを見た。

「疑う理由はないさ」

「よく信じられんな…俺なんて未だに信じられねえ部分があんのによ…」

ガニメデは苦笑いした。

「どんなに異質な事実でも、事実なら事実として受け入れるだけさ」

ガニメデは僅かに感心したような表情になった。

「随分割り切ってんだな」

真名は口の端をつり上げた。

「私の様な身だと、割り切るのが大切なのさ」

ガニメデは再び景色を見つめた。

そこには人々の変わらない日常があった。

「そうかな…」

その夜、ガニメデは不思議な光景を目の当たりにしていた。

「…おいカリスト。坊主どうしたんだ？何か悪いモンでも食ったのか？」

そう言うガニメデの視線の先には、猛烈な勢いでロビーの床を転がるネギの姿があった。

問われたカリストも困惑した表情だった。

「いや…奈良から戻ってきたらずっとこの調子だ。何かあったのかもしれない…」

その時、生徒達がネギに近づいてきた。

「ネギ先生！どうしたんですか？」

異常なネギを心配して尋ねた。

が、ネギはそんな生徒に向かって波乱を巻き起こす発言をした。

「な、なんでもないです！誰も僕に告ったりなんか…」

それを聞いた生徒たちは騒然となった。

「えー！ネギ先生告白されたの！？」

「誰！？誰ですよ！？」

「ネギ先生！誰に告白されたの！？」

問い詰められたネギは慌てた。

「ち、違いますー！！」

そして何処かへ走り去って行った。

そんなネギにガニメデはため息をはき、カリストは苦笑いした。

「そういうことかい…」

「ネギ君も大変だな」

そしてそれからしばらくした後、休憩室ではネギが生徒に魔法がバレたと言って泣いていた。それを明日菜と刹那が慰めていた。ガニメデとカリストは半ば呆れていた。

「うわーん！もうダメですうー！オコジヨにされて強制送還されちゃいますうー！僕先生やりたいだけなのにー！」

「ま、まあ大丈夫よ！その子に黙っててもらえばいいじゃない！」

それを聞いたネギはさすがのように明日菜を見た。

「…本当ですか？」

「本当よ本当！！で、誰にバレたの？」

「朝倉さんです…」

その名前を聞いた瞬間に明日菜は硬直した。

「え！？あのパパラッチにバレたの！？あーもうダメだわアンタ。世界中に魔法ばらされて強制送還だわ」

ネギは絶望したようになった。

「そんなー！！一緒に弁護してくださいよ！アスナさん！！」

そんな様子を見ていたガニメデは小声でカリストに尋ねた。

「朝倉って奴はそんなにヤバいのか？」

するとカリストは若干青ざめた。

「ああ…あいつは危険だ。情報収集能力は超と比べても同等以上じゃないか？」

その返答にはガニメデも驚きを露にした。

「そんなヤバいのかよ…お前がそこまで言うとは意外だな。何か弱みでも握られたか？」

「な！？何をバカなことを！！」

カリストは必死に否定した。ガニメデはそんなカリストに呆れたような視線を送った。

「…凶星かよ」

その時、第三者が声をかけてきた。

「ヤッホーみんな」

全員の視線の先には噂の朝倉がいた。その肩にはなぜかカモが乗っていた。

「朝倉、あんたあんまり子供いじめんじやないわよ」

明日菜が睨むような目で言った。

「いじめ？何言ってるの？あんたこそガキ嫌いじゃなかったっけ？」

「関係ないわよ！」

「まあそれはいいや。本題は別だから」

「何よ？」

尋ねられた朝倉は不敵に笑った。

「この度、カモつちにほだされて私はネギ先生の秘密を守るエージェントになりました！」

その発言には全員が驚いた。

「はいこれ返すね」

そう言って朝倉はネギに魔法の証拠写真を渡した。

「あ！ありがとうございます！良かつた。これで問題が1つ解決できました」

ネギはそれを受け取り、安堵した。

「朝倉：何のつもりだ？」

が、カリストは朝倉に鋭い視線を送った。

「お、カリスト先生。”あの節”はお世話になりました」

「う…それは置いといて、さっきの発言は本当だろうか？」

「もちろん。これからはネギ先生の味方ってわけ」

カリストは朝倉を訝しむように見たが、すぐにため息をついた。

「まあ嘘ではないみたいだな…」

するとカリストと朝倉の会話を聞いていたガニメデが口をはさんだ。

「お前が朝倉か…」

それを聞いた朝倉はガニメデを見た。

「あなたは最近麻帆良学園にやってきた噂の広域指導員のガニメデさんですね。突然夜に現れ、暴れてる男達を一瞬で鎮圧する、その姿を見た者は決して生きて帰れない…その彼に付けられた名前は”闇夜の死神”！！…あ、どうも私は麻帆良学園報道部突撃班、朝倉和美って言います。よろしく！」

ガニメデは啞然とした。

「あ、ああ…よろしく…なんかもう突っ込みきれねえ…」

ガニメデはカリストに納得した視線を送った。

さらに夜が深まった頃、3－Aに不穏な空気が漂っていた。

「それでは今から”ラブラブキッス大作戦”の概要を説明致します
！」

朝倉は意気揚々とクラスメイト達の前で説明を始めた。

「ルールは簡単！各班から代表者を2名選んで、その中でネギ先生
又はカリスト先生の唇を奪った人が勝者！！優勝者には豪華景品を
もれなくプレゼント！！他の班の妨害もOK！ただし使っているの
は枕だけ！直接の打撃は禁止！それ以外は自由！どの班が優勝する
かの賭けもあるからね！！オッズも期待できるよ！！」

それを聞いた生徒達は一斉に騒ぎ始めた。朝倉はそんな様子を見て
ほくそ笑んだ。

ネギは見回りのため、外へ出ようとしていた。

「あ、そうだ！せっかくだから刹那さんにもらったお札を使ってみ

よつと！」

そう言ってネギは何枚かの札を取り出し、日本語で自分の名前を書いた。

「うーん、あれ？こうだったかな？…うーん」

が、中々上手く書けずに何枚か書き間違えた。

「よし！」

そしてようやく正確に名前を書き上げた。するとお札が煙を上げ、ネギの姿になった。

「すごい！これなら居なくてもわからないや。じゃあ、行ってきます！」

「いってらっしゃい」

ネギの分身は手を振って本物のネギを見送った。
その光景は、第三者が見ればかなりシュールなものだった。

カリストは昨日に引き続き今日も屋上から周囲を監視していた。

” 周囲に特異力場を観測。微弱ZPE変動を確認”

端末がそんなカリストに警告した。

「ああ：確かカモミールが言ってた敵を察知する結界だ。問題はない」

カリストは事前にカモから” 敵を察知する結界を書いた” という報告を受けていた。

” 了解、警戒を解除”

端末はカリストの言う通りに警戒を解いた。
そうしてしばらくカリストは夜の暗闇を警戒していた。

” 熱源接近、個数2”

その時、再び端末が警告した。

「敵かつ!？」

カリストは構えた。

” 不明。ZPE反応陰性、武装無し”

「何？呪術士ではないのか？」

カリストが目を凝らしていると、ゆっくりと2つの人影が現れた。

「あいやー見つかたアル」

「気配は消してたのでござるがな…」

見れば古菲と楓だった。何故か枕を両手に持っていた。カリストは安堵の息をはいて、そんな2人に言った。

「なんだ、君たちか…何か用か？」

問われた古菲と楓は不気味な笑みを見せた。それを見たカリストは嫌な予感に苛まれた。

「先生との約束を果たしに来たアル！」

古菲の発言を聞いたカリストは怪訝な表情になった。

「約束？」

すると今度は楓が言った。

「カリスト殿と一戦交える約束でござる。それを今果たしに来たでござる」

それを聞いたカリストは思い出したように言った。

「いや確かにしたような記憶はあるが…あれは本気だったのか？」

「本気アルよ！」

「拙者もでござる。さあカリスト殿、参る！」

そう宣言した古菲と楓は風のようにカリストに迫った。

「な!?!」

驚くカリストに、2人は容赦なく攻撃を始めた。ただし、腕は枕での打撃、足は指に挟んだ枕での蹴りだった。

「くっ!! 私には近接戦闘は苦手なのだよ!!」

「その割には強いでござるな」

古菲の打撃と楓の蹴りをかわしながらカリストは打開策を考えていた。

「そこアル!!」

「うっ!!」

しかし、古菲と楓の攻撃の前では回避するのがやっとだった。

「君たちは何故そんなに強いんだ!?! 本当にただの学生か!?!」

カリストはそう叫びながら古菲の拳を手で反らし、追撃するように繰り出されたもう片方の拳も受け止めた。その衝撃は枕越しとは思えない強さだった。

―ボスッ!―

「ぐ！なんて重さだ！」

が、すぐにその手を離して背後に飛んだ。

―スッ―

次の瞬間、カリストの目の前を枕が横切った。見れば楓が足に挟んだ枕で蹴りを放っていた。

それを背後へ飛んで回避したカリストだったが、着地した瞬間に古菲の拳が再び襲いかかってきた。

「セイヤッ！！」

「またかつ！」

カリストはそれをもう一度受け止め、古菲の腕を固定した上で、地を這うような足さばきで古菲に足掛けを放った。

「何っ！？」

が、確信を持って放った足掛けは、古菲には通じなかった。

古菲は固定されていた腕を凄まじい力で引き戻し、カリストの足を飛び越えるように跳躍して回避した。

「こちらも忘れないでほしいでござるよ！」

それを驚愕して見ていたカリストに、楓が枕越しに拳を放った。

「甘い！」

が、カリストはその拳を受け流し、体勢を崩した楓を抱き止めるように引き寄せた。

「っ!？」

驚愕する楓を無視してカリストは勢いを生かし―しかし怪我をしない程度の力で―足掛けをして楓を地に倒した。

「ハア…これで満足か？」

倒された楓は驚いたような笑顔でカリストを見上げていた。

「これで近接戦闘が苦手とは…信じられなくてござるな」

「アイヤゝ楓が倒されたアルかゝ」

それを見ていた古菲は笑顔でカリストを見ていた。

「まだ続けるのか?…出来れば止めてほしいんだが…」

カリストはそんな古菲に疲れた苦笑いをした。

「止めとくアル!カリスト先生を狙うのは悪い賭けアル!先生とは別の機会にちゃんと戦いたいアル!」

「いや、別の機会も止めてほしいんだが…」

さらに微妙な表情になるカリストを無視して古菲は楓に言った。

「次はネギ先生のところに行くアル!!」

それを聞いた楓はムクツと起き上がり、古菲に言った。

「そうでござるな。カリスト殿、失礼するでござる」

「次は負けないアルよ!」

そう言って2人は去って言った。

残されたカリストはため息をついた。

「本当に教師って大変だな…」

そうして哀愁を漂わせながら、カリストは再び周囲の監視についた。

「あゝだりい」

ガニメデはやる気のない口調で呟きながら今夜もホテルの館内を巡回していた。

そして通路の角を曲がる寸前、目の前から人影が飛び出してきた。

「うおっ!」

ぶつかる寸前でガニメデはその人物をかわした。

「危ねえな！いきなり飛び出すな！って…お前は…」

その人物を見た瞬間にガニメデは怪訝な表情になった。

「あ！ガニメデさんアルか！？」

古菲はガニメデを見て固まった。

「あの時のなんちゃってチャイナ野郎！」

「だから”なんちゃてチャイナ”じゃないアル！！古菲アル！！」

そんな2人に古菲の背後から現れた楓が声をかけた。

「むむ、あなたがガニメデ殿か…成る程、古菲の言った通り、中々できるお方とお見受けする。そういえば朝も食堂にいらしたでござるな」

楓はガニメデを観察するように見た。

「あ？誰だお前？」

対するガニメデは楓を不思議そうに見た。

「失礼。拙者、長瀬楓と申すでござる。以後、よろしくお願い致す」

「はあ…俺はガニメデだ。あんたらの学園の広域指導員だ」

「広域指導員：まさかあの”闇夜の死神”殿でござるか!？」

それを聞いたガニメデは顔を困惑の色に染めた。

「さっきも朝倉とか言う奴に言われたが、なんなんだ？そのあだ名は…」

対照的に楓は驚きの表情になった。

「なんと！やはりそうであられたか…いやしかし、何故貴方がここに？」

問われたガニメデは真顔に戻った。

「まあ学園長のじじいに手伝い頼まれてな…」

「そうでござったか」

その時、今まで会話の枠の外だった古菲が不貞腐れたように言った。

「無視しないでほしいアル！」

それを聞き、ガニメデは思い出したように古菲を見た。

「ああ、で、何だ？なんちゃってチャイナガール？」

「だから違うアル!!」

怒鳴る古菲だったが、次第に不敵な笑みを浮かべた。

「そういえばあの夜の続きがまだだたアル！今ここで決着つけるアル！」

「いや、今は困るんだが」

それを聞いたガニメデは拒否したが、古菲はお構い無しの様子だった。

「問答無用アル！」

「…マジかよ…人のこたあ言えねえがお前、相当な戦闘狂だな」

迫り来る古菲を見ながらガニメデは口の端を釣り上げた。

第26話「夜奏」

「あゝ、ぷらくて・びぎ…何だっけな…え…なる…火よ灯れ…だったか？」

エゼは面倒くさそうに言った。その口調からは真面目さの欠片も感じられなかった。

「なんですかそのやる気の無い詠唱は!!」

「真面目にやれ!!」

そんなエゼを咎めるように暦と焰は怒鳴った。

「んなこと言われてもな…こんなもんライターの方が早いだろ…」

しかしエゼは反省するどころか皮肉を言った。

「何言ってるんですか!! 仮にもフェイト様に仕える身でありながら、そんな初等魔法すら使えないなんて信じられません!!」

エゼがふとフェイトの仲間の少女たちに魔法が使えないことを教えたところ、”そんな者がフェイト様の隣に立つ資格はない!”と怒鳴られ、無理やり魔法の訓練をさせられていた。

「はいはい…」

そう言って、エゼは再びやる気のない詠唱を始めた。

――――

「何だ？その格好は…」

カリストは唾然としたように目の前の鳴滝姉妹を見た。

「何って忍者だよ忍者！」

2人は忍者のコスプレに身を包み、屋上のカリストと対峙していた。

「いや…さっぱり意味がわからないのだが…」

困惑するカリストを見た史伽は小声で風香にささやいた。

「やっぱり止めようよ！お姉ちゃん！」

それを聞いた風香は史伽に言った。

「何言ってるのさ！カリちゃんの唇が誰かに奪われちゃってもいいの？」

「う、それは嫌だけど…」

「なら、打ち合わせ通りにね！」

そう言って風香はカリストに向き直って言った。

「いくよ！楓姉直伝の忍法！！」

「……もう勘弁してくれ」

「…満足か？」

ガニメデは床に倒れている古菲を見て言った。

「うう…やっぱり強いアル」

古菲は目を回しながら言った。

「やるでござるなガニメデ殿」

2人の戦いを観戦していた楓は驚いたようにガニメデを見た。

「何だ？お前はかかってこないのか？」

問われた楓は笑って答えた。

「止めとくでござるよ。拙者の目的は他にもあるでござるからな。
古！いつまで寝てるでござるか？ネギ先生のところへ行くでござる
よ」

呼び掛けられた古菲は飛び上がるように立ち上がった。

「そうだとアル！ガニメデさん！失礼するアル！次も勝負アルよ！」

去って行く2人の後ろ姿を見ながらガニメデは鼻を鳴らした。

カリストは双子の襟首を掴み、動物の子供のように2人を持ち上げていた。

「何してるんだ君たちは…」

カリストは凄まじく疲れた表情を見せた。その顔は実年齢の倍に見える程だった。

「カリちゃんの唇を頂きにきたの！！」

「ちょっとお姉ちゃん！」

背の低い2人はぷらぷらと空中に吊るされた状態で叫んだ。

「は…：？」

その発言にカリストは哑然とした。

「ラブラブキッス大作戦だよ！先生の唇を奪った人が勝者なの！」

それを聞いたカリストは呆れ口調だった。

「君たちはそんなことしてたのか…まあいい。そこそこにしておけよ」

そう言ってカリストは2人を離れた。

「あれ？いいの？」

風香は意外そうにカリストを見た。

「めったにないクラスメイトとの旅行なのだから騒ぎたいのは理解できるからな。教師としては説教の一つもくれてやる必要があるのだろうが…まあ今回は見逃そう。早く部屋に戻りなさい」

「あ、ありがとうございます！ほら、お姉ちゃん！早く戻ろうよっ！」

そう言って史伽は風香を引っ張って行った。

「ありがとねカリちゃん！」

風香は引っ張られながら手を振って叫んだ。カリストはそんな2人を苦笑いしながら見送った。

「さて…主犯を捕まえるのでしょうか」

そう呟くカリストの瞳は不気味に光っていた。

ホテルの一角、暗い密室でモニターを見つめる不気味な姿が2つあった。

「フフフ…うまく行ってやすぜ姉さん！」

カモはモニターを見ながら上機嫌に言った。

「これで私も小金もち…カモっち、ナイスだよ」

朝倉はそんなカモに笑いかけた。

「全くウハウハですぜ！仮契約が成功すれば、オレっちはオコジョドル、姉さんは…」

発言の途中でカモは寒気を覚えて固まった。

「やはり朝倉とカモミールだったか」

カモと朝倉が振り返ると、そこには無表情で佇む背の高い男がいた。無表情でありながら、その瞳は不気味に笑っていた。

「やばっ！！カ、カリスト先生…」

「だ、旦那！？これはその違うんスよ！！」

慌てる1人と1匹に、カリストは穏やかな口調で言った。

「そうか。何が違うのか教えてくれないか？」

カモは滝のように冷や汗を流した。

「か、仮契約すれば戦力が上がるじゃないスか！そうすれば少しは…」

カモが発言し終わる前にカリストは言った。

「成る程成る程。よくわかったよカモミール」

カリストは笑った。しかし今度は目だけ笑っていなかった。

「で、朝倉は何をしていたんだ？」

カリストの次なる標的となった朝倉は乾いた笑みを見せた。

「ハ、ハハハ…。その…私もカモっちと同じで…」

「そうかそうか。皆のことを考えての行動だったんだな」

カリストは不気味に笑った。
それを見た朝倉はカモに囁いた。

「な、なんか…カリスト先生…何時もとキャラ違うくない…？」

「これはヤバイスよ…。旦那、何か吹っ切れちまってるみたいっスよっ…！」

1人と1匹は囁き合いながら冷や汗を流していた。そこへカリストが声を掛けた。

「どうかしたのかい？」

声を掛けられた1人と1匹はビクツと震えた。

「な、何でも無いですっ…！」

「そ、そうスよ。や、やだな～旦那」

「そうか。何でも無いのか」

「そうっスよ～ハハハハ…」

その後、朝倉とカモはカリストから長い説教を受けた後、ロビーで正座させられていた。

「あ、姉さん：オレっちは学習しやしたぜ：カリストの旦那を怒らせちゃマズイっス」

「カモっち、同感だよ」

1人と1匹は疲れ切った表情だった。

新田先生に捕まった他の生徒も続々とロビーに集められ、正座させられていた。そして、ネギが書き間違えて捨てた札によって、ネギの分身が沢山現れて混乱状態になっていた。

「ゴホっ：何ですか！？この煙はっ！？」

そんな中、ネギの分身が出した煙によって煙ったロビーに、外を見回っていた本物のネギが帰ってきた。それを見た夕映は、のどかを押した。

「ほらのどか！あれが本物のネギ先生です！行くですよ！」

「ちょ、ちよっとゆえ〜」

そうしてのどかはネギの目の前に立った。

「あ、のどかさん：」

「ネギ先生：」

2人は目が合った瞬間に赤くなった。

「き、今日の奈良でのことなんですけど…」

ネギは勇気を振り絞るように言った。

「い、いえ…先生に迷惑かけてしまって…聞いてもらえればそれでいいんです！」

「え、えっと…あれから色々考えてみたんですが、僕はやっぱり恋愛とかよくわからなくて…それで、あの…」

そこでネギは区切り、真っ直ぐにのどかを見た。

「お友達から始めませんか？」

その発言にのどかは笑顔を見せた。とても真っ直ぐな笑顔だった。

「はい！」

「じゃあ戻りましょうか」

そう言って歩き出すネギとのどかがすれ違う瞬間、夕映はのどかの足に自分の足を引っ掻けた。

そしてのどかが躓いた瞬間、偶然にネギとのどかの唇が重なった。

「あ！す、すみませんっ！！」

「い、いえっ！！」

そして慌てて離れるネギとのどかの顔は真っ赤に染まっていた。

ガニメデは携帯から学園長に報告の電話をしていた。

「すまねえ…俺としたことがバレちゃってよ…」

” フォッフォッフォッ。気にせんでよい。非常時じゃったのだしな。むしろこのかを助けてくれたこと、本当に感謝しておるぞ”

「まあ貸しにしといてやるぜ。これからはネギ坊主やカリスト達と行動するが構わないか？」

” 無論じゃ。西がそこまでしてきているのじゃからな。生徒たちの安全を最優先にしとくれ”

「ああ、わかったぜ。んで…じいさん、一つ質問なんだかよ」

” 何かの？”

「あの刹那って奴のことだが」

” 刹那くんかの…”

「ああ。あいつ、何か背負ってないか？」

” ……なぜそう思うのかの？”

「見てりゃわかるぜ。あんたの孫のことになると特にな」

” ……そうかの…やはり刹那くんはこのかを…”

「まあ無理に聞くつもりはないがな」

” ……すまぬの。本人を差し置いて話すことはできんのじゃ”

「気にすんな。俺も個人的な事情に深入りするつもりはない…じゃあな」

” すまぬの。生徒のこと、くれぐれもよろしく頼むぞい”

「ああ。任せな」

学園長室の椅子に腰かけている老人は静かに電話を置いた。

「学園長！」

その目の前に身を乗り出して立っているガンドルフィーニは叫んだ。

「やはり彼らを同行させたのは納得しかねます！もしも生徒に何かあればどうするおつもりですか！」

いきり立つガンドルフィーニに対して学園長は静かな口調で言った。

「お主には彼らが危険に見えるのかの？」

「勿論です！いきなり現れた未知の魔法使いを信じることなど不可能です！」

学園長は鋭い視線をガンドルフィーニに送った。

「ガニメデ君はこのかを助けてくれたぞい。お主はそれを否定するのかの？」

「それは彼の発言を信じればの話です！」

「刹那くんには確認をとっておる。彼の話は本当のことじゃよ」

「しかし！彼の仲間であるイオという男はあのエヴァンジェリンと交流を持っているという報告もあります！」

「ほう。お主にはエヴァまで危険に見えるのかの？」

「何をおっしゃっているんですか!!あの”闇の福音”ですよ!？」

「彼女はなりたくてそうなったのではないぞい」

「それでも事実です!学園長!彼らは危険です!」

「ではどうするのじゃ?お主では彼らには敵わぬぞ」

その発言にガンドルフィーニは詰まった。

「く…それは…」

学園長はそんなガンドルフィーニを真っ直ぐに見た。

「聞きなさいガンドルフィーニ君」

ガンドルフィーニも学園長を見つめた。学園長は諭すように穏やかな口調で言った。

「彼らの力はワシが直に見た。あの力があればワシらを潰すことなぞ造作もないじやろう。じゃが、彼らはそれをせんかった。3-Aのクラスに意図的に接触させたのじゃが、それでも何もせんかった…それどころかイオ君とガニメデ君は西からの刺客を撃退し、ガニメデ君はこのかまで助けてくれたのじゃ。カリスト君は良い先生であり、生徒にも慕われとる…お主はそんな彼らを否定するののか?」

ガンドルフィーニは一度目を閉じ、ゆっくりと開いた。

「…少し熱くなっていました…すみません学園長。しかし、私はどうしても生徒達が心配なのです」

「フオッフオッフオッフ。生徒思いのガンドルフィーニ君らしいの。ならば一度彼らと話してみればよいのではないかの？」

「彼らと…？」

「そうじゃよ。話し合ってみて分かることもあるじゃろうて」

ガンドルフィーニは考えるように沈黙した。

「…そうですね。お忙しい中、失礼しました」

そして、そう言ってガンドルフィーニは学園長室を後にした。

イオは夜空を見上げていた。闇の中、星が静かに輝いていた。とても静かに。

見上げているイオの横顔は無表情だった。

何時もの無機質な顔だったが、森の中に佇むその姿はどこか切なく見えた。

「あ、あの…」

茶々丸はそんなイオにためらいながら声をかけた。

「何だ？」

「マスターが夕食にするから戻ってこいとお呼びです…その…どうかなさったのですか？」

茶々丸の問いかけに、イオは空を見たまま答えた。

「空が、綺麗だと思ったんだ…」

茶々丸はそう言うイオの姿を見つめた。

「ガイノイドである私には綺麗という感情がわかりませんが…この夜空は綺麗という意味に合っていると思います」

するとイオは茶々丸に無機質な瞳を向けた。

「貴女は、感情を理解している…いや、貴女には感情が存在している」

茶々丸は驚愕したように目を見開いた。

「そ、そんなことはありません。私はガイノイドであり、感情というプログラムは持ちません」

イオは再び夜空を見上げた。夜の森には静かな虫の音が響いていた。

「初めて貴女に会った時、自分に似ていると感じた。しかし、確信した…」

イオは視線を茶々丸に戻した。その瞳は深い青色だった。

「貴女の方が：俺よりも遥かに人間らしい」

茶々丸はそんなイオの視線から目を離せなかった。そうして互いに沈黙した。

いつまでそうしていたか、第三者の声によってその沈黙は破られた。

「イオだな？」

イオがその方向を向くと、ガンドルフィーニが木々の間から現れた。

「そうだ」

イオは短く答えた。

「君に話がある」

それを聞いたイオは茶々丸に向かって言った。

「先に帰れ。マクダウエルには遅くなると伝えてくれ」

「はい：では失礼します：」

茶々丸はお辞儀をしてその場を去った。その場にはイオとガンドルフィーニだけが残った。

「話とは何だ？」

イオは尋ねた。

「単刀直入に聞く。君たちはこの学園に害を成す存在か否か…答えてもらおう」

ガンドルフィーニは威圧感を放ちながら言った。

「そちらが敵対行動を示さない限り、我々はこの学園に敵対するつもりはない」

それを聞いたガンドルフィーニは視線を鋭くした。

「その言葉、本当だな？」

「肯定だ」

イオとガンドルフィーニは無言で睨み合った。しばらくそうした後、ガンドルフィーニは雰囲気を経分和らげた。

「…君を信じよう」

するとイオが尋ねた。

「なぜ信じる？」

「…君の目だ。その目をしているということは、君にも貫きたい正義があるのだろうか？」

イオは僅かに目を細めた。

「正義、悪というものは存在しない。あるのは現象だけだ。その現象に独自の解釈を加えることで正義、悪という相対的な価値判断が生じるだけだ」

それを聞いたガンドルフィーニは眉をひそめた。

「ならば、君には正義はないというのか？」

若干低い声でガンドルフィーニは言った。

「ないわけではない。本質的に存在しないという意味だ。ただ、俺にも貫きたい信念ならばある」

イオは無表情で言った。が、その瞳には感情が現れていた。

「…そうか。ならばいい。その信念と私の信念が衝突することがないのを願うばかりだ」

そう言ってガンドルフィーニはイオに背を向けた。

「夜分にすまなかったな。失礼する」

そう言ってガンドルフィーニは森の中に消えていった。

その方向をしばらく見ていたイオだったが、思い出したようにエヴァの家への歩を進めた。

近々、互いの信念が衝突するとも知らずに…。

第27話「閉塞」

翌日、ネギ達は待合室に集合していた。

「ちょっとネギ！こんなに沢山カード作っちゃって一体どーすんのよ！！」

昨夜のラブラブキッス大作戦の本当の目的は、カモが書いた館全体を覆う魔方陣の中で口付けによる仮契約を行ってしまおうというものだった。

明日菜はそんな仮契約のカードを見ながら叫んだのだった。

「いや〜でも姐さん、これほとんどスカですぜ。本物はこれ1枚でさあ」

そう言ってカモは宮崎のどかの姿が描かれたカードを取り出した。ネギの分身達の仮契約は全て本物ではないため、仮契約の効果が無いただのカードだった。

「まあ娘っ子には景品としてスペアカード渡しとききましたぜ」

それを聞いたネギが言った。

「でもマスターカードは使いませんし、魔法についても教えません」

「当然よ！本屋ちゃんは普通の女の子なんだから巻き込んだらダメよ！」

「は、はい…でも明日菜さんも一般人じゃ？」

「今さらあたしにそーゆーこと言うわけ？ ネギ」

「う、いえ…」

そんな2人の会話を聞いていたカリストは重々しく口を開いた。

「ネギ先生、これ以上生徒をこちら側へ巻き込まないようにしてくれよ」

「すみません…」

「まあ謝る必要はない。今度からは気をつけてくれ」

「はい…」

ネギはカリストに注意されて落ち込んだように俯いた。

それを横目で見たガニメデは陽気に声をかけた。

「いいじゃねえか坊主！ お前はベスト尽くしてんだからよ！ さあお説教タイムは終わりだ。これからの計画について話そうじゃねえか」

計画通り、ガニメデとネギと明日菜は親書を届けるグループ、刹那は木乃香の護衛、カリストはその他全ての生徒達の広域護衛をすることとなった。

それぞれが役割を確認し、分散して行動していた。

「んで、ここがその本山の入口なのか？」

ガニメデ達の目の前には何処までも続いているように朱色の鳥居が奥へと並んでいた。

「はい。ここが西の本山へ繋がっている入口です」

刹那の姿をデフォルメした小さな式神”ちびせつな”がフワフワと空中に浮かびながら答えた。

この”ちびせつな”は刹那が放った式神で、これを介して刹那との連絡を取り合うことができた。

因みに半自律型であり、頭の方が少し弱いとのことだった。

「では、行きましょう」

ネギは真剣な表情で鳥居を見つめた。

「そうだな。んじゃま、お邪魔するか」

ガニメデは一番に鳥居をくぐった。

ネギと明日菜、ちびせつなもそれに続いた。

周りは雑木林で、鳥居だけが何処までも続いていた。3人がそんな中を歩いていた時、ガニメデの端末が反応した。

”警告。時空の捻れを観測、観測値83.52。3次元空間の接合確認、閉鎖空間に座標値を固定されました”

それを聞いたガニメデは焦った表情になった。

「何っ！？まずいっ！」

焦るガニメデを見て、ネギも慌てた。

「一体どうしたんですか!？」

ガニメデは片手で顔を抑えた。

「くそ…やられた…罠だ。この座標値に固定された」

それを聞いた明日菜は困惑したように叫んだ。

「ちょっと! どういう意味よ! 全然わかんないわよ!」

「要はこの空間に閉じ込められたんだ」

ガニメデは苦い表情を見せた。

「まずいぜ兄貴!」

「え!?! そんな!?!」

「どーすんのよ!」

「あわわわ! どうしましょう!」

ネギの肩に乗っているカモは叫び、ネギと明日菜とちびせつなは声を荒げた。

対してガニメデは無言で前を見つめていた。

「…来る」

ガニメデの発言を不審に思った明日菜とネギは、ガニメデの見てい
る方向に視線を向けた。

—ドン！—

次の瞬間、目の前に巨大な式神が現れた。

「またあつたな！西洋魔法使い！」

その式神は白い巨大蜘蛛の姿をしており、その上に黒髪の少年が腕
を組みながら立っていた。

見れば、その少年は先程ネギ達が入ったゲームセンターにいた少年
だった。

そしてその横に白髪の少年がいた。その表情は無機物のようだった。

「敵襲か」

ガニメデはそんな2人を見て呟いた。

「さあやるで！俺はあっちのゴツい方の兄ちゃんとやるで！お前は
そっちのチビ助や！！」

それを聞いた白髪の少年、フェイトは黒髪の少年、犬上小太郎を感
情の無い瞳で見た。

「駄目だよ。計画通りに行動してもらおうか」

「はっ！計画や何や言うても、要は相手をボコボコにすりゃええん
やろが！！それにあっちの兄ちゃんの方が強そうや！！」

そういう小太郎にフェイトは抑揚のない口調で言った。

「報酬、いらんのかい？」

その発言に小太郎は言葉を詰まらせた。

「う…わ、わかったで！そんならまずはこのチビ助倒したるわ！！」

そう言い放った小太郎は式神ごとネギに襲いかかり、同時にフェイトもガニメデに迫った。

「契約執行300秒！ネギ・スプリングフィールドの従者、神楽坂明日菜！」

ネギに魔力供給された明日菜が小太郎の進路を塞ぐように立ちはだかった。

「いくわよ！！」

「どけや姉ちゃん！俺は女殴る趣味はないんや！！」

そんなネギ達を横目に、ガニメデはフェイトを迎撃しようとした。

—バンツ—

「っ！？ぐっ！！」

が、目の前に転移したフェイトの拳によって勢い良く吹き飛ばされた。

「ガニメデさん!!」

「よそ見してる暇ないでチビ助!!」

ガニメデを心配するネギだったが、小太郎によって妨害され、駆けつけることはできなかった。

フェイトはガニメデに追撃するために、吹き飛ばした方向へ向かった。

ガニメデは離れた場所でゆっくりと立ち上がった。

「く…油断したぜ…お前、相当強いな…」

フェイトは無表情でそんなガニメデに歩み寄った。

—ドンツ—

「うぐっ…」

気づけばフェイトはガニメデの懷まで接近し、重い拳を放っていた。再び直撃を受けたガニメデは、気を失いそうになる程の衝撃を受け、体を”く”の字に曲がらせて吹き飛ばされた。

(こいつ…)

落下の際、地面に打ち付けられたガニメデは痛みを噛み殺して立ち上がった。

「く…やってくれるなあっ!!」

そしてフェイトへ駆けた。その速度は確かに早かった。

―グキッ―

「!？」

が、フェイトには完全に捉えられていた。

ガニメデの突撃を回避したフェイトは、体勢を崩したガニメデに強烈な蹴りを放った。

耳障りな音と共に、ガニメデは地面に伏した。

（なんてザマだ…一撃も入れられねえなんてよ…）

ガニメデは再び立ち上がったが、フェイトの攻撃は止まなかった。起き上がる前にガニメデを空中に蹴り上げた。

「く…」

そしてフェイト自身も自由落下してくるガニメデに向かって跳躍した。

―バン―

「うっ…!!」

フェイトは落下してくるガニメデに拳を突き出した。ガニメデも落下していた為、その衝撃は絶大だった。

「く…そ…」

（全く：情けねえ：）

地面に落下したガニメデは、ついに地に伏した。

「君が報告にあった白服の男だね。もっと強いと聞いてたんだけど、違ったみたいだね。魔力は微々たるものだ」

フェイトはそんなガニメデに見下したように言い放った。

その一言が引き金となった。

忘れられぬ記憶の奥底：

”あの”少年の言葉が脳裏を過った。

”ガニメデ：本当の強さってのはさ、目に見えたり計ったりできないものじゃないかな？
少なくとも俺はそう思うよ”

（ハッ：懐かしいじゃねえかイメリア：）

強さ—そうだな：

俺が求めたのは

俺が欲しいのは…

”本物の強さ”だ。

お前の言う通りだな…

ガニメデは口の端をつり上げ、ゆっくりと起き上がった。
その顔は獰猛な獅子そのものだった。

「そうかい…テメエらは魔力だ何だの訳わからねえもんの大小で強い弱いを決めんのかよ…」

ガニメデの漆黒の瞳は獲物を捉えていた。
その顔は最早笑ってはいなかった。

「反吐が出んだよおお!!」

そして獣のように叫んだ。

「デイヴァイン第二解放おお!!」

そう叫んだ瞬間、ガニメデの両腕に銀色の甲冑が現れた。歪な形状をしたその甲冑は、不気味な威圧感を与えるものだった。

”それ”は存在し得ないものだった。

否、存在してはならないものだった。

同時に、フェイトにはガニメデ自身の魔力も増大したように見えた。

（アーティファクト？ いや…ディヴァイン？…魔力まで増大した…）

フェイトは僅かに眉をひそめた。

「さあいくぜ坊主！！」

次の瞬間、ガニメデはフェイトの背後に”位置”していた。そして目視不可能な速さで拳を振るった。

―パリンッ―

「！？」

ガニメデの腕はフェイトの障壁を砕いた。
そして先程とは逆にフェイトを吹き飛ばした。

「まだだぜ…」

―バキッ―

「っ！！」

さらにガニメデはフェイトの落下地点へ先に転移し、飛んでくるフェイトを蹴りつけて地面に叩き落とした。

しかし追加で殴ろうとした瞬間、フェイトの正面から石の槍が生えた。

「くっ！」

ガニメデは間一髪でその槍を碎いて回避した。
が、さらに槍が空中に現れ、ガニメデに向かって降り注いだ。

「チッ…」

ガニメデは背後へ跳躍してその全てを回避した。獲物を捕らえ損ねた槍はダーツのように地面に突き刺さった。

距離が開いたところでフェイトはゆっくりと起き上がってガニメデに対峙した。

「驚いたよ。僕の障壁を一撃で壊すとはね」

フェイトは先程のダメージが全くない様子で言った。

「そうかい。そりゃ嬉しいね！お前みたいに強いのは久しぶりだからな！」

ガニメデは癡猛に笑った。その野性的な瞳は常にフェイトを捉えていた。

「やはり君は危険だ。排除する必要がある」

そう言った瞬間、フェイトの背後に無数の石槍が現れた。その切っ先は全てガニメデに向けられていた。

「いいぜ！やってみな！」

ガニメデの挑発に応えるように、石槍は一斉に射出された。

「どこ狙ってんだ？」

が、既にその場にガニメデはおらず、フェイトの目の前に転移していた。

「圧縮ZPE！右腕解放！」

先程とは異なり、ガニメデは緑色に光る甲冑に覆われた拳を振るった。

フェイトにはその腕に圧縮された魔力が、解放される瞬間を今か今かと待ちわびているように見えた。

―バンッ！―

凄まじい衝撃音が響いた。フェイトがいた場所の地面がクレーターとなり、地面の破片が飛び散った。

「チッ：外したか」

が、ガニメデは手応えを感じなかった。

そしてその場から直ぐに転移した。次の瞬間には、その場に無数の石槍が刺さっていた。

「危ねえなあ！」

転移したガニメデは再びフェイトの背後に”位置”した。

「おらっ!!」

「:!!」

そして振るった拳はフェイトの障壁と拮抗した。フェイトは障壁を強化し、ガニメデはさらに力を加えた。

「おらおら! 耐えてみろ!」

叫びながら、ガニメデはZPEを圧縮し始めた。

それを見たフェイトはその場からガニメデの側面へと水のゲートで転移した。

「しまっ!!」

そしてフェイトはガニメデへ石槍を放った。

「情報障壁展開!!」

が、それは緑色に光る不可視の壁によって遮られた。

「お返しだああ!!」

叫んだガニメデは緑色に輝く圧縮したZPEを拳にのせてフェイトに放った。

―パキンッ―

「…っ!!」

障壁で防御したフェイトだったが、障壁が碎けて吹き飛んだ。ガニメデはそこから動かずにフェイトの飛んで行った方向を無言で見つめた。

粉塵が晴れたそこには無傷のフェイトがいた。

「君は本当に危険だ。ここで排除したいけど、どうやらあちらはもう時間のようだね」

そう言ってフェイトは別の場所で戦っているネギ達を見た。

ガニメデも視線を向けると、ネギが小太郎を上空へ殴り飛ばしていた。

「僕には他にも仕事があるからね。失礼するよ」

そう言い残し、フェイトは水のゲートを使って転移した。

「逃がしたか…まあ多少は楽しめたからいいとするか」

それを見たガニメデは独り言を呟いた。

その時、ネギの方から唸り声が聞こえた。見れば先程ネギに一撃受けた小太郎が叫び声を上げ、体を狼のそれに変えているところだった。

「おいおい…なんだありゃ…狼男か？」

そして大狼の姿になった小太郎はネギに迫った。

「右です！」

その時、雑木林から第三者の声がした。
見ればのどかだった。

戸惑いながらも言われた通りに動いたネギは小太郎の拳を完全に回避していた。

「の、のどかさん！？なぜここに！？」

「次は左です！ネギ先生！」

驚愕するネギだったが、のどかの指示に従った。
すると再び小太郎の拳を易々回避した。

（な、なんや！攻撃が読まれとる！？）

「次はジャンプして、右から攻撃してください！」

「な、んなアホなっ！？」

―バチン―

言われた通りに動いた結果、ネギは小太郎を打ち倒していた。
それを見ていたガニメデは、僅かに眉をひそめた。

「あ、ガニメデさん！！無事でよかったです…って！！大丈夫ですか！？」

一息ついたネギはガニメデに気付き、近づいてきたが、ガニメデの姿を見るなり心配そうな表情になった。

「ああ。問題ねえよ」

何事も無かったかのように平然と言い放つガニメデのその姿はボロボロだった。

その後、ネギ達は鳥居を抜け出し、逆に小太郎を閉じ込めた。そして刹那からの連絡が途絶えたシネマ村へとバスに乗って急行していた。

「えっと、じゃあのどかさんは朝のあれを見てしまっていたんですね…」

「は、はい…」

「じゃあその本がのどかさんのアーティファクトですか…」

その時、のどかのアーティファクト”いどのえにつき”を観察していたカモが興奮気味に言った。

「すげーぜ兄貴！このアーティファクトは相手の心を読めるって能力だ！相手の心の声がこの本に全部書き表されるみたいだぜ！まあ何故か可愛いらしいデフォルメされた相手の絵が書かれる上に絵日記なんだけだよ…」

そんな中、のどかと距離を空けて座っているガニメデが口を開いた。ガニメデが一定以上近づくと、のどかが怯えたようになる為に距離を空けているのだった。

「で、どうすんだ？連れてくのか？」

「はい。そうします」

ネギはガニメデの問いかけにはつきりと答えた。

「まあいいけどよ。着いたら何が起きるかわからねえ。しっかり守れよ」

「はい！」

ネギは元気に言った。それを見たガニメデは口の端をつり上げた。

第28話「飛翔」

敵襲を受けた刹那は、木乃香を連れてシネマ村に来ていた。ここならば人に紛れて上手く逃げる事ができると考えていたからだ。3-Aのクラスメイトに遭遇するなどのアクシデントもあったが、木乃香と2人きりで楽しげにしていた。刹那は新撰組の服装に、木乃香は姫の着物姿に着替えていた。

しかし、そこへ敵の月詠が現れ、芝居に見せかけて決闘を申し込んできた。

逃げる訳にも行かなくなり、観客達が見ている中、刹那は木乃香をかばうように橋の上で月詠と対峙していた。

そして月詠が放った妙に愛らしい妖怪達が観客の衣服を剥ぎ取ろうと暴れ回っていた。見た目通り基本的に無害のようだったが、辺りは騒然としていた。

そんな混乱の中、橋の上だけは別の様相を見せていた。

「センパイ：センパイもお嬢様も、みーんなウチのモンにしてみせますえ」

月詠は不気味な笑みを2人に向けた。その表情はとても正常な人間のするものではなかった。

「せっちゃん：なんかあの人怖いんよ」

木乃香は怯えたように刹那の袖を掴んだ。

「ご安心ください。お嬢様は私が守ります」

刹那はそんな木乃香に優しい笑顔を見せた。

「せっちゃん…」

「刹那さ〜ん！」

そこへネギが空を飛んでやって来た。

「あ！ネギくんや〜」

「ネギ先生！？どうしてここに！？」

刹那は驚いたようにネギを見た。

「ちびせつなさんからの連絡が途切れてしまったので何かあったのではないかと思って駆けつけました！ガニメデさんと一緒に今そちらに向かっています！あ、因みにこの体はちびせつなさんのもので、見た目だけ等身大の僕になっています」

ネギは着地しながら説明した。

「そうでしたか…いきなりですがネギ先生！今敵襲を受けています！私が引き付けておくのでこのかお嬢様と一緒に逃げてください！」

刹那は一瞬視線を月詠に送り、真剣な表情で言った。

「せっちゃん…」

それを見た木乃香は不安げな瞳を刹那に向けた。

「え？あ、はい！わかりました！」

対峙している月詠を確認して事の深刻さを理解したネギは木乃香の手を引いて走り、橋から離れていった。

それを見送った刹那は月詠に向き直り、鋭い視線で睨んだ。

「月詠…」

「センパイ…よそに目をやるのは…許せんどすな」

そう言った月詠は一瞬で刹那との距離を詰め、長刀と短刀を交互に使って斬りかかってきた。

そうして刹那と月詠との斬撃の応酬が始まった。

分身のネギは木乃香を連れて城の屋上まで来ていた。が、退路が無い屋根に逃げたのは失策だった。

そこには千草とフェイトが待ち構えていた。更には式神まで召喚されていた。

「動かんといてな坊や。少しでも動くところの式神が矢、放ちますわ」

千草は薄ら笑いを浮かべた。

「…」

が、ネギは臆することなく無言で千草を睨み付けていた。千草はそんなネギに苛立ちを露にして叫んだ。

「さぁお嬢様を渡しい!!」

千草が叫んでもネギは一步も動かず、木乃香を守るように構えていた。

偶然か必然か―次の瞬間、突如強風が吹いた。

「あ…」

それによって木乃香は僅かに動いてしまった。
それを確認した式神が矢を放った。

「このかさんっ!!」

その矢は真っ直ぐに木乃香へと向かって行った。ネギが身体を盾にしたが、分身の身体では防ぐことはできなかった。

矢はネギをすり抜けて木乃香に迫った。

時間が静止した。

木乃香には矢がゆっくりと自分に迫ってくるのが見えた。

矢の動きは見えるがしかし、体は石のように硬直してしまっていた。

木乃香は目を閉じた。

寸瞬先の痛みを予期して。

射られた矢は決して止まらない。

故に木乃香の未来は決まっていた。

が、その理は覆された。

迫る矢は”何か”に遮られて木乃香には命中しなかった。

木乃香の目の前には見知った姿があった。矢はその人物に刺さっていた。

橙色の髪が風に揺れた。

「カリスト…先生…？」

カリストは負傷したとは思えない程に穏やかな表情をしていた。

「よかった…間に合った…今度は…守れ…た」

木乃香は矢を受けて膝をつくカリストを呆然と見つめた。

「うちが…うちのせいで…」

状況を理解したネギも顔面を蒼白にして叫んだ。

「か、カリストさん…！」

（くそっ！まだなのか…長距離座標転移が安定さえしていれば！）

カリストは焦っていた。連絡を受けてからシネマ村へ急行していたが、未だに目的地は視界に入らなかった。

自らの無力さに歯噛みし、屋根から屋根へと凄まじい速度で移動していた。

（間に合え…！！）

焦る思いとは裏腹に、自らの足はそれ以上早くは動かなかった。

カリストが射程に木乃香達を捕らえた時には既に遅かった。見たの

は式神が木乃香に矢を射る瞬間だった。
それを見たカリストは決意した。

” 長距離座標転移 ”

刹那は我が目を疑った。

月詠と距離を空け、城の屋根を見上げた。
そこには光の柱が立っていた。

「お嬢様っ!!」

刹那は月詠のことすら忘れ、駆け出した。

刹那が屋根に到着した時、既に光の柱は消えていた。
代わりに、そこには無事な木乃香とカリストがいた。それを見た刹那は深く安堵した。

「よかった…」

刹那は2人に駆け寄った。

「ご無事ですか？」

木乃香とカリストはどこか呆然としたように刹那を見つめた。

「あ、せっちゃん…」

「一体……」

刹那はそんな2人を心配そうに見た。

「大丈夫ですか？何があったのですか？」

尋ねられた木乃香はぼわんとした表情で答えた。

「それがようわからんのやううち、何が何やら……」

混乱する木乃香に代わり、カリストが答えた。

「それは後にしよう…それより今は周囲の安全を確認した方がいい」

刹那は真剣な表情で頷いた。

「そうですね」

「どうやら敵は撤退したようだな…」

周囲の安全を確認したカリストは呟いた。

「そうですね…」

刹那もそれに同意した。

先程の一件から、敵は撤退したようだった。

その後、ガニメデ達も合流し、シネマ村の茶屋でこれからの計画を話し合っていた。

魔法を知らない木乃香は刹那に連れられて席を外していた。

「で、まず聞きたいのは何で宮崎がここにいるんだ？」

「っ！！」

カリストに見られたのどかは一瞬怯えた。

「えっと実は…のどさんも魔法を知ってしまったみたいで…」

ネギの発言を聞いたカリストは呆れたようだった。

「ネギ君…またかい…」

「す、すみませんっ！」

ネギはそんなカリストに慌てて謝った。

「まあいいじゃねえかカリスト。過去のことを振り返っても仕方ない…俺たちがよくわかってることじゃねえか」

ガニメデはネギをフォローするように言った。

「ああ…そうだな」

そのガニメデの発言に、カリストは意味深に同意した。
そしてカリストは雰囲気を一変させてから再び口を開いた。

「それで、近衛と私には何が起きたんだ？光の柱とZPE：いや、魔力と言った方がわかりやすいか：魔力の変動が確認されたが：」

その質問にネギが答えた。

「そのことですが、どうやらこのかさんの魔力が発動してカリストさんの怪我を治したみたいなんです」

「なるほど：そうだったのか：私の責任でもあるが：近衛にどう説明するのだ？最早魔法について隠しておけるとも思えないが：」

その発言をネギは否定した。

「カリストさんの責任じゃないですよ！！カリストさんはこのかさんを助けてくれたんですからっ！！」

必死に言うネギを見てカリストは僅かに表情を崩した。

「ありがとうネギ君：」

そこへガニメデが口を挟んだ。

「まあ兎に角、これからどうすんのか、んで嬢ちゃんについてもどうすんのか決めようぜ」

「そうですね：それも含めて提案があるんですが」

ネギのその発言にガニメデは興味を持ったように促した。

「ほう、言ってみろ坊主」

「はい。実は、関西呪術協会の総本山に木乃香さんも一緒に連れて行こうと思っているんです」

「ああ、確かあそこはお嬢ちゃんの実家だったな…まあそこなら安全だろ」

そのガニメデの発言にカリストが同調した。

「確かに、総本山であるならば敵も襲撃しづらい筈だな」

更にネギが付け足した。

「それに、総本山には強力な結界があるそうです」

「俺っちも同意見だぜ」

カモもネギの肩から声を上げた。

「ならば、私は他の生徒達の護衛に戻るとしよう。ガニメデはネギ君達と総本山に向かってくれ」

「はいはいわかってますよ」

ガニメデは面倒くさそうに言った。

「ちょ、ちょっと！私まだよくわからないんだけど！」

今まで黙っていた明日菜が声を上げた。それを見たガニメデは呆れ顔になった。

「さすがバカレンジャー」

「うるさいわね！　ってか何でアンタがそれ知ってんのよ！！」

「あ？　カリストに聞いたんだよ」

そのガニメデの発言で明日菜はカリストを睨んだ。

「カリスト先生〜どういふことですか〜？」

笑顔で怒る明日菜にカリストは冷や汗と共に苦笑いするしかなかった。

「おいカリスト…」

話し合いの後、ガニメデは小さな声でカリストに呼び掛けた。

「ん？　何だ？」

「怪我、大丈夫なのか？」

「ああ、大丈夫さ」

カリストは平然と答えたが、ガニメデの表情は渋かった。

「本当だな？　長距離転移まで使ったみたいだが…確率に影響は出て

ないだろうな？」

「ああ、本当だ。それよりガニメデ」

カリストは話の流れを変えるように呼び掛けた。

「何だよ…？」

「お前こそボロボロじゃないか？大丈夫なのか？」

カリストは心配そうにガニメデを見た。

「ハッ、この程度でへばってたら此処にはいねえよ」

そんなガニメデの軽口に、カリストは微笑みをもらった。

刹那と木乃香は安全を確認したシネマ村の中を手を繋いで歩いていた。

「えへへ〜なんかこうしてせっちゃんと呼いてると、付き合ってるみたいやな〜」

おどける木乃香のそんな発言に刹那は過剰に反応した。

「な！？何をおっしゃるんですかお嬢様！？」

そんな刹那に木乃香はむくれた。

「むゝまたお嬢様って言うてるえゝちゃんと”このちゃん”って呼んでえなゝ」

刹那は更に狼狽えた。

「い、いえ!! そんな恐れ多いこと!!」

「ふふ。せつちゃん可愛いなゝ」

「いきなり何をおっしゃるんですか!!」

「だってそんなに顔赤くしてなゝわかりやすいでせつちゃん」

「そ、そうでしょうか？」

「そうやでゝふふ」

そう言って木乃香は少し沈黙し、再び口を開いた。

「あのなせつちゃん」

「はい、なんでしょうからお嬢様」

「さっきはありがとうな」

いきなり礼を言われた刹那は不思議そうな顔をした。

「え? あの…私は何かお嬢様にお礼をおっしゃって頂くようなことをしたでしょうか？」

「ほら、あの時や。橋の上で言ってくれたやろ？」お嬢様は私が守ります” って…それにあの怖い人からも守ってくれたんや。ありがとうなせっちゃん」

木乃香は満面の笑顔を見せた。刹那はそれを見とれるように眺めた。

「い、いえ！お嬢様に仕える私にとっては当然のことです！！勿体無いお言葉です！！」

そう言う刹那の顔は赤かったが、同時に笑顔でもあった。

「で、どうすんだよこいつら…」

カリストと別れたネギ達は総本山へと向かっていた。しかし、そこへやはりと言うべきか、3－Aの生徒が後を付けてきていた。その3人を目の前にしてガニメデは困惑していた。

「いいじゃん！こんな機会めったにないんだしさ！屋敷だよ屋敷！」

「ハルナ…あんたらね…」

眼鏡をかけた黒髪の少女、早乙女ハルナがガニメデに訴えた。そんな彼女たちを明日菜は半眼で睨んだ。

「そうそう。堅い言わない！ね？ガニメデさん♪」

そんなハルナに朝倉が同調した。

「このかの実家に行くですよ？ 私たちも連れて行ってほしいです！」

「ゆえ…」

最後に夕映が言った。

「ど、どうしましょうガニメデさん！」

ネギはガニメデに尋ねた

「どうするってな…」

「連れてくしかないぜ兄貴！このまま突き放しても勝手に追ってき
ちまうぜ」

そのカモの発言に朝倉が同意した。

「お、よくわかってるじゃんカモっち」

「ほらな。ここは連れて行っちゃった方がいいっすよ兄貴」

そしてカモは小声で追加して言った。

「それに…本山に入っちゃえば結界で安全ですぜ」

「う、うん…ガニメデさんと刹那さんもそれでいいですか？」

ネギに問われたガニメデは肩をすくませた。

「いんじゃないの？他に手はなさそうだしな」

「私も同意見です：お嬢様もよろしいですか？」

「ええよくみんないてくれた方が楽しいやんか」

それを聞いた朝倉達3人は歓声を上げた。

一行はそのまま総本山に向かった。

そこには小高い山々が広がっていた。長い階段は頂上の屋敷まで続いていた。

最上階にたどり着くとそこには日本独特な色合いである朱色に染まった巨大な屋敷が広がっていた。さらには同色の鳥居が連なり、見る者を圧倒させていた。

「「「「「お帰りなさいませお嬢様」」」」」

そして立ち並んだ仕えの者達が一斉に頭を下げた。そんな光景に一同は啞然とした。

「このかってお嬢様だとは聞いてたけど、まさかこれ程とはね…」

総本山の中に入ったネギ達は広間に通され、そこで正座して長を待っていた。

そうして待っていると、長がやって来た。

眼鏡をかけ、装束を来た優しそうな中年の男性だった。

「お父さん!!」

木乃香はその男性が来るなり抱きついた。

「これこれこのか。お客様の前だ」

男性は優しい笑顔を見せて木乃香に言った。

それを聞いた木乃香はしぶしぶといった様子で自分の場所に戻った。それを見たガニメデが小声で隣に座るカリストに囁いた。

「なあ嬢ちゃんてファザコ…」

「失礼なこと考えるなよガニメデ」

が、ガニメデが言い終わる前にカリストがガニメデを睨んで制した。

「はいはい…」

因みにガニメデだけ正座ではなく胡座で座っていた。

「失礼しました。私が関西呪術協会の長である近衛詠春です」

「あ、えっと、僕はネギ・スプリングフィールドと言います！関東魔法協会の理事長、近衛近右衛門から親書を受け取ってきました」

「拝見しましょう」

そう言って詠春はネギの渡した親書を開いて目を通した。そして苦

笑いのような笑みを見せてから言った。

「確かに承りました。東の長には関係改善に尽力するとお伝えください。任務御苦労！ネギ・スプリングフィールド君！」

「はい！ありがとうございます！！」

ネギは元気な笑顔を見せた。

第29話「襲撃」

その夜、一行は本山に泊まることとなり、宴会が開かれていた。各々が食事を満喫していた。

或る者は京の料理に舌鼓をうち、また或る者は友人達との談笑を楽しんでいた。

「ガニメデさんは余りお召し上がりになられていないようですが…お気に召さなかったでしょうか？」

詠春は申し訳なさそうにガニメデに話し掛けた。

「いや、ここの飯は上手いぜ。ただまあ俺はそこまで飲食する必要がねえんだ」

「それはどういう…」

「詮索はしないでもらいたいんだがな」

「これはとんだ失礼を。お許しください」

そう言って詠春は頭を下げた。

「いいって。頭上げてくれよ…別に気にしてねえからさ…それよりも、刹那のところ行かなくていいのか？」

頭を上げた詠春は宴会の席を見渡し、刹那に視線を送った。

「今から向かおうと思っていたところです」

「そうか。個人的なことに突っ込むのは趣味じゃねえが、あいつはあんたの娘さんのことで何か思い詰めてるみたいだぜ？」

「刹那君が…やはり」

「やはりってことは何か理由があんのか？」

「申し訳ありませんが、私からお話することは出来ません…彼女自身にお聞きください」

「そうか…わかった。じゃああんたは早く刹那のところに行ってやんな」

「そうですね…それと最後にガニメデさん」

「何だ？」

詠春は再び頭を下げた。

「このかを助けて頂き、本当にありがとうございました」

それを見たガニメデはどこか照れたような顔になった。

「いいってことよ。もとは学園長に頼まれたことだしな。それより、ほら早く行ってやんなって」

詠春は頭を上げ、ガニメデは刹那の方を顎で差した。

「はい。では失礼します。本当にありがとうございました」

そう言って一礼した詠春は刹那の方へ向かって行った。

「あの長、俺に礼言うために来たのか…見上げたぜ…機関のトップもこんだけ思慮深かったらよかったのによ…」

ガニメデはその後ろ姿を見て呟いた。

刹那が明日菜達と食事をしていると、そこに詠春が現れた。

場の雰囲気を感じたのか、明日菜達は黙ってその場を離れた。

詠春を見た刹那は急に改まり、正座をして頭を下げた。

それを見た詠春は苦笑いした。

「刹那君、頭を上げなさい」

言われた通りに刹那は頭を上げた。

「刹那君には苦勞をかけていますね…このかの護衛をよくやってくれています」

それを聞いた刹那は慌てたように言った。

「いえ！勿体無いお言葉です！お嬢様の護衛は私が好きでやらせて

頂いているのですから、長にお礼を言われるようなことはございません！」

そんな刹那を詠春は笑顔で見た。

「そんなことはないよ。刹那君がいなければこのかは安心して暮らせなかったのだからね。それと一言言わせてもらえば、刹那君、過去を背負うのは止めなさい」

それを聞いた刹那は呆然と詠春を見た。

「ガニメデさんから聞きました。刹那君は何か思い詰めている、と」それを聞いた刹那は言葉に詰まった。

「そ、それは…」

詠春はそんな刹那を見ながら続けた。

「このかはあなたのことを大切に思っていますよ。刹那君がこのかを思っている位にね。だからこのかは刹那君を責めたり恐れたりはしませんよ…このかは刹那君と一緒にいたいと思っています…だから、これからもこのかと一緒にいてあげてください、刹那君」

そう言って笑顔の詠春は刹那の頭を撫でた。

「は、はい！」

そう応える刹那の目には、光るものがあつた。

夜も深まり、ガニメデはあてがわれた個室で横になっていた。

「今日はさすがに疲れたぜ……」

眩きながらふと窓に目を向けた。

窓からは闇に染まつた山々が厳かな姿をさらけ出していた。

空は暗く、全てを呑み込んでいた。その中で星だけが輝いていた。

「何だ……静かすぎるな……嫌な予感がする……」

ガニメデはそんな景色に不安を覚えた。

「まあ大丈夫か」

が、直ぐに思い直し、瞳を閉じたのだった。

その瞳が見た夢は何だったであろうか……。

「おい！本気なのかよ！」

” ああ…そうだよ”

「嫌なんだろう！！上の奴らのことなんて無視しちまえよ！！」

” 違うよガニメデ。俺は上の奴らの為にやるんじゃない。仲間の為にやるんだ”

「だったら仲間の俺が願い下げだ！！」

” …もう決めたんだ”

「ふざけんなよ…お前、自分を失うことになるんだぞ。そんなの認められるかよ！！」

” ……”

「……」

” なあガニメデ”

「あ？」

” 生きるってどういうことだろうな…”

「何だよ…いきなり」

” 俺たちには、本当に意味なんてないのかな？”

「話をそらすな！」

” 違うよ…これは今だからこそ大切なことなんだ”

「……」

” 俺は思ったんだ…意味は求めるものじゃないって”

「だったら何でだよ…」

” 俺は自分の意味を感じたい…仲間の為になら、自分に意味があるように思えるんだ”

「…決心は変わらないんだな？」

” ……すまない”

「……」

” ……”

「そうかい…わかったよ」

” ありがとう。ガニメデ”

「…ああ」

” 《俺》によろしく言っといてくれ”

「貸し一つ、だな。ちゃんと返せよ？」

” ハハ。わかったよ”

「…もう行くのか？」

”ああ。ガニメデ、今までありがとう……そして、さよならだ”

「ああ……さよならイメリア」

[illegible]

”警告、ZPE變動確認、變動値22.74”

ガニメデは慌てて跳ね起きた。

「敵か！？」

”不明。未確認個体の座標転移と断定、転移座標を表示”

続けて、端末は空中に屋敷の立体図を投影した。

それを確認したガニメデは目的の場所に急いだ。

綾瀬夕映は夜の森を一心不乱に走っていた。
その顔は蒼白、瞳は震え、息も絶え絶えであった。

時は遡ること暫し―

彼女は朝倉達と共に部屋で談笑していた。

それは何事もなく平穏な日常であった。

が、突然現れた白髪の少年によってその平穏は破られた。

その少年により、彼女の目の前で友人たちが次々に石と化した。

そんな中、朝倉の機転により彼女だけが逃げ出すことが出来たのだ
った。

それから彼女は山の中を逃げていた。

逃げて逃げて逃げて逃げて逃げた。

しかし、いくら逃げようが恐怖からは逃れられなかった。

友の安否、自らの命…。

日頃理性的な彼女の思考も今は完全に停止していた。

何も考えず、がむしゃらに足を動かした。

それがいけなかったのか、足を引っかけたその場に転倒した。

「な、何が…何のですか…皆さんが…そんな…」

倒れた夕映は震える声で、自らを落ち着かせるように言った。

「そ、そうです…と、とにかく連絡をとらなくてはっ！」

夕映は震える手で携帯を取り出した。

そして上手く動かない自らの手に苛立ちながら楓、そしてカリスト
に電話をかけたのだった。

ガニメデが木乃香の部屋に到着した時には既に木乃香は白髪の少年、フェイトに拐われていた。

「くそっ!!」

ガニメデはこれまで見せたことが無いほどの苦々しい顔をした。

「ジュピター! 敵の座標を追跡しろ! 早く!!」

”了解。ZPE反応観測座標を表示”

ガニメデは表示された立体地図を見て、無言で駆けて行った。

ネギと明日菜、そして刹那はフェイトに一方的に攻撃され、木乃香を奪われてしまっていた。

「僕と刹那さんで追いかけます！アスナさんはここで待っていてください！」

ネギは緊迫した表情で言った。

「いやよ！私も行くわ！」

しかし明日菜はその指示を拒否した。

「ダメです明日菜さん！ネギ先生の言う通りにしてください！」

刹那はそんな明日菜を押さえるように言った。

「いやよ！このかが拐われたのに、ただ待ってるなんてできないっ
！！」

が、明日菜は尚も拒否したのだった。

「でもアスナさん！」

ネギは更に言葉を続けようとした。

「時間がありません：ならば明日菜さんも来てください」

が、それを遮るように刹那が言った。

「刹那さん！？」

ネギはそんな刹那に驚愕の声をあげた。

「ネギ先生：話し合っている時間はありません」

「…わかりました。アスナさんも一緒に来てください！」

そうして3人は敵を追った。

ガニメデは夜の森の中、フェイトを追いかけていた。しかし木々が障害物となり思うように疾走することはできなかった。

「捉えたっ！」

そんな状況に苦い表情のガニメデだったが、ついにフェイトの影を見つけ、右腕を叩きつけた。

それにより周囲の木々や地面は吹き飛び、茶色の土ばかりになった。

「！？手応えがない！」

しかしガニメデは怪訝な表情になった。

それに応えるようにガニメデの端末が反応した。

” Z P E 反応消失、座標転移を確認”

「しまった！陽動だったか！」

ガニメデはここに来て自らの失策に気づいた。

木乃香を拐った千草は追ってきたネギ達に遭遇していた。

「なんや、またあんたらかいな」

が、千草は余裕の表情だった。その肩には口を札で塞がれた木乃香が担がれていた。

「貴様…」

それを見た刹那は怒りを露にして千草を睨んだ。

「このかさんを返してください！！」

ネギも口調を荒くした。

しかし千草は余裕な表情を崩すことはなかった。

「ほんまにしつこいなあ…そうや、丁度ええ。あんたらにお嬢様の

力、見せたるわ！」

千草は口の端をつり上げ、凶悪な表情を見せた。

「オンキリキリヴァジャラウーンハッタ！」

その詞を発し終わった瞬間、地面が不気味な光を発した。

「な、これはっ！！」

千草の呪文の意味に気づいた刹那だったが、既に遅かった。光の中から、鬼や鳥族や狐などの異形が大量に現れた。その数は四桁に届いているのではないかという程だった。

「ヤロー、お嬢ちゃんの魔力を使って手当たり次第に異形を召喚しやがったな！！」

それを見たカモがネギの肩で叫んだ。

そんなネギ達を千草は見下して言い放った。

「ハハハハ！どうや？手も足も出んやろ！まあ殺しはせんようには言っといたるわ。ほな、さいなら！」

そう言って、千草は木乃香を担いで逃走した。

追跡しようとするネギ達だったが、異形達がそれを許すはずはなかった。

「なんや？久々に喚ばれて出てきてみれば坊っちゃんに嬢ちゃんかいな…」

「嬢ちゃん達、悪いなあ。喚ばれたからには仕事せんといかんからなあ、まあ死なん程度にしといたるわ」

個体差はあれど、どれも人などより一回りも二回りも大きく、外見は正に人外のそれであった。

それがネギ達を取り囲む姿は、恐怖以外の何も呼び起こさなかった。そんな異形達を見た明日菜は震えた声で言った。

「せ…刹那さん…こ、こんなの…さすがに私…」

それを横目で見た刹那は励ますように言った。

「明日菜さん！落ち着いて！大丈夫です…私が残りますから…ネギ先生とお嬢様を追ってください！」

その発言にネギと明日菜は驚愕した。

「と、とにかく！ここは時間を稼ぎます！逆巻け春の嵐！我らに風の加護を！『風花旋風 風障壁』！」

その詠唱によりネギ達を包む竜巻の壁が現れ、異形達から一時的に隔離した。

「これで数分はもちます！今のうちに作戦を考えましょう！」

ネギは2人に言った。

それを聞いた刹那は短く宣言した。

「私が残ります」

「刹那さんっ！」

それには明日菜が反応した。

「任せてください。ああいうのを退治するのが我々神鳴流の仕事ですから」

対して刹那は冷静に言った。

「で、でもそんなっ…じゃ、じゃあ私も一緒に残るー!!」

「ええっ!？」

明日菜の発言にネギと刹那は驚愕した。

「こんなところに刹那さん一人残して行けないよっ！」

明日菜は必死に訴えた。

「でも…」

ネギは洩る仕草をしたが、刹那は無言で頷いた。

「わかりました…明日菜さんも残ってください。ネギ先生」

「え？あ、はい！」

「ネギ先生はお嬢様を追ってください」

2人の決心を見たネギは、ゆっくりと頷いた。

「そうですか：わかりました」

一同の意見がまとまったところでカモが口を開いた。

「よっしゃ！そうと決まれば兄貴！早速刹那の姉さんとぶちゅっ
と」

「ちょっと！こんな時に何言ってるのよエロガモ！！」

明日菜は場違いな発言をするカモに叫んだ。

「何言ってるすか姐さん！仮契約すよ仮契約！刹那の姉さんと兄貴
が仮契約すればアーティストも出るし呼び寄せることもできて良い
こと尽くしじゃないすか！」

「た、確かに…」

そう言われた刹那とネギは見つめ合って顔を赤くした。

「ぼ、僕はいいですけど…」

「わ、私も構いません…」

それを聞いたカモは躍起になった。

「よっしゃ！んじやいきやしょう！」

そう言って素早く魔方陣を書き上げた。

「せ、刹那さん…」

「ネギ先生…し、失礼しますっ！」

そして2人はその中で仮契約をした。

「パクティオー!!!」

それにより2人の間に契約が生まれ、アーティストが現れた。

「それではネギ先生、お嬢様をお願いします」

「はい、任せてください。そろそろ風障壁の効果が切れます…行きますよっ！」

そして次の瞬間、障壁が無くなり、異形たちとの壁は無くなった。

ネギは杖に乗り、高速で離脱した。その際『雷の暴風』を放ち、幾らかの異形を還した。

「ほお、坊っちゃんやりおるなあ」

「だいぶ吞まれたの」

呑気な口調の異形達に囲まれ、刹那と明日菜は互いに肩を預けて構えた。

「いきますっ!!!」

「いくわよっ!!!」

エヴァとイオは学園長室で囲碁を打っていた。

「のうゝお主達…ここ一応ワシの部屋なんじゃが…」

学園長はそんな2人を困惑した表情で見ていた。

「うるさいぞジジイ。私は囲碁なんて持ってないんだから仕方ないだろ」

が、エヴァはそんなことお構い無しと言った具合だった。

「いやの…そういう問題ではないのじゃが…」

「む…イオ、お前中々えげつないな」

「容赦する必要はないのだから当然だ」

そしてついに2人は学園長を完全に無視し始めた。

「なんじゃろ？涙が止まらんのじゃが」

無視された学園長は涙を滝のように流していた。

その時、学園長室の電話が鳴り、学園長は受話器を手にとった。

「もしもし。おおカリスト先生。ワシじゃが、何かの？」

そして相手の内容を聞いた瞬間、学園長の顔は一変して真面目なものとなった。

「何と！！西の本山が襲撃とな！！なんじゃ？すぐに使える戦力じゃと？」

そう言った学園長はエヴァ、そしてイオに視線を向けた。

「あ？何だジジイ？こっち見んな」

第30話「闇夜」

「け、結構良いコンビかもね…私たち…」

「ふふっ」

「修学旅行終わったら今度剣道教えてよね♪刹那さん」

「えっ？いいですけど…」

刹那と明日菜は互いの背を預けながら取り囲む異形達と対峙していた。

明日菜のアーティファクトが敵との相性が良いためか、2人は予想外に善戦していた。

じわじわと数を減らされた異形達は先程と変わって2人を警戒していた。

「なんや。ただの嬢ちゃん思ってたらとんだ間違いやないかい」

それを見た刹那が言った。

「明日菜さん！この調子でいきますよ！」

「そうはいきまへんよ～センパイ♪」

しかし刹那の発言に反応したのは呼ばざる者だった。

「月詠っ！！またお前か！」

「いややわセンパイ！ウチのこと覚えといってくれたんどすか」

そう言って現れた月詠は刹那に斬りかかった。

その口調とは裏腹に、斬撃は相手の急所を容赦無く狙っていた。刹那はそれを防ぎながら苦々しく叫んだ。

「くっ！こんな時に！！」

月詠の登場により、刹那と明日菜は劣勢に立たされた。

刹那は月詠の相手しなければなくなり、明日菜は実質的に1人で異形達の相手をしていた。

が、それも長くは続かなかった。

「よつと！やつと捕まえたで嬢ちゃん！」

「えっ！？嘘！？」

明日菜は鳥族の異形に背後をとられ、腕を掴まれて片手で持ち上げられた。

空中で宙吊りとなり、身動きできなくなった明日菜は怯えた表情になった。

「ほんまよくもまあやってくれたのう。仲間の分、きっちり返さしてもらおうで嬢ちゃ…なっ！？」

そして異形が力を入れようとした瞬間、その異形は横から飛来した橙色の閃光に射抜かれ、煙のように還された。

「え…え？何…？」

明日菜は地面にへたりこんで混乱していた。

「ずいぶん苦戦してるみたいじゃないか刹那」

「おゝすごいアル！なんかいっぱいいるアル！」

そこへライフルを構えた真名と中華剣を握った古菲が現れた。

「龍宮と古！？」

「え…？何で！？」

突然の登場に驚愕する刹那と明日菜を見て、真名は不敵に笑った。

「クラスメイトに依頼されてね。まあ今回ののはつけにしとくよ」

そう言って真名はライフルを連射した。その術を施した特殊弾は、寸分狂わず異形達に命中した。

「古、お前は弱そうな人間大のやつだけ相手にしろ」

「あー、バカにしてるアルねー！中国三千年舐めないで欲しいアルよ！」

そう言って古菲も中国剣を振り回しながら異形を次々と還していった。

それを見た明日菜は感心した様子で尋ねた。

「す、すごい…さっきのもあんた達が助けてくれたの？」

「いや、私ではない。もっと遠方からの攻撃だった。ざっと4 km くらいか？多分カリスト先生だろう」

その真名の返答に明日菜は目を見開いた。

「よ、4 km!？」

「正直私も驚いてる。本当に何者なのかね…」

そう言いつつも、引き金を引く指は一時も休むことはなかった。

そしてふと視線を遠くに向けると、遠方で何かが光ったのが見えた。次の瞬間、大量の橙色の閃光が飛来した。

それはさながら闇夜に輝くオレンジの流星だった。

矢の如く大量に飛来した閃光は、その全てが異形に命中し、異形達は次々と数を減らした。

屋敷からだいぶ離されたガニメデは木々の間を縫うように疾走していた。

その時、上空に無数の橙色の線が走った。それを見たガニメデは口元を緩めた。

「カリストのやつ張り切ってんな。俺もうかうかしてらんねえ」

そう言ってさらに速度を上げた時だった。突然、空の一部が昼のよう
に明るくなった。見れば巨大な光の柱が天に向かって聳えていた。

「おいおい…なんだよあれは…」

”警告、高密度ZPEを観測。対象、尚も増大”

呟くガニメデに答えるように端末が警告した。

「やばそうだな…んじゃあそこに行くか！」

そう言ってガニメデは光の柱の方へ進路を変えた。

刹那と明日菜を残し、ネギは木乃香を追っていた。

「よおネギ!!」

が、それを妨げる障害が現れた。

「君はっ!!」

「今度は負けへんで!! もういつぺん勝負や!!」

小太郎は野性的な笑みを浮かべ、ネギの進路に立ち塞がった。

「コタロー君、今はそれどころじゃ!!」

ネギは焦ったように小太郎の背後へ視線を向けた。

「つれへんなあネギ…」

対して小太郎は睨むようにネギを見た。

「こんくらいせえへんと、お前は本気出さへんやろ…さあ本気でこいや!! ネギ!!」

挑発されたネギは、冷静さを欠いてしまった。

「わかったよ…いくよ!! コタロー君!!」

ネギは小太郎へと向かって行った。

「そうや! そうこなくちゃおもろないわ!!」

それを受けて立つように小太郎もネギへと駆け出した。

「まだまだでござるな…ネギ坊主」

「全くだ坊主。大局を見失うな」

が、そんな2人を制するように声が掛かった。

「な、長瀬さんとガニメデさん!？」

「誰や姉ちゃんら!! 男の勝負に口出しすんなや!!」

2人の視線の先には長瀬楓、そしてガニメデがいた。

「おい坊主。齒くいしばれ」

「え？」

—バンツ—

「うつ…」

次の瞬間、ガニメデはネギの頬を殴った。

「お前のやるべきことは何だ? あいつと戦うことか? 違うだろう! が
!!」

「……」

ネギはガニメデを真っ直ぐ見つめた。

「はい…」

ガニメデは無表情でそんなネギの瞳を見つめ返した。

「じゃあ何をすべきなんだ？」

「このかさんを…助けることです」

その返答を聞いたガニメデは陽気な笑顔を見せた。

「そうだ。いい目じゃねえか坊主！ならさっさと行くぞ！」

「はいっ！」

そんなやり取りを見ていた小太郎は、苛立ちを隠そうともせずにか
んだ。

「そんなんさせる訳ないやろが！！」

小太郎はガニメデへ襲い掛かった。

「ガキだな…」

が、ガニメデは僅かに姿勢を変えて回避した。

—ドンツ—

「ぐっ！！」

そしてカウンターの蹴りを放ち、小太郎を吹き飛ばした。

「おい長瀬とかいうの。あのガキの相手頼むぜ」

ガニメデは吹き飛ばした小太郎を確認すらずに、楓に言った。
それを聞いた楓は苦笑いした。

「やれやれ：ガニメデ殿に全部もっていかれてしまったでござるな。よいでござるよ。あの狼坊主は拙者が相手致す：ガニメデ殿はネギ坊主と行くでござる」

それを聞いたガニメデは不敵な笑みに顔を歪めた。

「助かるぜ。んじゃま、行くぜ坊主！」

「はい！」

千草に追い付いたネギとガニメデの視界には湖に浮かぶ祭壇が映っていた。

木乃香は台に寝かされ、千草が長い呪文を唱えていた。近くにはフェイトの姿も見えた。

加えて巨大な光の柱からは、さらに巨大なりヨウメンスクナが上半身を乗り出そうとしているのが見えた。

それを確認したガニメデはフェイトを足止めし、ネギはその間にリヨウメンスクナに向けて今できうる中で最大威力の魔法を放った。が、それはリヨウメンスクナの前ではあまりにも非力だった。

さしたダメージも与えられず、魔力が尽きたネギはその場に膝をついてしまった。木乃香を担いだままりヨウメンスクナの肩に乗った

千草はそんなネギを嘲笑っていた。

「ハハハハ！これで、この力さえあれば東も西も怖いもんはないわ！今からみくんな壊したるわ！！」

「…そんな…もう…ダメだ…」

ネギは目の前のリョウメンスクナを絶望の表情で見つめた。

「おい！坊主！！」

そこへフェイトと戦いながら、ガニメデが声を投げ掛けた。

「諦めんな！！諦めんじゃねえよ！！」

「…僕との戦闘中なのに、随分余裕そうだね」

—ズンツ—

「ぐあっ！！」

しかし、気を反らしたガニメデはフェイトの拳を受けてしまった。

「ぐ…おら坊主！！気合い見せろ！！」

それでもガニメデは立ち上がり、ネギに叫んだ。

その姿を見たネギは噛みしめるように呟いた。

「そうだ…諦めちゃダメだ…まだ手は残ってる！！」

揺るぎない瞳となったネギは、仮契約のカードを2枚取り出して自らの従者を呼んだ。

それに応えて刹那と明日菜が召喚された。

「すみません：僕だけじゃ無理です：力を貸してください！」

「もちろんよ！」

「無論です！」

3人はお互いを見て頷いた。

その様子を見たガニメデは口の端をつり上げた。

「いい仲間じゃねえか…」

そしてその場から消えた。

—パシン—

「ふん…」

「何！？見切られた！？」

フェイトの背後に座標転移し、ZPEをのせた拳を放ったガニメデだったが、フェイトはそれを片手で止めた。

「何度も同じ手は効かないよ」

「チツ：」

フェイトは空中に浮遊し、無数の石槍を放った。
ガニメデはそれを回避しながら舌打ちをした。

浮遊術を持たないガニメデは、上空から降ってくる槍の雨を回避するしかなかった。

苦々しく顔を歪めるガニメデだったが、突然降り注ぐ石槍の1本を掴み取った。

「おら返品だああ！！」

それを逆にフェイトに向かって投げ飛ばした。

「甘いよ」

が、フェイトはそれを障壁で防いだ。

「お前がな」

しかしその一瞬の間にガニメデはその場からフェイトに向かって跳躍した。

「っ！！」

「もらったあああ！」

そして障壁ごとフェイトを殴り飛ばした。

フェイトは湖に勢い良く落下し、空中のガニメデは地面に着地した。

「さあ早く嬢ちゃんを助けに行きな」

ガニメデは湖に視線を向けたまま言った。

「皆さん…お嬢様は私が助け出します…」

すると刹那が重々しく言った。それに明日菜が反応した。

「でもあんな高い所、どうやって行くの？ネギじゃないと…でもネギはもう…」

「だ、大丈夫…です。このかさんは…僕が助けます！」

「ダメよ！アンタもうボロボロじゃない！」

そして明日菜とネギが言い争い始めた。それを横目で見た刹那が決心したように口を開いた。

「いいんですネギ先生…私はあそこまで行くことができますから…」

その発言に明日菜は混乱した表情になった。

「え？どうやって…」

—バサアツ—

明日菜は言い切る前に息を飲んだ。明日菜ばかりでなくガニメデとネギも驚愕の表情になった。

3人の視線の先、そこには白い羽を生やした刹那が悲しそうな表情で佇んでいた。

「これが私の正体：彼らと同じ化け物です」

刹那は天使のように大きな羽を広げていた。

「この姿を見られたからにはもう皆さんと一緒にはいられません：でも、お嬢様をお救いできるなら：明日菜さん：今までありがとうございます：ございました…」

刹那はそう言って飛び去ろうとした。

「ふうん」

が、明日菜はそんな刹那の羽を掴み、興味深そうに見た。そんな明日菜の様子に刹那は啞然とした表情になった。

「あ、明日菜さん？怖くないんですか！化け物なんですよ！」

それを聞いた明日菜は無言でゆっくりと片手を上げた。全員がそれを怪訝な表情で見つめた。

―バチーン！―

そして明日菜はその手を刹那の背中に振り落とした。

「きゃう！？」

いきなり背中を叩かれた刹那は間の抜けた声を上げた。

「なーに言ってんのよ刹那さん。こんなの背中に生えてんなんてカ

ツコイイじゃん」

明日菜はそう言って刹那に笑いかけた。それを見た刹那はさらに啞然とした。ネギとガニメデはそんな2人のやり取りを無言で見ていた。

「勝手にいなくなるとか言わない！このかも刹那さんと一緒にいたはずよ。私だっていなくなるとか言われたら寂しいんだからね！」

「明日菜さん…」

「アスナさん…そうです！僕だって寂しいですよ！」

ネギも明日菜に同調した。

「ありがとうございます…」

刹那はそんな2人に礼を言った。

「ほら、早くこのかを助けてきなさいよ。待っててあげるから」

「はい！ありがとうございます！明日菜さん！」

そう言って刹那は、リョウメンスクナの肩に乗った千草と木乃香へと飛んで行った。

3人はその後ろ姿を黙って見つめた。

「化け物…か」

ガニメデはそう呟き、自嘲の笑みを見せた。そして視線を再び湖に

戻した。

そこには無傷のフェイトが佇んでいた。

水面に立ったフェイトは無表情でガニメデを見つめていた。

「さて：もうひと勝負、いきますかね！」

叫んだガニメデが飛び出そうとした時、突然地から響くような声が一面に響いた。

” 全く：助けられてばかりだな、ぼーや。貴様はこじんまりとまとまりすぎだ。たまには後先考えずに突っ込んだらどうだ？ ”

その声を聞いたネギと明日菜は驚愕の表情になった。

「エヴァンジェリンさん！？」

「エヴァちゃん！？」

” まだ限界じゃないだろ。ここからはお前1人で1分半持ちこたえろ。そうすれば私が全て終わらせてやる：おい、ガニメデとかいうの！貴様はあるデカブツの相手でもしている。そのガキとはぼーや1人で戦わせろ ”

その声を聞いたガニメデはフェイトを睨んだままネギに尋ねた。

「おい坊主、知り合いか？」

「あ、はい！エヴァンジェリンさんだと思います」

「エヴァンジェリン?…ああ、あいつか…まあいい。お前、1人で戦えるか?俺は別にさっきの命令を無視して戦ってやってもいいぜ?」

「いえ。僕が戦います。戦わせてください!」

ネギは力強く言った。それを聞いたガニメデは口元を緩めた。

「そうか。いい意気込みだ。いいぜ、お前1人でやりな…ただし、死ぬなよ!」

そう叫び、ガニメデはリョウメンスクナへ突撃して行った。

「ふん…ずいぶん余裕だね」

ネギはハッとしたように顔を向けた。正面にはフェイトが迫って来ていた。

「何だ…こいつは…」

カリストはズームされたスクリーンを見て呟いた。
そこには巨大なリョウメンスクナが上半身だけ乗り出している姿が

映っていた。

”警告、ZPE変動観測。変動値331.16”

それを肯定するようにカリストの端末は異常な数値を叩き出していた。

先ほど刹那たちが相手していた異形は既にカリスト、古菲、真名の活躍によって全滅し、月詠も撤退していた。

その後、突然光の柱が現れ、刹那と明日菜がその場から消えた。慌てて光の柱に銃口を向けたカリストの目に、リョウメンスクナが映ったのだった。

「まずい！！」

そう叫んだカリストはトリガーを引き、橙色のレーザーを放った。閃光は夜空を駆け、一瞬でリョウメンスクナとの距離を縮めた。そして胴体部に直撃し爆発した。それにより巨体が一瞬だけ怯んだ。

「効いていない…だと」

が、見た限りではリョウメンスクナには全くダメージを与えられていなかった。それを見たカリストは一度目を閉じ、ゆっくりと開いた。

そして今使っていた白い拳銃をしまった。

その表情は何かを決心したものになっていた。

「ディヴァイン、第二解放」

静かに宣言した瞬間、カリストの手には長大なスナイパーライフルがあった。それは闇夜のように黒く、銃身はカリストの3倍はある

うかというほどだった。

カリストは地面に伏せ、無言でそのライフルを構えた。スコープの先には、リョウメンスクナが映っていた。

”安全ロック解除、目標との距離、4.2km。相対位置固定、風速、自転によるコリオリ力補正、右に2cm。ZPE収束率76.52%：83.56%：92.14%：99.92%：100%、完了”

端末はカリストに全工程の終了を告げた。

「さあ…受けてみる」

それを聞いたカリストは、トリガーを引いた。

第31話「収束」

「さあ…受けてみる」

カリストはトリガーを引いた。

その瞬間、銃口へ向かって莫大なZPEが収束した。

周囲の空間は歪に湾曲し、はち切れんばかりにZPE集まった。

行き場を失ったエネルギーは高い音を放ちながら解放される瞬間を待ちわびていた。

そして、その全てが一瞬で炸裂した。

「なっ！？ガニメデ！？」

カリストは目を疑った。

スコープの先にはガニメデの姿が映った。

それに気づいたカリストは咄嗟に銃口をずらした。

が、既に破壊のエネルギーは放たれた。

爆音と共にカリストの周囲は昼ほどの明るさとなり、太い橙色の閃光が夜空を走った。

通る場所全てを破壊し尽くしながら進み、時空をも歪ませるその光は絶望的な速さをもってリョウメンスクナに迫った。

間を空けず、リョウメンスクナの悲鳴ともとれる叫び声が響いた。

カリストの咄嗟の行動により、僅かにずれた閃光はリョウメンスクナの腕一本を吹き飛ばしただけにとどまった。

それでもエネルギーが底をつかず、閃光はリョウメンスクナの後方を通り抜けていった。

「ガニメデがいたのか…危ないところだった…」

ガニメデの無事を確認したカリストは胸を撫で下ろした。

ガニメデはリヨウメンスクナの繰り出す巨大な拳を避けながら自らもリヨウメンスクナに接近しては拳を繰り出していた。

「ダメだなこりゃ：相当硬い野郎だ」

が、ガニメデの拳では全くはがたたない様子だった。

「でもまあお嬢ちゃんは助けられたみたいだし、俺もずらかるかな」

リヨウメンスクナを見上げたガニメデの視界には、木乃香を抱えて空を飛ぶ刹那の姿が映っていた。

その時、ガニメデの端末が警告した。

”警告、高密度圧縮ZPE高速接近”

「何っ!!」

警告を聞いたガニメデは慌ててリヨウメンスクナから離れた。間髪を空けず、オレンジの閃光がガニメデの前方を通過した。

閃光はリョウメンスクナの腕を吹き飛ばし、遠方へと突き抜けて行った。

「あつぶねー!!」

それを見たガニメデは冷や汗を流した。
そして、その元凶へと非難の視線を向けた。

「カリストのバカ野郎!! 俺を殺す気か!!」

「な、何よ今の!？」

「これは…」

ネギと明日菜は驚愕した。フェイトとの戦闘中、突如飛来した閃光によってリョウメンスクナの腕が吹き飛ばされたからだだった。

「皆さん無事ですか!？」

見れば刹那と木乃香、ついでにガニメデも無事のようにだったので、ネギは安心した。

「どこ見てるんだい」

「兄貴！よそ見してる場合じゃないっすよ！！」

が、その隙をフェイトが見逃すはずもなく、カモが警告したがネギは石化の魔法を受けてしまった。

「うっ…！」

「兄貴！！」

咄嗟にレジストしたものの半身が徐々に石化していった。

「このっ！」

それを見た明日菜がハリセンで反撃したが、フェイトは軽く受け流した。

—スッ—

さらにフェイトは追撃しようとネギに拳を繰り出した。

が、その腕は、地面から生えてきた手によって止められた。

「！？」

次の瞬間、エヴァが地面から現れた。

「坊やが世話になったな」

—バンツ—

「っ！！」

現れるなり、エヴァはフェイトを殴りつけた。

フェイトは派手に吹き飛び、水飛沫と共に湖の水面を数回跳ね、最後に建物の壁に突っ込んだ。

「まあそんなものか」

エヴァはフェイトを気にする風もなく呟いた。

その時、ネギは力が抜けたように倒れそうになった。

「ネギ！」

が、倒れる寸前を明日菜が抱き止めた。

「アスナさん…大丈夫ですよ…」

口調と相反し、ネギは息も荒く、見るからに苦しそうであった。エヴァはそんな2人を横目で見た後、別の人物に声を掛けた。

「おい、イオ、茶々丸！早く来い！遅いぞ！」

次の瞬間、エヴァの横に呼ばれた2人が現れた。

「申し訳ありませんマスター」

現れた茶々丸はエヴァに謝罪した。

「これがこの世界線における長距離転移か…」

イオは現れるなり、無表情で呟いた。

「い、イオ…さんと…茶々丸さん!？」

「アンタ達も来たの!？」

2人の姿を確認したネギと明日菜は驚愕の表情となった。

が、エヴァはそんなネギ達を無視し、リョウメンスクナに視線を向けた。

「ぼーや、それにイオ、良く見ている…私の力をな!」

そう言ってエヴァは不敵に笑った。

「茶々丸!あのデカブツの動きを止めろ!」

「了解しましたマスター」

茶々丸はバーニアで飛び上がり、空中にホバーしてライフルを構えた。

「範囲確認、結界弾発射」

ライフルから放たれた弾は四方からリョウメンスクナを囲うように結界を張った。

結界に封じ込められたリョウメンスクナはそこから脱出しようと必

死に抵抗していた。

エヴァは暴れるリョウメンスクナを見て、口の端をつり上げた。

「さて、これから私の力をよく見ておけよ！いくぞ！」

そしてエヴァは詠唱を始めた。

「契約に従い、我に従え、氷の女王……」

突如、周辺の空気が変わった。

「来たれ、とこしえのやみ……」

その場にいる者は凍てつくような寒さを覚えた。

重々しい空気はこれから起こる惨劇を予期しているかのようにであった。

そして詠唱は完成した。

「えいえんのひょうが！」

瞬刻、結界もろともリョウメンスクナを囲う大地が凍結した。

圧倒的な威力をもって、氷がその範囲にある全てを飲み込み、自らの憑代と改変していった。

リョウメンスクナもその例外にはならず、彫刻のように氷結した。

「150フィート四方をほぼ絶対零度にする高位魔法だ！いかにデカブツといえども私の前では造作もない！ハハハハハ！」

エヴァは上機嫌に叫んだ。それを見た明日菜が言った。

「なんかエヴァちゃんテンション高くない…？」

「す、すごいです!!」

対照的にネギは目を輝かせてエヴァを見た。

それに気づいたエヴァはさらに上機嫌になった。

「そうかそうか! 私の力に感動したか!」

「はい!」

「素直でいいぞ。気分がいいからぼーやに1つ教えてやろう。魔法使いというのは究極的には砲台だ。詰まるところ火力が全てだ。圧倒的な火力をもって全てを破壊する、それが魔法使いだ。私を見てよくわかっただろう?」

「はい!」

得意顔のエヴァは次にイオに視線を向けた。

「どうだったイオ? 私の力に惚れたか?」

イオは無表情で答えた。

「これ程のZPE行使を詠唱のみで為すのは驚愕に値する」

「ハハハハハハハハ! そうだろう! そうだろう!」

イオの返答に満足したのか、エヴァは高笑いした。

「そうだイオ、とどめはお前がやれ。できるだろ？ 私にお前の力を見せてみる」

エヴァに言われたイオは僅かな沈黙の後に言った。

「了解した」

そして静かに口を開いた。

「ジュピター、制限を第四段階まで解除」

その命令に端末が応えた。

”警告。第四段階以降、存在確率に影響が発生。指令確認、宜しいですか？”

「肯定する」

”再確認、本当に宜しいですか？”

「肯定だ」

”了解、制限解除”

そこでイオはおもむろに沈黙し、ゆっくりと口を開いた。

「ディヴァイン第四解放」

そう宣言した瞬間だった。

突如、イオの回りを取り囲むように莫大な”何か”が流れ出した。エヴァたちにはイオの魔力が爆発的に増大したように感じられた。その魔力は最早人智を越えた域に達していた。

その圧倒的な存在を前に、誰もが驚愕のあまり沈黙した。

イオはその”何か”を受け流しながら無言で凍ったリョウメンスクナを見つめ、片手を天に向かって伸ばした。

それにつられて空を見上げた者は絶句した。

「何だ…これは…？」

そこには夜空に浮かぶ大量の白い剣が切っ先をリョウメンスクナに向けて静止していた。

その何れもが淡い青色の光を発していた。

その数は軽く四桁には達しているように見えた。

—スッ—

イオは掲げていた腕を静かに下ろした。

「な!？」

次の瞬間、視界が青一色に染まった。

上空で静止していた全ての剣が豪雨の如くリョウメンスクナに降り注いだ。

大量の剣がガラスを割るようにリョウメンスクナを粉碎した。

巨大な氷の彫刻を剣の雨が砕くその光景は圧倒的だった。

全員がその光景に言葉を失っていた。

「おい！イオ！どうした！？」

が、エヴァの叫び声で意識が戻された。

見れば、エヴァが膝をついているイオに駆け寄っていた。気づけば先ほどの剣と”何か”は消えていた。

「大丈夫だ…存在が少し安定していないだけだ…」

イオは僅かに顔を歪めた。エヴァはそんなイオを心配そうに見た。

「イオ！」

そこに慌てた様子のガニメデが駆け寄って来た。

「大丈夫か！？」

「問題ない…久々の世界抵抗に慣れなかったただけだ」

「どこまで使った？」

「第四段階だ」

「イオ…頼むから無茶すんな…」

ガニメデは真剣な顔でイオに言った。

それを見たエヴァが眉をひそめて問いかけた。

「おい、何の話をしている？さっきのは何だ？お前大丈夫なのか？」

必死な形相のエヴァにイオは無表情で答えた。

「大丈夫だ…」

そう言ってイオは立ち上がった。

「本当か？本当に大丈夫なのか？」

尚も問いかけるエヴァを見たイオは僅かに表情を緩めた。

「ああ。大丈夫だ。心配かけてすまない」

それを聞いたエヴァは顔を赤くした。

「ふ、ふんっ！大丈夫ならいいんだ」

そこに木乃香を抱えた刹那が着地してきた。

「あ、刹那さん！」

「木乃香さんも！無事でよかったです！」

それを見た明日菜とネギは安心したように言った。

「ネギ先生方のお陰です。本当にありがとうございました」

刹那はそんな2人に礼を言った。

「それで…今のは一体…」

刹那は真剣な表情でネギに問い掛けた。

「ややわゝみんな見んといてゝなゝ」

が、それは木乃香の叫び声でかき消された。

千草によって裸に近い格好になっている木乃香は恥ずかしそうに刹那の腕の中で身体を小さくした。

「あ！こ、これはとんだ御無礼を！」

刹那は慌てて上着を木乃香に渡した。

「ほらよ…」

ガニメデも木乃香を見ないようにしながら脱いだ上着を渡した。

「おおきにゝ」

そんなやり取りを横目で見ていたエヴァは鼻を鳴らした。

「呑気な奴らだ」

それにイオが反応した。

「その割には楽しそうな顔をしているな」

その発言にエヴァは怒鳴った。

「な、何言ってる！そんな訳あるか！」

「冗談だ」

「くっ！…まあいい。それよりさっきのは何だったんだ？お前のア
ーティファ…」

—ドン—

エヴァがそう言い切る前にイオは突然エヴァを強く押した。
エヴァはよろけてその場から後退りした。

「いきなり何をする！」

エヴァは憤慨してイオに視線を向けた。

—グサツ—

「イ…オ…？」

そしてエヴァは信じられないものを見るように硬直した。
時がゆっくり流れた。

目の前に、青い液体が飛び散った。

エヴァはその光景を信じられなかった。否、信じたくなかった。

そこには脇腹を鋭利な岩で貫かれたイオがいた。

イオはゆっくりとその場に倒れた。

エヴァには全てがスローモーションに見えた。

「真祖を狙ったつもりだったけど、余計な邪魔が入ったみたいだね」

そしてその背後にはフェイトがいた。

いち早く状況を理解したのはガニメデだった。

「貴様あああああ!!」

一瞬でフェイトの目の前に転移し、今までで最速の拳を放った。
それを受けたフェイトの半身は水になった。

「よくもイオを!!」

(イオ…?)

それを気にせず、ガニメデはがむしゃらにフェイトを連打した。
そんな中、エヴァはイオに駆け寄った。

「おいイオ!イオ!」

エヴァは膝をついて仰向けのイオを揺すった。
辺りには青い液体が広がっていた。

ネギ達はそれを呆然と見ていた。

「え?何これ…?」

「血が、青い…?」

倒れたイオは途切れ途切れに言葉を紡いだ。

「ジュ…ピター…損傷を…報告」

”腹部破損、程度深刻。存在維持に障害発生、確率が発散。疑似観測による収束不可能”

それに応えた端末の報告を聞いたイオは静かに口を開いた。

「…そう…か」

イオの着ている白い服が腹部から徐々に青く染まっていった。それを一瞬綺麗だ、などと思ったエヴァは自分を叱責した。

「イオ! しっかりしろ!」

懸命に呼び掛けたが、イオの焦点は徐々にずれていった。

「くそっ! どうすれば…私は回復魔法は得意じゃないんだっ!」

「じゃ、じゃあ僕がやります!」

今まで傍観していたネギが声を上げた。

「無駄…だ。問題なのは…損傷…ではない。量子存在は…存在が消滅…する」

が、イオはネギを止めた。

「え？何なのこれ？」

次の瞬間、全員が驚愕した。

イオの腕が光の粒子になり、溶けるように徐々に消えていった。

”警告、存在確率の発散を確認。干渉性の維持不可能、ジュピターによる観測限界に到達”

イオの端末が非情な報告をした。

それを聞いたエヴァは叫んだ。

「何なんだっ！どうすればいいんだっ！」

イオは僅かに歪めた顔をエヴァに向けた。

「何をして…も…無駄…だ。存在が…確定しない」

それを聞いたエヴァはイオを強く揺すった。

「黙っていないくならないと約束しただろっ！！」

エヴァは消えていくイオを引き留めるように叫んだ。

「…すま…な…い」

イオの片腕はすでに光の粒子となって消えて行き、ついに足まで粒子になり始めた。

「認めない！私は認めないぞ！勝手に逝くな！私をおいて逝くな！」

エヴァは更に強く叫んだが、イオの状態は変わらなかった。

「…俺は…もともと…何処にも…存在し…ない…逝く場所など…ない」

その言葉を発してイオは意識を手放した。

イオの無機質な瞳はゆっくりと閉じられた。

エヴァはそんなイオをただ見つめることしかできなかった。エヴァだけでなく、その場にいる全員が言葉を失ってイオを見つめるだけだった。

「…っ！そうだ！存在が確定しないのが問題なんだな！！」

重い沈黙の中、エヴァは突然叫んだ。

全員がエヴァを見たが、エヴァはそれを無視してイオを囲うように地面に魔方陣を描いた。

「一体何を…？」

刹那は怪訝な表情でエヴァを見た。

エヴァが短く呪文を呟くとその魔方陣から紫色の淡い光が発せられた。

そしてエヴァはその中に入り、イオの頭を挟むように両手で抑えた。

「イオ…」

そしてイオの唇に自らの唇をゆっくりと重ねた。
その瞬間、エヴァとイオを中心に目映い光が生じた。

「仮契約…？」

それを見たネギはぽつりと呟いた。
やがて光は収束した。

第32話「改変」

光が収束した時、そこにはエヴァと無事なイオがいた。

「イオ！」

エヴァは倒れたまま意識を取り戻さないイオに呼び掛けた。

「…っ」

イオはゆっくりと瞼を開いた。それを見たエヴァは安堵の表情になった。

「よかった…」

それを見たイオは無表情で問いかけた。

「何が…存在確率が発散したはず…」

「私とお前は仮契約したんだ」

「仮契約…」

「私とお前の間にラインが通ったはずだ」

それを聞いたイオは端末に命令した。

「ジュピター、状況を報告しろ」

問われた端末は合成音声で答えた。

” 外部ZPEの接続を確認、観測値増大により存在確率が収束”

それを聞いたイオは納得したように言った。

「なるほど…俺を対象にZPEのラインを通すことで俺の存在を確定させたのか…」

「契約というのは相手の存在を認める行為だ。だからもしかと思っ
てやってみたが…成功したみたいだな」

エヴァはイオの顔をまじまじと見た。

「感謝する…」

イオに礼を言われたエヴァは顔を赤くしてイオから顔を背けた。

「ふ、ふんっ！居候に死なれたら夢見が悪くなるからだ！」

その後、分身のフェイトを倒したガニメデと遠方から援護していた
カリスト、古菲、真名、楓が合流した。

ネギは石化により倒れたが、木乃香と仮契約することで回復した。

木乃香の魔力はそれだけに止まらず、屋敷で石化された人達も元に戻ってしまった。

皆が屋敷に戻った後、イオは屋敷で腹部の治療を受け、安静にして寝ていた。

その寝顔をエヴァと茶々丸が見ていた。

「全く：私は真祖の吸血鬼なのだからあの程度受けたところで死なないというのに：こいつは」

エヴァは呟くように言った。その顔は微笑んでいた。

ガニメデは詠春からひとしきり礼を言われた後、イオの無事を確認し、屋敷で日本酒を勢い良く飲んでいった。

「へっ！あの野郎心配させやがって！無事でよかったぜ…」

そう言って更に杯を進めた。

「あの：ガニメデさん」

そんなガニメデに刹那が遠慮がちに声をかけた。

「ん？何だ？」

ガニメデは顔だけ刹那に向けた。

「今日は本当にありがとうございました…それと…お別れを言いに来ました」

それを聞いたガニメデは体ごと刹那に向き直った。

「なぜだ？」

「あの姿を見られたからにはもう皆さんとはいられません…それが掟です」

「お嬢ちゃんは泣くだろっな」

それを聞いた刹那は俯いた。

「ガニメデさん…お嬢様をよろしくお願いいたします。私はもうお側にいることはできませんから…」

その時、襖が開いた。

2人が視線を向けると、そこには木乃香がいた。

「せっちゃん…何処行くん？折角また仲良くなったのにどっか行くなんてややわ！」

木乃香はそう言って刹那に抱きついた。

「お嬢様…」

刹那は木乃香を複雑な表情で見つめた。

「お前はこの嬢ちゃんの手を振りほどいて行くのか？」

その様子を見ていたガニメデは刹那に問いかけた。

「……」

刹那は沈黙した。

「せっちゃんがまた居なくなるなんてややわ!!」

木乃香は涙ながらに更に力を強くして叫んだ。

「後どうするかは自分で決めな」

そう言ってガニメデはその場から去った。

その後も刹那は木乃香を優しい瞳で見つめていた。

ガニメデは縁側に座って夜空の月を見ながら日本酒を飲んでいた。

「随分様になってるな」

そこにカリストが現れ、隣に腰掛けた。

「この国では月を見ながら酒を飲むのが風情なんだそうだ…なんとなく理解できるぜ」

ガニメデは月を見つめたまま言った。

「お前は確か…先祖がこの国にいたんだよね？」

カリストも月を眺めた。

「ああ…俺にもこの国の血が流れてるってことだな…まあ正確にはこの世界線のじゃないがな」

そう言ってガニメデは僅かに笑った。

「そうだな…あんまりいるものだから何処が本当の居場所なのかわからなくなってくるな…」

カリストも笑った。

「偽物の俺たちに本当の居場所なんてねえよ…」

ガニメデはそう言って杯に酌んだ日本酒を喉に通した。

「そうだな…」

カリストは静かに肯定した。

そして沈黙が訪れ、2人は黙って月を眺めた。

夜空に一際輝く月は優しい光を降らせていた。

暗闇の中には星がちりばめられ、爽やかな風が通り過ぎていた。2

人はそんな空間に無言で存在していた。

瞬息の沈黙の後、カリストが口を開いた。

「そういえばイオは無事なんだよな？」

ガニメデは直ぐに答えた。

「心配なら自分の目で見てくりやいいだろ」

「生憎、私にはあの部屋の中に入る勇氣は無いのでね」

カリストは苦笑いした。それを聞いたガニメデは笑い声を上げた。

「ハハハ！ 確かなな！」

それにつられてカリストも笑い声を上げた。2人の笑い声だけが夜の森に響いていた。

エゼは仮面を付けた背の高い黒服の男と対峙していた。

「いやゝ久しぶりですね。えっくん」

仮面の男は親し気に言った。

「その呼び名で呼ぶんじゃないよ…」

対してエゼは男を睨み付けた。

「いや失礼しました。ではテーベ0014とお呼びしましょうか？」

それを聞いた瞬間、エゼから殺気が放たれた。

「冗談ですよ、エゼ君」

が、男はそれを気にした様子もなかった。

「さて本題ですが、イオ君は見つかりましたか？」

男は口調を変えた。

「まだだ…今探しているところだ…」

エゼは男を睨み付けたまま答えた。

「そうですか。急いでくださいね」

「わかっている…」

「ではまた」

「待てルシオラ」

「そうだ。それよりも良いものを見せてやる」

そう言ってエヴァはポケットから何かのカードを出した。

「何だ？それは？」

それを見たイオはエヴァに尋ねた。

「前にも言ったが、仮契約した従者にはアーティファクトという武器が与えられる。それがこれだ」

見ればそのカードには無表情で佇むイオが描かれており、様々な文字が書かれていた。

「今はカードになっているが、『アダアット』と唱えると武器になるんだ」

「そうか…」

「で、このカードには従者の情報が書かれているんだ…ほら」

そう言ってエヴァはカードをイオに見せた。

そこにはこう書かれていた。

名前『イメリア・ユニ・エルノテウリス』
称号『虚空に繋ぐ改変者』

色調『白・蒼』

徳性『―』

方位『―』

星辰性『木星』

数字『1』

アーティファクト『存在の証』

「突っ込み所がありすぎるぞこのカード…まずイオというのは偽名だったのか？徳性と方位に至っては何も書かれていないぞ…」

エヴァは怪訝な表情でカードを見た。

「それは…俺の名前ではない…」

イオは僅かに眉をひそめて言った。

「何？違う名前なのか？そんなわけないはずだが…」

「違う…俺は…イメリアではない…違う…」

イオは無表情で呟いた。それを見たエヴァは口調を変えて尋ねた。

「なあ、お前は何者なんだ？血は青く、怪我はすぐに治る…おまけ

にパクティオーカードは普通ではない：教えてくれないか？」

イオは視線をエヴァから反らした。

「……」

イオは無言で拒否した。

「はあ、まあいいさ。いつかは聞かせてもらうからな。ほらこれやるよ」

エヴァはそんなイオにため息混じりにそう言い、カードを渡した。
イオはそれを受け取り、観察するように見た。

「試しにアーティファクトを出してみろ。お前のことだ：どんなのがでるか楽しみだ」

エヴァは不敵に笑って言った。イオはそれに頷いた。

「アデアット」

イオがそう言った瞬間、手の中に黒い刀が現れた。

「ほう刀か：予想外に普通だな：しかし随分いびつな刀だな：斬れるのかこれ？」

そう言ってエヴァはイオから刀を取って眺めた。割と長いその剣は、柄の部分が十字型で刃の部分が折れ線のようにジグザグになっていた。その形は辛うじて刀と言えるものだった。

「なにか特殊な効果とかないのか？」

ひとしきり観察したエヴァはそう言ってイオに刀を返した。
イオは上半身だけ起き上がり、試しに刀を軽く振ってみた。その瞬間、イオの表情が僅かに変化した。

「ジュピター、解析しろ」

それに端末が答えた。

”空間最小単位の組み換えを観測、パターンランダム”

それを聞いたエヴァはイオに尋ねた。

「何かすごいのか？」

イオはエヴァに顔を向けた。

「空間の最小単位を組み換えた…」

「意味がわからん」

エヴァは混乱した表情になった。それを見たイオは説明を始めた。

「空間には最小単位が存在する。つまり空間はパズルのピースのようバラバラなものが繋ぎ合わさっている」

「ちょっとまって！それは本当か？」

「本当だ。空間というものは連続してはいない」

「信じられんな…」

「事実だ。更に言えば時間も同様だ」

「何だと!?!」

「それは今関係ないので無視する。とにかく空間には最小単位が存在する。この刀は空間の最小単位のピースをランダムに組み換えることができるようだ」

「つまりどういうことだ?」

「つまり、この刀は空間を切断できる」

「何だと!! そんな無茶苦茶なことあり得るのか? それが事実なら斬れないものが無いということだろ?」

「そうだ。空間を切断する以上、空間に存在する物質も纏めて切断できる。Z P E、魔力もおそらく切断可能だろう」

「お前はつくづく予想外なやつだな…」

エヴァは半ば呆れ口調で言った。

「で、虚空に繋がってのは何だ?」

エヴァは更に尋ねた。

「Z P Fのことだと予想する」

「ああ前にお前が言ってたあれか：確か空間そのものことだとか言ってたと思ったのだが：空間が虚空なのか？」

するとイオはおもむろに説明を始めた。

「仏語に、虚空界というものがある」

「虚空界？」

「無形・無相で、一切万物を包括する真如をたとえばいう」

「それはつまり」

「そうだ。ZPFのことを示している。情報場、ZPF、虚空界：全て同じもののことだ」

「なるほどな…」

「仏教の虚空界、量子力学のZPF。結局はどちらも同じことを言っている。宗教と科学：現象を考察するという面では、どちらも同じだ。ただ、再現性が異なるだけだ」

「ほお」

エヴァは静かにイオの無機質な瞳を見つめた。

ガニメデとカリストはネギたちと共にナギの旧邸に来ていた。

ネギが何かの手がかりを見つけた後、全員で写真を撮るとのことで一階に集まっていた。

その時、カリストがガニメデに小声で囁いた。

「記録媒体に写るのはまずい。適当にはぐらかしてこの場はやりすごすぞ」

それを聞いたガニメデは面倒くさそうな顔になった。

「別にいいじゃねえかよ1枚くらい。既に防犯カメラには何回も写っちまってるだろうよ」

その発言にカリストは顔をしかめた。

「そういう問題ではない。機関規約に反する」

「今は忌線探す任務じゃねえだろ。規約もくそもあったもんじゃねえよ」

「しかし…」

「はあ、ほんと石頭だな」

「っ！？それは関係ない…」

「いや、ありありだろ」

その時、カメラを構えた朝倉が2人に声をかけた。

「そこのお2人さん、写真撮るから早く入ってよ」

「はいよっ！ほら行くぞカリスト」

そう言ってガニメデは強引にカリストを引っ張って行った。

その後、ネギ達はクラスと合流し帰りの新幹線に乗って無事に麻帆良に帰って来ていた。

そうして長い修学旅行は終わったのだった。

————————————————————

「やっと帰ってきたか」

エゼはフェイトを見て言った。

「お前が旅行楽しんでる間に頼まれたのは出来上がったぜ、ほらよ」

そう言ってエゼはフェイトに資料の束を渡した。

「へえ、これだけの量をこの期間に調べるなんてすごいね」

資料にざっと目を通したフェイトは無表情で言った。

「まあな、それより俺の方はどうなってる？」

問われたフェイトは僅かに表情を変えたが、直ぐに元の無表情に戻った。

「まだイオという人物の手掛かりは掴めてない。すまないね」

「別に構わないが、急いでくれ」

「了解したよ。では失礼するよ」

そう言ってフェイトは去って言った。

エゼはその後ろ姿を無言で見つめた。

第33話「日常」

修学旅行が終わり摩帆良に戻った夜、怪我が完治したイオはエヴァのログハウスに泊まっていた。

その翌朝、イオはエヴァと朝食を食べていた。

2人ともお馴染みの場所に座り、テーブルには切り揃えられたパンやバターやジャム、そして紅茶が置かれていた。

「おいイオ、それ取ってくれ」

エヴァはパンを片手に、空いた手でジャムを指差した。
イオは無言でそれを渡した。

「ん、サンキュー」

エヴァはそれを受け取り、パンにつけて頬張った。

「茶々丸、紅茶のおかわりくれ」

「かしこまりましたマスター」

エヴァの後ろに控えていた茶々丸はポットに入った紅茶をエヴァのカップに注いだ。

「茶々丸、ハーブ入りのパンが食べたい」

「了解ですマスター」

「茶々丸、今度はミルクティーが飲みたい」

「かしこまりました」

「茶々丸、バターナイフが足りない」

「了解しましたマスター」

「茶々丸、これ片付けてくれ」

エヴァは次々と茶々丸に指示をし、茶々丸は律儀に全てこなしていた。

その一部始終を見ていたイオが無表情で呟いた。

「まるで姫だな」

それを聞いたエヴァは意外そうな顔を見せた。

「姫？これくらい別に普通だろ」

「ケケケ。ゴ主人ハ元々姫ミタイナモンダツタカラナ」

戸棚に置かれたチャチャゼロが口を挟んだ。

「ふん。あの頃のこととはもう忘れたさ…それよりお前が姫に例えたのは意外だな」

それを聞いたイオはエヴァに問いかけた。

「なぜだ？」

「お前が姫というのがどんな者なのか知っている様には見えないかな」

「そうか」

「何処で知ったんだ？まさか童話を読んだとか言わないだろうな？」

そう言ってエヴァはからかうようにニヤリと笑った。

「そうではない。知り合いにいるからだ」

イオは平然と答えたが、その返答にエヴァは驚愕した。茶々丸も僅かに驚いたように表情を変えた。

「何！？知り合いにいるだと！？」

「ケケケ。コイツ中々イイ身分カモナ」

そのチャチャゼロの発言をイオは否定した。

「そうではない。偶然知り合っただけだ」

「オ姫様ト偶然知り合ウ奴ナンテインノカヨ？」

「正確には小国の王族だった者だ。一族は零落したそうだ」

「なるほどな。そういう訳有りだったのか」

エヴァは納得した表情になった。

—コンコン—

その時、ノックの音がした。それを聞いた茶々丸は玄関に向かった。

「全く：こんな朝っぱらから誰だ」

エヴァは露骨に面倒くさそうな表情になった。

玄関に行った茶々丸が戻ってくると、その後ろにはネギと明日菜の姿があった。

「弟子になるって、あいつだったの？」

明日菜はイオを見るなり指差して言った。

「あ、いえ：そうじゃないです：その：エヴァンジェリンさんです」

ネギは遠慮がちにエヴァを見た。それを聞いた明日菜は驚愕の声を上げた。

「え、えー！！何考えてんのよネギ！！エヴァちゃんはまだあんたの血を狙ってるのよ！イオだっけ？あいつで我慢しときなさいよ！あいつの魔法も凄かったじゃない！」

「いえ：確かに凄かったんですが、イオさんの魔法は僕とは違う術式みたいで良くわからなかったんです：それでなくても僕はエヴァンジェリンさんに弟子入りするつもりです！」

そんなやり取りを見ていたエヴァは耐えきれなくなったように叫んだ。

「あー！！喧しい！！なんだ貴様らは！！人の朝食を邪魔するにとどまらず訳わからんことをゴチャゴチャ騒ぎおって！」

それを見たネギは慌てて謝罪した。

「あわわわ！す、すみません！今日はエヴァンジェリンさんをお願いがあつて来たんです！」

それを聞いたエヴァは怪訝な表情になった。

「私にお願いだと？」

「はい。僕をエヴァンジェリンさんの弟子にしてくださいっ！」

ネギは真剣な表情で言った。が、エヴァはそれを鼻で笑った。

「正気か？お前と私は敵同士なんだぞ？お前の父、サウザンドマスターには恨みもある：戦い方ならタカミチ辺りにでも習えばいいだろう。だいたい私は弟子なんて面倒なものは取らない：ほら帰れ、シッシ」

エヴァは手を追い払うように振りながら言った。

「それを承知で来ました！京都での戦いを見て決めたんです！弟子になるならエヴァンジェリンさん以外の師はいないと！」

それを聞いたエヴァはニヤリと笑った。

「ほお、つまり私の力にそこまで感動した、と」

「はいっ！」

「ふん…そこまで言うならよかろう」

「じゃあ！」

そんな歓喜の声をあげようとしたネギを抑えるようにエヴァが続けた。

「ただし！」

そう言ってエヴァは不敵な笑いを見せた。イオと明日菜、茶々丸は黙ってその様子を見ていた。

「私は悪い魔法使いだ。悪い魔法使いにものを頼むにはそれなりの代償が必要だ」

言い終わるとエヴァはスツと片足をネギに向かって伸ばした。ネギはそれを不思議そうに見つめた。

「まずは足をなめろ。我が下僕として永遠の忠誠を誓え。話はそれからだ」

エヴァは凶悪な笑みで言い放った。

「つて、アホかー！！」

そこに明日菜のハリセンの突っ込みが入ろうとした。

—パシン—

「ってあれ!？」

が、それをイオが座ったまま片手で止めた。

「ちょっとあんた! 人のツツコミの邪魔しないでよ!」

明日菜はイオを睨んだ。

「助かったぞイオ」

そんな2人を見ながらエヴァは不敵な表情のままイオに言った。

「エヴァちゃん! 突然子供にアダルトな要求して何考えてんのよー! それにネギがこんなに一生懸命頼んでるのにちょっと酷いんじゃない?」

明日菜はエヴァに叫んだが、エヴァはどこ吹く風だった。

「馬鹿か。頭下げたくらいで物事通るなら世の中苦労せんわ」

「でもっ!」

「何だ貴様? やけに必死だな。惚れでもしたのか? こんな10歳のガキに」

「ち、違うわよー!!」

—パシン—

明日菜はそう言ってハリセンを出したが、再びイオに止められた。

「ハハハハ！どうした？顔が赤いぞ？」

エヴァは意地悪な笑みで明日菜を見た。明日菜は顔を赤くした。

「エヴァちゃんだって何時もそいつと一緒にじゃない？」

明日菜は苦し紛れにイオを指差して言った。

「な！？べ、別に一緒にいてもいいだろうっ！」

が、エヴァは明日菜の予想以上に反応した。それを見て今度は明日菜が意地悪な笑みを見せた。

「あれ〜？エヴァちゃん顔赤いわよ〜」

「赤くなどないわっ！」

「ひょっとして〜」

「だ、黙れっ！」

そう叫んでエヴァは明日菜に飛び掛かろうとした。

「うっ…」

が、それをイオが引き止めた。

エヴァは襟首をイオに捕まれ、明日菜の目の前で静止させられた。

「本題を見失っている」

イオは平淡な口調で明日菜とエヴァに言った。

「あ、あの…」

そこにネギが気まずそうに口を挟んだ。

「それで…弟子入りのことなんですが…」

エヴァは遠慮がちに言うネギを一瞬見てから言った。

「ふん…今度の土曜、私の家に来い。その時弟子にするかどうかテストしてやる。これでいいだろ？」

それを聞いたネギは歓喜の声を上げた。

「はいっ！ありがとうございます！では失礼しますっ！ほら帰りましょう明日菜さん！」

「え？あ、うん…」

そう言ってネギと明日菜は帰って行った。

それを視線だけで見送ったエヴァはため息混じりに言った。

「やれやれ…やっと喧しいのが行ったか…おいイオ！いつまで掴んでいるつもりだ？離せ！」

エヴァは強引に抜け出そうとした。

—ポイツ—

「な!？」

—ペチン—

「うぐっ!!」

しかし、イオが突然手を離したことで勢い余って床に鼻をぶつけてしまった。

「危ないだろっ!!」

エヴァは鼻を押さえながらイオを睨んだ。

「言われた通り離しただけだ」

対するイオは平然としていた。

「お前…実は性格悪くないか…？」

エヴァはそんなイオを睨み続けた。

翌朝、ガニメデは河川敷で弟子4人組と拳を交えていた。

「おらっ！」

ガニメデは中村に素早く拳を繰り出した。

―バツ―

そしてその猛威が中村を襲おうという瞬間、中村は身体を反らした。

「甘いですよ兄貴！」

それによってガニメデの拳は空を切った。

中村は体勢を崩したガニメデに足払いを掛けた。

「お前も、なっ！」

が、ガニメデはそれを軽く跳躍して回避し、中村をサマーソルトで蹴り飛ばした。

「がっ…」

そこへ豪徳寺が殴り掛かった。

「そこだっ！」

「チッ！」

―ドンッ―

回避が間に合わないと思切ったガニメデは、腕を交差させてそれを受け止めた。しかし予想以上に威力が強く、勢いを殺しきれずに軽く後ろへ飛ばされた。

「あつぶねー」

が、ガニメデは空中で体勢を立て直し、なんとか着地した。その着地の瞬間、ガニメデに隙ができた。

山下はそれを見逃さず、ガニメデに肉薄した。

独特の動きでガニメデに腕を絡ませ、体勢を崩しにかかった。

「遅ええ！」

しかし、ガニメデはそれを払いのけ、山下の腕を掴み返した。

「っ!!」

「おらよっ!!」

そしていつかの如くコマのように回転し、その勢いにのせて山下を投げ飛ばした。

「うっ！」

「ぐっ…」

山下はガニメデの背後を取ろうとしていた大豪院にぶつかり、2人は倒れた。

「おらああああ！」

ガニメデは山下を投げた後に一瞬静止した。
豪徳寺は、その隙に拳を放った。

「だから遅いんだよ！」

が、その場には既にガニメデは居らず、豪徳寺の背後から声がした。

―ドツ―

背後から殴りかかったガニメデだったが、豪徳寺は突然振り返ってそれを受け止めた。

「少しは反応できるようになった、なっ！」

が、ガニメデは更にその場から豪徳寺の側面に転移した。

「しまっ…!!！」

「終わりだ」

そして豪徳寺は吹き飛ばされて地面に倒れた。
それを見たガニメデは全員に向かって満足気に言った。

「今日はここまでだ。まあ多少は強くなってきたな」
それを聞いた山下が起き上がった。

「兄貴が留守にしている間、自主練してたんすよ…てかやっぱ兄貴強すぎっすよ…」

「今回はちと本気出しちゃったからな。まあお前らは俺に本気を出させる位には強くなったってことだ」

それを聞いて残りの全員も起き上がり、豪徳寺が興奮気味に言った。

「じゃあ、もう少しで全力の兄貴を見れるんすね！」

が、それを聞いたガニメデは呆れ顔になった。

「アホか。本気と全力はちげえよ。俺は確かに本気は出したが、全力は出してねえよ」

「え？そうなんすか？」

「ああ、今のでざっと全力の1割ってとこだ」

それを聞いた4人は啞然とした。

「あ、兄貴…今ので1割ってどういう…」

「兄貴の全力ってどんだけなんですか…？」

山下と中村は冷や汗を流しながら尋ねた。

「俺の全力？そうだな…まあ俺が全力出したら色々なモンが跡形も無く消えるぜ」

ガニメデは平然と言い放った。

4人は無言で冷や汗を流すしかなかった。

その夜、広域指導員の仕事を終えたイオは何時もの様にエヴァの家に来ていた。が、今日はエヴァの機嫌が悪いようだった。

「何かあったのか？」

イオはそんな様子のエヴァに尋ねた。

「ふん！別になんでもない！」

エヴァは余計に機嫌を悪くしたようだった。

「ヤキモチダトヨ。ケケケ」

「黙れチャチャゼロ！」

チャチャゼロの発言にエヴァは怒鳴った。それを見たイオは茶々丸に尋ねた。

「何かあったのか？」

「実は…弟子入りを頼んだネギ先生が他の生徒にも弟子入りを頼ん

でいたことにマスターがヤキモチを…」

茶々丸がそう言い切る前にエヴァが叫んだ。

「だー！！だから違うと言っているだろう！！」

それを見たイオが無表情で呟いた。

「ヤキモチ…」

「だから違うっ！！お前まで真に受けるなっ！」

「顔が赤いぞ」

そう言われたエヴァは慌てて顔を押さえた。

「冗談だ」

そんなエヴァを見てイオは無表情で言った。

「っ！！お前っまたか！！私をからかったなっ！このっ！このっ！」

エヴァは本当に顔を赤くしてイオに殴り掛かった。

—サツ—

が、イオは軽くかわした。

「避けるなっ！このっ！」

そんな様子を見ていた茶々丸は微笑ましいものを見るように言った。

「ああ…マスターがあんなに嬉しそうに…」

「こら茶々丸!! どさくさ紛れに何言ってる!! お前なんて巻いてやる! このっ!」

エヴァはどこからかゼンマイを取りだし、茶々丸の背中に押し込んで強引に回した。

「ああ…そんなに巻かれては…」

「ケケケ…」

チャチャゼロはそんな様子に笑い声をあげた。

第34話「試練」

ネギの弟子入りテスト当日、世界樹広場は重々しい雰囲気に包まれていた。

エヴァと茶々丸、そしてイオは無言で世界樹広場に佇み、ネギを待っていた。

そして時間となり、ネギは約束通り現れた。

「ネギ・スプリングフィールド、エヴァンジェリンさんの弟子入り試験を受けにきました！」

それを聞いたエヴァは尊大に腕を組んで言った。

「来たか」

「あの！テストというのは？」

エヴァはニヤリと笑った。

「坊やには茶々丸かイオのどちらかとカンフーもどきで戦ってもらう。互いに魔法を使うのは禁止だ。一撃でも入れられれば弟子にしてやろう。因みに相手は坊やが選んでいいぞ」

そう言われたネギは茶々丸とイオを交互に見た。

「じゃあ…イオさん、お願いします」

「ほおイオを選ぶか…まあ妥当か。今の坊やでは茶々丸には敵わんだらうからな…いや待て、それよりお前の後ろにいる奴らは何だ？」

エヴァがネギの背後に視線を向けると、そこには刹那、明日菜、木乃香、古菲、まき絵など3－Aのクラスメイトがぞろぞろとついてきていた。

「え、えつと…これは…」

「まあいい。せいぜいギャラリたちの前で恥を晒すことがないようにな。イオ、手加減するなよ」

エヴァに言われたイオは僅かに眉をひそめた。

「その要請は認められない…どの程度でやればいい？」

「だから手加減するなど言いたいところだが…まあ死なない程度にもんでやれ」

そう言うときエヴァと茶々丸はその場から離れてギャラリーに加わった。

ネギとイオの2人はギャラリーに囲まれて対峙した。ネギは重心を落とすように構え、イオは一切構えずに佇んでいた。それを見た明日菜が軽い口調で刹那に言った。

「茶々丸さんだったら危なかったけど、これなら余裕ね」

対して刹那は声を低くした。

「いえ…茶々丸さんの方がよかったかもしれません…」

明日菜は意外そうな表情になった。

「え？　どういうこと？」

「私は一度、イオさんが戦っているところを見たことがあります…」

「私も見たことあるわよ。ただあの時は何が起きたのかさっぱりわからなかったけど…」

「私です…全く動きを捉えられませんでした…」

「え！？　師匠でも？」

「はい…イオさんの戦闘力は完全に未知数です…」

それを聞いた明日菜は青ざめた。

そんな中、エヴァはネギに向かって言った。

「確認するが、そのカンフーもどきだけでイオに一撃入れられれば坊やを弟子にしてやる。出来なければ諦める」

それを聞いたネギは口の端をつり上げた。

「本当にその条件でいいんですね？」

「？…ああ。では始めるがいい！！」

エヴァの開始の宣言と同時に、ネギは詠唱を始めた。

「『契約執行90秒間ネギ・スプリングフィールド』！」

対してイオも端末に指令を出した。

「ジュピター、戦闘能力値をデータ0003に接続」

そしてネギはイオに向かって一直線に突っ込んだ。

「え!？」

が、既にそこにイオは居なかった。

—グキッ—

「ぐっ!」

次の瞬間にはネギの側面に現れたイオがネギを足で蹴り上げた。
咄嗟に防御したネギだったが、空中に飛ばされた。

—ズコッ—

「う…」

しかしイオの攻撃は止まず、続いて空中に転移したイオはネギを地面に蹴り落とした。

ネギは勢いよく地面に衝突して倒れた。

イオは着地して倒れたネギを無表情で見下ろした。
その一瞬のうちの出来事に、見ていたギャラリーからどよめきが起こった。

「え? 今何が起きたの?」

「わ、わかんないよ…」

「ネギ君大丈夫っ!？」

そして一斉にネギに駆け寄った。
対してエヴァは鼻を鳴らした。

「ふん…残念だったな坊や。だがそれが貴様の實力だ。顔洗って出直してこい」

そう言ってエヴァは背を向けようとした。

「…へへへ…まだですよ…」

エヴァが振り返るとそこには起き上がったネギがいた。

「何を言ってる? 勝負はもうついたぞ。ガキはとっとと帰れ」

エヴァはそんなネギに呆れた視線を送った。が、ネギはそれを受け
ても不敵に笑っていた。

「へへ…それはおかしいですよ…確か条件には時間制限なんてなかったと思いますが」

「そんな戯れ言が通るわけないだろう! ほら帰るぞ茶々丸、イオ」

エヴァは茶々丸とイオに呼び掛けた。

「イオ?」

が、イオは無表情でネギを見たまま動く気配を見せなかった。

「なぜそこまでする？」

イオは無表情でネギに問いかけた。

「諦めたくないからです！ガニメデさんに言われました。諦めるなと！あの時わかったんです。どんな時でも諦めちゃだめだって！！」

ネギはイオに言い放った。その表情は真剣だった。

2人の間にそれ以上の言葉は必要なかった。

「そうか…ならば相手をしよう」

「はいっ！お願いします！…皆さん…下がってください！…」

ネギにそう言われたギャラリーはネギを心配そうに見ながらしぶしぶ元の位置に戻った。中にはイオに非難の視線を送る者もいた。

そんな2人のやり取りを見ていたエヴァは苛立ちを隠さずに怒鳴った。

「何を勝手なことを言っている！！もう終わりだ！！」

が、2人は止まらなかった。

次の瞬間にはネギはイオの懐に入っていた。が、イオは身体を反らしてそれを回避し、ネギに蹴りを放った。

—ドンツ—

「くっ!!」

防御したネギだったが、続いて繰り出された拳を受けてよろめいた。イオはその隙を見逃さず、拳を連打した。

—バシン—

「うぐっ！」

—ドン—

「ぐあっ！」

—ボスッ—

「がっ！」

ネギはその全てを受けて倒れた。

「まだです…」

が、直ぐ起き上がった。

その目には諦めはなかった。

いつまでそうしていたか、ネギは痛々しい程に傷だらけになっていた。ネギはそれでも諦めずにイオに向かって行った。

「もう見てらんない! 私とめてくる!!」

「明日菜さん!？」

ネギの惨状を見ているのが耐え切れなくなった明日菜は突然立ち上がり、ネギとイオの戦いを止めようと2人に近づいた。

「ダメー！アスナ！とめちゃダメー！！」

が、それをまき絵が止めた。

明日菜の進路を塞ぐように両手を広げていた。まき絵の表情は涙を含みながらも真剣だった。それを見た明日菜は足を止めた。

「でも…あいつ…あんなにボロボロになって…そんなに頑張ることじゃないよっ！！」

明日菜も必死な形相だった。それでもまき絵は引かなかった。

「わかってる…わかってるよ…でも…ここで止めた方がネギ君にヒドイと思う！ネギ君、諦めたくないって言ってたもん！！」

ードンー

次の瞬間、イオの蹴りによってネギが宙を舞った。

「うぐっ…」

ネギは地面に倒れたが再び起き上がった。

その顔に諦めはなく、笑みを浮かべていた。

「まだ…まだでふ…」

明日菜はその姿から目を離せなかった。

「でもっ…あいつのあれはワガママじゃん…ただの意地っ張りだよ！止めてあげなきゃ…」

「違うよ…ネギ君は大人だよ！」

「まきちゃん…」

ネギは魔力供給が既に切れ全身は傷だらけで、動きは鈍かった。それでもイオに向かって行った。ネギは拳を繰り出した。

—スッ—

が、イオはそれを最小限の動きで回避し、ネギの脇にカウンターを当てた。ネギはそれを受けて再び倒れた。

「ネギ君には目的があるんだよ…だからこんなに頑張ってるんだよ…ここまで頑張ってる男の子、アスナは他に知ってる？ネギ君だけだよ！ネギ君だけがこんなに必死で頑張ってるんだよ！だからネギ君は大人なんだよ！だから…だから…今はとめちゃだめだよ！！」

イオはまき絵に視線を送った。

その瞳に感情を読み取ることは難しかったが、エヴァにははっきりと見えた。

深い深い奥底に、イオの感情が確かにあった。

「今でふっ！！」

「っ！？」

―ペチン―

イオがまき絵に意識を反らしたその一瞬、ネギは一気に起き上がって手を伸ばした。

その拳とも言えない拳は確かにイオに触れた。

「あ…あたりまひた…」

そう言ってネギは今度こそ力尽きて倒れた。

しかしその顔は満足そうな笑顔だった。それを見たギャラリーたちから歓声が上がった。そして一目散にネギに駆け寄っていた。

その後、エヴァの弟子になることが認められたネギはエヴァの”別荘”に通うこととなった。

そうして数日エヴァの拷問紛いな訓練を受けていた頃、3-Aの生徒である明日菜、朝倉、古菲、のどか、夕映、木乃香、刹那が”別荘”を発見して勝手に侵入していた。それを見つけたエヴァは呆れながらも放置していた。

因みにイオもネギの訓練を見学するために”別荘”に来ていたが、今は朝倉達の質問責めにされていた。

イオはテラスに座り、向かいには侵入した7人がイオを興味深そうに見ていた。

「えーっと、ガニメデさんと同時期に広域指導員になったイオさん……だよな？」

朝倉はどこから取り出した手帳を見ながらイオに言った。

「そうだ」

それにイオは無表情で答えた。それを見た朝倉はニヤリと笑った。

「それで……一時期ゆえっちとの熱愛が噂され、最近ではエヴァちゃん家に夜な夜な泊まりこんでいるとかっ！」

朝倉は乗り出して言った。それを聞いた全員が驚愕した。

イオも僅かに眉間にしわを寄せた。

「な、何を言ってるんですかっ！！あれはエヴァンジェリンさんの居場所を尋ねられただけですと何度も言ってるですよっ！！」

夕映は顔を赤くして否定した。

「イオさん、それ本当？」

朝倉はイオに尋ねた。

「そうだ」

その問い掛けにイオは短く答えた。
それを聞いた朝倉はつまらなそうな顔になった。

「な〜んだ。でもエヴァちゃん家に泊まってるのは本当なんだよね？」

イオは僅かに沈黙してから答えた。

「∴そうだが、他意はない」

それを聞いた朝倉は意地の悪い笑みを浮かべた。

「え？他意って何？何？」

しかしイオは気にした様子もなく無表情のまま朝倉から視線を反らした。

「悪意的解釈は慎んでもらいたい」

「ちえ〜つままないな〜」

それを見た朝倉は肩をすくませた。

「あ、あの〜」

そこにのどかが遠慮がちに声を掛けた。

「何だ？」

イオは視線をのどかに向けた。それを受けたのどかは一瞬ビクッと震えたが、言葉を続けた。

「あの本、よかったですか…？」

「ああ…感謝している」

「そ、そうですか…良かったです…」

そのやり取りを聞いていた朝倉は意外そうな様子でイオに尋ねた。

「何？何？2人は知り合い？」

「図書館で偶然知り合った」

「へえ…他に知り合いの人いる？」

朝倉は他の生徒に問いかけた。するとまず明日菜が口を開いた。

「あたしも一応知ってるわよ。敵なのか味方なのかよくわかんない奴だけだね…」

それを聞いた古菲も口を開いた。

「私も知てるアルよ！ネギ坊主と戦ってたの見てたアル！次は私も戦て欲しいアル！」

次に刹那が手を挙げた。

「わ、私も存じ上げています…」

それに木乃香も同調した。

「ウチはこうして話するんは始めてやけど、京都では怪我までして

助けてくれたんやろ？ おおきにな〜」

「俺は何もしていない。派遣されていたのはガニメデとカリストだ」
そのやり取りを聞いていた朝倉は啞然とした表情になった。

「え？ 何かみんな知り合いだったの！？ ひょっとして私だけ遅れてた！？」

「そのようだな」

「うう…この報道部、朝倉和美としたことが…」

そう言って朝倉は項垂れた。

その夜、エヴァに誘われてイオはテラスに座っていた。向かいにはグラスを傾けるエヴァがいた。

「お前は飲まないのか？」

エヴァはイオに尋ねた。

「飲酒は身体にダメージを与える」

それにイオは無機質な表情で答えた。それを聞いたエヴァは鼻を鳴らした。

「ふん。飲めんのならば素直に言えばいいものを」

そう言ってエヴァはグラスの中身を喉に通した。

その時、建物の内部から光が漏れ出した。それを見たイオはエヴァに尋ねた。

「あれは何だ？」

「ああ：坊やが何かやってるみたいだな：酒の興ついでに見に行くか」

エヴァは立ち上がり、建物の中に向かって行った。

イオもその後を追った。

暫し歩くと広場の中央にネギと明日菜の姿があった。お互いに向かい合って何かを話していた。

「：な、何してるんだろ？」

さらに、その手前の物陰に、隠れたのどかの姿があった。

「あれは何をしている？」

「意識シンクロの魔法だろ。口の動きを読んだが、坊やの過去を見せるようだな」

2人はのどかの真後ろで会話した。

それを聞いたのどかは心臓が止まる思いで振り返った。

「うひゃひー！！エヴァ、エヴァンジェリンさん！？」

第35話「悲劇」

驚愕するのどかを見無視してエヴァは言った。

「ふむ：そういうえばお前、他人の表層意識を探れるアーティファクト持ってたよな？ ちょっと貸してみろ。坊やの過去を少々覗かせてもらおう」

そう言われたのどかは慌てて拒否した。

「そ、そんなことダメですよー！」

するとエヴァは腕を組んで不敵な笑みを見せた。

「ほうそうか：でもいいのか宮崎のどか？」

のどかはそんなエヴァを少し怯えた様子で見た。

「ど、どういう意味ですか？」

「いやなに、好きな男の過去を見ておくのは中々重要なことではないかと思っただけ。そんな貴重な機会をみすみす逃していいのか？ まあ、どのみちあそこで姉貴面している神楽坂明日菜は見ることになるだろうがな。いや、坊やと神楽坂明日菜は共に暮らす仲のようだし、より”深い”仲になるだけか…」

「う、うえーそんな〜！」

「だがまあここで坊やの過去を見ておけば貴様にもチャンスはある

だろうな…まあ、見ておけば、だが」

「うう…」

「さて、どうする？あくまで私が”借りた”だけであって貴様が”偶然”それを見てしまうこともあるかもしれないぞ？」

「……ど、どうぞ」

そう言っつてついにのどかはアーティファクトの本を渡した。

エヴァは満足気に受け取った。

「ふむ…では坊やの過去を覗かせてもらおう」

そこへ騒ぎを嗅ぎ付けたのか、朝倉達も集まって来た。

「あれ？エヴァちゃんに本屋ちゃん？ついでにイオさん…何してんの？」

「チツ…うるさいのが起きてきたか…まあいい、貴様らも大好きな先生の過去を見ておくといい」

そう言っつてエヴァは本を開いた。すると文字と絵が浮き上がってきた。

全員がそれを覗き込んだ。

そこは山間に栄えた小さな村だった。

幼いネギはそこで姉のネカネと2人で暮らしていた。

両親は既になく、ネカネは魔法学校に寄宿しているために、ネギは1人で過ごす時間が多かった。

そんな中、ネギは危険な悪戯ばかりしていた。

その行動は今の落ち着いたネギからは考えられないものだった。

ある日、ネギは溺れかけたところを救助された。

姉のネカネはそんなネギに必死に問いかけた。

何故そんな真似ばかりしているのか、と。

するとネギは静かに答えた。

—だって…僕がピンチになったら…お父さんが助けに来てくれると思うって—

それがネギの行動の答えだった。

英雄である父が助けに来てくれるはずだ、幼いネギの父を思うが故の行動だった。

そうして月日が流れたある日、ネギは偶然1人で村から離れていた。その途中、今日がカネカが帰ってくる日であることを思い出したネギは急いで村へ戻った。

久々の姉との再開に胸を踊らせて…。

そして丘を越え、村が見えた時だった。

ネギはその場に固まった。

そこには何時もの村はなかった。

あるのは破壊された建物、石化した人々、燃え上がる大地、そしてその惨状を引き起こした悪魔の姿をした異形たち。

そして一番目を引いたモノ―巨大な白い”何か”が村の中心部にいた。

それは悪魔の姿ではなく、天使の姿であった。

巨大な天使は神々しい六枚翼を広げ―

村を破壊し尽くしていた。

見た目と相反する行為。

村を破壊する微笑む天使。

その姿は見る者の恐怖を掻き立てた。

「お姉ちゃんっ!!」

が、ネギは恐怖心を押し殺し、村へ駆け出した。

―僕が…僕がピンチになったらなんて…思ったからだ…僕のせいだ…

ネギは泣きながら村の中を駆けた。

ネカネを探してひたすらに駆けた。

その時、悪魔の1つがネギに気付き、巨大な拳を叩きつけた。

それを見たネギは死を覚悟した。

全てがゆっくりと進んで見えた。

異形の拳がじわじわと迫ってくるようにネギには見えた。

全てがまるで他人事のようにだった。

―そうか…僕は…死ぬのか…―

が、その拳は第三者によって止められた。
そのフード姿の赤毛の男は忽ち状況を覆した。
杖を片手に魔法を唱え、次々に悪魔達を葬っていった。
その姿に恐怖したネギはその場から逃げ出した。
が、この惨劇の村に最早逃げ場など無かった。
その逃げ出した場所にも異形が待ち構えていた。
異形は口を開き、ネギに石化の閃光を放とうとしていた。

「早く逃げんか坊主っ!!」

が、それを突然現れた老人とネカネが壁となって止めた。
老人は下半身が石となり、ネカネも片足を石にされていた。

「く…『封魔の瓶』!」

しかし老人にも意地があったのだろうか。
それでも老人は異形を瓶に封印した。
が、既に老人の石化は腰まで進行していた。

「逃げるんじゃ坊主!お姉ちゃんを連れて早く逃げるんじゃ!」

ネギは涙で歪む視界に、その姿を見つめていた。
ネギにはどうすることも出来なかった。

「スタンおじいちゃん!」

「ワシはもう助からん…だから早く逃げるんじゃ!頼む…お前さん
だけはどんなことがあっても助ける…それがあのバカへのワシの誓
いなんじゃ…」

その言葉を最後に、スタンは無言の石像となった。

「スタン…おじいちゃん…」

「ネギ！ここから離れましょう…」

ネギは足元が覚束無いネカネに手を引かれてその場を離れた。
村を見渡せる丘へと逃げた時だった。

あの不気味な天使が再び六枚翼を広げた。

次の瞬間、村が業火に包まれた。

その圧倒的な力は、何者にも止められなかった。

「この野郎おおお！！」

否、止め得る者が存在した。

赤毛の男は馬鹿げた魔力を纏い、その天使に向かって行った。

―ボタン―

疲労が限界にきたネカネはその場に倒れた。
それを見たネギは必死に叫んだ。

「お姉ちゃん！起きてよお姉ちゃん！」

そこへ先程の赤毛の男が現れた。

「…すまない…来るのが遅すぎた…」

その呟きを聞いたネギは振り返り、ネカネを守るように立ち塞がった。

子供用の小さな杖を構え、その顔は涙を堪えながらも必死だった。それを見た男は言った。

「…そうか…お前がネギか…お姉ちゃんを守っているつもりか？」

そう言って男はネギの頭を撫でた。
優しく、優しく。

「大きくなったな…」

ネギは混乱した表情になった。

「え…」

「そうだ…こいつをお前にやろう…俺の…形見だ」

そう言って男は長い杖をネギに渡した。

それを受け取ったネギは呆然と男を見つめた。

「お父…さん…？」

被害者である彼らが知り得ない場所――

「議長、第一試作機ミマスからのZPE反応、消失しました」

「ほう。あれを破壊し得る者がいるのかね……。ますます興味深い世界線だな」

[illegible]

回想が終わったネギはおもむろに口を開いた。

「僕は今でも時々思うんです。あの時の出来事は”ピンチになったらお父さんが助けに来てくれる”なんて思った僕への罰なんじゃないかって」

それを聞いた明日菜は力強く否定した。

「な…何言ってるのよ!! 今の話にあんたが悪かったことなんて1つもないわ! 大丈夫! お父さんには絶対また会えるわよ!!」

「アスナさん…」

「私がちゃんとあんたのお父さんに会わせて…ん？」

そこで明日菜は何かに気づいたように視線をネギの背後に向けた。
そこには涙をボロボロと流した朝倉達がいた。

「ちょっと！？あんた達もいたの！？」

「き、聞いていたんですか皆さんっ！？」

ネギと明日菜は驚いたように朝倉達を見た。

「ネギ先生にそんな過去が…」

「うう…ネギ先生…」

「私、ネギ先生のお父さん探すのに協力するよ！」

「私もアル！」

「ウチも…」

「私も…」

「わ、私も協力してやらんことはないぞ…」

エヴァとイオ以外の全員が涙を流し、エヴァもネギに同情したような視線を送っていた。

しかし、イオだけは変わらなく無表情だった。

「おいお前…相変わらずだな…」

それを見たエヴァがイオに言った。

イオは無機質な瞳をエヴァに向けた。

「この類いは見慣れている」

「見慣れているって…お前は一体どんな人生を歩んできたんだ…？」

「それは…答えられない」

イオは視線を反らした。

「ふむ…そういえばお前の過去について何も知らないな…」

そう言ったエヴァはニヤリと笑い、手元の本を開いた。

「おいイオ、お前の過去を教えろ」

それを聞いたイオは僅かに眉をひそめた。

「…？」

次の瞬間、本には文字と絵が浮かび上がった。

始めに映ったのは目映いばかりの光だった

その光が収束した時

そこには何も無かった

大気は吹き飛び

大地は抉れ

海は蒸発し

都市は灰になった

エヴァは咄嗟に本を閉じた。

そして息を切らせながら叫んだ。

「何だ今のは！？お前は一体何を見たんだっ！？」

そんなエヴァにイオは静かに言った。

「悲劇だ。我々の見たものは悲劇だ…」

そう言ってイオは建物の外へ去って行った。

エヴァはその後ろ姿を黙って見つめた。

それには気付かずに騒ぐ生徒達の声が、とても遠くに聞こえた。

生徒達が既に寝てしまった深夜、イオは浜辺に1人佇み、夜空を見つめていた。暗闇の中、ただ見上げていた。

無言で佇むその姿は、何故か切なく見えた。

「おい…」

そこへエヴァが歩み寄って来た。
遅れて茶々丸とチャチャゼロも歩いて来た。

—ザッザッザッ—

砂を踏む足音が響いた。

「何だ？」

イオは横目でその姿を確認した後、ゆっくりと振り返った。
その顔は無表情だった。

「…星が好きなのか？」

エヴァは夜空を見上げて言った。
そこには星の優しい光があった。

「そうではない…空の青さが好きなんだ…」

イオも再び夜空を見上げた。
そこには何が見えるのだろうか…。

「ここは偽物の空だ。それに夜空は黒いぞ…」

「…それでも、空は青さを忘れたりもしない」

それを聞いたエヴァは鼻を鳴らした。

「ふっ…まるで詩人だな」

イオはそれを静かに肯定した。

「…ああ。そうだな」

そして2人は沈黙した。

茶々丸とチャチャゼロも無言で2人を見つめた。

夜の浜辺には5つの人影があるばかりだった。

その静寂を破るようにエヴァが口を開いた。

「なあ：お前の過去のことだが：話してくれないか？」

イオはエヴァに視線を送り、再び空を見上げた。

「俺の過去を知れば後戻りできなくなる。それでもいいのか？」

問われたエヴァは静かに答えた。

「ああ。構わない」

それを聞いた茶々丸とチャチャゼロも言った。

「私もマスターと同じです」

「ソナ面白ソウナモン聞カネエ訳ネエダロ。ケケケ」

それを聞いたイオはもう一度視線をエヴァに向けた。

「本当にいいんだな？脅しではなく、本当に戻れなくなるぞ？」

イオの真剣な口調にエヴァは息を呑んだ。

「ああ：構わない：お前の過去、お前自身を教えてくれ」

「わかった。好きにしろ」

そう言ってイオは了承した。

それを聞いたエヴァは何かの呪文を唱えた。

その呪文を聞いたイオはエヴァに問いかけた。

「それは何だ？」

「ん？これか？これはさつき坊やが使ったのと同じ意識シンクロの魔法だ。これでお前の過去を体験できるんだ」

「そうか：」

「：よし。完成したぞ」

そう言ってエヴァはイオに向き直った。

イオはそんなエヴァに言った。

「始めに言うておくことがある」

イオの表情は無表情だったが、エヴァには強い決意のようなものを読み取ることができた。

「何だ？」

エヴァも更に真剣な表情になった。

「俺について、だ」

イオは呟くように言った。蒼い瞳が僅かに揺らいだ。

「…ああ。教えてくれ」

エヴァはそんなイオの蒼い瞳の奥を見つめた。

「俺は…」

そこでイオは一度言葉を切り、目を閉じた。

再び静寂が訪れた。

夜空の星は無言で輝き、冷たい風が駆け抜けた。

波の音だけが静かに聞こえてくる。

イオの灰色の髪とエヴァの金色の髪が風にそよいだ。

2人は無言だった。

蒼い濃淡の視線が交差した。

そしてイオはゆっくりと瞼を開いた。

—俺は存在していない—

イオの言葉は闇夜に静かに響いた。

そして溶けていくように消えていった。

第36話「追憶」

―俺は存在していない―

イオの口調は静かだったが、エヴァにははっきりと聞こえた。

エヴァは不思議とあまり衝撃を受けなかった。

日頃から、イオに対して自分たちとは違う何かを感じていたからかもしれない。

「更に言えば、この世界の存在ではない」

エヴァは眉をひそめた。

「どういう…意味だ？」

イオは無表情で答えた。

「世界というのは可能性の分だけ無限に存在する…時空ダイアグラム上において幾つもの世界が線のように分岐している…我々はそれを世界線と呼ぶ。正確な表現ではないが、平行世界と言った方がわかりやすいかもしれない。我々はこの世界線以外の世界線から来た存在だ」

エヴァは啞然とした。

「本当…なのか？」

「俺の記憶を見れば直ぐにわかる…」

その発言にエヴァは納得したようだった。

「…それもそうだな」

「それともう1つ言っておく。俺はイメリアという人間の…半分だ」
エヴァは怪訝な表情になった。

「半分？」

「そうだ。薄々気づいていると思うが、俺には感情というものがほとんど存在しない」

イオは平然と言ったが、それを聞いたエヴァは目を見開いた。
先程の発言よりも、エヴァには衝撃的な内容だった。

「そう…なのか…？」

「ああ。俺には何もない。感情など存在しない」

イオは無機質な顔をエヴァに向けた。

「そんな訳あるか…！」

それを聞いたエヴァは怒鳴り、背伸びしてイオの胸ぐらを掴んだ。

「お前にだって感情はあるだろ…！お前には何もないだど？ふざけるな…！」

「……」

イオは黙ってエヴァを見つめた。

暫し沈黙が流れた。

「お前には……何もない……のか？」

先程と一変し、エヴァは俯いて呟いた。

「お前にとっては……私も……何でもない……のか？」

エヴァは僅かに震える声で尋ねた。

「っ!？」

次の瞬間、エヴァは驚いたように体を震わせた。それは、イオがエヴァの頭を撫でたからだった。

「……感謝する」

イオは短く呟いた。

その表情は静かな笑顔だった。

「全く……」

エヴァはそんなイオの表情に赤面し、それを隠すようにイオに顔を密着させた。

再び静かな時が流れた。

波の音だけが聞こえてくる。

「なあ…どうして何もないなんて言うんだ？」

その静寂を破り、エヴァはイオに問い掛けた。

「その理由は俺が半分だからだ」

イオはその問いに無表情で答えた。

エヴァは殊更に深刻な表情になった。

「…一体その半分というのはどういう意味なんだ？」

イオはエヴァから視線を反らした。

そして機械的な口調で言った。

その内容はあまりに衝撃的だった。

「ジュピターシリーズ”裁定者”第1試験体イオ0001。イメリア・ユニ・エルノテ
ウリスの精神を分割した残りを量子化、ディヴァインに変容させた
量子存在。精神分割により感情及びZPF接続率が減少、多量の振
動コア、ジュピター端末を埋め込むことで出力を維持。…それが俺
だ」

それにはエヴァだけでなく茶々丸も絶句した。チャチャゼロだけが
不気味に笑った。

「何だそれは…」

エヴァは動揺を隠しきれない口調だった。

「だから言ったはずだ…引き返せなくなる、と」

イオは無表情だった。

「お前は…何者なんだ…？」

エヴァは最早思考が回らなくなっていた。

それ程に衝撃的な事実だった。

問われたイオはゆっくりと語り始めた。

「我々の世界線は”カタストロフィー”という”悲劇”を迎えた。
先程君が見たのがそれだ…」

「カタストロフィー…破局か…」

「そうだ…正に破局だ。かつて我々の世界線で、ZPF接続実験が行われた。実験は成功した。初めて理論上のZPFに実験で接続できた。これでエネルギー問題を解決できると誰もが信じた。しかし…理論よりもZPFの内包するZPE値が高すぎた。莫大なエネルギーはコントロールを離れ、暴走した。結果、全人口の9割が死滅した。大気は吹き飛び、大地は抉れ、海は干上がり、文明は灰になり、星の地軸がずれた」

エヴァ達は再び絶句した。掛ける言葉が浮かばなかった。
そしてイオは無表情で続けた。

「その後、生き残った人々は閉鎖環境を造り上げた。透明なドームの中に都市を築いた。それ故、我々はその閉鎖環境をドームと呼んでいる。最早ドームの外は一部を除いて生存不可能の場所になって

しまった。その後、初期のドームから発展し、今では8つのドームが存在する。それぞれのドームは一定範囲の統治権を有し、都市国家として機能している」

それを聞いたエヴァは思い出したように言った。

「ちょっと待て。それはわかったが、ならば何故お前達がここにいるんだ？」

問われたイオはエヴァを見つめた。

「それも今から話す…まずZPF技術は全面的に禁止された。だが、それに従わない集団が現れた。それが世界選択機関だ」

「世界選択機関…」

「世界選択機関は第8ドームを造り上げた。つまり第8ドームは実質的に世界選択機関が支配している。その世界選択機関は世界線が無限にあることを知った。無限の可能性の世界があるということは、当然カタストロフィーを体験する世界も無限に存在する。世界選択機関はその世界を”悲劇”から救うためにZPF技術を応用して世界線転移を実現し、量子存在を送り込むことに成功した…それが我々”裁定者”だ」

「裁定者…そうだったのか…お前達はそんな…」

エヴァは啞然としたように呟いた。

そんなエヴァを見たイオが言った。

「これ以上は説明するより実際に見た方が早いだろう」

それを聞いたエヴァは頷いた。

「ああ…」

そしてもう一度イオを見つめた。

「…では、いくぞ」

そう言って指を鳴らした。次の瞬間、辺りの風景が一変した。

第37話「First view」

初めて見たのは培養器の中から見た景色だった。
黒髪の少年はゆっくりと目を開けた。

「成功だ！精神分割は成功したぞ！」

それを見て、白衣を着た男が喜びの声をあげた。

―…何だ……俺は…誰なんだ……？―

培養器の中の液体が抜かれ、黒髪の少年は培養器から出された。
そして白衣を着た男達が少年にタオルをかけた。

「気分はどうだい？イメリア君…いや、イオ君と言った方がいいか

な？」

1人の眼鏡を掛けた男が黒髪のイオの顔を覗き込みながら尋ねた。

「俺は…誰だ？…お前は…誰だ？」

イオは焦点が合わない視線を男に向けた。

「私はスルト。世界選択機関研究科主任だ…覚えてないのかい？」

その黒髪の青年は優しそうな笑みを浮かべた。

「…わからない…何も…わからない…何も…感じない…」

「ふむ。やはり記憶にも障害が出たか…」

その時、イオが入っていた隣の培養器からも全く同じ容姿の少年が出された。

イオは無機質な瞳をじっとその少年に向けた。

「初めまして。気分はどうですか？」

1人の男がその少年に話し掛けた。そしてタオルを渡そうとした。その瞬間、少年はその手を振り払い、突然暴れ出した。

「やめろ！俺に触るな！何だ貴様達は！！俺は誰だ…わからない…何なんだよ…！何なんだよ！俺に何をしたああああっ！！」

それを見てスルトが慌てたように叫んだ。

「いかん！直ぐに鎮静剤を打て！そいつは既にディヴァインだ！力を解放する前に急いでアンチディヴァインを使いえ！！」

イオは無表情で、暴れる同じ外見の少年を見た。
ただただ見つめていた。

感情が色褪せたその双眼で…。

「ごめんねイオ君、ちょっとあっち行こうか」

それを遮るようにスルトはイオを別の部屋に通した。

「これ、服だから着替えておいてね。私はちょっと外すから待っていてくれ」

そう言って服だけ残し、スルトは先程の部屋へと戻って行った。
イオは無言でそれに着替えた。

白いコートのような生地に青い幾何学的な模様が施された服だった。
そしてその部屋にあった鏡を覗き込んだ。

そこには無表情で佇む黒髪で赤い瞳の少年がいた。

「俺は…誰なんだ…？」

それを見つめ、イオは呟いた。

が、それに答える者は居なかった。

鏡の中の少年は感情の無い瞳を向けているだけだった。

—パシユ—

その時、扉がスライドして開き、1人の女性が入ってきた。

「全くスルトめ…あたしに面倒事押し付けやがって」

その声を聞いたイオはゆっくりと振り返った。

そこには白衣を着た妙齡の女性が立っていた。真っ直ぐな茶髪を肩まで伸ばし、腕を組んで壁に凭れ掛かっていた。その雰囲気はどこか鋭く、不機嫌そうだった。

「お前は…誰だ？」

イオは無表情で尋ねた。それを聞いたエウロパは呆れた顔になった。

「ちょっと…本当に全部忘れたみたいね…まあいいわ。私はエウロパ0002。あんたと同じジュピターシリーズよ」

「ジュピターシリーズ…？」

イオは聞き返した。

するとエウロパは面倒くさそうに溜め息をついた。

「一々説明すんのメンドイわね…まああっちと違って記憶障害で済んだだけましかな…」

「あっち…？」

「あんたのもう半分よ。あんたと違って発狂したみたいだからアンチデイヴァインを使って隔離凍結されるみたいね…まあそんなことはどうでもいいわ。来なさい。あんたの部屋へ案内するわ」

そう言うときエウロパはイオに背を向けて歩き始めた。イオはそれを無言で追った。

暫く歩いてわかったことは、全てが白一色だということだった。

部屋や壁や天井や通路――全てが白く塗装されていた。

そんな純白の通路を進んで行くと、幾つかの扉が並ぶ場所に着いた。エウロパはその扉の中の1つ、0001と書かれた扉の前で止まった。そしてイオに振り返った。

「ここがあなたの部屋。因みに隣の0002ってのは私の自室だけどほとんど使っていないから会うことも無いわね。で、扉はそのパネルを操作すれば開くわ。これでスルトに頼まれた説明は全部終わったわ。私は忙しいのよ。それじゃさよなら」

そう言い残しエウロパは去って行った。

その後ろ姿を無言で見送った後、イオは部屋に入った。

そこは一面真っ白だった。唯一の窓からは赤い大地と灰色の空が見えた。イオはその空を見つめた。

「空が…灰色…」

窓の外には死んだ世界が広がっていた。

――ドンドン――

「おい俺だ。開けてくれ」

イオが景色を眺めていた時、ノックをする音が聞こえた。イオが壁のパネルを操作してロックを解除すると、扉はスライドして開いた。そこには白い服を着た体格の良い黒髪の男がいた。

「よっ！」

男は親しげにイオに声を掛けた。

「…誰だ？」

対してイオは無表情で尋ねた。

それを聞いた男は落胆したように肩を落とした。

「そりゃねえぜ…イメ…じゃねえな…イオ。どうやら本当に記憶無くしちゃったみたいだな…」

男は呟くように言った。

イオはそんな男を黙って見つめた。

その視線に気づいた男は軽く肩をすくませた。

「おっと。名前まだ言ってなかったな。俺はガニメデ、よろしくなイオ」

ガニメデは手を差し出した。

それをしばらく無言で見た後、イオも手を差し出して握手をした。

「俺はイオというらしい……」

イオは無機質な顔で言った。
それを聞いたガニメデは僅かに寂しそうな表情になった。

「ああ。知ってるぜ…」

そうして手を離し、お互いを見た。

「にしてもお前、随分と物静かになったな」

「そうなのか…？」

「ああ。まあもともとベラベラ喋る方じゃなかったがな」

そう言ってガニメデは僅かに笑った。

イオはそんな様子を無表情で見つめた。

「こらー！ガニメデー！」

そこへ第三者の怒鳴り声が掛けられた。

2人が視線を向けた先には鬼の様な形相で走ってくる若い女性の姿があった。

その姿を見たガニメデは露骨に嫌な表情をした。

「げ…ガミガミ女…」

先ほどまで離れていた女性はよほどの脚力なのか、既にガニメデとイオの目の前まで来ていた。
スラッとした腰に手を当て、綺麗な顔を怒りに染めていた。

金髪のショートカットで整った顔立ちだった。その深い黒色の瞳はとても実直そうだった。

「誰がガミガミ女ですか!!」

「聞こえてたのかよ…どんな地獄耳だよ…」

「またミーティングをサボりましたね？」

「ちげえよ…こいつを迎えに行ってたんだよ」

ガニメデはイオを顎で差した。

そのイオを見て、女性は一変して笑顔を見せた。

「イオ。無事でしたか…よかったです」

それを見たガニメデが、俺と扱いが違いすぎるだろ、と呟いた。
が、女性はそれを無視した。

「貴女は誰だ？」

イオに問われた女性は怪訝な表情になった。それを見たガニメデは
呟くように言った。

「こいつは…記憶を失っちゃったんだよ」

女性は驚きの顔をガニメデに向けた。

「!?!? 本当なんですかガニメデ!?!」

ガニメデは視線を床に向けた。

「ああ…」

「そうですか…」

女性の顔に悲しげな影が差した。

「ほら、お前もイオに自己紹介してやれよ」

ガニメデは悲しげな女性に陽気に声をかけた。女性は少し笑顔を見せ、イオに綺麗な黒い瞳に向けた。

「私はヒマリア0006です。よろしくお願いしますね」

ヒマリアは細い腕を伸ばした。

「了解した」

イオも手を差し出し、軽く握手をした。イオの無機質な瞳はヒマリアを見つめていた。

「やあ、イオ君。それにガニメデ君にヒマリア君も。久しぶりの再会かな？」

そこに突然声がかかった。3人は視線を向けた。そこには白衣を着たスルトがいた。

「スルト主任。お久しぶりです」

「チツ…」

「……」

ヒマリアはスルトにお辞儀をしたが、ガニメデはスルトを睨んだ。
イオは無表情でスルトを見ていた。

「やあ久しぶりだね。取り込み中すまないんだけど、イオ君、ちょっとついて来てくれるかな？」

スルトはそんな様子を無視したように笑顔で言った。それを聞いたガニメデが口を挟んだ。

「待てよ」

その口調は不機嫌そのものだった。

「何かな？」

対してスルトは笑みを見せた。それを見たガニメデは更に口調を荒くした。

「イオをどこにつれてく気だ？また変な実験の材料にするつもりじゃねえだろうな…」

「まさか。材料だなんて。そんなことはしないよ。イオ君の身体に異常がないか検査するだけだよ」

「本当だな？」

「勿論だよ。さあイオ君、行こうか」

スルトはイオの手を引き、来た道に戻って行った。
それを見送るガニメデの表情は険しかった。

「何か心配なのですか？」

ヒマリアは険しい顔のガニメデを見つめた。

「まあ…」

ガニメデは何処か遠くを見ているようだった。

「スルト主任が気になるのですか？」

「…あいつは信用ならない」

「何故そう思うのです？」

問われたガニメデはヒマリアに視線だけを向けた。

「あの目だ。あの目には嫌な予感がすんだよ」

そう言ってガニメデはその場から去って行った。
ヒマリアは無言でその後ろ姿を見送った。

イオはスルトに連れられ、とある部屋まで来ていた。そこには様々な機材や資料が並んでいた。相変わらず部屋は白一色だった。イオはそれらを見回していた。

「ここは量子化装置のある研究室なんだ」

スルトはそんなイオに説明するように言った。

「量子化装置？」

イオは無表情で聞き返した。

「量子化というのはね、疑似遺伝子情報を身体に送り込むことで、デイベイン非量子存在を量子存在に変容させることなんだ」

イオはスルトに視線を向け、静かに呟いた。

「デイベイン……」

「そう、デイベインだ。そして君は元々量子存在だったんだけど、精神分割によって量子存在として安定しなくなってしまっているんだよ。まあ精神分割っていうのは君の情報場を真つ二つにすることなんだから当然なんだけどね」

イオはスルトの説明にもさして興味が無い様子だった。

「そうか…」

対してスルトは終始笑顔を崩さなかった。

「だから君には再び量子化措置を受けて欲しいんだけど…いいかな？」

了承を求められたイオは僅かに目を鋭くした。

「その前に、量子化を受ける理由が知りたい」

スルトは下がった眼鏡を中指でもち上げた。

「何故だい？」

イオは感情の無い瞳でスルトを見た。

「俺は記憶を失ってしまった。俺は自分が誰かすらわからない。だからかつての俺が何の為に量子存在となり、精神分割を受けたのか、その理由を知りたい」

それを聞いたスルトは僅かに笑顔を崩したが、すぐに元の笑顔に戻った。

「そうだね。確かに君には知る権利があるね」

そう言って、スルトは近くにあった機材のパネルに触れた。そしてしばらくパネルを操作していた。

「じゃあまず始めに、イオ君。君はどこまで忘れてどこまで覚えて

いるか教えてくれるかな？」

イオは無機質な口調で答えた。

「ここが何処か、自分が誰かすら覚えていない」

「成る程：なら最初から教えないとダメだね」

そう言ってスルトは再びパネルを操作した。

スクリーンには青い惑星が表示された。

「これは僕らの惑星だよ。もっとも…」

そこでスルトは言葉を区切った。

「20年前の姿だけどね」

スルトはパネルを更に操作した。するとスクリーンには荒廃した赤い惑星が表示された。

「これが今の姿だよ…。20年前、僕らがカタストロフィーと呼んでいる”悲劇”が起きた」

イオはスクリーンを見つめた。

「カタストロフィー…」

「ZPF、ZPEについて覚えているかい？」

スルトはイオに尋ねた。

「いや…覚えていない」

イオは変わらない無表情で答えた。

「そうか。簡単にいえばZPFは空間そのもの、ZPEは空間に存在するエネルギーのことだよ」

「理解した」

「理解が早くて助かるよ。それで話を戻すと20年前、ZPFの存在が証明されて初めて接続実験が行われたんだ。ZPF接続実験…接続自体は成功した。ただ、ZPE値が理論値を大きく越えていた。結果、接続を解除できなくなり莫大なZPEはコントロールを離れてしまった。そして暴走した。それによってこの惑星は壊滅的な打撃を受けた。全人口の9割が減びてしまったよ…」

スルトの顔に暗い影が差した。

「生き残った人々も、豹変した過酷な環境に苦しめられた。だから人々は閉鎖環境、ドームを造り上げた。その中に都市を築き上げ、何とか生存できるようになった…しかし…」

スルトはそこで一度区切り、思い返すように上を見上げた。

「悲劇は1度きりじゃなかったんだよ」

対してイオは無機質な表情を崩さずに聞いていた。

「世界というのは可能性の分だけ無限にあったのさ。我々は世界線

と呼んでいるそれは、悲劇もまた無限にあることを示している。悲劇を迎える世界線―忌線は無限にあるんだよ。だからその悲劇を回避する為に我々は世界選択機関を創設した」

スルトはそこまで語り、イオに振り向いた。その表情は不気味な笑みを含んでいた。

「そしてその忌線に送り込まれるのが君達、裁定者ジュピターシリズだ」

第38話「False true」

「量子化というのは誰でも出来る訳じゃないんだ。君達は特別な存在なんだよ」

スルトは顔を不気味な笑みに染めたまま続けた。

「カタストロフィーの後、この惑星の地表は高濃度のZPEに包まれた。その影響で新生児の中から先天的にZPFに接続できる者が現れてきたんだよ：そう。君のようにね」

イオは表情を変えずに聞いていた。

「我々、世界選択機関は君のような者を集めた。そして量子化して量子存在になってもらった。量子存在となれるのは君のように先天的にZPFに接続できる者に限られるからね。勿論、本人の承諾は得ているよ」

「以前の俺はそれを了承したのか」

「イメリア君も自ら進んで量子存在となったよ」

「……」

イオは無表情で沈黙し、スルトはそれを見て笑みを深めた。

「世界線を越えられるのは量子存在だけだ。つまり、悲劇を回避できるのも量子存在だけなんだよ：。彼は、悲劇から1つでも多くの世界を救いたい：そう考えていたよ」

「ならば精神分割を受けた理由は何だ？」

問われたスルトは僅かに口調を変えた。

「それはまず、量子存在がどのような存在であるか教えないとだめだね」

スルトはそう前置きした上で説明を始めた。

「量子存在というのは身体を量子化し、ディヴィアインに変容させ、振動コアと高度演算素子を埋め込んだ者のことを指す。ディヴィアインというのは巨視的^{マクロ}なレベルでも量子的性質を示す物質のことだよ。振動コアは身体の振動数を変化させるバイブレータで、高度演算素子はその振動コアを制御する中枢だ。君の右腕を見てごらん」

イオは言われた通りに袖を捲り、右腕を露にした。

そこには無数の青い線が走っており、明らかに異質な水晶に似た人工物が埋め込まれていた。

しかし、イオはそれを見ても表情一つ変えなかった。

「手足や顔などの末端部には無いけど、その青い線は君の体中に存在している。それは生体導線なんだ。体中にある振動コアと高度演算素子を繋いでいる、言わば回路みたいなものだよ。そしてその水晶のような物はジュピター端末だ。エウロパ0002以降のジュピターシリーズのジュピター端末は身体に埋め込まずに済むように改良されたけど、イメリア君のは旧式でね、身体に直接埋め込んでいるんだよ」

「ジュピターとは何だ？」

「ジュピターというのは観測型意識集合体のことだよ。つまり君達ジュピターシリーズ全員の意識をZPFにおいて統合しているんだ」

「なぜその必要がある？」

「それは量子存在の本質に関わる質問だね」

スルトは口の端をつり上げた。

「君達、量子存在が他世界線に跳躍した時、世界は君達を否定するんだよ」

「否定？」

「そうだよ。世界というのは変化を嫌うんだ。イレギュラーレンツの法則…ルシヤトリエの原理…全てその一例さ。そんな世界に突然君達のような量子存在が現れたら、世界は当然君達を排除しようとする。いや、その表現は適切ではないな。正確に言えば、世界は君達を同化しようとする」

「同化？」

イオは再び聞き返した。

「エントロピー増大則。閉じられた系において乱雑さは常に増大するという法則だよ。これはすなわちAとBという異なる状態がある場合、世界はその中間であるABという状態を好むと解釈できる。すなわち世界はイレギュラーである君達を自身に同化させようとするんだよ。そのイレギュラーに対する世界の力を世界抵抗、又は抑

止力という」

「理解した。が、それがジュピターとどう関係しているのかが不明だ」

「これには続きがあつてね。はっきり言えば世界にとっては別世界の人間1人が突然現れてもイレギュラーにすらならない。世界にとっては微々たるものだからね……。でも、量子存在となれば話は別だ。世界の情報場、すなわちZPFに接続できる量子存在は世界にとって無視できない危険な存在だ。故に世界は量子存在を世界抵抗によって同化しようとする。でも発想を逆にすれば、量子存在でなければ世界抵抗は大したものではないんだ。ここまで言えば僕の言いたいことはもうわかったんじゃないかな？」

「ジュピターによって量子存在を確定させる……」

「そう。量子存在というのは観測されれば存在確率が確定し、普通の存在として認識される。集合意識ジュピターは君達を観測し、擬態化させて世界抵抗を和らげるんだ。他にもナビゲーションシステムとして使われているけどね」

「理解した」

「そして、確定された君達の身体はディヴァインの性質が抑えられる。それによって世界抵抗を防ぐことができるけど、その代わりにZPFへの接続率が下がってしまう。つまり力が大幅に抑制されるんだ。だから非常時にはディヴァインを解放することになる」

「ディヴァインの解放……」

イオはポツリと呟いた。その単語だけが部屋に響いた。

「そうだよ。ディヴァインの解放だ。ディヴァインを解放すればその間、莫大なZPEが行使可能になる。さらに同期した想念の一部が物質化される」

「想念の物質化とは何だ？」

スルトは下がった眼鏡を中指で持ち上げた。

「その人の深層意識の一部が形となって現れるんだ。主に武器の形状をとるね。例えばイメリア君は柄の無い剣、ガニメデ君は甲冑、カリスト君は長銃……という具合にね」

「……なるほど。理解した」

「だけど、勿論ディヴァインを解放すれば世界抵抗を受けてしまう。だからその為に君達の固有ZPE、すなわち情報場を使う」

「情報場とはZPFと同義のものと捉えて構わないか？」

「その解釈で正しいよ。情報場は振動コアを用いて振動数を下げること物質化されるんだ。我々はそれを情報障壁と呼ぶ。ディヴァイン解放時に情報障壁を展開すれば世界抵抗を反らすことができる。世界抵抗と情報障壁は拮抗し、結果として情報障壁の回りを世界抵抗が流れることになる。それによって擬似的に世界抵抗を障壁として使用できる訳なんだ。我々はそれをディヴァインフィールドと呼んでいる」

「理解した。それで世界抵抗を防ぐことが可能になるという原理か」

「そうだね。でも、残念ながらディヴァインフィールドがあっても完全には世界抵抗を防ぐことはできないんだ。さらに、量子存在は身体に損傷を受けると傷はすぐに修復されるけど、存在確率が発散し始めてしまうんだ」

「それは理解した。が、最初の問いに答えていない」

イオは無機質な瞳でスルトを見つめた。

対してスルトは思い出したように口を開いた。

「ああ、なぜイメリア君が精神分割を受けたのかってことだね？」

「そうだ」

「それはさっき言ったことと関係があるんだよ。量子存在は世界抵抗を常に受け、身体をかなり酷使してしまっている…加えて量子化は身体の成長期にしか行えない。擬似遺伝子情報は身体が成長する段階でないと受け付けないからね…。そして成長が止まると身体がディヴァインに拒絶反応を示すようになる…つまり」

そこで区切り、スルトは一段と雰囲気を重ねた。

そして再びゆっくりと口を開いた。

「量子存在の寿命は長くても25才程度なんだ」

白い部屋に、スルトの言葉だけが響き渡った。

しかし、イオは気にした様子も無かった。

それを確認したスルトは再び笑みを見せて続けた。

「我々はその解決策を考え出し、イメリア君はそれに協力してくれただよ」

「精神分割がその解決策ということだな」

「その通り。実はイメリア君の精神を分割した”残り”が君だ。だから君のその体はイメリア君の体ということになるね。分割されたもう一方の精神は別の体に”インストール”されたんだ」

スルトは一度言葉を止め、イオから視線を離れた。
そして再びイオに視線を戻し、先程とは異なる笑みを見せた。

「イメリア君のクローン体をベースにしたデイヴァイン完全体にね」

「……」

イオはそんなスルトを黙って見ていた。

「量子化というのは元々非量子存在だった存在を量子存在にすることだ。だからその体は完全なデイヴァインではないんだよ。君達ジュピターシリーズもその例外ではない。でもデイヴァイン完全体は違う。”最初から”量子存在なんだ。すなわち君の”もう一方”のようだね」

スルトは突如天を仰ぎ、気を高ぶらせたように言った。

「素晴らしい！完全なるデイヴァイン！」

イオは沈黙し、そんなスルトに無機質な瞳を向けていた。
その視線に気づいたスルトは咳払いをし、口調を戻した。表情も元

の笑顔に戻っていた。
が、イオの瞳に映ったその表情からは狂気が消えていなかった。

「失礼。とにかく、ディヴァイン完全体はただのディヴァインとは違う。”最初から”ディヴァインである為に身体の拒絶反応が無い。だから寿命も伸びる訳なんだけど、それには当然、精神の移植が必要になる。それはその人の情報場を移植することを意味するんだけど、これは非常に困難なことなんだ」

「余りにも情報量が多い為だと予想する」

「そうなんだよ。人間1人の情報量は莫大な量だ。当然だよ。その人そのものなんだから。だから方法は1つしかなかった」

「精神分割…」

「そう。精神分割は情報場を真つ二つにすることだ。その半分だけ移植すれば、情報量も半分で済む。半分の量ならばなんとか移植できたんだ。この実験が成功すればデータが得られ、それに基づいて完全な情報場の移植も或いは可能になるかもしれない。だからイメリア君は精神分割を受けた。仲間の為にね…」

「……」

「でも結果は失敗だったよ…。完全体に移植した君の”もう一方”が発狂してしまっただね。隔離凍結されることになった」

「凍結？」

「アンチディヴァイン。これはディヴァインの固有振動数を打ち消

すような振動数を持つ物質だ。つまりアンチディヴアインはディヴアインを抑制する。そして”彼”はそのアンチディヴアインで凍結され、この施設の地下に隔離されている」

「……」

イオは視線を床に向けた。

「さて、これで君の質問には全部答えたと思うんだけど、どうかな？」

問われたイオは視線を再びスルトへ向けた。

「肯定する」

それを聞いたスルトは口元を歪めた。

「そうか。じゃあ改めて聞くよ。量子化を受けてくれるかい？」

イオは変わらない無表情で答えた。
その瞳には感情の欠片も無かった。

「了解した」

イオの紡いだ言葉は静かに響いた。
その返答を聞き、スルトは口の端をつり上げた。

「では早速準備をしよう」

そしてパネルを操作して装置を起動し始めた。

「量子化する前に言っておくことがあるんだ」

スルトはパネルを操作しながら言った。

「イメリア君は既に量子化を受けている。だからイオ君、君は実質的に2回の量子化を受けることになる。おそらく身体の拒絶も強くなるしZPE出力も下がる。出力低下は埋め込む振動コア数を増やせば問題無いけど、君の寿命はさらに短くなる。それを理解しておいてほしい」

「了解した」

機械の作動音が響く中、イオは短く呟いた。

「あと、量子化を受けると色素が変容することがあってね。イメリア君の時は虹彩が赤く変色したんだ。ほら、イオ君の瞳も赤いだろ？まあ大した問題じゃないと思うけど一応言っておくよ」

そう言ってスルトはパネルの操作を止めてイオに向き直った。

「準備は完了したよ。さああの装置の中に入って横になってくれるかな？」

イオは言われた通りに装置へ足を踏み入れた。そして横になった。

視界には真っ白な天井だけが映っていた。

「では始めるよ」

その言葉を合図に、イオの視界は閉ざされた。

第39話「Red despair」

―遠かった―

―見えた景色は遠かった―

―全てが遠かった―

―そこでは全てが一つだった―

―だから問いかけた―

―俺は何だ、と―

―答えは直ぐにわかった―

―なぜなら―

―答えは既にあったから―

―流れる景色を呆然と眺めていた―

―粒子が生まれ、やがて物質ができた―

―その塵たちは互いに集まり、星が生まれた―

―更に、その星たちが集まり、銀河が生まれた―

―銀河は集まり…集まり…集まり…集まり…―

—そして命を授けられた存在たちが生まれた—

—それは悠久の流れ—

——しかし、それは同時に一瞬であつた——

—そう—

”それ”にとつては全てが一瞬にすぎなかつた――

「！！」

イオは閉じられていた目を見開いた。
見えたのは不気味なまでに白い天井だった。

「おお……起きたか」

そこへ声が掛かった。

その方向へ視線をやると、そこには椅子に座ったガニメデがいた。

「やっぱりな…こんなことだろうとは思ってたぜ」

ガニメデは視線を窓に向けて呟いた。

その空は変わらず灰色だった。

「…何がだ？」

イオは上半身だけをベッドから起こした。

「お前が量子化を受けるってことだよ…」

ガニメデは諦めたような視線をそんなイオに向けた。
視線の先の少年の髪は、空と同じ色だった。
唯一、その瞳だけが元の空の色だった。

「必要なことだ」

が、イオは無表情を変えなかった。

「ああ…そうだな…」

それを見たガニメデはイオから視線を反らし、小さく呟いた。
その表情は僅かに寂しさを含んでいた。
そしてそこで会話が途切れた。

沈黙が辺りを支配した。

白い部屋には沈黙を守る2つの人影があった。
唯一の窓からは灰色の景色しか見えなかった。

いつまでそうしていたか、イオはベッドから起き上がった。
それを横目で確認したガニメデはゆっくりと問いかけた。

「もういいのか？」

「問題ない。身体に異常は見られない」

「そうか…」

イオは無表情で答え、ガニメデはそんな様子を静かに見つめた。
その時だった。

—パシユツ—

「イメリアっ！！」

突然ドアが開かれた。

2人が視線を向けた先には、息を切らせながら必死な形相をした少女がいた。

燃えるような赤い髪をポニーテールで結わき、その瞳は深い碧に染まっていた。

少女は2人の視線を無視し、イオに迫った。

「イメリア！！無事なのだな！？その髪は！！なぜ私には何も言ってくれなかったのだ！？どうしてなのだ！！」

少女は無言のイオの肩に掴み掛かり、乱暴に揺すりながら叫んだ。

「……」

しかし、イオはそんな状況にも気にした様子はなく、変わらぬ無表情だった。

「なぜ何も答えんのだ！？ 答えよ！！」

対して少女は語気を更に強め、必死に叫んだ。

「そこまでだ」

―バツ―

「っ！？」

が、その叫びも続かなかった。

今まで静観していたガニメデが少女とイオの間に割り込み、2人を引き離した。

「ガニメデ！！ 何をする！？」

少女は突然の行動に驚き、ガニメデを睨んだ。

「落ち着け。エララ」

ガニメデはそんな少女をなだめた。

「私は落ち着いている！！ だからなぜイメリアがこうなったのかを尋ねているのであろう！！ 答えよ！！」

エララと呼ばれた少女は険しい表情で叫んだ。

「……もう……いねえよ……」

ガニメデはそんな少女に悲しい表情を見せた。

「あいつは……もういねえんだ……」

それを聞いた少女は今度はガニメデに掴み掛かった。

「そんなことはないっ!!」

ガニメデは抵抗する素振りも見せず、再び口を開いた。

その瞳には、気丈に涙をこらえるエララの姿が映っていた。

「イメリアは精神分割を受けたんだよ……お前の知らない間にな……」

「……そんな……」

「だから……あいつはもう……いねえんだ」

「……うそ……だ……」

エララはガニメデから手を離し、絶望した様にへたりこんだ。

—パシユ—

「……ん？」

その時だった。

再びドアが開き、別の少女が現れた。

少女は部屋に入るなり、床にへたりこんだエララを目撃した。

「エララ！？大丈夫っ！？」

少女は慌ててエララに駆け寄った。

「カ…ルメ…？」

「何があつたの！？」

「私は…私は…もう…」

エララは少女の呼び掛けにも呆然としているだけだった。

エララが会話できない状態であることを悟った少女は、今度はガニメデに鋭い視線を送った。

「ガニメデ！！エララに何したの！！正直に言わないと許さない！！」

紫のショートカットの少女、カルメはガニメデに怒鳴った。

「……」

しかしガニメデは無言だった。

「ガニメデっ！！」

カルメは再びガニメデに向かって叫んだ。

「あいつは…」

ガニメデはそんなカルメから視線を反らし、険しい表情で言った。

「イメリアは精神分割で…記憶を失っちゃったんだよ…」

「っ!？」

それを聞いたカルメは驚愕に顔を歪め、イオに視線を送った。
そこには灰色の髪少年が無表情で佇んでいた。

「本当…なの？」

カルメはガニメデに問いかけた。

「ああ…」

ガニメデは静かに肯定した。

「エララ…」

カルメは屈み込み、エララの背中を優しく撫でた。

ガニメデはそんな様子から視線を反らし、切ない表情をしていた。

「先程から会話の意図が理解できない。説明を要求する」

そんな中、無言だったイオが口を開いた。

カルメはそんなイオを睨み付けた。

「あんた…本当に何も覚えてないの？」

「その質問に肯定する」

「エララのこと覚えてないの？」

「そうだ。全くわからない」

イオは無機質な口調で答えた。

それを聞いたエララは啞然とイオを見つめた。その白い頬に涙の線が流れた。

「あんた…」

それを間近で見たカルメは立ち上がり、イオに迫った。
その顔は怒りに歪められていた。

―バチン―

そして手を振りかぶり、イオの頬を思い切り叩いた。

「……」

「っ!？」

が、イオは無機質な表情を変えず、むしろガニメデの方が驚愕した。

「あんた、自分の言ってることの意味わかってんの!! 何で勝手なことしたのよ!! あんたのせいで!! あんたが!!」

カルメは感情を爆発させ、イオに掴み掛かった。

「もうやめろ!!」

ガニメデはそんなカルメを制止した。

「離しなさいよ!! あいつは許せないっ!!」

尚も暴れるカルメに対し、ガニメデは口調を変えた。

「いい加減にしろよ…」

「!？」

ガニメデの顔を見上げたカルメは口を閉じた。

カルメの見たガニメデの顔は、今まで見たことの無いものだった。

怒りに眉をひそめ、顔を歪めていた。が、その奥には大きな悲しみが見てとれた。

「……」

カルメはその顔を思わず無言で見つめた。

「こいつは悪くない。こいつは本当に何も覚えてない…いや…そもそも”こいつ”は”あいつ”じゃない。”あいつ”はもういないんだ」

ガニメデは静かに語った。その口調は、自らに言い聞かせているようにも聞こえた。

語っている横顔は、とても切なかった。

イオはそんな様子を無言で見つめていた。その蒼い瞳には感情は無かった。

「エララ…別のところこう。もう少し考える時間、いると思うから…」

そう言ってカルメはエララを支えながら部屋を後にした。部屋を出る瞬間、エララは一度だけイオに視線を送った。が、イオは無機質な瞳を向けているだけだった。

部屋にはガニメデとイオだけとなった。

重い雰囲気の中、イオはガニメデに問いかけた。

「なぜ彼女はあれ程驚愕していたのか不明だ。説明を要求する」

「彼女ってのはエララのことか？それともカルメのことか？」

「どちらもだ」

「カルメはまあ…エララがあんな状態だったからだろうな…。それに仲間のお前…いや、”あいつ”が記憶消失…というか、いなくなっちゃったんだからそりゃ驚くだろうよ…」

ガニメデはそこで区切り、口調を重くした。
その場の空気は更に重くなった。

「エララは……エララとお前じゃない”あいつ”はただの仲間ってだけの関係じゃなかったんだよ……。これ以上は自分で考えろ……」

「……」

イオは考えるように沈黙した。
部屋の中は再び静けさに支配された。

「さてっ」

そんな静寂を破るようにガニメデは殊更に明るい声を出した。

「んじゃま心機一転、一つ勝負といきますかね！」

「圧縮ZPE、右腕解放!!」

「っ!!」

ガニメデの右腕に収束したZPEがイオに向かって炸裂した。
咄嗟に防御したイオだったが、ZPEを受けた瞬間、爆音と共に吹き飛ばされた。

―ドサツ―

イオは人形のように壁に衝突し、床に倒れた。

「今回は俺の勝ちだな！イメリアのと通算すりゃ俺の135勝128敗だ！」

ガニメデはそんなイオに向かって満足気に言い放った。

2人は現在、別の部屋に移動していた。何も無い、ただ白いだけの広い部屋だった。

「次はちと環境を変えてみっかな」

ガニメデはそう呟き、壁の電子パネルに触れた。

その瞬間、白いだけの空間が突如として熱帯雨林へと変わった。

「この部屋はな、VR室だ。まあ要は仮想現実を作り出せる部屋だ。どんな環境でもバーチャルリアリティーとして再現できるらしいぜ。戦闘訓練にはもってこいだろ？」

ガニメデは口の端をつり上げた。

「……」

イオはそんなガニメデを無表情で見つめていた。

「んじゃ、2戦目といこうじゃねえかつ!!」

ガニメデは言い終わると同時にイオへ跳躍した。

「やあエウロパ。はかどってるかい？」

「スルトか……。全く、面倒事ばっか任せやがって」

人気の無いとある研究室に、2つの人影があった。

「すまないね。こう見えて私も多忙なんだ」

スルトは笑みを見せた。

「あたしも忙しいんだけどね」

それを見たエウロパはスルトに鋭い視線を送った。

「ハハハ。そう怒らないでくれ。君の仕事ぶりはきちんと理解しているつもりだよ」

対してスルトは気にした様子もなかった。

「ホント、あんたには敵わないよ…」

「ハハハ。誉めてもらえたと解釈させてもらうよ」

「勝手にしな」

エウロパは呆れ口調だった。

それを聞いたスルトは何時もの笑顔を見せた。
そして思い出した様に再び口を開いた。

「私はこれから”彼”の所へ行こうと思っているね」

「”あれ”の間違いじゃないのか？凍結したんだろ？しかも意識を残して…。さすがに悪趣味よ」

スルトは短く笑った。

「ククク。”彼”にはまだ働いてもらわないといけないからね」

「そう…」

エウロパは興味の無い様子で答えた。

「では”彼”に会ってくるとしよう。失礼するよ」

そう言い残してスルトは姿を消した。

———

生命の欠片も感じられない地下深く――
暗闇に閉ざされた最下層。

さらに幾重にも隔離されたその空間に、たった1人だけの少年が存在していた。

全身を鎖で幾重にも縛り付けられ、吊るされていた。

その赤い瞳からは命が消えていた。

その姿は、死んだも同然であった。

否、死ぬことも許されず、生きることすら許されないその姿は、死んでいるよりも悲惨であった。

「……………」

”イメリア！今度も俺の勝ちだな！！”

「……………」

”感謝するイメリア”

「……………」

”全くお前は…。相変わらずだなイメリア”

「っう！！」

”イメリア！待ってくれ！”

「ぐ…、や…めろ」

”考えは変わらないんだな？イメリア…”

「や…めろ…」

”イメリア。ありがとう”

「やめろおおお！！！！」

—ギィ—

「おやおや。記憶が甦ったみたいですね」

突然現れたスルトは平淡な口調で言った。

「貴様っ！？」

「フラッシュバックで苦しんでいるようですね。まあ一時的なもので直に収まりますよ」

「スルトおおお！！！！どの面下げて来やがったあああ！！！」

”被験体0000”は縛られながらも暴れて怒鳴った。

「何か勘違いしてませんか？精神分割は”貴方”が自ら受けたんですよ？」

「ふざけんなよ…。それは”あいつ”だ。”俺”と”あいつ”を一緒にするな！！」

「ああ。確かにそうでしたね。これは失礼」

被験体0000は声を低くした。

「てめえ…、俺に喧嘩売りに来たのか？」

「まさか。君には一つ、提案があつてね」

「提案…だと？」

「実は君に協力して欲しいことがあつてね。協力してくれれば、ここから解放してあげますよ？」

それを聞いた被験体0000は狂った様に笑い声を上げた。

「クハハハハハ！！」

スルトは僅かに眉をひそめた。

「何がおかしいのですか？」

被験体0000は笑い止み、深紅の瞳をスルトに向けた。

その視線は、見る者全てを射抜く程鋭かった。

「よくもまあそんなことが言えたもんだなあ…スルトさんよ？あ？」

被験体0000は怒りに顔を歪めた。

「好き放題やっておいて協力しろだと？ふざけんのもいい加減にし

ろよ：誰がてめえらなんか協力するんだ？俺が協力する訳ねえだろうが！！俺の視界からさっさと失せろ！！」

怒鳴る被験体0000を見て、スルトは背を向けた。
そしてその場から去った。

去る瞬間、スルトは一度足を止めて言った。

「また来ますよ。気が変わったら教えてくださいね」

スルトは振り返らずにそのまま歩いて行った。
その背中を、赤い双眼がじっと睨んでいた。

第40話「Second memory」(前書き)

こんにちは。

そして初めまして。

作者の「21番目の観測者」です。

毎度私の謎な小説を読んで頂いて感謝しています。

さて、更新についてなのですが、活動報告に書いたような事情で遅れてしまっています。

読者の皆様にはご迷惑をおかけしています。

きちんと完結を目指していますので暫くご辛抱ください。

話は変わりますして本編の内容についてですが：

37話から過去編に入っています。

どうでしょうか？

二次創作でありながらオリジナルばかりというのも問題だと思い、少し短くしています。

が、色々と主人公たちにとって重要な内容が含まれますのでもう少し我慢してください？

それに対して

「オリジナルは減らして欲しい」、逆に「オリジナル増やして欲しい」、「別にどっちでもいい」などのご意見がありましたらお気軽に感想に書いてください。

極力参考にさせて頂きます。

それでは、これからよろしくお願いいたします。

皆様に楽しんで頂ければ幸いです（▽）ノ

第40話「Second memory」

—機関機密情報—

—レベルE—

<被験体稼働状況>

・イオ0001

個体変更、正常稼働

・エウロパ0002

正常稼働

・ガニメデ0003

正常稼働

・カリスト0004

正常稼働

・アマルテア0005

正常稼働

・ヒマリア0006

正常稼働

・エララ0007

正常稼働

・パシファエ0008

量子化失敗、凍結

・シノーペ0009

量子化失敗、凍結

量子化失敗

量子化失敗

- カルメ
0011

正常稼働

- ・ アナソケ 0012

正常稼働

• レダ
0013

正常稼働

・テーベ 0014

該當無し

「ほら、自己紹介しろって」

ガニメデはイオを促した。

「イオ0001。以上だ」

イオは簡潔に名乗った。

その余りにもあっさりとした自己紹介にガニメデは苦笑いを浮かべた。

「おいおい…」

現在、イオにとっては初めてとなるジュピターシリーズのミーティングが開かれていた。

その場を利用し、イオは他のジュピターシリーズを前に自己紹介をしたのだった。

イオ以外の全員が椅子に座り、長いテーブルを囲っていた。

更に全員が同じ白い服を着ており、その光景は異様にも見てとれた。

「おいヒマリア。イオのやつ、なんか雰囲気違わないか？　というか見た目も変わってるぜ。まさか量子化か？」

青い短髪に青い瞳の青年、レダは隣に座るヒマリアに小声で尋ねた。ヒマリアは横目でレダを見た。

「違います。イオ、いえ…正確には”彼の前の”イオが精神分裂を受けたそうです」

「マジか!？」

レダは驚愕に目を見開いた。

「マジです。その際、記憶を失ってしまったそうです」

「そうだったのか…」

「はい。私も詳しくはわかりませんが、その様な事情があるそうです。彼はもう私達を覚えてはいません」

「……」

レダは神妙な面持ちでイオを見た。

視界に映る少年の姿は、何処か遠く見えた。

「実はな…イオは精神分裂を受けてな、記憶を完全に失っちゃったんだ…」

ガニメデは語る様に言った。それを聞いた一同にどよめきが起きた。

「まあそんな訳でな…。今居る中で、初対面のやつはとりあえず自己紹介してやってくれねえか？」

すると1人の少女が無言で立ち上がった。

その見た目は余りにも特徴的だった。

一番に目を引いたのはその水色の肌だった。

全身が淡い水色の肌で、更に髪と瞳が銀色であった。その長い髪は、まるで水銀が流れているようであった。

「アマルテア0005。以後よろしく頼む」

少女は簡潔に自己紹介し、直ぐに着席した。

その一連の動作からは、イオに似た冷たい印象を受けた。

「んじゃ次は俺かな」

次に青い髪青年、レダが立ち上がった。
イオの無機質な視線がレダに向かった。

「俺はレダ、レダ0013だ。まあ色々事情があるみたいだがよろしくな」

レダは僅かに笑みを見せ、再び椅子に腰掛けた。
それと入れ違いで、小さな少女が立ち上がった。

「……」

少女は無言でイオを見つめた。

その長く流れる金髪は地面の寸前まで伸びており、浅緑の瞳はじつとイオを捉えていた。

それは全てを見透かす様な不思議な視線だった。

「……」

イオも無機質な青い瞳を向けていた。
浅緑と深青の視線が暫し交錯した。

「：リシテア0010」

それだけ言うと、少女は何事も無かったかの様に着席した。

「次は私だな」

それを見計らった様に、1人の男が席を立った。
橙色の髪と同色の双瞳が印象的な長身の男だった。

「私はカリスト。正直、精神分割については驚いてるが…よろしくなイオ」

そう言ってカリストは着席した。

そして暫く間をおいてから、燃える様な赤髪の少女がゆっくりと立ち上がった。

その青い瞳は落ち着き無くイオを見ていた。
とても不安気で悲しい表情をしていた。

「…わ、私は…エララ0007だ」

それだけ言うと、逃げるように早々と着席した。

—バンツ—

一連の自己紹介を聞いていたカルメは突如、机を乱暴に叩きつけて立ち上がった。

透き通る肌を赤くし、整った顔を歪めていた。

「あたしは認めない!!」

紫色の巻き髪が揺れ、紅の瞳がイオを睨み付けた。

「そんなやつ、イオじゃない!!…行こうエララ」

「カルメ…」

そう言い放ち、エララの手を引いて部屋から走り去った。

そして部屋は重い沈黙に包まれた。

「……………」

が、そんな雰囲気を感じた様子もなく1人の女性が立ち上がった。黒い瞳に黒髪のショートカットが映える長身の若い女性だった。

「アナンケ0012。趣味は盆栽。以上」

そして事も無げに着席した。

「どんなタイミングで自己紹介してんだお前…」

レダは呆れた様にアナンケを見つめた。

「ん？なんだ？そんなに見つめられたら恥ずかしいじゃないか。責任取ってもらうぞ」

しかし、アナンケは場違いな発言を返した。

「っ！？だからお前は意味不明な爆弾発言してんじゃないやねえよ！」

レダは椅子から乗り出してアナンケに叫んだ。

「そうムキになるな。恥ずかしいのは私も同じだ」

アナンケはレダを上目遣いで見た。

「あゝっもう！！こいつとは会話ができねえ！！」

レダは頭を抱えた。

「コホンッ!!」

カリストは咳払いをした。

レダとアナンケは驚いたようにカリストに視線を向け、状況を理解して口を閉じた。

そして全員の注目がカリストに集まった。

「一応、先程出て行ってしまった彼女の紹介もしておこう。彼女はカルメ0011。決して悪いやつじゃないんだ。勘違いしないでやってくれ…エララのことです色々とな…」

カリストは難しい表情になった。

「まあそのことは置いてこうぜ」

そこにガニメデが声を掛けた。

「…そうだな」

「とりあえず全員の紹介は終わったか？」

「いや。エウロパが出席していない」

「あいつか…」

「後は全員終わったようだ」

「そうか」

ガニメデは部屋を見回した。

「じゃ、自己紹介も終わったことだし、本題に入るとするか」

そしてヒマリアに視線を向けた。

「そんな訳でヒマリア、始めてくれ。カルメとエララには俺から後で伝えておくからよ」

「了解しました」

それを聞いたヒマリアはおもむろに立ち上がり、全員の前へ出た。すると空中にスクリーンが現れた。

「では今回の機関任務についてのミーティングを始めます」

ヒマリアの言葉に反応し、スクリーンが切り替わった。

「今回跳躍する世界線は識別コードRCT154163174866N23117538MJ382 α 並びに β です。どちらも約50年前の過去近似世界線です」

ヒマリアは更に続けた。

「機関指定ナンバーは α がカリスト0004、エララ0007。 β がイオ0001、ガニメデ0003」

それを聞いたガニメデは驚きの声を上げた。

「ちょっと待て！イオも含まれてんのか？」

「はい。恐らくイオの実力を計る目的があるのだろうと思われます
…」

ヒマリアは複雑な表情になった。

「チッ。上の連中はやっぱりいけすかねえ…」

ガニメデは苦い表情で呟いた。

「話を戻します。任務内容は政府首脳を説得、ZPF技術部門への
資金を凍結すること。もし失敗した場合は忌線と認定、削除します」

「削除…」

イオは小さく繰り返した。

「要は世界線ごとバラバラにしちまうってことだ」

ガニメデはそんなイオに説明した。

「どの様な原理でそれが可能になるのか質問する」

「俺はあんま詳しくはねえが、ZPEには二種類あってな。それぞれ分離と統合のエネルギーとも言われるみたいだ。まあ平たく言やあ陰と陽、ネガティブとポジティブだ。因みに分離の方のZPEは一昔前までダークエネルギーとかって言われてたらしいぜ」

ガニメデは少し得意気な様子を見せた。

「理解した」

対してイオは無機質な表情を変えなかった。

「でまあダークエネルギーは宇宙を膨張させてる空間エネルギーと考えられてたが、要はそいつが分離のZPEだ。つまり分離のZPEは宇宙を膨張させる。そして膨張すると当然空間が広がる。物質と物質の間が広がる訳だ。つーことは、分離のZPEが極端に増えればその宇宙に存在する全ての物質は素粒子レベルでバラバラに分離される。わかるか？」

「問題ない」

「そうか。んじゃ続けるぜ。で、その分離のZPEの塊が存在してる……てか造り出された。この機関が製造したんだが……そいつの名称は、マーズシリーズ。フォボスとダイモスだ。最早存在は概念に近い。で、こいつらを削除したい世界線に放り込んだらどうなると思う？」

「その世界線はバラバラに分離される」

「その通り。めでたく削除って訳だ」

ガニメデはそう言って皮肉な笑みを見せた。

「……」

イオは無言だった。

「こら！ガニメデ！！説明している途中に私語をするな！！」

そんな2人に無視されていたヒマリアが非難の声を上げた。

「ああ悪い悪い。んじや続けてくれ」

が、ガニメデは反省の色も見せず、面倒くさそうに手をヒラヒラ揺らした。

それを見たヒマリアはため息をつき、説明を再開した。

「武力の行使は機関規約第3条2項に準じます。以上ですが何か質問はありますか？」

ヒマリアは辺りを見回し、質問が無いことを確認した。

「では以上でミーティングを終わります」

「また来ましたよ」

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

「おや？ ご機嫌が悪いようですね」

眼鏡越しに、スルトの皮肉な目つきが見てとれた。

「……」

被験体0000は無言だった。が、その瞳は相手を射殺さんとしていた。

「その様子だとフラッシュバックは収まったようですね」

「……」

「記憶が蘇ったご気分はいかがですかイメリア君？」

スルトは更に皮肉めいた口調になった。

「お前は……」

それに対し、被験体0000はようやく口を開いた。

「お前のやりたいことはわかってる。俺を激情させてディヴァインの反応をみたいんだろ？」

その発言にスルトの皮肉な表情が揺らいだ。

「てめえのやり口は見飽きたぜスルト」

今度は被験体0000が皮肉な笑みを見せた。

「なるほど……やはり君は一筋縄ではいきませんね」

スルトは下がった眼鏡を中指で持ち上げた。

「ククク。言ったろ？てめえのやり口は見飽きたってな」

「その様子では、やはり”イメリア君の”記憶が完全に戻っているようですね」

「ああ。お陰様で”他人の”記憶を散々植え付けられたぜ」

「ほう。やはり君はイメリア君を別人と捕らえるのですね」

「当たり前だ。たつぷりと記憶を見せられたが、映画を見てる気分だった。明らかに俺の記憶じゃねえ」

「なるほど。やはり情報場分割を精神分割と称するのは適切なのかもしれませんねえ」

スルトは1人で頷いた。

「そーいや”あっちの”奴はどうなってる？」

「あっち？」

スルトは聞き返した。

「俺じゃねえ方の分割された精神のことだ」

それを聞いたスルトは納得した表情になった。

「ああ。イオ君のことですね？」

被験体0000は眉間をひそめた。

「イオ？イメリアのことか？」

「違いますよ。今現在、”彼”がイオ0001のナンバーを受け継いでいるのです」

「ああ、そういうことかよ」

「我々に協力して頂けるならば、君にもテーベ0014のナンバーが用意されますよ？」

スルトは誘い口調で言ったが、被験体0000は口の端をつり上げた。

「遠慮させてもらうぜ。てめえらに協力する気は一切無い」

「そうですか。残念です」

スルトは肩をすくめ、それを見た被験者0000は鼻で笑った。

「そんなことより、”イオ”の方は俺みたいに閉じ込めとかねえでいいのか？」

「はい。君と違って暴れたりはしませんから」

被験者0000は再び鼻を鳴らした。

「お得意の皮肉か。いい加減飽きたぜ…。で、イオの奴は記憶がね

えんだろ？」

「ほう。やはりわかりますか」

「分割した片方が記憶持ってたからもう半分が空っぽなのは当然だろ」

「そのようですね。彼は記憶と感情を失っています」

その発言を聞いた被験体0000は怪訝な表情になった。

「どうかなさいましたか？」

その様子を見たスルトは問い掛けた。

「いや……何でもない」

が、被験体0000は適当に誤魔化した。
スルトはそんな様子を鋭い視線で見つめた。

「まあいいでしょう。今日はこの位にしておきます」

そう言って背を向けた。

「二度と来んな」

「クフフ。1人は寂しいですよ？」

「生憎、俺はそんな”感情”は持ち合わせてない」

「…そうですね」

スルトは一瞬振り返り、再び背を向けた。

「では、また」

そう言い残し、スルトはその場を去って行った。

—聞こえる—

—わたしには聞こえる—

泣いている

—あの人は泣いている—

—わたしと同じ：—

—寂しいの？—

— 苦しいの？ —

— つらいの？ —

— いいよ —

— たくさん泣いていいよ —

— 大丈夫 —

— あなたの声は —

— わたしにしか… —

— 聞こえてないから —

第41話「Night sky」

「さて…」

無限に存在する世界線の中の1つ、そこに音も無く2つの人影が現れた。

「んじゃ、さっさとターゲットのどこに行きますかね」

「……」

2人はおもむろに歩を進めた。

大臣はその日も書類に向き合っていた。書類の束にサインをし、次

の書類に手を伸ばす。

その動作を延々と繰り返していた。

「一息つくかね…」

そう呟き、大臣は老いた体を椅子に凭れさせた。

白髪を撫で上げて一つため息をつき、固まった体を伸ばした。

そうしてつかの間の間の休息をしていた時だった。

「!？」

音も無く、突如として視界に2人の男が現れた。

大臣は啞然と2人を見た。

「なんだ貴様らは!?!どこから入ってきた!?!」

大臣は老いた声を張り上げた。

「落ち着けよ。あんたに危害を加えるつもりはねえ」

男はやる気の無い口調で宣言した。

それを見た大臣は僅かに冷静さを取り戻した。

「何者だ?どこから入ってきた?」

「俺はガニメデ、話があって来た」

大臣は観察するように男を見た。次に、その隣の少年に視線を向けた。

2人とも白い服を身に纏い、こちらをじっと見ていた。

「話だと？」

聞き返されたガニメデは、大臣の机へ近づいた。

「ああ。この世界の存亡に関わる話だ」

ガニメデは真顔で言った。

それを聞いた大臣は一度目を見開き、次に笑い声を上げた。部屋の中に、老いた笑い声だけが響いた。

ひとしきり笑った後、大臣は呆れ口調で言った。

「何の冗談かね？」

が、ガニメデは表情を変えなかった。

「冗談じゃねえよじいさん。未来への警告だ」

「まだ言うのかね？ 全く、下らん」

大臣が言い終わった瞬間だった。

—ドンツ—

ガニメデは太い拳を振り上げ、勢い良く机に叩き付けた。重低音が響き、大臣は咄然とした表情となった。

「嘘や冗談じゃねえんだよ…」

ガニメデは唸るように低い声を出した。

部屋は静寂に包まれた。

暫く、誰も口をひらかなかつた。

大臣は男の目を見た。

そこには明確な怒りや疲労、そして絶望があった。

「いい加減にしたまえ。私は忙しい。早く出ていってくれ。守衛を呼ぶぞ」

しかし大臣は無視したように再び書類に手を伸ばした。

「そうかい……せいぜい後悔するんだな……」

そう言うと同時に男は姿を消した。

次に、間を置かずにもう1人の少年も消えた。

スルトはパネルを操作し、スクリーンに見入っていた。

「ふむ」

そのスクリーンには、黒髪の少年の姿があつた。

「やはり、彼は……」

そこまで言いかけた時だった。

スルトは突如背後に視線を感じ、スクリーンを消して振り返った。

「……………」

そこには無表情でこちらを見つめる背の低い少女がいた。

「おや？ リシテア君か。何か用かい？」

スルトは表情を一変させ、何時もの笑みを見せた。

「……………」

が、リシテアは反応せずに大きな薄緑の瞳でスルトをじっと見ていた。

その視線は、人の何か深い部分を見ているようだった。

「……地下」

リシテアは突如、単語を発した。

「地下がどうかしたのかい？」

対してスルトは表情を変えずに尋ねた。

「……行く」

リシテアは小さな声で答えた。

「ああ。地下に行きたいのかい？」

その問いかけに対し、リシテアは僅かに頷いた。

「でも、何しに行くんだい？」

スルトは再び問い掛けた。

「泣いてる人がいるから…」

「ん？」

「泣いてる人がいる…」

「ほお…」

スルトは興味深そうに呟いた。

「そこに泣いてる人がいるのかい？」

「……そう」

その返答を聞いたスルトは暫く考え込み、表情を戻して言った。

「いいですよ。その人のところへ行ってあげて下さい。ロックは解除しておきますよ」

それを聞いたリシテアは頷き、その場から歩いて行った。
まるで行く場所が、決められているかのように。

「これは興味深い事象ですね…」

その後ろ姿を見て、スルトは1人眩いた。

— — — — —

地下深く、少年は1人で考えていた。

自分は何者なのだろうか？と。

答えは見つから無かった。

否、存在しなかった。

それでも少年はつらいとは思わなかった。

否、思えなかった。

少年にはそもそも”感情”がなかった。

少年に許された感情はただ1つ。

それは、”怒り”だった。

少年は怒りを感じることはできなかった。

何をして怒りしか生まれなかった。

故に、少年の表情は全て記憶からきた”作り物”であった。

真の意味で笑うことなど、決してあり得なかった。

何をして怒りしか生まれえない。

それはどんな世界であろうか？

喜びたくても喜べず、泣きたくても泣けない。

あるのは常に怒りだけ。

そんな世界を、人は地獄と呼ぶのだろう。

「……………」

死んだ瞳を虚空に向け、思考は既に停止していた。

もう全てがどうでもいい、少年はそう思っていた。
怒りしか感じない。

それならば何も考えなければいい。

少年はそう思っていた。

これから起こる、”何か”を知らずに。

—ギィ—

重い扉が開く音が暗闇に響いた。

それを聞いた途端、少年はその方向へ鋭い視線を向けた。

「スルトおお！！二度と来んなった……あ？」

が、そこに見えたのは予想していた人物では無かった。

そこには、長い金髪の少女が佇んでいた。

「……てめえは誰だ？」

少年は低い声で尋ねた。

が、少女は反応せず、大きな瞳で少年をじっと見つめていた。

「……………」

少年は、その不思議な視線に眉をひそめた。

「何か言えよ……………」

「……………」

「……………」

そして2人の視線は交差した。

「……泣いてたから」

リシテアはようやく口を開いた。

「あ？」

「あなたが泣いてたから」

「俺が泣いてただと？」

「そう」

それを聞いた被験体0000は笑い声を上げた。

「フハハハハハッ!!」

が、リシテアは変わらずに少年を見続けた。

「馬鹿かてめえ？」

笑い止んだ被験体0000は低い声を出した。

「俺には悲しいなんて”感情”はねえんだよ……。俺にある感情はただ1つ……」

被験体0000は感情の無い瞳でリシテアを見た。

「”怒り”だけだ」

被験体0000は自嘲の笑みを見せた。

「知ってる」

が、リシテアはそれを肯定した。

「だから…」

「……？」

「だから…あなたに感情を分けてあげる」

「お前何言って……」

被験体0000は驚愕した。

少女の瞳を見た瞬間、言葉では形容できない膨大な”何か”が流れ込んできた。

「ぐあああああああああああ！！！！！！」

それは少年の体を駆け巡り、凍り付いた何かを一瞬で溶かした。

少年の中で、停止していた時間が回り始めた。

リシテアは、そんな少年を無言で見つめ続けた。

「な…んだ…こ…れ…」

少年は呆然と呟いた。

「どうかしたのかエララ？さっきから上の空だぞ」

カリストは心配そうに尋ねた。

「私は大丈夫だ…」

エララの表情は、発言とは完全に違っていた。

「イオのことだな」

「っ!？」

その単語にエララは過剰に反応した。

「やはりな…」

それを見たカリストは納得したように呟いた。

「ち、違う!! 私はあやつのことなど何とも思っておらん!!」

エララは声を荒げて反論した。

「その反応は肯定してるも同然だぞ、エララ」

「……」

エララは視線を下に向けた。赤いポニーテールが僅かに揺れた。

「私に言えることはあまりないが…」

そこでカリストは言葉を区切り、空を見上げた。

「イオはイオだ。あいつと重ねて見ない方がいいぞ」

エララは視線を上げ、カリストの横顔を見た。

空を見上げたその顔からは、感情を読み取ることはできなかった。

「そろそろ戻った方がいいだろう。この忌線は、もうすぐ消える…」

「そう…だな…」

エララも空を見上げた。

もう二度と見ることができないであろう、その青い空を。

「スルト、報告がきてる」

エウロパはスルトに書類を渡した。

「ありがとう」

スルトはそう言って受け取り、中身に目を通した。

「また忌線のようなだね」

「いつものことでしょ」

エウロパは興味無い様子で言った。

「まあそうだね」

スルトも大した感情は見せなかった。

「では、削除するでしょう」

スルトは軽い口調で言った。

「それより、地下に通してよかったのか？」

「何の話だい？」

「惚けても無駄なのはわかってるんじゃない？リシテアのことよ」

「さすがエウロパ君。情報収集が早いね」

「早く答えてくれない？」

スルトは不敵な笑みを見せた。

「ハハハ。わかったよ。彼女のことだね？」

「通してよかったの？」

「問題無いよ。むしろ興味深い事象を確認できた」

「興味深い事象？まさか”あいつ”に関係したこと？」

「どうかな？まだ確証は無いね。分析でき次第、君にも話すよ」

「そう。期待しないで待ってるわ」

そう言ってエウロパは別の仕事へ戻って行った。

「きっと、君も喜んでくれると思うよ」

スルトの小さな笑い声が響いた。

「おいイオ」

「何だ？」

「お前は思う？」

「何をだ？」

「この空だよ…」

ガニメデは夜空を見上げた。

暗闇の中、星たちが静かに輝いていた。

「……」

イオも夜空を見上げた。

「この夜空も、もう見れなくなっちまうんだろうなあ…」

ガニメデはまるで一人言のように言った。

「……」

イオは無言で夜空を見つめていた。

「お前は始めてかもしれないが…実は、俺は何度もさっきのじいさんの説得をしてきたんだよ。まあ”別の世界の”だが。しかももう

”削除”されちまってるがな」

「……」

「その度に、こうやって聞く耳すら立ててもらえねえのさ」

「……」

「救えた世界はまだ1つもねえんだ…正直、俺は疲れたぜ」

「……」

「俺たちは何をしようとしてんのかねえ…」

「……」

「世界を渡っては削除し、また渡っては削除し…」

「……」

「何のために量子存在になったんだかな…」

「…無駄ではない」

今まで沈黙していたイオが口を開いた。

「ん？」

ガニメデはイオへ視線を向けた。

「…意味は…ある」

イオは夜空を見上げたまま呟いた。

「ハッ。そうだよな」

ガニメデは口の端をつり上げた。

「俺たちが弱気になってどうすんだかな」

ガニメデは再び視線を夜空に戻した。
その横顔は、何処か嬉しそうだった。

「さて、そろそろおいとまするか。あんま長居すると、この世界ごと削除されちゃうしな」

地面に座っていたガニメデは立ち上がった。

「了解した」

イオもそれに続いた。

そうして2人は、その世界から消えた。
残された世界は、とても静かだった。

第42話「Ruined feeling」

「……………」

エゼは夜空を見上げていた。

「あの…」

そこへ暦が声を掛けた。

「……………」

が、エゼには聞こえていないようだった。

「あの！」

暦は少し声を張り上げた。

「…んあ？」

エゼはようやく反応した。

「夕食、食べないんですか？」

暦はエゼに問いかけた。

「だから俺は食べる必要がねえんだって」

エゼは夜空を見上げたまま答えた。

「必要が無いってことは、別に食べれない訳じゃないんですよね？」

「…まあな」

「じゃあ食べましょうよ」

「なんで俺がお前らと…」

「一応、仲間だし…」

暦は少し吃りながら答えた。

それを聞いたエゼは僅に表情を変え、暦に視線を向けた。

「仲間、か…」

しかし、暦にはその表情から感情を読み取る術はなかった。

「来ないんですか？」

「はいはい…んじゃ、行ってやるよ」

エゼはテラスの椅子から腰を上げた。

日頃から言うことを聞かないエゼの、その余りにも素直な動きに暦は驚愕の表情になった。

「え!？」

それを聞いたエゼは、途端に不機嫌そうになった。

「こらガニメデ！！お前さっきも肉食べたろ！！」

「るせえなヒマリア！！お前はダイエットした方がいんじゃないかねのか？」

「な！？何を！？私はきっちり自己管理している！！それよりお前の無駄な筋肉こそ不要ではないか？」

「んだとおおこのガミガミ女ああ！！」

「では間をとって、私が頂くとしよう」

「ちょ！？まてアナンケ！！そいつは俺のだ！！」

「違う！！元々私の分だ！！」

食事の時間、テーブルの上ではガニメデ、ヒマリア、アナンケが料理をめぐって無駄な争いをしていた。
そんな光景にレダはため息をついた。

「座る場所間違えたな。今度からこいつらとは離れて座ろう」

そう言って他の場所を見た。

「カルメ。そのオレンジのは何だ？」

カリストはカルメに尋ねた。

「え？これ？」

カルメは食べようとしていた物をカリストに見せた。

「これはねえ、ミカンって言うんだ」

「そうなのか」

カリストは興味深そうに蜜柑を見つめた。

「食べる？」

「いいのか？」

「一個だけなら」

カルメは蜜柑のひとつきを差し出した。

カリストはそれを受け取り、しばらく観察してから口に含んだ。

「っ!!」

そして驚愕の表情になった。

「どう？」

カルメはカリストの顔を覗き込んだ。

「これは美味しい…」

「よかった」

カルメは笑顔を見せた。

「しかし、どこで入手したんだ？ 私は始めて見たぞ」

「えへへ。これはね、裏ルートで買ってきたんだよ。果物なんて中々手に入らないし、高かったんだから」

「そうだったのか。私も今度買うとするかな」

「そんなに気に入ったの？」

「ああ。程よい甘味と酸味。口の中で弾ける食感…全く素晴らしい…」

カリストは感嘆した。

「そ、そう…」

カルメはそんなカリストを若干引き気味に見た。

「まあ確かになんかあんたの髪の色とかも同じ色してるしね」

カルメはよくわからない理由で納得した。

そんな2人の隣は、なんとも微妙な雰囲気となっていた。

「……………」

「……………」

イオは無言で料理を見続け、その隣のアマルテアも無言で料理に手をつけていた。

その正面のエララは何処かきこちなく料理を口に運び、その隣のリシテアは無言で料理を食べていた。

そんな様子を見たレダは苦笑いした。

「あっちはあっちで座りたくねえな…」

「議長、例の資料です」

スルトは書類の束を差し出した。

「うむ。ご苦勞」

それを、議長と呼ばれた男がおもむろに受け取った。男の髪は初老を思わせる白髪と黒髪が混じっており、波のように形を整えられていた。

年は40代位に見え、威厳を湛えて椅子に深く凭れていた。その姿は、若さを残しながら、初老の威厳も持ち合わせていた。

「スルト主任、計画は順調なんだろうか？」

議長はスルトに鋭い目を向けた。

「勿論です。EXODUSは確実に成功させます」

「当然だ。我々にはもう後がない」

「心得ています」

「だいいいのだがな…」

議長は椅子を回し、窓へ体を向けた。そこには灰色の空が広がっていた。

「それで、例の世界線の調査はどうなっている？」

議長は空を見たまま言った。

「ゲートの出力は依然として低いままで。量子存在以外を送り込む数に限度があり、調査は難航しています」

「言い訳など聞いていない。サターンシリーズを破壊し得る存在が確認された世界線だ。早急な調査が必要なのはわかっているだろう

「？」

「はい。作業をさらに急がせます」

「前回も同じことを言っていたぞスルト主任。言葉だけでなく結果で応えたまえ」

「了解しました」

「まあいい…。それより、ジュピターどもの精神制御はどうなっている？」

「ナンバー0001の精神制御を行い、感情を完全に削除することに成功しました」

「そうか。ならば他の奴らも早く”処理”したまえ」

「その件についてですが、他シリーズには既にナンバー0001が、精神分割によって感情と記憶を失ったことが知らされているようです。おそらく拒否するかと…」

議長は苦々しい表情を見せた。

「無理矢理に処理して暴れられても困るか…。全く、力ばかり持っているゴミどもだ」

「やはりサターンシリーズの製造が急がれるかと」

「そのような。現在の稼働状況はどうなっている？」

「試作体ミマス0001は損失。エンケラドウス0002、テティス0003までの製造が完了しています」

「遅い。ミマスが破壊されたのだぞ。あの世界線を制圧するには到底足りん。製造を急げ」

「了解しました」

「全く：とんだ世界線に当たってしまったな」

議長は皮肉めいた笑みを見せた。

「同感です。ミマスの破壊は想定していませんでした」

「過去を見ても仕方ない。今は戦力を増やすことを最優先にしろ」

「了解です」

「以上だ。もう下がって構わん」

「では失礼します」

スルトは一度礼をし、部屋から退室した。

「お前、また来たのか？」

少年は、小さな少女に向かって言った。
少女は短く頷いた。

「全く…わざわざこんなところまで来て、一体何が楽しいのやら」

被験体0000は半ば呆れ口調だった。

「話…したいから」

リシテアは真っ直ぐに被験体0000を見つめた。

「俺と話して楽しい奴がいるとすれば、そいつは相当頭がおかしいな」

「…そう」

リシテアは僅かに寂しそうな表情になった。

「う…。そんな顔することあねえだろ…」

それを見た被験体0000は気まずそうに呟いた。

「……………」

が、リシテアは表情を変えなかった。

「ああもう！悪かったよ！冗談だ冗談！！」

被験体0000はしびれを切らしたように叫んだ。

「そう」

リシテアはそんな様子を静かに見つめた。その表情は、何処か楽しそうだった。

「本当に調子狂うぜ…」

「そう」

「てか無理に感情共有しなくてもいいんだぜ。その能力使うのつらいんだろ？」

「大丈夫」

「大丈夫って…本当か？」

リシテアは頷いた。

金色の前髪が静かに揺れた。

「そうか…まあお前がその能力を常に使ってるお蔭で、俺は感情を一時的にだがり戻している。だから…その…なんだ…」

被験体0000は照れたように視線を反らした。

「ありがとう」

そして初めて感謝の言葉を口にした。

それを聞いたリシテアは嬉しそうに頷き、笑顔を見せた。
とても綺麗な笑顔を。

”第8ドームへの侵攻、第一段階完了”

「よし！！このまま全戦力を注ぎ込め！！世界選択機関を壊滅させてやれ！！」

”あれは！？”

「何だ？どうした？」

” ジュ、ジュピターシリーズです！！繰り返します！！ジュピターシリーズが敵の増援に現れました！！て、撤退します！！”

「落ち着け。今回は奴らの好きにはさせん。例の特殊武装で交戦しろ！！」

” し、しかし相手はあのジュピターシリーズです！！勝算はありません！！撤退命令を！！”

「大丈夫だ。今回の装備が奴らに有効であることは保証されている。全軍突撃せよ！！」

—バンバンバンバン—

「質問する」

イオはガニメデに向かって言った。

「ん？何だ？」

「先程からドームの外で爆発音がしているが何だ？」

「ああ。ありゃ七都市連合軍の砲撃だな」

「七都市連合軍とは何だ？」

「ああ、そーいや話してなかったな。ここが第8ドームなのは知ってるだろ？」

「理解している。機関が造り上げた最新のドームだ」

「そうそう。んで、ドームは他にも第1から第7まであってな。そいつらが合同で組織した戦力を七都市連合軍つーんだ」

「理解した。しかし、なぜ砲撃をしているのか不明だ」

「あいつらはここに向かって砲撃してんだよ」

ガニメデは鼻を鳴らした。

「理由を質問する」

「簡単なことさ。カタストロフィーの後、ZPF技術は全て禁止された。あるいみ当然だな。なんせカタストロフィー起こした元凶な

んだからよ…。だが、機関はそれを破ってZPF技術を研究してる訳だ。なら攻撃されても不思議はないだろう？」

「総力戦において、機関は不利だと予想する」

「まあ確かに、カタストロフィーの後からこの星は不毛の土地になっちまったからな…」この”資源は圧倒的に足りないさ。まあそりゃ相手も同じことだがな」

ガニメデは僅かに笑った。

「だが機関側には無尽蔵のエネルギーであるZPE、それにZPF技術がある。だから機関が敗北したことは一度も無い。それに戦力ならあるだろう？とっておきのがよ」

そう言った後、ガニメデは不敵な笑みを見せた。

「量子存在つつう戦力がな」

「議長、報告通り七都市連合軍が侵攻を始めました」

スルトはスクリーン上の戦場を見て報告した。

「そうか。ならば絶好の機会だ。計画通りにジュピターシリーズどもを出せ」

議長は笑みを見せた。

「了解。ジュピターシリーズ全機に出撃命令を出します」

「本当に上手くいくのだろうか？」

議長はスルトに疑惑をはらんだ視線を送った。

「勿論です。これで計画への障害を減らせることでしょう」

「ならば期待させてもらうぞスルト主任」

「お任せください」

スルトは不気味な笑みを見せた。

七都市連合は第8ドームを包囲し、砲撃を行っていた。
が、その全ては第8ドームを囲む巨大な情報障壁に遮られていた。

「なあ…また機関の奴らと戦うのか？」

待機している1人の兵士がぼやいた。

「ああ。そうらしいな…」

話し掛けられた隣の兵士は何処か呆然と答えた。

「また”あいつら”が出てきたらもう終わりだ…あんな化け物とどうやって戦えって言うんだよ…」

「それについて、上層部は対抗できる新装備を完成させたらしい」

「そんなもんで”あいつら”を倒せるのか？」

「わからない。が、それなりの効果が…」

”ジュピターシリーズを確認。これより交戦を開始する。繰り返す。
ジュピターシリーズを確認。これより交戦を開始する”

会話の途中で無線から連絡が入った。

それを合図に、兵士達は一斉に戦場へ駆けて行った。
そして戦いが始まった。

滅びた惑星上に、さらなる滅びをもたらす戦いが。

第43話「Snowy chord」

辺りは焦土と化していた。生命は欠片までも消え失せ、赤い大地がどこまでも続いていた。

「まあこんなもんか」

ガニメデは辺りを見回した。

そこには装甲車の残骸や、息絶えた兵士の姿があるばかりだった。彼らはガニメデに傷一つ付けられなかった。

そう、全ての攻撃は情報障壁の前に無力だった。放った弾は尽く障壁に弾かれていた。その間にガニメデは座標転移で接近し、全てを叩き壊していった。

その結果、呆気ないほど早々と決着が着いてしまっていた。

他の場所ではまだ戦闘が行われているのか、まだあちらこちらで煙が上がり、時折爆発音も響いていた。

「おいスルト。こっちは片付いたぜ」

そんな中、ガニメデはZPF通信を起動した。

”ご苦労様。そのままそこで待機していてくれ”

「ここですか？」

”そうだよ。じゃあ失礼するよ”

そこでスルトからの通信が切れた。

（スルトの奴：こんな所に待機させやがって：一体何を考えてやる…？）

ガニメデは怪訝な表情で1人、赤い大地に佇んでいた。

「こちらエララ0007。戦闘終了、敵を排除した」

”ありがとうエララ君。そのままそこで待機していてくれ”

「了解」

通信が終わり、エララは指令通りに待機した。

その手には不気味なほど深紅に染まった鎌があった。

エララはふと地平線に目を向けた。

赤い大地と灰色の空の境界線が緩やかな弧を描いていた。

それを見たエララは、何処か不気味に感じた。

その時だった。

”エララ！！聞こえるか！！”

ガニメデから通信が入った。その声は切迫した状態であることを物語っていた。

「どうしたのだ!？」

エララも緊迫した口調で返答した。

” 新手が来やがった!!! こいつらアンチディヴァインを使ってやがる!!! ”

エララは通信の内容に驚愕した。

なぜなら、あり得ないはずの単語が聞こえてきたからだった。

アンチディヴァイン―それは機関のみが造ることができるもの。

アンチディヴァインの前では量子存在もただの” 人 ” に過ぎなかった―そう、” 例外 ” を除いては。

故に嚴重に管理され、機関だけが所有しているはずであつた。

ましてや、敵の手に渡っているなどあり得ないことだつた。

「アンチディヴァインだと!？」

エララは自らの耳を疑って聞き返した。

” 弾薬にアンチディヴァインが装填されてる!!! こいつに撃たれたら情報障壁を貫通されちゃう!!! お前も増援に気をつけろ!!! ぐっ!!! ”

「大丈夫かガニメデ!!!」

” 悪いが通信してる余裕はねえ!!! 切るぞ!!! ”

そこでガニメデからの通信は途絶えた。

（そんなバカな…）

エララは未だに信じ切れず、その場に呆然と立ち尽くした。
が、突如不吉な予感に苛まれて我にかえった。

「っ!？」

その瞬間、エララはとっさに座標転移した。

—シュン—

（これは!？アンチディヴァインの銃弾!！）

時間差を空けず、先程エララがいた場所を銃弾が風を切りながら通り過ぎた。

「くっ!！」

が、銃弾は止まらずに再びエララに迫った。

（長遠距離からの狙撃か!！相手が見えん!！）

エララは座標転移で回避していたが、銃弾はその転移先を予期していたように撃ち込まれた。

「しまっ!！」

そしてそのうちの一発がエララに迫った。

エララは咄嗟に深紅の鎌を盾にし、弾丸を弾いた。
弾はエララの体を反れ、地面に着弾した。

―パリンッ―

が、その代償として鎌がガラスのように砕け散った。

「私のディヴァインが…」

それを間近で見たエララは、信じられないものを見るように啞然と
眩いた。

「っ！！」

その隙が命取りだった。

気付けば弾は一斉に放たれていた。

最早回避する時間は残されていなかった。

エララに、無数の弾線が収束した。

「ディヴァイン第三解放」

―パリンッ―

しかし突如、エララの目の前に白い壁が現れた。

よく見れば白い剣が無数に集まって壁を作っていた。

弾は壁を砕いたが、軌道が反れたためにエララには被弾しなかった。

「離脱する」

エララは声の方へ振り返った。

「イオ…？」

そこには無表情で佇む灰色の髪の少年がいた。

「勝算はない。離脱する」

次の瞬間、エララとイオはその場から姿を消した。

「また来たのか…」

被験体0000はリシテアを見て呆れ顔になった。

「さっきから砲撃がうるせえし、出撃命令出たんじゃないのか？お前は行かないでいいのか？」

「私は…戦えないから…」

リシテアは俯き加減に答えた。

「ああ、そうだったな。てかお前リシテアだよな？量子化したのか？見た目が変わってるから気づかなかったぜ」

「そう…でも失敗…」

「失敗？量子化に失敗したのか？」

「そう…この能力も…その時…」

被験体0000は納得した表情になった。

「なるほどな。お前は前から情報障壁を展開できなかったしな…量子化が失敗してもおかしくはない」

「だから…私は出るなって…」

被験体0000は鼻を鳴らした。

「スルトにでも言われたんだろ？まあ確かに今出て行っても無駄死にするだけだろうな」

被験体0000はからかうように笑った。

「だから…お願い」

しかし、リシテアは表情を変えなかった。

「お願い？」

被験体0000は聞き返した。

「みんなを…」

「助けてるか？」

その問い掛けにリシテアは頷いた。
それを見た被験体0000は短く笑った。

「所詮は都市軍だろ？ あいつらがやられる訳はねえよ」

「今回は…違う」

「違う？」

「アンチディヴァインを使ってる…」

「何だと!？」

被験体0000は初めて焦った表情になった。

「だから…みんなが危ない」

リシテアは被験体0000を真っ直ぐに見つめた。

「悪いが俺を買いかぶり過ぎだ。アンチディヴァインの前では俺だって無力だ。助けらんねえよ」

が、被験体0000は冷たく言い放った。

それを聞いたリシテアは少し鋭い視線で被験体0000を見つめた。

「うそつき」

「な!？」

リシテアの呟いた一言に被験体0000は動揺を見せた。

「あなたは一番強い…あなたには”あれ”がある」

その発言に、被験体0000は眉をひそめた。

「お前…何故それを知っている？」

問われたリシテアは相手の目を真っ直ぐに見た。

「わたしはあなただから」

「……………」

被験体0000は怪訝な表情を深めた。

そしてリシテアの瞳を見つめ返した。

その瞳を見ていると、吸い込まれるような錯覚に陥った。

「まあ意味わかんねえが…わかったよ。お願い通り、まとめて助けてやる」

それを聞いたリシテアは明るい笑顔を見せた。

「ありがとう」

それを見た被験体0000は少し顔を赤らめて視線を反らした。

「ま、まあ気にするな。だが、俺はまだ一度も使ってない。本当に俺に出来るかはわからない」

「大丈夫」

「軽く言ってくれるな…。まあやるだけやるが…まずはこっから出ないことにはな…」

被験体0000は自らの体を見た。

幾重にも鎖が縛り付けられ、両手両足が吊るされて使えない状態だった。

その姿は、マリオネットのようだった。

「今さらだが…これはひどいな…しかもこの鎖、アンチダイヴァインだな」

「でも大丈夫…あなたには出来る…」

リシテアは確信したように言った。

それを聞いた被験体0000は口の端を吊り上げた。

「そこまで言われたら失敗できねえな…じゃあやってやろうかね。リシテア、少し離れてろ」

リシテアは言われた通りに後退りして距離を空けた。

それを確認した被験体0000はゆっくりと目を閉じた。

「さて、始めるか」

カリストは焦っていた。

「クソッ!!」

体を地面に伏せ、長銃を構えていた。

長銃からは大量の閃光が放たれ続けていた。

照準の先には、敵の銃弾を必死に回避しているカルメとアマルテアの姿があった。

カリストは先程から、2人に迫る敵の銃弾を自らの放つ銃弾で撃ち落とすという荒業を成し遂げていた。

（数が多い!!）

しかし、それも限界が迫っていた。

徐々に敵の攻撃が増え、カリスト1人では2人をカバーしきれなくなってきた。

（このままではもたない!!）

カリストは思考しながらも、その指は決して止まらなかった。

そしていよいよ拮抗が崩れようとしたその時だった。

突如として背後から爆音が響いた。

それと同時に、莫大なZPEの流れを感じた。

「っ!？」

間を空けず、黒い”何か”が飛来した。

「何が起きたんだ!？」

ガニメデは視線を一瞬第8ドームへ向けた。

「!!」

そこには、一部が炎上しているドームがあった。

しかし、それよりも目を引くものがあった。

それは、空を覆う程の黒い”剣”だった。

まるで生き物のように天に向かって聳え立ち、上空に広がっていた。

「”あいつ”なのか…?」

それを見たガニメデは、回避も忘れて呟いた。

「マジかよ…」

次の刹那、全ての剣が放たれた。

その光景を見た者は決して忘れないであろう。

― 赤い大地に、黒い豪雨が降り注いだ光景を―

ガニメデが見たのは、黒い剣が塊となって四方八方に飛散する光景だった。

辺りには、大量の剣が風を切る轟音が響き渡った。

それは、正に水平に降る黒い雨だった。

剣は迷いなく自らの敵に迫り、その尽くを破壊した。

全てが終わった後に残ったのは、赤い大地に黒い剣が無数に突き刺さった光景だった。

「う…やはりドームの外は寒いな…」

エララは体を縮めて呟いた。呟いた息は白く、気温の低さを物語っていた。

その隣には、周囲を警戒しているイオの姿があった。

あの後、2人はイオの長距離転移によって知らない土地に飛ばされていた。

そこはカタストロフィーが起きる前に繁栄していたであろう高層都市郡の廃墟だった。

無数の溶けた鉄筋コンクリートと破片を見ると、カタストロフィーの悲惨さが実感できた。文明が一瞬で灰と化した様子が生々しく浮き彫りになっていた。

その廃墟に雪が降り積もり、辺りは銀色の世界が広がっていた。
2人は、かろうじて原形をとどめている建物の中に入り、寒さから身を守っていた。

エララは床に座り、イオは立ったまま窓の外を警戒していた。

―サツ―

イオは無言で自らの着ていた上着をエララに差し出した。

「…え？」

エララは驚いたようにイオを見上げた。

「寒いのなら必要だと判断した」

イオは外を見つめたまま言った。

それを聞いたエララはしばらく呆然としていたが、思い出したように口を開いた。

「それではお前が冷えてしまうであろう！？わ、私は大丈夫だ！」

エララは顔を僅かに赤らめて叫んだ。

「俺は寒くてもつらいとは思わない」

イオは上着をエララに投げた。

「……」

エララはその白いコートを受け取り、無言で羽織った。

「ありがとう…イオ…」

エララは寂しそうに言った。

「気にするな」

対して、イオは相変わらずな口調で応えた。
そして2人は沈黙した。
窓の外では、雪が静かに降っていた。

「そういえばZPF通信は使えぬのか？」

エララは思い出したように尋ねた。

「現在使用不可能だ。ジュピターにも影響が出ている。現在地を測定できない。アンチダイヴァインの影響だと予想する」

イオは機械的に答えた。

「そうか…」

それを聞いたエララは俯いた。

「すまない」

イオは突如謝罪した。

「何なのだ？突然？」

エララはそんなイオに問い掛けた。
するとイオは理由を説明し出した。

「長距離転移は座標誤差が大きい。障害物の回避には成功したが、指定座標から大きくそれてしまった。その結果、現状のようになっている。故に謝罪した」

「なぜ謝罪する？むしろ私は感謝しているのだぞ？お前が助けくれねば、あの時に私はアンチディヴァインに貫かれていたであろう…。長距離転移以外には方法は無かったのだしな…。お前は悪い。悪いのは私だ：」

エララは気を落としたように言った。

イオはその姿を横目で見た。

「…一般的にあなたは綺麗だと予想される」

イオはエララを見て、何処かぎこちなく言った。

「なっ!？」

エララは、その突然の発言に動揺した。

その様子を見たイオは、再びぎこちなく口を開いた。

「すまない。このような場合、相手に何を言えば良いのか不明だった…」

それを聞いたエララは、少し考えてから尋ねた。

「ひょっとして、私を慰めようとしてくれたのか？」

「その推測を肯定する…」

イオは僅かに表情を変えて答えた。
それを見たエララは笑みを見せた。

「フフフ。お前らしい慰め方だな」

「……すまない」

「謝らなくてよい。嬉しかったぞイオ。ありがとう」

エララは再び笑顔を見せた。

「…そうか」

そう言ってイオは再び窓の外へ視線を向けた。

その動作は、何時もより少しぎこちなく見えた。

（イオ：私はイメリアとお前を重ねていたようだ…だが、お前は
前なのだな…）

その姿を見て、エララは僅かに寂しそうに微笑んだ。

窓からは、銀色の世界が見えた。

雪は、依然として降り続きそうであった。

第44話「Nocturnal breeze」

「紹介するよ。彼はティーベ0014。都市軍を壊滅してくれたのは彼だ」

スルトは、帰還したジュピターシリーズを前に”被験体0000”を紹介した。

名前というのは利便性を求めた記号であり、他者に認識されて初めて意味をなす。

故にこの瞬間、被験体0000はティーベ0014という名前を与えられた。

”ティーベ0014”は機関の白い服を着て、やる気のない表情をしていた。

「イメリア!？」

見間違うはずもない黒髪と紅の瞳―その姿を見たカルメは驚愕したように叫んだ。

「おいてめえ…」

が、その名前を聞いたとたんにティーベはカルメに貫くような視線を向けた。

「次にその名前で呼んでみる…その時は…」

そして、見る者を凍り付かせる程に冷たい表情を見せた。それを見たカルメは一步後退りし、顔を引きつらせた。

「命は無いと思え」

テーベの声は決して大きくはなかった。
が、その迫力に全員が沈黙した。

「俺はイメリアでもなければイオでもない」

そしてテーベは不気味な笑みを浮かべた。

その表情は、とても常人とは思えないものだった。

「俺はテーベだ」

「今回の失態はどう償うつもりかねスルト主任？何のためにアンチ
ディヴァインの情報を漏洩させたと思っている？ジュピターどもは
確認が取れないナンバー00001と00007を除いて全て健在、オ
マケにテーベ0014の件ときたものだ…。全く頭が痛くなるな」

議長は椅子に凭れながらスルトに鋭い視線を送った。

「弁解の余地ありません。全て私の責任です」

スルトは無表情で答えた。

「やれやれ。君には期待していたのだがね……。まあいいだろう。それよりも、こうなってしまった元凶の”処理”は考えてあるのだろうか？」

「はい。ティーベ0014は再凍結し、ティーベ0014を覚醒させたリシテア0010を”処分”します」

スルトは感情のない口調で答えた。

「リシテア0010か。感情に干渉する為に”改良”したが、まさかこんなことになるとはな。非常に危険な存在だ。早期に”処分”したまえ」

「了解しました」

スルトは下がった眼鏡を中指で持ち上げた。

「おい：ティーベ」

ガニメデは黒髪の少年に呼び掛けた。

「何だ？」

テーベは面倒くさそうな表情で答えた。

「お前、イメリアの記憶を持ってるんだろ？」

「ああ。だからどうした？俺にとったら”他人”の記憶だ」

「そうか…」

ガニメデはテーベから視線を反らした。

「話は終わりか？」

「…ああ。わざわざ悪かったな」

そう言ってガニメデはテーベに背を向けた。

（やっぱり”あいつ”はもういねえんだな…）

「では今から緊急のミーティングを始めます」

ヒマリアはジュピターシリーズを前に宣言し、全員の視線がヒマリアに収束した。その中にはテーベの姿もあった。

「まずは機関から提示された概略を説明します」

ヒマリアの説明に合わせ、スクリーンが空中に投影された。

「機関からの指令内容は、行方不明のイオ0001とエララ0007の搜索。2人を連れ戻すことです」

その時、突然笑い声が響いた。

「クハハハッ！」

全員がその声の方に視線を向けた。

そこには口の端を不敵につり上げるテーベの姿があった。

「ククク。」 あいつ”は迷子になってんのかよ。こいつはウケる」

その発言に、非難の視線が集まった。

「テーベ0014、私語は慎んでください」

が、ヒマリアは冷静な口調でテーベに言い放った。

「何だヒマリア？随分と冷たいじゃねえか。”あいつ”とはえらい違いだな」

「それは今関係の無いことです。説明を続けます」

テーベは鼻を鳴らした。

「勝手に進めろよ」

テーベの挑発的な発言に一部の者は嫌悪感を露にしたが、ヒマリアは表情を変えなかった。

「2人は長距離座標転移をしたものと推測され、座標が特定されていません。また、アンチディヴァインの影響でジュピターシステムにジャミングがかかり、2人の座標を確認できません」

ヒマリアは全員を見回した。

「そのため、かなりの広域を区画に区切って探索することになります。ただし、都市軍が攻めてきた場合に備えて防衛の戦力もこのドームに残しておきます。機関から待機命令の出たジュピターシリーズはエウロパ0002、カリスト0004、アマルテア0005、リシテア0010、アナンケ0012。他は全て探索にあたります。日時は今夜から開始します」

「俺は拒否させてもらう」

説明の途中、テーベは再び口を開いた。

「拒否権はありません。機関からの命令です」

ヒマリアはテーベに鋭い視線を送った。

それに対し、テーベは不敵な笑みを返した。

「なんであいつの探索なんてやんなきゃならないんだ？別にあいつ

が居なくなつて、”次のイオ0001”を探せばいい話だろ？ジュピターシリーズなんて所詮は使い捨ての駒じゃねえか」

その発言には他の者も黙ってはいなかった。

「テーベ！！お前は自分の言ってることがわかっているのか！！」

カリストは席から立ち上がって叫んだ。

「ああ。はっきりとわかってるぜ。使えなくなったら新しいのを補充する…今までもずっとそうだった。事実だろ？」

テーベは表情を変えず、淡々と言った。

「だからといってイオとエララを見捨てていい理由にはならない！！」

その様子を見たカリストは更に口調を荒くした。

「ハア。この程度の割り切りもできないなんて、とんだ”石頭”だな」

テーベはため息混じりの口調になった。

それを聞いたカリストが何か言おうとした時だった。

「…ダメ」

第三者が口を挟んだ。

2人は声の主へ視線を向けた。

当事者2人の視線の先にはリシテアがいた。その意外な行動にカリ

ストは驚きの表情になった。

リシテアは無表情でテーベを見つめていた。

「2人を…助けてあげて」

リシテアの声は小さかったが、静かな部屋の中では容易に聞き取れた。

「だからなんで俺が…」

テーベは面倒くさそうな顔をした。

「助けてあげて」

が、その発言に割り込むようにリシテアが口を開いた。その口調は僅かに強いものになっていた。

「……………」

テーベは沈黙した。

部屋の中は静寂に満たされ、口を開く者はいなくなった。無言の視線が交錯した。

「…わかったよ」

その静寂を破るようにテーベは口を開いた。

「今回は協力してやる」

その発言に、リシテアは笑顔を見せた。

それを見たテーベは長いため息をついた。

「敵の追跡はないようだ」

イオは窓の外を見たまま口を開いた。

「そうか…」

それを聞いたエララは短く応えた。

そして2人は沈黙した。

―バタツ―

「っ!!」

その直後だった。

突如イオが床に倒れた。

あまりに突然の出来事だったため、エララは一瞬咄然と立ち尽くした。

その時刻が、赤い大地に黒い雨が降り注いだ瞬間だと2人が知ることはなかった。

「ど、どうしたのだ!! おいイオ!!」

我に返ったエララはイオに駆け寄った。エララがイオの顔を覗き込むと、イオは苦しそうに顔を歪めていた。その顔は青白く、呼吸も荒かった。

「答えよ!!」

それを見たエララは必死に叫んだ。

「答えてくれイオ!!」

が、イオの状態は変わらなかった。

「ぐ…」

苦痛に耐えるように自らの腕を押さえつけ、声にならない苦痛の声を発していた。

エララは、その様子を見ているだけでつらかった。

「イオ…お前まで…」

エララは気力を失ったような口調になった。そして呆然とイオを見つめた。

「いなくなってしまうのか…?」

エララは問いかけた。が、その返答は得られなかった。目の前のイオは、ただ苦痛に耐えているだけだった。エララの瞳から涙が流れ落ち、イオの服に滲んだ。

—スッ—

「!?!」

エララは驚きの表情になった。

視線の先には、苦しそうな表情のイオが、自分の頬に手を添えている姿が映った。

「大丈夫だ…」

イオは表情を少し和らげて言った。

「イオ…」

エララはその姿を静かに見つめた。

「俺は大丈夫だ…」

そう言ってイオは上半身を起こした。

それを見たエララは焦ったように尋ねた。

「本当に大丈夫なのか!?!横になっていた方が良いのではないのか…?」

「大丈夫だ。気にするな」

イオは無表情で答えた。その表情は確かに問題ないようであった。先程の状態が嘘であるほど完全に回復していた。

「ならば良いのだが…、先程のは何であつたのだ？」

その様子から本当に大丈夫そうであることを悟ったエララはイオに尋ねた。

「…”あいつ”だ」

イオは僅かに表情を変えた。

「あいつとは誰なのだ？」

エララは怪訝な表情になった。

「……」

しかしイオは答えなかった。

「……答えられない。が、これで第8ドームの位置が特定できた」

イオは無表情で窓の外を見つめた。その視線の先には、そこには無い何かが映っていた。

「夜空が好きなのか？」

テーベは静かに問いかけた。

「…好き」

リシテアはドームの外に広がる夜の空を見上げたまま答えた。

「隣、いいか？」

テーベの問いかけに、リシテアは短く頷いた。

それを見たテーベは、リシテアの隣に座った。

2人は、ドームの中にある人工植物園の中にいた。

何もない草原に座り、透明なドーム越しに見える夜空をじっと見上げていた。

「星が…綺麗」

「ああ。そうだな」

テーベも空を見上げた。

そこでは暗闇の中に星たちがちりばめられ、小さな輝きを放っていた。

「なあ、リシテア…」

テーベはゆつくりと口を開いた。

「…違う」

が、リシテアはそれを遮るように言葉を発した。
テーベは怪訝な表情でリシテアに視線を下ろした。

「…シア」

リシテアは小さな声で言った。
これ以降、テーベが決して忘れられなくなる名前を。

「シア？」

テーベは聞き返した。
リシテアはそれを聞いて頷いた。

「お前の本当の名前か？」

リシテアは再び頷いた。
それを見たテーベは、何処か嬉しそうな表情を見せた。

「そうか。覚えとくぜ」

「…ありがとう」

「礼なんかいらねえよ。お前の名前だ。覚えんのは当たり前だ」

「そう…」

「ああ…そうだ」

そこで2人は沈黙した。
夜の草原には、2つの人影以外は存在しなかった。

「なあ、シア。お前、何か怖いんじゃないのか？」

「え…」

テーベの突然の問いかけに、リシテアは少し驚いたように目を見開いた。

「お前から不安な感情が流れ込んできてるんだ…。俺でよかったら話くらい聞くんぜ」

リシテアはテーベの瞳を見つめた。

テーベには、リシテアの瞳が揺らいでいるように見えた。

「…大丈夫」

が、リシテアは直ぐに視線を反らした。

「…そうか。まあ無理に言わなくてもいい」

「…ありがとう」

「気にすんな」

そう言ってテーベはゆっくりと立ち上がった。

「俺はそろそろ任務に行く」

「…そう」

「お前は待機だよな？まだ星を見てるのか？」

テーベに問われたリシテアは僅かな時間沈黙した後、小さな声で答えた。

「まだ…見てたい…」

その返答を聞いたテーベは一度夜空を見た後、リシテアに視線を戻した。

「そうか。じゃあな、シア」

「うん…」

その言葉を最後に、テーベは歩き出した。
この時の選択を一生後悔することになるとも知らずに。

「……………」

リシテアは一度振り返った。

そこには黒髪の少年の背中が、徐々に小さくなって行く光景があった。

それを見たりシテアは口を開きかけた。

「……………」

が、直ぐにその口を閉じた。

テーベが見ることがなかったリシテアのその表情は、寂しそうだった。

草原に静かな風が流れ、草木が風に揺れる音が響いた。

リシテアの長い髪が、音もなく流れた。

第45話「Final promise」

ジュピターシリーズが任務に向かった後、第8ドームは不気味な静寂に包まれていた―まるで、これから起こる悲劇を物語っているかのように―

そして運命の一報がなされた。

”アマルテア0005へ機関命令”

アマルテアへ極秘回線のZPF通信が入った。

”リシテア0010を…”

そうして悲劇は紡がれた。

”拘束せよ”

「ああ、ダルい」

テーベはやる気のない表情で呟いた。

「こんな広い範囲をジュピター無しで探索なんてどう考えても無理だろ…」

テーベは辺りを見渡した。

そこには限りなく続く赤い大地が広がっていた。

その時だった。

―嫌だ…―

「っ!!」

テーベの中に、莫大な感情が流れ込んできた。

―痛い…―

「ぐああああああ!!」

その余りの強烈さに、テーベは頭を抱えてその場に倒れた。

（これは…リシテア!?!）

しかし、直ぐにその感情は弱くなった。

そして冷静になった頭を働かせ、行き着いた結論を予期して顔面を蒼白にした。

（リシテアが…）

ティーベは残る痛みも無視し、その場から座標転移した。
第8ドームへと向かって。

「了解」

アマルテアは短く了承した。
その声には、感情の欠片も無かった。
そして、命令通りに行動を始めた。
まるで、機械のように。

ティーベが見たのは、リシテアが機械のコードを体中に接続され、白いベッドに寝かされている光景だった。

（うそ…だろ…）

それ以外は、一切視界に入らなかった。
思考は停止し、頭は真っ白になった。
それでもティーベはリシテアに駆け寄った。

「…どうすれば…どうすればいいんだ…」

ティーベはリシテアを抱えて呆然と呟いた。

「お願い…」

リシテアは焦点の合わない瞳をティーベに向けた。

「何でも言ってくれ!!」

ティーベはリシテアの手を握った。

そして次にリシテアの口から出た言葉は、ティーベに絶望をもたらした。

「私を…」

リシテアは涙を流した。

「…して」

「!？」

テーベは自らの耳を疑った。
そんなことをリシテアが言うはずがない、テーベはそう信じたかった。

が、リシテアは再び口を開いた。
涙を流しながら。

「お願い…」

その声は、テーベの耳に一生残ることとなった。

—私を…殺して…—

ティーベは最早何も考えることができなかった。

「できる訳がないだろ！！何言ってるんだ！！何されたんだ！？あいつらはお前に何をしたんだ！？」

「何も…感じないの…苦しくても…つらくても…悲しくても…何も…」

それを聞いた途端、ティーベの全身に激しい怒りが込み上げた。

（あいつら…）

が、その怒りも直ぐにかき消された。
リシテアの言葉によって。

「だから…私を…」

「そんなことできるか！！」

ティーベは叫んだ。

「お願い…」

それを見たリシテアは掠れる声で懇願した。

その表情は無表情だったが、それなのに涙が流れていた。
その姿は、あまりに痛ましかった。

ティーベは思わず目を反らした。

（どうすれば…いいんだよ…もうわかんねえよ…）

そして思考にならない思考を巡らせた。

「お願い…お願い…」

リシテアは再び懇願した。

テーベは最早その声を聞くのを耐えられなかった。

（もう…これ以上シアを苦しませたくない…）

「ディヴァイン…第一解放…」

テーベの手に、柄の無い黒い剣が現れた。

リシテアは無言でそれを見つめた。

（…もう…見ていられない…許してくれ…）

「わったよ…シア…」

リシテアは無言で頷いた。

テーベはもう訳がわからなくなっていた。

（何でだよ…何でだよ…何で…）

そして、テーベは一気にディヴァインの切っ先をリシテアの心臓に向けた。

（……………）

テーベの手に、”何か”を貫く感触が伝わってきた。

テーベはひらすらに思考を停止させた。

そうしなければ、心が壊れてしまうから。
青い血がティーベを染めた。ティーベは直ぐに剣を消滅させた。

「……痛い…か？」

ティーベは必死に声を出した。
が、その声はひどく掠れていた。

「だい…じょう…ぶ」

リシテアは途切れ途切れに口を開いた。

「何が大丈夫なんだよ…こんな状態じゃないか！！もう感情共有なんてやらなくていいんだ！！早く能力を止める！！もうやめてくれ！！もういいんだ！！もういいんだよ！！！」

ティーベは訳もわからず叫んだ。

「…ありが…とう」

そんな様子を見たリシテアは静かに笑った。
それと同時に、リシテアの体が徐々に消えていった。

「何で…だよ…。何でお前が…礼を言うんだよ…」

ティーベはリシテアの体を強く抱きしめた。
その存在が消えてしまわないように。

「…嬉しい」

リシテアも残る力で腕を動かし、ティーベを抱き返そうとした。
が、その腕は既に光の粒子となって消えてしまっていた。
それを見たリシテアは寂しそうに笑った。

「…好き」

リシテアは小さく呟いた。

その声はティーベの耳にしっかりと届いていた。

「ああ。俺もだ。例え借り物の感情だろうが、この思いは嘘じゃない」

それを聞いたリシテアは微笑んだ。

その表情は、リシテアが見せた一番の笑顔だった。

「…これから…いっしょに…」

リシテアはティーベの腕の中で言った。

—消えたくない…—

「ああ。一緒だ」

ティーベは涙をこらえて応えた。

ティーベにはリシテアの感情がわかった。

気丈に笑顔を見せていたが、心の中では自らの”消滅”を怖がっているのがはっきりとわかった。

ティーベはさらに強くリシテアを抱きしめた。
が、その感覚も徐々に薄くなってきていた。

「また…会える…？」

「ああ。会える」

「また…星を見れる…？」

「ああ。見れる」

「また…好きって…言ってくれる？」

「ああ。何度でもな」

「…本…当？」

「ああ」

「や……く……そ……く……」

「ああ。約束する」

それを聞いたリシテアは再び笑顔を見せた。
それが、リシテアの最期に見せた表情だった。
消え逝く中、リシテアは最後の力で口を動かした。
最早声は出なかったが、その口はこう言っていた。

—ありがとう—

そしてリシテアは存在確率を発散させ、消えて逝った。

「……………」

テーベは何もない空間を抱きしめ続けた。
そこにはもう何も無かった。

「……………」

そうして静寂な時間が流れた後、ティーベはゆっくりと立ち上がった。リシテアからの感情共有がなくなった今、持つことが許される感情はただ一つだけだった。

否、仮に全ての感情が許されようが結果は同じであるだろう。

ティーベは笑っても泣いてもいなかった。

無表情で佇み、その瞳は全てを否定していた。

まず視界に入ったのは、手を青く染めたアマルテアの姿だった。

「ディヴァイン…」

そして唸るような声を出した。

「完全解放」

次の瞬間、部屋もろともアマルテアは消滅した。

「何だ…これは…？」

カリストが見たのは、機関の防衛システムによって全身に槍のアンチダイヴァインを撃ち込まれながら、未だに暴れているテーベの姿だった。

「カリストおおおお！！てめえも消えろおおおお！！！！」

「っ！！」

カリストは襲いかかる漆黒の剣を間一髪で回避した。

「正気かテーベ！？」

「だまれええええええええええ！！！！」

テーベは叫びながらカリストに斬りかかった。

「くっ！！ダイヴァイン第四解放っ！！」

カリストの手に、長銃が現れた。

「そんなもんがどうしたあああ!!」

—バキンッ—

「なっ!?!」

カリストは目の前の光景に唾然とした。

なぜなら、自らのディヴァインがテーベの剣によって一撃で碎かれたからだった。

「消えろおおお!!」

その隙をテーベが見逃すはずもなく、漆黒のディヴァインがカリストに迫った。

「ぐあああああっ!!」

体勢を変えて回避したカリストだったが、その中の一本が片目を貫いた。

カリストは地に倒れ込んだ。

「さっさと消えろ」

テーベはそんなカリストに向かって一切の手加減なくディヴァインを振り下ろした。

—キンッ—

が、その剣はカリストに当たることはなかった。

突然現れたアナンケが自らのディヴァインである二本の刀をクロス

させ、テーベの剣を防いでいた。

「てめえ…」

それを見たテーベは、顔を更に歪めた。

「邪魔すんじゃないよ…」

次の瞬間、背後に大量の剣が現れてアナンケを襲った。

「っ！！」

回避する暇もなく、アナンケは手足を貫かれ、地に伏した。

「まとめて消えろ…」

テーベはディヴァインを振り上げた。

そして振り下ろそうとした瞬間だった。

—グサツ—

「ぐはっ！！」

テーベの脇腹から、白い剣が生えていた。

「誰…だ…?」

テーベはふらつきながら振り返った。

そして硬直した。

そこに居る者を見た瞬間、全身が更なる怒りで震えた。

そこには、灰色の髪の少年がいた。
全く同じ容姿の少年が。

「イオおおおおおおお！……！！！」

次の瞬間、テーベは全力で駆け出した。

「てめえの探索なんてしてなければ！！てめえさえいなければ！！」

―グサツ―

「ぐあっ！！」

が、テーベはイオの白いディヴァインに貫かれ、その場に倒れた。
イオはそんなテーベを無表情で見つめていた。
それを見たテーベは顔を歪め、憎悪を露にした。

「て……めえ……」

それでもテーベは止まらなかった。
地を這うようにしてイオに迫った。

―グサツ―

「う……」

しかし、イオの放ったとどめのディヴァインがテーベを貫き、テーベは力尽きた。

「許さねえ…てめえらは…絶対に…許さねえ…」

テーベは相手を射殺すほどの瞳をイオに向けた。
そして、テーベはついに意識を失った。

長い夜が、ようやく終わった。

「今回の一連の事件についての報告を始めます。以降は事件名…コード0014と呼称します」

スルトは抑揚の無い口調で言った。

「続けたまえ」

議長はスルトを促した。

「事件名…コード0014。テーベ0014が原因不明の暴走。それによりアマルテア0005、リシテア0010が消滅、カリスト0004、アナнке0012が損傷。イオ0001により鎮圧、テーベ0014は永久凍結処分となりました」

「そうか。まあ成果としては及第点だろう。これでジュピターどもの数も減らせた」

議長は事も無げに言った。

「はい。予定では全滅のはずでしたが……」

「そうだな。ナンバー0014にアンチディヴァインを使い過ぎたようだ。まあ良い。サターンシリーズが揃えば奴らなど恐れるに足りん」

そう言って議長は不敵な笑みを見せた。

——そうして時は流れた——

——イオ達は、幾つもの世界線へ赴いた——

——そして、数え切れない世界を削除し続けた——

——救える世界は無かった——

—彼らの忠告に耳を傾ける者は、誰もいなかった—

—故に救いは無かった—

—救えなかった—

—そう—

—たった1つの世界でさえ—

—彼らは自らの意味を失った—

—量子存在—

—それは救済する存在であるはずだった—

—しかし、救いは1つも無かった—

—故に—

—彼らには意味はなく—

—彼らは存在もしていない—

—それが—

—それこそが—

—彼ら量子存在—

—なのだから—

—許さねえ許さねえ許さねえ許さねえ許さねえ—

地下深く、忘れられた存在があった。

—絶対に—

少年は赤い瞳を更に赤く染め、見えない何かを睨んでいた。

―許さねえ―

思考は既に無く、あるのはたった一つの感情だけだった。

―奴らに復讐する―

テーベの頭にはそれしかなかった。

「おやおや。随分とご立腹のようですね」

その空間に、存在しないはずの者が音もなく現れた。

「誰だ…てめえ…」

テーベは憎悪の視線をその男に向けた。

男は全身を黒いコートで包み、白い仮面をつけていた。

「私はルシオラ。貴方の望みを叶えに来ました」

テーベの視線にも、ルシオラはその口調を変えなかった。

「望みだと…」

「はい。見たところ、貴方は機関に復讐したくてしょうがないみたいですねえ」

「……………」

テーベは無言でルシオラを睨んだ。

「でも貴方にはその力が無い。それにここから出ることもできない」

「何が言いたい…?」

テーベは声色を低くした。

「ククク。そう怒らないでください。要は、我々に協力してください。要は、貴方をここから自由にして尚且つ力も授けて差し上げようという訳です」

そう言ってルシオラは不気味な笑みを見せた。

「本当だろうか…?」

「ククク。こんな状態の貴方を騙して、私に何の得があるのです? それに貴方には他に選択肢は無いと思うのですが?」

ルシオラは笑みを崩さなかった。

「……いいだろう」

テーベはその誘いを受けた。

「ああ、言い忘れましたが、テーベという名前は捨てて頂きます。ジュピターシリーズの名前をそのまま使っていると色々と不都合がありますので」

「：別にかまわねえよ」

「そうですか。では、貴方の名前を決めましょう。我々には名前のルールがありましたね」

ルシオラは口の端をつり上げた。

「我々は足りない存在です。故に、THE^{デーベ}B Eから一文字、Bを抜きます」

そこでルシオラは一度区切り、再び口を開いた。

「貴方は今日からE^{エゼ}THEです」

時を開けず、機関に衝撃が走った。
ジュピターシリーズにもその報告がなされた。
内容はこうだった。

―デーベ0014が脱走―

それを受け、イオ0001、ガニメデ0003、カリスト0004に緊急指令が出された。

” テーベ0014を捜索、破壊せよ ”

そうして3人は線を越えた。

―量子状態からコヒーレント状態に移行、存在確定完了。指定座標との誤差3.27%。言語系に接続完了、最適化実行―

合成音声が夜の森に響き、3つの人影が出現した。

「さてと、今度の世界線は楽しめっかな？」

「楽しむのは結構だが目的を忘れないでくれよ」

体格の良い青年が陽気な声を出し、背の高い男が呆れたように言った。

「わかってるさ。ただ、奴はそう簡単には見つからないだろうよ」

青年はそう言って男に笑い掛けた。

「そうだな…」

男は静かに肯定し遠い目をした。そしてしばらくの静寂が訪れた。
夜の森は全てを包むように闇を纏っていた。

第46話「回り出す歯車」

—サーツ—

波の音が聞こえた。

その音を聞き、私はハッと我にかえった。

気付けば夜の浜辺に立っていた。

とても静かな浜辺に。

私はゆっくりと浜辺の先に視線を向けた。

そこには黒い海が広がっていた。

なぜだろうか…？

夜の海など何時も見ているが…

今日は全てを飲み込まれるような錯覚を覚える…。

「これが俺の記憶だ」

イオが始めに口を開いた。

アイツは、感情の無い瞳を空に向けていた。

何でお前は…

そんなに遠くを見つめているのだ…？

「……………」

私は何も言えなかった。

いや、私だけではないようだな…。

隣に居る茶々丸も黙している。

造られた存在……お前は……どう感じたのだろうか…。

「…ケケケ」

チャチャゼロのヤツは何時も通りだな。

全く、主人以上に肝が据わっているヤツだ。

私が黙り込んでどうするのだろうか…。

私はこんなにも弱かったのか…？

この真祖の吸血鬼がな…フフ…笑えてくる。

「私も…」

何故か視線は下に向いてしまう…。

何故だ…。

いや……愚問か。

私はアイツを見れない。

だからだ…。

視界に映る砂浜には私の足跡が確に残っている。

そう。

私も同じなんだ…。

「私もそれなりの人生を歩んできた…が…」

視線を上げるだけでこれ程の決心がいるとはな。

私は視線を上げた。

そしてアイツの瞳を見つめた。

海のように青い瞳だな…。

「少し…頭を整理しなければならんようだ…」

出た言葉は苦し紛れか…。

「そうか…」

アイツは表情を変えなかった。

いや、私にはその変化がわからないだけかもしれない…。

これ以上は無意味だな。

「私は先に寝る…」

私は思考を止めてイオに背を向けた。

イオから一步離れる毎に、何か不安な思いを抱いてしまう…。

…止めよう。私にセンチメンタリズムは似合わない。

何も考えず、歩を進める…。

砂を踏む音が、耳に届いた。

「マスター」

私は先を歩くマスターに声をかけました。

マスターは歩を止めました。

でも、マスターは振り向きませんでした。

「…今夜はもう下がっていいぞ。暫く…1人にしてくれ」

私の位置からは、マスターの表情はわかりません。

でもその背中…少し寂しそうでした。

私には感情はわかりませんが、そう思います。

「…了解しました」

私は一礼し、その場から去りました。

マスターに何の言葉もかけられない…

他者の心を類推する…

私にはそのようなプログラムは無いのでしょうか…。

こんな時、人は悔しいと感じるのでしょうか…？

「チャチャゼロ、お前も下がれ」

私は振り向かずに言った。

「ハイヨ。御主人」

チャチャゼロは言われた通りに下がった。

何時もはあんなヤツだが：

流石は私の従者：

長い付き合いなだけはあるな。

よくわかってるじゃないか：

1人になった私は無言で自分の寝室の扉を開いた。

私は：一体、何がしたいのだろうか：

私は1人、部屋の窓から夜空を眺めた。

意味の無い存在か…。

そんなお前に、意味を求める者がいるのだから……皮肉なものだな……。

なあイオ。お前は何を望むのだ…？

その答えは…いつまでも帰ってはこないようだな…。

「なぜでしょうか…？」

私は頭の上の姉さんに問いかけました。

「何ダ？妹ヨ」

「マスターはなぜ、あれほど寂しそうな表情をするのでしょうか…？」

それを聞いた姉さんは何時ものように笑いました。

「単二整理ガツカネエダケダロ？」

「整理？」

「今マデ近クニイタト思ツテタ奴が突然遠クニ見エチマツタンダロウヨ。ダカラ整理ガ必要ナンジャネエノカ？」

「そういうものなのでしょうか…。ガインイドの私にはわかりません…」

「オイオイ。俺モ一応ドールナンダゼ？」

そう言って姉さんは特有の笑い声をあげました。

遠く見える…

私に当てはめて考えるならば、マスターが遠くに感じられるということでしょうか？

…わかりません。

でもそれは…

きつと、とても寂しいことだと思います。

俺は広域指導員として何時ものように麻帆良を徘徊していた。

「つたく…誰もいねえ」

だが、辺りを見回しても誰もいねえときたもんだ。

最近は騒ぐ連中が激減しちまってつまらねえ。

その原因はある噂なんだがな…。

近頃、麻帆良ではその噂が囁かれるようになってるみてえだ。

そいつは

―夜の麻帆良には死神がいる―

―広域指導員の中に死神が混ざっている―

―デスメガネが死神を召喚した―

とか、全てが”死神”に纏わるものだ。

死神だと？

…全く馬鹿馬鹿しいぜ。

なんでそんな噂が広まってるかは知らねえが、暴れる機会が減っちゃってるのは我慢ならねえ。

この俺がその死神とやらを退治してやろうか…。

…そーいや朝倉とかいうパラッチの野郎が俺を死神とか何とかって言ってやがったっけな…？

まあ関係ねえか。

気晴らしに、今日は少し場所を変えてみるか。

確か河川敷の辺りはあいつらの訓練の時しか行っていなかったよな。

少し足を伸ばしてみるかな…。

河川敷には着いたんだが…

やっぱ誰もいねえか…。

俺は暫く歩き、引き返そうとした時だった。

「…何だ？」

ガキ2人組が屈んで何かを抱き抱えようとしている…。

何してんだ？

面倒だが、とりあえず声だけかけとくか…。

後々何かあったら困るしな。

「おい。何かあったのか？」

背後から声をかけたのは失敗だったか…。

2人組は驚いた顔を向けてきた。

「っ！あなたは…」

「あっ！ガニメデさんですよね！？」

何で俺の名前を…！？

いや…待てよ…

こいつらどっかで…

「あ？何で俺の名前知ってんだ…？…って…確か京都で見た気がしないでもないが……」

言いかけた時だった。

こいつらの間に、何かが倒れてるのが見えた。

あれは…犬か…？

「それより、その犬は何だ？」

俺は動物に詳しくねえからよくわからねえが…

呼吸は…かろうじてしてるレベルか…

この状態はマズイんじゃないのか…？

「そうだっ！早く手当てしてあげないとっ！」

そばかすの方が気づいたように声をあげた。

「手当て？この犬のか？」

「はい。ガニメデさんが来る少し前に私たちが倒れているこの子を見つけました」

もう1人の方は真剣な表情で説明した。

大人な様子を見せてるようだが…まだガキだな…

「そうか…。近くに動物病院はあるか？」

「はい。場所はわかります」

「なら急いで行くぞ」

仕方ねえ。

とりあえずこの犬を病院まで運ぶとするか。

抱き抱えてみたが…案外重いな…。

雨に濡れてんのが原因か？

「こっちです！」

2人組は立ち上がって走り出した。

病院の場所知ってるみたいだしな…先導頼むとするか。

俺は黙ってその後を追った。

「全く…手間をかけさせてくれますね…」

私も損な役回りです。

小太郎君の回収にネギ・スプリングフィールドの調査など…

私にもまだ爵位の誇りは残っているのですがね…

おや？

小太郎君は一般人に匿われましたか…

仕方ありません。

これは少々手荒くなってしまうですね。

「…何が起きた？」

俺は目を疑った。

そりゃそうだろ。

目の前の犬が、突然少年になったのを見りゃよ。

―バツ―

「なっ!？」

「え!？な、何!？」

しまった!

完全に油断していた!

あの犬のガキ、村上夏美とかいう野郎の首に爪をかけやがった!

しかもかなり気がたってるようだな…

マズいな…

下手に動けねえ。

「大丈夫」

おい!？

何考えてんだあのガキ！

犬のガキに近きやがった！

話してわかる相手じゃねえだろ！

「大丈夫。私たちはあなたを傷付けないわ」

「来んなやつ！！こいつがどうなってもええんか！！」

ダメだ…

それ以上近くな！

犬のガキは興奮状態だ。

下手に刺激すると――

――ザシュッ――

「っ!!」

「ちづ姉っ!!」

あのガキ!

切り裂きやがった!!

千鶴とかいうヤツは大丈夫か!?

傷は…浅いみたいだな…

だが――

そろそろ止めねえとまずいな…

「おい…てめえ…」

俺の声に、犬のガキは警戒心をむき出しにて睨んできやがった。

―サツ―

「……………あ？」

驚いたぜ。

千鶴とかいうガキは片手を伸ばして俺を制した。

その傷を負って、まだ…

「大丈夫。私たちはあなたの敵じゃないわ」

「……………」

―バタッ―

犬のガキは安心したのか、ついに倒れやがった。

ようやく解放された夏美とかいう方は半ば放心状態だな。

やれやれ…

「おい、怪我は大丈夫か？」

「はい。大したことはありません」

おいおい…大したことはねえとはな…

那波千鶴…だったか？

面白いガキだな。

「そうか。とりあえず手当てしとけ」

「はい」

「で、夏美とかいうの」

「…あ、はい！」

大丈夫かよ…

「お前も手当てしてやれ。俺は薬と包帯を買ってくる」

「わかりました…」

こっちは重症か？

まあ無理もねえ。

こんなガキが命の綱渡りを体験したんだ。

そりゃそうなるわな。

「すぐ戻ってくる」

そう言い残し、俺は薬局へ急いだ。

—コンコン—

ノックを忘れないのは紳士たり得る証と捉えてほしいですね。

「はーい。ガニメデさんお帰りなさい」

おや、元気なお嬢さんだ。

さて、このレディにはお休み願おう。

「あれ！？ガニメデさんじゃない！？どなたですか！？……って…
何か急に眠くなって…」

この薔薇の香りに誘われ、穏やかな眠りについて頂きましょう。

これ以降は――

少々手荒くなるのでね。

「失礼するよ」

ほう。

中は至って普通の部屋ですね。

やはり、ただの一般人でしたか。

偶然に小太郎君を拾ったというところでしょう。

さて――

「どなたですか？」

おや、まだお嬢さんがいましたか。

「私はその小太郎君に用があつてね。邪魔をしないで頂きたい」

「他人の家に土足で入ってきて、その態度ですか？」

おっと…

そうでした。

この国の文化では、家の中では靴を脱ぐのが常識なのでしたね。

「これは失礼」

しかし――

このお嬢さんはまた随分と気丈な方そうですね。

”この”私を前にして、その物言い。

その強い瞳も中々ですね。

しかし

やはり、年相応の女性のようにですね。

義務感からくる強さ……

それは

一見強く見えますが――

実に儂いものです。

儂くも強い……

クフフ……

ダメですね…

そのようなものを見てしまうと――

つい

”壊したくなってしまうではありませんか”

「おっちゃん…相手間違えとるで…」

おや？

小太郎君は目覚めたようですね。

「そうでした。では…」

”回収するとしましよう”

第46話「回り出す歯車」(後書き)

お久しぶりです。

驚かれた方もいたのではないのでしょうか？

文体を大きく変えました。

実は、1話から45話は話がループしており、全て46話からの回想です。

なので45話までは全て文体が過去形で、なおかつ三人称視点で語られています。

一応わざとでした？

ですので46話以降は現在進行する形になり、一人称視点になります。

ある意味、46話が第1話かもしれません。

作者の無駄なこだわりです。

面倒くさいと思われた方、ごめんなさい＞（――；）＜

第47話「求める意味」

やはりな…。

どの世界も同じだ。

救う価値なんてない。

下らないモノだ。

ほんと、こういう”ゴミ”を見ると嫌気がさす…。

フェイトのくそガキに頼まれなきゃこんなゴミを見る必要もなかったんだがな。

「た、助けてくれっ!! な、何でもする!!」

俺の目の前で命乞いをしてるこの屑は確か奴隷商人だったか…?

”ご丁寧に”魔法使い”の護衛までつけやがって—

まあ既に全員葬ってやったが—

この世界には奴隷なんてシステムがまだ残ってるんだったな。

人が物品かよ…。

そういう考えは苛つく。

”アイツら”にそっくりだ。

「金なら払う!!!いくらだ!?欲しいだけやろう!!!だから見逃してくれっ!!!」

こいつは傑作だ。

金をやるから見逃せ?

本気で言ってるのか?

まあその表情見りゃ本気なんだろうな。

目の前で護衛が消されたのがそんなに衝撃だったのか?

所詮はただの雑魚だったがな

それにしても――

切羽詰まった表情ってのはこういうヤツか?

そんな必死になっちまってよ。

ククク。

ヤバイ、笑えてきた。

「クハハハハハハハ！！！！」

「!?!?!?!」

ククク。

今度はキョトンとした顔か？

ダメだ、見る度に笑っちゃう。

「おいおい。本気で言ってるのか？今まで散々他人の命を売り買いしてた野郎が、自分の命を金で助けてもらおうとするなんてな」

「幾らでも払う！！ほ、本当だ！！」

やれやれ。

この屑とは会話できねえみたいだ。

マジで時間の無駄だ。

「やれ、ディヴァイン」

「や、やめてくれっ!! 何でもする!! だから頼む!! やめてくれ
っ!!」

ハア…

執拗な屑だ…。

目障りだ。

「ま、までっ!! やめてくれええ!!」

—消えろ

一体何があった…？

俺が戻って来た時には、千鶴とかいうガキは消えていた。

そして部屋は無惨な状態だった。

「おい！大丈夫か？」

そばかすのガキは床に倒れたまま…

一瞬ヒヤリとして駆け寄ったが…

とりあえず外傷も無いし、呼吸もしてる。

「ほえ…あれ？ガニメデさん？」

どうやら眠らされてたみたいだな。

「無事か？」

「え？あ、はい…私はなんとも…」

「何があったか覚えてるか？」

「…！？そういえば知らないおじさんが入ってきて…それで…そこから急に眠くなって…」

成る程な…。

その”おじさん”とやらに拐われたのか。

一般人か…？

いや…それは無いな。

部屋の様子を見るに、派手に暴れたみたいだ。

普通にやり合ってもここまでにはならねえ。

それに、”あの”犬のガキが絡んでやがるんだ。

少なくとも魔法に関係した奴だ。

「あれ…？またなんか眠くなってきちゃった…」

「もう大丈夫だ。安心して眠れ」

どうやら睡眠薬でも使われたみてえだな。

またぐっすり寝ちゃった。

さて、とりあえずこの嬢ちゃんはベッドで寝ていてもらおうか…

この俺がガキをベッドに運ぶとはな…

で、問題はこっちのガキだ。

「おい起きろ」

結構やられたみたいだが、外傷自体は大したことねえみたいだな。

「…う…。何や兄ちゃん」

「久しぶりじゃねえか小太郎。記憶は戻ったか？」

「っ！！」

ほお。その反応をするってことは記憶が戻ったみたいだな。

あのガキ2人組が居た前じゃ言えなかったが：

こいつの顔は忘れてねえよ。

犬上小太郎だったか？

京都では拳を交えた仲だ。

忘れちゃいねえ。

「どこかで見た顔だと思ってたらあの時の兄ちゃんやなっ！！」

どうやらコイツも覚えてたみてえだ。

「ああ。俺はガニメデ。まだ名乗ってなかったな」

恐らくコイツが原因だな。

さて、全部吐いてもらうぜ。

「そんなことより…」

俺は言葉と共に殺気を放った。

小太郎は敏感に反応を見せて構えた。

その反応は流石だな。

「何が起きたか言え。千鶴とかいうガキはどうなった？」

「千鶴…？…っそうや！！あの姉ちゃんが拐われたんや！！」

拐われた、ねえ…

「で、お前は為す術無くやられたと」

「く…その通りや…」

意外だな。

挑発に乗ってくると思ったんだが…

そんだけショックだったのかもな。

「だから今から助けに行くんや!!」

イイ目だ。

だが…

全然ダメだ。

「1人でか？お前は既に負けてんだろ。なら次も結果は同じだ。いや…人質を取られてる分だけ余計に悪い結果になるか」

俺は少し挑発的な口調になった。

さて、どう反応する？

「そんなんやってみなきゃわからんやろ!!」

ダメだな。

冷静さを欠いていやがる。

「そうか。じゃあ1人で行け。それでもし…」

そこで区切り、俺は再び殺気を放った。

今回はさっきより強く…

「人質が命を落としたら、どうすんだ？」

「っ!!」

ようやくわかったみてえだな。

「少し冷静になれ。何も1人で行かなきゃなんねえわけじゃねえだろ？」

「どういふことや…？」

「俺を忘れてないかってことだよ」

「私は…見てはいけないモノを見てしまったのかもしれないネ…」

そう――

茶々丸経由で送られてきた映像を見てしまったヨ。

茶々丸には悪いが、勝手に見させてもらたヨ。

「……………」

量子存在、彼らの話は本当だたネ。

勿論信じてたヨ。

しかし、信じ切れない部分もあたネ…。

それが今、ようやくわかたヨ…。

幾つもの世界を救いたいと願い、結局はその全てを壊してしまたネ…

量子化―自らの存在を無くしてまで―そして世界に否定されてまで―
―彼らは何を救いたかたのカ―

私にもわかるネ…。

私にも救いたいモノがあるヨ。

それが難しいのも承知の上ネ。

でも救いたいネ…。

だから、私に出来ることは全てするつもりネ。

その為に、彼らも協力してくれるヨ。

イオさん…ガニメデさん…カリスト先生…

彼らは、遠い存在ネ。

そして――

――私に似てるネ――

「……ようやく来ましたか」

待ちくたびれましたよネギ君、小太郎君。

「皆さん……！大丈夫ですかっ！？」

「また会ったな、おっちゃん……！」

おやおや。

随分威勢が良いですね。

先程の戦いが嘘のようです。

「皆さんを離してください!!」

彼がネギ君ですね？

クフフフフ。

離してくださいとは、また上品な物言いですね。

「すまないが、それは出来ないのだよネギ君。君には私を倒すという選択肢しか無い」

「……わかりました」

「上等や!」

おや。

中々素直ですね。

しかし…

その顔は全然本気ではありませんね。

人質のレディ達にばかり意識が向いてしまっています。

舞台を盛り上げる為に彼の教え子を数人、人質としてみましたが…

逆効果かもしれませんね。

「さあ、2人まとめてかかってきたまえ」

では、私が本気にさせてあげましょう。

俺と小太郎は同じく生徒奪還に向かうネギ坊主と合流し、誘拐犯――ヘルマンと言うらしい――の待つ広場へと向かっていた。

ネギが言うには、他にも数名の生徒を拐ったらしい。

2人だけで来いとも言っていたようだ。

それに、わざわざ人質の場所を知らせたらしい。

罾か――？

いや…

それはねえな。

一連の行動から見てそれは不自然だ。

今さら俺たちを罾にかける意味はねえ…

おそらく本当にそこに人質がいるんだろうよ…

理由は簡単だ。

奴は”遊んで”やがる…

いや――

”楽しんで” やがる…

行動の節々に一貫性が見られねえ。

何故ガキ共を拐った？

それも特定のやつらだけ…

加えて人質の場所をわざわざ教えてきやがった。

まるでネギ坊主と小太郎を戦わせたいかのように…

まさか…

それ自体が目的か？

だとすれば何の為に？

「ガニメデさん！」

ん？

慣れない思考に埋没しすぎたみてえだな…

一瞬、ネギ坊主が話しかけてんのに気付かなかったぜ。

「おお悪い悪い。ボーツとしてた。何だ？」

「ヘルマンさんは2人だけで来いって言ってました…だから…ガニメデさんも一緒にいたらまずいんじゃないですか…？」

ああ、その話か…

俺は気になってんのは――

この学園の連中は何をやってるのかってことだ。

確か強力なZPF…いや…結界か。

まあとにかく、この学園にはその結界があるはずだ。

探知能力も有ると聞いている。

それなのに誰も気付かないってのはいくらなんでもおかしい。

それに学園の頭は”あの”ジジイだ。

気付いていないわけが無い…

だとすれば――

静観、か。

理由は…

ネギ坊主の成長か？

あの吸血鬼のガキの時もそうだった。

英雄の息子、だからかねえ…

悪いがそういうのは気に入わねえ。

自分の道は自分で切り開くモンだ。

ネギ坊主はネギ坊主だ。

英雄の息子だとか優れた魔力だとかそんなのは何の価値もねえ。

英雄の息子らしく成長させる為にレールを敷くなんてのは論外だ。

話にならない。

そんな奴は”強く”なれない。

本当の”強さ”は得られねえよ…。

そうだろ？

お前が教えてくれたんだ。

なあ…イメリア…

「大丈夫だ。俺はバレないように人質を解放する。だからお前らは全力で戦ってこい」

そう。

”全力”でな。

「あ！そういうことですね！わかりました！ガニメデさんがいると心強いです！皆さんをよろしくお願いします！」

「任せとけや兄ちゃん！」

まあ今はそのレールの上を走るのもいいだろう。

学園の連中、いや…”魔法使い”共のレールの上をな。

だが―

それも長くはねえ。

”立派な魔法使い”

”英雄の息子”

連中はネギ坊主に”意味”を求めてやがる。

あんたらがどうしようと勝手だが――

俺はやりたいうにやらせてもらう。

見てな。

いずれ――

てめえらとは

――決着をつける――

「魔法が、効かない!?!」

「何やこいつ…全部消しとるでっ!!」

―バチンッ―

「きゃっ!!」

「アスナさん!？」

先程から僕の魔法がヘルマンさんに当たる前に”消され”てしまします!

その度にアスナさんが苦しそうにしています…

一体どういうことでしょうか…?

「おっちゃん!卑怯やで!何やようわからんモン使って!!」

「おや？話していなかったかね？今の私に魔法は効かんよ」

魔法が効かない…？

そんはずは…

「私への魔法は、あそこのお嬢さんが全て打ち消してくれているからね」

あそこのお嬢さん…

って…アスナさん！？

なんでアスナさんが…

「人質は変わらず此方の手の中…私に魔法は効かず、戦闘力も私の上。さあネギ君、どうするかね？」

う…。

確かにヘルマンさんの言う通りです…。

僕とコタロー君じゃ…

”諦めんな。諦めんじゃねえよ”

っ!!

そうです!

前にガニメデさんが教えてくれました!!

僕は諦めません!!

「イイ目だ。坊主」

「ガニメデさんっ!?!」

「おや？ 邪魔者が混じっていたのかね」

私は2人だけで来いと言ったのですが…

仕方ないですね。

彼は誰でしょうか？

ガニメデ…？

資料には載っていませんでしたが…

魔力も微々たるものですね。

おそらく一般人でしょう。

哀れですね。

力も無い一般人が、余計なことに首を突っ込むとどうなるか教えて差し上げましょう。

「一般人かな？無駄な義務感に駆り立てられ、飛び込んでしまったと見えるが？」

「何とでも言っとけよ…それよりいいのか？」

「何がかな？」

”この”私を前にして、この男の余裕な態度は何でしょうかね？

「てめえの人質は、もういねえみたいだぜ」

何を馬鹿な…

っ！？

本当に…いない…？

いつの間に！？

「さて…」

っ！！

この男、ただ者ではないですね…？

放たれるこの殺気…

いいですね…

非常に心地良い。

久しく”本物”に出会えていませんでしたから…

「ディヴァイン第二解放」

これは驚きました。

突然魔力が増大しましたね。

それにあの両腕の甲冑はアーティファクトでしょうか？

いや…違いますね。

放たれる威圧感の”格”が違います…

クフフフフ。

いいでしょう。

予定変更です—

まずは彼からにしましょう!!!

第48話「確率を超えて」

俺は超によって強化された量子ステルスを使って人質の見張りをしているスライム共に奇襲をかけた。

「つまらねえな…」

が、余りにも呆気なく片付いたぜ。

拍子抜けもいいとこだ。

喋るスライムってのは中々理解に苦しんだがな…

これが”魔法”ってやつか？

まあそれはいい。

今はそれよりも更に困惑してる。

そりゃそうだろ…

人質になつてる奴らは何で全員裸なんだよ…

俺にはまだ気づいてねえみたいだが…

ヘルマンとかいう野郎の策か？

まあ救出しずれえことは確かだな…

どうやらあのオヤジは本格的にボコる必要があるみてえだ。

いや…文句言う前にまずは人質を助けないとな。

神楽坂だったか？

あいつは別の場所で捕らえられてんな。

あそこはさすがにヘルマン野郎にバレちまう…

後回しだ。

こっちの奴らはスライムを片付けたら水の牢獄から解放されたみたいだ。

仕方ねえ…

だが、いい機会だ。

超の新発明とやらを使ってみるか。

とりあえずこいつらだけ”消しとくか”。

「私はこのような戦いを待っていたのだよっ！」

全く素晴らしい！

これです！

この高揚感！

やはり彼は本物でしたね。

私としたことが見誤っていたようです。

私の拳が全く命中しない。

それにこの動き…

瞬動ではありませんね。

”入り”が無い—

移動も全く直線的ではない。

いえ—

”移動” そのものがないと表現した方が適切でしょうか。

ネギ君たちも目視するだけで限界のようですね。

先ほどから固まっています。

それもそうでしょう。

なんせ――

この私ですら捕らえ切れませんから…

「考え事とは余裕だな」

「っ！！」

いつの間に背後をつ！！

「ZPE零距离解放」

まずいっ!!

この魔力の収束――

直撃したら私でも危ないですね。

が…回避も障壁も間に合わないでしょう…

――ドシンッ――

「ぬうっ!!」

ふむ…周りの風景が真逆に見えますね…

どうやら吹き飛ばされているようです…

まさかこの私が…

――ズサアアアアア――

地面に叩きつけられてようやく止まりましたか。

これは参りました…

恐らく半身は使いものにならないでしょう。

ですが―

「ガニメデ君だったかな？ 全く素晴らしい。この私をここまでするとは」

まだ終わりませんよ…

「おいおいマジかよ…。立ち上るとはな…。今のは再起不能にしてやるつもりだったが…」

「フッフ。私も驚いたよガニメデ君。まさかこの私をここまで追い詰めるとはね」

そう――

既に半身は使いものになりません。

”この状態”ならば、ですが。

「てめえ、普通の人間じゃねえな……。さっきのは直撃したはずだ。まだ動けるなんてあり得ねえ」

おや？まだ気づいていませんでしたか。

いいでしょう。

本当の姿を見せて差しあげます。

「その通り。私は普通の――いや、人間ですらないのだよ」

「おっちゃん！どういふことや！？」

おや。忘れていました。

そういえば小太郎君もいましたね。

「私は…」

では、そろそろ目的を果たしましょうか。

「悪魔ですよ」

—ドクンツ—

「っ！！！」

フフフ。

顔だけ悪魔の姿に戻しましたが：

ガニメデ君はさして驚いていないようですね。

しかし――

今回の目的は別です。

ククク。

ネギ君、いい表情です。

「お気づきのようだなネギ君。私は”あの時”に君の村を襲った悪魔の1人……」

さあ……

これで本気を出せるでしょう。

「すいん……」

すごいです！

ヘルマンさんとガニメデさんが戦ってるんですが…

僕の力じゃ姿を追うのも難しいほどです！

ガニメデさんの戦っているところは余り見ていませんでしたが、
とても強いですっ！！

ガニメデさんはあんなに強いヘルマンさんを逆に押しています！

僕はヘルマンさんに全く敵わなかったのに…

お父さんもこんなに強かったんでしょうか…

それなのに僕は…

僕もガニメデみたいに強くなりたい。

「悔しいなあネギ…」

「コタロー君？」

小太郎君が珍しく難しい顔をしています。

どうしたんでしょうか？

「俺たちは見てることしかできへん…目の前でこんだけ熱い戦いがあんのにや…」

悔しい…

この気持ち…

そうかもしれません。

僕は皆さんの先生なのに何もできてない…

いつも助けられてばかり…

強くなりたい…

「てめえ、普通の人間じゃねえな…。さっきのは直撃したはずだ。まだ動けるなんてあり得ねえ」

気づけばガニメデさんがヘルマンさんを吹き飛ばしていました。

僕は今回も何もできないみたいです…

「その通り。私は普通のーいや、人間ですらないのだよ」

「おっちゃん！ どういうことや！？」

人間じゃない…？

どういふことでしょうか？

ヘルマンさんは確かに人間に見えますが…

「私は…」

「悪魔ですよ」

—ドクンツ—

「っ！！！」

その姿を見た瞬間、頭が真っ白になりました。

頭を流れるのは—

炎に包まれた家—

石になった人々—

爆音と悲鳴—

スタンおじいちゃん—

お姉ちゃん――

そして――

その惨劇を引き起こした元凶……

忘れもしない――

――悪魔――

「お気づきのようだなネギ君。私は”あの時”に君の村を襲った悪魔の1人……」

許すな許すな許すな許すな許すな許すな許すな許すな許すな
許すな許すな許すな許すな許すな許すな許すな許すな許すな
許すな許すな許すな許すな許すな許すな許すな許すな許すな
許すな許すな

—あいつらは—

—絶対に許すな—

「そうだ！もつと全力で私を倒したまえ！！」

何も考えず、ただ殴る。

「ぐっ！これ程の魔力暴走…やはり彼の息子ですね」

暴走した魔力をかえりみず、ただ殴る。

殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る

「ネギッ！！」

「チッ！！世話がやけるガキだな！！」

「っ！？」

俺としたことが反応できなかった…

理由はわからねえが…

ネギ坊主が突然暴走しやがった！

ヘルマンに殴りかかって圧倒してるが…

冷静さはねえな。

ああいう風に全てを怒りに任せた攻撃はダメだ。

心だけ怒り、頭は冷静になってないの意味がねえ。

良くみりゃ隙だらけだ。

「なっ!？」

マズイ!!

ヘルマンの野郎がZPEを収束してやがる!

何か仕掛けて来る!

ネギ坊主は…

クソッ!!

気づいてねえ!!

このままだと直撃しちまうっ!!

「チッ!! 世話がやけるガキだな!!」

小太郎といい、本当に困ったガキだよお前らは!!

「情報障壁展開!!」

—ドゴンッ!—

「おや?」

くっ…

何とか防いだか…

「おらお返しだああ!!」

これでも喰らえヘルマン!!

Z P Eを付加した拳だああ!!

—ドンッ!—

「ぬううううう!!」

今度は効いたみたいだな…
起き上がったのはこないみてえだ。

「ガニメデさん!？」

ようやく頭冷えたかネギ坊主…

「おい坊主、齒くいしばれ。今度は前回より強烈だ」

「えっ!？」

—バシンッ—

「うつ…」

やり過ぎたか…？

まあ手加減したし大丈夫だろ。

「目、覚めたか？」

「え…？」

おいおい…

なんだそのポカンとした顔は…

まだダメか？

「ネギ！！何考えとんのや！！」

「小太郎君？」

「なりふり構わず突っ込むなんて三流のやることやぞ!!」

ほお。

戦いに関しては小太郎の方がわかってるみてえだな。

とりあえず言わせとくか。

「今もガニメデの兄ちゃんが助けなきや危ないところやったんやからな!!」

「えっ!?! そうだったんですか!?!」

「そうや!! 頭冷やせネギ!!」

「……そうですね」

おお。

小太郎が他人を諭すとはな。

ネギ坊主には良いライバルだな。

「ガニメデさん…すみませんでした…」

その様子だとだいぶ効いたみたいだ。

「京都でも言ったら、大局を見失うな。怒りは心だけにしろ。頭は常に冷静にしとけ」

「はい…」

まあ…

俺が言える話でもないんだがな…

「とりあえず無事だったからいいだろ。次から気をつければいい」

「はい…」

随分落ち込んでんなあ。

ネギは背負うからな…

そして下手にウジウジ考えるクセがある。

「そやでネギ！！次から生かせばいいんや！！そうすりゃ強くなるで！！」

「うん…そうだね…そうだねコタロー君」

だが、そんなネギにも良い友が出来たみたいだな。

あんま深く考えねえ小太郎はネギにとつたら良い存在だな。

だから――

友人は大切にしろよ……

「ククク。さすがに効いたよガニメデ君」

ヘルマンの野郎、まだ息があったか……

「君の情報が無かったのが残念でならんよ」

情報？

やはり何か目的があったのか……

「ああそうかよ」

「ククク。つれないね。まあいいでしょう…それよりもネギ君…」

「え！？僕ですか？」

「いいのかな？私にトドメを刺す絶好の機会ではないのかな？私は喚ばれた存在、このままだと還るだけだ。また君を襲うかもしれないよ？」

「トドメは刺しません」

こいつは驚いた。

さっきみたいに暴走するかと思ったが…

「ほお。何故かな？」

「ヘルマンさんは確かにあの時に僕の村にいたかもしれませんが。ですが、それは喚ばれたからであって、ヘルマンさんの意思とは関係

ありません…だから…トドメは刺しません」

ハッ！

坊主らしい答えだ！

「フハハハハッ！君の口からそんな言葉を聞くとは思わなかったよネギ君」

全くだ。

本当に坊主らしい…

だが…

その甘さが枷になることもあるんだぜ…

「折角だ。一ついいことを教えよう。石になった人々は、強力な魔力…とりわけあの少女の力なら元に戻せるかもしれないよ」

「…ありがとうございます」

「フハハハハッ！この私に礼を言うのかね。全く甘いネギ君だが…」

「また会うのが楽しみだ」

ヘルマンの野郎、ようやく消えたか…

全く不吉な発言残していきやがって…

「あっガニメデさん！」

ネギか。

何だ突然？

「ん？何だ？」

「そういえば捕まっていた皆さんは何処ですか？」

あ…

忘れてたぜ…

「ジュピター、指定座標の量子ステルスを解除。フォトンコントロール終了しろ」

それにしても超の発明はすごいな。

本当に姿が消えたぜ。

空間ごとまとめて光学迷彩でステルス状態にするとはな…

さすが、”未来人”か。

「ネギ、小太郎。お前ら後始末頼むわ。じゃあな」

「え？ちょっとガニメデさん！？どういう…っ皆さん！！」

悪いなネギ坊主。

さすがに裸の奴らを見るわけにはいかねえ。

なんか背後から色々と悲鳴が聞こえるが…

まあ無視だ。

俺はさっさと帰らせてもらう。

「待っていたヨ。イオさん、ガニメデさん、カリスト先生」

「はいはい…んじゃとりあえず何か食わせろ」

フフフ。

ガニメデさんらしいネ。

「肉まんならあるヨ」

「ありがとうよ」

量子存在であるガニメデさんはそこまで食べる必要はないガ…

きつと…

ガニメデさんはそれをわかって食べてるネ…

「私ももらえるかな？」

「はいお待ちネ」

「ありがとう超」

珍しくカリスト先生も食べるみたいネ。

「イオさんもいるカ？」

「その必要はない」

イオさんは何時も通りネ。

夜の超包子：

今、ここの周囲50mは完全に閉鎖された空間ネ。

いくら魔法使いでも、このステルスは破れないヨ。

「さて、話とは何だ？」

そう切り出したのはカリスト先生ネ。

「麻帆良祭が近づいて来てるのは知ってると思うネ」

「ああ、なんか随分派手にやるみてえだな」

「そうネ。でもそれだけじゃないヨ」

「世界樹か」

「そうネ。発光が1年早またということは伝えたと思うが、計画も早まるネ」

「ああ、聞いたぜ。だが、本当に大丈夫なのか？」

「ガニメデさんらしくない発言ネ」

「まあそうだが…この魔法使い共の中には色々と手強い野郎もいる」

「確かにそうネ。でもガニメデさんの敵ではないと思うヨ？」

「油断は禁物だ」

「そうネ。だからシナリオは考えてあるネ」

「そうだな…そういうや龍宮にも伝えてあるのか？」

「勿論ネ」

「いよいよだな…」

「ここまで長かたヨ…」

「改めて聞くんが、成功すれば本当に”悲劇”は起きないんだな？」

「カリスト先生らしくない質問ネ。”悲劇”を回避できる”確率”
が上がるだけネ」

そう――

あくまでも”確率”ネ。

仮にこの世界線が回避しても”悲劇”自体は無くならないネ。

「フフ…。そうだったな。急にすまない」

「気にすることは無いネ。だが…」

それでも私は止めないヨ。

そう――

「私はその”確率”に全てを掛けるつもりネ」

第49話「狭間に揺れて」

「私はつくづく何をしてるのだろうな…」

今日は災難続きだ…

これで何回目のため息かわからない…

「カリスト先生！そっちに逃げましたっ！」

必死になりすぎだ桜咲…

君はそんな目付きの生徒ではなかったはずだ…

やれやれ…

今の状況を自嘲を堪えて説明するならば—

今、私は”幽霊”を追っている…。

何でも3Aに”幽霊”が現れたとかで、討伐隊が結成されたらしい。

それはまあいい…。

が――

何で私までその討伐隊に含まれているのだ…？

「私の魔眼からは逃れられないぞ！」

龍宮…その発言は軽く失言ではないのか…？

一般の生徒もいるんだぞ？

――パシュッパシュッ！――

”や、やめてくださーい！！！”

それに…

超が渡してきたこの除霊銃とやら…

この世界線の科学技術を明らかに逸脱している。

そのようなオーバーテクノロジーを生徒に配布する精神が私にはわからない…

加えて…

”幽霊”という表現は止めてほしいものだ。

軽く頭痛がする…

”高次情報集積連続体”と呼ぶべきだ。

まあこの世界線の水準では仕方のない話か。

これがジェネレーションギャップ(?)というやつなのだろうか？

「さあ追い詰めたぞ悪霊!!」

どうやら事態は収束に向かっているようだな。

”ひいゝ!!ま、待ってくださいゝい!私は皆さんとお友達になりたいただけなんですゝ!!”

先程からこの”高次情報集積連続体”をジュピターでプロットしているが…

特に害のあるエネルギー体では無いようだ。

「桜咲」

「はい？なんでしょうか？」

「何も退治する必要性はないのではないか？」

「え？」

「私に少し話をさせてくれ」

「えっ？あ…別にいいですが…」

「カリスト先生幽霊と会話できるんですかっ!？」

ネギ君、驚きすぎだ。

私からすれば、杖一本で空を飛ぶ君の方が信じられないよ…

さて――

どうしたものか…

――ジュピター、想念の振動数を高次情報集積連続体に同期――
これで意思は伝わるはずだ。

「相坂さよ…だったか？」

” えっ…!?! はいそうですっ!! 私のことわかるんですかっ!?! ”

「わかるさ。ところで、君は友達が欲しいのだな？」

まさかこの私が”幽霊”と会話するとは…

”はいっ！！でも…誰も気づいてくれないし…失敗してばかりだし…私なんとかと友達になってくれる人なんて…”

これはまた随分と悲観的だな…

「それならば、私が友達になろう。これで問題はないはずだ」

”えっ？”

「私では嫌か？」

”そ、そんなことはありませんっ！！とっても嬉しいですっ！！”

「それに私だけではないと思うぞ?…なあネギ君?」

「えっ? あ…っはい!! 僕でよければお友達になりましょう!」

フフ…

やはり素直な少年だ。

「そういうことならこの報道部突撃班、朝倉和美も一肌脱ぐよー!
!これからお友達としてよろしくね、さよちゃん!」

「私もー!!」

「あたしもいいよー!」

「お友達お友達♪」

” 皆さん…”

フフ。

嬉し涙を流す” 幽霊” か…

この3－Aは本当に良いクラスだな…

” ありがとうございます”

「おー！！成仏した！！」

「やったー！」

「一件落着だねっ！！」

” えっ！皆さんっ！私成仏してないですよー！”

全く一件落着していないみたいだが…

まあいいか…

「おいイオ…」

俺は今日もマクダウエルの家に来ている。

理由はわからない…

全く論理的ではない行動―

それは自分でも自覚している。

「何だ？」

「その…なんだ…」

マクダウエルは吃りながら視線を反らした。

何故だ？

俺にはわからない。

俺に感情は理解できない。

「お前の…寿命は…あと…どれくらい…なんだ…？」

何故だ？

何故それほど顔を歪めている？

つらいのか？

あくまで俺の寿命のことだ。

マクダウエルへの関連性はない。

何故だ…？

「正確な日数は不明だ。が、概算では2、3年だ」

実際にどうなるかはわからない。

明日である可能性もあれば、数年先である可能性もある。

ただ一つ確実なのは、数年以内には必ず”消滅”するということだ。

「…そうか……………」

これは事前にわかっていた事実だ。

二重の量子化による身体の拒絶反応。

覚悟もしていたはずだ。

いや、その事実を知っても何も感じなかった。

だが…

何故だ…？

今のマクダウエル表情を見ると…

「私は不老不死だ。余程のことがなければ生き続ける…」

不老不死。

原理は不明だが、実際に観測された事象だ。

認める以外にない。

「その分、人よりも多くの別れを体験してきた…。だからか知らんが…、私は別れを当然のことと割り切って生きてきた…」

俺にはわからないが、そういうものなのかもしれない。

マクダウエルは窓の外を見つめているが―

このような姿を、”寂しそう”と言うのか？

「だが……今回ばかりは割り切れんだろうな……」

「そうか……」

このような場合、何を言えいいのか不明だ…

俺にはわからない…

俺にはわからないんだ…

「よお超、順調か？」

ガニメデさんの方からここへ来るとは珍しいネ。

「ガニメデさんカ…。今のところ全て順調ネ」

だが、イレギュラーはつきものネ。

「そりゃよかった。世界樹付近のZPEも上昇し始めてるぜ。カシオペアはいつ頃から使えそうだ？」

「この上昇値から考えると麻帆良祭の初日には使える計算ネ」

「わかった。で、”本命”の方はどうだ？」

そう…

それが一番の問題ネ。

「やはり最終日になりそうネ」

「なら、それまでは露骨には手が出せねえって訳か」

さすがのガニメデさんもわかってるみたいネ。

「そうなるネ。でもあくまで”露骨に”ネ」

「フハハ！そうだな。中々面白そうなステージを用意してくれたみてえじゃねえか」

本当にガニメデさんにはちょうどいい舞台ネ。

「だが、余り派手に暴れられても困るヨ？」

「俺はコソコソ裏で動くみてえのは苦手だな。悪いがそういう仕事

はイオかカリストに頼んでくれ」

ガニメデさんらしいヨ…

「わかてるヨ。ガニメデさんにしてもらう仕事はちゃんと決めてるネ」

「そうかい。そりゃ楽しみだ」

計画は練ってあるネ。

私は…

必ず成功させるヨ。

”おいカリスト”

ん？

特別回線のZPF通信…

ガニメデか。

「どうしたガニメデ？」

”定期報告に関してなんだが…”

なるほど。

その話か。

そろそろ機関に定期報告をする時期だな。

”さっきイオと話し合ってたな、俺が報告に戻ることにした”

そうか。

今回はガニメデが私たちの世界線に戻るのか。

「了解だ。気をつけてな」

” ああ？何時もやってることだろ？何だ急に…？ ”

何時もやってること…

しかし…

「確かにそうだが…お前は気づいてるか？」

” 何にだ？ ”

「最近、上の動きがおかしいということだ」

そう…

最近、明らかに不自然だ。

何かを隠しているように感じられる…

私の思い過ごしか…？

” ああ…確かに。議長とスルトの野郎が特にな”

やはりガニメデも同じことを感じていたか…

最近になってこの世界線の情報をやたらと報告内容に入れてくる…

何故この世界線の情報を？

テーベとは別の目的を感じる…

冷静に考えればコード0014に関しても不自然な点が多い。

「とにかく機関の動きには気をつけてくれ」

嫌な予感がしてならない：

” ああわかったぜ。お前もこっちでへマすんなよ ”

フフ。

お前のそんな口調を聞くと何故か大丈夫な気がしてくるな。

「わかっているさ」

” じゃあ通信切るぞ ”

「了解だ」

世界選択機関：

我々は一体何者なのだろうな……？

「議長、例の世界線に関する報告です」

「うむ、聞こう」

「一次報告によると、この世界線には”魔法使い”と自称する集団が存在します」

「ハハハハハッ！！スルト主任、本気かね？」

私も正直理解できませんが：

”魔法使い”：

「はい。彼らはZPEを魔力と捉え、我々とは全く別の形式でZPEを行使しています」

「ほう…」

「試験機ミマスを破壊した存在も魔法使いであると推測されます」

全く厄介な存在です。

「成る程。ならば彼らは我々の障害だな？」

「はい。間違いなくEXODUSの弊害となります」

ジュピターも無しに――ましてや量子存在でもない者がZPEを行使するなど…

「ならばやることは一つではないのかねスルト主任？」

「はい。障害は排除せねばなりません」

そうです。

我々には他に方法が無いのですから…

「所で、ジュピターどもの報告はどうした？」

「間もなくナンバー0003が定期報告に來ます」

ガニメデ君ですか…

彼はあまり定期報告に来ませんが：

何時もはイオ君かカリスト君です。

どういう風のふきまわしでしょうね？

” おい… ”

おや、噂をすればガニメデ君からZPF通信が来ましたね。

” 今部屋の前まで来てる…早くドアを開けろ ”

彼にしては早いですね。

まあいいでしょう。

「議長、ナンバー0003が定期報告に来ました」

「ならばさっさと始めたまえ」

「了解しました。ドアロック解除します」

—パシユツ—

久々にガニメデ君を見ますね。

元気そうで何よりです。

「定期報告に来た。これが報告資料だ」

「ご苦勞。もう下がっている」

「……………」

おや…？

「どうした？下がれと言っているのだぞナンバー0003」

ガニメデ君は議長を睨んだまま動く気がないようですねえ。

どうしたのでしょうか？

「…一つ聞きたいことがある」

おやおや。

ガニメデ君が自ら議長に話し掛けるとは珍しい。

「何かな？手短に済ませたまえ」

「てめえらの目的は何だ？」

「……………」

……。

「突然何だね？我々機関の目的は世界を悲劇から救うこと…今更そんなことを聞いてどうする？」

「……そうかよ」

ガニメデ君…

君は何か余計なことを考えているようですね…

非常に煩わしい。

「質問は以上だ。邪魔したな」

…出ていきましたか。

彼の洞察力を見誤っていたようですね…

カリスト君…いえ、イオ君の影響でしょうか…？

「…スルト主任」

「はい…」

「私は確信したよ…」

確信、ですか…

「やはり意思を持った量子存在ほど危険なモノはない…」

同感しますよ議長…

「ガニメデっ!？」

ん…誰だ？

「ガニメデだっ!？」

ああ、エララか。

「よおエララ。懐かしいじゃねえか」

「今戻ったのか？」

「ああ。定期報告でな」

「そうであったか：戻ったのはお前1人か？」

ククク。

わかりやすい質問だぜ。

「悪かったな、イオじゃなくて」

「なっ！！」

ククク。

その反応、わかりやすすぎだぜ？

「何を言っている!! わ、私は別にそういう訳では…」

「はいよ。まあ冗談はおいといて、お前らは変わらないか？」

「…？ ああ。特に異常はない」

「そうか…」

とりあえず”まだ”大丈夫みたいだな…

「ガニメデ、帰ってきていたのですか」

「声くらい掛けろよな」

おお、今度はガミガミ女とレダか。

「よお。ヒマリア、レダ」

こいつらも元気そうで安心したぜ。

「全く…帰ってきたなら一声掛けるものですよ…」

またお得意のガミガミか…。

「はいはい悪りい悪りい」

「全然反省していないでしょう!!」

ククク。

本当に元気そうで安心したぜ。

「こらガニメデ！！何を笑っているのです！？」

ガミガミも健在みたいだな。

それが：

いつまでも続けば

いいんだがな：

第50話「否定の証明」

「ふざけた名前だ」

この世界の住民はやたらと通り名を付けたがるみたいだな。

―ブラッドアイ―

―漆黒の暗殺者―

一切の慈悲なく、標的を確実に仕留める暗殺者―

標的は必ず無数の剣によって貫かれた無惨な姿で発見される―

どうやら俺はその名前が付けられる位に有名になったらしい。

全く光栄なことだな。

ブラッドアイ、漆黒の暗殺者か：

最近はフェイトからの依頼が連続してたからな。

一々人目なんか気にしてなかったのがマズかったか？

だが、よくまあ俺の容姿を見て生き残ったヤツがいるもんだ。

目と服の色だけみたいだな。

チツ：

面倒くせえ：

あんま広まると色々やりずらくなっちまう：

「すっかり有名人のようだね」

：フェイトか。

相変わらずムカつく言い草だな。

「お前が俺に仕事を押し付けるからだろ。少しは自分でやれよな」

「僕も忙しいんだ。すまないねエゼ君」

忙しい、か。

全くいけすかない。

「で、俺の方の収穫はあるんだろうな？ いい加減フェアじゃなくなってきたぜ？」

そう――

俺たちは仲間じゃない。

あくまでも利用し合う関係だ。

互いにメリットがあるから協力しているに過ぎない。

「まだ彼は見つかっていない。中々情報が集まらないんだ」

チツ。

やはりそう簡単には見つからないか…

「そんなことだろうとは思ってた。で、何か用なのか？まさかわざわざ皮肉を言う為に来たんじゃないだろ」

「そうだね。本題に移るとしようか。実は、彼が君を呼んでいる」

「彼…？ああ、あのデュミナスとかいう変態野郎か」

「主観的判断はやめた方がいいよ」

「はいはい…」

俺を呼んでる、か。

何の用だ？

おそろく…

「で、何の用だ変態オッサン？」

今日はちゃんと服着てるみたいで安心した。

正直、あれはキツイ…

「戯け小僧。今日こそお前の実力を試させてもらう」

おいきなりか。

「別にいいが、頼むからあのよくわからない変身はやめてくれ。目が腐る」

「その減らず口もいつまで続くのだろうか？ お前相手に戦闘形態を使う必要など無い」

「ずべこべ言わずに来いよ」

こいつの戦闘力は侮れない。

影と闇の魔法だったか？

攻撃の手数は豊富だ。

それにあの戦闘形態は面倒だ…

とりあえず慎重に行くべきか…

「いいだろう」

—シュン—

「くっ！」

いきなり影の攻撃か！

—シュン—

チッ！

今のはスレスレの回避だった！

任意の空間から影の槍を出されんのはさすがにマズイな…

何処から攻撃されるかも不明な上にタイミングがわからねえ…

「どうした小僧。こちらを忘れているぞ？」

っ！！

今度は影の短剣か！？

数が多いっ！！

だが…

「こっちだ」

座標転移すりゃ回避は余裕だ。

「圧縮ZPE解放」

背後もらったああ！！

「ふむ」

—パシンツ—

「なっ!？」

圧縮ZPEを障壁で防ぐだと!？

「良い魔力だが…」

何っ!!

消えた…

「背後がから空きだな」

まさか座標転移か!？

「くっ！」

回避は間に合わない！

防御するしかない！

「遅い」

今度は拳かっ！？

—ズコンッ—

「ぐはっ！！」

クソッ：

拳をもろに受けちまった…

強烈だな…

マジで体がくの字に曲がった。

直撃は免れたが…

それでこんだけぶっ飛ばされんのか…

「口ほどにもない。なぜマギア・エレベアを使わない？」

マギア・エレベア？

ああ…

闇の魔法だかなんだかってヤツか。

「アレはそんなチンケなモノじゃない」

確かにどちらも身体が漆黒に吞まれる。

が、全然違う。

マギア・エレベアは闇による侵食だ。

だが――

”アレ”は――

――世界による侵食だ――

俺は精神分割によって情報場が欠如してる為に情報障壁を展開できない。

”アイツ”はジュピターの補助で展開できるみたいだがな……

だからディヴァインを解放した場合、俺は世界抵抗を直に受けるしかない……

体一つで世界抵抗を受けるのは中々キツイがな。

まあ手段なんか選べないから仕方ないさ。

「ほう。ならばそれを証明するのだな」

証明か……

「いいぜ…だが死ぬなよ？」

見せてやるよ。

「ディヴァイン第二解放」

くっ…

やはり解放すると全身が痛いな…

「ふむ」

だがそれがどうした？

この柄のない剣―

ディヴァインブレード…

やはり手に馴染むな。

二刀の構えは連撃を重視している。

さあ、一気に行くぜ。

ショータイムの始まりだ：

まずは肉薄させてもらう。

—パキンツ—

「ぬっ!？」

おいおい。

影の短剣でデイヴァインブレードが防げるとでも？

「デイヴァインとつばぜり合いしようなんてバカの考えだ」

お前の武器はデイヴァインの前で全て紙同然。

—シュン—

また影の槍か。

「甘いな」

ディヴァインを解放した今なら余裕で見切れる。

さあ砕けろ。

—パキンッ—

「同じ手は効かない」

座標転移。

背後はもらった。

「ぬ!？」

咄嗟に障壁を張ったか…

だが…

「無意味だ」

そう—

これは—

”フェイク”だ。

「ディヴァイン、やれ」

「っ!？」

ディヴァインは自律性がある。

故に――

相手の背後に潜ませておくことだってできる。

前方にばかり障壁を張っている今――

背後の障壁など易々と貫ける。

――パリンッ――

「っ!！」

「チェックメイトだ」

”ディヴァイン、静止しろ”

—ピタッ—

「まあ今回は寸止めにしといてやるよ。だが、俺の勝ちだな」

「仕方あるまい。お前の力は確認できた。今回はこれで良しとしよう」

負け惜しみかよ…

「それは良かった」

「これが麻帆良祭か…」

前日の準備段階でこれ程とは驚きだ。

地上は店や出し物で埋め尽くされ、空には飛行機やら気球やら飛行船…。

圧巻だな。

”ガニメデ、聞こえるか？私だ”

おっと。

カリストから通信か。

「ああ聞こえるぜ。どうした？」

”問題が起きた…例の場所に来てくれ。イオも既に集合している”

問題だと…？

まだ麻帆良祭は始まってすらいねえってのに何事だ？

「一体何があった？」

カリストの口調から考えて、少し面倒なことになったみてえだな…

”通信で言える内容ではない。直に伝えるからとにかく来てくれ”

こりゃ相当面倒だな…

「はいよ。すぐ行く」

おそらく計画についてだろうな。

見直しも視野に入れとくべきかもな…

で…

どういふことだよ…

「超、どういふつもりだ？」

カリストも珍しく目付きが鋭いな。

そりゃそうだろ…

なんてったって—

超がネギ坊主にカシオペアを渡したって言うんだからよ…

「すまないネ…」

ネギにカシオペアを渡すメリットなんてないはずだ。

いや、むしろデメリットだらけだ。

こちらの最大のアドバンテージを失うに等しい…

これはある意味、俺たちへの裏切りだ。

「理由を質問する」

気のせいかな？

イオも何時もより口調が冷たいな…

最近、こいつには感情があるように思えるんだが…

まさかな…

「私もわからないネ…」

おいおい…

わからねえって…

「ネギ坊主に…託したかたのかもしれないネ…」

託す、か…

それを言われると俺たちも同じだ。

俺たちだって、超に託したんだからよ…

過去を―いや―未来を改変する意味を。

「まあやっちゃまったことは仕方ねえ。対策を練って計画を組み直そうぜ?」

「……………」

やれやれ。

黙り込むなよカリスト。

「カリスト、過去を悔やんで結局何もしないのが正しい選択か？ 違
うだろ。今できることを為す、それが正しい選択だ」

全くもって俺らしくねえ台詞だな。

「ああ。そうだな…」

本当にこの石頭は石頭すぎるぜ。

まあそこがいいとこなんだがな。

「ありがとネ…ガニメデさん」

「ハッ。礼なら全部終わってから言ってくれ」

そうだ。

全部が終わってから、な…

「ならば、早急に計画を立て直す必要がある」

「ああ。イオの言う通りだ。んじゃ早速考えますかね。頼むぜ、超。こういうのはお前の得意分野だろ？」

「そうネ…。まだ終わってないネ。私の出来ることをやるヨ」

そうそう。

お前はそういうニヒルな笑みが似合うぜ？

まだ、これからだ。

「ど、ど、ど、どうしよう!!」

僕は大変なことをしてしまいましたっ!!

仮眠を取っていたら、すっかり寝過ごしてしまいましたっ!!

「すみません…私のミスです…」

「あ、いえ!違います刹那さん!僕のせいです!」

刹那さんもカモ君も寝てしまっていたみたいです。

でも、本当にどうしよう…

皆さんとの約束を破ってしまいました…

先生失格です…

「そうだ兄貴！！今こそ超からもらったのを使う時ですぜ！！」

超さんから？

あっ！！

思い出しましたっ！

確かカシオペアと言うタイムマシンだとか…

本当でしょうか？

「あの…ネギ先生？それは何ですか？」

そういえば刹那さんにはまだ説明していませんでした。

「えっと…、超さんからもらったもので、カシオペアというタイムマシンだそうです」

「っ！！そんなものが本当にあるんですか！？」

やっぱり信じられないですね…

本物なんでしょうか？

「とりあえず…試しに使ってみますね」

「さて、屋台でも回るとするか」

今日は麻帆良祭1日目だ。

とは言っても午前中は特にやることはない。

まあ折角の機会だ。

自由気ままに食べ歩くぜ。

「あ！ガニメデさんアル！」

…前言撤回だ。

自由気ままに、は無理みたいだ。

「またお前か…なんちゃってチャイナガール。略して”なんチャイ”」

「だからなんちゃってじゃないアル！！」

ククク。

こいつの反応は中々面白いな。

「で、俺に何か用か？」

「別に用は無いアル！」

おい…

威張って言うことじゃねえぞ…

「そうかい…俺はこれでも忙しいから、んじやな」

そうだ。

こっちは屋台回るので忙しいんだよ。

「待つアル！！」

「何だよ…？まだ何かあんのか？」

「ガニメデさんは3-Aのホラーハウスに来ないアルか？出来れば中国武術研究会にも来てほしいアル！」

なるほどな。

こんなとこで何してんのかと思えば、見せ物の勧誘か。

仕事熱心で結構だな。

「悪い。折角が行けそうにねえ。色々忙しくなるからよ」

こっちの”忙しさ”はマジなヤツだ…。

「そうアルか…じゃあ、武道大会にも参加しないアルか？小さい大会アルが、色々開かれてるアル！」

ああ。

それか…

確かまだ超が動いてねえから小さい大会が幾つかあるだけだったな…

「そうだな。まあそのどれかには参加するかもしれねえぜ」

いや—

確実に参加するんだがな。

「本当アルか！？楽しみアル！！」

残念ながら、お前とは当たらないシナリオだがな…

”警告、カシオペアによる世界線転移を確認”

っ！！

ジュピターが感知したようだ！

超か…？

いや…それはない

となれば―

坊主か…

「悪いな、なんチャイ！急用ができた！」

全力で走るか。

「だからなんチャイじゃないアル！」

遠くの背後でなんか叫んでるみてえだが…

まあ無視だ無視。

第51話「終らない約束」

―依頼内容…メガロメセンブリア信託統治領・新オスティア総督―

―クルト・ゲーデルを抹殺せよ―

って…

おいおい…

いきなりレベルを変えやがったな。

フェイトの野郎…

帰ったら覚えてろよ。

まあ所詮は肩書きだけの政治家だろ？

なら余裕だ。

護衛の魔法使いを片付ければ済む楽な仕事だ。

さて…

量子端末起動、振動数上昇。

臨界値突破…

Z P F 接続…完了。

情報値入力、『クルト・ゲーデル』

…照合……完了。

座標値を確定。

さて。

見つけたぜクルト・ゲーデル。

今から行くから待ってろ。

—長距離座標転移—

「お前がクルト・ゲーデルだな？」

無駄に洒落た部屋だな。

「誰かな？私の執務室に勝手に入られては困りますよ」

ん？

護衛は無しか…

それに随分若いな。

その若さでよくもまあ総督なんて立場になったな。

だが…

その経歴が意味を為すのは今夜まで、だが。

「単刀直入に言えば、アンタを暗殺しに来た」

さて、どんな面白い表情を見せてくれるんだ？

今までの奴らは青ざめて震えるだの、護衛を呼ぶだの、中々無様な姿を露呈してくれた。

無様すぎて笑っちまったよ。

”この”俺がな。

「またですか」

あ…？

笑いやがった？

「また…だと？」

こいつ…

全く動揺していない…

「私の様な立場の人間はよく狙われるものですよ。あなたの様な種

類の人間にね」

「そうかい。だが…残念ながら今回は護衛がないみたいだぜ？」

そうさ。

こういう奴らは基本的に護衛によって助かってる。

今、コイツは1人だ。

ならば問題ない。

「クフフ。私には元々護衛はいませんよ」

元々いない、だと…？

「必要ありませんからね」

—キシッ—

刀！？

何処から取り出した！？

それにこの威圧感…

「消えなさい」

何か放ってくる！！

「斬空閃」

くっ！

「ディヴァイン第二解放！」

—バンツ—

ぐっ！

なんとかディヴァインブレードで受け止めたが…

なんだこのふざけた衝撃は？

これが”気”とかいうやつか…？

「おや？今のを耐えましたか」

コイツ…

かなり手強い…

今までの奴らとは格が違う。

あのラカンとかいうオッサンに近いレベルだ…

フェイトの野郎、俺を嵌めやがったな…

「ではこれでどうです？」

チッ！

また仕掛けてくる！

コイツの場合は座標転移はマズイ…

おそらく読まれる…

それに相手は刀だ。

接近は避けるべきか…

” デイヴァイン、障壁形成！”

とりあえずデイヴァインの障壁で防ぐ。

デイヴァインならば貫かれる心配はない。

目の前に広がる漆黒の壁――それを前に、如何なる攻撃も無に帰す。

破れるものなら破ってみろ。

「魔法障壁……いえ、アーティファクトですか？ 無駄ですよ」

何！？

接近されたっ！！

何時の間に！？

そうか……

これが”瞬動”か！！

「斬岩剣――式の太刀」

「っ！？」

何っ！！

障壁を素通りした！？

そんなバカな！！

マズイツ！！

眼前には無慈悲な銀白色を発する刃――

その輝きはまるで相手の命を刈り取る瞬間を待ちわびているよう――

これは…回避できない…

そして刃は目視不可能な速度で振り下ろされた――

視えた瞬間には――

――ザシュッ――

「ぐはっ！！！！」

何が…

起きた…？

「トドメです」

クソ…

頭が回らない…

だが…

二撃目は回避しないと…

やられる！

くっ！

——座標転移——

再び眼前に迫る白銀の刃――

間に合えっ――！

――シュッ――

「おや？ 転位魔法ですか」

よし――

なんとかヤツと距離を離れた。

が――

これは酷いな――

傷は浅くない――

足元に広がる青い液体――

体を走る一本の線――

だめだ……

頭が……回らない。

「その容姿を見て今気付きましたが、貴方はひょっとして”ブラッ
ドアイ”と呼ばれている殺し屋ではありませんか？」

「ああ……総督様の耳にも入っているなんて光栄なことだな」

ここは会話で時間を稼ぐしかない……

この状態はマズイ。

考えろ。

策があるはずだ。

「クフフ。やはりそうでしたか。元老院議員の何名かは貴方に暗殺されたようですからね。名前は知っていますよ」

ディヴァインを高次解放するか…

いや…ダメだ。

この傷を負った状態でこれ以上の世界抵抗は耐えられそうにない…

どうする…？

「仲間を殺されてお怒りか？」

クソ…言葉も出てこなくなってきた…

「まさか。むしろ貴方には感謝すらしていますよ」

何…？

感謝だと？

「どういうことだ？」

いや、ダメだ。

会話の内容よりも策を考えないと…

「元老院の中には腐った連中が山のようになっていますからね。かと言って私が手を下す訳にもいきません…が、それを貴方が粛清してくれたという訳です」

そうだ。

まだ手は残っている。

長距離座標転移。

これしかない。

今は逃げるべきだ。

この状態では勝てない…

「組織の上の連中ってのは何処も腐ってるみたいだな…そう言うア
ンタは違うのか？」

だが長距離座標の演算には時間が掛かる…

コイツから時間を稼がないと…

「私は心底平和と繁栄を願って行動していますよ。もちろん”人間
の”ですが」

量子端末起動…

振動数上昇…

「ああそうかよ…」

ダメだ…

まだ時間が必要だ。

「さて、お喋りは終わりにしましょう」

クソッ！

まだ時間が！

「ああそうです！」アレ”を使う良い機会です」

まだだ…

この様子だと座標は指定できそうにない。

ランダムな場所に転移しちまうが…

仕方ない…

ここで”消滅”するよりはマシだ。

「では覚悟はよろしいですか？」

「何のだ？俺は負けない」

覚悟なんてとっくに捨てたさ…

「その気概は評価しますが…哀れですね。さて…」

臨界値まで後少しだ！！

間に合え！

「A D F 発動」

—ドクン—

何…？

何だ…これは…？

全身が麻痺したように動かない…

一体何を発動しやがった？

この感覚…

まさか…

いや…

そんなはずはない。

「やはりこの”新兵器”は対人に有効なようですね」

何故だ？

何故”アレ”がこの世界線に存在しているんだ！？

「アンチ…ディヴァイン…だと…？」

間違いない。

これはアンチディヴァインだ…

「おや？ご存知でしたか。これは相手の魔力を枯渇させる場を作り出す兵器なのですよ。体が上手く動かないでしょう？」

だがそんなはずは…

何故この世界線に…？

「お前…その新兵器とかいうの…何処で手に入れた？」

「余命幾ばくも無い貴方の質問です。答えて差し上げましょう…これは政府が開発した対魔法用実戦兵器です」

政府が…？

何でこの世界の政府がアンチデヴィヴァインを？

いや。

詮索は後だ！

今は演算に集中だ…！

「さて、気が済みましたか？私も多忙でしてね。そろそろお別れです」

チッ！

体が動かない！

「ですが良い実験になります。ADFの出力を最大まで上げてみましょうか」

——バチバチバチッ！——

「ぐあああああああああ！！！」

く…

アンチディヴァインに体を焼かれる…

意識が…

もう…無理なのか…

「また…会える…？」

「ああ。会える」

「また…星を見れる…？」

「ああ。見れる」

「また…好きって…言ってくれる？」

「ああ。何度でもな」

「…本…当？」

「ああ」

「や…く…そ…く…」

「ああ。約束する」

そうだったな…

約束、したんだよな…

俺は—

まだ消えられない。

まだだ。

まだ終われない。

”臨界値突破”

いいタイミングだな全く…

運命はまだ途切れちゃいないようだ…

「ぐ…長距離…座標…転…移…」

「さて…ネギ坊主は何処だ？」

俺はネギ坊主を探してんだが…中々見つけれんねえ。

麻帆良祭でやたらと人が多いからなんだが…

つと。

ようやく見つけたぜ。

ん？

もう1人誰かいるな…

あれは…確か桜咲刹那だったか？

てか何だあの格好は？

仮装してんのか…？

まあいいか。

「よお坊主。それに桜咲」

「あっ！ガニメデさん！」

「お久しぶりです」

さて…

どうすっかな…

「ああ久しぶりだな。何してんだ？」

「あ…え…と…その…」

おいおい…

不自然すぎだぜ。

まあ確かに”未来から来た”なんて言えないだろうがな。

「あ！そうです！超さんを知りませんか？先ほどから探してるんです」

超か。

概ね、カシオペアについて聞く気だろ。

「超に何か用なのか？」

「あ、はい。ちょっと聞きたいことがありますて…」

やはりな。

「その質問、俺でも答えられると思うぜ？」

「え？ いえ、それはちょっと無理だと思います…」

ところが、無理じゃねえんだなこれが。

そろそろ核心にいくか。

「聞きたいことってのは…」

さて、どう反応するネギ坊主？

「未来”から来たってことだろ？」

「っ！？」

「何故それを!？」

ネギも桜咲も分かりやすい反応だな…

全部顔に出てるぜ。

「お前たちがカシオペアを使って”時間跳躍”したってのもわかってる」

「やいてめえ!何でそこまで知ってた!！」

あ？

誰だ？

って、ああ…

カモミールか。

忘れてたぜ。

「簡単な話だ」

そう――

簡単な話だぜ。

「同じことが出来るのは……お前らだけじゃねえってことだ」

「!？」

「どういことですかガニメデさん!？」

「どういこと? 愚問だな桜咲刹那」

全く愚問だ。

俺はもう答えを言ってるぜ。

「俺も同じように”時間跳躍”が出来るんだよ」

「本当ですかっ!？」

「ああ本当だ。因みに言っておくが…」

お前らは勘違いしてるみてえだ。

「お前らのやってることは”時間跳躍”じゃねえ」

全く違う。

いや—

そもそも”時間跳躍”なんざできねえんだよ…

「世界線転移」だ

第52話「黄昏と共に」

”世界線転移”…?”

ネギ先生が思わず聞き返しました。

私にも意味がわかりません…

「ああ。そうだ」

ガニメデさんはさも当然と言い放っています…

「説明して頂けますか？」

それに、ガニメデさんも時間跳躍ができるというのは…?

「まあ簡単に言えば、お前らはとんだ勘違いをしてるってことだ」

勘違い…？

何のことでしょうか…

「お前らは”過去”に来たと思ってるみたいだが…ここは過去じゃねえ」

え！？

そんなはずは…

「では、ここは一体どこなんですかつ！？」

ネギ先生に同感です。

過去でないなら、ここはどこなのでしょう？

「ここは”他世界線”だ」

他世界線…？

「要は、お前から見て”過去そっくりの”世界だ」

っ！？

「世界ってのはな、可能性の分だけ無限に存在してんだよ」

「え…：？」

ガニメデさんは何を言ってるんですか…？

「可能性の分だけ無限に存在するってことは、当然お前から見て

”過去そっくりの”世界も存在する」

そんな話…

信じられません…

「つまり、お前らはカシオペアで”過去そっくりの”この世界に來たって訳だ。カシオペアは”過去そっくりの”世界線を選択する装置なんだよ」

「本当なんですかっ!？」

「本当もなにも事実だ。あと一つ言っておく…」

っ!？

ガニメデさんの雰囲気が変わりました!

威圧感が…

先程までとは比べものになりません…

「過去」は変えられねえ」

っ！！

何が…？

また雰囲気が変わりました。

ガニメデさんはとても冷たい瞳をしています。

ですが、私には寂しく見えてしまいます…

この感覚は何でしょうか…？

ガニメデさんの言葉が私に深く突き刺さるようです…

ガニメデさんは私たちに向かって言いましたが…

まるで自分に言い聞かせているようです…

それに――

とても重く感じました。

短い言葉の中に様々な”何か”が詰まっているかのような…

私のような若輩者にはわかりません…

たかだか十数年の人生を歩んだ小娘には理解できないのでしょうか…

ですが、ガニメデさんとはそれほど年が離れているように見えません。

ガニメデさん…

貴方は一体どのような人生を歩んで来たのですか…？

「”過去”は…変えられない…？」

ネギ先生も衝撃を受けた様子です。

それはそうですよね…

日頃の様子からすっかり忘れていましたが…

ネギ先生は私よりもさらに若い年齢です。

「ああ。”過去そっくりの世界”に行くことはできても、”過去そ

のもの”には永久にたどり着けない…”過去”は変えられないのさ
…」

過去は変えられない…

お嬢様…

私は…

「だからネギ、お前が変えた”過去”は別世界の”未来”だ。過去の過ちをやり直そうなんて都合のいいことはできねんだ」

やり直すことはできない…

「過ちは消えねんだよ…だからこそ意味があんのさ」

過ちは消えない…

私は逃げていいのかもしれませんが…

ガニメデさん…

貴方は一体何を背負ってるのですか…？

「それに俺はお前らがさっきまでいた世界の”ガニメデ”じゃねえ。
俺は”この世界の”ガニメデだ」

「え？それは一体…」

どういう意味ですか…？

「そりゃそうだろう？お前らは違う世界に来たんだ。だから、俺だって別の俺だ。俺だけじゃねえ。お前ら以外は全て他の世界の別の人間だ」

そんな！？

じゃあお嬢様は！？

私を守るべき、守ると誓った方は！？

「そんなはずはありませんっ！！お嬢様はお嬢様ですっ！！」

信じません！

認めません！

「何に怒ってるのか知らないが、別にこれは”時間跳躍”とは関係なくとも起きてることだ」

…え？

「1秒1秒、常に俺たちは意識的にせよ無意識にせよ行動を選択している。その選択により世界を選び、その世界線に移動―いや―位置している。何もタイムマシンを使わなかったって1秒1秒未来、つまり別世界へ進んでんだよ。今だってそうだ。第三者から見れば”今の”俺は”1秒前の”俺とは別人だ」

そんなこと…

「だから俺そつくりのヤツ——平行存在——なんて無限に存在してんだ。俺だけじゃねえ、お前らの平行存在だって無限に存在してんのさ」

私が…無限に…？

「そんなっ！！じゃあ同じ人とはもう二度と会えないんですかっ！？」

ネギ先生…

私も同じ気持ちです…

私は同じお嬢様とは二度と会えないのでしょうか…

「それは解釈の問題だ。確かに第三者から見ればお前は常に別人の俺と会うことになる」

そんな…

お嬢様…

「だが…お前を基準に考えりゃ、俺は常に同一の世界線上に観測される。すなわち、”ネギ・スプリングフィールドの世界線上”にな。てこたあお前にとって俺は常に同一人物って訳だ。意味わかるか？視点によって解釈は変わるんだ。相対的なんだよ。つまりお前の現実ってのはお前が決めてんだ」

ということとはっ!?

「私から見たお嬢様は常に同じ方ということですかっ!？」

「ああ。その通りだ。安心しな。お前が観測、認識している限り”お前から見たお嬢様”は常に同じ人間だ。ちゃんと守れるぜ」

良かった！

本当に：

「観測されることがいかに大切かわかるか？観測されなきゃ存在確率は発散し、俺たちは存在できない。観測されて初めて”その観測者の同一世界線上”にプロットされんだ」

難しくて私にはよくわかりませんが――

私がお嬢様を思い続けている限り、お嬢様はお嬢様ということだと思います。

「そうだったんですか…凄いです…」

さすがネギ先生。

その御年で大学を卒業し、教師をされているだけありますね。

ガニメデさんの話を理解できているようです。

「だから改めて言うておくぜ」

またガニメデさんの雰囲気が…

「お前がそのカシオペアをどう使おうと勝手だが―」

再び冷たい目をしています…

「“過去”は変えられねえ。”有ったこと”を”無かったこと”に
はできねえ。その逆も然りだ。それだけは覚えておけよ…」

それだけ言うと、ガニメデさんは私たちに背を向けました。

何故でしょうか？

徐々に小さくなっていくその背中は一

酷く悲しく見えます…

”座標値確定”

「く……………」

ここは…？

草原…？

ダメだなこれは…

頭がボウツとする…

—ありがとう—

誰…だ…？

「くっ！！」

痛いぜチクシヨウ…

もう…

立っているのも無理だな…

—バタツ—

ああ…

俺はここで消えるのか…

短かったな…

いや—

長かったか…？

ダメだな…

記憶がバラバラになって来た…

—また…会える…？—

さっきから頭を過るこの少女は誰だ…？

思い出せない…

まあ別にどうでもいいさ。

もう全てがどうでもいい…

—また…星を見れる…？—

それにしても…

綺麗な夜空だな…

本当に。

これが最期の景色なら文句はない。

”警告。量子個体、観測限界に到達。存在確率の発散を確認”

さて…

そろそろ限界か…

瞼が重い…

もう…いいか…

もう…

いいよな…？

俺はもう寝るぜ…

最期くらいは—

良い夢見れば—

いいんだがな…

「大丈夫ですかっ！？」

”観測値増大、存在確率の収束を確認”

あ…？

何…だ…？

世界樹にはある噂がある。

それは――

発光の際に世界樹付近で意中の相手に告白すれば、必ず叶うというものだ。

もちろん私もその噂は知っている。

そして――

それが、溢れ出す世界樹の魔力による一種の強制魔法だとも……

だが、私はそんなことに興味は無かった。

そう――

今までは。

「召喚、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルに従者、イオ」

見回りの連中に気付かれないようにするのは苦労したが、私にはこれがある。

パクティオーカード。

これならば相手を直ぐに喚べる。

喚び出すのはもちろん自らの従者……

さあ来い。

「……!？」

フフフ。

さすがのお前でも、突然知らぬ場に召喚されれば驚くようだな。

中々いい表情を見れた。

「…何のつもりだ？」

アイツの寿命はもう僅かだ…

なら…

「なに、ちょっとした用事を思い出してな」

もうこれしかないんだ…

「世界樹付近は不用意に近づくなと警告されている。この場は不適切だ」

フフ。

相変わらずな口調だな。

「それはわかってるさ。だからこそお前に頼みがあるんだ」

そうさ。

世界樹の魔力によって――

この”頼み”は――

「……？」

拒否できなくなる。

「これからは」

許せ……イオ……

「私と共に生きろ」

残りの寿命は私と共に居てもらう。

どのみち少ない時間だ…

それ位の我が儘は許されるだろ…？

—パツ—

ふむ…

世界樹が発光したようだ。

これで—

「私から離れることは許さん。最期までずっと側にいてもらうぞ」

永遠に生きる吸血鬼と――

余命僅かな未来人か…

中々良い組み合わせじゃないか…

さあイオ。

お前の口から肯定の言葉を聞かせてくれ。

「それは出来ない」

「っ!？」

な…に…?」

コイツは今何て言った…?」

「貴様! 何故拒否できる!?! 何故拒否する!?!」

世界樹は確かに発光している！

なのに何故だ！？

「事前に世界樹の強制魔法については聞いていた。既に対処はしてある」

なん…だと…？

「貴様…私の…私の思いを踏みにじったな…」

私が！

私がどんな思いで言ったかも知らず！！

「何をそこまで激情しているのか不明だ。説明を要求する」

コイツ…

「ふざけるなっ!!」

―パチンッ―

私は溢れる感情のままに身長差も無視してイオの頬を叩いた。

「……………」

何故だ？

なんで何も言わない!!

イオは冷たい瞳をしているだけだ…

初めて会った時の瞳だ…

やめろ…

そんな瞳を私に向けるな!!

「もういい！！貴様など私の従者ではない！！」

私は…何を言ってるのだ…？

きつと取り返しのつかないことだろうな…

だが…もう私もどうしたらいいかわからんだ…

「どこかへ行ってしまえ！！私の家にも二度と来るな！！私に二度と近づくな！！」

もう…取り返しはつかないな…

「ああ。了解した」

イオ…

「では失礼する」

行かないでくれ…

だが…

私はそれとも言えない…

小さくなって行くイオの背中を止める術が私にはない…

私は…

こんなに弱かったのか…？

それにこの感覚…

何故だ…？

アイツとは…

もう二度と会えない気がする…

第53話「開かれた扉」

「ガニメデさん、ようやく仕事ネ」

さて…いいいよか。

「ああ。まほら武道会だったか？俺向きの舞台だ」

まあ本当の戦いじゃねえがな。

「まだ予選ネ。ここで本気を出されては困るヨ？」

そうだったな。

「ああ。わかってら…んじゃま、適当にやってくるぜ」

「聞いたかネギっ！！大きな大会があるみたいやで！！俺らも男なら出場せんとなっ！！」

コタロー君は凄く嬉しいそうです。

「うん。僕も参加するよ」

ガニメデさんの話を聞いてから色々と考えました。

が…結論は出ませんでした。

でも、決めたんです。

もう振り返らないって。

「ならさっそく手続きしようやっ！」

僕は出来るだけのことをやります。

それが全てだと思えたんです。

だから、今は気持ちを切り替えてこの大会に参加しますっ！

「ほらネギ、あっちが受け付けみたいよ」

あっ本当です。

「ありがとうございますアスナさん」

僕はアスナさんに助けられてばかりですね。

「何よ急に改まって…ガキンちよはガキンちらしく騒いでればいい

いのよ」

やはりアスナさんは凄いです。

何時もは少し頭が弱いように見えてしまいましたが、とても優しく、とても強いです。

僕は考えすぎなのかもしれないですね…

「はい！じゃあさっそく手続きしてきますっ！」

「あっ！待てやネギ！」

「師匠までっ！？」

ん？

あれは…ネギたちか。

小太郎に…吸血鬼幼女に…龍宮…桜咲…なんチャイ…神楽坂…そして—

タカミチか…

明らかに周りから浮いてる集団だな…

ここに居る奴らでほとんど本選の枠決まっちゃもうんじゃねえか？

「もうダメだよコタロー君…勝てる気がしないよ……」

「何言ってるんやネギ！！強い相手と戦うチャンスやんか！！弱気なってどないすんねんっ！！」

なるほど。

どうやら参加者にビビってるみたいだな。

「よお坊主。また会ったな」

さて、ネギ坊主はあれからどうしたのかねえ。

「ガニメデさんっ!?!」

「!?!」

おいおい…

ネギと刹那2人して露骨に警戒すんなよ…

さすがに傷付くぜ。

「どうだ? あれから腹は決まったか?」

坊主はどう考えたのか。

それが問題だ。

俺たちのような考えだったら…

ここで”正す”必要があるな。

「はい」

意外とイイ目をしてやがるな。

「なら言ってみろ」

その輝きが本物か―

確かめさせてもらうぜ。

「あれから考えてわかりました…確かに過ちをやり直そうというのは間違っているかもしれませんが」

そうか…

「だけど！」

その輝きは―

俺には眩しいな…

「縦え違う世界の未来だったとしても、それを変えようと出来る限りのことをするのは間違いないと思います！」

なるほど…

やはり坊主は俺たちとは違うな…

「私もそう思います。どんな世界のお嬢様であろうと、私は区別なく全てのお嬢様をお守りします」

桜咲もそのようだな。

どうやら杞憂だったみてえだ。

「そうか。ならその思い、必ず貫けよ」

もう言うことはねえ。

「さっきから何の話をしてるんだい？」

タカミチか。

「まあちよつとな」

少し喋り過ぎたみてえだな。

「そうかい。所で、ガニメデ君は大会に参加しないのかい？」

「そうアル！ガニメデさんも参加するアル！」

まあなんチャイとは当たらないと思うがな。

「当然参加させてもらうぜ。お前らみてえなのと戦える機会はそうそうないからな」

「「えっ!？」」

あ？何だ？

ネギと小太郎2人そろって驚いたみてえな顔してるが…

「コタロー君、やっぱり優勝は無理じゃない…?」

「ネギ、今回はお前に同意や…」

おいおいおい…

俺よりヤバイ奴らがいるじゃねえか…

俺なんかでビビるなよ…

「エゼ君が総督の暗殺に失敗し、行方不明となりました」

やれやれ…

面倒なことになりました。

「あ？冗談だろルシオラ？」

露骨に不満な口調の彼―アンディメ。

漆黒の服に身を包み、体格の良さが目立つ身体。

その白い仮面の穴からは寧猛な黒い瞳が見え隠れする。

「冗談ではありません。計画を変更します」

エゼ君。

やはり期待外れでしたか。

「B計画か？」

無機質な口調の彼女―アイ。

同じく漆黒の衣を纏い、灰色のショートカットが印象的な少女。

白い仮面から見える深蒼の瞳はまるで機械のよう。

「はい。その通りです」

本当に面倒なことになりました。

「ちょっと待て！」 あ の ” エゼが本当に負けたのか？ 抑制剤でも切れたのか？」

アンディメ君が驚くのも納得できます。

「いえ。彼にはあと3本ほど渡してありました。どうやら、私たちの知り得ない要因があったようです」

正にイレギュラー。

「あの世界線に無いはずのモノがありました」

『完全なる世界』からの依頼に偽装した指令をエゼ君に通達し、総督を抹殺するよう仕向けましたが…

ダメでしたね。

「無いはずのモノ？」

「はい。アンチディヴァインです」

「なっ!？」

初めて知った時には私も耳を疑いましたよ…

まさかアンチディヴァインがあるとは…

「おい！どういことだ！？」

「おそらくですが：あの世界線のオスティア政府と機関が何かしらのコンタクトを取った可能性があります」

私たちの”過去”とは違った分岐を見せましたね。

「新たな量子存在の介入か？」

私もアイ君と同じ考えに至りましたが：違うようです。

「いえ。どうやら機関がゲートを使用したようです」

「マジか！？」

ゲート――

世界線と世界線が干渉する特異点。

量子存在以外も世界線転移が可能な唯一の道。

”あの悲劇”によって生じた産物……

”あの悲劇”によって交わるはずのない世界と世界が干渉してしまいました。

いえ――ある意味では必然だったのかもしれませんが……

2つの世界は互いに悲劇を迎えました。

片やZPE――魔力と言った方がいいでしょうかね――の枯渇。

片やZPEの暴走。

「全世界強制認識魔法の発動までもう時間はありません。私たち残されたのは最終手段のみです」

そうです。

阻止する為には……

”自ら”の過ちを繰り返さない為には：

もう時間がないのです。

「マジかよ…出来ればやりたかなかったんだがな…」

それには私も同意しますよアンディメ君。

「仕方の無いことです。私も気が進みませんよ」

「そりゃ自分の教え子と戦うことになるかもしれねえしな。なあ
■■■■先生よ？」

アンディメ君…言っていることと悪いことがありますよ？

「昔の話です。それに彼女たちは”私の”生徒ではありませんよ」

「ククク。悪かったな。冗談だ冗談。気が向かねえのはお前だけじゃねえ。俺だって同じだ」

少し殺気を放ちましたが…アンディメ君には効果がないようですね。
やれやれですよ…

「それに―”自分”を”自分”で倒すってのは中々シニールだぜ？」

全くですよ…

「私は”彼”を見ると死ぬほど嫌気がしますよ…本気で世界を変えられるとでも思っているんでしょうかね？」

「おいおい。一番初めに協力する約束をしたのは確かお前だったぜ？」

…そうでしたね。

「尚更嫌気がします。まあいいでしょう。」私”の処罰は”私”が
します」

”お待たせしました！それでは！まほら武道大会予選を開始します
っ！”

おお。

ステージも演出も中々手が込んでやがるな。

さて…

俺のグループの相手は…

「ゲッ!! 兄貴っ!?!」

「っ!!」

「マジかよっ!?!」

「終わった…」

って…コイツらかよ…

よりにもよって4人まとめてか…

「よお。久しぶりだな」

他の奴らは…

まあ大したことねえみたいだな。

「兄貴…やっぱり参加してたんすね…」

「何だ山下？俺がいたら悪いのか？」

「い、いえ…」

ククク。

見事な苦笑いだな。

まあコイツらは他のに比べりゃ強いのは確かだ。

「隙ありっ！！」

—ブンツ—

ああ。

他の参加者もいたんだったな。

「雑魚は引っ込んでろ」

―ボスン―

「ぐはっ」

” おおっとガニメデ選手！いきなり1人を殴り飛ばしましたああ！
さすがは『闇夜の死神』っ！！”

「げっ！！アイツがあのだ死神かよっ！！」

「ヤバい！！勝ち目無いって！！」

おい…

ごちゃごちゃと…

「うるせえ外野だな…」

—バシツ—

「うはっ！」

—ドンツ—

「うぐっ…」

—バンツ—

「…！へっ！」

よし。

邪魔者は片付いた。

”これは凄い！ガニメデ選手が次々に相手選手を場外へ吹き飛ばしましたっ！！”

いちいちうるせえぞ朝倉：

「さて、邪魔な奴らは退場してもらった。残るは俺とお前たちだけだ」

「……」

ーゴクンッー

生唾飲む音が響くほどに静寂したステージー

そこに佇む5人の男たちは互いに向かい合って対峙した――

「お前らは確かに前よりは強くなった。予選を突破する実力もある」

なんせこの俺が鍛えたからな。

「だが、本選の奴らは甘くはない。お前らの現状じゃまだまだだ」

そう――足りねえんだよ。

「だから、ここで俺が最後の訓練をしてやる。一番最後まで立って
られたヤツが俺と本選に進む……」

わかりやすくていいだろ？

「覚悟はいいか？今回は本気だ」

「」「はい!!」「」「」

ハッ!

その威勢は認めてやるよ!!!

「さあいくぜ…」

まずは…豪徳寺、お前だ。

——座標転移——

「甘いですよ兄貴!!」

——パチンツ——

ほお。

受け止めやがったか。

だが…

「お前もな」

——座標転移——

再び背後に回る。

「っ！！」

連続して転移することだってできるんだぜ？

背後からの拳——

しかも体勢は崩れている。

これは防げねえだろ。

—バシッ—

「くっ!!」

「!?!」

驚いたぜ…

その体勢から受け止めやがったか。

それは誉めてやるが…

「圧縮ZPE右腕解放」

悪りいな…

—ドンッ—

「かはっ!!」

至近距離からのZPE解放。

気付いた時には場外だ。

だが…奴らはもっと理不尽な強さだ…

それに耐える為には、この程度なんとかしねえと話にならねえ。

「まだ足りねえ!お前らが戦うのは理不尽な強さの奴らだ!全力かつ本気で来い!もっと気合い見せろ!」

「はあああっ!」

—パシッ—

中村か…

中々重い拳だ。

受け止めた時の衝撃はそれなりだな。

”気” ってやつか。

「突っ込むだけじゃ勝てねえぜ？」

「てあっ！」

「うおおおおお！！」

今度は全員で来たか。

まずは中村の拳を体を反らして回避し――

その体勢が崩れたところを蹴り飛ばす――

もちろんZPEを付加した足でな。

―バゴンッ―

「うっ」

ZPEを付加した状態の蹴りは受け止めても意味ねえ。

衝撃は抑え切れずに場外へサヨナラだ。

これで2人目―

次に大豪院の拳を受け止め―

「圧縮ZPE左腕解放」

―バスッ―

「ぐおおおっ！」

「！！！」

何っ！？

Z P Eを受け止め切りやがった…

「今だ山下！！！」

っ！？

「うおおおおお！」

しまった！

腕を押さえられて動けねえ！

この状態じゃ座標転移も間に合わねえな…

防御するか…

「今だっ！！」

「なっ！？」

足払いだっ！？

チッ！

山下にばかり意識を向けてしまってたっ！

「くっ！」

ヤバいな…

もろに喰らっちゃった。

―バタッ―

体勢が崩れてステージに仰向け状態―

そして体は大豪院に押さえられ無防備―

そこに迫る山下の拳―

「やるじゃねえか」

こりゃ回避できねえわな。

―ドスン―

山下の垂直に落ちる拳はガニメデを捉えた―

その衝撃でステージにクレーターが出来上がる――

粉塵が舞い、山下と大豪院は距離を空けてその中心地を見つめた――

” おおっとガニメデ選手！まさかの直撃っ！大丈夫なのかっ！？”

「兄貴はこんなもんじゃやられないっすよ」

「全くだ。兄貴はこんなもんじゃない」

ククク。

言ってくれるじゃねえか。

それにしても：

中村はわざと俺の蹴りを喰らいやがったな。

あれで俺はその場から動けなくなった。

そこへ座標転移させる暇もなく大豪院が拳を放ってきた。

俺は当然受け止めた。

が、大豪院はそれを狙ってたみてえだな。

受け止めた腕を固定し、俺の動きを封じた。

そして山下の攻撃。

俺が山下に気を取られた隙に大豪院が足払い。

そして倒れた俺に山下が全力の拳を放ったってどこか…

見事なチームワークだな。

成長したじゃねえか。

だが―

本選は1対1だ。

「中々効いたぜ」

”ガニメデ選手、立ち上がった!!”

「さて、続きといくか」

「はい！」

ハッ！

良い返事だっ！！

第54話「連鎖の果てに」

「なんなのだろうな…」

また思わず溜め息をついてしまった…

「まさか本当にアレを出してくるとは…」

私の目の前には明らかに異質な人物…

いや…

機械と言った方がいいだろう。

超の量産兵器、” T | A N K | α 3 ”

愛称は田中さん…だったか…？

全く愉快的なロボットだ…

それに…

—カパッ！—

「ひいひいっ！！」

「……………」

口から出しているあの光線…

当たったら服だけ吹き飛ばすと聞いて冗談だとばかり思っていたが…

見事に本当のことだったようだ。

駄目だ…

頭痛がしてきた…

まあ出力を敢えて弱く設定しているからだとは思うが。

「仕方ない…」

超からは実戦データを取りたいから破壊して構わないと言われているが…

—カパッ！—

「ひえっ！」

「……またか」

あのビームには”絶対に”当たりたくない！！

まあ結論から言えばだ。

俺と山下が予選を突破した。

大豪院は俺のZPEを耐えたので限界だったようだ。

イオとカリストも無事に通過したみてえだ。

まあ当たり前だが。

だがイオのやつ、ちょっとやり過ぎだったな…

何かあったのか…？

「ガニメデさん、ボウツとてしますが話聞いてましたか？」

コイツの名前は確か葉加瀬聡美だ。

予選が終わってから超たちと会議中なんだが、どうにもボウツとしてみたいだぜ。

「ああ悪い。聞いてなかった」

この葉加瀬ってのは超からの知識と持ち前の頭で、明らかにこの世界線水準を越えたメカを造ってるガキだ。

魂を悪魔に売り渡したマッドサイエンティストとか自称してたな。

だが…

「…ハア。じゃあもう一度言いますね」

本当のマッドサイエンティストはこんなもんじゃねえよ…

「ああ。頼む」

「世界樹の魔力の観測結果から、強制認識魔法の発動は予想通り最終日に決定しました。ですので明日はまだ学園側に対して明確な敵対姿勢は取らないでください」

チッ。

折角、いけすかねえ”魔法使い”共を潰してやろうと思ってんのに

よ。

「ただし、学園側がこちらの動きに気付いて行動を示した場合は極力目立たないように応戦してください」

面倒くせえ。

「特に、ガニメデさん。気を付けてくださいね」

何だよ…

全員してその目は…

「全くだ。計画を台無しにするなよガニメデ」

石頭…お前もな。

「はいよ…」

「それでは明日の本選について説明します」

いよいよ本選か。

「本選のルールは予選と同じです。銃刀類、殺傷性の高い武器は使用不可です。皆さんには関係ないでしょうが一応魔法詠唱も禁止です。そしてこれがトーナメント表です」

『第一試合』

「ネギ・スプリングフィールド」vs「神楽坂明日菜」

『第二試合』

「龍宮真名」vs「Callisto」

『第三試合』

「クウネル・サンダース」 v s 「佐倉愛衣」

『第四試合』

「長瀬楓」 v s 「山下慶一」

『第五試合』

「タカミチ・T・高畑」 v s 「G a n y m e d e」

『第六試合』

「古菲」 v s 「村上小太郎」

『第七試合』

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル」 v s 「高音・D・グッドマン」

『第八試合』

「桜咲刹那」 v s 「I O」

ほぼ全員知り合いだな。

まあ超の予想通りだが。
シナリオ

てか…

ひよっとしたらなんチャイと当たるかもしれないな。

ククク。

何だよ。

楽しくなってきたじゃねえか。

「私は龍宮とか…」

「お手柔らかに頼むよカリスト先生」

初めに舞台を盛り上げて注目を集める…

その役はカリストと龍宮か。

「同業者として楽しみだよ先生」

「お互い銃を奪われた上での戦いだけだな」

さて――

俺にも仕事があるみてえだな。

「わかてると思うが、この本選にも目的は2つあるネ。1つはネット操作による魔法の拡散と陽動ネ。2つ目は学園側の戦力削減ネ」

最終日までには学園側に計画が気付かれたらマズイのは確かだ。

だから露骨には学園側と敵対できねえ。

だが……

武道大会ならどうだ？

武道大会なら学園側と交戦しようが何の問題もねえ。

力加減を誤っちまって相手を潰すことだってあり得る訳だ。

タカミチ――

悪いが――

潰させてもらうぜ。

麻帆良祭の開催中は学園内はどこも人で賑わいを見せている――

だが、そんな中でも人気の無い場所は存在している――

”彼ら”が最初に現れた場所である森の中は静かな闇に包まれていた――

そんな夜の森林の中、無言で佇む少年がいた――

「……………」

俺は何をしているんだ？

自分でもわからない…

ここはマクダウエルの家がある森だ…

何故俺はマクダウエルの家に向かおうとしているんだ？

マクダウエルからは二度と来るなど言われた。

俺はそれを了解したはずだ…

「…理論的でない」

思考が全く理論的でない…

予選の際、マクダウエルを見た瞬間にも理論的でない思考に陥った。

何故だ…？

「こんな所にいたのかイオ」

…誰だ？

こんな近くに接近されても気づかなかったのか…

「私だ。カリストだ。そう警戒するな」

カリスト…

何か用件があるのか？

「その顔は、”何か用か？”という顔だな」

っ！

「ククク。そして今の表情は”何故わかる？”と言っているな。お前とは長い付き合いだ。それ位顔を見ればわかるさ。お前は無表情に見えて実は表情豊かだよ」

……。

「…本題は何だ？」

「ククク。そう怒るな。まあ用件という用件ではないがな、ガニメデから”イオの様子が何時もと違うから少しアイツを見てきてくれ。俺はそーゆーのは苦手だからよ”と頼まれた。まあそういう訳だ」

ガニメデ…

俺は何時もと変わらない。

その推測は誤りだ。

「ガニメデの発言は不明だ。俺は何も異常はない」

「まあアイツはお前を心配してるんだろう」

心配…

俺にはわからない感情だ。

「で、何かあったのか？確かに様子がおかしいぞ？」

おかしいのか…？

「何でも無い…」

自分ではわからない。

「そうか。ならいいのだがな。余り1人で悩み込むなよ…お前には仲間がいるんだからな」

仲間…。

「…感謝する」

「ハハッ。お前に感謝されると照れくさいな」

照れくさい…

「話が変わるが、明日からいよいよ本格的に学園と対立することになる…覚悟はしておいた方がいい」

先ほど超からも説明があつた話だ。

「理解している」

迷いは無い。

これまでも世界を改変してきた。

これからもそれは変わらない。

しかし――

何か――

何かが――

間違っているように見える――

時は流れ、麻帆良祭2日目――

事態が変化を見せる変曲点――

僅かな溝はやがて大きな溝へと変わっていく――

今はその兆候だけが現れていた――

場所はまほら武道大会本選、選手控えロビー――

そこに、これから起きる出来事の主役たちが集まっていた――

「いきなり一回戦目……それに相手はアスナさんだなんて……」

アスナさんと戦うなんて考えてもいませんでした…

「大丈夫よネギ。私だってそう簡単には負けないわっ！師匠と訓練したんだから！アンタも頑張りなさいよね！」

でも…

「そうだぞ坊主。お前が手を抜くつてのは相手の神楽坂に対して無礼になるぜ」

あ、ガニメデさん。

今日は昔来ていた白い服を着ていますね。

カリストさんも同じ服みたいです。

あの不思議な青い紋様には何か意味があるんでしょうか？

「ここにいる奴らは戦いの場に出ることを自ら決めてんだ。その覚悟がある奴は女だろうがガキだろうが立派な戦士だ。そんな相手に

手を抜くような奴が舞台に上がる資格はねえ」

立派な戦士…

そうでした…

僕は間違っていたみたいです。

「そうですね…僕は真剣にアスナさんと戦います！ありがとうございます！
いますガニメデさん！」

「ハッ。わかりやいんだよ……じゃねえと…これから困るからな
……」

え？

ガニメデさん最後に何か言ったような…

小さくて聞き取れませんでした…

” それでは間もなくまほら武道大会本選、第1試合を始めます!!”

「あっ!もう始まるみたいです!」

「そうね!行くわよネギ!手加減なんてするんじゃないわよ!」

「はい!よろしく願いしますっ!」

「行ったか…」

ネギと神楽坂はステージへと向かって行った。

ここの選手控えロビーからはその舞台がよく見える。

観客は予選よりもだいぶ増えたな。

これなら”計画”の1段階は上手くいきそうだ。

だが…イオの姿が見えねえな…

まあアイツは最終試合だしその内来るだろ。

あと問題なのは、あのフード野郎だ…

クウネル・サンダースなんてふざけた名前だ。

偽名なのがあらさまだぜ。

なあ英雄さんよ…

「やあガニメデ君」

「よお…タカミチ…」

俺にもやることがあんだよな…

「まさか一回戦からガニメデ君とはね。僕も運が無いみたいだ」

よく言うぜ。

お前は間違いなく強い。

学園側ではトップレベルだ。

まああのジジイは完全に未知数だが：

ついでにフード野郎もな。

「そりゃどうも。俺はアンタと戦うのが楽しみだがな」

タカミチを抜いた学園側ははっきり言っちゃえば、”弱い”。

イレギュラーさえ無ければ、だが。

「ハハハ。僕がガニメデ君の相手になればいいんだけどね」

タカミチは傲るタイプじゃねえから実力を計り難い。

今も完全に実力を隠してやがるしな。

さて、それをどう引き摺り出してやろうか…

「ハッ、よく言うぜ。本番では遠慮はなしだ。”本気”で来いよ」

アンタに恨みは無いが、その本気を潰させてもらう…

「勿論そうするよ。所でガニメデ君はこの試合、どちらが勝つと思うかい？」

ん…？

もう試合は始まったみてえだな。

ネギと神楽坂か。

こっから見てる限りじゃ、やっぱネギはどこか力を抜いてやがるな。

神楽坂が木刀で攻め、それをネギが回避してるってどこか。

ネギも隙を見ては攻撃してるが、全部見切られてるな…

ネギが温いのか？

いや…

なんチャイから習ってるとかいう中国拳法の動きは悪くねえ。

別にそこまで手加減はしてねえみたいだ。

まあ門外漢の俺がわかる範囲でだが…

それ以上に神楽坂のガキが随分イイ動きをしてやがる…

「まあ坊主だろうな」

あのガキ、あんな動きできたか…？

「ネギ君か。何故そう思うんだい？」

理由？

そんなんねえよ。

まあ強いて言うなら…

「勘だ」

「ハハハ。ガニメデ君ならではの予想だね」

まあネギにはそう思わせる何かがあるんだろうよ。

「で、アンタはどうなんだ？」

タカミチはどう思って見てんのかね…

「僕もネギ君だと思うよ」

ほお。

「理由は何だ？」

「僕も明確な理由は無いかな。ただ、期待しているのかもしれないね」

期待、か…

ネギに意味を求めらって訳か。

「マギステル・マギ…だったか？」

全く下らねえ称号だ。

聞けば聞くほど吐き気がするぜ…

偉大か否か、立派か否かは他人からの評価で決めるもんじゃねえ。

「うん。もちろん彼には立派になってもらいたいとは思うよ。でも、僕は必ずしもマギステル・マギである必要はないと思う」

ん？

違うのか？

「たった1つ、小さなことでも、それを守る人は立派だよ」

なるほどな…

タカミチ…

アンタはやっぱり”強い”ヤツだ。

戦うに値するぜ…

本当に楽しみだ…

「うっ！」

—ブンッ！—

アスナさん…こんなに強かったんですか！？

動きが的確で追えませんっ！

それにアスナさんの繰り出す木刀は僕の死角を確実に突いてきますっ！

今も危ないところでした…

でも僕だって負けませんよっ！

古菲さんや師匠と訓練してきたんですからっ！

—シュッ！—

「…え？次は右？あ本当だ！かわせた！なんか私凄いい！？」

でもまたアスナさんは簡単に回避してしまいました…

さっきから一度も中りません。

本当に凄いです。

アスナさんがこんなに強かったなんて知りませんでした。

「でもアンタ本当に誰よ？」

だけどアスナさんの様子が少しおかしいような…

さっきから一人言をずっと言ってます。

ちょっと怖いです…

「いいわよそんなアドバイスは…なんかズルいし…」

大丈夫でしょうか…？

「だからもういいって言ってるでしょ！私は実力でネギと戦うわよ！」

「あの…アスナさん？さっきからずっと一人言を言っているみたいですが…大丈夫ですか…？」

「えっ？あ…だ、大丈夫よっ！さあ続きよネギ！！」

本当に大丈夫でしょうか…？

「はい…じゃあいきますね…」

でもさっきから僕の攻撃はかわしてますし、きっと大丈夫でしょう。

いきますよ。

相手の隙を見極め――

一瞬に全ての力を集めた拳を放つ――

今ですっ！

――ボスッ――

「うっ…」

え…？

アスナさんに命中してしまいました…

「痛っ…」

舞台に倒れるアスナさん――

僕はただ見つめることしかできません…

”アスナ選手ダウン！って痛そうだけど大丈夫！？でも一応カウントを取りますよ”

頭が真っ白になりました…

”10、9、8、7、6”

僕が…

”5、4、3、2”

「僕がアスナさんを…」

” 1 ”

「バカね…」

” おお！アスナ選手立ち上がりました！ ”

え…？

アスナさん…？

「何落ち込んでんのよバカネギ。この位なんともないわよ」

アスナさん…

「今のは私が悪かったのよ！アンタが気にすることじゃないでしょ！」

「でも…」

「ハア。やっぱりアンタはガキね。手加減しないって言ったじゃない。ここからは真剣勝負よ！いい？」

「……でも僕にはできません…」

やっぱりアスナさんを傷つけることなんて…

「おい坊主」

え？

この声は…ガニメデさん？

「それがお前の覚悟か？」

何故でしょうか…？

選手控え室のガニメデさんまでは離れていますが…すぐ近くで話しかけられているみたいです。

「その程度の覚悟ならやめちまえ。お前には何も守れねえ」

守れない…？

「戦うべき時に戦えねえヤツになんか何も守れねえよ。迷いは自分だけじゃなく相手も滅ぼす」

相手も…滅ぼす…

「覚悟を見せろ。守るべきモンと対峙しようが揺るがない覚悟をな。お前は逃げてんだ。守るモンが傷つくことからな」

そうです…

僕はアスナさん、いえ…僕の生徒や知り合いの方々―皆さんが傷つくのは見たくありません。

「だがな、守るモンが傷つくのを恐れ目を反らすヤツには守るモンは守れねえ。だから、目を反らすな。覚悟から逃げるな」

覚悟…

守るべきモノと対峙しても揺るがない覚悟。

確かに僕は―

逃げていました。

「ありがとうございますガニメデさん」

ここから聞こえるかわかりませんがお礼を言っておきます。

わかりました。

僕はもう目を反らしません！

「いきますっ！！」

もう、逃げません！！

第55話「拮抗のフラクタル」

ここは何処だ…？

白い空間―

それが何処までも続いている―

遠い―

全てが遠い―

際限の無い世界―

気が遠くなりそうだ。

何も無い…

見える世界は一面真っ白―

そこには何の差異も存在しない―

全てが等しい―

俺はそんな景色を呆然と眺めていた―

ただ呆然と―

思考は既に無い。

ただ…

何故かその白い世界は寂しく見えた。

そりゃそうか…

俺以外には何もないしな。

「お帰りなさい」

え…？

気づいた時には目の前に知らない少女が”在った”。

まるで最初から存在していたかのように――

「お前は…」

誰だかはわからない。

だが、何処か：

見覚えがある：

上手く言葉にできないが――

頭で覚えているというより――

もっと別な”何か”が覚えているという感覚がする――

「すまない。お前は誰だ？」

ダメだ。

思い出せない：

何か大切な――

決して忘れてはならないモノを忘れてしまったような：

でもそれを思い出せない：

そんな歯痒い気分だ。

「ここでは…名前なんて意味ないよ…」

そうだったな…

名前なんて知る必要はないな。

この何も無い世界でわざわざ存在を名前で認識する必要はない。

それそのものを認識すればいいんだからな。

「そうだな。所で、ここは何処だ？俺は誰だ？」

この無限に広がる白い空間には目の前の少女と俺しか存在していない。

他には何も無い。

『有』を内包した完全としての『無』――

”何も無い”と同時に”全てが在る”――

そんな中で、ここが何処か、自分が誰かなんてわからない。

「それは聞くことじゃない……それは貴方が決めること……」

ああ……そうか。

この無の中では定義なんて何処にも無い。

基準すらない。

だから自ら意味を見出だすのか。

全ては今ここに在るんだな……

「でも、貴方はまだ帰ってくる時じゃない」

ああ……

思い出した……

「貴方は残ることを選んだ……だから……まだ……ダメ」

パズルのピースが合わさったように――

それが必然だったかのように――

全ての記憶が組み合わさった――

その瞬間――

視界が一変した――

意味を与えられた世界は色に溢れた――

白い空間は草原へと変わった――

草木の香り――

肌に触れるそよ風――

青空に浮かぶ雲――

その切れ目から差し込む日の光――

そして目の前には――

あの少女――

「そうだったな。まだ…だったな」

思い出せたよ…

全部。

「残念…もつと話、したかった…」

思い出したらまた逆戻りか。

折角また会えたんだがな。

まあ仕方ない。

「ああ残念だ。だが…やくそく、ちゃんと守れたろ？」

また会うつて”やくそく”だ。

「うん」

いい笑顔だ。

お前は笑顔が似合う。

「でも…まだ他にも…あったよ…？」

ああ。

そうだったな。

「また星を見よう。いずれ、俺はここへ戻って来る。それまで待っていてくれ」

そんなに待たせはしないと思うしな…

「うん。待ってる」

やくそくは守る。

必ずな。

「じゃあな…」

「違う…またね…だよ」

ククク。

細かいな。

「ああ、そうだな」

楽しい時間だった。

いい夢は確かに見れたみたいだな。

そろそろそんな夢から覚める時間だ。

「またな…シア」

「うん。またね」

「…っう」

バカネギ…いつの間にかこんなに強くなったのね…
でも！私だって負けないからね！

—ブンツ—

振り下ろされた木刀――

それは確かに速かった――

が――

「そこですっ！」

――パシン――

嘘っ！？

バカネギが木刀を思い切り叩いてきたっ！

ヤバっ！

離しちゃった！

ネギはそれを見切り――

木刀を叩き飛ばした――

木刀は明日菜の手を離れ、場外へと消えた――

残された明日菜は当然無手となる――

「まだよっ！」

武器がなくなっても大丈夫よ！

無手でネギへ迫る明日菜――

その速度は決して遅くない――

常人の域などとうに越えたスピード――

だが――

「……すみません」

え！？

嘘…

かわされたの…？

ネギはそれを易々と回避し—

—バシン—

拳を放った—

今度は、覚悟を秘めたその拳を—

「うっ！」

気付けば、明日菜の視界には空が映っていた—

「あゝあ。負けちゃった…」

ネギの奴…

本当に強くなってる。

何よ…ガキンちよのくせして…

そんなに頑張っちゃって…

「ごめんなさい明日菜さんっ!! 大丈夫ですか!？」

それなのに人の心配ばかりして…

ホント、アンタは頑張りすぎよ…

でも、それがアンタなのかもね。

「大丈夫よ。これでアンタの勝ち。2回戦も勝ちなさいよ? この私を倒したんだからっ!」

頑張りなさいよ…ネギ。

でも…頑張りすぎないようにね。

「はい！頑張りますっ！」

フフ。

言ってるそばからコイツは…

やっぱり私が見てないと。

…そうよね。

「次は私か」

目の前で繰り広げられたネギ君と神楽坂明日菜の戦い――

それは確実に私の中の”何か”を揺さぶった。

しばらく忘れていた何か、を。

”只今、破損したステージを修復しておりますのでしばらくお待ち下さい。次は1回戦第2試合です”

2人が控えロビーに帰ってくると、あちこちから称賛の声がかけられた。

そんな喧騒の中――

私はこれから手合わせする相手へチラリと視線を向ける。

その先の褐色の少女は目を閉じ、壁に凭れていた。

そして私の視線を察して瞳を開き、不敵な笑みを見せた。

しかし――

私に向けてきたその視線からは感情は読み取れない。

” お待たせ致しました。次の試合の準備ができました。選手の方、入場お願いします”

さあ行こう。

私の舞台へ――

舞台には対峙する2つの人影――

褐色の少女と橙色の髪の子――

” それじゃ試合開始――！”

開始の宣言がなされ、観客は沸き立つ――

が、主役はまだ動かない――

互いに無言の視線を交わらせるだけ――

否、そこそが既に戦いであつた――

障害物のない場所、さらに真っ向からの対戦――

故に間合いは非常に重要な要素となる――

特に狙撃手は間合いを命とする――

舞台には緊迫した空気が漂う――

先に動いたのは褐色の少女――

手に現れた500円玉――

悪いねカリスト先生。

試させてもらうよ。

そして放たれる500円玉――

その威力、速度は弾丸に劣らない――

”これは！？龍宮選手の手から銃弾！？”

が――

相手は怯む様子すら見せなかった――

取り出した白い塊――

「Z――PEG起動」

次の瞬間、橙色の閃光が無数に放たれた――

その全ては迫る500円玉を正確無比に撃ち落とす――

”あれは羅漢銭です。小銭を弾丸として放つ技術です。これ程のものを見たことはありません。が、その全てを撃ち落とすカリスト選手の技術も素晴らしいです。何を放っているのかはわかりませんが”

さすがはカリスト先生。

この程度じゃ駄目みたいだね。

「やるね先生。でも、”それ”を使うなんて少しアンフェアじゃないかい？」

カリスト先生の武器『Z―PEG』

名前の通りZPEという空間エネルギーを圧縮して放つ武器らしい。

空間のエネルギーを使っているから弾切れにはならないという優れモノだとか聞いたよ。

「私の予選での相手は口から平然と陽子ビームを放っていたぞ？それに比べればマジだと思うが。勿論超にも許可は取ってある」

それに超が強化を加えて、今では脅威的な機能まで搭載してる。

全く：私の仕事が減ったら先生のせいだよ。

「田中さんだったかい？先生が粉々にしてしまっていたヤツだね。工学部が泣いていたよ？」

あそこまでするなんて先生らしくないね。

ククク。

先生もあのビームには中りたくなかったようだね。

「まあ謝罪くらいはしておこう。今回は非殺傷設定にしてあるから龍宮が粉々になる心配はないぞ？」

随分不敵な笑いだね先生。

冗談は苦手な方かと思っていたけど、違ったみたいだ。

「感謝するよ先生」

と言いつつ…

何気ない動作で手を動かし――

――バンツ――

「ヒュッ。さすがカリスト先生。完全に不意打ちできたと思ったんだけどね」

撃ち出した羅漢銭は再び橙色の閃光に撃ち落とされた――

もう見切られたか……

「いきなりだな龍宮」

余裕だね先生……

「戦略と言ってほしいね」

「フッ。ならば私も戦略といこうか」

消えたっ！

背後かつ！？

咄嗟に背後へ弾丸を放つ――

――バンッ――

砕け散る羅漢銭――

座標転移か。

「女性を背後から狙撃するのはナンセンスじゃないかい？」

確かに移動の時間差がないのは厄介だ：

しかし

「戦略と言ってほしいものだな」

発動まである程度時間が必要なようだ。

「フフ。言うじゃないか先生」

近い場所はわりと簡単に、遠い場所はかなり時間が掛かるそうだね。

「そうだな。私もようやく冗談を言えるようになったみたいだ」

なら話は早い。

発動するタイミングを読めばいいのさ。

場所は特定できなくてもある程度は対応できる。

―ババババババツ―

連射される羅漢銭―

それは鉄の豪雨―

あっという間に舞台は無惨な姿と化した―

しかし―

それは標的を逃した証拠でもあった―

フツ…

また座標転移かい先生？

再び衝突する弾丸と閃光―

爆発を起こし、互いに打ち消し合う――

これは不利だね。

カリスト先生は弾丸が実質無限に撃てるが……

私の方は有限。

時間と共に戦況は悪化していくのは確実。

それならば仕掛けるしかないね。

――バキンッ！――

” おおっと龍宮選手、自らの足元に羅漢銭を撃ち込んでしまいました！
た！誤射でしょうか！？床の破片でステージがよく見えません！
”

誤射？

この私が？

” いえ…これは恐らくわざとでしょう ”

” え？…どういふことですか豪徳寺さん？ ”

そうさ…

次々に舞い上がる破片。

これでカリスト先生の視界も妨げられる。

座標転移は相手の位置がわからなければ意味がない。

更に…

私は知っているよ先生。

その座標転移は…

転移先に障害物があると使えないってことをね。

私の周りには舞い上がった無数の破片…

これで先生はもう逃げられないよ。

「悪いね先生。今度こそ終わりだよ」

座標転移を奪われたカリストに迫る無数の羅漢銭――

それは途切れることを知らないかのように連射される――

が――

「それはどうだろうな？」

カリストは回避する様子すら見せず、悠然と立ちはだかった――

そして放たれる橙色の閃光――

無数の弾丸と無数の閃光が正面からぶつかり合う――

2人の頭には既に回避の概念は無い――

正面からの撃ち合い――

戦略もあったものではない真っ向勝負――

「フッ…この勝負、負けられないね」

膨大な弾丸と閃光が両者の間で拮抗する――

「私も同感だ」

連射の勝負――

ただ数を多く放つ方が勝つだけの愚直な戦い――

狙撃手としては失格だろうその戦い――

しかし――

2人の口の端は満足気につり上がっていた――

衝突し続ける莫大な弾――

観客は皆その圧倒的な迫力を前に閉口した――

「くっ…」

間もなく、拮抗が徐々に崩れ始めた―

じわじわと真名へと迫る拮抗点―

私はふとカリスト先生の顔へ視線を向ける…

そこには、何かを決意した表情があつた。

いい目だねカリストさん…

深い目だ…

アイツもこんな目をしていたな…

やれやれ…私は何を考えているのやら…

これは…

私の負けだね。

「フツ…やるね…先生」

次の瞬間、視界全体に広がる橙色の光―

負けたよ…カリスト先生…

でも

不思議と悪い気はしないね。

第56話「平行する信念」

—量子揺らぎを観測—

—特異点生成完了—

—ゲート再構成—

—展開開始—

—干渉値上昇—

—『15.23.70』—

計画はついに始まった――

第三試合、クウネル・サンダースと佐倉愛衣の対戦は一瞬で終了した。

佐倉愛衣は場外へ飛ばされて敗北。

クウネル・サンダースが勝利した。

おそらく魔法を使用したものと見られる。

第四試合、長瀬楓と山下慶一の対戦が現在行われている。

そして俺は、超の計画を進行させている。

試合の動画をインターネット上に流通させ、魔法とZPEについての考察も同時に流している。

が――

「下らない」

この世界線の人間は遅れている。

ZPF理論を理解することもできず、ただ否定するばかり…

” こんなのはインチキだ。合成動画だ ”

” ZPE？魔法？そんなものがあるわけがない ”

” 科学的にありえない ”

そんな意見ばかり…

全く世界に目を向けず、自らの頭で何も考えていない。

科学の定義すら理解していない。

科学とは” 未知の事象 ” を説明する手段――

すなわち、科学で ” 説明できない事象 ” が存在するのは当然。

科学で全てを説明できるならば科学など必要ではない。

証明できない事象があるからこそ、それを考察するために科学が存在している。

そんな定義すら理解していないとは…

遅れている…

「イオさん、そちらは順調か？」

超音鈴か。

「問題なく計画を進めている」

彼女は例外だ。

科学を正確に理解している。

「それはよかたヨ。私は仕事があてネ。ここは任せるヨ」

カシオペアを造り出したのも納得できる。

「了解した」

そして――

彼女も”過去”を背負っている。

俺たちと同じように。

「ふむ。中々やるでござるな」

拙者の相手――

名は山下慶一殿。

先ほどから拙者と拳を交えているでござるが――

中々に手強いでござる。

「ハハハ…結構限界だけだな。そういうアンタも見た目によらず強いな」

聞くところによるとガニメデ殿に弟子入りをしているとか。

なるほど。

この動きは圧倒的な強さに対抗できるものでござる。

ガニメデ殿の鍛練の成果であろうな。

「これは嬉しいことを言ってくれるでござるな。所で山下殿、拙者が聞いた話ではガニメデ殿を師に仰いでいるとか。本当でござるか？」

「ああ。確かに俺は兄貴を師匠と思ってるぜ」

やはり。

「そうであられたか。ならば奇遇でござるな。拙者もガニメデ殿とは同じ戦の場に立った仲でござる」

あの強さは本物だったでござるよ。

「そうか。で、どうだったよ？ 兄貴は強かったろ？」

「もちろんでござる」

「なら丁度いいな」

「丁度いいとは？」

「アンタが相手ならさ、俺がどれだけ兄貴に近づけたかわかるだろう？」

ふむ。

拙者は見極め人というわけでござるな。

「なるほど。良いでござるよ。その強さ、拙者にぶつけてみるでござる！！」

「ああ！じゃあ遠慮なく行くぜ！」

「はあっ！」

—サッ—

ダメだ。

また回避された。

俺の対戦相手、長瀬楓。

コイツはただの中学生じゃない。

戦ってみればわかる。

相当な訓練をしてるな…

こちらの攻撃は完全に見切られてる。

けど—

「見える」

—スッ—

兄貴の方が断然強い。

兄貴の拳に比べたら見切れる速さだ。

「むっ」

—パシン—

それでも俺より強いのは間違いない。

「やっぱりダメか…」

また受け止められた。

「甘いでしょ」

肉薄する楓――

「なっ!？」

早いっ!

――パンツ――

「くっ……」

弾いたが……

手が痺れる……

止むことのない追撃――

腕、脚が容赦なく連続で山下を襲う――

だが、兄貴よりは遅い。

まだ見切れる！

その猛攻を凌ぐ山下――

が――

「ていつ！！」

――バシン――

楓の叩きによって山下の腕が上へ跳ね上げられる――

「しまっ！！」

無防備な山下に迫る楓の蹴り――

回避する余裕はない――

――ボスッ――

「うぐっ」

山下の腹部に直撃する強烈な蹴り――

山下の肺から空気が逆流し、気が遠くなる――

く…まだだっ！

「むっ!?!」

しかし、山下はその一撃を耐え凌いだ――

「…やるで…ござるな」

空中で体勢を整えた楓は着地し、僅かに息を切らせながら山下を見る――

その姿からは若干のダメージが確認できる――

が――

「ハアハアハア…アンタ…も…な…」

息を切らせ、上半身を力無く垂らす山下――

一見して山下の方が深刻なダメージであるのは明確――

まだだぜ…

俺はまだやれる…

「ハアハア…さて…そろそろ…締めと…いくか…」

それでも山下の顔に諦めはない――

とはいえ…

これはもう限界だな…

次で決めるしかない。

「良いでござるよ。最後の一勝負、参る!!」

それに応える楓の顔も不敵な笑み――

いいね。

こんな戦いを待ってた。

そして再び対峙する2人――

その緊張感に観客は静まり、ステージは静寂に支配される――

次の一瞬に全てをかける。

互いに相手を見つめる無言の空間――

さあ…

いくぜ…

――シュタツ――

同時に駆け出す両者――

そして――

「はあっ！！」

「うおおおおっ！！」

—ドン—

「うっ！」

山下の拳は楓の腹部を捉え—

—ボスン—

「うぶっ！」

楓の蹴りが山下の顔面を捉える—

楓は体勢を崩してふらつき、山下は空中へと舞い上がる――

モロに喰らったな……

空が逆さまに見える……

ああ……俺は蹴り飛ばされたのか……

負けか……

悔しいな……

――パチャン――

そして場外へ吹き飛ぶ山下は水面に落下した――

兄貴……

やっぱりアンタは強いな。

ハハハ。

情けない…

兄貴の前で負けちまうなんて…

だけど…

楽しかった…

「全く…無茶しやがる」

山下の野郎…

予選の疲れもまだ残ってたはずだ。

それに最後のあれは骨の何本かはいつちまったんじゃねえか？

長瀬のガキもあばらを骨折したみてえだしな…

俺が言えたことじゃねえが、身体は大切にしろよな。

まあ気持ちちは文字通り痛いほどわかるがな…

「さて、次は俺か」

弟子が目の前でこんだけ体張りやがったんだ。

俺もやる気見せねえとな。

「タカミチ…」

相手に不足はない。

いや—

むしろ最高の相手だ。

本気、出させてやるよ…

さて—

始めようぜ。

「なあタカミチさんよ」

舞台に佇む2人の男――

「なんだい？」

片方は手をポケットに入れ、感情の読めない表情――

「二つ疑問なんだが、なんで魔法使いは魔法を隠匿するんだろうな？」

もう片方は構えることもせずに相手を睨む――

「…なぜそんなことを聞くんだい？ 君も魔法関係者ならわかってい
るはずだよ」

質問を質問で返しやがったか…

2人の視線は鋭く交錯する――

「確かにそうだが…もし魔法を隠匿する必要がなけりゃ…より多く
の人間を助けられるんじゃないかと思っただよ」

鋭くなる視線――

さあ、どう答える？

タカミチさんよ…

「そうかもしれない。けれど、魔法に関わればその分だけ危険は増える。一般人を巻き込むのは避けるべきだよ。それに、使い方を間違えれば世界を滅ぼしてしまうことにもなる」

世界を滅ぼす、か：

確かに嘘じゃねえ。

だが――

「そんなもんは魔法に限った話じゃねえだろ。それに魔法使いだろうが世界を滅ぼそうとする奴らは存在してんじゃねえか。何も知らされずに危機に晒されるってのは不公平だと思うがな」

いけすかねえ：

魔法を隠匿したところで何の解決にもなんねえ。

救える力があんなら、使うべきだ。

「それでも危険が増すのは事実だよ」

なるほど…

それがアンタの考えか。

「とか言っておきながら、アンタら魔法使いは一般人に少なからず干渉してる。いや…搾取とも言える。魔法という力の利益を自分たちだけが得て、あとの奴らには教えないってのはそういうコトだぜ」

俺の世界線もそうだ…

各ドームはZPEを隠匿しようとした。

危険だから、の一言でな。

だから世界選択機関が現れた。

力があるなら使うべきだ。

その考えに同意したから俺は機関に協力した。

だからこそ――

奴ら魔法使いを見てると嫌気がする。

「それは違う。一般人が魔法の危険に晒されないために、僕ら魔法使いがいる。搾取するためではないよ」

まあ…タカミチ、アンタはそうなんだろうな。

だが、全ての魔法使いがそう考えてる訳じゃねえと思うぜ…？

「そうかよ…どうやら話は平行線みてえだな」

こういう信念に関わるコトは、話し合いなんかじゃ解決しねえ…

「なら…拳で決めるしかねえみてえだな」

” 1回戦第5試合、共に広域指導員の2人！！片や知らぬ者はいない『デスメガネ』こと高畑先生！！対するは麻帆良の死神伝説の元凶『闇夜の死神』ことガニメデさんっ！！”

”マジかよ！？デスメガネVS死神かつ！！”

”あれが噂の死神なのか！？”

朝倉の紹介で沸き立つ観客―

しかし、当事者2人は表情を変えない―

”それでは！両者準備はいいですかー！？”

ただ相手を睨むのみ―

”1回戦第5試合、開始っ！！”

観客は一斉に歓声を上げる―

さて、いくかつ!!

始めに動いたのはガニメデ―

タカミチへと駆け出す―

「おらっ!」

瞬く間に距離は零になる―

そして繰り出される拳―

しかし―

「チッ…」

タカミチは既にその場から消えている―

やっぱこの程度じゃ見切られっか…

そして背後に現れるタカミチ―

繰り出すのは破壊の拳―

―ブンッ―

チッ！

危ねえ！

今のが『居合い拳』か！

鞘をポケットに、刀を拳に置き換えた居合い…

その初速は魔力によって極限まで上げられている…

速すぎる…

”今の状態で”見切るのは不可能だ。

さっき回避できたのは直感にすぎねえ。

とりあえず距離を空けるか。

タカミチから離れた場所に転移するガニメデ―

しかし―

「そこはまだ僕の射程内だよ」

なっ!?

放たれる居合い拳―

その拳圧の射程は10mを超える―

すなわち―

「ぐはあっ!」

重低音が舞台に響いた――

ぐ…

体をくの字に曲げて背後へ飛ばされるガニメデ――

なんだこの威力は…

が、かろうじて着地には成功し、タカミチと再び対峙する――

10 m離れてこれか…

視界が歪む…

「やってくれるぜ」

あれは単なる拳圧だ。

魔力でも何でもない。

つまりジュピターじゃ感知できねえわけだ。

おまけに射程は10 mを超えてやがる。

魔力に頼らず自らを鍛えた結果か…

ここまで相当努力したんだろうな。

「ククク…」

いいねえ。

最高だ。

まさしく”強敵”！

否定の余地もない！

第57話「完成する理念」

—『21.57.02』—

「おらああ!!」

タカミチに肉薄するガニメデ—

そんなガニメデに放たれる居合い拳—

—ブンツ—

が—

破壊の拳圧は目標を逃し、床に穴を空ける—

かわしたっ!?

先ほどと比べものにならないほど速いっ!

僕の居合い拳を見切るか…

さすがだねガニメデ君。

ガニメデの拳は緑色の光を放ち—

「はああっ!」

その動きは爆発的に早くなる――

「くっ！」

タカミチはガニメデとの距離を離そうとするが――

ガニメデはそれを許さない――

至近距離から拳の雨を浴びせる――

「なるほどね……」

ガニメデ君は僕の居合い拳の弱点を見つけたみたいだ。

僕の居合い拳は、至近距離では充分な初速が得られない。

つまり至近距離では使えない。

最低でも1～2 mは必要だ。

ガニメデ君はそれを見破ったみたいだね。

先ほどから僕と距離を離そうとしない。

「おらおらおらっ！」

ガニメデの止まない追撃――

しかし、タカミチはその拳を冷静に回避し続ける。

その動きは必要最小限。

――スッ――

「ちっ！」

そしてガニメデの視界から突如消えるタカミチ――

――バキンッ！――

「くそっ！瞬動か…」

ガニメデから離れ、背後から放たれる居合い拳――

ガニメデはそれを寸前で回避する――

再びステージの破片が飛び散る――

今のを回避するのか。

やはりガニメデ君は何らかの強化の魔法を使っているみたいだね。

明らかに動きが速くなっている。

――サッ――

っ！？

今度はガニメデがタカミチの視界から消える――

瞬動かつ――！

ガニメデの動きを察し、とっさにその場から離れるタカミチ――

だが――

「残念だったな」

なっ――！？

声が聞こえたのは、何もない空間――

――ボスッ――

「ぐふっ！」

突如、タカミチの腹部に衝撃が走る――

一体何が…？

ガニメデ君の姿が見えないっ！？

タカミチはダメージを軽減させ、ステージの端で場外への落下を耐えしのぐ。

「いや、今ので決まるかと思ったんだがな。さすがはデスメガネことタカミチさんだ」

声のする場所に視線を向けると、その何もない空間が揺らぎ始める――

何なんだ…？

そして徐々に何もない空間に輪郭が現れる――

まさか……

次の瞬間には、不敵な笑みをするガニメデの姿が現れた――

まるで初めからそこにいたかのように――

” おおっとこれはどういうことでしょうか！？消えたガニメデ選手が突然現れました！！ ”

「クハハ。驚いてるみたいだな、タカミチ」

ガニメデは笑みを崩さずにタカミチに話し掛ける――

「何をしたんだい？」

対するタカミチの視線は自然と鋭くなっていく――

「まあアンタらの言うところの”瞬動”にちよいとアレンジを加えたんだよ」

アレンジ…？

「ああ。光学迷彩ってヤツだ」

光学迷彩！？

「それは…超君が作ったものかい？」

まさかとは思っていたけれど…

「ああ。その通りだ」

っ！！

やはり彼らは！？

「ククク。多分今アンタが考えてるのは正しいぜ。俺たちは超に協力している」

超君と協力：

考えていなかったわけではない：

しかし：いざ宣言されると信じられないという思いもある。

でも――

これではつきりした。

「…そうだったのか。ならば悪いけれど…」

僕は僕のすべきことをする。

「君たちを拘束させてもらう」

「ハッ！いいねえ！！ようやく本気になったか！！」

「学園にも報告させてもらうよ」

「ククク…。させると思うか？」

ガニメデ君…

残念だよ。

「…もし今すぐ大人しく捕まってくれるなら…君たちに危害は加えない」

「俺が大人しく捕まると思うか？」

やはり…君はその選択をするんだね。

「そうだね…。ならば仕方ない」

本当に残念だよ…

ガニメデ君。

「力ずくでも君たちを止める」

” 右手に魔力”

タカミチの意識が集中し、魔力が唸り出す――

”左手に気――”

もう一方には気が収束する――

”合成――”

そして――

相反する力が一点に収束する――

――『咸卦法』――

タカミチの周りの空気が爆縮し、莫大なエネルギーが流れ始める――

全く異なる2つの力――

その結晶体が、今ここに現れる――

「いいねえ！！！そうこなくちやなあ！！！」

対するガニメデは笑みを増す――

そして――

闘いは激しさを増してゆく――

「す…す…いい…」

僕はそんな感想しか言えない程に衝撃を受けました。

始まった時から選手控えロビーで対戦場をずっと見ています。

僕だけじゃなくて、他の選手の皆さんも見入っています。

そこでは、タカミチとガニメデさんの闘いが繰り広げられています。

「私も…驚きました。お二人の動きを追えません…」

刹那さんも僕と同じみたいです。

さっき、2人が何か話している前までは僕でもなんとか動きは追えていました。

でも…

その後から、もう全くついていけません…

速すぎます…

見えるのは絶え間なく飛び散るステージの破片くらいです。

「なんやねん…これ…」

「私、もう何がなんだかわかんないっ！」

「拙者も同感でござる」

「闘いたいアルっ!!」

「あの高畑先生と…信じられないですわ…」

「いやゝすごいですね」

「ふんっ。とんだ茶番だ」

「さすが…兄貴…」

「やるね、ガニメデさん」

「全く…アイツは本当に…」

僕も…強くなりたい。

「おらっ！」

「くっ！」

この光学迷彩はだいぶ効いてるみたいだな。

まあ使用時間は限られてるが十分だ。

タカミチは俺の位置を掴み切れてねえ。

そりゃそうだ。

なんせタイムラグがねえ座標転移に光学迷彩まで重ねてんだ。

動きは読めないはずだ。

だが…それなのに対応してきやがる…

―ブンツ―

「っ!？」

危ねえ!

位置がわからねえはずなのに居合い拳の狙いは狂ってねえ!

おそらく…

最早これは直感だな。

タカミチは闘いの直感で俺の位置を捉えてやがる。

「ハッ!やるじゃねえか!」

面白い!

闘いはこうでなきゃな!!

「ガニメデ君。君の動きはもう読めたよ」

「そうかい！なら一撃くらいあててみな！！」

「わかったよ…」

消えた？

また瞬動か。

おいおい…

それはもう通用しないぜ？

アンタらの瞬動はあくまで移動だ。

どんなに速かろうが素早く動いているに過ぎない。

つまり、動きが直線的だ。

”入り”を読めば出口も読める。

「その手は通じないぜ」

今の”入り”から判断して、現れるのは恐らく背後だ。

「それはどうだろうね」

はっ!?

ガニメデは声の方向――

頭上を見上げた――

「豪殺――」

そこには――

魔方陣の上に立つタカミチの姿があった。

「なっ！」

しまった！

虚空瞬動か！！

戦場は平面に限らねえのを忘れていた！

立体的に捉えていなかった！

自らの失態に気づくガニメデ――

しかし、もう遅い――

座標転移の演算をする時間は既がない――

咸卦法により強化された拳が今にも振り下ろされようとしている――

やべえ……

「居合い拳」

間を空けず、絶大なエネルギーの塊が上空から降り落とされる――

”情報障壁展開！！”

しかし、その全てを破壊する拳は障壁に阻まれる――

爆発音が響く――

それと共にガニメデに衝撃が加わる――

ガニメデは思わず顔を歪める――

く…なんて威力だ！

ガニメデの展開した障壁と強化された居合い拳が拮抗し、不協和音を発する――

「…すまないね」

「っ!？」

ガニメデが拮抗に耐えている間に、タカミチはガニメデの背後に現れた――

正面に障壁を展開しているガニメデの背後は当然ながら無防備――

「豪殺――」

「しまっ!」

「――居合い拳」

次の瞬間――

ステージに爆音が響いた――

” 何だかもうよくわからなくなってきましたが、どうやら高畑選手の攻撃がガニメデ選手に直撃したようです!! ”

粉塵によって曇る舞台――

” ちょっと…今のはさすがにヤバくない…? ”

舞台からはガニメデの気配は感じられない――

朝倉は最悪の事態を予期して冷や汗を流す――

が――

「クククククク…」

放つ威圧感は半端ではない――

「いいね！！今のは効いたぜタカミチ！！」

ガニメデは狂喜の表情を浮かべている――

その体に傷は一切見られない――

「さすがだねガニメデ君。僕の豪殺居合い拳を受けて無傷か……」

まあ本当は無傷じゃねえがな。

傷は負ったが、俺たちジュピターシリーズはそんなもん直ぐに回復する。

確率発散しない程度の怪我なら全く問題ない。

だが……裏を返せば、確率発散したら終わりってことだがな……

「よく言うぜ。手加減してただろ？俺にはわかるぜ」

間違はなくタカミチは手加減しやがった。

少なくとも俺を潰すつもりじゃなかった。

本気なら、確率発散が起きても不思議じゃねえ。

「そこまでわかるのかい…？」

「ああ。アンタの性格から考えたらな」

「……………」

さて…

「ここからはお互い手加減無しでいこうぜ…」

いくぜ…

「ディヴァイン。制限を第四段階まで解除しろ」

”警告。第四段階以降、存在確率に影響が発生。指令確認、宜しいですか？”

存在確率に影響…

俺たち量子存在は元々存在確率が朧気だ。

ジュピターに観測されてなきや消滅しちまう。

そんな存在確率を代償にするってことはつまり…

命を削るってことだ。

ディヴァインを解放する度に寿命は縮む。

「ああ、構わねえ」

だが、それがどうした？

俺たちはどのみち余命僅かだ。

自分の命くらい――

自分で消費させてもらうぜ。

” 再確認、本当に宜しいですか？ ”

覚悟なんてとっくにしてんだよ…

「構わねえって言ってんだろ」

あの日からな…

” 了解、制限解除 ”

さあ、準備はできたぜ。

ここまで解放すんのは久々だな。

「ディヴァイン―」

こっからはもう引き返せない。

だが…後悔はない。

さあ…世界。

俺を否定してみやがれ。

「―第四解放」

空気がうねる―

ガニメデの深層意識が形をもって出現する―

そして世界はそれを否定する――

世界抵抗と意志――

その二者がせめぎ合う――

”何……これ……?”

ガニメデの周囲を流れる世界抵抗――

それは人間の概念を越えたモノ――

観客はその圧倒的な存在感に言葉を失う――

「はあああああああああああ……!!!!」

そして――

ガニメデの想念が完成する――

ガニメデの腕を覆う銀色の甲冑――

第58話 「俺は、負けない」

機関機密情報

— レベル C —

『感情消去実験報告』

被験体…イメリア・ユニ・エルノテウリス

概要…ジュピターシリーズ候補の感情を削除する第一実験。被験体の情報場を分割した際、感情を意図的に削除。

結果..被験体の感情消去に成功。

特記…ジュピターシリーズへは事故と公開。報告書の内容が漏洩しないよう注意されたし。

[illegible]

「うおらあああ！」

ガニメデの拳がタカミチを襲う――

その速さは最早不可視の域に達している――

「つく！」

が、それを寸前で回避するタカミチ――

不可視の拳――

それは見切って回避できるものではない――

タカミチはそれを研ぎ澄ました直感で回避する――

――バゴンッ！！！！――

轟音と共に、標的を逃した拳がステージの床に巨大な穴を空ける――

粉々になったステージの残骸が飛び散る――

なんて破壊力だ…

それを横目で確認したタカミチは冷や汗を流す―

ガニメデ君の速度が更に速くなった…

さすがに僕でも対応の限界だ…

それに―

ガニメデ君の全身を包むこの鎧―

それによって一撃の重さが跳ね上がっている。

重量が増したはずなのに速度は下がらない。

いや…むしろ速くなっている…

そして―

この威圧感…

ガニメデ君の周囲に広がる魔力が唸りを上げているみたいだ…

さらに魔力の量…

先程までは一般人と変わらなかった。

けど今は…

紅き翼にも劣らない…

いや…

彼らですら比較にならない…

とても1人の人間が持つレベルじゃない…

近づくだけで気が触れそうだ…

「考え事なんてしてる暇はねえぞタカミチいいいいいい!!」

叫びと共にタカミチに突進するガニメデ―

否、それは突進というレベルではない―

莫大な魔力を纏った嵐が突っ込んで来る―

くっ!

再び寸前で回避するタカミチ――

ガニメデはその真横を通り過ぎる――

莫大な魔力を纏ったガニメデに、タカミチは反撃出来ない――

なぜなら、その魔力に触れた瞬間に終わる――

タカミチはそう直感した――

あの魔力……

触れただけで間違いなく大ダメージを受けてしまう……

となると純粋な打撃は使えない……

どうする……？

タカミチは思考しながら視線を背後に向ける――

そこには――

ガニメデが突進した進路上の床が、無惨な残骸へと変わっている光景が広がっている――

その光景に肝を冷やすタカミチ――

しかし、それで終わりでは無い――

「まだだぜええええ！」

ガニメデはZPEを逆噴射し、急速に向きを変える――

なっ!?

魔力の噴射で進路を変えたっ！？

そうか！！

重量が増したのにこの速度を維持しているのは魔力を噴射していたからかっ！！

ガニメデはタカミチの背後で180度高速ターンする――

そのターンによって、**突進の速度は生きたまま――**

すなわち――

まずい！！

回避は間に合わない！！

タカミチはガニメデの突進を受け止めるしかない――

腕を交差し、防御の姿勢をとる――

視界に、気が狂うほどの魔力を纏ったガニメデが突っ込んで来る――

レジストっ！！

そして――

タカミチに魔力の嵐が襲い掛かる――

とっさにレジストしたものの、正に焼け石に水――

「くうううっ!!」

タカミチの腕に信じられない衝撃が走る――

それは、腕が吹き飛ぶのではないかと錯覚するほど――

それでもタカミチは耐え続ける――

魔力を噴射して突っ込むガニメデ――

そしてそれを受け止めるタカミチ――

長い拮抗が続く――

「いいねえ!! おらおら! もっと耐えてみせろ!!」

が――

それも長くは続かない――

ガニメデが更に噴射の出力を上げる――

魔力の密度は増大し、今や目視できるレベルとなる――

ガニメデの背中に、緑に輝くジェット噴射が現れ始める――

それはまるで翼のよう――

「くっ!!」

ついに拮抗が崩れる――

ガニメデの勢いはもう何者にも止められない――

タカミチの足が床より離れる――

「！！！！」

次の瞬間――

舞台が揺れる――

「タカミチっ!!」

今、タカミチがガニメデさんの攻撃で場外に飛ばされてしまいましたっ!!

タカミチ…大丈夫だよね…?

「ガニメデ!!もうやめろ!!ディヴァインを使いすぎだ!!」

カリスト先生も何か叫んでますが…

ネギはカリストにつられ、ガニメデに視線を向ける―

そこに見えたのは、床に手をつき苦しそうに顔を歪めるガニメデ―

「あれ!?!ガニメデさんっ!?!」

ガニメデさん、苦しそうですね…

どうしたんでしょうか…？

2人とも大丈夫なんでしょうか…？

「ガニメデ…！聞こえないのかっ…！それ以上解放し続けたら消滅するぞ…！」

消滅…？

「…ハア…ハア…んなコト…わかってんだよ……」

ガニメデは無理矢理口の端をつり上げて見せる――

「だったらすぐに解放をやめろ…！」

だが――

その口調は苦痛を噛み殺しているのが明らか――

「ハア…ハア…悪りいが…そいつは無理だな…」

息は絶え絶えになり、顔には汗が見える――

ガニメデさん…

「何故だ！！言うコトを聞けガニメデ！！」

そんなガニメデを必死に制止するカリスト――

「カリスト…俺は決めたんだよ…」

その言葉と共にガニメデはゆつくりと立ち上がる――

その姿に、全員が見入る――

「俺は……強くなる……」

ガニメデの顔には一切の揺れが見えない――

「俺は……強くなって……誰にも負けねえくらいに強くなって……」

その口から紡がれる言葉は静かに響く――

「今度こそ全部を救うってなああああああ……!!!!」

ガニメデの叫びが空気を震わせる――

それは正に獅子の咆哮――

「だから続きと行こうぜタカミチいいいいいい!!!!」

真っ直ぐに前を見つめるその瞳――

その先には――

「そうだね……。わかったよガニメデ君……」

舞台に復帰したタカミチ――

ポケットに手をつ込み、何時もの構えで佇む――

その瞳は、貫くように相手を見つめる――

「君の覚悟に応えよう」

「そうかい!!! そりゃ嬉しいねええ!!!」

相手を見て、笑みを増すガニメデ―

「僕も君も限界は近い。次で…決めないかい…？」

「ああ…その勝負…受けて立つぜ」

2人の対戦者は、再び対峙する―

舞台は静寂に包まれる―

そして―

最後の戦いが始まる―

「ZPE最大出力で圧縮―」

「七条大槍―」

動いたのは同時――

甲冑に包まれたガニメデの全身に壮絶なZPEが集まる――

タカミチの拳に、莫大なエネルギーが収束する――

その光景は圧巻の一言――

「ディヴァインフィールド全開!!!! 圧縮解放おおおおおおお
おおお!!!!」

「――無音拳!!!!!!」

互いに全力の一撃を放つ――

ガニメデは圧縮したZPEを一気に解放する――

ガニメデの後方で、強烈な爆発が起きる――

それは緑の翼――

ガニメデの背中に6枚の羽が生える――

衝突する2つの破壊――

片方は自らの理念を形にした鎧を纏い――

片方は努力により磨き上げた信念の拳を繰り出す――

それは理想と信念の衝突――

そしてガニメデは破壊の光に吞まれる――

が――

「まだまだあああああああ！！！！」

ガニメデはその中を突き抜ける――

それをタカミチの拳圧が妨げる――

その相反するベクトルが正面から衝突する――

次の瞬間――

――ピシッピシッ――

ガニメデの理想たる装甲に亀裂が入り始める――

そして後ろへ押し戻されるガニメデ――

「まだだ……」

だが――

ガニメデの顔に諦めはない――

「まだ終われねえ……」

ガニメデの意志に応えるように、光の翼が更に増える――

ガニメデの背後には12枚の羽――

その全てが――

緑に輝く――

それだけでガニメデの背後は炭になる――

眩しいほどの光――

舞台は光に包まれる――

[illegible]

ガニメデは甲冑を削りながらも突き進む――

「はあああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！」

対するタカミチも更に力を込め、押し戻す――

耳が潰れるほどの轟音、溢れる閃光――

互いの全てを出し尽くす一撃――

全力の力が拮抗する――

「！」

それでもガニメデは止まらない――

そう――

引き返すことなど――

できないのだから――

[illegible]

視界に見えるのは緑の閃光――

突破されたっ！？

そう思った瞬間には、体に信じられない衝撃を受ける――

ガニメデの拳が、
ついにタカミチに届く――

爆風がタカミチを呑み込む――

ああ……僕の負けか……

流れる景色――

見えるのは空――

音は聞こえない――

思考だけが回る――

彼の信念には……勝てなかったということだね……

舞台に残るのはガニメデのみ――

勝負は決まった――

しかし――

誰もが啞然とする――

今起きた戦いの凄まじさに――

” え……あっ！！と、とにかく試合終了！！ガニメデ選手の勝利っ！！”

そうして戦いは終わる――

だが――

勝負が決まった直後、ガニメデはその場に倒れる――

「ガニメデっ！！」

それを見たカリストが舞台上上がり、真っ先に駆け寄る――

「…よお……カリスト…」

ガニメデはそんなカリストに笑みを見せる――

「全く…お前ってヤツは…」

それを見たカリストも苦笑いに似た笑みを見せる――

「悪りいが…ちょっと休ませてくれ…」

「ああ。ゆっくり休め。私が医療室に運んでおこう」

「ハッ!……お前に…背負われるとはな………」

そう言うガニメデの表情は穏やかであつた――

「タカミチ……大丈夫かな？」

さっきのガニメデさんの一撃を受けてしまったみたいですが……

あんなの……僕だったら……耐えられない……

「高畑先生は超さんの治療室に運ばれたようですが、命に別状はないそうです」

良かった：

「そうですか。ありがとうございます、刹那さん」

「いえ。こちらこそお役に立てて良かったです」

それにしても…

さっきの戦い…

タカミチもガニメデさんもこんなに強かったんだ…

ネギは真剣な表情で舞台を見る――

そこには最早原型すらわからない程に破壊されたステージが広がる――

それを見たネギは手を力強く握りしめる――

「私も…先ほどの試合が未だに信じられません…」

そんなネギに刹那が話し掛ける――

「はい。僕も驚くことしかできませんでした…」

僕はまだまだだ…

「ガニメデさんは…本当に何者なんでしょうか…」

「それは僕にもわかりません。でも、1つわかったことがあります」

ネギは確信に満ちた口調で言う―

刹那はそんなネギに再び視線を向ける―

「それは―」

ネギは真っ直ぐに前を見る―

その瞳に映るのはあの背中―

お父さん…

「本当の強さです」

それを聞いた刹那はゆっくりと頷く――

「ええ。そうですね…」

第59話「交差した線」(前書き)

更新遅れてしまってますみません？

挿絵とか書いてしまったり色々忙しかったりで遅れてしまいました

> (| ;) <

第1話に何気に挿絵が追加されてます(笑)

下手な絵ですが、良かったら見てみてください。

後、別のオリジナル小説まで投稿してしまいました？

名前は「パラドックス・ゼロ」という中二臭全開の小説です(苦笑)

絵とかオリジナル書く前に、これを書け！って感じですよね？

本当にすみません？

では、本編をどうぞww

第59話「交差した線」

『39. 16. 27』

「…本当にスゴかたアル」

ワタシは今、闘技場から抜け出して1人で目的地もなくブラブラと歩いてるネ。

さきの2人の闘いでステージはボロボロ…

直すのに時間がかかるからそれまで休憩時間になたアル。

ワタシの試合は次…

本当なら歩き回たりしたらダメなのはわかってるヨ…

でも…

今のワタシには、ただ待つなんてできそうにないアルよ。

目の前であんな闘いを見せられたら無理アル…

本来なら、それは武術家の血が騒ぐというのが理由アル。

「でも……」

今回は違うアル…

圧倒的な力の差―

場の空気をも変容させるほどの威圧感―

それを見せつけられたアル…

余りにも遠い強さ―

余りにも遠い存在――

観戦してる時は夢中だたアル。

あの強さ、あの闘いに血が騒いだアル。

でも…

冷静に考えてわかったアル…

あれは恐ろしい程に――

異常な強さアル…

「…ガニメデさんは本当に人間アルか……?」

あの時に放た存在感…

あれは違うアル。

人間が放つ存在感ではなかったアル。

まるで…

もっと大きな何かの…

古菲がそう考えに浸っている時だった――

「あっ…」

視界に、見覚えのある後ろ姿が映る――

「あれは…イオさんアルか？」

後ろから見てるからよくわからないアルが…

何故か白い仮面をつけてるみたいアル。

それに服がいつもと違って黒いアル。

何だか雰囲気も違うような…

そういえば控え室でも見なかったアルが…

こんなところで一体何をしてるアルか…？

古菲は好奇心から、イオを尾行し始める――

「イオさん…どこに行くアルか…？」

イオは古菲に気づいた様子も無く、何処かへ向かってゆっくりと歩いている――

古菲はその後を静かに追う――

そうして数分経ったところで、イオは突然立ち止まる――

「世界樹…？」

そこは世界樹を見渡せる高台――

イオはその真ん中に無言で佇む――

視線は世界樹を見つめている――

その姿はまるで何かを懐かしんでいるよう――

古菲はそう感じた――

「……………」

無言の時間が流れる――

古菲は物陰からイオを見つめる――

何故だか、視線を離してはいけない気がするのだった――

「……………の……………値が……………し……………」

ん？

イオさん、何か呟いてるみたいアル。

遠くてよく聞こえないアルが…

古菲は息を潜め、耳をすませる――

「この……線……残……れ……時間……は……かな……だ」

少し聞き取れたアルが、全然意味わからないアル。

イオさんは本当にこんなところで何をしてるアルか？

「ゲー……を閉……なけ……ば……い……い」

次の瞬間――

イオは自らの仮面に手を掛ける――

そして露になる素顔――

この瞬間――

交差するはずのない運命が交わる――

っ！！

その顔を見た古菲は驚愕する――

古菲が見た顔は確かにイオに酷似している――

しかし――

根本的にイオと異なっている――

それは――

「女の子アルかつ！？」

古菲が見たのは少女――

灰色のショートカットに蒼い瞳――

そしてその無機質な表情は確かにイオと似ている――

だが――

それは明らかに少年の顔ではない――

イオに酷似した少女の顔――

正にイオの性別を変えたような容姿――

よく見れば体つきも少女のそれである――

「……誰？」

「あっ……」

この瞬間、古菲は自らの失態に気づく――

思わず出してしまった声は、しっかりとその少女に届いてしまっていた――

少女はゆっくりと古菲に視線を向ける――

そして、僅かに目を見開く――

「……………古菲……」

え？

何でワタシの名前を？

「私のこと知てるアルか！？」

古菲は問いかける――

「……………」

しかし――

少女は黙ったまま――

「答えてほしいアル！！」

そんな様子に、古菲は声を荒げる――

「……違う」

「え…？」

「貴女は…私の知っている古菲ではない…」

「どういう意味アルか…？」

「……………」

再び少女は沈黙する――

「どういう意味アルか!？」

古菲は語気を強める――

「……答える必要は――」

それに対し、少女は冷たい表情を見せる――

「ない」

そう言った瞬間、少女の手に剣が現れる――

「っ!？」

それは青い光を放つレーザーブレード――

次の瞬間には少女は古菲の視界から消える――

っ!!

古菲は自らの直感に従い、真横へ跳躍する――

――シュン――

古菲の横目に、空を切る青い光刃が映る――

危ないアル!!

一体なんのつもりアルか!?

「いきなり何するアルか!!」

古菲は少女と距離を空け、警戒しながら叫ぶ――

腰を落として重心を低くする構え――

対して、少女は構えもせず凍り付くような瞳で古菲を見つめる――

それは生きた人間の瞳ではない――

「…目撃者を排除する」

そしてその口調には生気がない――

まるで人形――

その整った容姿と相まって意思の無い人形が動いているかのよう――

古菲はその余りにも異様な姿を不気味に感じる――

「一体…誰アルか？イオさんじゃないアルか？」

古菲がそう言った瞬間――

少女の雰囲気が一変する――

っ!?

急に様子が変わったアル!!

少女は眉を歪め、僅かに視線を鋭くする――

「私はイオじゃない。私はアイ」

アイ?

試合に出てた愛衣ではないアルし…

聞いたこと無いアルな…

でも――

急にイイ表情になったアルな。

さきの冷たい人形みたいな顔よりずっとイイ顔アル。

「イイ表情アルな」

古菲の脈絡の無い発言に少女は多少の戸惑いの表情を見せる――

「……………?」

フフッ。

急に人間らしくなたアルな。

古菲はそんな少女の様子に思わず微笑む――

余りにも場違いであることは古菲にもわかっていたが、何故だか目の前の少女の表情が微笑ましく思えた――

「何故笑っている?」

少女はそんな古菲に対して少し口調を強める――

「いや、アイちゃんの表情が可愛かたから、つい笑ってしまったアルよ」

が、古菲は微笑み混じりで答える――

「可愛かった……？」

「そうアルよ」

「……………発言の意図を理解できない」

「アイちゃんは可愛いつてことアル」

「……………」

古菲の発言にアイは沈黙する――

「ワタシは古菲って言うアル」

古菲は突如声を上げる――

「……そう……」

が、アイは一言呟くだけ――

それ以上の反応は見せない――

古菲はそんな様子に不満そうな表情を見せる――

「アイちゃんもちゃんと自己紹介するアルよっ!」

それを聞いたアイは再び沈黙し、古菲を見つめる――

その瞳は僅かに揺らいでいる――

「…………アイ」

その口から出たのは自らの名前――

「よろしくアル！」

「……………」

片や体勢を構えたまま笑顔を見せ――

片やレーザーブレードを手に無言で佇む――

ここに、世にも奇妙な自己紹介が行われた――

「……理解できない」

「何がアルか？」

「命を狙われている状況でなぜ笑顔でいられる？」

「そんなの簡単アル！」

古菲はさも当然かのように胸を張る――

「アイちゃんはもう友達アル！友達に命を狙ったりしないアル！」

お互い自己紹介もしたアルし、もう立派な友達アルよ！

「……………」

アイは無表情で古菲を見つめる――

「理論が破綻しすぎている……」

「アイヤ、ワタシは頭悪いアルからな。 ” りろん ” なんて知らないアル！」

そう言って古菲は更に胸を張る――

「……………フフ…」

そんな様子を見たアイは僅かに口元を緩める――

それは本当に小さな、わかるかわからないか位の変化――

しかし――

それはとても大きな意味をもつ――

「あっ！笑たアルな〜！！！」

「…笑ってない」

「嘘アル！笑てたアルよ〜！」

「笑ってない」

「笑てたアル！」

「笑ってない」

「笑てたアル！」

「笑ってない」

「アハハハ！これじゃきりがないアルな！」

そう言って古菲は笑い声を上げる――

アイはその様子を黙って見つめる――

その視線は先程よりも柔らかい――

古菲にはそう思えた――

そして緊迫が和らぐ束の間の時間が流れる――

「おやおや。集合に遅れているから迎えに来てみれば……」

っ！？

誰アルか！？

そんな時間に終止符を打つかのように、突如第三者の声が響く――

古菲は声の元へ視線を向ける――

「こんなところにいましたか」

アイの背後に、長身の男が現れていた――

いつの間に現れたアルか……？

その服は漆黑――

顔は白い仮面で隠している――

「アイ、時間がありません。わかっていますね？」

全然気づかなかたアル…

それに…

何処かで見た気がするアル…

「わかってる…」

「ならいいのですが。ところで…」

そう言って男は古菲に視線を向ける—

仮面の奥の瞳からくる視線—

っ！！

それを受けた古菲は目を見開く—

様々な感情の混ざった瞳が古菲を捕らえる—

古菲の中に、言い様のない感情が流れ込む――

「あなたは…何をしているんですか？…古菲」

っ！？

またワタシを知ってるアル！？

「誰アルか…？」

古菲は一気に警戒を露にする――

「ククク。ルシオラとでも名乗っておきましょうか」

ルシオラ？

やっぱり聞いたことないアル…

それに…

この雰囲気…

何処かで見た気がするアル…

それもわりと身近なところで…

「アイ、あなたはみすみす素顔を見られたのですか？」

ルシオラは古菲を見つめたまま、アイに声をかける――

「肯定する…。だから目撃者を排除しようとしていたところだ…」

「なるほど」

くっ！

やっぱり戦うアルか！！

古菲はアイの発言を聞いて再び構えを見せる――

「ククク。でも、もっと良いことを思いつきましたよ」

そんな古菲を、ルシオラは不気味な笑みで見つめる――

何か……

とても嫌な感じアル……

「彼女には人質になっていただきますよう」

古菲はルシオラの醸し出す雰囲気にも眉を潜める――

「その方が”彼”には効果がありますからね」

彼…？

「誰のことアルか！？ひょっとしてネギ坊主アルか！？」

古菲の発言にルシオラは口元を歪める――

「違いますよ。ネギ君は関係ない…。ですが、良い機会です…あなたには教えてあげましょう…」

そう言ってルシオラは自らの仮面に手を伸ばす――

「世界の…残酷な現実を」

ゆっくりと外される仮面――

そして素顔が現れる――

「え……？」

その顔を見た瞬間、古菲の思考は停止する――

どういう……こと……アルか……？

何で……

「ククク。良い顔です……。これでわかりましたね？」

何で……

そんな……

おかしいアルよ……

「私が一体誰なのか、をね」

っ！！

その言葉と共に――

ルシオラは古菲の視界から消える――

「失礼」

後ろっ！？

「残念。上ですよ」

！？

次の瞬間――

古菲の視界は闇に包まれる――

最後に見たのは――

上空で光る橙色の閃光――

そして――

風に流れる橙色の髪だった――

”これから一回戦、第六試合を始めます！……って言いたいところなんだけど……”

朝倉はマイクを片手に苦笑いする――

その視線の先には修復されたステージ――

そして、その上では対戦者が佇む――

しかし、その数は1人――

「なんや！？古菲のねえちゃんまだ来んのかいな！？いい加減待ちくたびれたで！！」

1人ステージで待ち続ける小太郎は不満を露にする――

「おかしいね…古が試合に来ないなんて」

真名は控え室から怪訝な表情でそんなステージを見つめる――

「問題か？」

そんな真名に先程現れたイオが話しかける――

「やあ…イオさん。ネットの方は上手くいったかい？」

「問題ない。それよりも、そちらはどうだ？」

「大したことじゃないんだが、古の奴が試合に現れなくてね…」

” えゝ仕方ないので…小太郎選手の不戦勝とします”

朝倉のアナウンスに観客は不満そうな声を上げる――

「なんや！！不戦勝なんてつまらんやないかつ！！」

それを見た真名は肩をすくめる――

「この試合は不戦勝のようだね。まあ古にも何か事情があるんだろう」

「そうか…」

「ん？どうかしたのかいイオさん？顔色が悪いよ」

「…こんな根拠のない発言はしなくなかったが…あえて言うなら…」

イオはそこで言葉を区切る―

そして、空を見上げる―

「少し…嫌な予感がする…」

それは、イオにしては珍しい発言だった―

その瞳には―

きつと青空が広がっている―

第60話「大切なもの」

―機関機密情報―

―レベルB―

『各ジュピターシリーズのスペック分析』

《イオ0001》

「概要」

イメリア・ユニ・エルノテウリスの情報場を分割した残りの個体。分割の際、感情を欠如させZPF接続率が低下。

通常より多量の振動コア、ジュピター端末を埋め込むことにより出力を維持。

さらに二度の量子化を行い、稼働寿命はもって後数年である。

ディヴァイン解放時の安定性は低く、ジュピターとは右腕の量子端末により接続可能。

埋め込み式制御チップの存在には未だに気づいていない模様。

「能力値」

- ・戦闘値…A+
- ・ディヴァイン…AA（剣）
- ・思考…AA-
- ・ZPF接続率…B-

《エウロパ0002》

「概要」

初期構成員の中において唯一量子化が可能であった個体。
シリーズの中では唯一、EXODUS計画について知っている。

「能力値」

- ・戦闘値…C+
- ・ディヴァイン…C（鞭）
- ・思考…AA+
- ・ZPF接続率…C-

《ガニメデ0003》

「概要」

自ら量子化を志願し、量子存在となった個体。
戦闘能力値はシリーズ中で最高を誇る。

感情的な行動が目立つ。

要監視対象。

「能力値」

- ・戦闘値…S
- ・ディヴァイン…A+（鎧）
- ・思考…C+
- ・ZPF接続率…A

《カリスト0004》

「概要」

稼働年月が最長の個体。

ガニメデ0003と同様に自ら量子化を志願。

過去を改変することに拘っている。

その理由は不明だが、過去に何らかの原因が存在する模様。
規律を重んじる傾向があり、管理には好都合である。

「能力値」

- ・戦闘値…A－
- ・ディヴァイン…A（長銃）
- ・思考…B＋
- ・ZPF接続率…B－

《アマルテア0005》

「概要」

人工的に作り出した量子存在。

感情は一切存在しない。

ジュピターシリーズ機械化計画の一部であったが、サターンシリーズ計画により後継機の製造は中止された。

「能力値」

- ・戦闘値…B
- ・ディヴァイン…－

- ・思考…―
- ・ZPF接続率…―

《ヒマリア0006》

「概要」

第一次適性検査を通過し、量子化された個体。
ジュピターシリーズの暫定衛長。
規律を重んじる傾向があり、管理には好都合である。

「能力値」

- ・戦闘値…A
- ・ディヴァイン…A（剣）
- ・思考…B+
- ・ZPF接続率…A―

《エララ0007》

「概要」

カタストロフィーに伴い瓦解した王族の末裔。
非居住区においてイメリア・ユニ・エルノテウリスが保護。
以降、第三次適性検査により量子化が可能と判明し、量子存在となる。

「能力値」

- ・戦闘値…B+

- ・ディヴァイン…B（鎌）
- ・思考…B—
- ・ZPF接続率…C—

《パシファエ0008》

「概要」

量子化失敗。
凍結。

《シノーペ0009》

「概要」

量子化失敗。
凍結。

《リシテア0010》

「概要」

ジュピターシリーズ機械化計画に伴い、ディヴァインを他者の精神に干渉するものへ改良処置を行った。
本人へは量子化の部分的失敗と報告。
コード0014の際、テーベにより破壊。
再生措置を実行中。

「能力値」

- ・戦闘値…D－
- ・ディヴァイン…S（精神干渉型）
- ・思考…C－
- ・ZPF接続率…E

《カルメ0011》

「概要」

第三次適性検査を通過し、量子存在となる。
感情的言動が目立つ。
要監視対象。

「能力値」

- ・戦闘値…B＋
- ・ディヴァイン…B（大剣）
- ・思考…B－
- ・ZPF接続率…C＋

《アナンケ0012》

「概要」

第二次適性検査を通過し、量子存在となる。
高い戦闘能力値を誇る。

「能力値」

- ・戦闘値…A A+
- ・ダイヴァイン…B（刀）
- ・思考…B－
- ・ZPF接続率…C－

《レダ0013》

「概要」

第二次適性検査を通過し、量子存在となる。

「能力値」

- ・戦闘値…A
- ・ダイヴァイン…B（槍）
- ・思考…B
- ・ZPF接続率…B+

《テーベ0014》

「概要」

イメリア・ユニ・エルノテウリスの精神を抽出し、ダイヴァイン完全体に移植した個体。

精神を定着させたのはイメリアのクローン情報を元にしたダイヴァイン完全体。

精神操作の影響により、怒り以外の感情を全て失ったが、リシテアの共感能力によって感情を一時的に取り戻した。

量子化に伴い被験体0000から改称。

分裂の影響で情報場が一部欠落し世界抵抗を完全に防ぐことはできない。

理由はZPF接続率の高さと予想される。

ただし精神の集中と莫大な演算が必要。

コード0014を起こした後、アンチディヴァインにより隔離凍結。

その後、謎の失踪。

「能力値」

・ディヴァイン.. AA (剣)

• Z P F 接続率 .. S S

「闇の福音……。マギステル・マギを目指す者として、貴女には負けるわけにはいきませんわ」

高音・D・グッドマンは闇の福音を睨む――

ステージの上には2つの人影――

片方は人々を救う魔法使いを目指し――

片方は悪と見なされ、また自らも悪と認める絶対的存在――

それは正義と悪の分かりやすい構図――

しかし――

正義も悪も相対的な価値観に基づくもの――

まるで裏表のコインのように――

「フンッ。小娘が。そんな安っぽい正義を振りかざして満足か？お目出度いな」

つまらんガキだ。

正義だとなんだのと……

くだらん。

それは信念を揺るがす発言――

高音にとっては断じて許容できるものではない――

「やはり貴女には正義の尊さがわからないようですね……闇の福音。
貴女のような存在が世を乱すのですわ！」

絶対に交わらない信念――

それは明らかだった――

「フツ。所詮はガキだな」

全くくだらん。

相手にするだけ無駄だ。

口調を荒くする高音に対し、エヴァは見下すような視線を送る――

その口調は冷めている――

「いいですわ！やはり貴女には力で示すしかないようですわね！！」

力で示す、だと？

本気で言ってるのかこのガキは？

だとすれば哀れだな。

「図にのるなよ三下が。力を制限されていようが、貴様ごとき簡単に潰せる。この私を敵にした貴様自身の愚かさを呪うのだな」

その発言に、高音は顔を歪める――

”お待たせいたしましたっ！”

タイミングを見計らったかのようにアナウンスが響く――

高音は真顔に戻り、体を構える――

対してエヴァは表情すら変えない――

” それでは一回戦第七試合、開始っ!! ”

観客の歓声と共に開始の宣言がなされる――

先に動いたのは高音――

自らの影から使い魔を呼び出す――

その数は約十体――

「行きなさいっ!!」

主の指示を受けた使い魔は一斉にエヴァへと迫る――

が――

「目障りだ」

—シュン—

エヴァの振るったワイヤーによってその全てが一瞬にして還される—

「そんなっ!？」

高音は自らの使い魔が、何の抵抗もできずに上下真っ二つになる光景に驚愕する—

「フンッ。やはり口先だけのようだな」

今、私は機嫌が悪い。

理由は…

わからない。

いや…

それは嘘だな…

理由なんてわかりきっている…

アイツだ…

アイツが原因なんだろうな…

さっきまでは確認できなかったが、今さっき控え室に現れたのが見えた…

アイツを見た瞬間によくわからない感情に苛まれた。

全く…

アイツはもう私の従者ではないのに。

一切関係のないヤツだ。

だが…

つい視線を向けてしまう…

そんな私自身に苛立つ。

だから…

私は今、凄まじく機嫌が悪いんだ！！

「いいですわ！！ならばっ 『黒衣の夜想曲』 ！！」

高音の全身を影が包み、背後には巨人が現れる―

黒衣の夜想曲―

それは攻撃と防御を兼ね備えた近接最強とも言われる術式装備―

相手の攻撃を自動的に迎撃する自律性があり、全身の鎧は防御を数倍に高める―

攻撃の面でも、影の強化によって威力が上昇する―

正に近接において最強―

「そんなものがどうした？ 闇の福音をなめているようだな…ガキが」

しかし――

相手は数百年を生きた不死の吸血鬼――

それは最強の上を行く最強――

「えっ……？」

高音は信じられないものを見たかのように固まる――

高音が見た光景――

それは――

「……糸？」

自身の首や手足を囲むように鋭利なワイヤーが張り巡らされた光景だった――

「少しでも動いてみる。鎧を纏っていいようが、貴様の四股が胴から

離れることになるぞ？」

「ならこうですわっ!!！」

身動きの出来なくなった高音は使い魔を喚び出す――

「っ!？」

が――

「ククク。使い魔だろうがここで動けば切断されるぞ?」

使い魔は呆気なくワイヤーに切り刻まれて還された――

無駄な足掻きだ。

だが…

この状況は気分いい。

生意気な小娘を少しいたぶってやろうか…

「くっ……」

高音は苦々しい表情でエヴァを睨む――

正義を振りかざした結果がこれだ。

滅ぼすべき悪に圧倒される。

このガキは自分の無力さにうちひしがれているだろうな。

ククク。

久々に私の残虐さが現れそうだ…

「ハハハ！さあ降伏したらどうだ？ 貴様の正義とやらが悪に屈したという事実を自ら認めるんだな！！」

日頃から魔法使い共の振りかざす正義とやらは気に入らない。

聞くだけで嫌気がする。

「そんなことはしませんわっ!!」

フンッ。

あくまでも降伏はしないつもりか。

「ほう？ならばどうする？切り刻まれたいのか？」

無力であるが故の愚かさ。

全くつまらんな。

そんなものは見飽きた。

正義だ何だのと言って私の命を狙った奴は一体どれだけいたこと

か。

本当にくだらん。

「……………」

沈黙か。

いや、沈黙するしかないのだろうな。

なんせ、正義とやらがこの私に屈してしまったのだからな！！

「ハハハ！力もない奴が戯言をほざくからだ！貴様ら魔法使いの正義など所詮はその程度の薄っぺらいものだ」

「……………違いますわ」

あ？

何だ？

まだ諦めてないのか？

「私の目指すマギステル・マギはそんなものではありませんわっ！
」

叫んだ高音は足を一步前に踏み出す――

当然、影を纏った足にワイヤーが食い込む――

それでも高音は止まらない――

「人々の平和と秩序を守る存在、それが偉大な魔法使い（マギステル・マギ）ですわ！！」

再び足を踏み出す――

張り巡らしたワイヤーは刃物のように高音の全身を切りつける――

いくら鎧に守られているとしても、限界は見えている――

「だから…だから私は絶対に諦めませんわっ!!」

しかし、高音は止まらない――

苦痛に顔を歪めながらさらに足を進める――

「っ!？」

その光景にはエヴァも驚愕する――

何だこのガキ…

何なんだ…？

どうしてそこまでする…？

そんなくだらんものの為に…

「うっ…」

ワイヤーはついに鎧を貫通し始め、高音の体に迫る――

が、高音はさらに進む――

その姿は最早異常とも言える――

「くう…まだですわ」

バカか？

死ぬぞ…？

そんな姿を見て、ついに耐えきれなくなった者が声を上げる――

「もうやめてください！！お姉様っ！！」

控え室の愛衣は悲鳴ともとれる金切り声で叫ぶ――

「愛衣…？」

それによって高音の足はようやく止まる――

「お姉様！もういいです！！ギブアップしてください！！」

「出来ませんわ…。ここで私が諦めれば、マギステル・マギを罵倒した闇の福音を許すことになりますわ！！」

そう言って高音はもう一歩踏み出そうとする――

「お姉様！！私はそんなことどうだっていいです！！！！」

愛衣の叫びに高音は静止する――

「愛衣？」

「私にはマギステル・マギなんかよりもお姉様の方が大切です!!」

ステージに響くのは少女の悲痛な叫び――

「お姉様がこれ以上傷付くのは見たくありません!! だからもうやめてください!!」

全員が沈黙する――

「……………」

高音は愛衣を見つめる――

そこには涙を浮かべる少女の姿がある――

「愛衣…私は…」

高音の心は揺れる―

「私は…」

そして、高音は何かを悟ったかのように頷く―

「そうですわね……」

そう言って、愛衣に優しい笑顔を見せる―

「私の負けですわ」

” え、あ…えっと、試合終了っ！！勝者、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル選手！！”

そして、朝倉のアナウンスと共に試合は終わる――

「フンッ。とんだ茶番だった」

狂ったまでの使命感、義務感を持ったガキだったようだな。

だが、それも目の前の大切なものには代えられなかったというわけか…

フンッ…

つまらん…

本当につつまらん…

そんなエヴァの視界が向かった先には――

無表情で佇む少年がいた――

『
4
5.
5
1.
7
9
』

第61話「理由と意味」

「絶対におかしいわよっ!!」

「でも…アスナさん…」

「あんたも見たでしょ？高畑先生が運ばれていったじゃない!!」

「それは治療するためだと思いますけど…」

「そんなの本当だかわからないじゃない！それにさっき地下でよくわかんないロボットがいたのよっ!!」

「ハア…どうでしょう…」

アスナさんが先ほどから超さんが高畑先生を拘束していると言い出して…

「それは本当ですか？」

あっ…刹那さん。

「本当よ！この目でしっかり見たんだからっ！」

でも、アスナさんがここまで言うってことは…

「そうですか。わかりました」

そう言って刹那さんは式神を喚び出しました―

煙と共に刹那さんに似た小さな人形が現れます―

「今から地下に行くんですね？」

「もちろん！高畑先生の無事を確認しなきゃ！！」

「そうですか。私もお供したいのですが…試合が次なので行けませんか。代わりにこの『ちびせつな』を連れて行ってください」

「よろしくお願いします！テヘヘ」

ちびせつなさんはペコリとお辞儀をします――

「あ、じゃあ僕も行きます！」

「あんたはダメよ。次の次が試合でしょ。ここで待ってなさい」

アスナさんは直ぐさま僕を止めます。

でも――

ここは譲れません！

「それはできません！僕は先生です。皆さんだけを危険なところへ行かせるわけにはいきません！」

そうです！

皆さんは大切な生徒なんです！

「それは違うかもしれません……。ネギ先生」

え？

「どういうことですか？」

それを聞いた刹那さんは真剣な表情になります――

「本当に危険なのは…このステージなのかもしれません…」

ここが危険…？

「え？…どうということ師匠？」

アスナさんも聞き返します―

「先ほど高畑先生が運ばれていきましたが、余りにも早い対応でした。まるで…予めこうなることが決まっていたかのように…」

予め決まっていた…？

まさか…

いや、でもそんな…

「私の予想では、ガニメデさんも超鈴音に加担しています」

ガニメデさんが…？

そんなはずは…

だってガニメデさんは京都でも助けてくれましたし…

とても頼りになる方です…

僕には兄弟というものがわかりませんが――

こんなお兄さんがいたらいいなと思ったくらいです。

だから…

そんなガニメデさんが悪いことをするなんて考えられません…

僕にはいつも優しくしてくれたし…

タカミチも、ガニメデさんが広域指導員として働いてくれているお蔭で助かっているって…

だけど…

確かにガニメデさんはカシオペアについて何故か知っていました…

刹那さんの言う通りなのでしょうか…

「それだけではないかもしれませんが…ガニメデさんが加担している
ということは…」

刹那さんの言葉を聞いて、僕は視界が真っ白になるような錯覚を覚
えます―

「カリスト先生とイオさんも…おそろく…」

そんな…

嘘ですよ…

イオさんと…

カリスト先生が…

イオさんは僕が茶々丸さんを襲おうとしたのを止めてくれて…

京都でも助けてくれて…

それに――

イオさんが居る時、マスターはとても楽しそうに笑います。

あの笑顔は嘘じゃないと思います。

そして――

カリスト先生は、僕の先生としての目標です。

いつも冷静で生徒の皆さんに信頼されています。

僕だっていつも助けてもらっています。

少し…お父さんみたいに思っていました…

だから――

カリスト先生たちと対立するなんて…

考えられません…

だけでもし…

刹那さんの言う通りだったら…

僕はどうすればいいのでしょうか…

” それでは第一回戦第八試合、 「桜咲刹那」 選手 V S 「I O」 選手の試合を始めます！ ”

朝倉のアナウンスによって観客の視線は一気に主役へと集まる――

「……………」

イオさん…

あなた方は…

刹那は戸惑いを含む表情でイオを見つめる――

対するイオは変わらぬ無表情――

” 試合開始っ！！”

そして――

戦いは始まる――

地下に広がる空間――

それは超によって造られた拠点――

その中央制御室に、三人の人物が存在している――

「ガニメデ、大丈夫か？」

カリストは真剣な表情で尋ねる――

「ああ。問題ねえよ」

対照的に、当人は軽く答える――

「あれだけの解放をすれば負荷がかかてるはずネ。無理はしないことネ」

そんなガニメデに超が念を押す――

「わかってるぜ……」

ガニメデは僅かに遠い目をする――

その視線の先には何があるのか？――

それは誰にもわからない――

「話は変わってしまうが、一つ気になることがある」

超とガニメデの視線がカリストに集まる――

「何だ？」

「観測誤差かもしれないが……」

そこまで言ってカリストは言い淀む――

「何だよ？ はっきり言えよな」

ガニメデの発言にカリストは重々しく頷く――

「実は、一瞬なのだが…量子存在によるZPE行使を観測した」

「それがどうした？俺たちのZPEがジュピターに観測されたただけだろ」

「違う。そうではない…観測したのは…」

次に出た言葉は2人を驚愕させるに十分であった――

「我々以外の量子存在だ」

「何だと…？」

ガニメデは眉をひそめ、目付きを鋭くする――

「どういうことネ？」

「超もいつになく真剣な形相となる――」

「我々以外の量子存在がこの世界線に存在している可能性がある」

「まさか…あいつ…なのか？」

「テ―ベ0014であるか否かはわからない。だが…警戒する必要がある」

「テ―ベであるならまだいいのかもしれない…」

「何だか…嫌な予感がする…」

「私の思い違いであるならばいいのだが…」

「まさか…な…」

「そうだな…。もしもあいつだったら…」

そう…

もしもティーベであつたなら…

然るべき対処をしなければならぬ。

ガニメデとカリストは互いに深く沈黙する――

それが意味するもの――

それは、様々な思い――

「話の腰を折てしまて悪いが、問題が発生したみたいネ」

超の言葉によって二人は現実に戻される――

「んあ？何だ？」

「侵入者ネ」

超は前方のスクリーンを指差す――

「おいおい……」

「あれは……」

そこに映し出された映像を見たカリストとガニメデは視線を鋭くする――

「神楽坂、高音、佐倉、春日……そして刹那の式神……」

カリストはスクリーンに映った姿を確認する――

何故ここがわかった？

何らかの探査魔法か？

いや、あらゆる可能性を考慮しておくべきだったか…

どうやら…

彼女たちを侮っていたようだ…

「あの修道服のガキは誰だ？」

ああ、ガニメデは知らなかったか。

「あの子はココネと言って、春日美空のパートナーらしい」

春日美空…

やはり魔法関係者だったか。

「そうかよ…で、どうすんだ？ 大方、タカミチの救助にでも来たんじゃないねえのか？」

そうか。

彼女たちはその為に来たというわけか…

「もちろん放っておくわけにはいかないネ」

超の言う通りだ。

こんな所で計画を狂わせるわけにはいかない…

「なら話は早い。俺が行く」

なっ！？

ガニメデ！！

何を言ってるんだ!?

「おいガニメデ! お前は休んでいろと言っただろう!」

私は知っているぞガニメデ:

タカミチとの闘いで第四段階まで解放したお前の身体は:

「なあカリスト。ここは行かせてくれねえか?」

ガニメデ...?

「やらないきゃなんねえ時つてもんがあんだよ:俺たちにはな」

.....。

そうか。

お前は…

「ああ…。わかった。だが私も行く」

今の状態のガニメデを1人にはできない。

「それは無理ネ。カリストさんの試合は次ネ。万が一遅れてしまったら計画が狂うヨ」

「しかし…」

「大丈夫ネ。私が行くヨ」

超…

「わかった。頼んだぞ…超鈴音」

「任せるネ」

「はぁっ!!」

刹那はイオに肉薄し、モップを振り抜く――

「……」

しかし、イオはそれを易々と回避する――

イオさん…

やはり手強い。

「はっ！！」

再びイオに迫る斬撃―

しかし―

「っ！！」

既にイオはその場から消えている―

音もなく視界に映らなくなるその様子は正に消えると言っていい―

瞬動かつ！

—パシンッ—

刹那は背後に現れたイオの拳を片手で受け止める—

「捉えたっ!!」

そしてイオの腕を離さず、振り向きざまにモップの斬撃を放つ—

腕を掴まれたイオは絶対に逃れられない—

はずだった—

「情報障壁展開」

—バキッ—

え…?!

刹那が見たのは自らの得物であるモップが真っ二つに碎ける光景――

「無駄だ」

そして――

イオの蹴りが繰り出される瞬間だった――

「くっ!!」

刹那はモップを手放し、両手を防御に回す――

イオは体を駒のように回転させ、蹴りの威力を増大させる――

「うっ!!」

腕に響く震動と共に刹那はイオから離される――

それほどダメージのない刹那であったが、武器を失ったという要素は大きなものだった――

「今のは障壁、ですね…」

刹那は構えを見せつつイオに問いかける――

「肯定する。そして、この情報障壁は今の貴女では突破できない」

イオは冷たい瞳を向ける――

まるで、機械のような瞳を――

「そんなことはやってみなければわかりません!!」

そうです…

やってみなければ！

「仮にそれが可能だとして、貴女はどうする？」

え…？

どうするって…

「貴女の目的は、大切な人を守ることだと認識している。違うか？」

大切な人…

お嬢様。

「違います。私の望みはお嬢様をお守りすること！！それだけです！！」

それが私の使命…

いえ…

希望、なのかもしれません…

「逆に尋ねます！イオさん、いえ…あなた方の目的は何ですか！？」

答えてもらいますよ…

イオさん。

「イオさん、ガニメデさん、カリスト先生…あなた方は何かを企んでいるのではないですか！？」

流石に露骨すぎたか…

イオさんが口を割るとは思えない…

「……………」

刹那の問いかけにイオは沈黙する――

やはり聞き出すのは無理か…

「…そこまで知っているならば答える」

えっ？

「俺たちの目的は…」

素直に答えるだと？

「この世界を――」

イオは視線を空へと向ける――

その姿は――

何処か儚い――

「イオさん……」

空を見上げる無表情の少年――

不気味なまでに純白な服と灰色の髪――

刹那はその姿に見入る――

何故か視線が離せない――

そしてイオは視線をゆつくりと刹那に戻す――

「――悲劇から救うことだ」

っ!!

出た言葉は突拍子もないもの――

本来ならば笑われても仕方がない発言――

しかし、刹那は笑うことなどできなかった――

刹那が感じたもの――

それは

底知れぬ絶望――

消えぬ罪悪感――

終らぬ虚無感――

そして――

――苦悩――

何だ…これは…

こんな…

こんなの……

それは果てしなく刹那へと伝わる――

故に、笑うことなど――

できなかった――

「ねえ、本当にロボットなんていたわけ？」

「本当よ！本当に見たんだからっ！」

「帰りたいんですけど」

「ダメですわよ美空さん」

「え？美空って誰ですか？私はただの謎のシスターですよ？」

ハア…

あんたね…

—コツツコツツ—

「皆さんお静かに！何か聞こえますわっ！」

え？

何？

—コツツコツツ—

「前方から…何かが近づいてきますわ…」

高音の発言に、全員が身構える―

―コツツコツツ―

それに比例し、音は段々と大きくなっていく―

「一体…何の音？」

―コツツコツツコツツ―

これは…

足音…？

「誰か来ますわっ!!」

高音の発言と同時に、前方の暗闇に人影が浮かび上がる――

その数は2つ――

まるで明日菜たちと対峙するかのように静止する――

「誰ですのっ!!? 名乗りなさい!!」

そんな相手に、高音は敢然と言い放つ――

そして返ってきた言葉――

その声は――

「ハッ。今さら自己紹介する必要もねえだろ」

え…この声…

「全くネ」

うそ…

それは――

聞き覚えのある声――

「う…そ…」

師匠が言ってたのは…

本当に…

「どうした神楽坂明日菜？ やけに顔色が悪いんじゃないか」

その言葉と共に、暗闇から出てくる2つの人影――

その正体が露になる――

その姿を見た全員が目を見開く――

「ガニメデさん……ですわね……」

「超鈴音っ!!」

やっぱり……

あいつは……

でも……

色々助けてくれたのに……

それなのに……

何で……

「さてと、面倒なことしてくれたな…お前ら」

ガニメデはそう言って、雰囲気を一変させる――

正に獅子のそれ――

っ！！

明日菜たちはそれだけで気圧される――

「ガニメデさん…やはり超鈴音の仲間でしたわね！！高畑先生をどうするつもりですよ！？」

そんな中でも高音は気丈に声を上げる――

「別にどうもしねえよ。事が済むまで黙っててもらうだけだ」

何で…

何で…

「何でよっ!?!」

明日菜は突如、叫び声を上げる――

「あ…?」

何でよ…

「何でこんなことするのよっ!! あんたは私たちを助けてくれたじゃない!! 一緒に戦ったじゃない!! なのに…!」

通路に響くのは――

明日菜の悲痛な叫び――

「なのに何でよっ!!何でなのよ!!」

身近な者の裏切り――

それは心に大きな穴を開ける――

「……………」

ガニメデは沈黙する――

「答えてよ…」

何で…

何で…

何も言わないのよ…

溢れるのは疑問と悲しみ―

何故？―

その問いかけだけが頭を埋める―

故に―

少女には答えが必要だった―

明確な答えが―

「答えなさいよ！！！」

しかし―

その答えを持つ者は何も語らない―

ただ―

感情の読めない瞳を向けるだけ―

「理由を探せばいくらでも見つかる…魔法使いが気に食わない、世界の悲劇を回避する…」

そんなガニメデがようやく口を開く―

語る口調は重く―

そして、切ない―

「だが…結局、俺たちにはこれしかねえんだよ…」

ガニメデは自嘲の笑みを浮かべる―

それは何時もの勝ち気な彼からはかけ離れた姿―

「まただ…まただな…。またこうやって悲しみを増やすだけだ…」

ガニメデは自分に語るような口調となる――

「だが、俺たちはそれでしか自らの意味を見つけられねえんだ……。いや、それですら見つけられてねえか……」

ガニメデは再び自嘲の笑みを浮かべる――

「俺たちは意味を失っちゃった。全ての世界から拒絶される者たち……。それでも意味を求める……そういう存在なのさ……俺たちは」

地下通路には重い沈黙が流れる――

ガニメデの語った言葉――

それを聞いた者は沈黙するしかなかった――

しかし――

それでも前へ進もうとする者はある――

「そこを通して頂きますわよ…ガニメデさん、超さん…」

高音は沈黙を破って声を出す―

「そうかい。なら…」

その言葉を聞いたガニメデと超は構えを見せる―

「俺たちを倒していくんだな!!」

第62話「向かい合う剣」

―機関機密情報―

―レベルB―

『ZPF』

「概要」

空間そのものであり、万物はこの中に存在する。あらゆる存在の情報が記録されていることから、情報場とも呼称される。

『ZPE』

「概要」

ZPFに付随する空間エネルギー。基底状態における零点振動を指す。かつてはダークエネルギーとも呼称されていた。

『量子存在』

「概要」

量子化に成功した個体。量子化を受けられるのは先天的にZPFへの接続が可能な者に限られる。また、現段階では量子存在のみが世界線を移動することが可能である。

ただし、ゲートを使用すれば量子存在以外でも世界線を移動するこ

とが可能となる。

『ディヴァイン』

「概要」

Divine（神性）に由来する。

量子化された個体、すなわち量子存在の持つ固有な性質を意味する。
巨視的次元において示される量子的性質であり、ディヴァイン解放時に現出する物質一般を指す場合もある。

『世界抵抗（抑止力）』

「概要」

局所の特異性を打ち消そうとする世界の傾向。
回避することは実質的に不可能。

『ディヴァインの解放』

「概要」

量子存在は恒常的に世界抵抗を受け、身体的精神的ダメージを被る。
その為、自らの量子的性質を制限することで世界抵抗を緩和している。
ディヴァイン

その制限を解除することをディヴァイン解放と呼ぶ。

解放の段階は全6段階存在しており、第四解放以上の場合は世界抵抗が激化し、存在確率が発散し始める。

また、解放する度に量子存在の稼働寿命は短くなる。

以下、解放の段階とその概要を示す。

・第零解放…量子存在の通常制限状態。

・第一解放…軽度の解放であり、想念は物質化しない。

・第二解放…軽度の解放であり、想念の一部が武器として物質化し始める。

・第三解放…中程度の解放であり、想念は武器として物質化する。
Z P F 接続率も急上昇するが、この段階での世界抵抗は比較的小さい。

・第四解放…重度の解放であり、想念は完全な武器の形状として現出する。Z P F 接続率は増大する代わりに、世界抵抗も増大する。

・完全解放…全ての制限を解除した状態。量子存在本来のZ P F 接続率となり、莫大なZ P E が使用可能となる。

その一方で世界抵抗も爆発的に増大し、長時間この状態にある場合、存在確率が発散して消滅する。

『カタストロフィー』

「概要」

初のZ P F 接続実験の際に起きた臨界暴走事故。

予想以上のZ P E 値によって制御を離れたのが原因とされている。これにより、惑星上の生命の約9割が死滅したと推測されている。

また、この事故の後、莫大なZ P E が空間に散乱した。

そのため、新生児の中に数%の確率で先天的にZ P F に接続できる適合者が誕生し始める（新生児以外の適合者も確認されている）。

さらに、ZPEが局所的に集中した地点では時空の歪み（特異点）が発生。

それを利用し、他世界線と物理的干渉性をもつことに成功以降、この特異点をゲートと命名する。

現在確認されているゲートの数は1つだけである。

『ゲート』

「概要」

ZPEが局所的に集中した地点では時空の歪み（特異点）が発生する。

その特異点をゲートと呼称する。

ゲートを利用すれば、量子存在以外でも他世界線へ移動することが可能。

『マーズシリーズ』

「概要」

世界線破壊プログラム。

現在、フォボスとダイモスを製造。

莫大なZPEの集積体であり、これを目標の世界線に送り込むことで宇宙の膨張を爆発的に加速させる。

それによって目標の世界に存在する物質を素粒子レベルにまで分解することが可能。

『ジュピターシリーズ』

「概要」

ZPF適合者を量子化することによって生産した量子存在。
現在、イオ0001からテ0014まで存在。

ただし、パシファエ00008とシノーペ00009は量子化に失敗し暴走した為、隔離凍結。

さらに、コード0014においてアマルテア0005、リシテア0010が消滅。

現在稼働しているのは10個体である。

『サターンシリーズ』

「概要」

他世界線侵略型量子存在。第一試験機、ミマスは初実験の際に消失。現在、増産中。

「誰ですのっ!? 名乗りなさい!!」

この声は高音さんネ。

「ハッ。今さら自己紹介する必要もねえだろ」

そうネ…

ガニメデさんの言う通りネ。

これから敵にするのは…

良く知た相手ネ。

だが―

「全くネ」

迷いは無いネ。

「う…そ…」

明日菜サンの声―

掠れた声…

「どうした神楽坂明日菜？やけに顔色が悪いじゃないか」

その言葉と共に、超とガニメデは暗闇から姿を現す――

「ガニメデさん…ですわね…」

「超鈴音っ！！」

驚きの余り声も出ない…という訳ではないみたいネ。

やはり、ある程度は予想していたカ。

「さてと、面倒なことしてくれたな…お前ら」

ガニメデはそう言って、雰囲気を一変させる――

いかなる者をも気圧させる圧迫感――

ガニメデさんのこの気迫……

正直、敵じゃなくてよかたと思うヨ……

「ガニメデさん……やはり超鈴音の仲間でしたわね……！高畑先生をどうするつもりですか……！？」

そんな中でも高音さんは声を上げたネ。

その気力は流石ネ。

「別にどうもしねえよ。事が済むまで黙っててもらっただけだ」

ガニメデさんは感情の無い表情で答えるネ。

その顔はまるで……

「何でよっ!?!」

明日菜は突如、叫び声を上げる――

「何でこんなことするのよっ!?! あんたは私たちを助けてくれたじゃない!?! 一緒に戦ったじゃない!?! なのに!?!」

一緒に戦った…

何故こんなことをするのか…

「なのに何でよっ!?! 何でなのよ!?!」

裏切り、カ…

「……………」

ガニメデさんは何も答えないネ…

「答えてよ…」

いや…

答えられないのかもしれないネ…

理由—

そんなものはわかりきっているヨ。

だが…

「答えなさいよ!!!!」

それは…

” 答え ” ではないネ。

「理由を探せばいくらでも見つかる…魔法使いが気に食わない、世界の悲劇を回避する…」

ガニメデさんも同じみたいネ…

「だが…結局俺たちにはこれしかねえんだよ…」

こんな切ない表情のガニメデさん…初めて見たヨ。

「まただ…まただな…」

” また ” …力。

そうネ…

ガニメデさんは何回も変えようとしてきたネ…

まだ来ぬ悲劇を…ネ。

「またこうやって悲しみを増やすだけだ…」

ガニメデさんの語る言葉は重く響くネ…

それはきつと―

「だが、俺たちはそれでしか自らの意味を見つけられねえんだ…」

”意味”

ガニメデさんは…

意味を見失ったみたいネ…

「いや、それですら見つけられてねえか……」

意味を見つけれない…

私は知てるヨ。

ガニメデさん…

いや—

量子存在の過去を…ネ。

「俺たちは意味を失っちゃった。全ての世界から拒絶される者たち…」

そうネ…

ガニメデさんは何回も何回も過去を変えようとしたネ。

でも…

救えた世界はなかと聞いたヨ…

伸ばした手は受け入れられなかつたとも言ってたヨ…

だから為す術もなく、その世界を滅ぼすしかなかた…ともネ…

そもそも悲劇を迎える世界が無くなってしまうえば悲劇は起きないネ…

悲劇が回避できないのならば、その世界を滅ぼすしかない、カ…

だから救うはずの世界を滅ぼし続けるしかなかった…

悲惨ネ…

「それでも意味を求める…そういう存在なのさ…俺たちは」

そうカ…

過去を変えろということとはそういうことネ…

残るのは後悔と絶望…

ガニメデさん…

あなたはこんなものを何回も感じていたのカ…？

「そこを通して頂きますわよ…ガニメデさん、超さん…」

量子存在。

余りにも悲しい存在ネ…

「そうかい。なら…」

過去、いや…多世界の未来を改変する―

この選択が正しいのか間違っているのかは誰にもわからないネ。

だが…だからこそ―

それは―

「俺たちを倒していくんだな!!」

これからの結果で決まるネ。

「この世界を悲劇から救うことだ」

……。

イオさんから感じるこの感情―絶望、後悔、苦悩…

嘘…ではないようです…

しかし―

わからないことがあります。

「悲劇とは…一体何なのですか？」

刹那は静かな口調でイオへ問い掛ける―

彼らがここまで本気であるということは…

余程大きな事件が起きるということでしょうか？

刹那はじつと答えを待つ――

「……………」

しかし――

答えは返ってこない――

視界に映る少年はただ冷たい瞳だけを向けてくる――

「答えてください。もし協力できることなら、私も手伝います」

イオさんは答えないが、手伝えるのならば私も協力したい。

ただし――

それが正しいことならば、ですが。

「答えてください。イオさん」

だからこそ――

私は見極めなければならない。

イオさんの”答え”が本当に正しいものか否か。

「……………」

イオの無機質な瞳が僅かに揺れる――

刹那はその瞳を黙って見つめる――

これから返ってくる”答え”を待つ――

「ならば……」

そしてイオはついに口を開く――

深青の瞳が貫くように刹那を捉える――

「覚悟を見せろ」

その発言と同時だった――

「何をっ!?!」

イオは自らの右腕を高々と掲げる――

「ジュピター、広域障壁を展開」

”了解。範囲確定、量子場を展開”

端末の人工音声と共に、刹那の視界が一変する――

「これはっ!？」

青い壁に囲まれたっ!？

一体!？

刹那は驚愕の表情で周囲を見回す――

そこに広がるのは半透明の障壁――

先程まで広がっていた舞台や観客の姿は障壁によって見る
ことができない――

青く輝く障壁がステージを取り囲んでいる――

まるで、そこだけを隔離しているかのように――

隔離されたステージの中にはイオと刹那のみ――

その光景は、2人が鳥かごの中に捕らわれているかのように――

「一体何をつ！？」

刹那が問い掛けた先――

そこには不気味な程に無表情の少年が佇む――

「これは量子ステルス。障壁により隔離された空間は外部から認識不可能となる」

認識不可能？

ということは…

「外から我々の姿を見ることはできない」

なるほど…

”あの”超鈴音と関係しているならば或いは…

「何故そんなことを？」

しかし…

イオさんの目的がわからない。

何故ステージを外から隔離したのだろうか？

まさか…

「貴女の覚悟を見るためだ」

私の…覚悟…？

「この中ならば、全力を出しても問題はない」

やはり全力を出すために隔離を！？

「貴女も力を隠す必要はない」

くっ…

そういうことか…

「ディヴァイン―」

まずいっ!!

これはっ!!

本気で私を潰す気か!?

「―第三解放」

その言葉と共に、少年の魔力が増大する―

そして世界は否定する――

少年の存在を――

なんという魔力だ！

ガニメデさんの時もそうだったが、この魔力量は多すぎる…

それに第三ということはまだ先があるということ…

この力は一体何だ？

イオの手には1本の剣――

その背後には多数の剣が空中に待機している――

柄の無い純白の剣は淡い青い光を放ち、切っ先を自らの相手へと向ける――

「いくぞ」

来るっ!!

そして一斉に放たれる剣の弾丸――

「『アデアット』!!」

迎え撃て!!

しかし、放たれた剣が刹那を襲うことは無い――

刹那のアーティファクト

『ヒ首・十六串呂』
シーカ・シシクシロ

十六の短剣がダイヴァインブレードと衝突する――

放たれたダイヴァインブレードは11本――

数では刹那が優位――

イオのダイヴァインブレードは押し負け、床に突き刺さる――

「…なるほど。アーティファクトか」

イオはその様子を見ても表情を変えない――

今のは危なかった…

でも、これならいける！

イオさんの主戦力はあの白い剣の機動力。

おそらく自律性のあるアーティファクト。

私のアーティファクトと似ている…

だからこそ、長所と欠点もわかる。

イオさんと自律したアーティファクトが同時に攻撃をしてきたら脅威となる。

その一方で、アーティファクトの機動力が封じられたら一気に戦力が落ちてしまう。

イオさんのアーティファクトは私のアーティファクトで迎撃できる。

それを差し引いても、私のアーティファクトはまだ5本自由に使える。

実質的に、イオさんは私と『ヒ首・十六串呂』の相手をしなければならぬ。

現状では私が優位だ。

でも…

私は知っています。

京都で見たイオさんの本当の力…

空を覆い尽くす程の白い剣。

それに、龍宮の魔眼ですら捉えられない瞬動。

思えば、イオさんやガニメデさん、カリスト先生について何も知らない…

彼らの力は未知の部分が多い…

うかつだったな…

それに…

イオさんはまだ全力ではない。

だとすると…

今のうちにケリを着けなければっ!!

思考の末、刹那は瞬動によりイオの懐へ潜り込む――

その手には短剣『匕首・十六串呂』――

「はあっ!!」

刹那は短剣の切り返しの速度を最大限に生かし、イオへ斬りかかる――

「くっ…」

イオはその小刻みな動きを全て回避する――

が、イオのディヴァインブレードは中程度のリーチを持つ剣――

『匕首・十六串呂』よりも遥かに長い――

懐に接近されては、まともに振ることができない――

「はっ!!」

イオは回避が間に合わないと思切り、ブレードを盾にする――

甲高い金属の衝突音が響く――

刹那は攻撃の手を緩めない――

突き、斬り上げ、斬り下げ――

次々と攻撃を繰り返す――

ここで手を緩めると距離を離されてしまう!

イオさんのアーティファクトは中程度のリーチを持つ剣。

私の『ヒ首・十六串呂』は短剣。

中距離では不利だが、接近戦で戦えば小回りの利く私が有利。

距離を離されるわけにはいかない!!

「はあっ！」

「っ…」

刹那の猛攻に耐え続けるイオ―

それは刹那が優勢に見える光景―

しかし―

刹那は大きな誤算をしていた―

それは―

イオのディヴァインブレードの数は、必ずしも固定されてはいない
ということ―

すなわち―

「たああ!!」

もらいましたっ!!

刹那は確信に満ちた一撃を放つ――

だが――

――キンッ――

響くのは金属音――

え？

刹那が見たのは、新たに現れた純白の剣が自らの一撃を受け止めた
光景――

まさか……新たな剣を盾に!？

まだ最大まで出していなかったのかっ!?

「……………」

イオは冷たい瞳を刹那に向け、手を上空へ挙げる――

その背後には――

「なっ!？」

数にして倍の剣――

「……………」

そして、イオは手を振り下ろす――

それを合図に、全ての剣が刹那に向かう――

「っ!？」

しまった…

刹那の瞳に映ったのは、剣の豪雨――

それは絶望的な速さで刹那へ迫る――

刹那の視界に映ったものは全てがゆっくりと流れる――

思考だけが素早く回る――

これは間に合わない…

ああ…

私はもう…

諦めかける刹那――

その思考は冷徹にも回避は不可能だと教えてくる――

刹那は呆然と剣が自分に迫る光景を見つめる――

だが――

一番最後に頭を過る人物がいた――

その姿で、刹那は我に返る――

――お嬢様――

第63話「認識の外延」

—『54. 32. 85』—

「なるほど…障壁を使って舞台を隔離したか」

隔離されているために中の様子は確認できないが…

今舞台上で戦っているのはイオと桜咲だな。

私は会場の内部を見回りがてら闘いに視線を送っている。

だが、おそらく学園側もネット上の工作には気づいただろう。

いつ私たちに手を下してくるかわからない。

本来ならば気を散らしているべきではない。

しかし…

やはり、イオの様子は気になる。

理由はわからないが、最近イオは不安定だ。

それに…

身体の状態も気になる…

私はもう手遅れだが、イオには少しでも長く生きてほしい。

ガニメデもだ…

あいつは無茶をしすぎている…

これ以上、2人にディヴァインを解放させるわけにはいかない。

だから—

私が全てを背負う。

たとえ—

この命が尽きようとも。

カリストは決意を秘めた瞳を舞台へと向ける――

「ん？あれは…」

その視界の隅、現在地から見てわりと近く of 場所に見覚えのある姿が映る――

カリストはおもむろに歩み寄って声をかける――

「長谷川千雨か」

背後から話しかけられた千雨は驚きながら振り向く――

「うおっ！？な、なんだよいきなり…じゃなくて！何なんですか突然！？」

しかし、そこにいるのが自分の担任であることを確認すると慌てて口調を改める――

おや？

あまり大声を上げるような生徒ではないと思っていたが。

「驚かせてすまない。姿が見えたものだから話しかけてみたただだよ」

そう言ってカリストは笑みを見せる――

「そ…そうですか…」

それを見た千雨は少し顔を赤らめて視線を前方へ戻す――

そんな様子を気にせず、カリストは続ける――

「隣座ってもいいか？」

「え、ええ…どうぞ…」

了解を得たカリストは千雨の隣に座り、舞台に視線を送る――

「あ、あの…選手控え室にいないていいんですか？観客が先生に気づいたら騒ぎ立ってますよ？」

千雨はそんなカリストを遠慮がちに見る――

「観客は舞台に夢中だから私には気づかないさ。それより…」

カリストはそこで言葉を区切り、千雨に視線を向ける――

「今は先生ではない。1人の観客としてここにいるだけだ。だから、不必要に口調を改める必要はないぞ？」

突然視線を向けられた千雨は慌ててカリストから視線を反らす――

「あ、いや、その……別にこれが素の口調ですからっ!!」

そんな様子を見たカリストは短く笑う――

「実を言うと私は教師というのは得意ではなくてね。むしろ、こういう場では気楽に話してもらえた方が私も助かるんだ」

カリストは苦笑いし、再び舞台へ視線を戻す――

「……………」

千雨はそんな様子を横目で見つめる――

そしてしばらくの沈黙の後、ゆっくりと口を開く――

「ハァー。わかったよカリスト先生。私も敬語とか苦手だしな。あんたにはフツーに話すからな？」

それを聞いたカリストは笑顔を見せる――

「ああ。助かるよ」

「全く…先生が苦手な先生とか聞いたことないぜ」

「ハハハ…。頼りない担任ですまない」

「別に悪いなんて言ってないぜ？」

「そうか。ありがとう」

礼を言われた千雨は慌てたようにカリストから視線を反らす――

「べ、別にほめてるわけじゃねーからな！」

そんな様子に、カリストは笑みを深める――

そして再び沈黙が訪れる――

「……………」

そんな中、千雨はカリストの様子を遠慮がちに伺いながら口を開く――

「なあ…あの青い壁みたいの…演出なのか？ステージの仕掛けだろ？」

カリストは表情を変えずにその問いに答える――

「あれは仕掛けではない」

「じゃあ何なんだよ？ あんたが闘ってた時も何か特殊な映像効果と
か使ってたんだろ？」

「いや、あの時も細工などはしていない」

「じゃあ本当に何なんだ？ ネットに書き込みされてたが…まさか魔法
とか言わないよな？」

カリストはその問いかけに苦笑いを浮かべる――

「魔法か…。或いはそうかもしれないな」

千雨はその返答を聞いて渋い顔になる――

「おいおい……。正気か先生？ 私はそういう非現実的な話は嫌いなんだ」

その発言を聞いたカリストは真顔になる――

「非現実的か。ならば尋ねるが、現実とは一体何をもって定義されるんだ？」

突然の質問に千雨は少し吃りながら答える――

「え？ いや……。それは……ちゃんと証明されてるかどうかってことだろ」

「なるほど。それが君の定義か。ならば、証明されてなければ現実

的ではないということだな」

「ああ。当たり前だろ」

「では、君が見ている現実が正しいと証明してくれないか？」

「証明？」

「証明できないのなら、君の現実は現実的でないということになってしまっただろう？」

「……………」

千雨は難しい表情で黙り込む――

それを見たカリストは苦笑いを見せる――

「現実の証明は出来ない。現実というのは人それぞれ違っている。だから、自分の常識に合わないからといって否定するのは危険だ。何が現実的で何が非現実的か…その議論は意味をなさない」

「……………」

千雨は何かを考えるようにじっと固まる――

「なるほどな…。確かにあんたの言ってることは一理ありそうだが、ただ、私は魔法なんて信じないぜ」

「それが君の選択ならば尊重しなければな。確かに実際に認識するまでは信じ難いものだ」

「あんたは変わってるな」

「そうかもな…」

「まあ、先生に言われたように、多少は現実ってもんを広く捉えてみるよ」

そう言って千雨は不敵な笑みを見せる――

「それは良かった」

対するカリストも今日一番の笑みを返す――

その笑みは深く、根底には色々な感情が見える――

それだけでカリストの抱えているものの重さを推し測ることができる――

それでも――

カリストは笑顔を見せる――

決して叶わぬ”何か”を信じて――

「ここは逃げるが勝ちっ!!」

春日美空はココネを連れて来た道を猛烈な勢いで引き返す――

だが――

「逃がすかよ…」

「!？」

逃げた先には座標転移したガニメデの姿――

美空は慌てて足を止める――

だが、その瞬間に致命的な隙が生じる――

同時にガニメデは美空の視界から消える――

「えっ!?!」

そして現れたのは美空の背後――

「美空ちゃん!!」

友人の声で自らのミスに気づいた美空だったが、既に遅い――

「あ……」

ガニメデは手刀を美空の首に振り降ろす――

「ぐっ……」

その衝撃で美空は気を失い、その場に崩れる――

ガニメデはそれを支え、ゆっくりと地面に寝かせる――

――バチンッ――

そのガニメデの手をココネが振り払う――

「お前は……」

ガニメデはココネに視線を向ける――

「ココネちゃん逃げて……!!」

明日菜が切迫した声で叫ぶが、ココネは美空を庇うようにガニメデ

に立ちはだかる――

「……………」

無表情と言っているいい表情だが、その瞳は鋭くガニメデを睨む――

感情が無いようで確かに存在する瞳――

それを見たガニメデは既視感を覚える――

思い浮かんだのは見慣れたあの少年――

「そうか……。こいつはお前にとって大切なヤツなんだな」

それだけ呟くと、ガニメデはココネに背を向ける――

「だったら強くなれ。大切なもんを守れるくらいにな」

ココネは一度ガニメデの背中を見た後、気を失った美空に寄り添う――

「さて…次はお前らだな」

ガニメデは感情の読めない表情で明日菜、愛衣、高音、ちびせつなに視線を向ける――

位置的に明日菜たちは超とガニメデに挟まれている――

それは明らかに追い詰められていることを意味している――

「ど、ど、どうしようお姉様!？」

愛衣は顔面を蒼白にして狼狽える――

「落ち着きなさいメイ!ここは一点突破しかありませんわ!」

高音の発言にちびせつなが同意する――

「そうですね：問題はガニメデさんと超鈴音のどちらを突破するかということになります」

「なら超さんの方を突破するしかありませんわね…」

「はい…。本当は脱出したいのですが…ガニメデさんとの戦闘は避けるべきです…」

「わかりましたわ。いいですね？メイ！神楽坂さん！」

高音は気合いを込めた口調で呼び掛ける――

「あ、はいっ！」

「……………」

しかし、それに答えたのはメイだけで明日菜は無言のまま呆然と何処かを見つめている――

「神楽坂さん！！聞いてますの！？」

「え…あ、ごめんなさい」

二度目の呼び掛けで我に返った明日菜は覚束ない口調で答える――

そんな様子に、高音は真顔になる――

「神楽坂さん。知人と戦わなければならないのは確かに辛いことですわ。ですが、今すべきことは呆然と立ち尽くすことではないですわよ！」

その言葉を聞いた明日菜は何かに気づいたように顔を上げる――

「そうね…うん。そうよね…」

そしてその何かを噛みしめるように頷く――

「ゴメン！私も戦う！」

そして感情の戻った瞳を前方へ向ける――

そこにいるのは純白の服に身を包んだ獅子――

「その意気ですわ。今から超さんを一点突破しますわ。いいですね？」

「オッケーよ！」

全員が構えを見せたところで、超は閉じていた口をゆっくりと開く――

「作戦タイムは終わったかな？」

その顔にあるのは余裕の表情――

「いきますわよっ!!」

超の挑発に応えるかのように、全員が駆け出す――

同時に愛衣は無詠唱で魔法の射手を放ち、高音は影の使い魔を召喚する――

しかし――

「甘いネ」

超には掠りもしない――

何故なら――

「なっ!？」

超は既にその場にはいない――

「瞬動!？ いや、これは……」

それは一切の時間差が生じない移動――

時を制御した移動――

「もらったヨ」

そして側面に現れた超は高音に拳を放つ――

「っ!!」

―ボスン―

「うぐっ!」

高音は勢い良く壁に打ち付けられる―

「お姉様っ!!」

それを見た愛衣は高音に近づく―

しかし、それは大きな隙を生み出す―

「ダメですっ!!」

咄嗟に止めようと声を上げたちびせつなだったが――

――バツ――

「あ……」

突如背後に現れたガニメデの手刀を首筋に受け、意識を刈り取られる――

そして――

気づけば残っているのは明日菜ただ1人――

「そんな……」

明日菜は愕然と周りを見回す――

だが――

そこに戦える者はいない――

「さて、残るはお前だけだ神楽坂明日菜。ああ…ついでに桜咲刹那の式神もいたか」

そんな明日菜をガニメデと超が取り囲む――

「何だよ…」

明日菜はそんな2人に鋭い視線を送る――

「こんなことして何になるって言うのよ!？」

明日菜にしては珍しい怒りの表情を見せる――

「くどいぞ…」

そんな明日菜に対し、ガニメデは吐き捨てるように呟く――

「何度だって言ってやるわよ!!」

しかし、明日菜も譲らない――

「だから言っただろ……。俺は本来そういう存在なんだと」

「そんなの答えになってないじゃない!!」

明日菜は尚も詰問する――

そんな様子を見ていた超は、我慢できなくなったかのように声を上げる――

「やめるネ」

その声は重く響く――

そして何より、言葉に威圧感がある――

「何よ……?」

明日菜はそんな威圧感に怯みながらも声を出す――

「これは私の計画ネ。ガニメデさんは協力してくれてるだけネ。言いたいことがあるなら、この超鈴音に言うネ」

対して超は毅然と言い放つ――

これ以上、ガニメデさんを責めるのは許せないネ…

これはこの私、超鈴音の計画ネ。

裏切ったのは私ネ。

だから――

責める相手は私ネ。

ガニメデさんは十分に……いや、それ以上に苦悩してきたはずネ……

この計画に巻き込んだのは私ネ……

だから、この苦悩は私が受けるべきネ。

「明日菜さん！それよりも今は逃げることを考えてくださいっ！」

明日菜の肩の上のちびせつなは必死に叫ぶ――

その発言を聞いた明日菜は再び我に返る――

「ゴメン……」

そして自らの失態を恥じ、短く呟く――

「でも、もう逃げられそうにないわよ？」

そう言っ て明日菜は前後に視線を向ける――

前方にはガニメデ――

後方には超鈴音――

逃げ道は存在しない――

「突破するしかありませんっ！この事態を伝えるためにも脱出です！」

「え？本体の師匠と連絡取れないの？」

「はい…先ほどから繋がらなくなってしまっ て…。本体に何かあったのかもしれない」

「そんな！？師匠が！？」

明日菜は驚愕の表情で叫ぶ――

「おいおい。他人の心配する前に自分の心配しろよな」

そんな明日菜にガニメデは呆れた口調になる――

「ふんっ！何よ！あんたなんか私1人でも倒せるわよ！」

「ほお。そりゃ楽しみだ…なっ！！」

ガニメデは話し終わる前に転移する――

「っ！！」

現れたのは明日菜の背後――

そして振り下ろす手刀――

だが――

――バチンッ――

「なっ!?!」

ガニメデは初めて表情を崩す――

見たのは、明日菜が自らの手刀を見切り、叩いて軌道を反らした光景――

俺の手刀を見切っただと!?!?

ディヴァインを解放してないとしてもおかしい……

常人が見切れるはずがない!

なんて反応速度だ…

やはりこいつ…

何かが…

「なめんじゃないわよー!!」

ガニメデは体勢を崩した状態――

そこに明日菜が拳を放つ――

チッ!

転移している時間はねえ!

なら…

――情報障壁展開!!――

ガニメデの意思に反応し、ジュピターは障壁を展開する――

ガニメデの目の前に現れた緑色に輝く幾何学模様――

その障壁はあらゆる攻撃を防ぐ鉄壁の要塞――

故に――

明日菜の拳など、容易く防ぐ――

”はずだった”――

「たあああっ！」

――スッ――

が、明日菜の拳はまるでそこには”何もないかのように”障壁を通
過する――

「なっ!?!」

何だ…これは…？

情報障壁を通過した？

そんな馬鹿な！！

あり得ねえ！！

情報障壁を通過するもんなんて存在しねえ！！

いや…待てよ…

まさか…

こいつ…

次の瞬間、明日菜の拳はガニメデの腹部を捉える――

「くっ！」

「ガニメデさん！！！」

超の叫び声が響く――

まさか……

あり得ねえ……

だが……

この感覚――

間違いねえ……

これは……

アンチダイヴァインだ……

第64話「限界の領域」

私には救うことができなかった――

私は無力だった――

あの時、私が手を離さなければ――

だがもう遅い――

過去は変えられない――

例え過去の世界線へ転移しようがそれは変わらない――

確かにその世界の”彼女”を救うことはできるだろう――

たが、それはその世界線の”彼女”であって、私の知っている”彼女”ではない――

私の過去は変わらない――

だが――

他の世界の”彼女”であろうが救えるのならば救いたかった――

それがエゴから来る自己満足であることなどわかっていた――

だから私は量子化を受けた――

あの日、私は死んだ――

そして『カリスト』となった――

だが私は救えなかった――

他の世界の”彼女”さえ――

そう――

だった1人の”家族”でさえ――

—お嬢様—

私は…

脳裏を過る少女—

守るべき大切な人—

私は…

その瞬間、刹那の瞳に生気が戻る―

「私は負けられない!!」

―バサアッ―

譲れぬ決意と共に、白い翼が露になる―

それは望まなかった力―

その翼の為に、鳥族からも人間からも忌み避けられた―

しかし、その翼を持った少女は辛くは無かった―

なぜなら、守るべき人を守ることが彼女の全てだから―

ただ、それでもたった一つの恐れがあった―

それは―

守るべき人にまで異質な目で見られるのではないかという恐怖――

それ故に隠し続けた力――

しかし――

「はあああっ！」

今の刹那には迷いは無い――

何故なら、大切な人は自分を認めてくれると確信できたから――

だから迷いは無い――

刹那はもう迷わない――

お嬢様は私がお守りする――！！

だから

こんなところで負けるわけにはいかない――！！

時を空けず、刹那の頭上から降り注ぐ剣――

「たああああっ!!」

私は既に一度、お嬢様をお守りできなかった……

刹那は飛翔し、その豪雨を回避する――

あの時、私は自分の無力さを悔いた……

体の寸前を通り過ぎる無数の剣――

目の前の大切な人を守ることができなかった……

高速で迫るその全てを刹那は避ける――

ただ泣くことしかできない自分を呪った…

私にはお嬢様のお側にいる資格はないと思った…

耳元に剣が風を切る音が届く――

――シュンッ――

しかし…

刹那は降り注ぐ剣を縫うように避け続ける――

お嬢様は全てを認めてくださった。

私の過去も…

私のこの力も…

気づけば全ての剣は獲物を逃し、床に突き刺さっている――

「……………」

イオは無言で上空へ舞い上がった刹那を見上げる――

その背中には　大きく広げられた翼――

これが鳥族の姿か。

やはり京都の時に見たものと同じだ。

それ以来見たことはあったが…

隠す気はなくなったようだな。

「これが私の覚悟です。忌み嫌われる鳥族と人間のハーフの姿…化け物の姿…」

化け物か…

貴女が化け物ならば―

俺たちは一体何なのだろうか？

「ですが、もう隠しません」

なるほど…

何らかの決意が決まったようだな。

「お嬢様を守る…そのために…イオさん、あなたには負けられません」

” 大切な人を守る ”

それが貴女の目的か。

なぜ大切なのだろうか？

大切というのはどういうことだろうか？

本来的に感情の無い俺にはわからない。

だが…

今ならわかるかもしれない…

何故だか…

そんな気がする…

「理解した。ならば…最早語る言葉は必要ない」

だが、今は計画を優先する時だ。

余計な考えは必要ない。

そうだ。

俺は感情などない機械なのだから。

―行け、ディヴァイン―

床に刺さったディヴァインブレードが再び空中へ浮遊する―

それはイオの発言に応えているかのよう―

そして次の瞬間、再び刹那へ高速で迫る―

「くっ!!」

刹那はその場から一気に降下する―

だが―

「振り切れないっ!」

ディヴァインブレードは執拗に刹那を追尾する――

「ならば！」

刹那はアーティファクト『ヒ首・十六串呂』を再び16に分裂させる――

「迎撃てっ！！！」

その言葉と共に、16の短刀はディヴァインブレードに向かって放たれる――

真っ向から衝突する2つの豪雨――

――キンキンキンキンッ――

甲高い金属音が連続して響く――

「……………」

全て撃墜されたか…

イオは『匕首・十六串呂』が自らのダイヴァインブレードを撃ち落とす光景を見つめる――

その顔に感情は無い――

やはり、第三段階のダイヴァイン…いや…

”この状態”ではアーティファクトに及ばないか。

「はあああっ！」

邪魔なダイヴァインを排除した刹那は好機を掴む――

現時点でイオを守る剣は存在しない――

それを確認した刹那はイオへ向かって急降下する――

ディヴァインを撃墜し、攻勢に出たか。

確かにその選択は間違いではない。

その手には『ヒ首・十六串呂』の本体――

そして体の周囲には分裂した15の短刀――

今のディヴァインではあのアーティファクトは防げない。

だが……

イオは片手を迫り来る刹那へ向けて伸ばす――

それだけが防御の手段ではない。

「情報障壁展開」

その瞬間、青く輝く障壁が現れる――

「これはっ！！」

刹那の斬撃はその障壁に遮られる――

青い幾何学模様がイオと刹那を別つ――

刹那は眉をひそめる――

対してイオはいつもと変わらぬ無表情――

2人の視線が障壁越しに交わる――

予測通りだ。

アーティファクトであろうが情報障壁を貫通することはできない。

生体ZPFの発現。

それが情報障壁。

故に情報障壁はあらゆる攻撃を防ぐ。

しかし、例外も存在する。

余りにも強力な攻撃を防ぐ場合は障壁展開する演算が間に合わなくなる。

結果、障壁自体は無傷でも障壁を展開できなくなってしまう。

そしてもう一つの例外は障壁自体を無効化するもの。

そんなものはたった一つしか存在しない。

それは

アンチディヴァイン。

奇襲に失敗した刹那はイオから離れ、再び上空へ舞い上がる――

「駄目か…」

イオさんのあの魔法障壁は厄介だ。

他の魔法使いが使う障壁とは何かが違う。

斬撃をあてた感覚も違う。

何故だか絶対に破れないような気がした…

でも、もしかしたら何か弱点があるのかもしれない。

さっきイオさんが呪文のようなことを呟いていた。

それから障壁が現れるまでに僅かに時間差があったはず…

もしかしたら、障壁を張るのに僅かな時間が必要なかもしれない。

だとすれば…

刹那は再びイオへ急降下する――

「情報障壁展開」

イオは上空から迫り来る刹那の斬撃を再び防ぐ――

それを見た瞬間、刹那は口の端をつり上げる――

今だっ！！

「っ！？」

その瞬間、イオの背後に分裂した15の短刀が現れる――

「はあっ！」

前方は私の斬撃。

後方からは私のアーティファクト。

さあ！

これで逃げ場はありません！

イオは刹那の斬撃を障壁で受け止める――

それ故、背後は無防備――

『匕首・十六串呂』は無慈悲にイオの背中へ迫る――

「っ……！！」

イオの敗北は目前だった――

なに……！？

が、量子存在はその程度で負けはしない――

『匕首・十六串呂』がイオを襲う直前――

イオを守るようにディヴァインブレードが現れ、盾となる――

――パリンツ――

刹那の『ヒ首・十六串呂』によって碎かれるディヴァインブレード――

それにより『ヒ首・十六串呂』は失速する――

稼いだのは僅かな時間――

なるほど……

さすがですね。

イオさん。

しかし、イオにとってはそれで十分だった――

その隙にイオは刹那から離れた場所に転移する――

再びステージ上で対峙する無表情の少年と翼を広げた少女――

鋭い視線が交差する――

「さすがですね……イオさん。今のは私が勝ったと思いました」

イオさんはあの剣を盾に使ったが、恐らく防ぐつもりはなかったはず。

たぶん、目的は時間を稼ぐためだ。

イオさんは瞬動よりも早い移動……

”あの”龍宮でさえ視ることができない瞬動を使えることは私も知っています。

加えてあの魔法障壁。

私知知っている魔法使いのそれとは比べものにならないほど硬い。

どちらもイオさんの大きな武器です。

しかし

さっきの攻撃でわかりました。

イオさんの弱点。

それは、瞬動と魔法障壁のどちらを使うにしても僅かな時間が必要という点。

先程のイオさんは明らかに時間を稼いでいました。

本来なら”あの瞬動”で私の攻撃など全て回避することができたはず。

しかし、イオさんはそうしなかった。

いや、できなかったと言った方が適切ですね。

何故なら瞬動を使う時間が無かったから。

障壁を展開するよりもあの瞬動を使う方が時間がかかるのでしよう。

だからイオさんは私の初撃を障壁で防いだ…

間違いない。

イオさん。

あなたの弱点を見つけましたよ。

「……………」

イオは刹那の発言には応えず、黙って視線だけに向ける――

深青色の瞳が静かに刹那を捉える――

「ですが、次はそうはいきません」

イオさんの弱点を突く一番効率の良い攻撃……

それは反撃の時間を与えない連続攻撃っ！！

間を開けず刹那はイオの目の前へ瞬動で迫る――

「たあ！！」

刹那は短刀の小回りを生かし、イオへ斬りかかる――

「……」

それを避けるイオだったが、刹那の攻撃は止まらない――

そこだっ！！

「っ……」

私が斬撃を切り返す間隔は短刀を至近距離で使っている為に短い。

とは言え、イオさんには時間的猶予を与えてしまう。

その猶予を無くす方法。

それは

『匕首・十六串呂』の自律性を利用した連続攻撃。

私が切り返す間も15の『匕首・十六串呂』がイオさんを攻撃する――

問題はイオさんが再びあの白い剣を盾に使ってしまう可能性……

それを解決するには、私自身がイオさんに可能な限り接近する必要

がある。

「っ……!?!」

一瞬の隙を突き、刹那はイオの懷へ飛び込む――

イオは僅かに目を見開く――

――シュッ――

刹那とイオの間はほぼ無い――

もう少しで肌が触れそうな程に密着している――

そんな状態で刹那は短刀を振るう――

「っ……」

イオはそれを辛うじて回避する――

しかし、刹那の攻撃は止まない――

『匕首・十六串呂』がイオを取り囲み、連続的に斬りかかる――

飛び回る15の短刀と密着した刹那の斬撃――

最早隙は無い――

「くっ……」

短刀がイオの髪を切る――

灰色の線が風に流れる――

もうイオに逃げ場は無い――

短刀の乱舞に捉えられたイオ――

体の回りを短刀が高速で飛び回る――

――サッ――

ついに短刀がイオを捉え始める――

――スーッ――

イオの腕に線が走る――

イオの表情が僅かに歪む――

これは私の勝ちですね。

イオさん。

「ディヴァイン……」

ん？

今イオさんが何か呟いたような……

「…第四解放」

しまった！！

次の瞬間、イオの全身に莫大な魔力が流れる――

何だこの魔力は…？

やはり京都の時と同じ…

まずい…

刹那は京都で見たあの白い剣の豪雨を幻視する――

空を覆い尽くす程の剣――

圧倒的な力でリョウメンスクナを破壊したあの光景――

しかし――

刹那が見たのはそれよりも衝撃的な光景だった――

その光景は――

飛び散る青い液体――

床に崩れる少年――

イオ……さん……？

吐血……？

青い……血？

刹那の思考は止まる――

”警告。ダイヴァイン解放による身体負荷レベル深刻。これ以上の解放は存在確率に影響が発生”

端末の声だけが、冷たく響いた――

第65話「限界のその先に」

” お前達に意味などない ”

理解している

” お前達は何処にも存在しない ”

そんなことは理解している

” 量子存在はどの世界線においても拒絶される ”

理解している

” お前には感情などない ”

俺には意味などない

”お前は機械と何ら変わらない”

そう…俺には何もない

何度も言われ続けてきたことだ

俺は量子存在”イオ”

ただの機械だ

だが…

本当に俺には何もないのか…？

俺には意味がないのか…？

もしそうならば…

もう存在する必要もない

量子存在には死さえ許されない

俺は消滅する

誰にも認識されずに

だが、それでいいのかもしれない

意味も無く存在するよりは消えてしまう方が良い

これが報いなのか…？

過去を変えようとした俺たちの…報い

俺は何のために…

いや

俺は感情の無い機械だ

理由などもとより存在しないと予想する

誰からも意味を与えられない機械だ

誰からも…

『私に秘密をつくるな…』

…？

この声は…

『私を騙すな…』

確か…

あの時の…

『私を無視するな…』

マクダウエル…

『私に黙っていなくなるなああ！！』

ああ…

そうだった…

俺はあの時約束した…

そう

これからは黙っていなくなったりはしない…と

あの時のマクダウエルは泣いていた…

それを見た俺は、確かにその涙をとめたいと思った

それすらも虚構の感情だとしても

俺は何処にも存在していないとしても

—あの思いは嘘ではない—

だから…

この約束は

破るわけにはいかない

――絶対に――

「一体何が…？」

イオさんが突然倒れた…

私は何もしていない…

なのに何故…？

それに…

「青い血…」

やはり京都の時の見間違いではなかった。

イオさんの血液は確かに青い…

これはどういう…

いや！

詮索は後だ！

今はイオさんを助けなければっ！！

刹那は床に倒れたイオへ駆け寄ろうと足を踏み出す―

その時―

「え…！？」

倒れていたイオがゆっくりと体を起こす―

「……っ」

そんな…

あれだけの吐血をして…

まだ立ち上がるなんて…

立ち上がったイオはふらつきながらも再び刹那と向き合う―

「っ!？」

その顔を見た刹那は思わず固まる―

刹那が見たのは無表情のイオ―

しかし―

その瞳が何時ものそれとは似ても似つかない―

明らかに意志の籠った瞳―

深青色の双眼が刹那を射抜く―

その深い瞳は全てを呑み込むような錯覚を与える―

刹那は思わず夜の海を想起する――

この眼力……

本当にイオさんなのか？

何時もと何かが違う……

「まだ……」

雰囲気が変わった……？

「まだ消えるわけにはいかない」

そして少年は抗う――

世界の抵抗に――

—『71. 15. 28』—

「長いな…」

イオのことだ。

確かに桜咲は手強い相手だが…

負けることはないだろう。

しかし…

最近のイオは不安定だ。

まさかディヴァインを使っているのではないだろうな…

だとすればイオが消滅しかねない…

く…

心配だが、ここから中の様子はわからない。

ステージを隔離したのが裏目に出たか。

心配だ…

しかし

「大丈夫だ」

イオを信じよう。

お前はこんなところで消えはしないさ。

私はそう信じている。

もう…

これ以上…

大切な”家族”を失うわけにはいかない。

” 通告。暗号化ZPF通信を受信”

ん？

誰からだ？

イオではないとすると…

ガニメデか。

「わかった。通信を繋げ」

” 了解。ZPF通信に接続”

ガニメデは侵入者…

もとい彼女たちの相手をしていたはずだが…

何か問題でも生じたか？

”おいカリスト。聞こえてるか？”

この声は…

やはりガニメデか。

「聞こえている。何かあったのか？」

ガニメデが彼女たち相手に苦戦するとは思えないが…

”ああ。少しな…。面白れえもんを見つけたぜ”

面白いもの？

「何のことだ？」

”聞いて腰抜かすなよ？”

「ふざけてないでちゃんと報告しろ。何を見つけたんだ？」

”アンチディヴァインだ”

っ！？

「何だと！？」

アンチディヴァインだと！？

あり得ない！

この世界線に存在するはずがない！

マジックキャンセル
”魔法無効化能力って知ってるか？”

魔法無効化能力？

聞いたことはないな…

「いや。私は知らない」

”だろうな。俺もさっき知ったとこだ。ネットワークに強制接続して情報を調べ上げた”

ジューピターでハッキングしたのか…

おいおい…

”随分と強固なプロテクトだったぜ。よっぽど知られたくない情報みたいだな。まあ量子コンピューターにかかれば一瞬で突破できたが”

「で、それがどうしたんだ？ アンチデイクヴァインと何の関係がある？」

” まあ聞けよ。この魔法無効化能力ってのは、文字通りどんな魔法も無効化しちまう能力だ。要は魔力を無効にすんのさ”

「それで？」

” この世界の魔力ってのはつまりZPEのことだ”

「まさか……」

” そうだ。この魔法無効化能力ってのはZPE無効化能力ってわけだ”

「つまりそれは……」

” ああ。アンチデイヴアインのことだ”

馬鹿な…

何故この世界線に？

” 驚くのはこれだけじゃねえぜ。これが一番プロテクトが固かった情報なんだが…”

まだ何かあるのか…？

” 神楽坂明日菜ってガキがいるよな？”

「ああ。彼女がどうした？」

”あのがき…その魔法無効化能力者だぜ…”

っ!?

何を…!?

「どういうことだ!?’」

”さっき直に戦ってわかったぜ。あのがき、俺の情報障壁を無効化しやがった”

情報障壁を無効化だと?

確かにそんなことができるものは一つしか存在しない…

「それで…お前は大丈夫だったのか?’」

” ああ。超のやつが助けてくれたお陰でな。あいつらはまとめて閉じ込めてある”

「そうか…良かった…」

” 正直焦ったがな”

「それにしても彼女がアンチダイヴァインというのは信じ難いな…。人型アンチダイヴァインなど聞いたこともない…」

” まあな”

「今までも彼女からアンチダイヴァインの感覚は受けなかった」

” それも不思議だぜ。さっきは確かにアンチダイヴァインを喰らった感覚だった。つーことは、指向性のあるアンチダイヴァインってことになる”

「指向性のある人型アンチディヴァインか…そんな存在があり得るのだろうか…」

” 忘れたかカリスト？ここは違う世界だぜ？可能性は無限に存在する”

「そうだったな」

” まああのガキが本当にアンチディヴァインなのかどうかつてのはまだ調べてみねえとわからねえ”

「そうだな…私も調査するでしょう」

” 悪いが話はまだ終わりじゃねえぜ。この世界線で20年前、魔法世界で広域魔法消失現象が起こったのは知ってるな？”

「ああ。超から聞いている」

” 今まで疑問に思わなかったが、考えてみる…。俺たちの世界線でカタストロフィーが起きたのは何年前だ？”

忘れもしない…

あの悲劇…

私から全てを奪ったあの惨劇…

あれは20年前だ。

ん…？

待てよ…

っ！？

「20年前！？」

” 正解。この一致は偶然か？俺たちの世界線ではZPEが増大し、

こっちの世界線では魔力が消失した…。おまけにアンチデイヴアイ
ンと魔力無効化能力：何か臭わないか？”

そう言われてみれば確かに：

「確かにな：だが、結論を出すには早すぎる」

”もちろんそうだ。だが、こいつは調べがいがありそうだぜ。機関
の奴ら：何か隠してやがるのかもしれないねえ”

何だこの感覚は…？

何か：

何か大きなことが行われようとしている気がする…

私たちの知らないところで…

「まだ消えるわけにはいかない」

イオは口元の青い血を腕で拭う――

その姿は明らかに疲弊している――

「イオさん！そんな状態で無理をしないでくださいっ！！」

その様子を見た刹那は声を荒げ、制止する――

何故だ？

何故敵であるこの俺を心配するのだ…？

そうか…

これが優しさか…

だが

「ジュピター、再起動」

俺は負けられない。

”了解。システム再起動”

「イオさんっ!! やめてください!!」

すまないが…

「それはできない」

俺はもう止まらない。

後戻りはできない。

「イオさん!! それ以上戦うのは危険です!! 止めてください!!」

俺にはこれしかない。

「俺にも譲れない信念がある」

それが自らに意味を求める抛り所なのかもしれない。

イオは真っ直ぐに刹那を見つめる――

その視線を受けた刹那はイオの覚悟を悟る――

「信念……ですか……?」

そして刹那は確信する――

「ああ。そうだ……」

イオは絶対に引かないと――

その覚悟を知った刹那は、もうイオを引き止めることはできない――

「そうですか……わかりました」

刹那のできること――

それは相手の覚悟に対し、自らも覚悟を決めることのみ――

刹那は構えを見せる――

「……………」

イオと刹那は再び向かい合う――

両者の顔に迷いは無い――

桜咲刹那。

気というエネルギー形態を利用した剣術は脅威だ。

剣術だけの勝負では俺に勝ち目は無いと予想する。

ならばどのように戦うべきか……

現状でのディヴァイン解放は不可能。

これ以上の世界抵抗を受けたら身体が消滅する。

だとすれば使用可能な武器はレーザーブレードのみ。

だが、このレーザーブレードの出力であるのアーティファクトに対抗できるか不明だ。

他にも座標転移と情報障壁は使用可能だ。

しかし、先程の様子では演算に時間が必要であることが見破られているだろう。

迂闊に使用できない。

どうするべきか…

接近戦は極力避けるべきだが、遠距離からの攻撃手段が無い。

いや…

たった一つだけ方法がある。

量子存在となった者はそもそもZPF接続率が先天的に高い。

この世界線で言うならば魔法使いの素質があるということになる。

ZPE行使は魔法を使うことに等しい。

ならば…

理論上、俺もこの世界線の”魔法”を使うことができる。

ただし、俺は量子化されている。

それ故、ZPEの制御形式が魔法使いと余りにも異なっている。

俺は空間に存在するZPEを利用しているが、俺自身の魔力量は少ない。

恐らく、普通に詠唱するだけでは魔法を使うことはできないだろう。

コンピューターを使う必要がある。

ジュピターに詠唱を補正させ、連続的に演算させなければならないと予想する。

つまり、一つの魔法を行使するのに暫くの時間が必要だ。

桜咲刹那は俺が魔法を使えるとは知らない。

だが、彼女の能力から考えて一度知ってしまえば上手く対処するだろう。

二度目は通用しないと考えるべきだ。

ならば不意を突いた奇襲しかない。

それが最善の策だ。

作戦は決まった。

「ジュピター、ネギ・スプリングフィールドの魔法詠唱を分析し再演算しろ」

リスクは大きい。

”了解。分析と演算の平行処理開始”

演算が完了するまで桜咲刹那と近接戦闘をして時間を稼がなければ
ならない。

剣術と武器、共に相手が上。

圧倒的に不利な状況だ。

だが、やるしかない。

「いきますよ。イオさん」

そう言って刹那は駆け出す――

わざわざ攻撃するタイミングを知らせるあたり、彼女の真面目さが
現れている――

「……………」

対するイオは無言で”刃の無い刀”を取り出す――

漆黒の柄だけがイオの手の中に収まる――

「っ!!」

それを見た刹那は記憶を呼び起こす――

暗闇に光る蒼い閃光――

それはイオが異形を次々と消し去る姿――

その時に見たイオの武器――

「……………」

その瞬間――

漆黒の柄から蒼い刃が伸びる――

蒼く輝く刀身――

その光は不気味に辺りを照らす――

第66話「無慈悲な約定」

「おい…ルシオラ。話が違うんじゃないか？」

「はい？何のことですかアンディメ君？」

「そのガキのことだ。人質をとるなんて計画には無かったはずだ」

「ああ、そのことですか。確かに計画にはありませんでしたが、仕方のないことですよ」

「そうかよ…」

「その顔は…納得していないようですね」

「そりゃそうだろ…」

「いいですかアンディメ君？繰り返しますがエゼ君の失踪によって我々は計画の変更を余儀なくされました」

「ああ…」

「だから今こうして彼らに直接手を下そうとしているのです」

「わかってる…」

「最早手段など選んでいる場合ではありませんよ」

「わかってるさ…」

「それに彼女たちは我々の知っている”彼女たち”ではないのですよ？この世界線は我々にとっての”過去”ではありません。あった

かもしれない可能性の世界です」

「そんなこと…わかってるさ。だが…」

「この世界線の存在は我々にとって全て幻。単なる虚数解の可能性、座標値に過ぎないので」

「……。お前は変わったな…」

「当然です。あんな理不尽な連鎖を体験すれば誰だって変わるものですよ。ねえアンディメ君？」

「……………」

「こんな理不尽で悲しみに満ちた世界線は削除しなくてはならない」

「その為にあいつが必要なんだったな…」

「そうです。イオ君…いえ、イメリア君の情報場があれば全てをリセットできるのです」

「そうか。やはりこの世界線のイオは…」

「間違いないでしょう。彼なら接続できるはずです」

「ようやく見つけたな」

「ええ。苦劳しましたよ。無限の世界線の中から見つけ出すのにはね…」

「ああ…。長い旅だった…」

「ですが、それももう終わりです。全てを消し去る時が来たのです」

「はあっ!!」

刹那の斬撃は正確にイオへと繰り出される――

しかし――

――スッ――

イオはそれを紙一重で回避し続ける――

また避けられたっ！

負傷しているはずなのに動きは落ちていない…

そして隙を見ては刹那に斬り返す―

刹那の視界の端に青い閃光が走る―

「っ!!」

刹那は寸前で体を反らす―

獲物を逃した一閃は刹那の真横の空を切る―

く…!

反撃も鋭い!

この青く輝く刀身…

あの防衛戦の時と同じだ。

突然消えたり現れたり…

一体何なんだ！？

こんな武器は見たことがない…

間合いが取りづらい！

このままでは…

ならば…

次の瞬間、刹那はイオの背後に現れる――

これでっ！

そして繰り出す一閃――

白銀の刃がイオの背中に迫る――

「……………」

しかし、その間の僅かな時間はイオにとって回避するに十分なもの――
間髪を空けずにイオは上空へ跳躍する――

「なにっ!？」

上空へ回避した!？

なんという跳躍力だ…

刹那の斬撃は再び何も無い空間を切る――

その隙を突き、上空のイオは刹那へ急降下する――

踵落とし!？

しまった!

回避は間に合わない。

受け止めるしかない!

刹那は短刀を自らの頭上に構える――

イオの踵落としが刹那に迫る――

「くう!!」

短刀で受け止めた刹那の腕に衝撃が伝わる――

刹那は思わず苦い表情を見せ、直ぐにイオから離れる――

く…

なんて威力だ…

気で防御したのにこの衝撃…

今のはただの踵落としではないはず…

一瞬、魔力の噴射が見えた。

おそらくそれで加速したのだろう。

でなければこんな威力にはならない。

あの一瞬で回避だけでなく反撃までしてきた…

まさか誘われたのか!?

だとすればイオさんの思考速度は脅威だ…

なるほど。

これで確信が持てました。

イオさんの最大の武器。

それはあの異常なまでの冷静さ。

イオさんの動きは確かに常人離れしている。

しかし、それでも見切れるレベルです。

それに失礼な言い方ですが、剣の腕もそこまでではない。

それでも私はイオさんに一撃も当てられていない…

むしろ私の方が翻弄されている…

私が不調なわけではない。

その理由はイオさんにある。

イオさんは先ほどから私と真正面から斬り合っていない。

適度な距離を空け、隙を見ては一閃するだけ…

私との剣術勝負を避けている。

それにあの魔法障壁も使っていない。

使えば足が止まり、私に接近を許してしまうからだろう。

全て計算されているというわけか…

この冷静な思考能力…

やはりイオさんは強敵だ。

しかし、イオさんに決定力が無いのも事実。

このまま逃げ続けられるとは思えない。

そんなことはイオさんもわかっているはず…

なのに何故？

何か時間稼ぎが必要な理由があるのだろうか…

いや、今は詮索している時ではない。

イオさんがあくまで回避するつもりなら…

回避が間に合わない程攻めるのみっ！

刹那は瞬動によってイオの目の前に現れる――

「はあああ！」

そして振るわれる短刀――

イオはそれを紙一重で避ける――

やはり避けるかつ！

しかし、まだ終わりではないっ！

「たあっ！！」

が、刹那の斬撃は止まらない――

15に分裂した短刀が自律してイオに迫る

上下左右へと振るう刹那の斬撃――

そして飛び交う15の短刀――

目視が困難な程高速の斬撃がイオを襲う――

「っ!!」

回避し続けるイオだったが、徐々に動きが鈍くなる――

回避する暇を与えない連続的な斬撃。

やはりこれならばイオさんを捉えることができる。

今度こそ私が勝たせて頂きます。

そして…

あなた方の計画を全て教えて頂きます。

追い詰められたイオは遂に刹那と真正面から斬り合う――

しかし――

「くっ！」

イオのレーザーブレードは刹那には届かない――

イオさん。

申し訳ありませんが……

その腕では私には勝てません。

――ズサッ――

「ぐっ……！」

反対に、刹那の斬撃はイオを捉える――

イオの腕が青く染まる――

刹那とイオ――

一方は己の大切なものを守るために鍛練し続けた剣術――

一方は戦闘訓練によって得た剣技――

その差は歴然――

剣術において、イオは刹那に遠く及ばない――

イオが刹那と真正面から戦い、勝てるはずなどそもそもなかった――

「ぐ……」

決着は直ぐに決する――

イオは斬られた片腕を押さえ、床に膝をつく――

その姿からはもう戦闘力を見てとることはできない――

終わりましたね…

もうイオさんに戦う力は無い。

「私の勝ちですイオさん。棄権して早く治療を受けてください」

本意ではないとは言え、私がイオさんをこれだけ痛めつけてしまっ
た…

すみません…

刹那はそんなイオを難しい表情で見つめる――

「……………」

しかし、イオは無言のままに棄権する様子はない――

イオさん？

急所を外したとは言え早く治療を受けないと…

まさか…

棄権しないつもりですか！？

「イオさんっ！これ以上は無意味です！早く治療をっ！！」

刹那は尚も懸命に呼び掛ける――

それに応えるようにイオはゆっくりと口を開く――

「治療の方が無意味だ…。俺たちの負傷は貴女方ではどうしようもない」

「え？」

負傷は回復魔法で治療できるはずです。

治療できないなんてことは…

「この程度の外的損傷ならば再構成プログラムによって直ぐに回復する」

その発言を肯定するかのようにイオの斬り傷が塞がり始める――

本当に傷が…

一体どういう…

「それに…俺はまだ負けてはいない」

” 通告。ZPE補正演算完了”

イオは斬られた右腕を刹那に向かって伸ばす――

イオさん？

「全振動コア強制始動…」

何を？

「擬似魔法回路形成…」

え…？

「『雷の暴風』改」

その瞬間、刹那の視界は真っ白に染まる――

「まだなのか…？」

桜咲とイオの戦いは今も尚続いている。

流石に長すぎる。

どうする…？

私が止めに行くべきか…？

いや…

イオを信じると決めた以上、余計な介入はすべきではない。

しかし…

「あと5分だな…」

あと5分しても決着がつかないようならば…

私が止めに行くしかない。

く…

やはり2人を隔離すべきではなかった。

中の様子が全くわからない…

カリストは苦い表情をステージへと向ける―

そこには青く輝く障壁だけが見える―

障壁によって取り囲まれたステージの中の様子は誰にもわからない―

「信じているぞ…イオ」

カリストは遠くを見つめながら呟く―

その時―

舞台の障壁が突如消え始める―

”おっと？さっきからステージの様子がわからなくなっていました
が、どうやら壁が消えているようです！！”

朝倉のアナウンスと共に観客の視線が舞台に集まる――

そこに見えるのは――

「イオっ！！」

無表情で佇む少年と、床に倒れた少女――

”ど、どうやら決着はついていたようですっ！勝者、イオ選手！！
というか桜咲さん……大丈夫？”

良かった……

無事だったか……

間を空けず、イオは刹那を抱えその場から消える――

「全く…イオのやつ。自分よりも他人の傷の心配か。それに…桜咲の翼を隠したのか…。お前らしいな」

それを見たカリストの表情は穏やかだった――

「全く…。お前は無茶しすぎだ…」

超の地下施設の一角――

治療室にカリストのため息が響く――

その視線の先にはベッドに横になるイオがいる――

「今回ばかりはカリストに同意するぜ。その傷、回復してないところを見ると解放による身体負荷だろ」

まあ俺が言えたことじゃねえがな。

だが、ディヴァイン解放による負荷は回復できねえ。

ただでさえ短い寿命が更に縮む。

あんま使うべきじゃねえのは事実だ。

特にイオ……

お前はな……

「問題ない。それより、桜咲刹那はどうなった？」

おいおい……

他人の心配より自分の心配しろよな……

カリストから聞いたが、振動コアが焼き切れちゃってるらしいじゃないか…

どんな無茶な使い方したんだよ…

「彼女なら大丈夫だ。大した外傷もない。衝撃によって気を失っただけのようだ」

「そうか…」

イオは無表情で呟く――

それを見たカリストが声を荒げる――

「そうか、ではない！お前の体をスキャンしたが、酷いものだったぞ！」

それは日頃のカリストからはかけ離れた姿――

カリスト…お前…

「体内の振動コアと演算素子の半分が焼き切れている…。さらに内臓は解放の負荷でボロボロだ…」

包帯だらけのイオを見て、カリストは思わず視線を反らす――

そんなカリストをガニメデは真剣な目付きで見つめる――

そうか…

カリスト。

お前は俺たちを本当に大切な仲間と思っているんだな。

「どうしてここまでしたんだ…イオ…？」

カリストは辛い表情で問いかける――

イオはそんなカリストを無表情で見つめる――

その瞳が僅かに揺れる――

「……すまない」

イオの口から出たのは謝罪の言葉――

「お前はもう……これ以上、ディヴァインを解放するな……。でないと
お前は……」

消滅、か……

「了解した……」

イオだけじゃねえがな……

俺とカリストも…

「私は次の試合に行く。安静にしてくれ」

そう言い、カリストはイオに背を向ける――

「ガニメデ」

カリストは横顔だけガニメデに向ける――

その視線は真剣なもの――

何だよ…

改まって…

「何だ？」

ガニメデはわざとらしく陽気な声を出す――

「イオを頼んだぞ」

お前が頼み事か。

そりゃ破るわけにはいかねえな。

「ああ。任せろ」

カリスト。

お前も無茶すんなよ……

ガニメデの返答を聞いたカリストは無言で治療室を出て行く――

その後ろ姿は――

何処か切なかった――

第67話「過去との対立」

それは不気味なまでに白い部屋――

窓から見えるのは赤い大地、灰色の空――

そして――

部屋の中には2人の人物――

「スルト主任、邪魔な魔法使いどもは駆除できそうなのか？」

「はい。策はすでに進行しております」

「ほお。それはアンチディヴァインをMM元老院に流したのと同関係あるのかな？」

「はい。アンチディヴァインを応用したADFシステムの量産に成功しました」

「成る程。害虫は害虫同士で潰し合っておけば良いということか」

「魔法使い狩り”も順調に進むことでしょう。更にゲートの接続も間もなく完了する見込みです」

「素晴らしい。因みに実験はどうなっている？」

「”あちら”で行われた実験によれば、ADFによって魔法使いは魔力を失うということが実証されました」

「ならば、”魔法使い狩り”も本格的に始められるな」

「はい。議長のご命令で直ぐにでも始められます」

「結構だ。しかし、少し気になることがある」

「あの総督…でしょうか？」

「そうだ。奴は油断ならない男だ。何を企んでいるかわかったものではない」

「メガロメセンブリア信託統治領・新オスティア総督、クルト・ゲーデル。やはり削除しますか？」

「いや、それには及ばん。奴はまだ使える。”魔法使い狩り”に奴は必要だ。しばらくは泳がせておけ」

「承知致しました」

「くだらん。メガロメセンブリアだのオスティアだの…。そんな名に何の意味がある？ あれはもうじき我々のものとなるのだからな…」

”勝者イオ選手！！”

朝倉のアナウンスが会場に響く――

「そんな…刹那さんが負けた…？」

それに…

タカミチの捜索に行った皆さんとも連絡が取れなくなってしまいました…

「どうしましょう…」

ネギは控え室からステージを眺め、絶望したように呟く――

僕が先生としてなんとかしなきゃ……

でも……

相手はカリスト先生達……

僕一人ではどうしようも……

あ！

そうですっ！

他の人に助けを求めればっ！

ネギは隣に座っているエヴァにすがるような視線を送る――

「あ、あの……マスター……」

まずはマスターに……

しかし――

ネギに声をかけられたエヴァの眉間にはしわが寄っており、その表情は不機嫌そのもの――

「あ？なんだ？」

あれ……？

何だかマスターの不機嫌が悪いような……

ちょっと顔が怖いです……

「お願いしたいことがありますっ！」

何でマスターはこんなに不機嫌なんでしょうか……？

イオさんと刹那さんの姿が見えてから急に不機嫌に……

「却下だ却下。私は今機嫌が悪いんだ」

エヴァは面倒くさそうに片手をひらひらさせる――

「そ、そんなぁ!! お願いしますマスター!!」

しかし、ネギはそれでも引かない――

「うるさい!! ガキの問題はガキの自分で解決しろっ!!」

ネギのしつこさに痺れを切らしたエヴァは乱暴に席を立つ――

あっ…

マスターが何処かへ行ってしまった…

「そんな…どうしよう…」

僕一人ではどうしようもありません…

そんな落胆するネギに第三者の声がかかる――

「困り事かい？ネギ君？」

ネギは声の方へ振り向き、目を見開く――

えっ…

そこにいたのは――

「っ！！カリスト…先生…」

どうして…

カリスト先生が…

「どうしたんだい？そんなに驚いて」

カリストは不気味な程に穏やかな笑みを見せる――

カ…カリスト…先生…

そうだ…

次は僕とカリスト先生の試合だった…

ど、どうしよう…

僕を捕まえに来たのでしょうか…

正直怖いです…

でも…

ここで言わないと…

アスナさん達をどうしたのか問い詰めないと…

そうです…

僕は…

僕は皆さんの先生なんですっ!!

「カ、カリスト先生っ!! アスナさん達をどうしたんですかっ!!」

ネギは思い切ったように問いかける――

対するカリストは表情一つ変えない――

「知りたいのかい？」

カリストの口調も平常と変わらない――

その異様に冷静な姿はネギに恐怖を与える――

カリスト先生…

何時もと変わらないはずなのに…

とっても…怖い…

「は、はいっ！」

でも…

僕だって負けません。

「安心していい。彼女たちは無事だ」

そんなネギの様子を察してか、カリストは不自然な笑みを見せる――

それはネギの恐怖心を更に増長させる――

「本当…ですね？」

「もちろんだ。それより確か、次はネギ君と私の対戦だったね」

「……………」

「ならばこうしよう。私に勝てたら、彼女たちを解放する」

「その約束、本当ですね？」

「本当だとも。ただし…」

前置きをした上でカリストは意味深に付け加える――

「私が勝ったならばネギ君、キミもおとなしく捕まってもらおうよ」

その視線からは全く感情が読めない――

しかし、ネギは底知れぬ威圧感を感じ冷や汗を流す――

「わ、わかりました……」

「ではね。私は先にステージで待っているよ」

そう言ってカリストはステージへ歩を進める――

が、途中でその足を止める――

「ああそうだ。一つ言い忘れたが……」

そしてネギへ振り向かずに口を開く――

「助けを求めよう、などとは考えないことだよ」

ネギはカリストの背中を怯えながら見つめる――

「生徒のことを考えるならば、ね」

その言葉を残し、カリストはステージへと去って行く――

残されたネギには顔面を蒼白に染めることしかできなかった――

「カリスト…先生…」

舞台へ現れたネギが見たもの――

それは目を閉じ、無言で佇む長身の男――

その身を白い戦闘服に包み、橙色の長髪が風に揺れている――

「ようやく来たか。ネギ君」

ネギの声を聞いたカリストはゆっくりとその目を開く――

「教えてください！カリスト先生たちは一体何をしようとしているんですかっ!？」

フツ…

ネギ君、やはり君は甘いな。

それを聞いてどうするんだ？

「あえて言うのなら、世界の悲劇を無くすというところか」

やれやれ…

自分で言っておきながら笑えてくる。

救えなかった世界を削除し続けてきたこの私が…

世界の悲劇を無くす…などと…

「悲劇を無くす…？」

「そうだ。君はガニメデから聞かなかったか？ 私たちが何者なのか、を」

「確か…他の世界に行くことが出来る存在だと聞きました…」

ほお…

ガニメデはそこまで話したのか。

「なるほど。そこまで聞いていたのか。ならば話は早い」

「どうということ…ですか…？」

「私たちはこの世界線の近似未来から来た者だということだ。より簡単に言うならば…」

この響きは好きではないんだがな…

「私たちは未来人だ」

正確には他世界線の存在と言うべきだがな。

「えっ…」

「ここは西暦2003年だったな。私たちは2186年から来た量子存在、つまり君たちから見て183年後の世界から来たわけだ」

これも正確に言うならば、未来の可能性の一つだがな…

「そんなことが…」

「カシオペアを実際に使った君ならば理解できると思うが？」

「…確かに…そうですね…」

さすがはネギ君。

理解が早い。

「ただし、あくまでも近似未来の世界から来たのであって、実際の未来から来たわけではない。超鈴音とも別の世界線だ」

そう。

彼女の世界線と私たちの世界線は異なる歴史を持つ。

そもそも私たちの世界線には火星を基とした魔法世界など存在しない。

魔法も存在せず、代わりにZPE技術が存在する。

まあ、カタストロフィーによって過去の記録が消し飛んでしまっただけかもしれないが…

「じゃあ悲劇とは何なんですか…?」

「今の君には話したところでわからないさ」

「そんな!ちゃんと答えてくださいっ!」

「ほお。では、君たち魔法使いが原因だと言ったら理解するのかな?」

「え……」

「君たちが魔法を隠匿さえしなければ悲劇は避けられた、と言った方がいいかな」

「そんなこと……」

「信じられないか？だが事実だ。君たち魔法使いが悲劇の原因だ」

「そんな……嘘ですっ!!」

「どう思うのかは勝手だが、超は実際にその未来を見て来た」

「超さんが？」

「そこでネギ君、キミに提案がある。私たちに協力しないか？」

「協力!？」

「そう。私たちに協力すれば悲劇を回避し、多くの命を救える」

「救える…」

「そして、君の”悲劇”だって避けられる」

「っ!？」

「私は知っているよ。君の過去を」

あくまでもイオから聞いた話だな。

「……………」

急に表情が変わったな。

やはり、イオの報告は正しいようだ。

ネギ君はこのことになると我を忘れる傾向がある。

「あの”悲劇”。他の世界線でも無限に存在している過去だ。私たちに協力するなら、その悲劇を止めることができる」

「僕は……」

「君の”村”を、大切な”人々”を、守れるんだよ？」

「みんなを…守れる…」

「だから君は魔法使いである必要などない。あんな矛盾だらけの奴らの仲間である必要はない」

「矛盾？」

「だっておかしいとは思わないか？なぜ魔法を隠匿する必要がある？」

「それは一般の方を危険に晒さないためです！！」

…ネギ君。

その発言…

本気で言っているのか…？

「……それだよ………」

「……………」

「危険…？笑わせるな…」

それは虐げる側の言い訳だ…

「危険なのは魔法使い自身だ。一般人を危険に晒さないため…など
と言っておきながら…魔法使いが一番危険だ」

そうだ…

魔法使いは”奴ら”と何も変わらない…

「カリスト…先生…？」

「一般人には何も知らせず、ただ危険を振り撒くばかり…」

あの時だって…

「魔法の隠匿などと下らない戯言の為に救える命も救わず…」

そう!!

あの時”彼女”が死んだのもっ!!

「何人の人々が何も知らずに死んでいったと思っている!!」

こいつら魔法使いどもと同じように”奴ら”が彼女を巻き込んだのだ!!

何も知らない彼女を!!

私から家族を、全てを奪った!!

「どの世界でもそうだ!! 結局苦しむのは何も知らされぬ弱き人々だ!!」

私だけではない!!

奴らはカタストロフィーを引き起こし、何人もの人々を巻き添えにした!!

許さない!

私は決して許さない!!

「あの…カリスト…先生？」

「……………」

……………。

ああ…

私としたことがついムキになってしまったな…

少し冷静にならなくてはな…

「ネギ君。キミはそんな奴らの仲間でもいいのか？」

「そ、それは…」

ネギ君。

私と同じ悲劇を見た君ならわかるはずだ。

私の絶望を。

私の怒りを。

「それはできませんっ!!」

なるほど。

やはり君は拒否するか。

「何故だ？理由を聞かせてもらいたい」

「カリスト先生の言う通り、僕は村の皆さんを救えるかもしれない……」

「ならば何故だ？」

「でもっ！それは僕の”過去”ではありません！」

「……………ほお」

「ガニメデさんは言っていました。過去や過ちは変えられない、有ったことを無かったことにはできない、と！！」

「……………」

「他の世界の悲劇は、その世界の僕が救うべきなんです!! この世界の僕がどうしていいものではないはずです!!」

「そうか…」

「それに未来だって決まってはいません! 超さんの見た未来が訪れると決まったわけではありません!!」

「そうだな…」

未来は決まっていない…か。

その希望も…

いつかは碎かれるのさ…ネギ君。

「だから僕はそうならない解決策を見つけます!! 僕の生徒にヒド

イことをするあなた方に協力なんてしません!!」

「そうかい。わかったよ」

「これが答えです。カリスト先生」

「交渉決裂か。残念だよ…ネギ君。だが、仕方がない…」

これで…

明確に対立したわけか。

しかし

こうなることはわかっていた。

我々、量子存在と魔法使い。

考え方も理念も異なる。

そもそも理解し合えるわけがなかった。

わかっていたさ。

久々に人々の温かさに触れ、一時的な迷いが生じたに過ぎない。

だが

それも終わりだ。

私は本来の役目に戻る。

そう

私には意味など無いのだからな。

「ジュピターシリーズNO. 4、”カリスト”。量子存在の力、見せてあげよう」

「っ!!」

その宣言と共にカリストはネギに迫る――

その表情からは――

感情が消えていた――

第68話「生きる資格」

ネギとカリストの戦いは開始から数分が過ぎたばかり――

しかし、ステージの上では一方的な光景が展開されている――

「遅い」

カリストの回し蹴りがネギの鳩尾を容赦なく捉える――

それはZPEを上乗せした強烈な一撃――

「くうっ！」

体をくの字に曲げて吹き飛ぶネギ――

気で強化しているにも関わらず、激痛が走る――

「まだだよ」

しかし、カリストの攻撃は続く――

ネギが飛んだ先に現れるカリスト――

その両手には白い拳銃――

「っ！！」

状況を察したネギだったが既に遅い――

拳銃はそれぞれネギの鳩尾と頭に添えられている――

そして銃口から解放されるエネルギー――

「ぐはっ！！」

ZPEを放つ拳銃、ZPEGの零距离射撃――

衝撃の余りネギの体が空中に打ち上がる――

それは完全に無防備の状態――

「そんなものかい？」

カリストはさらに空中に転移し、ネギの腹部に踵落としを放つ――

「かはっ!!！」

再び体を曲げられ、ステージの床へめり込むネギ――

爆音と木片が飛び散る――

全身を襲う激痛によって気を失いかけ、動くことすらままならない――

「もう終わりか？」

しかし、カリストの攻撃はまだ終わらない――

――カチャ――

両手の二挺拳銃は静かに床へ向けられる――

その銃口の先には倒れたネギ――

そして引き金に指が掛かる――

「……………」

放たれたレーザー状の閃光が標的を襲う――

橙色の光が辺りを照らす――

無言で引き金を引き続けるカリスト――

ネギに命中する無数の閃光――

床は原型を止めないほどにボロボロとなる――

撃ち続けるカリストの顔に浮かぶのは無表情――

その姿は見る者に恐怖を与える――

” ちよつと…… ”

凄惨な光景に朝倉や観客の顔が歪む――

「ひどい……」

「今日のカリちゃん……なんか怖いよ……」

観戦に来ていた3―Aの生徒も例外ではない――

自分たちがよく知っている穏やかなカリストとは似ても似つかない
姿――

その姿に思わず嫌悪感を覚える――

「よくわかっただろ？今の君では私には勝てない」

カリストは射撃を止め、銃口をネギに向けたまま告げる――

その体には傷一つ無い――

「……………うっ……………」

対照的に仰向けに倒れたままのネギ――

全身には無数の傷――

息も荒く、視線は宙をさま迷っている――

「終わりだな。朝倉、カウントしろ」

そんなネギを横目に、カリストは朝倉へと視線を送る――

” っ！！あっ！…はい……。10、9、8、7…”

朝倉はカリストの視線に怯えながらも言われた通りにカウントを開始する――

” 6、5、4…”

カウントは残り僅かとなり、観客はネギの敗北を幻視した――

「くっ…」

その時、ネギがゆっくりと立ち上がる――

” っ！？”

「ネギ先生! !」

観客の31Aの生徒から思わず声が掛けられる――

「ほお。まだ立つのか」

しかしその体はフラフラ――

目の焦点もろくに合っていない――

正に立ったただけの状態――

「……………まだ……………」

「諦めた方がいい。君では私に勝てないし、出力を最小にしている
とは言え、この銃に何度も撃たれると危険だぞ?」

冷たく言い放ったカリストは無表情で銃口をネギへ向ける――

本来なら衝撃で気を失うはずだが…

まだ倒れない…

魔法障壁というやつか。

意識を保たれる方が危険だ。

何発も撃たなくてはならなくなる…

さっきので気絶したと思ったんだが…

「ア…スナさん…たちを…」

この状況で生徒の心配か。

見上げた精神だ。

「それはできないが、危害を加えないということは約束する」

まだ幼いこんな少年が…。

「……僕…は…先生…なんで…す」

生徒を守るために…。

「そうだな。私などと違って、君は立派な教師だと思うよ」

ああ。

立派すぎて危ういほどだ。

「だ…から…ま…だ…」

「負けられない、と？」

ネギは首を縦に振り肯定の意を示す――

その目にはまだ諦めという選択肢が浮かんでいない――

それを見たカリストはため息をつき表情を幾分和らげる――

「君らしいなネギ君。本当に……」

「僕は……カリスト……先生を……立派な……先生と……思っていました」

「ククク。この私がか？それは間違いだったな」

カリストは自嘲的な笑みを浮かべて否定する――

「……いえ。僕は……今でも……そう思っ……ています」

意外な発言にカリストの顔が思わず歪む――

……。

何を…今さら…

「冗談にもならない。生徒を閉じ込め、君を痛めつけたこの私が立派な教師などと…」

「それは…先生が…みんなを助けたい…と思っているからだ…と思います」

「!！」

カリストの目が見開かれる――

「カリスト先生の…みんなを助けたい…という…気持ちは…本当だと思っています」

「……………」

助きたい…か。

「でも…先生のやり方は…間違っている…と思います」

間違っている…

それは知っているさ。

私たちは…

最初から間違っていたのだ。

最初から…

「だから…僕が…先生を…止めてみせます!!」

そう宣言したネギの瞳は何処までも揺るがないものだった――

「『魔法の射手・戒めの風矢』っ!!」

そして叫ぶのは拘束魔法――

なにっ!?

いきなり魔法を――!

詠唱を破棄したのか!?

カリストに迫る魔法の矢――

低威力ながらも、カリストの身体を束縛する――

「くっ!!」

しまった！

身動きがっ！！

捕らわれたカリストは一時的に拘束される――

それはネギにとって最大のチャンス――

今まで固まっていたネギが直ぐに駆け出す――

「『魔法の射手・収束・光の50矢』！！」

その腕には魔法の射手が込められる――

それを目視したカリストは冷や汗を流す――

魔法を腕に収束させた……

私に魔法の乗った拳を喰らわせる気かっ！！

「はあああああああああああああ！！！！」

カリストに向かって駆けるネギ――

その拳には大量の魔力が集まり、光を放っている――

くっ！！

まだ動けたのか！！

身動きできないっ！！

魔力のせいで演算素子が狂っているっ！！

これでは座標転移もできないっ！！

「たあああああああああああああ！！！！」

――ボスンッ！！――

視界に映るのはネギの拳が自らの腹部にめり込む光景――

「がはっ…」

全身を襲う魔力の熱――

カリストの体が吹き飛ぶ――

「く……………」

舞台を転がり、ようやく静止する――

” え…ち、ちよつと…”

カリストはそのまま舞台に倒れ続ける――

まるで死人のように動かない様子を見た観客からざわめきが起きる――

「カリちゃん!!」

「大丈夫かよ…先生…」

「お兄ちゃん。ミリーをおいて行って—

「何言ってるんだよ!! そんなことできるわけあるか!!」

「だってミリーはもう動けないから、お兄ちゃんにメイワクかけちゃう—

「大丈夫!! お兄ちゃんが今助けてやるから!!」

—ううん。もういいの—

「大丈夫！大丈夫！お兄ちゃんは力持ちだから！こんな瓦礫すぐどけてやるからなっ！！」

—ありがとうお兄ちゃん。でも、もういいの—

「よくない！！絶対助けてやるから！！」

—だって…ミリーの足、もうなくなっちゃったよ…—

「そんなの平気だ！！お兄ちゃんがずっと背負ってやるから大丈夫だ！！」

—そうしたらミリーのせいでお兄ちゃんまで死んじゃうよ？はやく

にげないとお兄ちゃんも……

「だからって置いて行けるわけじゃないか!!」

——お兄ちゃん——

「うるさい!! 絶対助ける!! 絶対助けるんだっ!!」

——きいて——

「うるさい!! 絶対置いてなんか行かないからな!! 絶対置いて
なんかっ!!」

——おねがい。きいて——

「何だよ……?」

―ミリーはね、お兄ちゃんが死んじゃう方がやだよ。だから…ミリーをおいてって。おねがい―

「…そんなこと…できるわけじゃないか…」

―ミリーのおねがいきいてくれないなら、お兄ちゃんゆるしてあげないからね―

「……そんなこと……」

―もうお兄ちゃんにわがままいわないから。さいごのおねがいにするから。だから…おねがい。ミリーのさいごのおねがい、きいて―

「…そんな言い方…ズルいよ…。断れないじゃないか…」

—ミリーはだいじょうぶだよ—

「.....」

—だから、おねがい—

「.....」

—おねがい.....—

「.....」

—おねがい.....—

「.....」

—おね…が…い…—

「……………」

—おね…が…い…—

「……………わかったよ……………」

—あり…が…とう…ユリ…ウ…ス…お…兄…ち…ゃ…ん…—

「……………」

そして—

私は手を離した—

ミリーの小さな手を置き去りにして…

”カ、カウント始めます…。10…”

朝倉は倒れたカリストを心配そうに見た後、カウントをとり始める――
が、それは直ぐに止められる――

「いや。その必要はない」

その声の先には立ち上がったカリストがいた――

白い戦闘服は所々破けているが、体に傷は見当たらない――

” えっ!! ”

「カリちゃん!!」

「先生…」

カリストの無事な姿を見た観客からも安堵の声が聞こえる――

「カリスト…先生…」

先程の攻撃で全力を出したネギは立っているのがやっとのようだった――

最早戦うことは不可能――

しかし、無傷のカリストを見ても動揺は示さなかった――

ネギ自身、先程の攻撃で倒せるとは思っていなかったからかもしれない――

そんなネギをカリストは無表情で見つめる――

「どうするネギ君？ 棄権するかい？ それとも…」

「はい。まだ…戦います」

ネギはさも当然と答える――

その顔には不敵な笑み――

それを見たカリストも初めて笑みを見せる――

「ああ。そうくると思っていたよ」

そこで会話は終わり、互いに構えを見せる――

意地と意地の勝負――

その勝敗は始まる前から明らかだった――

しかし、両者は一步も引かない――

そこには、互いに譲れぬ思いがある――

そして駆け出す2人――

その瞬間、ネギは宙を舞っていた――

しかし、その顔は何処か満足そうだった――

私は立ち止まることなどできない。

私には許されないのだ。

あの時、ミリーを見捨てた私には生きる資格もなければ死ぬ資格もない。

どう言い訳しようが、私は彼女を見捨てた。

倒壊した瓦礫に埋もれた幼い彼女を見捨てて……

そして地下シェルターに逃げた私は、カタストロフィーを辛うじて

生き延びた。

その後、私は地上に戻って彼女を探した。

しかし

私が見たのは赤い大地、文明という文明が全て灰となった世界。

結局、彼女の姿を見つけることはできなかった。

おそらく一瞬で蒸発してしまったのだろう。

あの光景は一生忘れることはないだろう。

そうして生き延びた私は世界選択機関に志願した。

自ら量子存在となった。

その時、ユリウスという名を捨てた。

いや、ユリウスという少年は死んだのだ。

変わりにカリストという存在が生まれた。

そして私は、他世界のカタストロフィーを防ぐことで彼女を救おうとした。

正直な話をする、彼女以外の人間がどうなろうと構わなかった。

私がカタストロフィーを阻止しようとした理由は彼女を助けるため

だ。

それ以外の理由はない。

勿論それが自己満足であることなどわかっていた。

他世界線の彼女を助けた所で、私の過去は変わらない。

他世界線の彼女は私の知っている彼女ではない…

そう割り切れば良かったのだ。

しかし、私にはできなかった。

そして私たち量子存在は世界線を越え、他世界線のカタストロフィ
ーを阻止しようと努力し続けた。

全て無駄だったがな…

救えた世界など無かった。

救えないと判断した世界は削除した。

マーズシリーズを送り込み、宇宙を強制的に膨張させて破壊した。

そう考えれば、実際に世界を破壊したのは私たちジュピターシリ
ーズではない。

ジュピターシリーズの別名は裁定者。

あくまでその世界を救えるかどうかを見極める存在だ。

そして見極めた上で救えないとわかった世界をマーズシリーズが破壊する。

悲劇を無くすためには世界ごと破壊するしかない。

救うために壊す…

矛盾しているな。

だが、他に方法がない。

私たちは量子存在、世界を越える者。

故に、他の手段を知らない。

だから私は歩み続ける。

いや、歩み続けるしかない。

たとえその先に待っているものが悲惨な結末だとしても。

第二回戦

『第9試合』

勝者「Callisto」

『第10試合』

「クウネル・サンダース」vs「長瀬楓」

『第11試合』

「Ganymede」vs「村上小太郎」

『第12試合』

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル」vs「IO」

第69話「夢見る心」(前書き)

お久しぶりです。

そして更新遅れてすみません。

言い訳なのですが、作者はSteins;Gateにハマっております(汗)

テレビで見てハマったので、ゲーム本編まで買ってしまった。いやゝ感動しました。

オカリンに感情移入して一体何回泣いたことか(笑)

そしてルカ子可愛い。あのシーンは反則ですね。私は耐えられませんでした(笑)リアルに号泣でした(笑)

それと世界線概念がこの小説と全く違いますね。ちょっとSteins;Gateの世界線概念に憧れましたw

駄文失礼しました(汗)

では、本編をどうぞ。

第69話「夢見る心」

―機関記録No. 521―

AD..2012年

LHCによりループ量子重力理論が証明される。それに伴い、空間の最小単位を発見。

AD..2015年

ループ量子重力理論と超ひも理論が統合される。超ひもによる空間の定義が確定。あらゆる空間を振動数で定式化することに成功。

AD..2016年

空間の定式化を世界に拡張することに成功。他世界の存在が明らかとなる。

AD..2021年

世界線の概念が誕生。他世界線への干渉実験開始。量子コンピューターのプロトタイプが完成。

AD..2035年

通常物質が他世界線へ干渉することは不可能と判明。

AD..2046年

各国政府が他世界線共同研究機関を創設。

AD..2095年

微小物質の量子化に成功。テレポーテーション技術の開発。

A D…2100年
量子化した物質を他世界線へ送り込むことに成功。これが初めてとなる他世界線への干渉。

A D…2136年
量子化の過程において利用可能なZ P Eを発見。Z P Fの存在が証明される。

A D…2140年
Z P F接続に成功しZ P F技術が誕生。ただしZ P F技術は非公開とされた。接続は失敗したものと隠蔽。

A D…2146年
Z P Eを利用し、他世界線へ物理的干渉を可能にする実験の概要が確定。公には初のZ P E接続実験と隠蔽。

A D…2166年
他世界線干渉実験を決行。ゲートの発生を確認。同時に莫大なZ P Eが発生しゲートが暴走。高濃度のZ P Eが惑星広域に拡散し全生命体の9割が死滅。カタストロフィーの発生。

A D…2170年
第1ドームの建設開始。

A D…2175年
第3までのドームが完成。

A D…2176年
E X O D U S計画に基づき世界選択機関が創設。量子存在ジュピタ

ーシリーズの開発開始。

A
D
..
2
1
8
0
年

第7ドームが完成。

AD .. 2181 年

世界選択機関が第8ドームを建設。サターンシリーズの開発開始。

A
D
..
2
1
8
2
年

第7までの各ドームが七都市連合軍を創設。都市軍が第8ドームに
 侵攻。第1次都市戦争の開始。世界選択機関はZPF技術により都
 市軍を撃退。

AD .. 2184 年

第2次都市戦争。世界選択機関の勝利。

A
D
..
2
1
8
5
年

第3次都市戦争。コード0014により都市軍と機関の双方に甚大な被害。

AD
..
2
1
8
6
年

EXODUS計画が最終段階に突入。

超鈴音の地下拠点――

その一角に茶々丸とカリストの姿があった――

「ジュピター、学園の回線に接続しろ」

私は今、カリスト先生と共に学園の回線へクラッキングを開始しています。

”了解、回線を特定…”

それにしても

カリスト先生の使用しているこの量子端末…

信じ難い計算速度です。

茶々丸は処理を止めてカリストへ視線を向ける――

” 特定完了。光ファイバー通信回路、局所的ZPE確認。接続完了”

学園の回線にも簡単に侵入してしまいました。

「局所的ZPE…？ああ、恐らく魔法障壁か何かだな。よし、セキユリティを突破しろ」

量子コンピューター。

本来ならまだこの世界には存在しないはずの機械。

私の人工知能にも使われています。

量子の重ね合わせ状態を利用した並列理論回路。

超並列演算速度を実現した未来のコンピューター。

量子コンピューターと比べてしまえば、既存のコンピューターはオモチャのようなもの…とカリスト先生は話していました。

そのため、学園の演算装置では歯が立たないのは明らかです。

”了解。セキュリティシステムを分析……。分析完了。ファイアーウォール、電子ZPE障壁確認。侵入開始”

しかし、カリスト先生の量子コンピューターは私に搭載されているものよりも高性能です。

小型量子端末…：ジュピター。

ジュピターシリーズという量子存在の意識を集積していると聞きました。

人の意識と量子コンピューターの融合―

それがジュピターだと教えていただきました。

「なるほど。やはり電子精霊という防衛プログラムが存在していたみたいだ。少々厄介だな」

先生の端末の人工音声を聞いていると私の思考プロセスにエラーが発生します…

何故でしょうか？

無機質な量子端末…

ただ演算をするだけの機械……

でも理論回路は私のAIと同じです。

私も……

この端末と同じなのでしょ……うか？

私の思考もただの演算なのでしょ……うか？

茶々丸は無機質で、それでいて何処か儚げにジュピターを見つめる――

彼女にしてみればジュピターは謂わば同族とも言える存在――

それがひたすらに演算を処理している様子は、一言では表せない感情をもたらすであろうことは容易に推測できる――

そんな茶々丸の姿を見たカリストは思わず手を止めて声をかける――

否、かけずにはいられなかった――

その表情の理由を知る必要がある、カリストはそう思った――

「……どうかしたのかい？」

故に、気づけば既に声を出していた――

そんな意外な自身の積極性に、カリストは胸中で独り笑った――

「え……？」

突然話しかけられた茶々丸は多少驚いたようにカリストへ視線を向ける――

「いや、私の端末を意味深に見ていたようだからな。何か気になることでもあるのかと思ってね」

「いえ…その…」

どう言えればいいのでしょうか？

私もうまく説明できません。

茶々丸は伝えるべき言葉に迷い、沈黙する――

そんな様子を見たカリストが助け船を出すように問いかける――

「もしかして、自分もただの機械なんじゃないか？と不安になったのかい？」

「っ！？そ、それは……」

その問いは余りにも的確に茶々丸の思いを言い当てていた――

「その反応は……凶星のようだな」

カリストは分かりやすく反応した茶々丸を穏やかな表情で見つめる――

茶々丸も否定はせず、無機質な瞳の奥の感情を揺らす――

「…はい」

その瞳を見たカリストは静かに思うのだった―

あいつとそっくりだ、と―

「なら言っておく」

そう前置きを挟み、沈黙するカリスト―

次に出たのは確信を伴った言葉―

「君は君だよ」

その言葉は逐語的解釈では全く意味を成さない破綻した発言―

しかし―

私は私…

茶々丸には確かな意味合いを持って届く言葉―

カリストは柔らかな口調で続ける―

「感情や精神、心というものは証明などできないしする必要もない。
何故ならそれ自体が証明だからだ」

それ自体が証明…？

「プログラミングだろうが神経細胞だろうがそんな途中のプロセス
は大した問題ではない。大切なのは心があるかどうかだ。思考があ
って心があるかどうか問いかける…それは前提から間違っている。
心は思考で定義されるものではない」

「ですが、私はガイノイドで…」

茶々丸は否定する様に呟く――

が、言い切る前にカリストが口を挟む――

それは聞く前から相手の反応をわかっていたかのようなだった――

「それがどうしたのだ？」

「え……？」

「君は身体が機械か否か、思考がプログラムか否かという点が心があるか無いかを決定する要因だと勘違いしている」

「違うのですか？」

「ああ。全くもって違う。人は身体が機械でなく、思考もプログラムではない。しかし、それが心があるという証明にはならない」

「何故、ですか？」

「では聞くが、人が他人に”自分には心がある”と証明する方法はあるか？」

「それは……」

「無い。はっきり言って無いのだ。だから”お前には心があるのか？”と問われたところで人はそれを他人に証明することはできない。だから心があるかどうか証明できないのは君に限った話ではない。身体が機械でなく思考がプログラムでなかったとしても心は証明できない。心は自分で定義し認識するものだ。自分があると思えばあるのだ」

「自分で決めるのですか？」

「決めるんじゃない。気づくんだ。嬉しい、悲しい、楽しい、苦しい、寂しい、切ない、愛しい……その思いが答えさ」

そう言ってカリストは茶々丸の頭にポンと手を乗せる――

「えっ！？カ、カリスト先生……？」

茶々丸は驚いたように狼狽える――

そんな様子を見たカリストは笑顔を見せる――

「ほら、君には心があるよ」

そう言った後、カリストの手は茶々丸の髪をクシャクシャにした――

茶々丸は何処かぎこちなかったが、嫌がる素振りは見せずにその手の感触を確かめるように甘受していた――

そして茶々丸は自身のメモリーを開き、お気に入りフォルダにカリストの笑顔の画像をしっかりと保存した――”君は君だよ”という言葉と共に――

「ネ…っ！バ…ギ…」

底の见えない程に深く暗い空間――

そこから引き離すように遠くから声が聞こえる――

え…？

それはネギの意識を現実へと引き戻す――

「バカ…ギっ！」

誰かが…

僕を呼んでいる…？

「バカネギっ！！」

ネギは閉じていた目を開く――

見えたのは白い天井――

そして心配そうに覗き込む多数の顔――

あれ？

アスナさん？

「っ！！ネギ！？気づいたの！？」

「え…あ、はい…」

ここは何処でしょうか？

「良かった…」

「え、あの…アスナさん？」

「もう！心配させんじゃないわよっ！！」

「えっ！？いや、あの…す、すみません…」

なんでアスナさんがこんな所に？

なんで僕もこんな場所に…

そういえば

っ！！

そうです！！

思い出しましたっ!!

「無事ですかアスナさん!？」

「え?…ええ。私は大丈夫よ。それよりあんたの方が」

僕はカリスト先生に負けて…

そこから記憶がありません。

おそらく閉じ込められてしまったのでしょう…

「僕は大丈夫です」

そう言ってネギは辺りを見回す―

そこには行方不明になっていた者が勢揃いしていた―

「タカミチ！」

その中にはタカミチも含まれていた――

「やあネギ君。無事で良かった」

「タカミチこそ無事だったんだね！良かった……」

「あ……！た、た、高幡先生……？」

アスナさんが急に顔を赤くしてますが……

どうしたんでしょうか？

「……」
「すまない。僕の力不足で君たちまで危険な目に逢わせてしまった……」

タカミチは自身の無力さに顔を歪ませる――

「タカミチのせいじゃないよ！」

「そ、そうですよ！わ、私は全然大丈夫ですから！」

そんなタカミチを励ますようにネギとアスナが口を開く――

「すまないね……」

2人に気を使わせてしまったと感じたタカミチは申し訳なさそうに苦笑いすることしかできなかった――

「先生、それよりも早くここから脱出しなくては！」

そんな3人の会話に横から切迫した声がかかる――

この声は…刹那さん。

刹那さんも無事そうで良かった。

でも…

ちょっと様子がおかしいような…

「そうしたいのは山々なんだけどね…。どうやらこの部屋から出ることは無理みたいなんだ」

そう言ってタカミチは部屋を見回す――

辺りは恐ろしい位に真っ白な部屋――

窓もなければ扉も見当たらない――

どうやって中に入らされたのかさえわからない密室――

ただ白だけの空間――

白い壁――

白い床――

白い天井――

その異様な世界はふと気を抜くと前後左右がわからなくなってしま
うかのような錯覚を与えてくる――

一体どれだけの時間が流れたのかさえわからない――

終わりが来るのかさえわからない――

あるいは永遠に――

そんな恐怖がじわじわと歩み寄っていた――

ここに長時間居たならば、確実に精神が追い詰められるであろうこ
とは目に見えていた――

何も無いというのはそれだけで狂気を引き起こす原因と成り得る――

現に、この部屋にいる者の様子が徐々に不自然になってきていた――

「そんなはずはありません！！早くお嬢様のもとへ行かなければ！」

刹那も例外ではない――

先ほどから慌てたように辺りを歩き回っていた――

「落ち着くんだ。刹那君」

タカミチはあくまで冷静に答える――

「くっ！そんな悠長なことを言っていてはっ！」

しかし刹那は態度を変えず、タカミチ達から慌ただしく離れて行く――

「見たかいネギ君？」

刹那が離れたのを横目で確認したタカミチがネギの耳に顔を近づける――

そしてアスナには聞こえない位の小声で囁く――

その表情は神妙そのもの――

「え？何を？」

空気を察したネギも声を潜めて問い返す――

「刹那君だよ。様子がおかしいと思わないかい？」

確におかしいです。

何時もの刹那さんはもっと冷静なはずです。

「木乃香さんのことで焦ってるかな？」

「それだけじゃないよネギ君。この部屋は何かがおかしいんだ」

「え？」

この部屋…？

確かに一面真っ白ですけど…

「恐ろしい位に何もないんだ。それに”彼ら”が僕たちを監禁しているわけだけど、やり方が甘すぎる」

「どういうこと？」

「普通なら手足を拘束したりするはずだよ。でも、僕たちは一切拘束されていないんだ。それに本来なら一人一人別々の場所に閉じ込めるはずだ」

そう言われてみれば…

「なんでかな？時間がなかった、とか？」

「彼ら」は周到な準備をしていたから、それはないだろうね。もしかしたら僕たちを精神的に追い詰める気なのかもしれない…」

「えっ!？」

ネギは思わず声量を上げて驚愕する――

「……………」

そんなネギを制止するようにタカミチは自身の口の前で人差し指を立てる――

「あっ!……ご、ごめんなさい…」

それを見たネギは慌てて自分の口を塞ぐ――

幸い、2人の会話に気づいた者はいないようだった――

「精神的に追い詰めるって？」

ネギは改めて声を潜めて問いかける――

「何もない部屋に延々と閉じ込められれば誰だっておかしくなってしまう。言わば精神的な枷だよ。ある意味では物理的な枷よりも強い……。脱出する気さえ起きなくさせてしまっただからね」

タカミチは深刻そうに顔を歪める――

「そんな！じゃあ早く逃げないと！」

それを見たネギは青ざめて訴える――

「それができないんだよ…」

しかし、タカミチは表情を変えない――

「この壁を壊して逃げればっ！タカミチなら出来るよ！」

「…口で説明するより、実際に見た方が早そうだね」

そう言ってタカミチは突如その場から立ち上がる――

そしておもむろに一番近くの壁に向かって歩き出す――

「タカミチ？」

その行動を不審に思ったネギが声をかける――

「まあ見ていてくれネギ君」

しかしタカミチはそのまま壁に向かって歩き続ける――

当然、そのまま進み続ければ正面の壁に激突することになる――

しかし、タカミチは一切躊躇した様子もなく進み続ける――

気づけばタカミチの目の前には壁が迫っていた――

「危ないよタカミチ!!」

ネギは制止しようと立ち上がる――

が、タカミチは躊躇なく残りの一步を踏み出す――

そしてタカミチは壁に衝突――

するはずだった――

「え!?!」

しかし、ネギの見た光景は違っていた――

え？

どういうこと？

タカミチが…壁の中に消えた？

ネギが見たのは、タカミチが壁をすり抜けて行く姿だった――

「こっちだよネギ君」

混乱するネギの後方から、突然消えたタカミチの声が響く――

それを聞いたネギは直ぐに振り返る――

そこには――

「っ!？」

消えたタカミチがさも当然と立っていた――

ネギの困惑した表情を見たタカミチは歩み寄りながら口を開く――

「驚かしてすまないね」

「え？タカミチ？なんで？さっきあっちの壁の中に…」

「僕は真っ直ぐ歩いていただけだよ」

「え？」

「この部屋はね、ループしているみたいなんだ」

「ループ？」

「壁の向こうに行こうとするとまた同じ場所に戻ってきてしまうんだ」

「え…」

「だから僕たちはここから絶対に出られないんだ」

タカミチは神妙な表情で言葉を紡ぐ――

それを聞いたネギは顔面を青ざめるしかなかった――

設定集（前書き）

全然関係ないんですが、友人から涼宮ハルヒシリーズを借りましてW SF好きなのでこういうのはかなり面白いですね。

それで一つ思ったのが、イオってなんか長門さんに似てますね（笑）それは置いておきまして、今回は画像付きでオリジナルキャラクターの設定集を作りました。

今更ですみません（汗）

とりあえずはメインキャラクターのみにしました（順次更新すると思います）。

あと初見の方のために核心部分は書いていません。

そして画像付きなので、イメージを固定されたくない！という方は見ないことをおすすめします。

では、作者の下手な絵を許して頂ける方どうぞw

設定集

注意!!

作者のへたっぴな絵があります！

小説のイメージを限定されたくない！という方は見ないことをおすすめします。

それでもOKという方はどうぞww

■イオ

容姿…灰色の髪と深青色の瞳が特徴的な少年。

性格…表情はどこか無機質で、基本的に無表情。機械の様な印象を受ける。会話は少なく言葉使いも不自然な点が多いが、無口というわけではない。

口癖..「〜と予想する」

好きなもの..空

>i33141—4205<

■ガニメデ

容姿..漆黒の髪と瞳をもった青年。後ろ髪を一本に結わいている。
体格が良く野性的な印象を受ける。

性格..基本的に戦闘狂であるが、普段はどこかやる気がない。獰猛な一面を持つが仲間思いでもあり根は優しい。

口癖..「めんどくせえ」

好きなもの..熱い闘い

>i33143—4205<

■カリスト

容姿..オレンジの髪と瞳をもつ長身の男性。

性格..生真面目で面倒見がいいが、それが災いすることが多々ある。
責任感が強く色々と心労を溜めてしまう苦労人。

口癖..「全く・・・」

好きなもの..蜜柑

>i33551—4205<

■エゼ

容姿..黒い髪と赤い瞳の少年。年中眉間にしわがよっている。

性格..常に機嫌が悪く、誰に対しても残忍で横暴な態度をとる。

口癖..「チツ・・・」

好きなもの..なし

>i33208—4205<

設定集（後書き）

実は、小説中では彼らの服は”白いコートに青い幾何学模様が描いてある”という設定だったんですが画像では書くのをすっかり忘れていました・・・

正直この画像を公開するか迷ったのですが折角だし！と投稿してしまいました。

イメージを壊してしまっていたら申し訳ないです＞m（　　）m＜
ですが少しでも楽しんで頂けたなら幸いです。

第70話「衝突の刻」

$P(p, t) = \psi(p, t) - \wedge 2$

$p \parallel NUI724628039562x + BUY25367123$
82y + CYT2753821273z

$t \parallel RCT23465108790235493884 \pm 3725$
1041

$worl d \quad l i n e (p, t) \parallel NVS21827364925$
308 ξ

—『82.54.09』—

ネギとカリストの闘い——とりわけカリスト——によって見事なまでに

破壊されたステージはこれで何度目かわからない修復を受けている――

修復作業中の者には幸か不幸か「クウネル・サンダース」vs「長瀬楓」の試合は楓の負傷により、クウネル・サンダースの不戦勝となっていた――

そんな舞台上から少し離れた選手控えロビー――

そこには数の減った対戦者たちの姿がある――

彼らは各々、自身の思考に埋没している――

が、小太郎だけは例外のようでステージが修復されるのを待ちきれないように柵から身を乗り出して眺めている――

そんな小太郎を余所に、腕を組んで壁に凭れているのは真名だった――

目は閉じられ、その表情から感情は読み取れない――

そこへ顔を曇らせた楓が近づいていく――

そして声をかけようと口を開く――

「何か用かい？」

が、その前に気配を察した真名の方から声かけられる――

目を閉じていようが、彼女の全神経は近づく者の気配を敏感に察知していた――

その油断の無さに楓は改めて詠嘆する――

しかし、楓はそれを表情には出さずに答える――

「少しばかり”話”を聞きたいでござる」

腕と脇辺りに包帯が見え隠れする楓だったが、その表情は負傷したということを全く感じさせない程真剣だった――

「ほお。 ”話”ね……」

言外の意味を汲み取った真名は目を開き、楓に視線を返す――

「構わないが、私は少し喉が渴いたよ。何か買ってきていいかな？」

「奇遇でござるな。拙者も喉を潤したいと思っていた所でござる。お供させていただく」

それを聞いた真名は僅かに口角をつり上げる――

それを合図に、2人は無言で控え室の外へと向かって行った――

そんな中、ガニメデは鋭い視線をフードの男、クウネル・サンダーズに向けていた――

その無言の視線は、それだけで相手を刺殺できるのではないかと錯覚する程だった――

「……………」

が、フードの男はその殺気を浴びながらも涼しい顔を崩さずに飄々としている――

「私に何か？」

更には口元に微笑をたたえながらガニメデの視線を受け返した――

フードで隠されているために表情は見えないが、ガニメデには笑っているようにしか見えなかった――

「別に。何でもねえよ……」

ガニメデは唸るような低い声で答える――

その表情は殺気に満ちており、常人ならばそれだけで恐怖心を抱くだろう――

「そうですか」

しかし、フードの男は態度を変えず怯んだ様子もない――

変わらず口元に笑みを浮かべているだけだった――

「ただよ、一つ言うなら……」

そんな相手に更なる苛立ちを覚えたガニメデはあえて言葉を区切る――
そして、視線をより鋭いものに変える――

「俺はな、”自分自身”は安全な場所にコソコソと隠れて、高見の見物をするような奴が大嫌いなんだよ」

その発言を聞いた瞬間、フードの男は初めて表情を崩した――

「おや……。なんのことでしょうか？」

が、それも一瞬だった――

直ぐに男の顔面は何事もなかったように微笑で彩られる――

「……………」

そんな男を視線で射るようにガニメデは睨みをきかせる――

対してフードの男は笑みという仮面で表情を埋める――

そうして視線による無言のやり取りが行われる――

ガニメデが一方的に睨みつけ、男はそれを清々しく受け流す――

まるでその空間だけが氷結したかのように無言の時間が続く――

その応酬に終焉を告げたのはスピーカーから響くアナウンスだった――

” お待たせしましたっ！ ただいまステージの準備が整いました！”

それを聞いた男は一度ステージにフードで隠れた顔を向け、ガニメデに向き直る――

” それでは選手の方、入場お願いします！”

ガニメデはまるでアナウンスが聞こえていないかのように動かない――

漆黒の瞳は男に鋭い視線を送り続ける――

「貴方は次の試合では？」

そんなガニメデに男が声をかける――

「…………チッ」

それを受けてかどうかは不明だが、ガニメデはようやく動く――

舌打ちをしてから吐き捨てるように男から視線を離し背中を向ける――

そこですうやく時間が流れ始める――

「……………」

そしてガニメデは無言でステージへと歩みを進める――

フーダの男は口元を微笑に歪ませながらその背中を見つめる――

「やっとかいな――！待ちくたびれたでっ――！」

それとは対照的に、小太郎は喜びを全身で表しながらステージへ駆け行く――

そうして舞台には2人の役者が揃う――

「これは…?」

学園のサーバー管理室、オペレーションを担当しているのは夏目萌
―通称ナツメグ―

今日も定期メンテナンスのためにスクリーンに目を落とし、キーボードを高速で叩き続けている―

その彼女が作業を中断し突如困惑の声をあげる―

「どうしたんだい?」

不審に思って声をかけたのは明石教授―

彼も情報管理のために作業をしていた―

「うそ…バグじゃない?」

が、ナツメグは明石教授の声にも気づかずに固まっている――

明石教授がそんな彼女に再び声をかけようと口を開きかけた時――

管理室に甲高い警報音が響く――

「っ!？」

更に次の瞬間、全てのPCスクリーンに”ALERT”の赤い文字が表示される――

その光景に居合わせた全員が目を見開く――

「何事だい!？」

明石教授は慌ててナツメグへ問いかける――

「ク、クラッキングです!！」

そんな明石教授に返ってきたナツメグの声は緊迫していた――

「何っ!？」

クラッキングだって!？

一体誰が？

やはり超鈴音かっ!？

「何者かに外部からのクラッキングを受けていますっ!! 範囲は…」

発言の途中でナツメグは思い出したように再びキーボードを叩き始める――

そして、導かれた結論に顔面を蒼白にする――

「ま、麻帆良全域です…」

それを聞いた明石の表情は焦りに染まる――

麻帆良全域に同時クラッキングだって!?

そんな離れ業が出来るのだろうか…?

いや…

あの超鈴音ならばあるいは…

だとすると危うい!!

この学園のデータベースには…

「くっ! データにアクセスされては不味い! 絶対に侵入させられないっ! 直ぐに電子精霊を防御プログラムに回すんだ!」

明石教授はナツメグを含めたその場にいるオペレーター全員に指示を出す――

が――

「ダメですっ！電子精霊のプログラムが既に書き換えられています！応答がありませんっ！！」

返されたのは絶望的な報告だった――

「そんなバカなっ！？被害状況は！？」

電子精霊を書き換えた……？

あり得ない……

そんなことが……

「ファイアウォール、電子魔法障壁を含めた全ての防御プログラムが突破されています！！」

「何だって…？」

既にもう突破されている…？

早い…

早すぎるっ！

クラッキングを検出してから1分も経っていない！

なんという演算速度だ…

一体どんな演算装置を使っているんだ？

そもそも電子精霊を書き換えるなんて不可能なはずだ。

相手は一体何者だ？

本当に超鈴音なのか？

「やむを得ない！全回線の電源を強制停止！！」

こうなったら手段を選んでいる場合ではない！

なんとしてもデータを守らなくてはっ!!

「アクセス拒否!?!ダメですっ!!こちらからの命令を受け付けません!!!」

なっ!?

そこまで侵入されているのか!?

「く…。仕方ない。こうなったら直接電源を切断するしかない」

信じられない。

僅か1分足らずで全てのシステムを掌握してしまうとは…

相手は恐らく超鈴音。

どうやら学園側は彼女を過小評価し過ぎていたみたいだ。

「僕が行く。後は任せたよ」

そう告げて明石教授はその場を後にする――

いとも簡単に学園を乗っ取った相手への恐怖心を抱きながら――

そんな彼らは知らなかった――

自分たちが相手にしているのは、未来に存在するはずの量子コンピュータだということを――

沸き立つ観客席に囲まれた舞台上は、既に試合開始が宣言されているにも関わらずまるでそこだけが孤立したように静まり返っている――

「ようやく戦えるなガニメデの兄ちゃん！」

舞台上に対峙した一方が嬉しそうに声を放つ――

「……………」

しかし、相手はそれに応えない――

無表情のまま沈黙を守っている――

「あん時みたいにはいかんでっ!!」

「……………」

今にも駆け出しそうな様子の小太郎と対照的に、ガニメデは無表情

を貫く――

その目は何処か遠くを見ているようだった――

ったく……

元氣なガキだな。

さすがの小太郎でもそんな挙措を不思議に感じ始める――

そしてその真意を問いかけようとした瞬間――

「……なあ」

突如ガニメデが沈黙を破り声を発する――

その声は普段よりも落ち着いている――

「な、なんや!？」

日頃のガニメデとは異なった雰囲気を感じた小太郎は僅かに警戒を強めて応える――

やれやれ…

こいつもあの部屋ん中にぶち込まなきゃならねえのかねえ…

「お前はよ、もしも仲間――そうだな…例えばネギとかが誰かに捕まっちゃったとしたら、どうする？」

さあ、答えな坊主。

俺はまだお前の本質を知ってるわけじゃねえ。

もし仮に仲間を見捨てるようなら、俺がどうこうする必要もねえ。

俺の仕事も減って万々歳だな。

だが、俺はそんなもんは認めねえ…

ガニメデの視線は小太郎の瞳へ一切のぶれ無く向けられる――

「なんや兄ちゃん？ そんな簡単やんか」

それに対し小太郎は不敵な笑みを返す――

「助けるに決まっとる！ その捕まえた野郎をぶっ潰すだけや！！」

小太郎は握り拳を見せつけながら叫ぶ――

そんな姿を黙って見つめていたガニメデだったが、直ぐに表情を変え――

どうやら間違ってたのは俺の目の方みてえだぜ。

その口角がゆっくりとつり上がる――

そして――

「フハハハハッ！！」

唐突に笑い声を響かせる――

その表情は一切の邪念なく笑っている子供のようだった――

「な、なんや？さっきから……」

いぶかしむ小太郎を余所にガニメデは尚も笑い続ける――

普通に考えりゃ、お前は仲間を裏切るようなヤツじゃなかったな。

ったく。

そんなお前のせいで俺の仕事が増えるじゃねえかよ。

これを笑わずにどうしろってんだよ。

そうしてひとしきり笑い終わると、表情を変えて再び小太郎に視線を送る――

「そうだな。そうだな……。お前はそういうヤツだったな」

そう言うガニメデの表情は眩しいものを見ているようだった――

仲間か……

俺は守れなかった。

その事実はまだ覆せねえ。

「悪い悪い。ちと羨ましくてな。お前は俺が失っちゃったもんをまだ持つてるみたいだ……」

そう言うガニメデの視線は再び遠方へと向けられる――

「なんのことや？」

「さあな。まあでもよくわかったぜ。お前は倒さなきゃならねえみてえだ」

クハハハッ！

本当に面倒増やしやがるガキだ！

「……？」

露骨に疑問を浮かべている表情の小太郎を見て、ガニメデは短く笑う――

「つまりお前の好きな戦いってモンをやってやろうって言ってんだよ。さあ始めようじゃねえかつ!!」

そう宣言したガニメデは舞台に立ってから初めて構えを見せる――

そこには何時もの獅子の姿が在る――

それを見た小太郎は顔を綻ばす――

「ハッ！ようやくその気になったんかいなっ！！上等や！！」

それ以上の言葉は互いに必要としなかった――

そこにあるのは衝突する闘志と闘志――

間を空けず、ステージに轟音が轟く――

そして更なる戦いが始まる――

第71話「果たせぬ郷愁」

「それで、話ってのは何だい？」

武道大会の舞台から少し距離を離れた場所――

一般人が立ち入らないであろう夜の森の中に真名と楓の姿があった――

「惚けても無駄でござるよ」

真名の冗談めいた口調に対し、楓は冷たく言い放つ――

そんな態度の楓に真名はわざとらしく肩を竦めて見せる――

「言いたいことがあるならはっきり言ってくれないかな？」

その表情から感情を読み取ることはできない――

「ネギ坊主たちのことでござる」

楓は何時に無く真剣な表情を見せる――

「先生がどうしたって？」

しかし真名の表情は変わらない――

あくまで何処か余裕な笑みを浮かべている――

「どういうわけかガニメデ殿やイオ殿、カリスト先生と手合わせした相手は行方不明になっているでござる」

「ほお。そうなのかい？」

「そうでござるよ。たった一人、真名を除いて」

楓はそこで更に視線を鋭くさせる――

相手の動作の一つ一つを見逃さないかのように――

「それで、結局何が言いたいんだい？」

が、真名様子は不自然な程に何時もと変わらない――

「拙者はカリスト先生や真名がネギ坊主たちの行方を知っていると考えているでござるよ」

楓は更に続ける――

「答えるでござる。ネギ坊主たちをどうしたでござるか？」

問いかけられた真名は軽く鼻を鳴らす――

「やれやれ。その言い草じゃ、私が先生たちを捕らえてるみたいじゃないか」

夜の森に沈黙が流れる――

周囲に光源は無く、遠くの照明と月明かりだけが辺りを照らしている――

「そのつもりで言ったでござるよ。違うでござるか？」

その暗闇の中で2つの人影が向かい合う――

楓は真名をじっと見つめ、真名は何も答えない――

ただ無言で視線を交わす――

麻帆良祭の喧騒か、遠くから騒がしい音が微かに聞こえてくる――

その音がひどく遠くに聞こえる――

空間が凍り付き時間が静止する――

「違うさ」

その沈黙を破ったのは真名だった――

発せられたのはたった一言――

しかしその一言は確かな重みをもって闇夜に響く――

「……………」

楓は何も言わずに次の言葉を待つ――

「まあ私が拘束したわけじゃないが。居場所なら知っているさ」

そして真名の口から出たのは決定的な言葉だった――

「知りたいなら力づくで聞くんだね」

そして――

「っ!」

その手には黒光りする物体が握られていた――

暗闇でも見紛うことはない――

それは生命を刈り取る悪魔の機械――拳銃――

地下に張り巡らされた超の施設――

その一室にカリストが足を踏み入れる――

薄暗い部屋をモニターの明かりだけが淡く照らしている――

「超、予定通りにいったぞ」

声が向けられた先には戦闘服を着た超の姿がある――

「ありがとネ。カリストさん」

超はそう言ってニヒルな笑みを返す――

「流石ですカリストさん。これ程僅かな時間で学園全てのシステムを掌握してしまうなんて…」

それに同調するかのように声を発したのは葉加瀬聡美――

超の隣に立ち、関心したようにカリストを見つめる――

「そうでもないさ。私は何もしていないしな。単純にジュピターの能力だよ」

それに対しカリストは軽く苦笑いを返す――

「意識同期型量子端末”ジュピター”。ますます隅々まで分解して調べてみたくなりましたっ！」

葉加瀬は弾むように言って顔を輝かせる――

その目は好奇心に満ちている――

百数十年後の量子コンピューターが目の前にあるという事実が、彼女の探究心に火を付けるのは容易なようだった――

「ハハハ……。それはちよつと困るな」

そんな葉加瀬を見たカリストは困ったように苦笑いを強め、それと同時に冷や汗も流した――

「……まあそれは置いておくとして」

そう前置きをしたカリストは表情を変える――

先程とは一変した真剣な顔――

「カシオペアのことだ」

「カシオペアがどうかしましたか？」

葉加瀬が問い返す――

「確か、超がネギ君にカシオペアを渡したはずだ」

カリストは表情を変えずに視線を超へ向ける――

それを受けた超は真顔で頷く――

「しかし、先ほどネギ君を拘束する際に持ち物を調べたんだが……」

超が肯定するのを確認したカリストは更に続け、途中で言葉を止める――

そうして間を置いてから再び続ける――

「カシオペアが見つからなかった」

その一言を受けて葉加瀬は困惑した表情となり、超は少しばかり眉を動かす――

「え、それってどういうことですか？まさか…持ってなかったってこと？」

聞こえたのは葉加瀬の疑問の声――

「その通りだ。ネギ君はカシオペアを所持していなかった」

その推測をカリストが肯定する――

「あるいは誰かに預けていたのかもしれない」

その発言に疑問を示すのは超――

「だが、拘束した者の中にカシオペアを持っていた者は居なかつたヨ」

「だとすればまだ捕らえていない誰か、だな」

「ひょっとしたら落としたのかも？」

「否定はできないが、その可能性は低いだろう。ネギ君はカシオペアを実際に使っていたし、その重要性は理解していたはずだ。そう易々と紛失はしないだろう」

「我々を警戒していたのかもしれないネ。自分が捕まえた場合に備えて予め渡しておいた…」

「そうかもしれない。だとすると色々と厄介だ」

そう言ってカリストは難しい顔で唸る――

「……………」

超も同様に思考に浸り出し、重い沈黙が生じる――

「ま、まあ大丈夫ですよ！それより超さん。そろそろ行きましょう」

その沈黙を破るように葉加瀬が口火を切る――

「そうネ。もうじき彼らも動くはずネ」

超は肯定し思考の埋没から離れる――

そしてカリストに顔を向ける――

「カリストさん。葉加瀬と私はこれから学園の電源管理室に行く
るヨ。おそらく学園の教師が手動で電源を落とすに来るはずネ」

それを聞いたカリストは小さく頷く――

そして短く――

「ああ。気をつけて」

とだけ伝える――

「ありがとうネ」

超は笑みを見せ、葉加瀬と共に部屋から去って行く――

カリストは無言でその後ろ姿を見届けた――

「そこやつ！」

小太郎の腕がガニメデの脇腹に迫る――

「クッ……」

体を反らしてそれを回避するガニメデ――

回避自体は成功したが、その表情からはあまり余裕が感じられない――

「どうした兄ちゃん！前より動きが悪いでっ！！！」

対して小太郎は笑みを浮かべる――

話しながらもその両腕は休むことなく相手に向かう――

「チッ……」

その全てを最小限の動きで避けるガニメデ――

一撃も受けてはいないものの、防戦一方であることは一目で明らかだった――

その状況にガニメデの表情が曇る――

クソッ……

このガキ、身体強化でもしてやがるのか？

この程度で遅れは取らねえが、さすがに解放無しは厳しいぜ。

この状態だとかかなり力を制限されてるからな……

ディヴァインは使えねえしZPEも気休め程度。

さらに座標転移と情報障壁の演算処理が低速になるってオマケ付きだ。

とてもじゃないがコイツらとやり合えるレベルじゃねえ。

ったく…

頼れんのは自分の拳だけってか？

まあ純粹な腕力だけの闘いってやつも魅力的ではあるがな。

「これでどうやっ！」

思考中もガニメデに連続して迫る小太郎の拳―

ガニメデは雪崩のように迫る小太郎を難なくあしらうが、反撃する
余裕は無いようだった―

このままだと日が暮れちゃうな。

このガキと殴り合っとけってか？

俺としてはそれも悪くはねえが…

まあ計画もあるしな。

適当に終わらせねえと。

なら…

ディヴァインを使うか？

いや…ダメか。

カリストには使うなって釘刺されたしな…

だが、どうするよ？

このままだとマジで終わらねえぞ？

—パシンッ！—

思考に埋没しながらもガニメデは迫り来る小太郎の拳を払いのける—

「まだやでっ！」

しかし小太郎も諦めない――

休む暇もなく再び拳の連打を相手に浴びせる――

「……っ」

そして同じように避け続けるガニメデ――

状況は明らかに膠着していた――

やれやれだ。

全力出せねえってのはどうにも不完全燃焼だぜ。

てかよ……

カリストは解放を止めろつつつたが、今さら止めたところで俺の寿命はそう変わらねえだろ。

どのみち何時消えてもおかしくない。

明日消えちまうとしても全く不思議じゃねえしな。

それが半日後になろうが1時間後になろうがこの際どーでもいいぜ。

—パンツ！—

再び小太郎の腕を弾くガニメデ—

張りつめた音と共に掌に痺れが広がる—

考えを廻らせながらも防御に隙は生まれていない—

だがな…

まあ未練が無いのかと言われりゃ無いわけじゃねえ…

ったく…

どうしてこうなっちまったんかねえ…

この世界線に来てからか？

—サツ—

今度は寸前で回避するガニメデ―

空を殴った小太郎は苦い表情を見せる―

まあ確かにこの世界線に来てからやたら解放しまくってるからな。

本来は非常時にしか使わねえもんだしな。

そりゃそうだ。

そもそもジュピターシリーズは戦闘用に造られてはいない。

これまでの世界線では頭の固いお偉いさん方を説得するだけだったし、まあ戦うつつても都市軍くらいだった。

それが今はどうだ？

自称火星人に協力して、更には魔法使い共とバトルしてるってんだからお笑いだぜ。

「いっおのっ！」

先ほどから攻勢でありながら一撃も入れられない小太郎――

ついに苛立ちを露にする――

雪崩のような勢いが更に増す――

しかし、状況に変化は現れない――

だが違うな。

こうなっちまったのはこの世界線のせいじゃねえ。

全部あの時に決まってたのさ。

量子化を受けたあの日からな……

「どうした坊主？ 掠りもしてねえぜ？」

「ハッ！ そう言う兄ちゃんこそ守ってるだけやないかっ！ ！」

量子化……

俺はどうして受けたのかねえ…

”守ってるだけ”、か…」

過去を変えたかった？

カタストロフィーを無かったことにしたかった？

「いや…違うな」

確かに、俺の両親はあれのせいで俺を産んで直ぐに居なくなっちゃった。

だから親の知り合いに育てられたわけだが…

まあ、預けられた方も生きるのがギリギリだったわけで。

俺をまともに育てられるわけはねえよな。

物心ついた頃には線を踏み越えちゃってた。

無邪気なガキ1人で生き延びる程、カタストロフィー後の世界は

甘くはなかった。

生きる為には何でもしたさ…

だから、機関が俺を誘ってきた時には何の迷いも無く頷いてた。

住居と食料が貰えるってだけで充分だった。

外の非居住区に比べりゃ第8ドームは正に天国だったぜ。

食い物はあるし巨大嵐やら宇宙線やらに悩まされることもなければ、都市軍に怯えながら生きる必要もない。

そうして暫く嘘みてえに平和な生活を送った時だった。

機関から”適合者”だと知らされた。

その時の俺は何を感じたんだろうな…？

別段驚きもしなかったのは覚えてる。

ただ、それを知った俺は自分から量子化を志願した。

”力があるなら使うべきだ”

そう思ったからだ。

いや…

単純に強くなりたかっただけかもしれないな…

—ただ強く。

—もつと強く。

—こんな理不尽な世界を全て壊すことができる位に強く。

—何もかもを壊しちまう位に強く。

—そう思ってた…

—だがな—

—そんな俺にそれが間違いだと教えてくれたヤツがいた—

「「守り切ろうと」してんだよ…」

そう――

あの時だ――

あの日も世界線の削除要請をした後、海辺で夜空を見上げていた――

まだ灰色になる前の空をな――

「お前は暇さえありや空を見てるよな。飽きないのか？」

ガニメデは多少の呆れを含んだ口調で問いかける――

その声の向かう先には無言で夜空を眺める黒髪の少年がいた――

「まあね。俺は空が好きなんだ」

ガニメデの呆れ口調を聞いた少年は顔を夜空に向けたまま僅かに微笑む――

夜の海辺には2人以外には誰も居ない――

静かな世界に波の音と2人の声だけが響く――

「俺にはどこが良いのかさっぱりわからん」

ガニメデはさして興味も無い様子で夜空に視線を向ける――

「正確に言うなら空の青さ、かな。俺たちの世界の空は灰色一色で味気無いから」

少年の独り言を呟くような声が夜空に向かう――

その表情は無表情――

しかし――

それは何処か虚しさを含み、見た者に何かを訴えている――

「俺は世界線を越えるまで空が青いとは知らなかったんだ」

少年は付け加えるように口を開いた――

その顔は変わらず遙か彼方へと向けられている――

「ああ、そりゃ俺もだ。なんつったって、俺たちが生まれた時には既に空は灰色だったしな」

ガニメデは同じように夜空を見上げたまま少年の言葉に同意を示す――

「そう。だから初めて本当の空を見た時、心を驚掴みにされた気分だった」

「まあ確かに。俺も驚きはしたぜ」

僅かな沈黙――

波の音が囁く――

「何処までも透き通る青い世界――そこに描かれる白い雲たち――同じ光景は二度と現れず一瞬一瞬が奇跡。正に芸術だね」

波の音を背景に、少年は表情を緩めて語り出した――

それを聞いたガニメデの表情も変わる――

短い笑い声が響く――

「ククク。お前は詩人にでもなったらどうだ？」

ガニメデは心底おかしそうに茶化す――

それを聞いた少年は苦笑いを浮かべる――

「それもいいかもね。でも、もう無理かな……」

その発言に対してガニメデは何も言わなかった――

そして会話が途切れる――

互いに口を閉じたまま何も語らない――

夜の静寂が辺りを包む――

周囲に明かりは無く、月だけが淡い光を発している――

静かな世界――

時間が止まっているような世界――

一定間隔で聞こえる波だけが時間の流れを告げる――

「なあガニメデ」

再び聞こえた声は少年のもの――

「ああ？何だ？」

ガニメデは漠然と星を見つつ適当な声を返す――

「前から思ってたんだけど、お前は何の為に量子存在になったんだ？」

少年の問いかけに、ガニメデは横目を向ける――

その視界に映る少年は変わらず空を見上げている――

「急に何だ？そんなもん聞いてどうする？」

ガニメデはまた視線を上空へ戻す――

「まあそう言わずに答えてくれよ」

少し離れた場所から聞こえる少年の声を耳に入れながらガニメデは
暫し思考の海へと浸る――

そうして行き着いた答えを小さく口にする――

「……強くなるため、だ」

それほど大きな声量ではなかったが、その言葉は静かな世界によく
響いた――

「強く？」

少年の聞き返す声もしっかりとガニメデの耳に届く――

そしてガニメデは無表情で答える――

「ああ。全てをぶっ壊せる位に強くなるためだ」

迷いの無い口調――

しかしそれは同時に意志の伴わない口調でもあった――

「それで、強くなってどうするんだ？ 本当に全部壊して回るのか？」

少年は更に問いかけていく――

まるで何かを気づかせたいかのように――

「さあな。とにかく強くなんだよ」

それでもガニメデは軽く言い流す――

それは本当に大して重要ではないかのような様子だった――

「それ、理由になってないと思うよ」

視界を星空で埋め尽くした少年は、それでも気配だけでガニメデの様子を理解したように言い放つ――

「知るかよ。俺は強くなれりゃそれでいいのさ」

目的は重要ではない――

ガニメデの口振りは言外にそう言っていた――

そこで少年の発言は途切れた――

再び何度目かの静寂が流れる――

「ガニメデ……」

沈黙を破ったのは少年――

改めて相手の名前を呼び掛ける――

「んあ？」

ガニメデは面倒くさそうに横顔を向けて応える――

「っ……………」

そして思わず沈黙した――

ガニメデが見たのは、真剣な表情を向けてくる少年だった――

視線は先程まで見ていた夜空から離れていた――

暗い中でも、その赤い瞳が自分に向けられていることがわかった――

そしてその口はゆっくりと語るように動く――

ガニメデは無言で視線を固定した―否、固定された―

少年の目はガニメデが視線を反らすことを許さなかった―

「本当の強さってのはさ、目に見えたり計ったりできないものなんじゃないかな？」

その言葉はガニメデの記憶に深く刻まれる―

一生忘れないであろう言葉がガニメデに届き、心中で何度も反復される―

「……………」

ガニメデは静止したまま動かない―

動くことを忘れたかのように沈黙する―

「少なくとも俺はそう思うよ」

そんな様子を察したのか、少年は僅かに穏やかな口調になる――

「……じゃあ何が本当の強さなんだよ？」

ガニメデも視線を反らすことなく疑問を投げ掛ける――

「例えば…そうだな…」

少年は一度視線を上へ向けて沈黙する――

そうして短く思考した末、ガニメデに向き直る――

「大切なものを守り抜く力、とかかな」

その答えを聞いたガニメデは鼻で笑う――

「なんだよそりゃ？守ってたら強くならねえだろ」

その口振りは少年の答えに対する呆れを露にしている――

そしてやれやれと言うように肩を竦める――

が――

「それは違うよ」

少年は明確に否定した――

その口調はこれまでに無くはつきりと言い切っている――

「…何が違うんだよ？」

その言いようの無い威圧感にガニメデは思わず身を引く――

「壊すよりも守る方が難しい。強くなければ大切なものを守り抜くことはできない」

「……………」

「だから本当の強さは、全てを守ること。俺はそう思う」

そう言い切った少年は再び瞳を夜空へ上げる――

「…そうか」

ガニメデは短く呟き、同様に顔を上空へと向けた――

そこには、深い暗闇がどこまでも広がっている――

その中にちりばめられた無数の光点は控え目に瞬いていた――

第72話「消えるまでは」

「ディヴァイン第三解放」

それは自らの枷を外す言葉――

ガニメデの口はその言葉を呟いていた――

「っ……!!」

小太郎は息を飲む――

ガニメデの周囲に流れる魔力は揺らぎ、見る者を圧倒する――

そして――

「っ……!?!」

瞬く間も無くガニメデの姿がぶれる――

更にその事実を認識する前に――

「な……っぐ……！」

小太郎の鳩尾に銀色の腕がめり込んでいた――

な……んや？

一体……いつの間に……？

小太郎の視界に映ったのは突如目の前に現れたガニメデの姿――

その顔は無表情――

そして次の瞬間には――

んな……？

周囲の景色が猛烈なスピードで流れていた――

やられ……たんか？

吹き飛んだことを理解した瞬間には鈍い音と共に場外の壁に衝突していた――

全身にじわじわと響く痛みに思わず顔を歪める――

「くっ……」

しかし――

「……やるやんか」

小太郎は揺らぐ頭を押さつつ、朝倉がカウントを始めるより早く舞

台へ復帰する――

「さっきのは全力やなかったんかい…」

小太郎は顔をしかめる――

その理由は痛みだけではない――

「兄ちゃん、俺をなめてたんか？」

自然と小太郎の声が低くなる――

手加減なんてしてたんなら…

許さんで…

「さあな」

そんな相手を見てもガニメデは何処か不真面目に答える――

その腕は音も無く出現した銀の甲冑が覆っている――

「男の闘いに水差したってわけやな？」

さっきまでは一撃も返してこんかった。

せやけど今のは何や？

瞬動なんてレベルやない……

見んのもギリギリやったで……

そーいや前の試合では何度も使ってたやんか。

いつでも出来たってことかいな……

「それは違うぜ」

さっきはあんだだけの闘いやったのに、俺ん時は全力出さへんのかい…

「何が違うんやっ!!」

口調を荒げる小太郎―

今にも飛び掛かりそうな勢いで叫ぶ―

「常に全力出してる俺の体がもたねえのさ。それにお前もな…」

それとは対照的にガニメデは何処か落ち着いている―

「何やて…?」

「俺の力はな、まあなんつーか…」代償”があんだよ。だから易々と使えねえわけだ」

代償？

どういうことや？

「代償やて？それがなんや？俺やったら構わず使うで」

「ハッ、生意気言いやがるガキだ」

ガニメデは鼻で笑う――

その口角は愉快そうにつり上がる――

「だが、お前の言う通りだ。全力出してなんぼだよ……。代償なんざ欲しいだけくれてやるぜ」

今のガニメデ兄ちゃんの顔……

一瞬だけ寂しそうに見えた気がすんねんけど……

まあええ…

「わかつとるやないか。ほんなら全力見せてみいっ！」

「ああ…そうだな…」

その言葉を言い終わると同時に、ガニメデの雰囲気が変わる――

おう、兄ちゃんもやる気出したみたいやな。

陽気な態度は消え去り、全身から重苦しい波動が放たれる――

周囲を黒く染め上げる冷徹な雰囲気――

そうや。

この刺すような殺気が堪らんのや。

「特別大サービスだ犬坊主。おめえに俺の全力を見せてやるよ」

「おう、望むところや」

「だが俺にも色々と事情があつてな。一瞬だけしか見せらんねえ」

一瞬やて？

「それは一瞬で決めれるっちゅうことやな。そんなに自信あるんかいな？」

「ああ。つか、ミスってお前を”あの世行き”にさせねえようにすんのが大変だぜ」

白服を着た獣は平然とした表情で言い放つ――

「……………」

何や…

脅しのつもりかいな…

小太郎は胸中で冷や汗を流す―

「どうした？ビビったか？」

そんな様子をからかうようにガニメデは口元を歪め、野性的な犬歯を見せつける―

「んなわけあるかいっ！」

そんな態度に小太郎はいきり立つ―

が――

「言っておくがこれは脅しじゃねえ。一瞬だろうが俺が”本来の姿”に戻っちまうとどうなるか保証できねえ」

ガニメデはそんな犬耳の少年を制するように殊更に真剣な表情で睨み付ける――

「何や”本来の姿”って？」

さっきから兄ちゃんの言ってることが滅茶苦茶やで。

コロコロと態度を変えるガニメデを訝しむ小太郎の表情――

ガニメデは僅かに表情を固くする――

「……………口が過ぎたな、忘れる。どうせ直ぐに見える」

「……………」

やっぱり何かおかしいで…

それとも…

気のせいなんか…？

「どうする？」

んでも、やることは変わらん。

「決まっとるやろ。今度こそ全力見せてもらうで」

「いいぜ。なら覚悟しな」

そう告げたガニメデは目を閉じる――

「そんなん…」

とつくに、と言い切る前に小太郎は言葉を失う――

「ディヴァイン完全解放」

最後に辛うじて聞き取れたのはその言葉だった――

そして間など空けず――

音が、消え――

色が、消え――

全ての感覚が消える――

余りにも絶大な”何か”を前にし――

体の全器官が情報を遮断する――

なんや…？

それは本当に前触れが無かった――

意味が…わからんで…

本当に一瞬のうちに―

こりゃ…ほんまにヤバいで…

気づけば―

こんなん…

全てが吞まれていた―

$$P(p, t) = \psi(p, t) - \frac{1}{2} \frac{d}{dt} \psi(p, t)$$

—ALERT—

—Existing probability diverged—

”警告”

”存在確率の発散を確認”

響く人工音声――

それによって小太郎は我に返る――

「え……………」

眼前に広がるのは理解不可能の光――

目を焼かんばかりに輝きを放つ――

観客は例外なく舞台から目を反らす――

余りの眩しさに直視できない”それ”は、寧ろ神々しさまで感じさせる――

そして同時に、見た者は”それ”が災厄であると理解した――

そう――

本当の”神性”が解放されていた――

「だから覚悟しろつつったんだよ」

啞然とする小太郎の耳に言葉が入ってくる――

それは聞き覚えのある口調であつたが、同時に聞き慣れないという矛盾した声だつた――

男の声にも女の声にも聞こえる――

若者の声にも老人の声にも聞こえる――

あるいはその全てが同時に話しているようにも聞こえる――

そんな奇妙な声――

「っ！！」

声に氣を取られていた小太郎は眩しさも忘れ目を見開く――

何故なら――

なんや…これ…？

なんなんやっ！？

眼前に”それ”が迫っていた―

感じるのは生命の危機―

これは…ダメや…

ほんまに…やられる…

本質的な恐怖が全身を駆け巡る―

咄嗟に獣人たる真の姿を現した小太郎は

「うおおおおおっ！！」

果敢か愚作か、”それ”に拳を振るう―

そしてその一撃は確かに”それ”を捉える――

やったんか!?

が――

「は……………?」

小太郎の瞳に映るのは非現実的な世界――

それはあらゆる法則が歪んだ世界――

小太郎の拳を受けた”それ”は背後に吹き飛び――

「っ!?!」

それと全く同時に――

「悪いな。その事実は一――”無かったことになった”――」

存在しないはずの”二つ目”の”それ”が小太郎を呑み込む――

二人……やて……？

その事実を認識した時には――

「あ……………」

小太郎は意識を手放していた――

「っ……!!」

楓は咄嗟に体を構える――

「おっと、私と闘う気ならやめておいた方がいい」

それを見た真名は余裕を含ませながら言い放つ――

その手の中にある銃は確かな存在感を放ちながら、楓を一直線に捉えている――

「まあそんな体では逃げるのも無理だろう」

真名の鋭い視線は楓の負傷した箇所を寸分の狂いなく捉えていた――

「くっ……」

それに対し、楓は苦い表情を見せる――

それは肯定したに等しい行為であった――

「私としては大人しく捕まって欲しいのだけどね」

真名はあくまでも余裕な態度を貫く――

それは確実に楓の精神を追い詰めていた――

「お断りでございますよ。おずおずと捕まるわけにはいかないでございます」

負傷した楓、そして相手は真名――

明らか過ぎる程に不利な状況に追い込まれている――

それでも楓は焦りを表情には表すまいと努力する――

「そうかい。なら仕方ないね」

そう言うと同時に真名は躊躇なく引き金を引く――

それは余りに突然だった――

「っ！！」

真名が引き金を引く直前で気づいた楓は、体を思い切り横へ転がす――

それは回避というより、横へとダイブした様に見えた――

全身を地面に打ち付ける無様な格好になりながらも、楓は辛うじて

弾丸を避けた――

「ぐっ…」

体を打ち付けた衝撃が怪我に響き、楓の表情が歪む――

「ほお、初弾を避けたのか。やってくれるじゃないか」

その結果、放たれた弾丸は楓を捉え損ねて背後の地面へ着弾し――

「!?!」

地面を抉った――

まるで何かですくったかのように綺麗な半球形の穴がぽっかりと空いていた――

普通の弾丸ではあり得ないその光景に楓は驚愕する――

「これは普通の弾丸じゃなくてね」

そんな楓に説明するかのように真名が口を開く――

「強制時間跳躍弾？（BCTL?）。着弾後、範囲内の物質を一時的に凍結座標に転移させる弾丸だそうだ。まあ私もよくは知らないが」

「……それも超の発明というわけか……」

「いや、正確には違うね。超のオリジナルにカリスト先生が手を加えたらしい」

「いいのでござるか？拙者に教えてしまっているでござるよ」

「構わないさ。私が言わなくても先生のことは気づいていたんだろ？」

「……………」

「それに、どのみち誰にも話せないだろうからね」

そう言い、真名は再び銃口を楓へ向ける――

「さて、気がすんだか楓？安心していい。これに撃たれても無傷だ。気づいたら未来だろうね」

「っ……………」

「それと下手に動かない方がいい。体をバラバラに転移されたくないからね」

次の瞬間、夜の森に銃声が響いた――

「ジュピター、先程の波動関数の揺らぎは何だ？」

”パターン特定中……、完了。量子存在による波束の収束と判明”

ベッドで横になったイオは僅かに表情を変える――

「ガニメデか？」

”肯定。完全解放状態を確認”

「……………」

何故だ？

何故ガニメデは完全解放をしたんだ？

既に身体に負荷がかかっていたはずだ。

それにも関わらずディヴァインを解放した。

加えて解放したのは最終段階の完全解放。

そんなことをすれば…

「よお…」

イオがそんな思考に埋没している時――

「っ?」

部屋の扉がスライドして開く――

そこにいるのは――

「ガニメデ…」

「ハッ…元気そうじゃ…ねえか…」

ガニメデは片足を引きずるよう壁に半身を凭れ掛けている――

息は荒く、顔には冷や汗が見える――

その表情は笑みを見せているが、無理をしているのは明らかだった――

「完全解放をしたのか？」

イオはそんなガニメデを見ても無表情を崩さなかったが、瞳が僅かに揺れた――

「…まあ…な…」

何故だ？

そんな必要はないと予想する。

イオは無機質な瞳を真っ直ぐにガニメデへ向ける――

「ハッ」

それを見たガニメデは短く笑い、イオの疑問を理解したように口を開く――

「全力の…闘いを望む相手に…：加減なんか…：できねえよ…：」

その口調には何時もの覇気は欠片も無い――

「悪りいが…：ちと休ませて…：もらうぜ…：」

ガニメデはたどたどしい足取りで近場のベッドに近づいて横になる――

否、それは倒れ込んだと形容した方が適切だった――

「大丈夫なのか？」

イオは離れたベッドに倒れたガニメデを見つめる――

「ああ…安心しな。犬坊主…は…ちゃんと…あそこに転移させた…。仕事に…ぬかりはねえ…。」

「そうではない。お前の身体負荷のことを聞いた」

「何…だ？心配…してんのか？」

「肯定する」

「ハッ、おめえに…心配されるほど…弱って…ねえよ…。少し寝りゃ…治る」

「ならば約束を要求する」

「あ…？何を…約束すん…だ？」

「全てを守るまで消えない、と」

その言葉を聞いたガニメデは顔をイオへ向ける――

「言っていたはずだ。全てを守るのが本当の強さだと」

イオは一切の揺れが見られない無表情で言い切る――

「お前……ひょっとして……イメ……」

そこでガニメデは言いかけた口を閉じる――

「いや……何でも……ねえ……」

そしてイオから視線を反らして天井を見つめる――

「俺は……少し寝かせて……もらう……ぜ。そのうち……カリス……ト……の
野郎……が……来る……はずだ……。あいつは……おせっかい……だからな……。
お前も……安静に……してろ」

その言葉を最後にガニメデは意識を手放す――

「……………」

次は俺の試合だったはずだ。

相手はマクダウエル……

死んだように深く眠るガニメデを横目に、イオはおもむろに起き上がる――

「……………」

理由は不明だが…

行かなければならない。

そんな気がする。

それに、ガニメデが休息を取る時間を稼ぐことになる。

「……………行かなければ」

そうしてイオは無言で部屋を後にした—

その表情には一切の迷いが無い—

深青色の瞳は違うことなく行く先を貫く—

まるで、その先に何か大切なものがあるかのように—

そして—

避けられぬ運命が待っているかのように—

第73話「終幕は誰も知らずに」

—『85. 52. 76』—

インターネット上に流布した動画が話題を呼んだためだろうか—

大会の会場は既に満員となり、人が波を作っていた—

それぞれが口々に騒ぎ立て、観客席は慌ただしさに包まれている—

そんな彼らが一様に視線を向ける先の舞台—

そこには—

「……………」

無言で佇む少女がいた――

観客たちの喧騒に囲まれ――

長い金髪を風に揺らし――

たった1人で立っているその姿は――

「……………」

とても儚く見える――

「……………」

何故私は待っているのだろうか…？

あいつは…来ない。

そんなことはわかっている。

もう…

私とは何の関係も…

ないんだからな…

「それなのに…」

何故私は待っているんだ？

私から言っただ…

私から切ったんだ…

あいつとの繋がりを…

それなのに…

「くっ…笑えてくるな」

全くいい笑いものだな。

たかだかあんな男一人に気を煩わせるなど…

闇の福音が聞いて呆れる。

たかだか…

あんな奴に…

「あんな…奴に…」

そうだ。

あれも私にとっては大した奴ではない。

私には誰も必要ない。

今までだってそうだった。

これまでずっと一人で生きてきた。

これからもそのつもりだ。

そう—

私はずっと一人だ…

ずっと…

なのに…

この気持ちは何だ？

わからん…

何なんだ…？

「どうして…」

どうして…

来てくれないんだ…

「……………イオ」

薄暗い地下通路――

そこに一つの人影があった――

それは無表情で前へ進み続けるイオの姿――

片手で壁を押さえ、ゆっくりと歩みを進める――

「く……」

しかし、ついにその足が止まる――

力尽きたようにその場に崩れる――

「イオさん？」

そこに前方から声が掛かる――

イオが視線を向けた先には――

「絡繰茶々丸……」

「大丈夫ですか!？」

ただならぬイオの様子に気づいた茶々丸は慌てたように駆け寄る――
が――

「大丈夫だ」

イオはそんな茶々丸を片手で制する――

「ですがその傷は…」

「問題ない」

「カリスト先生の仰っていた通り安静にしていないと…」

「それは出来ない」

そう言うイオの瞳は迷いが無い――

茶々丸は思わず無言で見入る――

「待っている人がいる。俺は行かなければならない」

「マスター…ですね」

「肯定する」

そこで茶々丸は一度口を閉ざす――

そして何かを決心したようにイオを見つめる――

「お願いがあります」

「何だ？」

「マスターをもう一人にしないでください」

茶々丸は一切視線を反らさずに告げる――

イオもそれを受け止める――

「イオさんが居なくなってからです。マスターは笑わなくなりました」

無表情で語るガイノイドと――

無表情で聞き入る量子存在――

それは感情の欠片もないはずの光景――

しかし、そこには確かな思いがある――

「私では今のマスターのお役には立てません。ガイノイドである私には……いえ、たとえ誰であってもマスターのお役には立てないと思います」

表情を変えない茶々丸――

彼女の中にはどんな思いがあるのだろうか――

ずっと近くにいながら、大切な人を支えられない自分――

「イオさんでなければ駄目なのだと思います」

告げられた言葉は静かな通路に広がる――

目の前の少年にも確かに伝わる言葉――

従者でありながら主人の力になれない――

それができる唯一の存在は、眼前の量子存在――

それを苦悩し、理解し、紡いだ言葉――

その言葉が伝わらない道理など、あるはずが無かった――

「約束する」

少年は再び立ち上がる――

そして――

「彼女を一人にはしない」

もう一度、歩み出す――

信念を持った者の迷い無き歩み――

その背中を、茶々丸は静かに見送った――

「ありがとうございます……イオさん……」

その表情は、誰にもわからない――

沸き立つ観客――

その中心である舞台だけが静まり返っている――

そこにいるのはたった一人の少女――

” えーっと、試合開始の時間になりましたが……対戦相手が来ないようですよ ”

朝倉のアナウンスが非情に響く――

「フン。やはり来ないか」

だろうな。

来る理由がない。

「…所詮はその程度の男だったというだけさ」

” この試合は、エヴァンジェリン選手の― ”

私にはもう関係ない。

関係ない奴だ。

” 不戦しよ………? ”

朝倉の声が止まる―

ん？

疑問に思ったエヴァは視線を前方へ戻す―

そこには――

「っ……………」

白い服を身に纏った無表情の少年がいた――

灰色の髪と無機質な深青の瞳――

見間違うことなどあり得ない――

「……………イオ……」

イオがそこにいた――

どうして？

何故来た？

イオが近づくにつれその姿が鮮明になる――

細部を見ると――

白い服は所々破け、青く染まっている――

頭には包帯が巻かれ、服と同様に青く滲んでいる――

何も知らない者が見れば単に青いペンキを付着させたようにしか見えないだろう――

しかしエヴァは知っている――

それはイオの血であると――

人を外れし量子存在の青く変色した血であると――

「……………」

こんなに怪我…してたのか…？

綻びかけたエヴァの表情が歪む――

イオはゆっくりとした足取りで舞台へたどり着く――

そこで少年は静止する――

「……………」

そうして舞台上で二人が対峙する――

無言で視線を交わらせる――

互いに何も言わない――

周りの喧騒を忘れたかのように舞台上は静まる――

まるでそこだけが取り残された別の空間であるかのように――

「……………」

そうしてどれだけ時が流れたか――

ようやく沈黙が破られる――

「何しに来た？」

エヴァが言葉を発する――

それは刺さるように冷たい口調――

「君が待っているから来た」

が、イオは気にした様子も無く冷静に答える――

それを見たエヴァの表情はいつそう歪む――

その視線は最早睨んでいると言った方が適切だった――

「フン。誰も頼んでなどない。よくもその面、私に見せたものだ
な」

エヴァは眉間にしわを寄せる――

その表情は不機嫌そのもの――

しかし――

「ああ。今の俺に迷いはない」

イオは一切揺らがない――

確たる信念を秘めたように言葉を発する――

そこにあるのは無機質な瞳ではない――

お前は……

こんな表情もできたのだな……

エヴァは僅かに顔を驚きに染めるが、直ぐに表情を戻す――

「フン……。何を言おうが、貴様と私は最早何の関係もない」

そして負けじと強い視線をイオに浴びせる――

「理解した。ならば……」

イオは一度目を閉じ――

多少の間を空け――

「俺は俺のやりたいようにする」

そう言い放ち、瞳を開く――

それは深い意思が伴う瞳――

……。

そんな目ができるなら…

お前にはちゃんと感情があるではないか…

” んじゃ試合開始っ！！ ”

同時に告げられる開戦の標――

その瞳を見たエヴァに生じた思い――

それは――

ククク。

これがお前の殺気か。

それが私だけに向けられている…

他の誰でもない。

この私に。

エヴァの表情を一変して愉悦に染め上げる――

「フッ……。いい度胸だなっ！！ならば私も加減はせんぞっ！！」

その宣言と共にエヴァはイオへ迫る――

間を空けず――

「っ……！」

イオは身を反らす――

ククク。

いい気分だ。

次の瞬間、鉄扇がイオの脇を寸前で通過する――

こいつは今、私しか見ていない。

空を斬ったエヴァは、それでも動きを止めない――

流れるように追撃をかける――

本当にいい気分だ――！！

それを回避するイオ――

そうだ！

もっと私を楽しませろ――！！

エヴァの動作は止まらない――

両手の鉄扇を流れるように振る――

イオの身体を中心に円を描くように演舞する――

他のものを見る余裕など与えてやらんっ!!

それを避け続けるイオ――

エヴァの演舞は上下左右へと流動的な斬撃を放つ――

思わず見惚れるほどに綺麗な軌道をなぞる斬撃――

対して――

イオの体は器用にその斬撃の間を縫う――

その動きは踊っているように滑らかな軌跡――

イオが動く度、白いコートが生き生きと揺れる――

「さあ!! もっと踊ろうじゃないか!!」

それは最早闘いという概念を越えて見える――

それは流れるダンス――

静かな舞台の上――

たった二人で繰り広げられるダンス――

観客の声が消える――

明かりが消える――

風景が消える――

舞台だけがスポットライトに照らされたように――

二人以外の全てが消える――

二人だけの世界――

その世界で踊る主役は吸血鬼と量子存在――

それは世界を越えた邂逅――

あまりに非現実的で――

あまりに幻想的な光景――

その世界に誰もが見入る――

しかし、夢は長くは続かない――

それは束の間の幻夢――

その舞台は終演を迎える――

「つく……」

イオの負傷した体は、急激な動きに耐え切れなくなる――

イオはその場に片足をつく――

「どうしたイオ？ まだ付き合ってもらおうぞ！」

「っ…」

それを見たエヴァは口角をつり上げ、鉄扇を振るう―

その軌道は一直線にイオへ向かう―

それは避けられない一撃…―

…のはずだった―

が―

―座標転移―

鉄扇が直撃する直前にイオが消え、斬撃は空を斬る―

「フツ、またその小細工か」

が、エヴァは顔色を変えない―

そればかりか更に不敵な笑みを見せ、背後にゆっくりと振り返る――

そして――

片手を前へ出す――

「甘いぞイオ」

「っ!？」

エヴァの細い腕は、イオの拳を軽く受け流す――

その結果、イオは体勢を崩す――

「お前のそれは見飽きたぞ」

その言葉と共に放つのは強烈な鉄扇の突き――

回避する暇などなく、イオはそれを鳩尾で受け止めるしかなかった――

「うぐっ…」

鈍い音と共にその場に崩れるイオ―

エヴァの目の前に膝を付くイオ―

エヴァは不敵に笑いながらイオを見下ろす―

「っ…」

イオは更に座標転移をしようと演算を開始―

「おっと。それはもう使用禁止だ」

しようとした所をエヴァの声が制止する―

次の瞬間、エヴァから放射状に無数の黒いワイヤーが伸びる―

ワイヤー同士が交差し、ステージを網目のように網羅する――

「これは……」

イオは呆然とその黒いグリッドを見つめる――

「ククク。貴様のそれは、転移した先に障害物があると使えないはずだ」

エヴァは何処か楽しそうに話す――

「っ…なるほど」

イオは全てを理解したようにエヴァを見る――

「今、このステージ上には私のワイヤーが張り巡らされている。つ

まり、貴様は私から絶対に逃げられん」

そう言い放ち、エヴァは手近の一本を弾く――

すると、その振動が次々にワイヤーへ連動し――

「ぐっ……」

一本のワイヤーがイオの腕を軽く斬りつける――

白い服が破け、青い血が飛ぶ――

その血を浴びたエヴァは加虐心を抑えられないように笑う――

「これがお前の血か……」

そして顔に付いた血を指で拭き取り、そのまま舌で舐め取る――

「……………」

イオは無表情でエヴァを見つめる――

「次は…お前の心を見せてもらおうか」

何処か恍惚とした表情のエヴァは突然イオの首に手をかける――

そして自分の方へ引き寄せる――

「っ!？」

驚愕するイオを無視し、エヴァは自分の顔をイオの顔に近づける――

もう少しで唇が重なるほどに近づけ、相手の瞳を真っ直ぐに見つめる――

浅青色の瞳と深青色の瞳が重なる――

「イオ、お前の中に入らせてもらうぞ」

間を空けず、視界が真っ白に染まる――

思わず目を閉じるイオ――

そしてその瞳を再び開くと――

「っ！！」

そこには――

青空が広がっていた――

舞台はおろか、麻帆良がそっくり消えていた――

見渡す限りの空――

眼下には雲海が広がっている――

「ここはお前の心情風景だ」

突如響く声――

イオは正面に視線を送る――

「いい景色じゃないか。それにしても空とはな。まあお前らしいと言えるが」

そこにはエヴァ――

空を浮遊するように浮いている――

「さあ、続きといこうか！！イオ！！」

先ほどとは桁外れの魔力を放つエヴァを前に、イオも構えを見せる――

「了解した」

そして――

自らの枷を外す――

「ディヴァイン第三解放」

Z P Eの爆発的增加と共に、イオの思いが具現化する――

何処までも白い剣――

青い光が溢れる――

「そうだ！お前の力をこの私に見せてみる――！」

対するエヴァは顔を綻ばせる――

そして――

二つの力が衝突する――

何もかもが透き通る――

この青い世界で――

> i 3 4 6 2 2 — 4 2 0 5 <

第74話「夢から覚めて」

暗い…

此処は何処だ？

俺は何処にいる？

何も見えない…

ああ…そうか。

瞼を開いてないからか。

「っ……………」

眩しい…

それに…

頭が重い…

「っ！？気がついた！！」

うるさいな…

なんだこの女は…？

「意識はありますかエゼさん！？」

エゼ…？

誰だ…？

「今、フェイト様を呼んできますっ！！」

叫んだと思ったら…

今度は急にどっかへ行きやがった。

騒がしいヤツだな…

「……………」

まあそれはいいが…

ここは何処だ？

どうやらベッドに寝ているらしいが…

見覚えがない。

いや…

それ以前に……

——俺は誰だ？——

「思い出せない……………」

何か…

夢を見ていた気がする…

大切な何かを。

だが…

思い出せない…

何一つ…

—そうか。じゃあな、シア—

—うん…—

「っ…!？」

何だ…？

今のビジョンは…？

ダメだ！

頭が…

頭が割れそうに痛い！

—私を…
■して…—

っ！？

「ぐあああああああ！！」

ううっ！

痛い！

何だこれは！！

今のは誰だ！！

「意識が戻ったみたいだね」

くっ…！

誰だ？

こんな時に…！

「頭でも痛いのかい？」

何だこのガキ…？

死んだような目をしてやがる…

何故だ…

その顔を見てると何故か苛立つ…

「誰だお前…」

う…

ようやく頭痛が収まってきた…

「それは冗談のつもりかい？」

まだ多少痛むが、どうにか大丈夫そうだ。

何だったんだ？

今の映像は？

「冗談なわけがないだろう」

にしても…

本当にここは何処だ？

記憶がない。

いや、場所だけではない。

あらゆる記憶が抜け落ちている：

「まさか…本当に記憶をなくしたのかい？」

つまり記憶喪失か：

たが何故だ？

記憶を無くしたらしいが、別に何も感じない。
冷静すぎて気味が悪いくらいだ。

「そのようだ」

「…なるほど」

というかこのガキ…

随分冷めた口調だな…

その顔…

やはり気に入らない。

「さっきの女が言っていたが、俺の名前はエゼでいいのか？」

「その通りだよ」

エゼ、か。

実感がないな…

「どうやら僕の名前も教えないといけなみたいだね」

本当に気に入らない…

だが今は情報を集める必要がある。

文句を言っている場合ではない。

「僕はフェイト・アーウェルンクス。初めまして、になるのかな？」

フェイト・アーウェルンクス…

ダメだ。

やはり知らない名だ。

「記憶した。で、ここは何処で俺は何故こんなことになっているのか説明してくれないだろうか？」

「君のことは先ほどまで監視をしていた彼女―暦が見つけた」

さっきの女か。

いや待て

監視だと？

「君が勝手に姿を消したのを不審に思ってね。彼女に探索させたんだ」

本当なのか？

全く記憶にないが：

「そして死にかけの君を見つけた」

は？

「死にかけ？」

「そうだよ。君は無惨な姿で死にかけていた」

……。

「俺は何をしていたんだ？」

死にかけるような状況なんて早々ないはずだ。

「そこまでは僕も知らない」

「そうか…」

「ただ、誰かと戦闘したような傷があった」

何？

誰かと戦闘だと？

わけが解らない…

「だけど君は回復した」

「助けてくれたのか？」

「それは違う。君が勝手に回復した。僕は何もしていない」

勝手に回復…

「今の君は傷一つない。治癒魔法も使わずに完治したんだ。正直な話、僕も驚かされたよ」

は？

治癒魔法？

魔法って…？

「ちょっと待ってくれ…」

こいつはさっきから何を言っている？

いまいち話が噛み合わない。

記憶が無いからなのか？

「なんだい？」

「その魔法ってのは普通のものなのか？」

「面白いことを聞くね。君だって魔法使いだよ。いや、正確には”
だった”と言った方がいいかな」

俺が魔法を…？

というか魔法ってあの魔法か？

俺の記憶に残されてる意味は非現実的なイメージしかないが…

俺の魔法に関する記憶が消えてるだけなのか？

「それすらも覚えてない…みたいだね」

「ああ。さっぱりだな」

「その様子だと、あの特殊な術式も使えないようだね」

特殊な術式…？

ダメだ。

疑問だらけだ。

次から次へと意味が解らない単語ばかり…

「そうみたいだ。記憶にない」

「だけど僕としてはそれは困るんだ」

ん？

雰囲気を変えた？

気のせいか？

「何故だ？」

「覚えていないかもしれないけど、君とは一時的な協力関係になっているだけだ」

いや、気のせいじゃない。

コイツ…

軽い殺気を放っている…

ん？

待てよ…

何で俺は殺気を感じ取れるんだ？

「つまり戦う力を失った今、僕らは君を必要としていない。言いたいことがわかるかい？」

……。

「君は用済み、ということだよ」

…なるほどな。

これは危機的状况というやつだ。

だが不思議だ。

全く動揺していない。

まるで、そんな感情が無いみたいにな……

「で、どうするんだ？口封じに消すのか？」

そのお陰で冷静でいられる訳だが。

「……その選択肢も悪くはないね」

口封じって言葉を否定しなかったか……

つまり、俺は何かしらコイツらの秘密を握っていたってことになる。

「じゃあそうするか？」

更に言えば、俺にはそんな秘密を握らせる位に利用価値があった、ということだ。

ならばそう簡単に消そうとはしないはずだ。

力を取り戻す可能性もあるわけだしな。

「でもその選択はしないよ」

やはりな。

「俺にはまだ利用価値が残ってるわけか」

コイツの口調から察するに、力の無い俺を消すのは造作もないらしい。

なら利用するだけ利用して好きな時に消せばいい。

今やる必要はない。

仮に力を取り戻したとしても、それこそコイツの望むところだろう。

生かしておいてもデメリットは無い、ということになる。

「そうだね。今の君を消すのは簡単だけど、それは惜しい」

何だろうな…

予想してた発言だが、いざコイツに言われると無性に腹が立つ。

「ならお前らに協力するしか道はないってことだな」

精々俺を利用するだけ利用すればいいさ。

フェイト・アーウェルンクス…

俺もお前を利用させてもらう。

記憶を取り戻すまではな。

「理解が早くて助かるよ」

今はコイツらの手のひらで踊ってやろう。

ただ――

あまり踊りに夢中になりすぎて――

その手を切り落としてしまうかもしれないが。

「右ですっ!!」

それは銃弾が放たれる直前――

銃弾の代わりに木の陰から緊迫した声が放たれる――

「っ!？」

声を聞いた楓の体は自然とその方向へ動く――

それにより弾丸は再び楓を捉え損ね、地面に大きな穴を空ける――

「のどか殿!？」

楓は木の陰に見えるクラスメイトの名を叫ぶ――

何故ここにいてござるか!？

気配は感じなかったはず!

銃弾を放った張本人、龍宮真名は顔を動かさずに横目だけに向ける――

「宮崎のどか？」

これはマズイでござる…

理由はわからぬが、のどか殿が居合わせてしまった…

巻き込んでしまうでござる…

「何故ここにいるんだい？」

真名の問いは冷徹さを伴ってのどかに向けられる――

「っ…、ネ、ネギ先生が見つからなくなって…心配で探してて…
したら…その…二人が…」

森に入るのを見られていたでござるか…。

「ほお。それで後を付けてきたと。しかし、気配なんて……」

真名は発言の途中で何かに気づいたように沈黙する――

真名の目に映ったのは木の陰に半身を隠しながらおどおどするのどか――

そしてのどかの両手の中に収まっている一冊の本――

「ああ、なるほどね。そのアーティファクトを上手く使えば盲点を突くこともできたわけか」

そうでござったか。

しかし、本当にマズイでござる…

こうなっては真名が見逃がすはずがないでござる…

「悪いが、見られたからには…」

真名は流れるような動作で左手の拳銃の照準を楓に固定したまま、
右手の銃をのどかへ向ける――

「逃がすわけにはいかないね」

「っ!!」

のどかの体がビクツと硬直する――

それを見た楓は焦りを隠し切れずに冷や汗を流す――

くっ！

拙者一人ならまだしも、のどか殿まで巻き込んでしまうとは…不覚！

考えるでござる！

このままではあの銃弾の餌食になるだけでござる…

どうすれば…

何かあるはずでござる！

何か…

何かこの状況を打開する策が…

「っ！」

そうでござる！

のどか殿のアーティファクトを使えば或いは真名を出し抜けるっ！

「のどか殿！本を使うでござる！」

楓は咄嗟に叫ぶ――

「…！？」

のどかは驚いたように楓を見つめる――

「おっと、調子に乗るなよ楓」

二人の意思疎通が図られる前に真名の制止が入る――
牽制するように僅かに銃を前へ押し出す――

「くっ…」

楓は苦々しく顔を歪める――

もうダメでござるか…

「わかりましたっ!!」

真名の注意が楓に向いた一瞬、のどかが叫ぶと同時に走り出す――

のどか殿!?

何を!?

危険でござる!!

「ちっ…!」

一瞬遅れを取りながらも真名は引き金を引く――

BCTL?がのどかに迫る――

が――

「っ!」

のどかは弾丸を見切ったように避け、楓の元へとたどり着く――

その動きは、予め銃弾の向きを知っていたようだった――

なるほど！

アーティファクトで銃弾の放たれる方向がわかるのでござるなっ！

「撤退でござる！！」

そう言い放った楓はのどかを抱え、真名に背中を向ける――

そして驚くのとどかを無視し、出来る限りの全力で地を蹴ってその場から離脱する――

「逃がさんっ！！」

当然真名も黙って見逃すはずはない――

楓の背中を追うように駆け出し銃弾を放つ――

正確無比な射撃が背後からのどかを抱えた楓に迫る――

しかし――

「左っ!!」

抱えられたのどかの指示は的確に射撃の合間を突く――

「右ですっ!!」

森の中は当然ながら木が生い茂っており、その間を縫うように走り抜ける楓を捉えるのはそう簡単ではない――

加えて、のどかの絵日記で銃弾の放つ方向は全て読まれる――

「くっ!!」

瞬く間に真名の瞳に映る楓の姿が小さくなる――

今度は真名の表情が歪む番であった――

「ようやく来たネ」

両手を腰に当て尊大な笑みを浮かべる超――

その隣には機械を背負った葉加瀬――

「超鈴音……」

対して、二人と真っ向から向き合うのは明石教授――

電源管理室で両者が睨み合う――

明石教授はゆっくりと口を開く――

「やはり君たちだったんだね？」

その声色には疑問の色合いよりも確認のニュアンスが強い――

「そうネ。少しは目が覚めたのではないかな？」

返される発言は質問を予期していたように当然と認める――

明石教授の眉が動く――

「君たちを野放しにしていたのは間違いだった」

「ならばどうするネ？」

超は挑発的な笑みを浮かべる――

「勿論君たちを拘束する。君たちがしたことについては既に学園に報告済みだよ」

「それは仕事熱心なことネ」

あくまでも余裕な表情を崩さない超に明石教授の顔が歪む――

「その余裕もこれまでだ超鈴音。学園が本腰を入れて君たちを捕まえに掛かる。もう逃げ場はない」

「本当にそうかな？」

「何…？」

「本当に逃げ場はないと言い切れるネ？」

「どういう意味だい？」

「ククク。学園側がどんなに努力しても絶対に行くことができない場所があるネ」

「そんな場所はないよ。君たちは必ず捕まる」

「フフ…先生は忘れているみたいネ。逃げるのは第四の方向…」

「第四……？」

「我々は並行世界に干渉することができる、ということネ」

「っ!？」

「フフフ。ようやく意味がわかったかな？」

その時の超の表情を見た明石教授は確信した――

彼女は危険だ、と――

「させないよ…」

明石教授は構えを見せる――

その瞬間――

超の姿が消える――

それは最初からいなかったかのような錯覚をもたらす程に一瞬だった――

明石教授の目には文字通り消えたように映った――

そして背後から声が届く――

「それこそ無理ネ」

咄嗟に振り返る明石教授は驚愕を隠すことも忘れていた――

「なっ!？」

背後に佇む超は変わらず余裕の笑みを浮かべている――

「擬似時間制御と座標転移による二重転移。見切れるハズがないネ」

その言葉を最後に、超は再び視界から消える――

そして間を空けずに明石教授の頭に衝撃が走る――

「ぐっ…!」

何処から攻撃されたか、どんな攻撃をされたのかすら理解する暇もなく、明石教授の視界がブラックアウトする――

消えかける意識の中、最後に見たのはニヒルな笑みを伴いながら見下ろしてくる超鈴音の姿だった――

第75話「存在しない存在」

過去は確定していない

変えることができる

自分の世界線の過去は変えられないが他世界の過去、つまり未来ならば変えられる…

いや、誤魔化すのは止めてもつとはつきり言おう

”未来は確定していない”

そう思っていた

だから多世界理論を利用していたのかもな…

そう、あの時の俺はまだ何も知らずにもがいてた

未来を変えようとな

ハハ…馬鹿らしい…

下らねえったらねえぜ

なんせ…

” 未来は確定してるんだからよ ”

だからよ…

俺は” 俺 ” を消すぜ

なあ…

ジュピターシリーズ N O . 3

まだガニメデだった頃の間抜け…

感謝しろよ

てめえは” あの光景 ” を見る前に消滅できるんだからよ

俺たちから全ての希望を奪った…あの光景を見る前にな…

『89・49・62』

これは不利な状況だ。

いや…

俺の敗北は確定している。

「どうした？ そんなものか？」

マクダウエルは無傷のまま。

攻撃が効いていないわけではない。

ディヴァインは確かにマクダウエルを何度も貫いている。

問題なのは相手が不死ということだ…

いくら攻撃しても傷はすぐに治る。

さらにこの空間では魔力の制限が外れている。

どうやらこの時空間は仮想現実に近いようだ。

そして気になるのはジュピターが反応しないということだ。

疑似観測以外の機能が死んでいる。

これでは分析も不可能だ。

ならば聞くしか方法は無い。

「一つ聞きたい」

俺の質問を受けたマクダウエルは笑みを見せる。

「何だ？」

何故か楽しそうだ。

理由はわからないが。

「この時空間は何だ？ Z P E：魔力の変動が不確定すぎる」

マクダウエルは問いを予測していたように鼻で笑った。

「フツ。だから言ったではないか。ここは意識の中の世界、閉じた世界だ。外部とは一切繋がらない空間：実在の私とお前はあの舞台から一步も動いてはいない」

この様子を観測する限り本当のようだ。

「理解した。君も俺も実在ではなく、擬似的な精神体ということか」

「ククク。やはりお前は理解が早いな。そうだ、今の私とお前は意識だけの状態だ。だからいくら怪我を負おうが実体には影響はない。尤も――」

そこでマクダウエルはとびきりの笑みを見せた。

「私は元より不死だがな」

そしてさらに続ける。

「今の私は最強の状態、文字通りの不死だ。だから遠慮はいらん。お前も本当の姿を見せてみる。安心しろ、お前の代償もこの空間では無効だ」

マクダウエルはまるで子供が無邪気に歌うように言葉を紡ぐ。

それは聴いていて心地よさを感じるものだったが、俺は引っ掛かる言葉を聞き逃さなかった。

「本当の姿……何故……」

それを？、と言いきる前にマクダウエルは疑問を承知したように上機嫌で答えた。

「その顔は私が気づかないとでも思っていたようだな。お前……いや、量子存在とやらは隠しているんだろう？ 本当の力を」

そうか……

マクダウエルは俺の過去を見ていたな。

「確かに切り札は隠しておいてこそそのものかもしれんがな。私の前では全てを見せてせてもらおうぞ」

「∴その選択に後悔はないな？」

「フッ、今さら何を後悔する？」

「そうだな…」

未だに見せていない切り札。

確かにそれは存在する。

いや、今まで見せたものは全てその片鱗だったと言える。

―ディヴァインの完全解放―

それが意味するのは本来の姿に戻るということ。

量子存在という

確率的で

実体がなく

曖昧で

不確かな

存在しない存在に。

「了解した。正真正銘、これが俺の持っている最後で最大のカードだ」

俺は人ではない。

ましてや存在ですらない。

単なる確率の分布だ。

観測されなければ実体化もままならない。

だが

そんな俺でも思いがある。

意識がある。

ここに在ると思う自分がある。

そして

「ディヴァイン完全解放」

――俺は俺なんだ――

「ディヴァイン完全解放」

その声を聞くまで私は浮かれていたのかもしれない。

アイツと私の世界、ここにいるのは私とアイツだけ。

「これは…何だ…？」

だが、私は思い知らされた。

アイツの言っていたことの意味を。

私は自分が化け物であることなどとつくに自覚している。

不老不死の存在など化け物以外の何者でもないさ。

なのに…

今日の前に広がる光景はそんな私が久しく感じていなかった感情さ
えも呼び起こした。

それは生命の持つ根源的感情…

恐怖。

これがイオの姿なのか…

私にはわからん…

あえて言葉で表すならば光そのものだ。

イオの体が青い光の塊になっている。

莫大な魔力が人型に集まっているようにしか見えない…

何なんだこれは…？

「これが量子存在たる俺の姿だ」

口が見当たらないのに声が聞こえた。

まるで頭の中に直接話しかけられているようだ…

それに

これはイオの声ではない。

いや…

イオであるのは確かだが、何人ものイオが同時に話しているような…そんな感じだ。

「君が見ているのは量子の確率的分布だ。わかるか？本質的に俺はただの分布なんだ」

確率的分布：

この人型に集まった魔力のことか…？

「この人型分布でさえ君が観測している結果だ。誰にも観測されていなければ俺は存在し得ない」

コイツ：

どうしてこうも自分を軽視できるんだ！

分布だと？

存在し得ないだと？

「ふざけるな！！」

怒鳴った私自身、らしくもないとはわかっているさ。

だがな…

私はコイツに言わなきゃならんことがあるんだ。

「確率？分布？それがどうした！！量子存在だかなんだか知らんがお前をお前と思っている存在はお前しかないんだ！！」

イオ、お前は確かにここにいる。

私が保証してやる。

だから…

「だから！もう存在しないなんて二度と言うな！！」

もう一度言ってみろ。その口、永久に開かなくしてやるぞ？

「……………そうか」

アイツはどう受け取ったんだろうな。

その短い一言を発したただけだった。

だが、私にはわかった。

私の言葉はちゃんと届いているとな。

「俺は存在している。今ここにいる。俺はここにいるんだ…」

その眩きと同時だった。

今まで人型の光だったイオの姿に変化が起きた。

まるで霧が晴れるように分散していた光の粒子が集まりだした。

「ようやく気付いたか…この大バカ者」

私は思わず笑みを浮かべてしまった。

何故なら、その後のアイツがどんな姿になっているかなど容易に想像できたからな。

「俺は自分自身を観測するのを忘れていたようだ。だが、もう二度と忘れない」

その声はいつものイオと変わらず

その姿もいつものイオに戻っていた。

「ああ。私が保証するさ」

フツ。

またらしくもないことを言っているな。

が、悪い気はしない。

「さぁ続きだイオ！！」

私はみなぎる魔力を惜し気もなく注ぎ込む。

数えるのも馬鹿らしい数の氷塊が一斉にイオへ向かう。

当然、イオは回避するはずだと思っていた。

たがアイツは指の一本も動かさなかった。

まるで避ける気がないように立ち尽くしている。

いや、ここは空中だから静止していると言った方がいいか？

とにかく、アイツは動かなかった。

そうなれば当然氷塊が直撃する。

爆音と氷の破片が飛び散る。

「何だ？」

転移もしなかった上にあの情報障壁とやらも使った様子がない。

どうやら本当に直撃したらしい。

何のつもりだ？

「……………っ？」

私はそんな疑惑を持って爆発地点に視線を送った。

そして思わず驚きを露にしまった。

「無傷だど？」

そこには確かにイオがいた。

変わらず無機質な表情のアイツが。

そう、問題なのはいつものイオと全く変わらないということだ。

今の直撃だけではなく先ほどまでの傷が全部消えていた。

「今の状態は本来ならば世界抵抗によって数分しか展開できないが、この世界にはその抵抗がない。つまりは常に完全解放状態でいられる。そしてそれが意味するのは――」

私の疑問を感じ取ってか、イオは説明するように口を開いた。

「今の俺は何をしても絶対に傷を負わないということだ」

傷を負わない？

不死と言いたいのか？

私が混乱しているのがわかったんだろう。

イオはさらに説明を続けた。

「量子というのは本質的に確率の重ね合わせ状態で存在する。今の俺がそうだ。例えば、先程の攻撃が直撃した俺と直撃しなかった俺。どちらの可能性も重ね合わせて存在する」

「重ね合わせだと？」

「そしてその可能性は俺が観測することによって確定する。ならば、俺が”直撃した可能性”を否定し、”直撃しなかった可能性”を常に観測し続けたらどうなると予想する？」

それはつまり

直撃した事実を否定し…

直撃しなかった事実を選択し続ける…ということか…

おい…

それはつまり…

「まさか…っ!？」

「そう。俺にはいかなる物理攻撃も通用しない。何故なら観測によ

って負傷した事実を否定するからだ」

ハッ…

ハハハハハッ！

何処まで無茶苦茶なんだお前はっ！

つまりは、お前に攻撃を当てたところでその事実は否定され全て無かったことにされるわけだ！

それでは不死どころか無敵ではないかつ！

ククク…

愉快だ！

お前は私を何処までも楽しませてくれるな！

「観測による事実の否定、状態の維持。これが量子存在の持つ最大の切り札、量子ゼノン効果だ」

なるほどな。

量子ゼノン効果。

本来の力を解放すれば使える最強の切り札ということか。

攻撃が効かない…いや、その事実自体が否定される。

フッ。

何だその反則能力は？

文字通りバグではないか…

ククク。

面白い。

面白いぞイオ！

私の力が霞むほどとはなっ！

「そうではなくてはな！この私が本気をぶつける相手は務まらん！！」

さあいくぞイオ！！

私はこの興奮を抑えられそうにない。

最強の私が本気を出せる機会なんて早々ないからな。

最強と無敵。

クククッ！

決着は永久に来そうにないなっ！

「エクスキューションーソード！！」

私は気が狂う量の魔力を右手に集約させ断罪の剣を具現化させる。

触れた物質を強制的に気化させる光の剣。

間を開けず私はイオへ肉薄し――

「これならどうだっ？」

アイツに向かって容赦なく振り切る。

不思議なことにアイツの腕を切断した感触は確かにあった。

私は思わずアイツに視線を向けた。

「なるほどな」

そして可能性の重ね合わせとやらを理解した。

私の目にはイオが2人にダブって見えた。

片方は確かに腕を切断されている。

それでもう一方は完全に無傷。

どちらのイオも半透明で実体が確定していないのがよくわかった。

しかし、それも一瞬だった。

瞬く間も無く片方のイオが無へ溶けていくように消え、それに反比例するようにもう一方のイオが実体化した。

「それが量子ゼノン効果とかいうやつか…面白いつ！」

私は更にイオへ切り掛かろうと腕を振りかざした。

それが意味のないことだなんてわかっているさ。

私がどれだけ攻撃しようが、それは無かったことにされる。

それでも私は止める気はない。

ここは私とアイツの舞台だ。

私が止めてどうするっ！

「一つ言うが、ディヴァインを忘れない方がいい」

「何？」

イオの忠告を珍しがっている暇は無かった。

これで何度目かわからないが、私は自分の目を見開いた。

「これは……」

イオの背後に見えたのはあの純白の剣。

それはいい。

何度も見ているから驚くことはない。

問題なのはそのサイズだ。

今までとは明らかに違う。

比べるまでもない。

なんせ、私の視界に収まり切らないのだからな…

ビル1つ分は軽く越えている。

その数は一本でありながら、何百…いや、何千という剣がそこに有るかのような威圧感を放っている。

「全く…お前は何処までも馬鹿げてるな」

それは最早剣と言うよりも巨大構造物と言った方がしっくりくる。

もう笑いしか込み上げてこない。

コイツは本当に出鱈目だな。

「君もね」

珍しいことにイオが皮肉を言ったが、私には気に止めている余裕は無かった。

何故なら、その言葉と同時に馬鹿げたサイズの大剣が目にも止まらない速度で振り下ろされたんだからな。

いや、巨大な白い塊が落ちて来たと表現した方がいいかもしれん。

クククッ！

「甘いなイオ。まだその程度の攻撃では私は倒せんぞ？」

「了解している。これは序章だ」

ほお。

これでまだ序章か：

楽しませてくれるっ！

「そうか！なら全力を見せてみろっ！！」

私はそう言い放ち、イオの馬鹿げたサイズの剣を片手で受け止めた。

そして魔力を爆縮させ一気に砕いた。

ふむ、青い空に白い巨塊がバラバラに砕け散る光景は中々に見応えがあるな。

真祖の力を取り戻した今の私にはこの程度どうということはない。

だがその瞬間だった。

一切の前触れもなく、私の目の前に再び大剣が出現した。

壊したはずの大剣が。

「くっ！？」

私はそれを文字通り間一髪で避けた。

大剣はこれまた馬鹿げた速度で背後へと飛び去っていった。

正直、胆が冷えたぞ：

だが、アイツはそれで終わらなかった。

「何っ!？」

気づけばまた別の大剣が目の前に存在していた。

私の驚く顔を見てか、アイツは口を開いた。

「君は今疑問に思っていると予想する。何故、消えた剣が何度も甦るのか、と」

悔しいが、アイツの言う通りの疑問を私は抱いていた。

「ああ。それも例の効果なのか？」

その問いかけをした時、気のせいかイオが笑った気がした。

「それに対する答えは”違う”、だ。量子ゼノン効果は俺の体の状態にのみ適応される。そのディヴァインは単に別世界から引き出しただけだ」

おいおい。

今さらっとすごいこと言ったなコイツ：

「正確には、それは30秒前の近似過去から抽出した」

「そうか。お前の滅茶苦茶な能力は散々見せられたからその程度では今さら驚かんな」

「ならばこうする。これは3分後からの攻撃だ」

イオがそう言った瞬間、今度は私の頭上からあの大剣が降って来た。
それも数十本だ。

「未来からの攻撃か。フツ…面白いつ!!」

私は握りこぶしに更に力を加えた。

そして全身に魔力を纏う。

「ならば私も全力を見せてやろう!!」

楽しい。

私は率直にそう感じた。

真祖の吸血鬼たるこの私が全力で戦えるのだ。

私は久々の感情を味わいながら笑みを隠すことなく見せる。

さあ、もつと楽しませてくれイオ!!

第76話「最後に見た背中」

「…そろそろ頃合いのようですね」

この世界線の崩壊…

それを止めるには彼女の術式を止めるしかありません。

今さらゲートを閉じるのは不可能ですからね。

全く面倒です…

いずれは消去することになるというのに。

二度手間ですね。

ですが、この世界線ごと彼が消滅してしまうと色々都合の悪いことになりますから…仕方ないですね。

彼の情報場さえ摘出してしまえばこんな世界線に用はないというのに…

全く…

エゼくん、貴方が私の思った通りに動いてくれさえしていればこんな面倒なことにはならなかったというものを：

「さて、愚痴はこれぐらいにしておきましょう」

アンディメとアイも行動を始めたようですからね。

「では私も動くとしましょう」

待っていて下さいね。

今から本当の”絶望”というものをお届けして差し上げますから。

『91.25.04』

「ハア…なんとかなったようでごさるな…」

どうやら真名を振り切ったようでごさるな。

とりあえず人気の多い場所まで来れたでござる。

「あ、あのう……」

ん？

「どうしたでござるか、のどか殿？」

「えっと…その…お、降ろしてください…」

おっと。

そう言えばのどか殿をお姫様抱っこしたままでござったな。

のどか殿は恥ずかしそうに顔を赤くしているでござる。

「これは失礼したでござる」

拙者はのどか殿を地面にゆっくりと降ろし、再び思案に埋没した。

真名から逃げられたのは単に運が良かっただけ。

のどか殿のアーティファクト、そして森という条件が無ければ真名を出し抜くことなど不可能でござった。

そして再び見つければ今度こそ真名に捕まる…

同じ手を通じる相手では無いでござる。

一体どうすれば良いでござるか…？

「あ、あの…」

拙者が考えを巡らせているのを不思議に思っただ、のどか殿がためらい気味に声を掛けてきた。

「ん？何でござるか？遠慮しないで拙者に何でも聞くでござるよ」

「その…ネギ先生や皆さんは…」

何処にいるのか？、でござるな…

「拙者も正確な場所は知らないでござる。ただ、真名たちに捕らえられているのは確かでござる」

「やっぱり…そうだったんですね…」

うむ。

しかし困ったでござる。

腕の立つ者は皆捕まってしまったようでござるからな…

「その…だったら…ネギ先生たちが居る場所を知っている人に聞けば…」

聞いても答えるはずが無いでござ…っ！

「成る程！そのアーティファクトを使えば居場所がわかるでござるな！」

「は、はい」

それは名案でござるが…

居場所を知っていると思われるのは…

真名とカリスト先生…

それに超も知っているはずでござるな。

後は…

ガニメデ殿とイオ殿でござるか。

これは…

全員強者でござるな…

この中の誰かと接触しなくてはならぬ訳でござるか…

「……………」

すると誰が適当か…

まず真名は論外でござる。

ガニメデ殿も避けたいでござるな…

正直、負傷していなくても勝てる気がしないでござる…

超はそもそも何処に居るかわからない…

となればカリスト先生かイオ殿が妥当と言えるでござるな。

その二人も充分リスクを伴う相手でござるが…

「のどか殿、今から舞台に戻るでござるよ」

その二人のどちらかならば…

カリスト先生でござるな。

「カリスト先生を見つけるでござる」

これは勘でござるが、カリスト先生は生徒を傷つけないはずでござる。

前に手合わせした時にそれはわかったでござる。

先生は根本的に他人を傷つけるような人ではない。

拙者の目が曇っていないのならそれは確かでござる。

「行くでござるよのどか殿！」

「あ…っは、はい！」

のどか殿の返事を聞いた拙者が歩みを進めようとした時――

「あっ！！ようやく見つけやしたぜ！！」

背後から聞いたことのある声が届いたでござる。

「？」

振り向くと――

「ん？誰もいない…でござるか？」

拙者の空耳か、背後には誰も見当たらないでござる。

「おい！！こっちだよ姉さん！！」

む？

また声が…

「下だって下!!」

下でござるか？

拙者は言われた通りに視線を下げたでござる。

するとそこには

「おおっこれは！カモ殿!？」

白いオコジヨ、カモ殿が小さな体を必死に動かしている姿があったでござる。

「無事だったみてえだな楓姉さん！それにのどか嬢ちゃん！」

「あ、はい！」

「カモ殿も無事で何よりでござった。てっきりネギ坊主と一緒に捕らえられたものと…」

「ああ。兄貴に言われてたんだ。戦いの間は離れててくれ、もしカリストの旦那に負けた時はカシオペアを持って逃げろ、ってな」

「カシオペアとは？」

「それはこれでさあ」

そう言うとは何処に隠していたのか、カモ殿は懐中時計に見えるものを取り出したでござる。

「兄貴が言ってたんでさ。これが超たちに対抗できる唯一の手段ってね」

カモ殿はそう言い切ったでござる。

体型に似合わないニヒルな笑みを浮かべながら。

「ガニメデ、大丈夫か？」

私は医療室のベッドで眠るガニメデに声を掛けた。

少し間を置いてガニメデのダルそうな声が届いた。

「んあゝ？ カリスト…か？」

「すまない。起こしてしまったな」

「別にいいぜ…」

ガニメデはまだ開き切っていない目を私に向けた。

思ったより体調が安定しているようで安心した。

ガニメデが完全解放したのはわかっている。

全く…

どれだけ無茶をすれば気が済むんだか。

もう既に存在確率の発散が始まってしまったというのに…

本当に消えてしまうぞ…

「なあカリスト…」

複雑な心境で立ち尽くす私に向けてガニメデが口を開いた。

「どうした？」

「いや…ちょっと思ったことがあってな…」

コイツが考え事か。

珍しいこともあるものだ。

私は黙って耳を傾ける。

「俺たちはよ…確率なんだよな…？」

「…そうだ」

「だったら…その確率が発散して消えちゃった後はどうなのかと

思ってたな…。俺は……本当にここにいるのかねえ……？ いるんだったら……消えたくねえ……。だけどよ……消滅は避けらんねえ……。だって俺はこの世界線で消えたいね。この……穏やかで……奪い合う必死がない……まだ空が青い世界でな。ふとそんなことを思っただよ……」

……………。

「ガニメデ……お前……」

「ハッ！……らしくねえ。らしくねえな！」

私の思い悩む表情を読み取ったのか、ガニメデは急に口調を変えた。そして何時もの人を馬鹿にしたような、しかしそれでいて憎めないような、そんな陽気な態度に戻った。

「今のはジョークだったの！ そんなマジに受け止めんなって」

「……ああ。わかった」

私も…自分が消滅することを忘れているわけではない。

許されるのは死ではなく消滅。

それが量子存在の定めだ。

正直なことを言うならば、私だって消えたくはない。

消えるのは怖くない、と言えば嘘になる。

しかし…それでいいんだ。

これは罰なのだ。

あの時、彼女を見捨てた私への罰だ。

ガニメデはそんな私の思いを理解したのか、絶妙のタイミングでため息混じりの声を出した。

「んな暗い顔すんなって。それよりイオはどうした？ここにはいねえみてえだが」

私の意識は重い思考の海から現実へと戻った。

フツ…これはガニメデに感謝するべきかもしれないな。

「今舞台上で戦っている。私が気づいた時には既に試合が始まっていた」

アイツも無茶をするようになったものだ。

「マジかよ…休んどけつつったのによ…」

「相手がマクダウエルのようなからな。イオにも何か思うところがあるのだろう」

「…なるほどな。で、俺たちはどうするよ?」

「学園の教師がこちらに接近してきている。私は彼らの相手をしてくる」

「んじゃ俺も行…」

「駄目だ。お前はここで休んでいろ。まだ回復していないのはわかってる」

「チッ…わかったよ」

ガニメデは渋々ながらも了承したようだ。

それを見た私はガニメデに背を向けてドアへと向かう。

そしてドアから半歩踏み出したその瞬間だった。

「っ!？」

私は突如として得体の知れない不安感に苛まれた。

胸の中が深い沼に沈むような気味の悪い感覚…

私であって私でない者が私の中に居るような…強烈な違和感…

それは形容しがたい漠然としたものだったが、あえて言葉にするなら

—これがガニメデとの最期の別れとなるような—

そんなゾツとする感覚だった…

私は思わず冷や汗を流したが、ガニメデには悟られないように平静を装おった。

—気のせいだ—

—そんなことはあり得ない—

私はそう自分に言い聞かせた。

「気をつけろよ」

私の耳にガニメデの声が届いた。

そして最期に聞いたのはその短い言葉だった。

「ああ」

私は振り向かずに部屋を後にした。

もう二度と会うことはない仲間を残して。

私は混乱しているのかもしれない。

先ほどから、思考プロセスに予期しないエラーばかり生じています。

ちょうどカリストさんに頭を撫でられた時からでしょうか…

何故かカリストさんの画像データばかりが急に開かれます…

それに…

カリストさんのことを思考プロセスに入れると…

「っ！？またエラーが！」

予期しないエラーが次々に…

これはどういうことなのでしょう？

気づけばカリストさんを探しています…

「私は何を…」

私がそんな一人言を呟いた時でした。

「どうかしたのか？」

正面にカリストさんがいました。

「っ！！カ、カリストさん！？」

何故カリストさんがここに！？

「いえ理論的に考えてここは通路なのでですからカリストさんと鉢合わせになるのも当然です。しかし問題なのは何故カリストさんがこんな近くに来るまで気づかなかったのかということでありそれはすなわち私の感知センサーに何らかの障害が発生したことを意味していることになりましたが、私はそのようなエラーは測定していません。しかしそれはむしろ私の測定機能に問題があるということになりそれは余計に危惧すべきエラーとも言えるわけですがそれは私が測定していないのでそもそもエラーと分類することもできないのかもしれないませんがエラーということに違いはなくともすれば現在の私はエラーをエラーと認識できていないことになりそれはすなわち思考プログラムのカーネルに何らかの障害が発生したことになります。がそもそも思考プロセスにエラーがあれば私はその思考さえも認識する

ことはできないはずでありそれはつまり…」

「おいおいおい!! しっかりしろ茶々丸!! 大丈夫か!?!」

私の思考はループしていたようです…

気づけばカリストさんが目の前で心配そうにこちらを見つめ…

目の前……

「!?! だ、大丈夫です! 私の思考は絶賛通常運転中です!!」

「いやいやいや! 言ってることおかしいからな!?! 全く大丈夫には見えないぞ!?!」

そう言うとかリストさんは私に近づき、両手で私の肩を掴みました。

そして真剣な目で私を見つめています…

「っ！！！！」

カリストさんがすごく…近くに…

「本当に大丈夫か？超を呼んで来るか？」

「い、いえ！その必要はありません！」

「そうか？本当に大丈夫なのか？」

「え、あ、はい！何処にも故障はありません」

「本当だな？」

「は、はい…」

「そうか…ならば良かった」

カリストさんは安心したようにため息をつくど、私に向かって優しい笑顔を見せました。

それはとても温かい笑顔でした。

私は半ば自動的にその画像を撮影してお気に入りフォルダに追加していました。

この感覚は何でしょうか…

とても不思議な感じがします。

息が詰まるような…しかしそれでいて心地よい感覚…と言えбайいのでしょうか…

「その…カリストさん」

私はいつの間にか音声を発していました。

「ん？どうした？」

「その…私を心配してくださったのですか？」

私は何を聞いているのでしょうか！？

自分で聞いておきながら自分の思考プロセスが理解できません！

で、ですが言葉にしてしまったことは取り消せません。

私はカリストさんの様子を恐る恐る確認しました。

カリストさんは不思議なものを見たような表情でキョトンとしています。

ひょっとして私は変なことを聞いてしまったのでしょうか？

それとも…

カリストさんは私のことなど心配していなかったのでしょうか……

私がそんな思考に陥って不安を抱いた時でした。

カリストさんがさも当然のこのように言いました。

「心配するに決まっているさ。当たり前のことじゃないか」

「っ!!」

その言葉を聞いた時、私はまた不思議な感覚になりました。

これが嬉しい…ということなのでしょう…

嬉しい…

「カリストさん…」

「ん？」

「ありがとうございます…」

気づけば感謝の言葉を発していました。

「いや、別に感謝されるようなことはしてないが…」

カリストさんは何処か戸惑ったように頭を掻きました。

私はそんな姿をじっと見つめていました。

すると

「おっと、こうしている場合ではなかった」

カリストさんは何かを思い出したようでした。

「どうかなさいましたか？」

「学園の残党がこちらに接近してきている」

「そうでしたか…」

「私が相手をしてくる。茶々丸はここで待機していてくれ。今ここには超も居ない上にガニメデは戦えない。イオも上で試合中だ」

「了解しました」

「頼んだぞ」

その言葉を残して、カリストさんは私とすれ違うようにして歩き出しました。

「っ?」

気のせいでしょうか…

今、すれ違う時に一瞬だけカリストさんの表情が歪みました。

何かを恐れているような表情でした…

私は咄嗟に振り返りました。

「あの！」

カリストさんの背中が止まります。

「何だ？」

しかしカリストさんは振り向きませんでした。

背中を向けたまま短い声を発しました。

「いえ、その…カリストさんが何か不安そうな顔をしていたように見えたので…」

その言葉を聞いてもカリストさんは無言でした。

そしてしばらく間をおいてからこう言いました。

「……気のせいだ」

何でしょうか…

カリストさんの背中が薄れて見えます…

このまま行かせてしまうともう二度と会えないような…

消えてしまいそうな…

「そうでしたか…」

ですが、私は直ぐにその思いを振り払います。

カリストさんは大丈夫です。

そう、信じています。

いえ…

そう信じたい…のかもしれませんが…

私の意識とは正反対に不安感は更に大きなものへと膨れ上がります。

もし、これが最期の会話だったら…

もし、ここで止めなければ…

もし、カリストさんが消えてしまったら…

—私はここでカリストさんを引き止めなくてはならない—

そんな強い衝動…いえ…義務感が突如として沸き起こりました。

まるで別の自分がそう叫んでいるような…

そして私はその思いを声にしようと口を開きかけました。

「あっ…」

しかし、その声はカリストさんによってかき消されてしまいました。

「では失礼する。後は頼んだ」

その言葉を最期に、カリストさんはその場から去って行きました。

その瞬間――

私は、何かとてつもなく大きな過ちを犯したことに気がきました。

――これで分岐の選択肢は消えた――

― 未来 ― は確定した―

何処からか…そんな言葉が聞こえました…

第77話「最後の分岐地点」

「ガ、ガンドルフィーニさん!! もう少しスピードを落としてくだ
さいっ! 追い付けませんよ!」

「何を言っている瀬流彦君! 急がなければ手遅れになるっ!」

一刻も早く超鈴音を止めなければ!

彼女は危険だ!

「落ちて着けガンドルフィーニ。相手の居場所はわかっているんだ」

なっ?

「神多羅木まで何を呑気なことを!?!」

「お、落ち着いてください。ガンドルフィーニさん」

「式集院君！？君までそんなことを言うのか！？明石教授から話は聞いただろう！」

そんな悠長なことを言っている場合ではないというものをっ！

超鈴音：

そしてカリスト、ガニメデ、イオ：

彼らは敵だ！

この学園に被害をもたらす敵なのだぞ！？

一刻も早く排除しなくてはならない！

「神多羅木さんたちの言う通りですわ、ガンドルフィーニさん。視界を狭めて目的を見失っては元も子もないですわよ。少し頭を冷やしましょう」

「くっ…」

そうだな…

私の悪いクセだ。

つい熱くなってしまう…

「すまない…葛葉先生の言う通りだ…」

「わかってくださればいいんです。なにせ、私たち五人は学園長に無断で行動しているのですから、慎重さが必要ですわ」

「そうだな…」

学園長には申し訳ないが、私はこれ以上指をくわえて見ているわけにはいかない。

彼らを止めなくてはならない。

そのために行動したのだ。

この学園を、生徒を守る。

それが我々教師の責務なのだから。

それにも関わらず、カリストという教師はあろうことか生徒を危険に晒している。

これは許されないことだ。

私が止めてみせる。

あのイオという少年は言っていた。

譲れない信念がある、と。

なるほど。

これが君たちの信念というわけか。

ならば我々の信念はぶつかり合う運命のようだな。

生徒へふりかかる危険は教師であるこの私が全て排除する。

誰であろうと。

「では改めて向かうでしょう」

そう言って我々が再び歩み出そうとした時だった。

「ガンドルフィーニ先生っ！あそこに！！」

「ん？」

私は瀬流彦君の指差した方向へと目を向けた。

それは我々の目の前に立つレンガ色の建物。

私の目はその一番上の屋根に人影を捉えた。

本来ならばあり得ない場所に白服の男が立っていた。

風に靡くオレンジ色の髪。

そして同色の鋭い瞳がこちらを貫くように捉えていた。

その姿を視界に入れた瞬間、私の体は一気に力んだ。

「カリスト…先生…」

葛葉先生の眩きと同時に、五人が揃って構えの姿勢を見せた。

「…そちらから現れるとはな」

私は相手に負けない程に鋭い視線を返した。

しかし、彼は一切の動揺を見せなかった。

変わらず凍るような目を我々に向けている。

「これは奇遇ですね。私に何か用ですか？」

彼は屋根の上から文字通り我々を見下しながら言葉を発した。

「惚けないでもらいたい。君たちのやったことは明石教師から全て聞いている」

「なるほど。そうでしたか」

我々五人の敵意の籠った視線を受けても彼は口調を変えなかった。

そればかりか開き直ったように微笑を見せた。

それを見た私に再び激しい怒りが込み上がる。

「何を笑っている！君は自分のやっていることがわかっているのか！」

「わかっていますよ。あなた方”魔法使い”の方こそわかっているのですか？自分たちのやっている暴挙を」

「何だと…？」

暴拳というのは彼が今正にやろうとしていることだ。

それにも関わらず我々に矛先を向けるか…

なんという男だ…

「魔法の隠匿をそこまで必死に行う必要が何処にあるのですか？」

「力は誤った使い方をすれば大きな災いを招く。君はそんなこともわからないのか！？」

私は思わず声を荒げる。

が、彼はどこ吹く風といった様子で冷笑を見せた。

「では、あなた方はその力とやらを正しく使っているのですか？ 私には到底そうは見えませんが」

「何が言いたい？」

「つまるところ、あなた方は魔法を自分たちの都合の良いようにしか使っていないのですよ。私の見たところ、他人を傷付ける魔法ばかりです」

「危険を排除するためには力が必要だ！それによって多くの人を助けることになる！」

「では聞きますが、その”危険”とやらは誰が決めるのですか？それはあなた方、魔法使いです。つまり、あなた方は自分たちにとって都合の悪いものを一方的に排除しているだけなんですよ」

「それは詭弁だ。我々は利己的に力を行使しているわけではない」

「おや、そうでしたか。ではお聞きしますが、あなた方はなぜ病院で苦しむ一般の方を魔法で治癒しようと考えないのですか？自分たちには治癒魔法を使っているのになぜ？」

「それは……」

私は思わず回答に窮してしまった。

が、彼はそんな私に考える時間も与えないように続けた。

「魔法を一般に普及させれば多くの人を救えるというのに、あなたはそれを許さない」

「それは魔法を公開すれば更に大勢の人々が危険に晒されることになるからだ！魔法は正しい知識のある者が使わねばならないのだ！」

思わず熱が入る私の主張に対し、彼が返したのはたった一言だった。

「…話になりませんね」

彼はつまらない芝居を観ているかのような表情で吐き捨てた。

その一言で私の怒りは一気にはね上がった。

「何だと…」

「結局、あなた方は力のある側からしか見ていない。弱い側の気持ちなど理解できない…いや…理解する気もないのでしょね。常に苦しむのは弱い側です。巻き込まれた者の気持ちなど考えずに」

その瞬間、彼の凍ったような瞳が更に鋭さを増した。

その目には莫大な憎悪の感情が蠢いていた。

情けなくも私は怒りよりも恐怖を感じてしまった。

何があつたらこんな目になるのか私にはわからなかった。

「ガンドルフィーニ、耳を貸すな」

私の思考を邪魔するように神多羅木が口を挟んだ。

「これは奴の策だ。こちらの冷静さを失わせようとしている」

「ああ…わかっている」

最早話をして和解できるなどとは思っていない。

我々はもう引き返せないところまで来ている。

対立しない理由がどこにも見当たらない。

真逆の主義主張、そして衝突する信念。

その仲介など不可能であることは人類の歴史からも明らかだ。

そう、それが導くのはたった一つの帰決。

すなわち力の行使。

もう戦いでしか決着はつけられない。

私は覚悟を決め何時でも戦える体勢を見せる。

それを見た彼は鼻で笑った。

「私と戦うつもりですか？構いませんが、あなた方では私の相手になりませんよ」

「それはこちらの台詞だ」

「いいでしょう。あなた方にはこの世界から退場して頂きます」

その一言で全員に緊張が走った。

戦いの前の一瞬。

互いにどちらが先手を切るか読み合うその瞬間だった。

—おやおや。幻影を削除しに来てみれば邪魔者がこんなに—

突如、上空から第三者の声が響いた。

我々は視線を一斉に上へ向ける。

そこには、黒い服に身を包んだ男が浮いていた。

その顔は不気味に笑う白い仮面で覆われていた――

「やれやれ…これでは何時まで経っても決着がつかんな」

言葉とは裏腹にマクダウエルは楽しそうな表情で笑った。

それと同時に、つい先ほどディヴァインで切断した彼女の腕が再生した。

「同意する」

こちらもマクダウエルに斬られた足を量子ゼノン効果で復元——正確には斬られた事実を否定——した。

少し前からこの光景を何度も繰り返している。

マクダウエルが受けた傷は直ぐに回復し、俺の受けた傷はその事実が否定される。

結局互いに無傷のままだ。

これでは永久に終わりが見えない。

唯一考えられる手段は、マクダウエルの回復速度を越える攻撃を彼女に浴びせ続けることだ。

そうすれば決着はつく。

しかし、俺はそれをしようとは思わない。

たとえこの空間で与えた傷が幻だとしてもマクダウエルが苦しむ姿は見たくない。

「フフ。さてどうする？このまま終演の来ないダンスを永久に踊り続けるか？私はそれでも一向に構わんがな」

マクダウエルは少し赤らめた顔で笑みを見せた。

こういうのを蠱惑的、というのだろうか？

「……………」

しかし、その提案に同意することはできない。

俺にはまだやらなければならないことがある。

その結論を得た時、俺の表情を読んだようにマクダウエルが口を開いた。

「それは困る、という顔だな。フフフ…まあお前次第ではこの世界

を終わりにしてやらんこともないぞ」

マクダウエルはこの上なく上機嫌そうだ。

「ならばそうしてもらいたい」

心地良い世界ではあるが、何時までもこうしているわけにはいいかな。

「いいだろう。ただし条件がある。忘れていないかイオ？ 私は悪い魔法使いなんだぞ。ククク」

何故かマクダウエルの機嫌は最高潮のようだ。

「了解した。条件は何だ？」

しかしそう問い掛けた途端、マクダウエルは突然うつむいた。

「……？」

何だ？

顔が赤いみたいだが。

俺は何か問題な発言をしたか？

「どうかしたのか？」

俺が尋ねるとマクダウエルの小さな体がビクッと震えた。

一体何なのだ？

突然様子が変わった理由が不明だ。

「あ、いや…べ、べ、別になんでもないっ！」

今度は急に慌て出したみたいだ。

本当に何だ？

今の状況を一言で表すなら。

――訳がわからない――

だ。

「では改めて聞くが条件は何だ？」

俺は挙動不審なマクダウエルに向かって再び尋ねる。

「な……で……ん……れ……」

ん？

何か言っただけみたいだが……

声が小さすぎて聞き取れない。

「すまない。もう一度発言を要求する」

そう言うときマクダウエルはうつむいたまま小さな口を更に小さく動かした。

「な……で………くれ………」

また聞き取れなかった。

「音量が小さいために聞き取るのが困難だ。はっきり言ってくれ」

「だ、だからっ！なまえで呼んでくれと言っているのではないかつ！」

今度は聞き取れた。

というよりも叫びに近いために耳が痛い。

しかし一番混乱したのはその発言の意味だった。

「……………」

名前？

「それならば既にマクダウエルと呼称しているはずだが」

「ち、違うバカ者！！ファーストネームで呼べと言っているのだ！
いき、貴様はいつもマクダウエルとしか呼んでくれないではないか
っ！！だ、だから…そ、その…特別に、エ、エヴァと呼ばせてやる
と言っているのだ感謝しろっ！！」

マクダウエルはそう叫ぶと再びうつむいてしまった。

「……………」

ようやく条件の内容は理解した。

が、何だか要領を得ない。

マクダウエルでもエヴァでも名称であることに変わりはないと予想するが。

何か違うのだろうか？

まあそれでいいならこちらも構わないが…

「了解した。エヴァ」

「むぐっ!?!」

何だ？

今マクダウエル…いや、エヴァが凄まじい反応を示したが。

「は、ハハハハっ！そ、そうだ！それだ！お前もちゃんと言えるではないかっ！！ハハハハ！今度から私のことはその名で呼び続けるよっ！！いい、いいな！？」

良くわからないが再び機嫌が最高潮に達したようだ。

意味はわからないがエヴァが嬉しそうならそれで良い。

「了解した」

エヴァの花が咲いたような笑顔を見ると、俺の表情も自然と緩んだ。

もしかしたら…この時の俺は笑っていたのかもしれない。

突然だが、世界ってのは可能性の重ね合わせだ。

その瞬間、俺が何を選択するかで俺の存在する世界が決まる。

だからよ、世界線が分岐するタイミングってやつは案外身近なところでゴロゴロ転がってやがるのかもしれないな。

だから注意しとかなきゃならねえわけだ。

重大なタイミングを見逃さねえように、な。

もし、あの時こうしていれば…

なんてことにならねえようにな…

「カリストには留守番頼まれちゃったが、さて…どうすっかな…」

俺は医療室の簡易ベッドから上半身を起こした。

「チツ…まだ動けねえか」

だが、直ぐに体勢を戻した。

完全解放の反動でまだ体が上手く動かねえ。

仕方ねえ。

やっぱ寝てるしかねえみたいだぜ。

そしてもう一度仮眠を取ろうとした瞬間だった。

「あ？」

突然奇怪な音が響きやがった。

壊れかけのラジオから流れるノイズみてえな音だ。

どっから聞こえてんだこれ？

俺は睡眠を妨害されたイライラを抑えて音源を探した。

「ん？まさか…」

そしておもむろに上着の中の量子端末を取り出す。

「やっぱりジュピターか」

予想通りノイズの発生源はジュピターだった。

手の中に収まった銀色の端末はとち狂ったみてえに変な音を出して

やがる。

試しに起動してみたが立体ディスプレイも砂嵐みてえなノイズしか表示しねえときたもんだ。

「おいおい。壊れちゃったのか？」

そこまで荒く使っちゃいねえつもりだが…

マジで壊れたか？

いや、仮に壊れてたら疑似観測が無効になって俺の存在確率はとつくに発散しちまつてるはずだ。

となると誤作動か？

「勘弁してくれよな…」

とりあえず色々操作してみたがやはり反応しねえ。

ノイズを流してるだけだ。

そして試しに通信系を起動した時だった。

” 通告、Z P F 通信を確認”

今までノイズしか発してなかった端末が急に通知してきやがった。

「通信が来てるだど？」

とりあえず俺は発信元を確認した。

そして目を疑うことになった。

何故ならディスプレイにはこう表示されていたからだ。

「通信プロトコル」

通信形式…Z P F

通信座標…近似世界線（誤差±5. 4 5 9 2）

通信端末…ジュピター端末N O. 3

通信個体…ガニメデ

「何だよ…これ…」

正直、俺は不気味に感じた。

「自分から通信が来ている…?」

ついに壊れたとしか思えない。

発信元が俺だと?

そんなはずはねえ。

今の俺は通信なんかしてねえからな。

じゃあ…誰だ…?

「試しに回線を開いてみるか…？」

どうする…？

何かのエラーだとは思うが、一応確認しておくべきか？

だが何故だろうな…

今、とてつもない違和感を感じてる。

突然、根拠の無い感情が沸き上がってきやがった…

それは一言では表せねえような複雑なもんだ。

ただあえて言うなら…

後悔と消失感―

そう

今の俺は理由もなく後悔の感情を抱いている。

喻えるなら…もう一人の俺がとてつもない後悔に苦しんでいるよう
な…

何か大切なもんを失っちゃったような…

「ますます不気味になってきやがったぜ…」

どうする？

選択肢は二つだ。

回線を開くか――

開かないか――

俺は…どちらを選べばいいんだ…？

「そうだ、イオ。元の現実世界に戻るとしたら勝敗はどうなる？まあ私の勝ちだろうが…」

私はニヤケながらイオの様子を横目で確認した。

するとイオは無反応で自分の右腕を見つめていた。

どうやら私の話を聞いていないようだな…

「おいイオ。聞ってるのか？」

私は少し声量を上げた。

しかし、アイツは無言のままだった。

「おい！聞こえてないのか！？」

半ば叫びに近い声を出してアイツはようやく反応を見せた。

「…？ ああ…すまない…。聞いていなかった」

しかしどうにもパツとしない表情だ。

いや、コイツは何時も無表情に変わりはないが、私はそこそこの時間をコイツと過ごした。

微妙な表情の変化からイオの考えてることは大体わかる。

今の顔は何時もの無表情とは違った。

何か思い詰めたような顔だった。

「どうかしたのか？」

そんな様子が少し心配になって声を掛けた。

「いや……何でもない。気にする必要はない」

「嘘だな」

私は断言した。

「!？」

即行で見破られたからだろう。

アイツは無表情の中に驚愕の色を現した。

「お前の表情からわかる。私に隠し事などしてくれるなよ。それとも、私に言えないようなことなのか？」

私の言葉を受けてイオは僅かに沈黙する。

「いや、そうではない…。少し気になるエラーが発生しただけだ」

気になるエラー？

「何だそれは？」

「先ほどまで一切機能していなかったジュピターに通信が来た…」

「ほお。で、誰からだ？」

私の質問を聞いたイオは表情をほんの僅かながら歪めた。

「俺からだ…」

「は？」

「いや…俺も理解できないのだが、発信源がイオと表示されている」

「なるほど。確かにそれは自分から通信が来たということになるな」

「おそらく何らかのエラーだろう。そもそもこの時空間にZPE通信が届くはずはない。この特異時空の座標は俺とエヴァしか知らないはずだ」

「ふむ。で、どうするんだ？その通信とやらを開くのか？」

私は大したことではないと考え、軽く流した。

しかし、イオは意味深に沈黙して考えに耽っているようだ。

そんなに重要なことなのか？

ただのエラーなら私が趣味でやってるRPGでもよく起きることだ。

「……………」

イオは自分の右腕に埋め込まれた水晶のような端末とにらめっこしている。

やれやれ。

「気になるなら繋いでしまえばいいだろう？何を迷う必要があるんだ？」

そう聞くとイオにしては珍しい発言が返ってきた。

「何故だか…嫌な予感がするんだ」

「嫌な予感？」

「何と言えはいいのか不明だが：胸騒ぎ、のような感覚が急に生じた。この通信を開くか、開かないか：それが大きな分岐となる：そのような感覚だ」

回線を開くか――

開かないか――

その選択肢のどちらを選ぶかが何か重大な違いを生むというのか？

まさか：

それでは本当にRPGみたいではないか。

だが、アイツの表情を見ると本気でそう感じているようだ。

「俺は：どちらを選べば……」

そう呟くイオの瞳は、小刻みに揺らいでいた。

「おやおや。幻影を削除しに来てみれば邪魔者がこんなに」

それは全く予期していないタイミングだった。

私と学園の教師たちのちょうど中間、その上空に黒い服の男が音もなく現れた。

「っ！！」

何だ…コイツは…？

黒服の男は白い仮面で素顔を隠している。

それなのに…

私は男から強烈な視線を感じた。

憎悪などという生易しいものではない…

明確な殺意…

濁った海の底に沈んだような暗く重い感情…

私にのみ視線を向けているように感じる。

あの男の視界には学園の教師たちが映っていないかのようだ…

それほどまでに強烈な視線だ。

その視線だけで私の体は硬直し冷や汗が流れた。

それだけではない。

私の中には別の感情も生じていた。

強い既視感。

いや…親近感というべきだろうか？

敵意しか感じない、しかも初対面の人間に対して親近感を覚えるというのは些かおかしいことだが、私は確かにあの男に対して自分と近い何かを感じた。

こんなことは今までなかった。

本当に何者なんだ…？

「何だお前は！？」

奇しくもガンドルフイーニが私の問いかけを代弁した。

それに答えるように空中に静止している男は身の毛が逆立つような声を発した。

「そうですねえ。ではルシオラと名乗っておきましょうか。ククク」

決して声自体に迫力や特徴があるわけではない。

しかし、その異様に冷静で全く抑揚の無い声は人間味が欠片も感じられない。

イオでももつと人間味のある声をしている。

この男はまともではない。

それだけは確信した。

言葉に込められた感情がまともな人間が発するものではなかった。

喻えるならば醜い感情をそのまま剥き出しにして相手へぶつけている印象だ。

それなのに口調は機械のように抑揚がない。

あまりにも言葉と感情が相反している：

「……………」

教師陣も男の異様さに気づいたようだ。

全員が揃って絶句している。

「これで満足ですか？ではまず先にあなたの方から消えてもらいましょうか」

そう言ってルシオラと名乗った男はゆっくりと白い拳銃を両手に構えた。

いや待て…

あれはっ!?

Z I P E G!?

「ではさようなら。虚数解の皆さん」

ルシオラは躊躇なく引き金を引いた。

しかし、その銃口は教師陣ではなく上空へ向いている。

「……………」

ガンドルフィーニたちは警戒しつつも疑問を浮かべた表情をしている。

それはそうだろう。

滅茶苦茶な方向に向かって撃ったのだから。

しかしその瞬間だった。

「っ!!」

私は声も出なかった。

目の前の光景に絶句するしかなかった。

私が見た光景――

それは、ガンドルフィーニたちを数え切れない橙色の閃光が取り囲んでいる光景だった。

間違いない。

あれはZPEのレーザー光だ。

それが何の前触れもなく千発近く出現した……

当然、次の瞬間には全てのレーザーがガンドルフィーニたちに浴びせられた。

それはさながらレーザー光のシャワーだった。

「ぐああああああああっ!!」

眩しいほどの光量で辺りが焼き尽くされた。

全てが放たれた後には繰り返された爆発によって豹変した地形しか残らなかった。

防御障壁を張っていたのだろうか、ガンドルフィーニたちは辛うじて生きていた。

ただし、全員が絶え絶えの息で地に伏していた。

これは手当てをしなければ危険なレベルだ…

「何てことを……」

私は恐ろしい光景に目を見開いた。

たった一撃でこれ程の惨劇を生み出すとは…

私も彼らを閉鎖時空間へ強制転移させるつもりだったが、ここまで痛めつけるつもりはなかった。

しかしこの男はこの惨状を見ても表情一つ変えなかった。

しかし、私が本当に恐怖を感じた理由は別だった。

私は、この男がやったことを”理解できてしまった”のだ。

なぜ空に向かって撃ったレーザーが地上に、それも大量に降り注いだのか？

それは座標固定した並列世界からレーザーを”持ってきた”からだ。それを一瞬のうちに何度も反復することであれだけの量になったのだ。

空に向かって撃ったのはトリガーだ。

”銃を撃った”という事象を行うことで世界を分岐させ、”銃を撃った”近似世界線を大量に発生させた。

それによってあれだけのエネルギーを近似世界線から持ってくることができたのだ。

私はそこまで”理解してしまった”のだ。

あの男がやったことを、まるで自分がやったことのように理解してしまったのだ…

ルシオラの攻撃の原理が何故か手に取るようにわかった。

私はそんな自分の思考に恐怖した。

相手の手の内をここまで鮮明に読めるということは、自分はその相手と似通った考えを持っているということになる…

私はこの残忍な男と同じ思考回路をしている…

先ほど感じた親近感とも重なり、私は言い様のない不安感に囚われた。

つまり…私は…

—この男、ルシオラと似ている—

私はもう一度ルシオラに視線を向けた。

すると、ルシオラは私に憎悪に満ちた視線を返してこう言った。

「いい加減、その偽善者面は止めてもらいたいものですね」

偽善者…？

「……何の話だ？」

「おや、もう忘れたのですか？ いえ…貴方は忘れたいだけでしょ
うね」

この男はさっきから何を言っているんだ……

まるで私の心を見透かしているような口振りだ…

私は更に警戒心を強めた。

しかし、次に聞いた言葉に比べれば今までの発言は大したものでは
なかった。

その言葉はそれほど私を驚愕させた。

ルシオラが皮肉な笑みに彩られた仮面の奥から発した言葉――

それは――

「ミリーを見殺しにしたということ」

その瞬間、私は時間が静止したように感じた。

あまりにも突然の言葉に一瞬思考が停止する。

”彼女”の名前の前では冷静な思考など消え去った。

”ミリー”……

”ミリー”……

”ミリー”……？

この男は今何と言ったんだ？

理解できない。

いや、理解したくない。

何故…知っている……？

何故…彼女のことを知っているんだ……？

見殺し……？

ミリーを…

私が…

「な…ぜ……？」

私の精神にはその短い質問をするだけの余裕しか存在しなかった。

それを見たルシオラは顔面を歪んだ笑みに染めた。

仮面をつけていても私には奴の表情がわかった。

「何故”彼女”のことを知っているか、ですか？」

そう言ってルシオラは不気味な笑い声を出した。

「ククク：面白いことを聞きますねえ。理由は簡単ですよ。なんせ――」

この時、私は確信した。

これから聞くことは私を絶望の淵に落とすだろうことを。

「私はカリストなのですから」

もう、言葉は無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2349r/>

線を越えて—魔法使いvs科学の力—

2012年1月4日02時50分発行